
幻想希譚

佐倉いろは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想希譚

【コード】

N19660

【作者名】

佐倉いろは

【あらすじ】

必ずここへ帰ってくる。

そう誓って…。

ルウエの旅を描いた、約束の物語。

「自分、絶対に姉さまを超える英雄になるんだ！」

「……………。あ、何？全然聞いてなかった」

「自分、絶対に姉さまを超える英雄になるんだ！」

「へえ、そう。頑張ってるね」

「姉さま、全然本気にしてないんだぞ」

「だって…別に私は英雄でもなんでもないし…」

「この前、畑荒らしを捕まえた！」

「あれは自警団としての仕事。英雄じゃないの。それに、ただ猪を捕まえただけじゃない…」

「自分、修行に行ってくるんだぞ！」

「相変わらず人の話を全く聞かないのね…」

早く、姉さまに認められるような立派な英雄になって、自警団に入
って、姉さまと一緒に村のために働くんだ。

…この相棒も、ずいぶんすり減っちゃったな。

「そうだ！姉さま、森に行ってくる！」

「はいはい。気を付けて行ってきなさい」

「うん！」

家を出て、森に入る。

いつもの道をたどって、いつもの広場に出る。

「ん？」

「あう…」

でも、今日は広場の真ん中に誰かがいた。

大人の、狼。

「おい、お前」

「じ、自分はオマエなんて名前じゃないんだぞ……！」

「じゃあ、なんていうんだ」

「ル、ルウエ……」

「ルウエ……」狼”か。どう見てもヤーリエだろ……」

「龍”じゃないもん！」

「まあいい。……ルウエ。お前はもうすぐ旅立たないといけなくなる。今のうちに、みんなに別れを言っておけ」

「な、なんで……？」

「……言いくいんだがな。お前は村にいられなくなる。追い出されるんだ」

「なんで……？なんでだよ……！」

銀の狼は首を横に振る。

「行く場所が無くなったら、この広場に来るんだ」

「なんで……なんで……」

「しっかりしろ！」

頬を張られる。

痛みが、自分を引き戻してきた。

「現実から目を逸らしちゃダメだ。今も、これからも。心を強く持て」

「………！」

「……必ず帰ってこれる。だから、今だけは我慢してくれ」

「………」

「すまない……」

「なんで狼の姉さまが謝るのさ…。自分…ちゃんと我慢するんだぞ…」

狼の姉さまは、優しく抱き締めてくれた。

その温かさが、今のことがホントだってことを伝えていた。

…我慢するって決めたのに。

「うう…嫌だよ…」

「……………」

「姉さま…葛葉…」

「……………」

「うええ…」

狼の姉さまに抱かれ、自分は心から泣いた。

行く場所が無くなったら広場へ。

心を強く持つ。

何があっても、もう泣かない。

狼の姉さまと約束したこと。

何度も、何度も、思い出して。

「ただいま、姉さま」

「……………」

「姉さま？」

「あ、ああ、ルウエ…。か、帰ってきちゃったんだ…」

「……………」

「お願い…今すぐ逃げて…」

「え…？」

「お願い…」

姉さまは、何かを抱えて泣いていた。
何かというのは、もちろん自分も知ってるものなんだけど。
あれが何かということを理解してしまうことが怖かった。

「ル…ウエ…」

「ごめんね…葛葉…ルウエ…。私が不甲斐ないばかりに…！」

それは葛葉だった。

全身が血塗れで、虚ろな目に涙を溜めて、自分を見ていた。

「ルウエ…。早く…早く逃げて…！」

「葛葉！喋っちゃダメなんだぞ！」

「ルウエ…」

葛葉は血に濡れた手を伸ばし、頬に触れる。

その手はびっくりするほど冷たくて。

姉さまも、葛葉の手に重ねて。

「私の力…貸してあげる…」

「葛葉…！」

「挫けないで…」

「姉さま…」

温かいものが流れ込んできた。

葛葉と姉さまの、術式を操る力。

そして

「ルウエ」

「…セト？」

「カラスの木に全部置いてあるから。みんな、ルウエを探してる。見つからないうちに…」

「いたぞ!」「ルウエだ!」

「風華!」

「ごめんね…!」

「うわぁ!」

”疾風”

突風に流され、そのまま森の方へ運ばれる。

「森に回れ!ルウエが逃げるぞ!」

「ウウ…」

セトが反転を”解いて”、銀龍の姿へ。

村の人の行く手を阻む。

「くそっ!邪魔をするな!」「セト!お前も仲間なのか!?!」

(落ち着けて言ってるんだ!)

…最後に聞こえたのは、そんな会話だった。

なんで、みんな怒ってたの…?

自分、今日は何もしてないんだぞ…。

…別れも言えなかった。

姉さま…セト…。

葛葉…。

カラスの木には、自警団の額当てと籠手、警棒、そして…銀貨があった。

セトが用意してくれた、大切な武具とお金…。

「疾風」…」

そして、姉さまと葛葉が貸してくれた、この力…。
手のひらの上のつむじ風は、しかし、力強く。

「もう泣かないって約束したんだぞ」

うん。

葛葉が気になるけど…村には帰れない。
行く場所が無くなったら広場へ。

長い旅への一歩を踏み出した。

1 (後書き)

さて、どういった旅になるのでしょうか？

武器とお金は、とりあえず一緒に置いてあった袋にしまい。狼の姉さまの言う通り、広場へ行った。

高く昇った月は、広場を明るく照らしている。

「あ……」

「来たか」

「うん」

「すまなかったな。別れを言う時間もあげられなくて……」

「いいんだ。みんなにいろいろ貰えたし……」

「……ほら、こっちに來い」

言われるまま、狼の姉さまのところまで行く。

狼の姉さまはこっちに振り向いて、探るよつに手を伸ばす。

「自分はこのにいるよ」

その手を掴むと、狼の姉さまは優しく引き寄せて、抱き締めてくれた。

喉の奥が苦かったけど、もう決めたから。

狼の姉さまと約束したから、泣かなかつた。

「……ありがとう」

「狼の姉さまにお礼を言われるようなこと、自分はしてないんだぞ」
「……そうかもな」

もう一度、強く抱き締めると、狼の姉さまは離れて

「ここで待つんだ。夜が明けるまでに、次にするべきことが見えてくる。そして、そこからはルウエの思う通りに進むんだ。ときどき立ち止まってもいい。でも、真っ直ぐ前だけを見て。後ろを振り返っちゃダメだ」

「約束…狼の姉さまとの約束…」

「ああ。約束。増える一方で申し訳ないんだが」

「うん。自分、嬉しいんだ。狼の姉さまと約束出来るの」

「ふふ、そうか。じゃあ、もうひとつ、約束してくれるか？」

「うん！」

「…家族の温かさを忘れないこと。風華やセト、葛葉はもちろん、村の人たちやこれから出会う仲間たちの温かさも」

「家族の温かさを忘れない」

「そうだ。じゃあ、今まで約束したこと、もう一回繰り返してくれるか？」

「うん。心を強く持つ。もう泣かない。真っ直ぐ前へ進む。家族の温かさを忘れない。だよね！狼の姉さま…」

狼の姉さまはどこにもいなかった。

前にも後ろにも。

右にも左にも。

…でも、また会えるような気がした。

約束を守っていれば、必ずまた会えるんだ。

うん…。

ん…？

「あれ…？」

寝てたのかな…。

「はあ……」

「ごめんね。怖がらせちゃって」

「ううん……」

「あなた、お名前は？」

「…ルウエ」

「ふうん。ルウエ」

黒い狼は、ゆっくりと近付いてきて…

「……！」

「私は望。よろしくね」

「の、望……」

「あれ？ごういうのは初めてだった？」

「う、うん……」

望は、くつつけていた額を離して、決まりが悪そうに笑う。

「ルウエから狼の匂いがしたから、知ってるのかと思っちゃった…」

「きつと、狼の姉さまの匂いなんだぞ！」

「狼の姉さま？」

「うん！いっぱい、約束したんだ！」

「へえ）」

「心を強く持つ。もう泣かない。真っ直ぐ前へ進む。家族の温かさを忘れない。この四つ！」

「そっか。その約束、ちゃんと守らないとね」

「うん！」

約束…。

また狼の姉さまに会うための…。

また村に帰るための…。

「そういえば、ルウエはなんでここにいるの？」

「狼の姉さまに言われたんだ。ここで待ってたら、やる事が分かるって」

「ふうん…」

「あつ！」

「な、何？」

「望！」

「え…？」

「きつと、望のことなんだぞ！」

「そ、そうなの？」

きつと…うん、絶対そう！

望！

「そつだ！望は、これからどうするんだ？」

「予定はないけど…」

「どういうこと？」

「私、明日香と一緒に旅から旅の生活してるの」

「ふうん…？」

「だから、どこに行くとか、そんなのは決まってないんだ」

「自分、望に付いていくんだぞ！」

「え、ええ…。決断、速いんだね…」

「うん！」

「…分かったよ。じゃあ、一緒に行こっか」

「よろしく！望！」

「うん。よろしくね、ルウエ」

望…望…。

新しい家族、なんだぞ。

この温かさ...忘れない...。

2 (後書き)

∴ 早速、旅の道連れが決定しました。
ルウエって、決断が素早いんですね。
その真っ直ぐなところ、羨ましいです。

「ほら、おいで」

「で、でも…」

「……………」

「明日香。意地悪しないの」

「……………」

明日香はフイとそっぽを向くと、目を瞑って大きくため息をつく。

「ほ」

「う、うん…」

おそろのおそろ、明日香のお腹を枕にして寝転ぶ。
意外と柔らかくて、フワフワの毛が気持ち良かった。

「明日はゆっくりに出るから、よく寝ておきなさい」

「うん…」

「お休み」

「おやすみ…」

思い出すのは、葛葉の柔らかい尻尾のこと。

明日香のお腹とは違うものだけど、優しさは同じ。

安心出来るのは同じ…。

眩しい光を感じた。

目を開けると、揺れる葉っぱの間からお日様が見えていて。

「おはよう、ルウエ」

「おはよ…望…」

「朝ごはん、食べなさいね。明日香も」

「うん…」

「……………」

何かの肉と、その辺に生えてる草を煮たものが、お鍋に入っている。お匙が二本、入れられていて、望が一本を渡してくれた。

「はい、どうぞ。取り分けるお皿がなくて、ごめんね」

「いただきます…」

「いただきます」

一匙すくって口へ運ぶ。

うん、美味しい。

…葛葉にも食べさせてあげたい。

けど、いつか必ず、村に帰るときが来るから…。

真っ直ぐ前へ進む。

狼の姉さまの約束、守らないとな。

「美味しい？」

「うん！」

「ふふ、良かった」

明日香はどこかに行ったから、二人だけでこの大きなお鍋いっぱいのお肉と草の煮たものを食べられるのかと思ったけど、自分が好きだけ食べると、望は残りを全部食べてしまった。

「んー、もうちょっと何かないかな…」

「望、葛葉よりよく食べるんだな！」

「え？葛葉？」

「うん。自分の、一番好きな人！」

「ふうん。そうなんだ。どんな人なの？」

「姉さまより術式が上手くて、でも、セトより強いんだ！」

「へ、へえ…。なんか、また新しい名前が出てきたね…」

「姉さまは自警団の団長で、この前、畑荒らしを捕まえた英雄なんだ！セトは、姉さまのお嬢さん」

「お嬢さんってことは、二人は結婚してるの？」

「うん！ときどき喧嘩もするんだけど、でも、すつごく仲が良いんだ！」

「へえ。でも、三人とも今はどうしてるの？ルウエと一緒に暮らしてたんじゃないの？」

「うん…。でも昨日、自分、村を追い出されちゃったんだ…」

「え…？」

「自分、いつもイタズラばかりしてたから、みんな怒ったのかな…。元々、よそ者だし…」

「ルウエ。狼の姉さまって人とした約束、思い出して。真っ直ぐ前へ進む。そうだったよね」

「あ…」

「葛葉とか村の人のことを思い出すのは良いけど、後ろは振り返っちゃダメでしょ？」

「うん…」

「なんで村を追い出されたのかとかは、前へ進んでいるうちに分かることなんだと思うよ。だから、狼の姉さまもそう言った」

「うん」

「ね。じゃあ、行こっか」

「うん！」

望は大きな袋を担いで。

自分はセトの袋を。

「あ、そうだ。必ず帰ってこれるように、おまじない、しとっか
「おまじない？」

「うん。えっと…あの切株が良いかな」

望は切株に近付いて、懐から小刀を取り出す。

そして、切株の横側に何かを彫っていく。

「ヤウ、エラ、カムナイル。ウ、タク、リヨ、エ」

「神々に約束する。私たちは必ずここへ帰ってくる」

「よく知ってるね。北の方の出身なの？あ、そういえば、ルウエつて名前も、北の言葉で”月の神が遣わした者”って意味だよね」

「うん…分からないんだぞ」

「そっか。まあいいや。じゃあ、仕上げ。ここに私たちの名前を彫るっ」

「うん」

望はウルカ、自分はそのま丸ウエ。

そして、二人の護獣である狼の記号で引き結んで、おまじないが完成。

「うん、良いかんじ」

「これで、絶対帰ってこれるんだな！」

「ふふ、そうだよ。これはすっごくよく効くんだから」

「……………」

「あっ！明日香の名前、書いてなかった！」

「……………」

「ごめんってば〜」

「大丈夫だよ。明日香は護獣だから。望と自分を、約束と結びつける神様の代わり」

「…そうだね。こりゃ責任重大だよ、明日香」

「…ワウ」

「あはは、任せろだってさ」

「うん！」

切株に刻まれた約束、名前、護獣。

三つは互いに重なりあい、強い繋がりを作っていて。

「よし、出発進行！」

「おおーっ！」「ワウ！」

村のみんな。

ひとまず、お別れ。

姉さま、セト。

喧嘩しちゃ、ダメなんだぞ。

葛葉。

ヤウ、エラ、カムナイル。

ウ、タク、リヨ、エ。

必ず帰ってくるから、それまで待っててね！

「そういえば、その中には何が入ってるの？」

「自警団の額当てと籠手、あとは警棒とお金」

「ふうん。じゃあ、警棒だけはすぐに使えるようにしときなよ」

「なんで？」

「うん。まあ、ルウエがそれを使わないといけない状況になることはないと思うけどね…」

「……？」

なんだかよく分からないけど、言う通りにしておくんだぞ。

袋から警棒を取り出して、腰に差しておく。

…せっかくだから、額当てと籠手も。

「ちょっと大きいんだぞ…」

「あはは。でも、思ったより似合ってるよ」

「そ、そうかな」

「それに、これ…。ヤウトの紋章だね…」

「そうなのか？」

「うん。…ルクエンの危機に、ユヌトの地に降り立った白き獣。獣は千の里を走り、千の人を助け、千の獣を統べた。獣のお陰でルクエンの危機は去り、平和が訪れた。しかし、白き獣は誰に感謝をされることもなく、ルクエンを去った。なぜならば、獣は人の目に止まることはなかったから。獣の高潔な姿を誰も知ることがなかったから。ただ、ユヌトの人を除いては。だから、ユヌトは獣の地として、獣の功績を讃え、世に広めた。紋章に刻み、この物語を語り継ぐことよって」

「白き獣…」

ふと、なぜか狼の姉さまが思い浮かんだ。
狼の姉さまは、白き獣じゃなくて銀の狼なのに。

「フウ」

「うーん……どうだろうね……。明日香は関係ないと思うけど……」

「……………」

「あ、拗ねた？」

明日香はそっぽを向いて、こっちに寄ってきた。

「わわっ！」

腰紐を強く引かれて、よろけてしまう。

倒れそうになったところに明日香が割り込んできて、自然と背に乗るような形になる。

「……………」

「あ、明日香？」

「……………」

「いいなあ。私も乗せてよ〜」

「ウウ……………」

「なにさ〜。見せつけなくても良いじゃない」

「……………」

「ふふふ。でも、ルウエのこと、相当気に入ったんだね」

「そうなのか？」

「……………」

明日香は何も言わずに、ひたすら歩いていた。
ちゃんと座り直すと、意外に乗り心地は良くて。

「明日香、優しいんだな」

「うん。普段はツンケンしてるけどね」

「……………」

「ふふ、照れてる照れてる」

「ウウ……………」

「おお怖い」

望は、大袈裟に驚いたふりをする。
それがまた面白くて。

「あ、ルウエ。龍紋、出てるね」

「リュウモン？」

「うん」

「リュウモンって、何なんだ？」

「あれ？知らない？」

「うん」

「へえ……。えつとね、龍の心が大きく動いたときに出る、隈取りみたいな模様のことだよ」

「……………」

「うーん……。鏡でもあれば良いんだけど……………」

望は袋の中を探るけど、鏡はなくて。

「残念。なかったよ」

「む……………」

「また次の街で買ってあげるから。落ち込まないで」

「ホント？」

「うん。約束」

「約束…だな！」

望との約束。

次の街で、鏡を買ってもらおう！

森を抜けると、正面に何かが見えた。

「望、あれは？」

「ユールオ。ルクレイの中心の都市だよ」

「ふうん…？」

「まあ、行ってみれば分かるよ」

望が歩き始める。

明日香も望に合わせて。

「そつだ。お金、いくらくらい持ってるの？」

「うーん…。はい、これ」

袋から銀貨を取り出して、望に渡す。

「…え？」

「どうしたんだ？」

「嘘…」

「望？」

「銀貨…初めて見た…」

「…」

「綺麗…って、ダメだよ、ルウエ！こんな大金持ってるなら、先に教えてくれなきゃ！」

「え？どういふこと？」

「…あのね、この銀貨一枚で、普通の生活をしていれば半年は暮らせるの」

「え？え？よく分からないんだぞ？」

「はあ…。とにかく、これは大切にしまっておきなさい」
「うん…」

銀貨を袋に入れる。

この銀貨、そんなにすごいものだったのか？

風華やセトが大切そうにしまってるのは見たことあるけど…。

「見て、ルウエ。これがルクレイで一般的に普及してるお金」

「何これ…？」

「粗貨と鉄貨と銅貨。銀貨は、この銅貨なら百枚、鉄貨なら五百枚集めないといけないの」

「ふうん…？」

「…もついいや。とりあえず、銀貨のこと、誰にも言っちゃダメだからね」

「うん。約束」

「さて…気を取り直して、ユールオに向かうとしますか」

だんだん近付いてくる街。

…約束、また増えた。

セトの銀貨のことは、誰にも言わない。

望との約束。

ユールオは本当に大きな街で。

「見て見て！美味しそうなお魚がいっぱい並んでるんだぞ！」

「お、坊主。なかなか良いこと言うねえ。どうだい、姉ちゃん。—
尾だけでも」

「すみません。今はちょっと急いでるので」

「そうかい…。残念だが、俺に引き止める権利はねえからな」
「ホント、すみません」
「良いつてことよ」

望は、本当に急いでるみたいだった。

ユールオに着いてから、何かずっとソワソワしている。

「望、どうしたんだ？」

「え、あ…いや…」

「……？」

速度を緩めることはなく、どこかに向かって真っ直ぐ歩いていた。
お店とお店の間の狭い道を通ったり、右に曲がったり左に曲がったり。
り。

…明日香に乗せてもらってなかったら、追い付けなかっただろうな。
そして、誰かの家の前で立ち止まって、勢いよく戸を開いた。

「美希お姉ちゃん！」

「…あ、望ちゃん。久しぶりね」

「お久しぶりです。おばさん。美希お姉ちゃんは？」

「ふふ、早速ね。でも、ごめんなさい。一ヶ月くらい前に、また出て行っちゃったわ」

「あ…そうですか…」

望はガツクリとうなだれてしまう。

…美希お姉ちゃんって、誰？

「まあ、ゆっくりしていきなさい」

「ありがとございます…」

「あら？そっちの子は？」

「ルウエなんだぞ！」

「あらら。また可愛らしい子ねえ」

「はい。昨日から一緒に旅を」

「そう。ルウエちゃんも大変ねえ」

「望と明日香がいるから大丈夫なんだぞ！」

「ふふふ。そうかもね。さ、いつまでもそんなところにいないで。

上がりなさい」

「はい」

優しいおばちゃん。

美希お姉ちゃんとかいう人と、何か関係があるのかな…？

望との関係は…？

「今日は泊まっていくんでしょ？」

「あ、はい。お世話になります」

「じゃあ、せっかくだし、ルウエちゃんと一緒にユールオ観光でもしてきなさい」

「そうですね。今日は謁見出来るんですか？」

「エツケン？」

「王に会うことよ。残念だけど、今日はルイカミナに行ってるわ」

「そうですね…」

「王って、誰？」

偉いのか？

「そうねえ。ルクレイの中心となる人ね」

「すごく偉い人だよ」

「ホントか!？」

「うん。でも、どうしたの？大きな声を出して」

「姉さまが、立派で偉い人になりなさいって、いつも言ってたんだぞ！」

「そうなの？でも、残念だったわね…。今日は王に会えないの」「うん…」

残念なんだぞ…。

と、望が手を取る。

「でも、ユールオには面白いところがたくさんあるから」

「そうそう。行ってきなさいな」

「うん、もちろんなんだぞ！」

「明日香はどうする？」

「……………」

「そう。じゃあおばさん、明日香をお願いします」

「ふふ、明日香ちゃん優しい子で手間が掛からなくて良いわ」

「…何が言いたいんですか？」

「ふふふ。ほら、ルウエちゃんが待つてるわよ」

「望！」

「はいはい。ユール才は逃げないんだから、慌てないの」

分かってるけど、待ちきれない！

姉さまや葛葉へのお土産もたくさん用意しないと！

市場は、両手でも数えきれないくらいのお店が並んでいて。

「望！あれ！」

「ダメダメ。お菓子はあとあと。まず、昼ごはんにしよ」

「今、出てきたばかりなのに？」

「ああ、外食したことないんだ」

「……………」

「まあ、行けば分かるよ」

ガイシヨク？

朝みたいのに、どこかで火を起こすのかな？

「えつと…昼ごはん代を差し引いて、だいたい四千八百円だから…」

「何を考えてるの？」

「ん？ちよつとね。夕飯を買うお金があるかなって」

「まだ昼ごはんも食べてないのに？」

「うん。お金はちゃんと管理しておかないと、途中で無くなったら

困るから……」

「なんで？」

「たとえば、ルウエが風邪を引いたとするよ？」

「うん」

「私もある程度の風邪薬は調合出来るけど、どうしても調合出来ない薬は買っしかないのよ。そんなときにお金が無かったら、ルウエの風邪は治らない。そうになったら困るでしょ？」

「うん……」

「だから、お金はちゃんと管理して、残しておかないといけないの。分かった？」

「うん！」

お金の管理は大事。

だから、セトの銀貨も大切にしないと。

「ほら、着いたよ」

「なんか、良い匂いがする」

「うん。今日はここで食べるの」

「え？」

そう言ってる間に、望は良い匂いのするところに入っていく。

「らっしえい！ご注文は？」

「お久しぶりです、おやつさん」

「おお、望ちゃんかい！涼！哲也！陽葉ひつは！」

「やかましいよ。ただでさえ大きい声なのに」

「のぞみねえ！」「のぞみねえ」

「久しぶり〜」

「ん？後ろのちっこいのは？」

「ああ、旅の道連れです。ルウエって名前で、ヤウトから」

「へえ」

「のぞみねえ、注文は何にする？」

「どうしようかなあ」

「ルウエもどーぞ」

「あ、ありがとう…」

お品書きと書かれた木の板を渡される。

そこには、何かの名前がたくさん書いてあった。

「ルウエ、ルウエ」

「な、何…？」

「ルウエは、ヤーリエなの？」

「ああ、ごめんね。ヤーリエってのは…」

「自分、”龍”じゃなくて、”狼”なんだぞ」

「おおかみ？」

「うん」

「へえ、驚いた。望ちゃんとうちのやつら以外に北の言葉が分かるやつがいたなんてねえ」

「よく出来るんですよ。おまじないの言葉の意味だって、すぐに分かっただけ」

「そうだろうね。”月の神が遣わした者”なんて名前だし」

”月の神が遣わした者”

…つまり”狼”

夜の護り神。

大好きな名前。

「ヤムル、アクツム、カ、ユツス、ルウエ」

「…ナウカルト、ヤムル」

「…なんて言ってるんだい？」

「父ちゃんも北の言葉を勉強しろよ」

「ああ？もう無理だっつーの」

「ずいぶんと歳食っちゃったもんね」

「お前も同じ歳だっつてことを忘れるなよ」

「何か言っただかしら？」

「なんでもないです」

「ちゅうもんは？」

「ああ、そうだった。ルウエ、どんな料理か分かる？」

「うーん…あんまり…」

「ほら、見て。このサボリ衛士が食べてるのがきつねうどん。あっちの衛士長が食べてるのが焼き鯖定食。他にもあるけど、今日は「のふたつがお薦めだよ」

「うん」

「涼さん、サボリ衛士はないでしょ！」

サボリエジが食べてるものは、油揚げが乗っていて、葛葉が好きそうな…。

エジチョウのは、魚を焼いたものとかご飯とか、いろいろあった。

「これ、食べる？」

「良いの？」

「うん。私はもうお腹いっぱいだから」

「ありがとう、エジチョウ」

「どういたしまして。さて、私はそのサボリを連れて帰らないといけないんだけど…」

「衛士長…」

「それを食べ終わったら、すぐに城に帰って、政務室に来なさい」「うへ〜い…」

「じゃあね。ム、エク、ルウエ。良かったら、お城にも寄っていいね」

「うんー！」

「衛士長さん、ありがとうございます」

「ふふ、いいのよ」

そして、頭を優しく撫でてくれて。

エジチヨウはお店を出ていった。

「じゃあ、私はきつねうどんにするよ」

「あいよ！父ちゃん！きつねうどん、特盛一丁！」

「おうよー！」

「と、特盛は言っていない」

「良いの良いの。今日の再会を祝して。奢りよ」

「もっ…」

望は呆れたような顔をして。

自分は、エジチヨウがくれたごはんを食べて。

…そのあとに来た、きつねうどんトクモリには、油揚げが五枚も乗っていた。

「……………」

「明日香、はやく。のぞみねえが、いなくなっちゃうよ?」

「私はどこにも行かないから……」

「あつ! あれは?」

「あれがお城。あとで行こうと思ってたんだけど……行ってみる?」

「うん!」

お店の隙間から、大きな建物が見えた。

市場にも大きなお店はいくつかあったけど、比べ物にならないくらい大きな建物。

「ルウエ、ルウエ」

「ん? 何?」

「おしろって、すつごくたのしいところなんだよ」

「へえ。楽しみだな!」

「うん!」

昼ごはんを食べ終わったあと、陽葉もユールオを案内したいと買って出て。

涼姉さまは、ずっと望と自分の傍に居ることを約束として、許してくれた。

「明日香、だいじょうぶ?」

「…ワウ」

「えへへ。よかった」

陽葉の足じゃ望に追い付くのは大変だろうからと、陽葉は明日香に

乗せてもらっている。

望が何か笛みたいなのを吹くと、明日香はすぐに来た。すごく高い音のする不思議な笛だった。

「すみません。城内の見学をしたいんですが」

「はい。お名前と住所をいただけますか？」

「望、ルウエ、それと、狼の明日香。住所不定。あと、陽葉」

「あー、陽葉ちゃんの住所はいいです。はい、これ。入城許可証。名前を書いて持ってってください。何回でも使えるんで。望さんと陽葉ちゃんは持ってますよね？」

「はい」「うん」

「はい。じゃあ、行ってらっしゃい。今日、王は不在ですが、衛士長はいますので」

「分かりました」

「お昼ごはんがまだでしたら、厨房で用意しますが…」

「残念。食べてきちゃいました」

「そうですか。まあ、陽葉ちゃんがいるなら、そうでしょうね」

「望、まだ？」

「ああ、ごめんね」

「では、ごゆるりと」

お城！

どんなのかな？

医療室。

薬の匂いがする部屋。

厨房。

美味しいものがある部屋。

広間。

すごく広い部屋。
そして、衛士長の部屋。

「わあ、さすが衛士長ですね。相変わらず、すごく綺麗な部屋」
「まあね」

「これ、なに？」

「緊急伝令用の笛よ。吹いてみなさい」

「うん」

陽葉は笛をくわえると、思いっきり吹いた。

「あれ？鳴らないよ？」

「え？」

「ふふふ。それはね、音が分からないと聴こえない笛なの。五日も練習したら、誰でも聴こえるようになるけどね」

「そうなのか？」

「うん。望ちゃんも持ってるよね」

「はい」

「陽葉。もう一回、吹いてみて」

「……？うん」

また思いっきり吹く陽葉。

「どうしたの？もしかして、聴こえるとか？」

「…うん」

明日香を呼んだ笛と同じ、甲高いけど優しい音。
温かい音だった。

「これは、望ちゃん並の逸材かもしれないね」

「わ、私はすぐに聴こえるようになったくらいですよ。逸材なんかじゃ……」

「うん。そんなことないよ。短期採用じゃ勿体無いくらい、よく働いてくれたし」

「望は、ここで働いてたのか？」

「うん。旅費稼ぎのための、短い間だったけど」

「美希の紹介だね。伝令班に入ってもらったんだけど、うちのやつらより断然良い働きだったんだよ。ねえ、衛士になれとは言わないから、あの時の追加報酬くらいは受け取ってよ」

「そうですね……。また考えておきます」

「じゃあ、もういいよ。ルウエにあげるから」

「え？自分は、何もしてないぞ？」

「ダ、ダメですって！」

「だって、望ちゃんが受け取ってくれないなら、ルウエが陽葉にあげるしかないじゃない」

「陽葉は、おかしがほしい」

「そうね。厨房に行こっか。ルウエも一緒に」

「うん！」

「あ、え！？待ってくださいよー！」

衛士長に手を引かれ、厨房へと向かう。

お城の中は入りこんでいて、望や衛士長がいなかったら一生出られないかと思うくらい。

「はい、これ。望に見つからないようにね」

「う、うん……」

角を曲がった瞬間、何かの布を渡される。

…これもお金？

布のお金なんて、初めて見た。

綺麗で複雑な模様が織つてあるのが五枚。

「ほら、早くしまつて」

「うん…」

「…ありがとね」

「なんでお礼を言うの?」

「望ちゃんはね、寂しがり屋さんなの。その代わりに、友達を作るのが上手いんだけど。でも、旅から旅の生活でしょ?せっかく友達が出来ても、会えるのは短い間だけ。だから、余計に寂しさが積もるの」

「…うん」

「約束してくれる?」

「何を?」

「望ちゃんの寂しさを和らげてあげて。望ちゃんの哀しみを受け止めてあげて。旅の道連れとして、友達として。家族として」

「…もちろんなんだぞ!自分がいれば、泣く子も笑うんだからな!」

「ふふ、そうなの?」

「陽葉も!やくそく、する!」

「そうね。ユールオの家族として。私と一緒にね」

「うん!」

望の寂しさを和らげてあげる。

望の哀しみを受け止めてあげる。

衛士長との約束。

「それと、もうひとつ」

「何?」

「泣きたいときには泣きなさい。どういう決心をしたのかは知らないけど、今のルウエの顔、とっても哀しい顔」

「え…う、嘘…」

「ルウエ、カルセ、ン、マウ。ヤムル、アクツム、セタン」

「そう。自分に嘘をついちゃダメよ？」

「うん…」

「泣くときは望ちゃんを頼ってあげなさい。それが、さっきの約束を守ることになる」

「うん…」

泣きたいときには泣く。

そのときは、望を頼る。

衛士長との約束。

でも、自分、そんなに哀しい顔してたのかな…。

陽葉にも分かるくらい…。

じゃあ、望は…。

「よし、ちょうど到着」

「…どこ行ってたんですか！っていうか、なんで巻くんですか！」

「良いじゃない。この子たちと話がしたかったの」

「私がいちゃダメなんですか？」

「うーん…そうね」

「ダメなんだぞ」「ダメ」「ワウ」

「むう…。気になるなあ…。あと、明日香は私と一緒にいたでしょ」

「ふふふ。あ、おやつお願い。陽葉が喜ぶような、とびきりのやつをね」

「はい、了解しました」

もう泣かない。

けど、泣きたいときには泣く。

…どうすれば良いんだ？

どっちの約束も守らないといけないのに…。

どうすれば良いのか分からないよ…。

6 (後書き)

どうするのでしょうか。

泣いてはいけないのに、泣きたいときは泣く。
答えは見つかるのでしょうか？

陽葉を送って、おばちゃんの家に着いたときには、もう暗くなっていた。

おばちゃんは、夕飯を用意してくれていて。

「何か買ってもらったの？」

「うん！金平糖とお饅頭と、あと、ヤツカ」

「お菓子ばかりだったのね……」

「あとね、衛士長から、この笛も貰ったんだ！」

「へえ〜。そうやって首から下げると、本物の衛士さんみたいね」

「えへへ」

衛士さんみたい、か。

自分も、衛士長みたいな格好いい衛士になりたいな。

それから、ヤウトの自警団に入って……。

「あつ！明日香！私の、盗らないでよ！」

「……」

「……いいよ、もう。涎でベトベトだし」

「……」

「相変わらずなのね」

「え？あ、はい」

「おばさんが話し掛けても全然なのよ」

「そんなことないと思いますよ。明日香は無愛想だから、返事してないだけかも」

「ホント？明日香ちゃん？」

「……」

明日香は返事の代わりに、尻尾をユラリと一回だけ揺らした。

「あ、そうだ。旅費は足りてるの？」

「はい。最近、ちよつと行商みたいなことを始めたんで」

「へえ〜。何を売ってるのかしら？」

「主に薬の原料ですね。薬草は割かし管理が簡単なものも多いですし、その辺にいっぱい生えてるし。乾燥させて初めて薬効が出るやつなんかは、手間が省けていいってことで、結構喜んでもらえるんですよ」

「へえ〜」

「本当に逼迫してるときは、やっぱり短期採用の仕事ですけどね」

「そう…」

「大丈夫ですよ。美希お姉ちゃんの言う通り、組合からの紹介だけにしてますから」

「それでも心配…。最近、補助組合があることを知らない子もいるし…。そんな子が非承認の仕事をさせられて、大変なことになって…」

「はい。よく聞きます。私も何人が会いましたし…」

「見つけたら、ちゃんとお世話してあげてね」

「もちろんですよ。…私は、早くに美希お姉ちゃんに会えて、幸運でした」

「そうね」

うーん…。

よく分からない話…。

でも、望とおばちゃんの様子から、大切な話だったことは分かった。

夕飯も終わって、そろそろ眠たくなってくる頃。

望と一緒に、夜の散歩。

「衛士長さんと何を話してたの？」

「いろいろだよ」

「ね、ちよつとだけでも教えてよ」

「うーん…」

ちよつとだけなら…良いよね。

「約束、したの」

「約束？」

「うん」

「どんな？」

「泣きたいときには泣く」

「ふうん」

「あと、哀しい顔してるって言われた」

「……………」

「自分、哀しい顔してるのかな…。望はどう思う？」

「そうね…」

望は立ち止まって、顔を見詰める。

望の瞳の奥には、静かな炎が燃えている…気がした。

「昨日、初めて会ったときに思った。ルウエは蒼色。広く深い海の色。海は、たくさんの生命を優しく包み込み、その生も死も見守っている。けど、だからこそ、自分の感情を抑えてしまう。海の蒼は哀しみの蒼。全てを内包してるが故に見せられない哀しみの色」

「何言ってるのか…分からないんだぞ…」

「それでも良い。だけど、聞いて。蒼は空の色でもあるの。広く高い空の色。空は、海と共にたくさんの生命を見守っている。けど、海の哀しみを知っているから。空の蒼は包容の蒼。全てを見てるが

故に受け止められる包容の色」

「自分は…自分はどうしたらいいの…？」

「海の蒼、空の蒼。両方を持てば良いの。自分の哀しみを知ること
で、他の哀しみも見えてくる。そして、その包容力でもって哀しみを
優しく包み込んであげる。ルウエにはそれが出来る力があるから」
「…うん」

望の言ってることは難しくてよく分からなかったけど、大事なことは
分かった。

望が、自分を必要としているってことが。

蒼は包容の色。

「ルウエ…」

「自分には、まだ海の蒼はない。でも、望の哀しみは分かる。自分
には、まだ空の蒼はない。でも、こうやって望を抱き締めてあげら
れる。…望の哀しみを受け止めてあげる。衛士長との約束なんだぞ」
「うん…ありがとう…」

とても哀しかった。

でも、とても温かかった。

…望の涙は。

月も高く昇ってきた頃。

「…ごめんね、ルウエ」

「え？」

「私が慰めてあげないといけないのに…」

「自分、慰められるようなことは何もないんだぞ」

「そうかもしれない。でも…」

「…でも？」
「うん。やっぱり、なんでもない」
「……？」

望は、何か迷ってるみたいだった。
何を言いかけたんだろ。

月の影は、薄くぼんやりと伸びていて。

家に帰ると、おばちゃんはもう眠っていた。

明日香も、耳を動かしたただけで目は瞑ったまま。

「ふぁ…あふう…」

「ごめんね。こんな遅くまで付き合わせて」

「むう…。望のためだもん…。別に良いんだぞ…」

「…ありがとう」

「ふぁ…」

「ほら、こっちに来なさい」

「うん…」

布団に入ると、望が横に寝てくれて。

「お休み、ルウエ」

「おやすみ…」

背中の方方は明日香かな…。

望の胸に額を押し付けると、優しく頭を撫でてくれて…。

姉さま…。

7 (後書き)

望が言い淀んだこと。
何なんでしょうか。

目が覚めた。

でも、まだ真つ暗で。

…じゃあ、もう一眠り。

「ルウエ。起きなさい」

「むう…。まだ眠たい…」

「うん。でも、なるだけ早くに出ないといけないから」

「んう…」

「…仕方ないね。明日香」

「……………」

グイグイと、布団の中から寒い外へと引きずり出される。

「よっ…と」

そして、明日香の背に乗せられて。

…フカフカの毛とは言っても、寒いものは寒かった。

「うう…」

「はい。毛布。ちょっとあれだけど、我慢してね」

そう言っつて、毛布を掛けてくれて。

そして、ユラユラと揺れる感触。

”ちょっとあれ”ってどっついう意味かは分からないけど。
良い気持ち…。

また目が覚めた。
顔を上げて周りを見てみると、やっぱりまだ真っ暗で。

「ルウエ、起きた？」

「うん…」

「どこ、どこだと思っ？」

「…………？」

ジッと目を凝らして、改めて周りを見してみる。

「あっ！」

「シーツ」

「ルウエ…」

「葛葉、葛葉…！」

目の前には、包帯をグルグル巻きにした葛葉が寝ていて。
慌てすぎて、明日香から転げ落ちてしまった。

「静かに。泥棒同然に入ってきたんだから…」

「大丈夫…。お母さんもセトも気付いてるから…」

「まあ、そっだよね」

「でも、村の人に見付からなくてよかった…。まだ疑ってる人もいるから…」

「……………」

「葛葉…！良かった…良かった…！」

「ルウエ、痛いよ…」

「あ…ごめん…」

「ふふふ…。それより、泣かなかった…？」

「うん」

「良い子だったんだね…」

「うん。葛葉がいなくても、自分、泣かなかったんだぞ」
「ルウエ…。こっちに来て…」
「うん」

葛葉のすぐ横まですり寄り寄っていく。

そして、葛葉は包帯の巻かれた手を頭に乘せて、ゆっくりと撫でてくれた。

「良い子良い子…」

「うん…」

「これからも、その調子でね…」

「葛葉…葛葉め…」

もう泣かない。

…でも、泣きたいときには泣く。

溢れる雫を、葛葉は優しく受け止めてくれた。

葛葉の匂い…。

甘い、獣の匂い。

でも今は、微かに血の匂いも混じってるみたい。

「すっきりした…?」

「…うん」

「ルウエ…」

「どうしたの?」

「もう一度、顔をよく見せて…」

「うん」

葛葉は頬にそっと手を触れ、潤む目で見詰めて。

「私の大切な家族の旅路に…幸多からんことを…」

「葛葉？」

「また必ず逢おうね…。今度は、私も元気になってるから…」

「え…？」

「もうすぐ夜が明ける…。早く村を出ないと…」

「嫌…嫌だよ…。なんで…なんで村を出なくちゃいけないの？自分、悪い子だったから？自分…よそ者だから…？」

「ルウエ…！」

「……………！」

葛葉の瞳が、一瞬金色に変わった…気がした。でも、やっぱりいつもの赤色で。

「誰しも役目というものがあるの…。私にもあるし、もちろんルウエにも…。私は私で役目を果たすから、ルウエも役目を果たして…」

「でも…」

「じゃあ、約束…。いつになるかは分からないけど、ルウエがちゃんと役目を果たしていたら、私は必ず逢いにいく…。だから、そのときまで、ルウエも私も頑張る…」

「……………」

「約束…してくれる…？」「うん…約束…。葛葉との約束…」

自分の役目を果たす。

葛葉との約束。

「私とも約束してくれる？」

「姉さま…」

「必ず無事に帰ってきてね。待ってるから」

「うん…。約束…」

必ず無事に帰る。
姉さまとの約束。

「ルウエ。”光”と”闇”は表と裏の関係だ」

「セト？」

「”光”が強ければ、出来る”闇”も大きくなる。”光”は”闇”を消し去ろうとするし、”闇”は”光”を呑み込もうとする。でも、本来は、互いは相反するものではなく、支え合って存在するものなんだ」

「え？分かんないよ…」

「いつか分かるときが来るから。そのときまで、ちゃんと心にしまっておいてくれ」

「うん…」

なんだかよく分からないけど、”光”と”闇”は互いに支え合うもの。
それを心に留めて。

「さあ、行ってらっしゃい。ルウエ、望、明日香」

「え？」

「うん。お姉ちゃんも、気を付けて。葛葉、早く良くなるように祈ってるから」

「うん…」

「…僕には？」

「セトは心配するまでもないでしょ」

「それもそうか」

「ねえ、どういじつと…？」

「それはまたあとで。じゃあ、改めて。…行ってきます」

「い、行ってきます…」

「行ってらっしゃい」

そして、何かモヤモヤしたまま、村をあとにした。

モヤモヤはつまり、初めて会ったはずの姉さまが、望と明日香の名前を知っていたこと。

それと、望がみんなと仲良さそうに話していたこと。

「簡単な話だよ。私とみんなが親しい間柄だったってこと」

「でも、自分は望のこと、知らなかったんだぞ」

「私もルウエのことは知らなかったよ。正確に言うと、ルウエと葛葉だけ。私がお姉ちゃんのことを知ったのは、前にやった自警団の短期採用のとき。そのときはユールオに泊まっていたし、内容も夜間警備の強化だったから、ルウエと会わなかったとしても不思議じゃない」

「ふうん…」

分かったような、分からないような…。

「まあ、細かいことは気にしないってのが、長生きする秘訣だって言ってたよ」

「誰が？」

「旅の途中で会った、長生き夫婦が」

「へえ〜」

自分も、そんな人たちと会えるのかな。

「そつえば、これからどこに行くんだ？」

「さあて、どこかな〜」

風の吹くまま。

気の向くまま。

次はどこへ流れ着く？

8 (後書き)

再び登場しました。

望は風華とセトのこと、知ってたんですね。
昨日の時点で気付いてたのかな。

「これ、いつ捕ったの？」

「ルウエが寝てる間」

「美味しい」

「うん」

朝ごはんは、カウタって名前の鳥の肉を焼いたものだった。

初めて見たけど、森にはこんな鳥もいたんだな。

自分が片方の羽根を食べて満腹になってる間に、望は残り全部を食べきっていて。

「カウタの羽根はね、ちょっとした処理ですごく綺麗な装飾品になるんだよ」

「綺麗？でも、茶色だぞ？」

「まあ、見えて」

そう言っつて、望はさつきから沸かしてあったお湯の中に羽根を浸した。

すると、羽根はくすんだ灰色になってしまった。

「……………」

「あ、疑ってるでしょ」

「うん」

「じゃあ、びっくりして心臓が飛び出さないように、しっかり押さええておいてね」

「…うん」

心臓はどこから飛び出すのかな？

とりあえず、胸のところを押さえておくんだぞ。

「三、二、一…はい！」

勢いよく羽根をお湯から出す。
でも、何もなくて。

「望…？」

「ほらほら。しっかり見てて

「うん…」

言われた通り、ジッと見詰める。
ん…。

「あっ！」

「ふふふ。どう？」

「すごく綺麗！」

羽根の灰色は、下の方から色が変わって行って、綺麗な青…緑…赤…あれ？

「光の当たり具合によって色が違って見えるでしょ」

「うん！」

「玉虫色とか虹色って言うんだけどね。乾いたら、好きなところに付けたら良いよ」

「うん！ありがとう！」

「どういたしまして」

玉虫色…。

すごく綺麗な色…。

明日香が戻ってきて、片付けも済んだあと、次のところへ出発。
どこに行くのかは分からないけど。
森の中をずんずんと進んでいった。

「ほら。これがツウカル。この草が一番高く売れるんだ」
「なんで？」

「全部が薬になるからね。葉、茎、根。それに、どついうわけか、
人間の手で育てられない草なんだよね。自然の力ってやつなのかな。
不思議だよね」

「……………あ、うん」
「聞いてなかったでしょ」

「…うん」
「まあ、ルウエにはまだ難しいかな」
「むう…」

なぜだか、望はすごく嬉しそうだった。
薬草を見つけては丁寧に教えてくれ、珍しい虫を捕ってきては楽し
そうに見せてくれて。

「これがね、ヤク…」
「……………？望？」

捕ってきた虫を草むらに投げ込むと、望は腰に差してあった小刀に
手を触れる。

「ウウ…」

「ルウエ、警棒」

「う、うん…」

短い言葉だったけど、何をしないといけないかは分かった。額当てをもう一度しっかりと締め、警棒を構える。

「明日香」

「……………」

「ルウエ。ジツとしてて。動いちゃダメだよ」

「うん……………」

でも、何？

何があるの？

望と明日香は、同じ一点を見詰めていた。

「出てきなさい。さもなければ、敵とみなします」

「……………」

……………。

でも、誰も出てくることはなくて。

望が動き出す。

明日香は、いつでも動けるように準備をして。

「繰り返します。大人しく出て……………」

と、見詰めていた場所あたりで、いきなり望が消えてしまった。

「かかれ！」

「おう！」「よっしや」

「え？え？」

誰かの掛け声と、二人の男。

軽い身のこなしで、一気に近付いてくる。

一人があと数歩のところまで迫ってきたとき、明日香が跳んだ。

「ガウ！」

「くそつ！ワン公！」

「何やってるん！振り払えや！」

「いてえ！ち、千切れる！犬じゃねえ！狼だ！」

「ああもう！ややこしいもん連れとるなあ！」

もう一人が助けに入る。

手には小さな刀を持っていて。

「明日香！」

「ゲアウ！」

「うぐあああ！」

間一髪で身体を捻り、刀をかわす。

その動きで、噛みつかれていた男の腕は大きく裂けて…。

明日香は、次は刀の男の足首に噛みつき、うつ伏せに押し倒す。

「ウウ…」

「ぐっ…あああ…」

牙が足に食い込んで。

うう…。

血が…血が…。

思い出すのは、あのとときの葛葉の姿。
血塗れで…。

「明日香！やめて！」

「ウウ……」

「あつ……があ……」

「明日香あ!」

もう……もう嫌……。

「明日香。やめなさい」

「……………」

「望!」

地面から望が這い上がってきた。

…あの場所に、落とし穴が掘ってあったみたい。

「” 治癒”」

「うう……」

望は、腕を噛まれた男の傷口に手をかざして、術式を掛ける。

… 治癒なんて術式、聞いたことないけど。

でも、血はすぐに止まって。

「あなたも」

「くっ……」

足を噛まれた男にも、術式を掛ける。

さっきと同じように、すぐに血は止まった。

「さあ。目的を話しなさい。あと、もう一人がどこにいるか」

「くそっ……。大誤算や……」

「……………」

「痛っ! き、傷が!」

「話さないと、治療はやめます」

「話します話します！」

「……………」

「目的は物取り。分かるやろ…。小娘が…ええ気になって…」

「……………」

「痛い！すんません！調子乗ってました！」

「余計な言葉はいらないです」

「はあ…。もう一人はとつくの昔に逃げとるやろ。くそつ。だから、あんなやつと組むんはいらん言つたんや…」

「そうですか。それより、地下牢と獣の餌ならどっちが良いですか？」

「は、はあ！？」

「獣の餌が好みですか。では、さようなら。ルウエ、行くよ」

「え…あ…うん…」

「お、おい！ちよい待てや！おい！」

望は、そのまま淡々と歩いていく。

すぐく怒ってるみたいだった。

でも、自分はある人たちが気になって。

「あ、あの…」

「なんじゃい、坊主。笑うんやつたら笑えよ。はあ…。しかし、えげつないな…。治療するだけして…。ホンマ、こんな血生臭いところにおつたら獣の餌やで…」

「こ、これ…」

「ああん？」

「お金…」

「…ふん。いらんわ」

「でも…」

「お前の大切な金やろ。オレらみたいになやつが使える金ちやう」

「あう……」

「ほら。なおせなおせ。それに、はよ行かんと姉ちゃんとはぐれるぞ」

「あ……うん……」

「……でも、ありがとうな。オレらのことは心配いらんから」

「うん……。じゃあね……」

「ああ。またな」

お兄ちゃんは優しく頭を撫でてくれて。

姉さまみたいに優しく。

そして、別れを告げて、望を追いかける。

お兄ちゃんとは、また会えそうな気がするな。

うん、きつと。

「何を怒ってるんだ？」

「怒ってない」

「でも、すごく不機嫌そうなんだぞ」

「……………」

やっぱり怒ってる。

落とし穴に落ちたからかな？

「そういえば、明日香がいないんだぞ」

「明日香は大丈夫」

「ふうん……」

「ワウ」

「あ。明日香」

「ご苦労さま。それで？」

「……………」

「そう。良かった」

「何？」

「最後の一人は地下牢を選んだってこと」

「……………」

「はあ……。でも、ルウエに怪我がなくて良かった」

「うん。明日香が守ってくれたんだぞ」

「うん……。そうだね……」

「どうしたの？」

「あんな簡単な罠に掛かって……。本当は私もルウエを守ってあげないといけないのに……」

「望……」

さつき怒っていたのは、望自身の役目を果たせなかったから。それと、明日香の追跡の結果が気になってたのもあるかもしれないけど。でも、それは全然違って。

「自分、望にもちゃんと守ってもらったんだぞ」

「ありがとう。でも、慰めてくれなくてもいいよ」

「慰めなんかじゃないよ。望がいなかったら、自分、絶対にあの人たちに襲われてたし、それに…明日香も止められなかった…」

「ルウエ…」

「だから、自分自身を責めないで」

「…うん。ありがとう」

「お礼を言うのは、自分なんだぞ」

「ふふ、そうかもね」

そして、望は優しく抱き締めてくれて。

とても温かかった。

また明日香の背に乗せてもらい、ひたすら森の中を進んでいた。望の機嫌は、もう治っていて。

「ルウエ！ほら！ウサギ捕まえた！」

「昼ごはんにするのか？」

「朝にお肉は食べちゃったからね。昼は野草だよ」

「さつき採ってたやつ？」

「あれは薬草」

「…どう違うの？」

「薬草は薬になる草。食べることでより薬としての効果が優先されるから、すごく不味かったり我慢出来ないほど苦かったりするよ」

「…じゃあ、いらない」
「私もそう思う」

そして、ウサギを逃がして。

「よし。まだ早いけど、準備だけしとこっか」
「うん」

「食べられる野草、毒のある野草、食べられるけど不味い野草。いろいろあるから、まずはちゃんと見分けがつくようになろう」
「うん！」

早速、明日香から降りて、周りにある草をしてみる。

「これは？」

「それは食べられるよ。ヤムルカだね」

「ヤムルカ…。じゃあ、これは？」

「それもヤムルカ」

「でも、全然違う」

「これはちよつと古いヤムルカで、そつちは若いヤムルカ。ホントは若い方が美味しいんだけど、ヤムルカと次に来る旅人のために、若い方は残しとこっか」

「うん。分かった」

握っていた茎を離して、次に移る。

ヤムルカが無くならないように。

ヤムルカが無くなって、次の人が困らないように。
ちゃんと残しておくんだぞ。

「これは？」

「食べられるよ。スクンだね」

「スクン…」

「生で食べても美味しいよ。甘さがあった」
「ふうん」

葉っぱを一枚千切って、食べてみる。

…うん。

蜂蜜とか砂糖とは違う、不思議な甘さがある。

「美味しいでしょ？」

「うん」

「またあとで、もっと美味しくしてあげるからね」
「うん！」

すごく楽しみなんだぞ！

「……………」

「あ。明日香、それ、美味しいの？」

「ふふ、ルウエも食べてみなよ」

「うん」

明日香が食べていた草を採って、口に入れてみる。

「……………。うええ……………」

「あつははは。それはね、ムツカイっていう薬草だよ。すっごく苦いことで有名なんだ。解毒作用があって、食中毒のときなんかに食べるんだよ。明日香は違うだろうけど」

「うう……………」

「じゃあ、これ、食べてみて」

「苦くない…………？」

「うん。大丈夫」

「むう…」

望を疑うわけじゃないけど。

渡された草をちよつとだけ舐めてみる。

「……！」

「どう？」

「すっごく甘い！」

「うん。それはデガナの葉っぱ。苦味が甘味に変わる、不思議な葉っぱだよ。まあ、普通は実を食べるんだけど」

「実も美味しいのか？」

「うん。ていうか、葉っぱはあまり食べないんだけどね。って、そうだ。思い出した」

「何を？」

「ちよつと待ってね…」

と言って、望は背負っていた袋を下ろして、中を漁る。

しばらく、ガチャガチャといろんなものがぶつかり合う音が聞こえて。

何が入ってるのかな…。

「はい。これ」

そして渡されたのは、小さな鏡だった。

「これって…」

「約束だったもんね。びっくりさせようと思って内緒にしてたら、すっかり忘れてたよ」

「ありがとう！いつ買ったの？」

「昨日だよ。そんなことより、見てみなよ」

「うん！」

鏡を覗いてみる。

そこには自分の顔が映っていて。

そして、その顔には…

「何、これ？」

「それが龍紋。綺麗でしょ？」

鏡に望の顔が映り込む。

後ろから手を回してきて、前髪を上げる。

「ほら。ここにも」

「わあ〜」

上げてくれた前髪の下、額のところにもリュウモンがあつて。青白く光っていて、すごく綺麗だった。

「望、望！すごく綺麗なんだぞ！」

「でしょ？全部、ルウエのなんだよ。分かってる？」

「え？自分の…？」

「ふふふ。ルウエ、すごく綺麗だよ」

「自分の…。これが…」

不思議なかんじがした。

自分が自分でないような。

でも、こんなにも綺麗な光が、本当に全部自分のもの。

…葛葉も見えてくれたのかな。

綺麗って思ってくれたのかな。

そうだったら嬉しいな。

「さあ、ルウエの龍紋も見れたことだし、昼ごはんの準備の続きを
しよっか！」

「うん！」

自分の知らない自分を見つけられた。

リュウモン。

見せてくれた鏡に。

そして、鏡を買ってくれた望に…

「ありがとう！」

「ん？ああ。ふふふ。どういたしまして」

これ以上、どう言えば嬉しさを伝えられるか分からなかったから。

「わわっ！」

「えへへ」

だから、望に抱き付くしかなかった。

ありがとう、望！

野草で取った出汁に野草を入れて、良い香りのする野草を散らして野草汁が完成。

焼き野草をおかずにして、野草の実を炊いたものを食べる。

「…草ばかりなんだぞ」

「そうだね」

「……………」

「不味くはないでしょ？」

「うん…。でも、ホントに草ばかりなんだぞ…」

「夕飯は良いのを作ってあげるから我慢しなさい」

「むう…」

「食べられるだけマシだよ。野草も採れないときだってあるんだか

ら

「……………」

食べられるだけ…マシなんだぞ…。

心の中でそう繰り返しながら、望が飲んでいる緑色の汁を見ていた。

「「ごちそうさまでした」

「「ごちそうさまでした…」

「不満そうだね」

「そんなこと…ないもん…」

「はあ…。仕方ないね。じゃあ、これ、食べよ」

そう言って望が後ろから取り出したのもやっぱり草だった。ただ、さっき食べたのとは別の料理というだけで。

「……………」
「ほら、食べよ」
「うん…」

渡されたものを受け取り、望の出方を見る。
望は何の躊躇いもなく、その草を食べていて。
…自分も食べないと。

「……………」
「どっ?」
「すっごく美味しい!」
「でしょ」。スクンで作ったお菓子だよ。野草料理の口直しによく食べるんだ」
「へえ」

さっき食べたスクンよりもずっと甘くて。
味の薄い野草料理ばかりだったのが吹き飛ばくらいに美味しかった。

「美味しいものを食べて、お腹も心もいっぱい。ということでは満足出来ましたか?」
「うん!」
「ふふ、良かった」
スクンのお菓子を頬張って。
お腹も、心も、大満足。

昼ごはんを食べてから、また森の中を歩いていた。
少し変わったのは、坂道が多くなったこと。

山を登ってるらしかった。

「明日には次のところに着けるかな」

「明日？」

「うん。明日」

「今日は？」

「今日は野宿だね」

「ノジユクって？」

「どこかその辺で寝ること。でも、明日香もいるし、大丈夫だよ」

「うん」

何が大丈夫なのかは分からないけど。

ノジユク…。

なんだかワクワクするんだぞ！

「疲れたら明日香に乗せてもらいなよ。まだまだずっと登り坂だし」

「うん。分かった」

そして、隣を歩いてる明日香の頭を撫でると、軽く尻尾を振ってくれた。

「今の時期、あまり良い木の实がないんだけどね。山の上の方に美味しいのがあるんだ」

「へえ〜」

でも、周りを見ると、木の実のなってる木はたくさんあった。なんで、あれはダメなんだろ？

「あれはまだ熟してないからだよ」

「え？」

「ほら。たとえば、この木の实。青くないし、食べられると思うでしょ？」

「うん」

「でも、これ。見て」

そう言つて、木の实を割る。

…中はスカスカで、実が詰まっていなかった。

「ね？今は、だいたいの木にとって、実を作る準備をする時期なんだ。この木の实も、あともうちょっと経てば良いかんじになるんだよ」

「へえ」

「でもね、それでも食べるものが無くならないように、少しずつ時期がずれてるんだ」

「みんなで考えたのか？」

「ふふ、そうかもね」

森や山に住んでるみんなが集まって話し合ってる様子は、すごく楽しそうで。

自分も、いつか入れられるかな。

入りたいな。

「……………」

「ん？どうしたの、明日香？」

「ワウ……………」

「…何？」

明日香は、一点を見詰めて動かなかった。

また…何かいるの…？

「ルウエ。そこで待ってて」

「うん……」

「明日香」

「……」

明日香に合図を送り、望が様子を見に行く。

草むらをかき分け、油断なく周りを見回しながら、少しずつ前へ進んでいく。

「……」

「望……」

背の高い草がどんどん望の姿を隠していった、それに合わせて不安が大きくなる。

「望……望……」

もうすっかり見えなくなった望。

名前を呼んでみても、返事はない。

それがさらに不安を加速させて。

「望……望い……」

「……」

「うう……」

「ルウエ！ルウエ！ちよっとこっち！」

と、草むらの向こうの方から望の声がした。

考えるより先に、駆け出していた。

なんで呼ばれたのか、どこにいるのか。

そんなことは、ずっとずっと後回しで。

とにかく、一刻も早く不安を消し去りたかった。

「望…！望！」

「わわっ！どうしたの？」

「うう…。怖かった…怖かったよ…。望がそのままいなくなるんじゃないかって…」

「…ごめんね。怖がらせちゃって。でも、私はずっとルウエの傍に
いるから」

「望…望い…」

「ね？だから、泣かないで」

「……………うん…。泣かない…」

「ふふふ。良い子良い子」

望は強く抱き締めて、優しく頭を撫でてくれた。

ずっと、傍にいる…。

ずっと…。

「もう大丈夫？」

「うん…」

「よし。じゃあ、あそこ。見てみて」

望が指さした先には、龍の親子がいた。

綺麗な緑色をした、緑龍の親子。

向こうも、こっちをジッと見ている。

「ウルル…」

「な、何？」

「ちよっと待ってて」

「ウルル…」

「……………」

「オオン……」

何か心まで響くような、不思議な声で。

今、この空間が、夢の世界のようなかんじがした。

「ルウエ、行くよ」

「……え？どこに？」

「あの親子のところだよ」

「え？」

急に現実に戻されたみたいで、望が何を言ってるのか一瞬分からなかった。

でも、望はずんずんと進んでいくから、付いていくしかなくて。

そして、着いた先。

緑龍は、遠くから見ても大きかったのに、近くで見るともっと大きかった。

「ウルル……」

「うん。旅の途中」

「……」

「私は望。この子がルウエで、あっちで不貞腐れてるのは明日香」

「ねえ……望……」

「大丈夫。優しい子たちだから」

「で、でも……」

「ほら。触ってみなよ」

望は、親龍のお腹のあたりをゆったりと撫でる。

すると、それを見て子龍たちが集まってきて、望にねだるように纏わりつく。

「あはは、くすぐりたいよ。もう、順番順番」

…龍なんて、セトしか見たことなかった。

セトは優しくかったけど、この龍も優しいかどうかは分からない。でも、望と子龍の様子を見ると、羨ましくなった。

自分も、触ってみたい。

「オオン…」

「え？」

「触ってみなよ。最初は勇気がいるかもしれないけど、その一歩を踏み出すことが大事」

「うん…」

最初の一歩…。

望がやってたように…。

そっと、親龍のお腹に触れてみる。

「ウルル…」

「わあ〜」

鱗ばかりの見た目に反して、すごく柔らかかった。

それが気持ち良くて、次は抱き付いてみる。

腕を回しても届かないくらい、身体の回りは大きかったけど。

でも、とっても温かくて。

「ギャオー、ギャオー」

「ふふ、妬いてるんだ〜」

「温かい…。お母さんみたいなんだぞ…」

「お母さん、か」

「ウルル…」

親龍は優しく包み込んでくれて。
胸のあたりが、ほっこり温かくなった。

「うん、ありがとう。でも、いいよ」

「ウルル…」

「ふふ、そうだね」

「ギャオー、ギャオー」

「また来るよ。次は私より大きくなってるのかな」

「キユウ…」

「うん。じゃあ、またね」

「きつと、また会えるんだぞ」

「ウルル…」

そう言つて、親龍は額をお腹に擦りつけてきて。

…親愛の証。

セトに教えてもらった。

龍の、最高の愛情表現。

「うん…。ありがとう、なんだぞ…」

「……………」

親龍の鱗がちな額に、自分の額を合わせる。

また必ず会えるようにと、願いを込めて。

「…よし、行こっか」

「うん！」

龍の親子に精一杯手を振りながら、元いた道へと戻る。

草に隠れて姿が見えなくなってしまうたあとも、旅立ちを祝う唄は聴こえていた。

勇ましい詞とは裏腹に、優しく包み込むような唄声で。

「また会えるよね」

「うん。必ず」

「ワウ」

「あれ？明日香。どこにいたの？」

「……………」

「ふふふ。妬いちゃって〜」

「……………」

「あ、怒った？怒ってるよね？」

「明日香は怒りん坊なんだぞ」

「……………」

そしてそのまま、ツンとして先に行ってしまった。

「ふふふ。でも、明日香も楽しかったはずだよ。子龍たちと遊べて」

「え？そうなのか？」

「うん。陰でこっそりとね。ホント、素直じゃないよね」

「うん。それは思うんだぞ」

頷いたところで草むらは終わり、座り込んで大きな欠伸をしている
明日香がいた。

「お待たせ、明日香。行こっか」

「……………」

「いつまでも拗ねてないの」

「……………」

ため息をひとつ。

そして、諦めたように立ち上がる。

「さあ、頂上まで一気に行くよ〜！」
「おおーっ!」「ワウ!」

龍の親子が唄っていた祝いの唄を口ずさみながら。
頂上へ向かって、進んでいく。

葉っぱの隙間から入ってくる太陽の光を鏡で反射させて遊んでいると

「眩しっ!なんや!?!」
「あ」

聞いたことのある声が聞こえた。

「さっきのお兄ちゃん!」
「おお、坊主に小娘」
「…足はもう大丈夫なんですか?」
「ん?ああ、思ったより大したことなかった」

地面を力強く蹴ってみせる。
うん、本当に大丈夫そう。

「へえ〜。それで、もう一人は?」
「ユールオの方に帰ったわ。向こうはだいぶ酷かったからな」
「そうですか」
「お兄ちゃんは、どこに行くんだ?」
「ヤクウルからヤマトやな。自分らもそうちゃうん?方向からして」
「そうですけど」
「なんや冷たいなあ。小娘は」

「追い剥ぎをするような人に、温かく接する理由がないですし。それに、私は小娘なんて名前じゃないですから」
「じゃあ、名前教えてくれよ」

「嫌です」

「それやったら、小娘って呼ぶしかないやろ」

「望は、望って名前なんだぞ！」

「へえ〜。望か〜」

「気安く呼ばないでください」

「それで、坊主は？」

「自分は、ルウエって名前なんだぞ！」

「ルウエか。ム、エク、ルウエ…やな。ええ名前や」

「うん！」

お兄ちゃんに、また頭を撫でてもらった。

それがなんだか嬉しくて、お兄ちゃんに抱き付いた。

「こらっ、ルウエ！危ないよ！」

「……？危ない？」

「へへ、相当嫌われたみたいやな」

「当たり前です！」

ギロリと睨む望の後ろで、明日香は暇そつに欠伸をしていて。

「ところで、自分ら。護衛はいらんか？」

「いりません」

「即答かい！」

「あなたも良く知ってるように、私たちには頼りになって信用の置ける相棒がいますから」

「ああ。後ろで寝てる狼か」

「え？」

後ろを振り返って初めて、明日香が寝ていることに気付いた望。

「明日香！この人、追いついてよ！」

「……………」

「明日香！」

「……………」

お兄ちゃんをチラリと横目で見て、退屈そうにため息をつく。
そして、また目を瞑ってしまった。

「ははは。なかなかええ相棒やな。漫才やってみたらどうや」

「もう！明日香！」

「……………」

「え…？」

「……………」

「ちょっと、明日香！どういう意味なの！？」

「あとは望だけ、ゆうこつちゃん」

「でも、そんな…って、あれ？明日香の言ってること、分かるんですか？」

「さあな。雇ってくれたら教えたるわ」

「ええっ！？ずるい！」

「ムカラウ出身やしな」

「ムカラウ？」

「損得勘定させたら世界一。その人間は全員、算盤握って生まれ
てくるつちゅー国や」

「ふうん…」

よく分からないけど。

すごい国だってことは分かった。

「さあさあ。護衛はいかが？」
「はあ……。いくらですか」
「せやなあ。ヤマトまで……。これでどうや」
「……え？」
「なんや。値切り交渉は受けんぞ」
「いや……。値切るも何も、破格じゃないですか」
「はは、友達割引や」
「……友達になつた覚えはないですけど」
「ルウエと、や」
「そうですか」

お兄ちゃんと自分が友達……。
なんだか、ほっこり嬉しかった。

「で、契約成立か？」
「……ただし、前を歩いてください」
「はいはい。信用ならんっちゅーこっちや」
「良くお分かりで」
「ふむ。それで、さっきのやけど、オレは明日香のゆづてることは分かん。望の反応から予想して、カマ掛けしただけや」
「なあんだ……」
「ねえねえ。お兄ちゃんも、付いてくるのか？」
「ああ。少なくともヤマトまでな」
「ヤマトが最大です」
「はいはい。分かってます分かってます」
「……………」
「あとな、オレらが追い剥ぎやってたんは、三人目に雇われてたから。大金でな。相方が金に目が眩みよつたんや。こういう護衛が本来の仕事」

「ふうん」

「信じるのも信じんのも、自分らの自由やけどな。あんまりツンケンされるのも嫌やし」

「自分は信じるんだぞ！」

「ほうか。おおきにな」

「…おおきに？」

「ありがとつって意味やな。ムカラウではおおきにゆっねん」

「へえ〜」

「私は信じないですから」

「お好きにどうぞ」

「……………」

望は、お兄ちゃん相手だと調子が狂うようだった。ムツとした顔をして、そっぽを向いてしまった。

「よっしゃ、行こ行こ。ヤクウルの前に寄らなあかんとこもあるしな」

「え？どこ？」

「めっちゃええとこ」

めっちゃええとこ…。

よく分からないけど、すごくワクワクするんだぞ。

12 (後書き)

どこに行くかでしょうが。

護衛が付いて、より安全な旅路に…なればいいですね。

「なんか、ムシムシするんだぞ……」
「せやな」

日も暮れかけて、もうそろそろ夜になるといっ頃。
風の向こうから、熱気が漂ってきて。

「望、大丈夫か？」
「……大丈夫です」
「ほうか。ほなら、冷却剤もいらんな」
「冷却剤!？」
「ああ。まあ、一時的なもんやけど……」
「く、ください!」
「なんや素直ちゃうなあ。ほれ。あんま冷やし過ぎんなよ」
「分かってます」

お兄ちゃんから何かの袋を受け取り、首に巻く。
すると、少し落ち着いたようだった。

「はあ……」
「毎度あり〜。五百円になります〜」
「ええっ!？」
「はは、冗談冗談。そんなもんくらいやるわさ」
「……………」
「何回も使えるけど、ぬるくなったら冷やし直さないかんよ」
「……分かりました」
「よっしゃ。ほな、いざ温泉へ!」
「オンセン?」

「行ったら分かる」
「…………？」

どんどん突き進むお兄ちゃんのを追って。
…そういえば、明日香はどこに行ったのかな。

草むらを抜けた先。
湯気の立つ池があった。

「はあ……」
「カツコつけて付いてこんでもええのに」
「ルウエに何かされても困りますから…。それに、私も温泉に入りたい……」

「まあ、そうやるな」
「これ、お湯？」

「ああ。天然の風呂。ここは炭酸泉。泉質も温度もちょうどええかんじや。行くとこ行けば、硫黄泉て臭い温泉とか、定期的に地面から噴き出す温泉とかもあるんやけどな」

「ふうん」

「さあ。望もええ加減ダレてきたし、さっさと入ってまお」

「あ、あなたはあとです！」

「ほいほい。分かった分かった」

「え？一緒に入らないのか？」

「あかんみたいやな」

「ええーっ！」

「いちおう護衛なんですから、ちゃんと見張っててください」
「任せとき」

そう言って、胸をドンと叩く。

…強すぎたのか、咳き込んでるけど。

「じゃあ、ルウエ。一緒に入るっか」

「うん！」

荷物をお兄ちゃんに渡して、服を脱ぎ始める。

「ほれ、望も。荷物、預かるで」

「いいです。ていうか、ルウエのも返してください」

「用心深いなあ」

「信用出来ないだけです」

「おんなじことやる」

「違います」

そう言って、引いたくるようにして荷物を取り返す。

お兄ちゃんは、困ったように肩をすくめて。

「絶対に覗かないくださいね」

「どうせ覗くんやったら、もっとバインバインの姉ちゃんにするわ」

「ふんっ！」

鈍い音が響いた。

「いったあ！おい、弁慶の泣き所はないやろ…！くああ…！」

「ふん。さっさと向こうに行ってください」

「ホンマ、恐ろしい姉ちゃんやお…」

「何か言いましたか？」

「なんもゆつてませーん」

そして、お兄ちゃんは逃げるように草むらの向こうへ行ってしまっ

た。

「はあ……」

「望、早く!」

「はいはい」

お兄ちゃんが完全に見えなくなると、望もスルスルと服を脱いでいく。

「ルウエ、先に行つてなよ。私もすぐ行くから」
「うん!」

最後に下着と草鞋を脱ぎ捨てて、温泉に入る。

…少し熱めかな。

でも、良い気持ち。

「……………」

「……………」

そして、目が合ってしまった。

…明日香と。

「明日香!」

「え?明日香?」

「……………」

「明日香も温泉に入ってるんだぞ!」

「まあ、そりゃ狼も温泉に入りたいときはあるでしょ」

「明日香」

「……………」

明日香に近付くと、スイーツと泳いで行って、上がってしまった。そして、パタパタと身体を震わせて水を飛ばす。

「わっ！明日香、冷たいんだぞ！」
「……………」

水を飛ばしたあと、しばらく水面を見ていた明日香はいきなり大きく跳んで。

「わわっ！あはは、明日香」
「ワウ」

盛大に水飛沫を上げながら、温泉に飛び込んできた。

「お待たせ」
「やっ！」
「うわっ！ルウエ」
「あはは」

やっと来た望に水を掛ける。
すると、望も返してくる。

そうして、三人で水の掛け合いっこなんかして。
村のお風呂でこんなに遊ぶと、必ず姉さまに怒られたけど。
でも、今日は良いよね。
なんだか嬉しいんだもん。
今度は葛葉と一緒に来たいな。

「はあ、遊んだ遊んだ。じゃあ、上がるっか」
「うん！」

端まで泳いでいく。

上がってすぐに、明日香がやってたように身体を震わせて。

「ルウエ。ちゃんと拭きなさい」

「うん」

と、手拭いを渡そうとする望の手が止まる。

「……………?どうしたの?」

「ルウエって…女の子だったの…?」

「うん」

「ええーっ!ずっと男の子だと思ってた!」

「むう…。よく言われるんだぞ…」

「じ、ごめん…」

「…別に良いんだぞ。自分は自分だもん。男でも女でも。それは変わらない」

「…そうだね。でも、ごめんね」

「うん」

「よし。じゃあ、冷えないうちに身体を吹こっ」

「うん!」

髪の毛は望が拭いてくれて。

…自分で拭いたときより、ふんわり仕上がったような気がする。

次はお兄ちゃんの番。

お兄ちゃんの背負い袋の中には、いろんなものが入っていて。

「これ、何?」

「何かの薬でしょ。危ないから、その荷物、触らないで」

「なんで望は、お兄ちゃんのこと、嫌いなんだ？」
「嫌いってわけじゃないけど…」

櫛が止まる。

後ろを振り向くと、望は少し考えているようだった。

「望？」

「え？あ、うん。ごめんね。それにしても、ルウエの髪って変わってるよね」

「何が？」

「青い毛が混じってる」

「うん。混じってる」

「ふふ、綺麗だね」

「ありがと、なんだぞ」

「この髪、いつから伸ばしてるの？」

「分かんない」

「へえ〜。長さは揃えてるんだよね」

「うん。葛葉が切ってくれるんだ。男と間違われないようにって、先を揃えるくらいだけ」

「…ごめんね」

「あつ、そういう意味じゃないんだぞ」

「分かってるよ。でも、私もなんで男の子だと思ったんだろ。こんなに長いのにね…」

スーッと櫛を通す。

姉さまや葛葉も、よく鋤いてくれたな…。

また今度、やってもらおう。

「鼈甲の櫛はいかがでしたかな？」

「あれ？上がってきたんですか。濡れたかと思ってたのに」

「残念やったな。この通りピンピンしてます〜」

「過ぎたことは仕方ないです。それよりこれ、模造品じゃないんですか？」

「ちやうちやう。本物や」

「ふうん…」

「なんや。信用ならんっちゅー目やの」

「はい」

「ねえねえ、ベッコウって何？」

「亀の甲羅や。綺麗やろ」

「うん。すごく綺麗」

「…あげよか？」

「え？良いのか？」

「ダメ！そんな高価なもの貰っちゃ！」

「ええやん。模造品やし」

「うぐっ…」

「オレはどうせ使わんしな。また望に鋤いてもらえ。せっかく綺麗な髪なんやし」

「うん！ありがと！」

ベッコウの櫛。。

えへへ。

お兄ちゃんに、綺麗な髪って褒めてもらっただぞ。

…記念として、この櫛を。

大切にするんだ。

夕飯は、近くにあった川で捕った魚と野草、あとは甘い木の実で作った料理だった。

お兄ちゃんが塩とか砂糖を持っていたから、昼と同じはずの野草汁もすごく美味しくて。

…相変わらず望は、怪しい薬なんじゃないかって疑ってたけど。

「美味しかった〜。お腹いっぱいなんだぞ」

「はあ〜。オレも、もう食べんわ〜」

「あなたは食べ過ぎです」

「望もたいがいやと思うで。どんな腹しとんねん」

そう言って、望のお腹に手を伸ばす。

「ひゃあっ！さ、触らないでー！」

「あだっ！」

望は、ちょうど良い位置にあったお兄ちゃんの頭を殴る。
お兄ちゃんは、そのままうずくまって。

「つう…。ホンマ、凶暴やなあ…」

「お、女の子のお腹に触るなんて、最低です！」

「ええやん…。減るもんやなし…」

「精神が減ります！」

「ああ〜、そっちな」

納得したように頷く。

…精神って減るの？

「それにしても、塩すら持ってへんとはな」

「切らしてただけです。それに、塩の摂りすぎは早死にの元ですか」

「摂らなすぎもな。ユールオにおったんやったら、塩くらい買えや」

「予算がなかったのです。それに、ヤマトの方が安く買えます」

「そりゃそうかもしれないけど、途中で行き倒れたらなんもならんやろ」

「なんでヤマトの方が安く買えるの？」

「ん？ああ、ヤマトでは岩塩ゆつて、しょっぱい岩が採れんねん」

「ガンエン……」

「ユールオの塩商人は、だいたいはヤマトの岩塩かテムカイの塩を扱つとるんやけど……」

「テムカイの塩？」

「ああ。テムカイは海に面してるから、海の水を干して塩を作んねん」

「海の水は、しょっぱいのか？」

「しょっぱいで〜。あれは涙やからな」

「誰の？」

「海の」

「ふうん」

海。

なんで泣いてるんだろ。

昨日、望も哀しみの色だつて言ってた。

…慰めてあげられないかな。

同じ蒼の自分が。

「まあとにかく、塩が採れる場所で直接買ったら、余計な費用……ゆ

うたらユール才まで塩を運ぶ手間賃とかが掛からん分、安く買える
つちゅーこと。分かったか？」

「うん。塩が採れるところで塩を買えば、安く買える」

「……………。それだけかい！」

「……………うん」

「長々と説明したんはなんやったんや…」

「長すぎるんですよ」

「はあ…。まあええわ…。安く買えるってことが分かったんやった
ら…」

「うん」

採れる場所で直接買うと、それだけ間に入る人も少なくなるから、
その人たちに払うお金も少なくなつて、安く買えるってことかな。

野草も、お店で買えばお金が掛かるけど、自分で採ればお金は掛か
らない。

間に人が入らないから、お金が掛からない。
たぶん、そういうこと。

「よし。オレはもう一風呂浴びてくるわ」

「え？入りすぎじゃないですか？」

「ええことは何回やってもええねん」

「いえ、やり過ぎはダメだと思います」

「昔は温泉見つける度に五回は入ってたけどな。相方に止められて、
一回にしてん」

「賢明な判断だと思います」

「ふふふ。ゆうこと、あいつとおんなじやな」

「自分は？」

「ん。ルウエは、前に会った女の子に似てるかなあ。好奇心旺盛
で、可愛い女の子」

「へえ…。その子の名前は？」

「んー。忘れた」

「ええ〜」

「また思い出しとくわ」

「絶対、なんだぞ!」

「分かってる分かってる」

ポンポンと頭を軽く叩いてくれて。

そして、お兄ちゃんはまた温泉へ行ってしまった。

望は道具のお手入れ。

お兄ちゃんは、まだ温泉。

明日香だけが暇そうにしていたので、一緒に散歩へ出る。

…散歩と言っても、自分は明日香に乗せてもらってるんだけど。

「明日香」

「……………」

「明日香は、お兄ちゃんのこと、どう思う?」

「……………」

「望も分かっているだろうけど、お兄ちゃん、悪い人じゃないんだぞ」

「……………」

「そりゃ、最初は怖い人だと思ったけど。でも、撫でてもらったとき、すごく嬉しかった」

「……………」

「明日香は、撫でてもらったら嬉しい?」

明日香の頭をそつと撫でると、気持ち良さそうに目を細めて。

「望も撫でてもらえば良いのにね」

「……………」

と、急に立ち止まる。

「どうしたの？」

「…ワウ」

「わわっ！」

そして、突然走り出す。

…もうちよつとで振り落とされそうだった。
ぴったりと身体を合わせなおして。

それにしても、何なんだろ？

しばらく走ると、速度を緩めて、止まった。

「明日香？」

「……………」

顔を上げると、目の前を光が通っていった。

「蛍…？」

にしては大きい。

「闇に生きる者」

「え？」

「蛍じゃない。闇に生きる者」

「だ、誰…？」

声のした方。

光が向かっていった方に、誰かが立っていた。

「初めまして、ルウエ。ぼくはヤーリエ」

「ヤーリエ…？」

「うん。よろしくね」

「よろしく…なんだぞ…」

ヤーリエは、さっきの光をいくつも纏ってて、そこだけぼんやりと
明るかった。

「ルウエ」

「な、何…？」

「葛葉のこと、好き？」

「うん…」

「望は？」

「好きだけど…」

「そう。良かった」

「ヤーリエは、葛葉と望のこと、知ってるのか…？」

「まあね」

そして、ゆつくりと近付いてくる。

明日香は、ただジッとヤーリエを見詰めているだけで。

「ルウエ。ぼくのこと、好き？」

「…分かんない」

「ふふ、そうだよな。でも、ぼくはルウエのことが好き」

「…うん」

そしてヤーリエは、優しく抱き締めてくれて。

ヤーリエの温かさと、光…闇に生きる者の冷たさが混ざりあって、
変な感じだった。

「光と闇は表裏一体。ルウエが”月”なら、ぼくは”太陽”。ぼくは、こんなにルウエが好きなのに。光と闇は、本当に相容れない存在なの？」

薄れゆく意識の中、そう聞こえた気がする。

…急な眠気に襲われ、ヤーリエの温かさを感じながら、深い眠りに落ちていった。

「んう…」

目が覚めた。

大きく伸びをして、身体を起こす。

「お。起きたか」

「おはよ…」

「おはようさん」

「お兄ちゃんは早起なんだぞ…」

「まあな。ルウエはまだ寝ててええねんで」

「うん…。でも、起きる…」

「ほうか」

森にはまだ霧が掛かっていて、どこを見ても真っ白だった。

「うう…。寒い…」

「こっちに来て、火にあたれよ」

「うん…」

お兄ちゃんの焚く火は、ゆっくりと揺れていて。

ジッと見ていると、なぜかヤーリエのことが思い浮かんだ。

「ほら。ここに来いよ」

そう言って、お兄ちゃんは膝を叩く。

フラフラと吸い寄せられるように、その胡座の上に座って。

「あつたかいか？」

「うん」

「ふふ、そりゃ良かった」

お兄ちゃんは後ろからそつと抱き締めてくれて。
柔らかい温かさにも、また意識が遠のいていく…。

温かい…。

葛葉…。

「オレは葛葉ちゃうで」

「わわっ!？」

「朝ごはんやぞ」

「う、うん…」

びっくりした…。

寝言…言ってたのかな…。

身体を起こして、ぼんやりと器に盛られた朝ごはんを見る。

「ルウエ。ちゃんと食べないと、ヤクウルまで行けないよ？」

「あ、うん」

「まあ、そんな急ぐこともないやろ」

「急ぎますよ。さっさとヤマトまで行って、あなたと別れたいです
から」

「なんや、案外根に持つなあ」

「当たり前でしょ」

「なあ、そういつの、やめにせんか？」

「私だつてやめたいですよ。でも、あなた自身が、そう出来ないよ
うなことをしたんです」

「水に流してくれよ、な？オレらも酷い目にあったんやから」
「無理です」

「…ルウエ」

「ルウエへ逃げないでください」

「はあ…厳しいなあ…」

「ふん」

自分には、二人の仲は良いように見えるんだけど、違うのかな。
よく分かんないんだぞ。

「ごちそうさま」

「美味かったか？」

「うん！」

「ほうか。良かった良かった」

「えへへ」

「……………」

お兄ちゃんに頭を撫でてもらう。
それが、とても気持ち良くて。

「ルウエ！行くよ！」

「え、あ、うん」

「はあ…。ホンマに…」

望、何を怒ってるのかな？

とにかく、荷物を持って慌てて望のあとを追った。

目の前に影が三つ。

ユラリと歪んだかと思つて…

「危ない！」

何かが飛んできた。

黒い…闇？

「ウウ…」

「お前らは下がってる！」

「う、うん…」

「光の聖獣よ。我との契約により、闇を討ち払え！」

「……！召致！？」

空気が一瞬揺れたかと思うと、いつの間にか、お兄ちゃんの前に明るい光が。

(ふあ…あふう…。どうしたの？)

「見たら分かるやる！」

(ああ、あれ？)

「そっや！」

(”影”ねえ。元を倒した方が良くいんじゃない？)

「なんでもええから、はよやってくれ！」

(もう…)

…大丈夫かな。

光の真ん中にいたのは、銀色の狼。

面倒くさそうに欠伸をして、影を睨む。

影は、狼の光にあてられて薄くなってるような気がした。

(近くに術者がいるね。半径四半里以内。向こうを倒してくる？)

「ダメ！」

(ん?)

自分でも、なんでこんなことを言うのか分からない。
けど…

「ダ、ダメ…なんだぞ…」

(…そう。まあ、向こうも弱っちいみたいだし)

そう言って立ち上がると、ゆっくりと影に近づく。

半分くらい行ったところで、影は完全に消えてしまった。

(ふう…。もっと手強いのが良かったなあ)

「アホゆうなよ…」

「あのっ!」

間髪入れず、望が声を上げる。

「どうした。怪我でもしたんか?」

「あ、あなたは、召喚師なんですか?」

「まあな」

「シヨウカンシってなんだ?」

「聖獣を呼び出せるやつのことやな」

「セイジュウ?」

(ボクみたいな、神様の遣いのこと。ボクは”月の神”ルイムナさまの遣い、ルウエだよ)

「せや、こいつもルウエって名前やねん」

「ルウエ…」

(ふふ、キミもルウエか。…ルウエ、ボクと契約してみる?)

「ケイヤク?」

「こちら。勝手に引き込むな」

(良いじゃん。ボク、この子、気に入っちゃった)

「気に入っちゃったってなあ……」

「わ、私は？」

(んー。キミは、火の属性が強いからね。今度、タルニアを紹介してあげる)

「やった！」

「別に喜ぶようなもんちゃうぞ……」

呆れ顔のお兄ちゃんと、にやけ顔の望。

…望、怖い。

(ねえ)。ボクと契約しようよ)

「遊びちゃうねんぞ。そんなこと許せるか」

(むう……。ケチ)

「ああ。ケチさでは古今無双やわいな」

(ふんだ。兄ちゃんなんて嫌い！)

…何なんだろ。

ホントの兄弟みたいな気がして。

(ね、ね。ルウエがうんって言うてくれれば、兄ちゃんなんて関係ないからさ)

「でも、ケイヤクってよく分かんない……」

(えっとねえ……)

「ルウエ！」

(うっ……)

「契約者は聖獣に魂を。聖獣は契約者に永遠の守護を。つまり、聖獣に魂をあげる代わりに、ずっと傍にいてももらえるってこと」

「た、魂をあげる……？」

「はあ……。望も余計なこと言うなや……」

「それくらい教えたって良いじゃないですか」

「ねえ…魂をあげるって…？」

（比喻だよ。ホントは、聖獣の依り代となるものを用意してもらった。ただし、本当に大切なものでないとダメ）

「本当に大切なもの…」

うん、あれなんだぞ。

袋の中を漁って、目的のものを探す。

「あつた」

（ん？契約、してくれるの？）

「うん」

「ルウエ！？」

（ふふふ。ボクの勝ちい）

「いつ、またあの影に襲われるか分かりませんが、二人とも良いつて言ってるし。何か、不満があるんですか？」

「ぐっ…」

「どうすれば良いの？」

（魂をしっかりと握って、目を瞑って）

「うん…」

言われた通りに目を瞑る。

もちろん、真っ暗で。

でも、しばらくすると急にまぶたの裏が明るくなって。

（はい、目を開けて）

「うん…」

目を開けると、周りは綺麗な夜空だった。

…どう？

「ルウエ」

「え？」

「こんばんは、ルウエ」

「だ、誰？」

「ボクはルイムナ。よろしくね」

「よ、よろしく……」

そこにいたのは、綺麗な女の人だった。

本当に、綺麗な……。

「ルウエは光の要素が強いよね。でも、他の要素がないわけではな
い」

「……？」

「これから大変だと思うけど、この子が守ってくれるから。いつで
も呼び出してあげてね。この子、すごく寂しがり屋さんなの」

（ル、ルイムナさま……）

「ふふふ。…じゃあ、大切なもの、見せてくれる？」

「うん」

手を開いて、銀貨を見せる。

セトから貰った、大切なお金。

「ゆっくり、目を瞑って」

「うん」

また真つ暗な世界。

でも、さっきとは違って、何か温かかった。

これが、契約……なの……か……な……。

「ルウエ…起きないですね」

「心配いらんゆうてるやろ…。契約にはいろんな負荷が掛かるから、ゆうたら疲労困憊して眠りこけてるんと一緒やて」

「でも…」

「はあ…。あのアホは、ホンマに後先考えんで…。ルイムナも止めたらええのによお…」

そんな会話が聞こえた。

でも、目を開ける気力もなかった。

明日香の背中に揺られて…

また夜空の世界。

でも、ルイムナはいなくて。

(こんばんは、ルウエ)

「こんばんは…」

(ごめんね。無理させちゃって)

「ううん…」

(慣れるまで辛いだろうけど…頑張ってるね)

「うん…」

(……………。ボクと、約束…してくれる?)

「何を…?」

(…闇に触れないで)

「……………」

(光…ルウエの中に、闇が見えた。光と闇は相容れない存在。絶対に、触れちゃダメ)

「それは…無理なんだぞ…」

(なんで…!)

「ルウエ、やめなさい」

(うん…)

「ルイムナ…」

「目覚めて。望が心配してるよ」

「うん…」

「…光があるところには、必ず闇もある。たしかに、ふたつは相容れない存在だけど、あなたたちが変えてくれるのかもしれない。だから、自分の信じる道を進んで」

「うん…」

(ルウエ…)

狼の姉さまとルイムナとの約束…。

自分の信じる道を、真っ直ぐ前に進む…。

約束…

目を開けると、明日香の背中が見えた。

「あ、起きた」

「え？」

「おはよう」

「おはよ…」

「ルウエ！良かったあ。大丈夫？」

「うん…。でも、ちょっとしんどい…」

身体が…動かない。

声は出るけど。

「明日香に乗せてもらったならええわ。昼にはヤクウルに着く思うし」
「ワウ」
「うん…ありがとう…」

明日香はチラリとこっちを見て、また前を向いた。

(ところで…)「おわっ!」「ひゃう!」
(なにさ。二人ともびっくりしすぎじゃない?)
「いきなり出てくんない!このアホ!」
(アホって何さ!)
「アホはアホじゃ、アホ!」
(いったあ〜!)

お兄ちゃんは、ルウエの頭を思いっきり叩く。
ルウエはしばらく目を回して。

「…で、どうしたの?」
(はうう…。頭が痛い…)
「だ、大丈夫?」
(うん…ありがとう…)
「それで、何?」
(あ、うん。えっとね、うーんと…忘れた)
「帰れ!」
(に、兄ちゃんが悪いんだからね!)
「やかましいわ!」
「まあまあ…」

望が間に入って、喧嘩を止める。
…もうちよっと見たかったかな。

(ふぁ…あふう…。まあいいかぁ…。なんか眠たくなってきたし…)
「用件、思い出してから帰れよ」

(おやすみ…)

「おい！」

そして、そのままルウエは消えてしまった。

「ホンマにあいつは…」

「あなたと喧嘩して疲れたんじゃないですか？」

「そんなヤワちゃうて。契約であいつも消耗してるからやる」

「そうなんですか？」

「ああ。マ、ナク。北の言葉で生命共同体ゆう意味らしいねんけどな。聖獣と契約者はマ、ナクになるねんてさ。オレはよう分からんけど。師匠は、聖獣と契約者の生命が融合するときに莫大な力を使うとかゆうてたかな…」

「ふうん。師匠がいたんですね」

「食いつくとこ、そこかい！」

「他に食いつくところ、ありましたか？」

「はぁ…。まあええわ。召喚師ゆうんわな、いわば一見さんお断りや。紹介がないと、聖獣と契約出来るどころか、会いも出来ん。まあ、自分らは運が良かったつちゅーこつちゅ」

「へえ〜。知らなかつたです」

「召喚師に憧れてたんちゃうんかい」

「はい。でも、噂に聞くばかりで…」

「まあ、数は少ないな」

「運が良かったんだなあ」

「へへっ、オレを雇って正解やったやろ」

「…まあ、そこだけは評価してあげます」

「なんや、素直やないなあ」

「ふん」

望はそっぽを向いて。
ホント、素直じゃないんだぞ。

「あいつも無理してたんかなあ…」

「心配になりました？」

「まあな。兄妹みたいなもんやし」

「兄弟…」

「へへ、あいつの方が歳上やねんけどな」

「へえ〜。何歳くらいなんですか？」

「さあなあ。あいつは百二十とかゆうてたかな」

「百二十!？」

「まあ、あいつらの十歳がオレらの一歳くらいやから、人間の歳に換算したら十二歳くらいやろうな。たぶん」

「ああ、それなら分かるかも」

「それでも、オレらの何倍も生きとる。何倍も、出会いと別れを繰り返してる…」

「あ…」

出会いと別れ。

同じ時間を生きられないから。

同じ時間を生きられても。

必ず訪れる瞬間。

「でもな、オレらがしんみりしてもしゃーない。出来るなら、一緒に未来を見てやりたいところやけど、それは無理やろうから。だから、あいつが今を楽しく生きてくれるんやったら、オレはなんでもしたる。可愛い妹のためやからな」

「自分も…なんだぞ…」

「ふふ、私も」

でも、ルウエには内緒。
その方が楽しめるよね。

「そういえば、今、妹って言いました？」

「ん？ゆうたけど？」

「…あの子って女の子だったんですか？」

「んー、知らん」

「ええっ!？」

「ええやん、別に。あいつが男やとしても女やとしても、それで、あいつへの対応が変わるわけやないんやろ？」

「そうですけど…」

「そんな気になるんやったら聞けよ」

「ええ〜…。そんなこと聞けないですよ…」

「ほな、オレが聞いたる」

「…やっぱり私が聞きます」

「ほうか？」

「あなたは本当にズケズケ聞きそうですから」

「あいつに遠慮してどないすんねん」

「親しき仲にも礼儀あり。特に、そんな繊細な話なら尚更です」

「…ほうか」

ルウエは男の子なの？女の子なの？

（ボクはね…）

…ふふ、そうなんだ。

（兄ちゃんと望には内緒ね）

うん、分かってる。

「どうしたの？」

「なんでもないんだぞ」
「そう…?」

マ、ナク。

生命共同体。

(いつでも一緒にいるからね、ルウエ)
うん。

いつまでも一緒だよ。

16 (後書き)

ルウエ (聖獣) の性別やいかに。

ていつか、公開する日は来るのでしょうか。

山を下りてすぐのところ、街があった。
ここがヤクウルなのかな。

「まずは宿やな」

「そうですね。ルウエもまだ動けないみたいですし」

「うう…ごめんなさい…」

「何謝ってんねん。謝ったことに謝ってほしいわ」

「…ごめんなさい」

「よっしゃ、許したろ」

「ふふふ。じゃあ、行きましようか」

「ワウ」

まだ歩けないけど、身体を起こすことは出来る。

周りを見てみると、普通の家に混じって、いろいろなお店が並んでいた。

「軒店やな。家に店が付いてんねん。いや、店に家か？」

「ふうん」

「ユールオは、軒店と店専用が半々くらいやけどな。ここでは全部軒店や」

「へえ」

あ、お菓子だ。
美味しそう…。

「こうたるか？」

「光太郎？」

「人名かつ！ちゃうちゃう。買ったろかってゆつてんねん」
「良いの？」

「ああ。な、望もええやる？」

「仕方ないですね……」

「よっしゃ」

そして、お兄ちゃんはお店の方に向かっていく。
なぜか、明日香も付いていつて。

「誰かいやはりますか？」

「はいはい。お客さまですか？」

「お菓子欲しいんですけど」

「どれにしましょうか？」

「せやな……。お薦めは？」

「これですかね」

お姉ちゃんが指したのは、黒くて四角いお菓子。
何かな……。あれ……。

「いくらですか」

「一本二百円になります」

「二百円か……。ルウエはどれがええ？」

「うーん……」

「ふふ、可愛い弟さんですね」

「妹や」

「えっ。ホント？」

「うん」

「……ごめんね。あ、そつだ。お詫びに、キミが一番気に入ったお菓子、一袋あげるわ」

「ホント？」

「うん。どれがいい？」
「えっとね……」

いろいろなお菓子があって、選べないんだぞ。
うーん……

「この丸い飴が良い」

「ダウルね。ふふ、いっぱい詰めてあげるからね」

「ありがとう」

「はい、どうぞ」

「良かったな、ルウエ」

「うん！」

「ほんでや。オレは、やっぱりさっきの貰っわ。二本。ほい、四百
円」

「ありがとうございます。どうぞ、またご来店に」

「はいよ」

飴で、はち切れそうな袋を持って。

優しいお姉ちゃんに手を振って、お店をあとにする。

「あ、何買ってもらったの？」

「これ、貰った」

「貰った？」

「うん。お詫びだって」

「何の？」

「間違えたお詫び」

「ああ……」

「ルウエの買い物術はすごいな。感心したわ」

「買い物術ではないような……。それに、わざと明日香に付いてくる
ように合図したでしょ」

「ええねん。細かいことは。それより、宿や」
「そうですね。組合の宿は…」
「ああ、組合よりええとこ知ってるから」
「そうですね。じゃあ、そこにしましゅうか」
「……………」
「どうしたんですか？」
「いや、突っ掛からんなあ思て」
「…突っ掛かってほしいんですか？」
「いいえ。そのままでもいいします」

……………？

どういうこと？

お兄ちゃんはそのまま歩きだす。

望は追いかけるように。

明日香も付いていき。

「どこなんですか？」
「行ってからのお楽しみや」
「その羊羹と関係があるんですか？」
「まあな。てか、よう分かったな」
「羊羹の匂いがしますから」
「ええ…するかあ？」
「しますよ」

自分には分からないんだぞ。

望の鼻って良いんだな。

…それより、あの黒いのはヨウカンって名前なのか。
美味しいのかな…。

着いた場所は、街の外れの古い建物。
…何なのかな。

「お寺ですか？」

「昔はな」

「え？」

「あ！お兄ちゃん！」

「お兄ちゃんが帰ってきた！」

「よう。お前ら、元気にしとったか？」

「うん！」

「お姉ちゃんたち、誰？」

「私は望。この子がルウエ。こっちは明日香」

「こんにちは」

「こんにちは！」「あすか」

「これ、お菓子？」

「相変わらず単刀直入やな、お前は。…ほれ、羊羹や。昼ごはんのあとに一緒に食べよか」

「うん！」

「あの…。こっつて、もしかして…」

「ああ。孤児院や。昔は和尚さんもいたらしいねんけどな」

「おおう。戻ってたのか」

「久しぶりやな」

みんなの騒ぎを聞きつけて裏から出てきたのは、大きなおじさん。髪もヒゲもボサボサだけど、優しさが身体全体から滲み出していた。

「お？可愛い子、連れてるな。お前の嫁か？」

「ち、違います！」

「はっはっ、そりゃそうか！こんな醜男、誰も欲しがらんよな！」

「大丈夫や。親父が嫁を貰えるくらいやねんから」

「俺はなあ……」

「分かってる分かってる。それより、今日、ここに泊まらしてもらうで」

「おう。いくらでも泊まっけて」

「お世話になります」

「こりやまたご丁寧に」

「ルウエ、遊ぼ〜」

「こらこら。先に昼ごはんだ。手を洗ってこい」

「はあい」「むう……」

みんな、家の裏へと走っていった。

裏に手洗い場があるのかな。

自分も……

「嬢ちゃん、ちょっと待ってくれ」

「……？」

「契約者か……。紹介したのはお前か？」

「成り行きだな。ていうか、あいつが勝手にルウエを引き込みよってん」

「ほう。珍しいこともあるもんだな。まあとにかく、お前が仲介者なら良いだろ」

「どういうことですか？」

「朝もゆうたけど、オレには師匠がおんねん。それが、この親父」

「ええっ！？あなたも召喚師なんですか！？」

「まあな。でも、契約者ではない。斡旋をするんだ」

「斡旋……？」

「そうだ。まあ、長くなるし、昼ごはんを食いながらゆっくり話そう」

「お昼ごはん！」

やっと来た、この時間。

お腹ペコペコなんだぞ！

明日香を急かして、家の裏へと向かった。

「たくさん食べなよ。いっぱいあるから」

「はい、ありがとございます」

「幹旋というのはな、つまり……」

「親父は話長いねん。おんなじことばっかりゆうし」

「お前らが話の腰を折るからだろう。あー、で、どこまで喋ったかな」

「なんも喋つとらんわ!」

「あー、じゃあ、最初から……」

「もうええっちゅーねん!」

分かったことは、おじさんは話を進めるのが下手だということ。

おばさんの料理はとても美味しいということ。

そして、召喚師の話になると、みんなすごく真剣になるとということ。

「幹旋型の召喚師というのは、契約者としての適性はないけれども、”召致”によつて聖獣を呼べる人たちのことです」

「え?」

「聖獣たちは、自分に合わない属性の人間とはマ、ナクを形成出来ません。だから……」

「陽平」

「あ……失礼しました……。一人で喋ってしまつて……」

「陽平くん、詳しいんだね」

「はい!父上や兄上のような、立派な幹旋者になるのが夢なんです!」

「へえ〜」

「あっせんしゃ〜」

「まあ、まずはその理屈っぽさを直さなあかな。あいつらに嫌わ

れるで」
「うっ…」

ルウエは、理屈っぽい人は嫌いなのかな。

（嫌いじゃないけど、いつもそうならイヤかな）
あ、起きてたんだ。

（ふぁ…。まだ眠い…）

自分は、もう大丈夫みただけど。

（良かったぁ…。でも、ボクはもう一眠りするね…）
うん、おやすみ。

「ルウエ」

「え？」

「ルウエは、けいやくしゃ、なの？」

「うん。たぶん」

「へえ」

「おお、そつだ。聖獣から契りの証人は貰ったのか？」

「……？」

「なんだ、まだ貰ってないのか」

「うん」

「まあ、あとで貰うといい」

「うん。分かった」

チギリノシヨウニン？

何なのかな。

美味しいのかな。

「それで、斡旋者って結局何なんですか？」

「適性のある人と聖獣を結びつける人です。昔は誰でも、その身に聖獣を宿していたと言われています。でも、今、契約型の召喚師は

ほとんどいません。適性のない人が増えてしまったのが…」

「まあ、つまり、オレらは本来あるべき繋がりを出来るだけ復興させようとしてんねんな」

「むう…」

「そういえば、召致をするとき、契約がどうとか言っていましたよね。でも、幹旋者は適性がないから契約出来ないって…」

「ああ。あんなもん適当や。毎回ゆつてること違うと思うで」

「兄上は、格好付けたいだけです」

「お前なあ…」

「格好付け…。それと、適性があるとかないとかは、どうやって見分けるんですか？」

「企業秘密や」

「：“聖獣の目”を使って、対象者を見るんです」

「おいおい、喋んなや」

「聖獣の目？」

「あいつもゆつてた通り、望は適性があるから知らんでもええ」

「そう言われると、余計に気になります」

「はあ…。見てみい…。ややこしなるやろ…」

「ふふふ。あんたと陽平を足して二で割ったらちよつど良くなるのにねえ」

「はっはっ、確かに」

お腹を抱えて笑うおじさん。

…お兄ちゃんと陽平を足して二で割るってどういことなんだろう？
陽平は、なぜだか少し不満そうな顔をしていて。

「ごちそうさまっ！ルウエ！外に行こうぜ！」

「え、あ、ちよつと待って」

「早く、早く！」

「祐輔、急かさないの」

「はあい…」

「ルウエ、気にしないでゆっくり食べな」
「うん」

ほとんど残っていない肉じゃがをさらって、最後のご飯を掻き込む。

「ごちそうさまでした」

「よし、遊んどいで」

「夏月も」

「夕飯までには帰ってくるんだよ」

「はあい」「わかった」

「行ってきます」

「行ってらっしゃい」

祐輔と夏月と一緒に外へ。

何して遊ぶのかな。

楽しみなんだぞ！

森の中を掻き分けて着いた先にあったのは、大きな木。

「俺たちの秘密基地だ」

「ひみつきち」

そう言って、二人はこちらに向き直る。

「ルウエを、ヤクウル特殊部隊の隊員として認める！」

「みとめる！」

「これが隊員証だ！」

「たいいんしょう！」

「あ、ありがとう」

渡されたのは、動物の骨を削って作られた首飾り。平たくされた表側には、鷹の記号が彫ってあつて

「へへっ。大切にしてくれよな」

「よな」

「うん！大切にするんだぞ！」

「よし。じゃあ、今から秘密基地を案内する」

「あんない！」

クルリと後ろを振り返り、二人はそのまま木を登っていく。の、登るの…？

「ルウエ、はやく〜」

「う、うん…」

「どうした？」

「うう…」

高いところが怖い…なんて言えないよ…。でも…。

そんなことを考えていると、祐輔が下りてきて。耳の傍でヒソヒソ話をする。

「もしかして、高いところ、怖いのか？」

「う、うん…」

「そうか。じゃあ、その隊員証を握って」

「……………」

「おにいちゃん、夏月、さきにいってるね〜」

「ああ。みんなにルウエのことも話しておいてくれ」

「わかった」

スルスルと登っていく夏月。
なんか、恥ずかしいんだぞ…。
登れない自分が…。

「大丈夫。俺も、高所恐怖症だったんだ。でも今は、どこまでだって登れる」

「うん…」

「隊員証を握って、目を瞑るんだ」

「……………」

「ゆっくり思い浮かべて。ヤクウルの象徴であり、空の覇者である鷹を」

力強い羽ばたきに、鋭い眼光。
大きく翼を広げて空を舞う鷹の姿。
突き抜ける蒼は、どこまでも澄んでいて。

「空を飛んでる」

「うん」

「地面は遥か下だけど、怖いかな？」

「ううん」

「ルウエも飛べるんだ。鷹と同じように」

「…うん」

「よし。目を開けて」

言われる通りに目を開ける。

すると、祐輔の真剣な顔がすぐ目の前にあって。

「……………」

「行ける？」

「う、うん」

「へへっ。じゃあ、行くうか」

「うん！」

不思議な感じだった。

葛葉のときと同じような、でも違うような。

何なのかな…。

このかんじは。

18 (後書き)

それはきっと…何なんでしょうか？

大丈夫とは言ったものの、やっぱり怖くて。

足がすくんでしまい、途中にあった大きな枝から動けなくなってしまうた。

「うん……」

「ダメか？」

「う、うん……」

「へへっ、でも頑張ったじゃん。俺なんか、最初、ここの半分も登れなかったぜ」

そう言いながら、頭を撫でてくれた。

乱暴だったけど、なぜかそれが気持ち良くて。

「よし、行くぞ」

「え？」

「おんぶ。一気に行くから、しっかり掴まっといてくれよ」

「うん……」

「一気に……？」

よく分からないけど、祐輔の背中に乗って、しっかりと手を回す。

「ひくほ」

「うん……」

「ひっかいうかあって」

祐輔は、いつの間にか靴を脱いで口にくわえていた。

そして、木の幹に確かめるように手をあてると

「わあっ！」

爪を引つ掛けて、ものすごい速さで登っていく。

ほとんど真上に登っているのに、祐輔は何の苦もないようだった。

…下を見れば、地面はどんどん遠ざかっているんだけど。

でも、怖さはなかった。

今、鷹になれてるのかな…。

「はっ、はっ」

「大丈夫？」

「へへっ」

そう笑い、大きく跳ぶ。

でも自分は、びっくりして思わず腕を絞めてしまった。

「く、苦しいよ…」

「あ…ごめん…」

「へへっ、着いたぜ」

「「ようこそ！我らの秘密基地へ！」」

「え…？あ、うん」

辿り着いた先は。

大木の上というより、ひとつの街。

太い枝には家が建ち、細い枝にも枝から枝への橋が掛けられて。

幹の周り…今立っているここは、広場のようになっていた。

「すごいだろ」

「うん！」

「隊長！新しい隊員ってというのは、その子でありますか？」

「おう。ルウエだ」
「全員集合〜！集合〜！」

号令が掛かると、四方からたくさん集まってくる。
何人いるのかな…。

「来てないのは？」

「八百屋の兄弟が三人とも風邪。雄作が家の都合で。あとは、陽平と龍次が来てないよ」

「お兄ちゃんが帰ってきたから、龍次は来ないかな。陽平は分からない」

「うん。他は全員いると思うよ」

「よし。それでは、新しい仲間を紹介する！ルウエだ！」

「よ、よろしく…なんだぞ…」

「よろしく！」「男の子？」「祐輔の恋人？」

「静粛に、静粛に」

「……………」

「ルウエは、お兄ちゃんと、あと、望お姉ちゃんと旅してるんだ
ぜ」

「おお〜」「望お姉ちゃん？」「お兄ちゃんと旅してるのか〜」

「しかも！しかもだ！なんと、契約者だ！」

「ええっ!？」「わあ〜」「すごいね！」

「新しい仲間を歓迎するために！」

「」「枝跳び！」「」

「枝跳び…?」

何なのかな…。

枝を…跳ぶのかな…。

規則は簡単。

地面に付かないように”当たり”から逃げる。

”当たり”に捕まったら、広場に戻って待機。

五人捕まったら”当たり”の交代。

それだけ。

「みんな、”風”は持ったか？」

「持ってるよ」「うん」

「それは非常用だ。使わなくてもいいように、気を付けるよ」

「はい」「分かってるよ」

「最初の”当たり”は、俺、夏月、友樹、龍兵、そして、ルウエだ」

「頑張つてね!」「簡単には捕まらないんだかな!」

「”当たり”は必ず鉢巻きを着けること。鉢巻きをしてなかったら、捕まえても無効だ」

「早くやるうよ!」「まだなの?」

「基本の確認は、何に於いても大切だ。じゃあ、最後に……」

「みんな楽しんで!」

「精一杯遊ぼうぜ!」

「そういうことだ。よし、始め!」

掛け声と共に、みんな散り散りになる。

上に行ったり、下に行ったり。

あらゆる方向へ。

「”当たり”のコツは、バラバラにならず五人で確実に一人一人捕まえていくこと。逆に、”当たり”から逃げるときは囲まれないようにすること」

「うん」

「夏月、がんばるね!」

「夏月ちゃんは、一人でだって捕まえてくるからなあ。僕たちの出

番があるかどうか」

「えへへ」

「へへっ、夏月に負けないように、俺たちも頑張ろうぜ」

「隊長！言われるまでもないであります！」

「よし、もうそろそろだな。見つけたら合図をすること。合図を受けたら、すぐに集まること。分かってるよな」

「わかってる〜」「よっしゃーっ！」

「うん。じゃあ、追跡開始だ！」

夏月は上へ、友樹は右隣の木へ、そして、龍兵は後ろの木へ。それぞれ散っていった。

「一緒に来るか？」

「う、うん……」

「へへっ。そのうち慣れるよ。高いところも、結構楽しいもんだぜ」
「…うん」

祐輔にそう言われると、本当にそう思えてくる。

目の眩むような高い高い木の上でも、祐輔と一緒になら大丈夫だった。

「よし、行こうか」

「うん！」

枝跳び。

楽しい時間の始まりなんだぞ！

「夏月！右！」

「よつと」

「うっ……」

「龍兵！下りた！」

「了解！」

「くそっ……！」

「回れ回れ！」

「逃がさないよお」

「はっ……はっ……」

「行つたぞ！」

「やあ！」

「うわあ！」

「捕まえたんだぞ！」

「よっしやあ！」

これで五人目。

”当たり”の交代なんだぞ。

「広場に戻ろう」

「こつたい」

「もう五人捕まえたのかよ……」

「へへっ、余裕だぜ」

「よゆう」

「はあ……。そんなかんじはしてたんだよな……」

「連携の勝利だね」

「おう！」

連携。

みんなと協力して捕まえたんだ。
そう思うと、なんだか嬉しくて。

「あ、わらってる」

「うん！」

「へへっ」「ふふふ」

みんな楽しく笑顔で。

それが一番だよね！

「おい。捕まったか？」

「おう」

「じゃあ、交代だね」

「鉢巻きを」

「うん」

髪紐の代わりにしていた鉢巻きをほどいて、次の”当たり”に渡す。

「んー」

「……？」

「へへっ。結ばない方が、やっぱり可愛いなって思ってたさ」

「か、可愛い……」

「おう。俺は、結ばない方が好きだぜ」

「……！」

こ、これからは、絶対に結ばないんだぞ！
自分との約束！

「準備良いな」

「うん」「いいよ」
「よし、交代だ！」

みんな、一瞬でどこかへ散っていく。
自分も早く…

「ルウエ、一人で大丈夫か？」
「うん。大丈夫になってきたみたい」
「へへっ、そりゃ良かった。じゃあ、お互いに頑張ろうぜ」
「うん！」

そして、祐輔は幹を伝って上へ。
…自分は下に行こうかな。
うん、それが良い。

「ルウエ、頑張ってたね」
「うん。ありがとう」
「初心者だからといって、手は抜かないから」
「望むところなんだぞ」
「行ってらっしゃい」
「行ってきます！」

幹に絡み付いた鳶を頼りに下へ。
うう……やっぱり怖い…。
鷹…鷹になるんだぞ…。

途中の太い枝のところにあった、大きな穴の一番奥でうずくまっ
ていると

「誰かいないかな」

誰かの声が近付いてきた。
ここにいたら捕まる…！

音や声を頼りに、その誰かが木の裏に回ったときを狙って穴から飛び出す。

とにかく、前へ進む。

もちろん枝は細くなっていて。

「あつ！ルウエ、めづけた！」

「うう」

あの枝に…。

と、跳べるかな…。

ううん…跳べるんだぞ…！

”当たり”のときは出来たんだもん！

祐輔もいたけど…。

「やあつ！」

意を決して、隣の木の枝に跳び移る。

距離は短くて、ほとんど跨ぐくらいだったんだけど。

「あつ！ルウエ！」

「え…？」

気付いたときには、元いた枝は遙か遠くにあつて。

気持ちの悪い浮遊感と、景色が流れていってるのを見て、落ちてるんだと分かった。

「……………！」
「風”！ルウエ、”風”！」

ない。

ないんだぞ。

”風”が。

”風”…！

「はあっ！」

「……………！」

何が起きたのか、一瞬分からなかった。
でも、次の瞬間、目の前にいたのは…

「祐輔！」

「……………！」

枝のひとつに着地し、ゆっくりと下ろしてくれて。

「大丈夫か？」

「う、うん」

「良かったあ」

そう言って、優しく抱き締めてくれる。

祐輔はとても温かくて。

でも、自分をもっと火照っているのが分かった。
嬉しいのと恥ずかしいのと、あと…

「うっ…うっ…怖かった…」

「うん。ごめんな」

「うう…うええ…」

「大丈夫。今は俺がついてるから」

「うん…うん…」

強く、強く。

この震えが消えるまで。

結局、祐輔と一緒に行動することになった。

「ほら。こっちに来てみな」

「うう…」

「大丈夫。怖くないから」

「うん…」

思い切って、祐輔のいる枝に跳ぶ。
着地の直前、さっきの記憶が蘇る。

「よつと」

「はあ…はあ…」

「へへっ、頑張ったな」

「うん…！」

でも、その記憶は、祐輔の乱暴な撫で方に掻き消されて。

「よし、次に行こう」

「うん…！」

次第に、ひとつの恐怖はたくさんの楽しさ、嬉しさに埋もれていく。
で。

「…ごめんな」

「何が？」

「まだ高いところが怖いってことに気付いてあげられなくて…」

「うっん。あのときは、本当に怖いって思ってたんだ」

「なんで？」

「…ふふ、内緒なんだぞ」

「ええ…気になるなあ…」

「ふふふ」

やっぱりそう。

祐輔がいるから、怖くないんだ。

高いところも、枝を跳び移るのも。

なんでなのかな。

祐輔といると、優しい気持ちになれる。

ほんわり温かい。

「ん？どうした？」

「えへへ、なんでもないんだぞ」

「へへっ、そうか」

何か分からないけど、嬉しいから。

その嬉しさを祐輔と一緒に感じていたいから。

だから、抱き締めた。

「よし。全員、怪我はないな」

「ないよ」「うん」「ルウエは危なかったけどね」

「どういうこと?」

「ツルゴケで滑って落ちたんだよ」

「ええっ!?!」

「でも、祐輔が助けてくれたの。こう…パツパツやあとう!って」

「へえ」。説明はよく分かんないけど」

「静粛に、静粛に」

「……………」

「とにかく、みんな無事で良かった。初心者がこういう事故に遭うのはそうなんだけど、慣れてきて油断してるときが一番危ない。これからも枝跳びはやるだろうけど、細心の注意を払ってくれ。みんなが哀しい思いをしないように」

「……はあい」「……」

「よし。じゃあ……」

「今日は楽しかったかーっ?」

「……おおーっ!」「……」

「へへっ。明日も楽しく遊ぼうぜ!お疲れさま!またな!」

「またね」」「また明日」「じゃあね」

そして、みんな、帰っていく。

いろんなことを思いながら。

でも、誰もが笑顔で。

「夏月はどうだった?」

「いっつかいも、つかまらなかったよ」

「へへっ、やったな!」

「うん！」

夏月の頭を撫でる祐輔。

すると、夏月は嬉しそうに飛び付いて。

「よし。じゃあ、帰ろうか」

「うん！」

自分たちも、やっぱり笑顔だった。

…怖かったときもあったけど、でも、それ以上に楽しかったから。だから、本当に、心の底からの、笑顔だった。

街のあちこちから良い匂いがしていた。

それが、お腹に響いて。

「へへっ。腹、減ったな」

「夏月ね、きょうなら、ごはん、さんばいたべられそうだよ」

「いつもは何杯なの？」

「ゆうはんは、いっぱいだよ。あさとひるで、あわせていっぱい」

「夏月、あんまり食べないんだよ。俺は食べ過ぎだって、陽平に怒られるんだけどな」

「へえ」

そういえば、お昼ごはんのとき、夏月だけ小さなお椀だったっけ。

葛葉のは、お椀というか、ほとんどドンブリだったけど。

それで十杯くらい食べてたもんなあ。

一食で。

「ん？」

「どうしたの？」

「いや、うん」

「……？」

何なんだろ。

祐輔も何か分からないといったように首を傾げて、また歩き出す。

「へへっ。家まで競争しようぜ。じゃあ、ヨーイドンー！」

「あ、ずるい！」「まってー」

いきなり競争って！

しかも、号令も突然だし！

…でも、祐輔は何かから逃げようとしているようにも見えた。

本当に、どうしたんだろ…？

夏月はきつちり三杯のご飯を食べて、おかずもたくさん食べていた。

「よく食べるねえ、今日の夏月は」

「うんー！」

「うちそうさま…」

「逆に祐輔が食べてない」

「うん…」

「調子悪いんか？」

「そんなことないよ…」

そう言って、部屋から出ていく。

競争のときから、やっぱりおかしかった。

家に着いてからは、さらに疲れたような感じで。

「祐輔、どうしたの？ 昼はすごく元気だったよね。外で何かあったの？」

「うん。でも、帰る途中から変だったかな…」

「ふうん」

「ごっそさん。ちょっと祐輔見てくるわ」

「おう。よろしくな」

そして、お兄ちゃんも部屋を出ていった。

「ふう…。祐輔が暗いと、みんな暗くなってしまいましたね…」

「夏月は？？」

「はは、夏月はいつでも明るいな」

「うん！」

「夏月も暗くなったら、この家自体が潰れてしまっわな」

「ん〜」

おじさんは、夏月の頭をガシガシと撫でて。

夏月は気持ち良さそうに目を細める。

「ごちそうさま、なんだぞ」

「ああ、もう良いのかい？」

「うん！ 美味しかった！」

「そりゃ、作った甲斐があったってものだ」

おばさんはニッコリと笑って。

「自分も、祐輔の様子、見に行つて良い？」

「よろしく頼むよ。祐輔の部屋は、部屋を出て右へ行つて、突き当たりの部屋だ」

「うん、分かった」

「ルウエと望の部屋は、祐輔の部屋の右だよ」
「うん」

みんなに軽く手を振って部屋を出る。

えっと、右、だったよね。

右を向いて歩き始める。

真っ直ぐと伸びた廊下は、どこまでも続くように見えた。
…進むにつれて、どんどん暗くなってるような気がして。
何か怖くなったので、少し小走りで向かう。

(怖い?)

「うん…」

(ボクがいるから大丈夫だよ)

「うん…」

ルウエが出てきて、周りを照らしてくれた。

長いように思った廊下も、実際はほんの少しの距離で。

すぐ前に祐輔の部屋が見えた。

(あっ…)

「……………」

(気を付けて)

「何に?」

(闇…!)

次の瞬間、後ろに強く引かれる。

そして、目の前を黒い何かが通り過ぎていった。

「えっ…?」

「ウウ…」

「明日香？」

腰紐を引いたのは明日香。

黒い何かの直撃から助けてくれたみたい。

(ウウ…)

「わっ!？」

ルウエが強い光を放つ。

すると、突き当たりで両手に分かれた廊下の先にいた”影”は、跡形もなく消えた。

(部屋の中!)

「う、うん…」

「ウウ…」

戸に手を掛け、勢いよく開けた。

そして、部屋の中にいたのは…

「お兄ちゃん！」

「はあ…はあ…。情けないわあ…」

「え？」

(ルウエ!)

お兄ちゃんの形が崩れて、代わりに黒い何か…闇が溢れてきて。考える間もなく、呑み込まれてしまった。

真っ暗闇。

何も見えない。

目を開けているのか開けていないのかも分からない。

「ルウエ……」

「……………」

そして、聞こえたのは祐輔の声。

手を伸ばせば届く場所にいるけど、どこにいるか分からない。

「ごめんな……」

「ううん」

「俺、ダメだったよ……。闇に負けた……」

「負けた？」

「光を消し去れ……闇の世界を創造しろ……」

「……………」

光と闇は相容れないもの。

ヤーリエもルウエもルイムナも言っていた。

「俺は今……ルウエを苦しめている……」

「全然苦ししくないんだぞ」

「でも……」

苦しくない。

だって……

「光があるから闇がある。闇がなければ光はない。ふたつは相反するものではない。ふたつでひとつ。表と裏の関係」

「……………」

「だから、苦しくない。祐輔も、苦しまないで」

闇が割れて、目の前が明るくなった。

そして、そこには祐輔がいて。

「ルウエ……」

「祐輔の闇。自分の光。ふたりで半分こしたら、ちょうど良い」

「うん……」

「白と黒を混ぜたら何色？」

「灰色……？」

「ううん。玉虫色だよ。どんな色にだってなれる」

「……………」

「だから、笑って？みんな、哀しんでるから」

「へへっ、分かってるって！」

「うん」

「…ありがとうな、ルウエ」

「うん。…祐輔、大好きだよ」

「へへ、俺も」

強く抱き締める。

強く、強く。

目が覚めると、もうそこは闇の中ではなかった。

（ルウエ！良かった…良かった…！）

「痛いよ、ルウエ」

（あ…ごめん…）

「お兄ちゃんと祐輔は？」

「オレはここにいる。祐輔はぐっすり眠っとるわ」

「そう……」

（でも、なんで兄ちゃんがやられてたのさ）

「いや、はは。情けないことに、召致のときの文句が思い浮かば

んかってん。ありやあ…歳かなあ…なんて考えてるうちに、やられてしても…」

(はあっ!?!なんで素直に召致をしないのさ!)

「あー、なんてゆうの?習慣?意地?」

(そんなもの、ボクがボロボロに噛み砕いてあげるよ!)

「おまつ!痛い、痛いて!本気で噛んどるやろ、それ!」

(ウウ…)

「くっ…ふふふ」

「笑ってやんと助けるーっ!」

でも、ホントに面白いんだもん。

もうしばらく、見てようかな。

布団に入って、明日香の頬を伸ばしたりして遊んでいると

「ふあ…あふう…。あ、まだ起きてたんだあ…」

「うん。でも、今寝ようかと思ってたところ」

「そう…。私も寝るね…」

「うん。おやすみなさい」

「お休みい…」

布団に入ると、望はすぐに眠ってしまった。

それを見ていると、自分も眠たくなってきて。

…目を瞑ると、また闇が広がる。

でも、この闇は祐輔の闇。

だから、温かった。

「んう…」

ふふ、望も温かいんだぞ。

「ふぁ…眠…」

「昨日は何かあったのか？」

「んー、祐輔の闇が出てきたくらいかなあ」

「ほう」

おじさんは、聞いた割にはあまり興味がないといった風に、また薪を割り始めた。

「お、そうだ。お前、契りの証人は渡したのか？」

（あ…）

「まったく…」

（ルウエ、ごめんね…）

「チギリノシヨウニンって、何なの？」

（んー。聖獣から契約者にあげる贈り物みたいなものかな）

「アホか。それでもホンマに聖獣かい」

（むう…）

「契りの証人ゆうんは、契約者が聖獣の力を充分に引き出すための道具や。これがなかつても十二分に引き出すやつもあるけどな」

「ふうん」

「まあ、持ってて損はないさ。少々かさばるかもしれんが」

「うん」

チギリノシヨウニン…。
どんなのかな。

「てか、お前、はよ渡せやー！」

（あ。あはは、忘れてた）

「もう医者に行け！」

(ルウエ、手、出して)
「うん」

言われた通り、手を出す。

すると次の瞬間、何かが手のひらの上に現れた。

ちよつと小さめの刀…なのかな。

見た目ほど重くなかった。

(はあ…。疲れた…)

「はっはっ、体力を付けんとなあ」

(また今度ね…)

そう言つて、ルウエは消えてしまった。

…そんなに疲れたのかな。

「さあて、朝ごはんにしようか」

「いよっ！待ってました！」

鉦を置いて、手を叩くお兄ちゃん。

自分も、乗ってた台から飛び降りて。

「朝早うから働かされて、ホンマ腹減ったわ」

「何言つてんだ。ほとんど喋ってばかりだったじゃねえか」

「オレは喋んのが仕事やし」

「はあ…。ホント、喋るしか能がないよな」

「おう。だから、喋んねん」

おじさんは、もう打つ手がないという風に肩をすくめる。

「よっしや。戻る」

「戻る前に手を洗え」

「おお、せやつたせやつた。朝からしつかり働いたからな」

「ふん」

「ほら、ルウエも」

「うん！」

お兄ちゃんの手を握ると、木の屑とかでザラザラしていた。でも、大きくてゴツゴツしてて、気持ち良かった。

夏月はまだ寝ぼけ眼で。
大きな欠伸をしていた。

「ふあ…あふう…」

「もう発つのか？」

「そうですね」

「そう…。残念だねえ…」

「ええっ！もう行くの!？」

「土産、いっぱいこつてきたるから」

「イヤだよ…。兄ちゃん…一緒にいてよ…」

「龍次。お前もいつか分かるときがくるやろうけど、男にはやらんならんとときがあんねん。ほんで、兄ちゃんはな、今がやらんならんとときや」

「うう…」

「な、絶対に帰ってくるから。今は我慢してくれへんか？」

「うん…」

「へへ、龍次は強いな」

お兄ちゃんは、龍次の頭をゆっくりと撫でる。

すると、もう泣きそうだった龍次はいなくて。

「夏月、起きろ。寝るのは食べてからだ」

「んう…」

「夏月！」

夏月はまた夢の世界だった。

しっかりと腰紐を締めなおして。

「ほなな。行ってくるわ」

「おう」「行ってらっしゃい…」

「忘れ物はないかい？」「兄上をよろしくお願いします」

「はい。たぶん、ないです。任せて、陽平」

「へへっ。また来いよな」

「こいよな！」

「うん。また絶対に帰ってくるだぞ」

そして、祐輔を抱き締める。

額をお腹に擦り付けて、お別れの挨拶。

祐輔も、ギュッと抱き締めてくれた。

「あの二人、何かあったのか？」

「さあな」

「いつまで経っても、あんたはニブチンだねえ」

「ニ、ニブチン！？」

「お世話になりました」

「ああ。行ってらっしゃい」

「行ってらっしゃい」「行ってらっしゃい」

「行つてきます！」

また次へ進む。

真つ直ぐ前だけを向いて。

…でも、ここにはまた戻つてきてもいいよね。

みんなが待つててくれているから。

温かい…家族だから。

「よつしゃ。次はヤマトやな」

「はい」

「はあく。また珍しい石、出てへんかなあ」

「石が好きなんですか？」

「まあな。金剛石に石榴石…石英、翡翠、瑠璃…。たまらんわ…。

ああ、金属もええな。金、銀、銅、白金、真鍮、黄鉄鉱…」

「…もういいです」

「ヤマトつて、石が採れるのか？塩は？」

「塩も採れるけど、ヤマトの周りにはたくさん鉱山があつて、いろ

んな鉱物が採れるんだ」

「ふうん…」

コウザン…。

姉さまが前に高山植物つて教えてくれたから、高い山のことなのかな。

ヤマトだし。

うん、きつとそう。

「珍しい石がオレを待つとる…」

「龍次へのお土産も忘れないでくださいね」

「せやなあ…。龍次は猫目石がええやるか…。黒曜石も捨てがたい

…」

「結局、石なんですね…」
「ふうむ…」

お兄ちゃんは、腕を組んで唸り始めた。

石ってそんなに面白いのかな。

道端の石を拾って眺めてみるけど、何も面白くない。

「ふふふ。その石も良いけどね、ヤマトの石はもっとすごいよ」

「え？」

「せやな。ヤマトに着いたら、ルウエが一番好きな石、こつたるわ」

「ええ…」

「ふふふ」

石…を買うの？

すごいって言っても、石だよね…。

大丈夫なのかな…。

22 (後書き)

石…。

良いですねえ。

大好きです。

「昨日もこの森に来たんやろ？」

「うん」

「え？なんで分かったんですか？」

「上、見てみ」

「……？」

街を出て、昨日の森へ入った。

改めて見てみると、ヤウトの森にはないような大きな樹ばかりで、秘密基地の樹なんて、何十人が手を繋げば囲めるんだろっつてくらい大きくて。

「あー…何ですか、あれ？家…？」

「ヤクウルの方は昔、こういう樹の上に住んでんな。ほんで、昔も今も、ヤクウルの人にとってこの森は、ゆうたら聖地や。ここから力を貰ってるんやな」

「へえ〜。初めて聞きました」

「ヤクウル以外の人には滅多に話さんからな。まあ、そんだけ大切なもんもってことや」

「じゃあ、なんでお兄ちゃんは話してくれたんだ？」

「ほんの短い間の付き合いやけど、オレにとってお前らは大切なもんになってるっちゅーこっちな。…言わせんなよ、恥ずかしい」

「大切なものか…」

「オレが勝手に思ってるだけやから、望は無理に思わんでもええで」
「そうですね…」

望は少し俯いて、またすぐに顔を上げた。

寂しそうな表情を浮かべていたけど、でも、なんだか嬉しそうだった

た。

「ほんで話の続きやけど、ヤクウルでは一年に一回、年末に樹齡祭
ゆうて、めっちゃでっかい祭があんねん」

「あ、それは知ってます。参加したこともあるし」

「お祭があるのか？」

「ああ。結構有名な祭やねんけどな」

「ふうん」

お祭かあ。

ヤウトにも収穫祭があつたけど、あれとは違うのかな。

「せや。また年末になったらこよな。すっごいおもしろいから」

「うん！」

年末が楽しみなんだぞ！

「ほんで、樹齡祭は、森に感謝するのもそつやけど、この森の主に
も楽しんでもらつたため…つてのもあんねん」

「主…ですか」

お兄ちゃんは歩きながら上を見て、呟くように話し始める。

「ヤクウルの紋章でもある、鷹がこの森の主や。見た目は普通の鷹
なんやけど、この森の最初から今まで…さらなる未来まで、ずっと
ずーっと見守ってるんやと。気の長い話やて」

「……………」

「まあ、一年の慰労祭つちゅーこつちやな」

「…会つたこと、あるんですか？この森の主に」

「まあな。でも、なんの不思議もない。いつも森におるんやから、

会うこともあるやろ」

「…そうですね」

「そういや、最近会ってないなあ。元気にしてるんやろか」

また上を見て、問い掛ける。

でも、答えは出てるみたいだった。

「心配するまでもないんでしょ？」

「…せやな。あいつが弱ってる姿なんて想像出来んかったわ、そういえば」

そう言ってお兄ちゃんが望に微笑むと、木の葉が揺れた。風のせいなのか、それとも…

「ふふ、そうか」

「え？」

「いや、なんでもない」

「……？」

明日香は空気の匂いを嗅いでいた。

お腹、空いたのかな。

…でも、もしかすると主への挨拶だったのかもしれない。

森の中を歩き続ける。

…自分は、明日香に乗せてもらってるけど。

大きな樹が少なくなってきたとはいえ、まだまだずっと森だった。

「あ、そうだ。私には幹旋してもらえないんですか？」

「ん？ああ、幹旋な。また今度、ヤマトに着いてからや」

「そうですか…」

「なんで？」

「ルウエも体験したやろ？契約にはえらい体力気力精神力がいる。ルウエは明日香に乗せてもらった良かったけど、望はそうはいかんやろ？」

「そ、そんなことないですよ…」

「ルウエが疲れたら、誰が乗せたんねん」

「あ…」

「だから、ヤマトに着いてからや。分かったか？」

「うん」

明日香は頑張ってくれてるんだな。

明日香は偉いんだぞ。

「でも、適性くらいは教えてもらえますよね！」

「んー、まあええやろ」

そう言つて、ゆっくり目を瞑り、また開ける。でも開けたときには、さっきまでの透き通った黒い瞳じゃなく、火が燃えているような真っ赤な瞳になっていた。

「ふむふむ。へえ。なるほど…」

「ど、どうなんですか？」

「昨日、あいつがゆつてたのと変わらん。望は火の属性が並外れて強い。タルニアでもいけるとちやうかな」

「タルニア？」

「灼熱」タルニア。情熱の炎。タルクメスの使徒の一人やな。タルクメスはタルニアの他に四人、計五人の使徒がおるんやけど、タルニアが一番強くて気性が荒い。よっぽどでないと…てゆうか、自分より強くないと契約せんちゅーやつやねんけど」

「え…。私、大丈夫なんですか？」

「まあ、大丈夫やろ」

「ええ…。ホントかな…」

「選ぶんは、タルニアと望や。実際に会わせんと分からん」

（会わせてあげよっか？）

「のわっ!？」

いつの間にかルウエが出てきていた。

…もう大丈夫なのかな。

（大丈夫だよ。術式は契約ほど負担は掛からないし）

「お前なあ、いきなり出てくんなって何回言わせたら気が済むんや
!」

（百万回。そんなことよりさあ、タルニアに会いたい？）

「あー、やめとけやめとけ。せめて森を出てからや」

（…兄ちゃんは、タルニアを何だと思ってるの？）

「火事バカ」

（あながち間違ってる…って、そうじゃないよ!）

「ホントに大丈夫なんですか…?」

（大丈夫大丈夫）

「あかん!絶対に許さん!」

三人の会話は本当に面白くて。

葛葉が前に話してたマンザイって、こんなかんじなのかな。

（いつそ、五人とも喚んだら?）

「アホか!」

「ややこしいので、最初の通り、ヤマトに着いてからで良いです…」

「ほれ見てみい!でしゃばんな!」

（むう…。もう、関係なく全員喚ん…っつう…!）

「やめる！殴るぞ！」

（殴る前に言ってよ！）

「喧嘩はやめようよ…！」

ふふふ。

ホント、面白いんだぞ！

森はいつの間にか登り坂になっていて。
山に入ったみたい。

「ふう……。やつぱりきついなあ……」

「もうそろそろ鉱山ですからね」

「いや、鉱山の全部が全部きついわけやないやろ」

「細かいことに突っ込まないでください……」

「明日香、大丈夫？」

「ワウ」

結局タルニアを喚べなくて、ルウエは怒って消えてしまった。
森が火事にならなくて良かったような、タルニアが見られなくて残念なような。

「入鉱料、持ってるか？」

「えっ、採掘場に入るんですか？」

「当たり前やろ。お前、ヤマトに何しに来てん」

「いや、普通に旅の一通過点として……」

「はあ……。採掘場に入らんとか、人生の九割九分九厘損してるで」

「ええ……。わざわざ高い入鉱料を払うこともないじゃないですか……」

「ああ……。やつぱり安く入れる方法、知らんのか……」

「えっ？」

お兄ちゃんは、懐から何かの金属で出来た板に鎖を通したものを出した。

「これはなんでしょう」

「採掘員さんが付けてる採掘証明の札ですか？」

「ああ。まあ、訂正加えるとしたら、これは非雇用者採掘証明やな」
「サイクツシヨウメイって？」

「この人は採掘員ですよって知らせる名札みたいなものだよ」

「名札なのか？」

「ちよつとちやうけどな。ほれ、見てみ」

お兄ちゃんに渡してもらった板には、細かい模様が彫ってあって。
ヤウトとかヤクウルの紋章に似てる気がする…。

「ヤマトの紋章や。それがあれば、ほとんどタダで入れる」

「ふうん」

「でも、なんでこんな持ってるんですか？」

「申請すれば誰でも貰える。ただし、採った鉱石の半分を渡さな
かん。非雇用者ゆうても、いちおう採掘員やからな」

「へえ〜。全然知りませんでした」

「採掘員の知り合いから聞いてきた情報やからな。あんまり知ら
れてへんのかもしれん」

「…そんなに石が好きなんですか？」

「石の魅力が分からんとか、人生の十割十分十厘損してるわ」

「限界突破してますけど」

「そんだけ損しとるっちゅーこっちや」

石…石の魅力かあ…。

自分には分かんないんだぞ…。

「精錬されたやつもええけど、原石にも原石の魅力があんねんなあ」

「へえ〜」

「セイレン？ゲンセキ？」

「原石は石の元になる石。精錬は、原石を磨いたりして綺麗にする

ことだよ」

「あの石も、セイレンしたら綺麗になるのか？」

「あれは…無理じゃないかな…」

「なんで？」

「あれは普通の石であって、原石じゃないから」

「……？」

「宝石で知らんか？」

「ホウセキ？」

「ヤウトもユールも、鉱山がないですからね。宝石も高いから、宝石商がいても鉱山街でないと滅多に手に出来るものでもないし。それに、なくても生活出来ますから」

「まあ、せやろけど…。勿体無いなあ…」

「今、持ってないんですか？」

「え？」

「今、石は一個も持ってないんですか？」

「あ、ああ、そーいや持ってたわ」

「はあ…」

笑いながら、お兄ちゃんは背負っていた袋を下ろして中を漁り始めた。

そして、すぐに大きな袋を取り出して。

「ほれ。この中、見てみ。重いから気い付けろよ」

「うん」

明日香から降りて、ずっしりと重い袋を受け取り、地面に置いて中を見てみる。

中には小さな袋がいっぱい入ってて、その中にまた何かが入ってるみたい。

「わあ、綺麗な袋ですね」

「袋かい！袋は見分けやすくしてるだけや」

「石が入ってるの？」

「ああ、ほれ、はよ見てみいな」

「うん」

一番上にあつた茶色い袋を取り出して開いてみる。

中には、茶色い石が入っていた。

「出して見てみいな」

「うん」

取り出して見てみると…

「わあ〜」

「でや。綺麗やろ」

「うん！」

光の具合で、縦に金色に輝く石。
すごく綺麗…。

「それは猫目石。金運向上に効果があるんや」

「……………」

「なんや、ジツと見て。オレに惚れたか？」

「ち、違いますー！」

「…別に、ホンマに金運を上げたくて持ってるわけやない。趣味で集めてるんやから。それに、金儲けがあかんのとちやうやろ？金を持つてることに頼んで驕るんがあかねやろ？」

「そうですけど…」

「こっちは？」

「開けてみたらええやん」

開けて出してみると、今度は袋と同じ蒼い石だった。

「それは瑠璃。幸運も呼び込むし、魔除けでもある。強大な力を持つ石のひとつやな」

「へえ〜」

蒼…。

なんだか、引き込まれるような蒼。

ところどころキラキラ輝いて…ルイムナの夜空みたいだった。

「興味、持ってくれたか？」

「うん、綺麗」

「さつきも喋ってたけど、採掘場では原石が採れるし、ヤマトではこれみたいな精錬済の石が売ってるから。はよ行って、自分のええやつ見つけよ」

「うん！」

石。

石がこんな綺麗なものだって、全然知らなかった。なんだかワクワクしてきたんだぞ！

「ところで、いくらで入れるのか知りませんが、入鉱料に使えるような余分なお金なんて持ってないですよ」

「ん？あー、そんなんええわ。オレが奢ったる」

「猫目石の力ですか？」

「日々の積み重ねや」

「ふうん…」

「それに、可愛い妹のためやん。いくら出しても惜しないわ」

「……………」

笑いながら、少し乱暴に望の頭を撫でるお兄ちゃん。
望は何も言わずに俯くだけだったけど、尻尾はパタパタと揺れていた。

山を登っていると、高い壁に突き当たった。

「進めない」

「ここからは羽根生やして飛んでいくねん」

「え？羽根が生えるのか？」

「ああ。この薬、飲んだらな」

そして、懐から小さな瓶を取り出して渡してくれた。中には黒くて丸い薬がいっぱい入っていて。

「もう……。嘘を教えなくてください」

「嘘なの？」

「これは胃腸薬。お腹が痛くなったときとかに飲むの」

「羽根が生える薬は？」

「そんなのないの」

「……………」

「疾風」

お兄ちゃんがそう唱えると、急に身体が軽くなって地面から足が離れた。

「わわっ！」

「ちよっ、あんま動くな！」

「うわっ！」

落ちて尻餅をつきそうになったところに、明日香が割り込んできてくれた。

お兄ちゃんを見ると、汗をかいて息もあがっていた。

「術式が使えるんですね」

「召致かて術式やん…」

「そういえばそうですね」

「はあ、しんど」

「召致のときは平気そうだったのに」

「あれは維持する必要がないからな」

「術式…」

「なんや、興味あるんか？」

「疾風」

姉さまと葛葉に借りた力を、もう一度思い出して使ってみる。身体は浮かなかつたけど、小さなつむじ風が起きた。

「へえ〜。ルウエも使えるんだ〜」

「なかなか筋がええな」

（素質もそうだけど、良質な力が助けてる。しかも、ふたつ）

「お前、またいきなり出てきて…」

「葛葉と姉さまの力なんだぞ！」

（へえ〜）

二人の力。

自分を助けてくれている。

胸のあたりが、とても温かった。

「まあとにかく、空を飛ぶんは鳥に任せとけって話やな。オレらはこの程度が限界や」

「うん。でも、どうするの？登るの？」

（回り道をするんだよ）

「ついでに採掘場や」

「採掘場！」

綺麗な石、見つかるかな。

綺麗なのを見つけて、葛葉や姉さまに持って帰ってあげないといけないな。

壁に沿って進んでいくと、大きな穴がある場所に着いた。

「ん？おお、久しぶりじゃのう」

「じいさん、まだ生きとったんかい」

「ははは。山の男はなかなか死なんさ。ほで、採掘場に入るんかいの？」

「ああ。こいつらの採掘証明も出したってくれるか？」

「んー？妹かいの？」

「違います」

「嫁か」

「ち、違いますー！」

「採掘証明は一個につき二千元じゃけ、四千元じゃの」

「ほれ。四千元や」

「ん。確かに。ほれ、チビ。来んかいの」

「うん」

おじいちゃんのところに行くと、サイクツシヨウメイを首に掛けてくれて。

お兄ちゃんに見せてもらったものと同じものだった。

「可愛いのう。うちの孫に負けんくらいじゃ」

「えへへ」

「ほれ、娘さんも」

「ありがとうございます」

「礼はこの男にな。ほして、チビはどこから来たんかの？」

「ヤウト！」

「ほう、ヤウト。そりやまた偉かったの。どれ、ご褒美じゃ。こっちの採掘証明もやろう」

「ありがとうございます」

首に掛けてもらったのは、さっきのと違って、綺麗な銀色の板にヤマトの紋章と何かの文字が彫られたものだった。

「じいさん…それ、正式な採掘証明やろ…。ルウエにやってええんか？」

「ええんじゃ。どうせワシのじゃけ、もう使わんでの」

「おじいちゃんなの？」

「毎日磨いとるからの。ワシのお古とはいえ、新品同様じゃ。ほで、今からはチビのもんだて、大切にしいな」

「うん！」

「はっはっ、良い返事じゃあ！」

おじいちゃんは、頭を優しく撫でてくれた。

ゴツゴツしてて、なんだか岩みたいだったけど、それがすごく気持ち良くて。

「ありがとうございます。ルウエのために」

「ええんじゃ。娘さんにやるもんがのうて、すまんのじゃけんぞ」

「ああ、そんなのいいですって」

「おお、そうじゃ。昼ごはん、まだじゃろ。鉾山飯食わせちゃろ」

「え、あ。ありがとうございます」

「久しぶりに腕が鳴るのう」

そう言つて、おじいちゃんは腕捲りをして穴の中へ入っていった。

「さ、オレらも付いていこ」

「あ、はい」

採掘場の前に、お昼ごはん。

高山飯つてどんなのかな。

良い匂いが小さな横穴中に広がる。

「ようこんだけ高熱の火炎岩、見つけてくるわ」

「火炎岩ゆうくらいじゃけえの。炎のように熱からんかったら、ワシらは火炎岩とは言わん。そんなもん、ぬる岩じゃ」

「…さいでつか」

「ほうれ、出来たぞ」

「いただきます！」

早速、こんがり焼かれたお肉を食べる。

「ん〜」

「美味いじゃろ」

「うん！」「ホント、美味しいです」

何のお肉かは分からないけど、とにかく美味しくくて。ホカホカに炊けたご飯にすごく合っていた。

「最近は何石も万金も採れんようになってのう…」

「掘り尽くしたんちゃうんか？」

「そうかもな」

「ヨロズイシ？ヨロズカネ？」

「自然の力を集約した石とか金属のことや。それぞれで様々な自然の力を使えるんやけど、力の大きさはその大きさに比例するし、掘り出される量もごくわずか。採掘員がこれの取り合いをして、裁判沙汰になったこともあるくらいや」

「へえ〜」

「売れば億万長者じゃけ、醜い争いが絶えんのじゃ。そういうことでは、出んようになったのはええことかもしらん。ほども、ヤマトより西の街、あるいはムカラウとかガルムクでも万石、万金は生活に必要不可欠になってきとる。ヤクウルとかユールオ、ルイカミナ…あとはヤウトみたいなの、便利な力に頼らん生活にはなかなか戻れんし、手放しには喜べんのだの…」

「ふうん…」

ヨロズイシ…ヨロズカネ…。

あっても大変だけど、なくとも大変。

なんだか複雑なんだぞ…。

「ほれ、そこ見てみ」

「あ、石英ですね」

「セキエイ……」

「そこにも」

「紫水晶かな」

「なんで、こんなにいっぱいあるんだ？」

おじいちゃんに貸してもらった袋は、もうすでにふたついっぱいになっていて。

それに、拾っても拾ってもなくならない。

「ここには強い脈があるからな。脈から漏れた力が結晶化しとんねん」

「……？」

「脈ゆうんは自然の力が流れる道筋や。その力が漏れ出てきよる場所がある。それが鉱山やったり火山やったりするねん」

「カザン？」

「火を噴く山だよ。危ないから、普段は近付かないんだけど」

「火山の近くには温泉が多いからな。危険を冒してでも入りに行きよるやつもおる」

「あなたもでしょ？」

「よくご存知で」

「温泉……。この前は……」

「あの辺には火山はないから、あそこから直接脈の力が溢れとるんやろな」

「へえ〜」

この石も、あの温泉も、自然の力で出来たものなんだ。
不思議。

全然違うものなのに。
元々は同じもの。

「特に脈の力が濃縮された石とか金属が、万石や万金って呼ばれる
んやな」

「ふうん」

あ、綺麗な金属だ。

これも入れておこう。

「ところで、あともうちよいで出るけど、しっかり拾えたか？」

「えっ、もう終わりなの？」

「残念やけどな」

「むう……」

「……また来ようよ。そのときに、またいっぱい拾えば良いじゃない」

「うん……」

「な、あんまり氣い落とすなよ」

「うん。分かった」

「良い子だね、ルウエは」

「えへへ」

望が頭を撫でてくれた。

……そつだよね。

また来ればいいんだもんね。
だから、今は我慢する。

「さあ、出口や」

「眩しい……」

「はは、じき慣れるて」
「よう。どんくらい採ってきた」

光に目を細めていると、向こうから今まで聞いた中でも一番太い声が。

大きな影が出口のところに立っていて、手を振っていた。

「おっさん、いきなりそれはないやろ」

「良いじゃねえか。で、どんくらい採ったんだ」

「はい、おじさん」

「おっ。ちっこい坊主と…えらく可愛い娘さんだな。どこで引っ掛けた」

「か、可愛い…」

「ユールオからヤクウルの間だな。引っ掛けたんやのうて、護衛や」

「護衛？狼を連れてるのにか」

「ええやん。細かいことは」

「ところで、坊主と娘さんはなんて名前だ？」

「ルウエなんだぞ」「望です」

「ほう。うちにも、望ちゃんくらいの娘がいてなあ。ヤマトに着いたらよろしく頼むよ。あいつ、友達が少なくて」

「昔から病気がちやったからな…。ええ子やのに…。まだ元気になつとらんのか？」

「ああ…」

「名前、なんていうんですか？」

「柚香だよ。冬至の日に生まれたんでな」

「いつでも思うけど、安直な名前の付け方やなあ」

「良いじゃねえか。柚香も気に入ってくれてるんだし。はあ…。ごめん、傍にいてやることも出来んで…」

「……………」

柚香…。

おじさんは、すごく哀しそうな顔をしていて。

「あのっ。私…旅の身だけど、絶対に柚香ちゃんと仲良くなりますから！」

「ああ、ありがとう。柚香も喜ぶだろう」

「ほんでや、おっさん。回収と買取、頼むわ」

「おう、そうだな。ルウエ、もう一回、採った袋を見せてくれ」
「うん」

袋を三つ、おじさんの横の台に乗せる。

おじさんは、ひとつ目から順に重さを量っていき、何かを紙に書いていた。

「ん？三つ目が異様に重いな」

「金属が多いんとちゃうか？」

「いや、それでも重すぎる。坊主、中身を見ても良いか？」

「うん」

「ありがとう」

そして、おじさんは袋の口を開けて、そのまま固まってしまった。

「ん？なんや、どないしたん？」

「あ…いや…。これは…」

「んー？」

お兄ちゃんも覗き込んで、また固まった。

「はあっ！？なんで！？」

「いや、知らないから」

「なんでこんな…ええ!？」

「どうしたんですか？」

「ルウエ、この金属…重っ!いつ拾った？」

お兄ちゃんが見せてくれたのは、最後に拾った綺麗な金属だった。

「さっき」

「さっき？」

「出口の話のちょっと前なんだぞ」

「ほう…」

「何なんですか?二人して。その金属がどうかしたんですか？」

「…これが万金や。滅多に見つからん…特に、ここみたいな並以下の鉱山では絶対に見つかるようなもんやない」

「え？」

「おっさん…」

「ジジさまに相談してくるよ。とりあえず、いる石だけ選んでおい
てくれ」

「分かった」

おじさんは、綺麗な金属を慎重に持って、穴の中へと走っていった。
…あれって、何かすごいものだったのかな。

「とりあえず、選ぶだけ選ば」

「うん」

「万金は、こんな鉱山では見つからない…。でも、ルウエが見つ
けて…。あれ？」

「望。考えるんはあとや。とにかく、気持ちを落ち着けんと…」

そういうお兄ちゃんの手が一番震えていて。

…あ、この石が綺麗。

これにしようかな。

おじさんはおじいちゃんと一緒に戻ってきて、ヨロズカネと丸めた紙を持っていた。

「これは確かに万金じゃった。ほで、一通り見たが、万金は他にはなかった。つまり、これが初めて最後つてわけじゃ。そこで、提案なんじゃけ、ヤマト……いや、世界一の鍛冶屋を紹介するでな、ルウエ、お前さんが自然と身に付けられるような装飾具を作ってもらつてのはどうじゃ」

「その方が、誰か他のやつらの手に渡るよりは良いと、俺たちは考えたんだが」

「……？」

「まあとにかく、これが紹介状だ。鍛冶屋は、お前が知ってるな？」

「お、おう……任せとき……」

「お前が緊張しててどうするんじやい」

「ま、幻の万金が目の前にある思たら……」

「はあ……」

「ルウエ。これ、なくすんじやないぞ」

「うん」

おじさんからヨロズカネと紙を受け取つて。

大切なものだから、すぐに背負い袋に入れて……

「……重くないのか？」

「……？全然」

「ほう。興味深いの……」

「何かあるんですか？」

「万金は所有者を選ぶということじゃな」

「え？金属なの？」

「あくまでも噂、伝説に過ぎんがの…」

…なんだかよく分からないけど、全然重くないんだぞ。

でも、ホントに綺麗…。

葛葉に見せてあげないとな！

お兄ちゃんに見せてもらったのより少しくすんでいるけど、綺麗な
瑠璃。

おじさんが、少しだけセイレンしてくれた。

「重いですね…」

「自然の力が詰まってるからな」

「ねえ、柚香の家はどこにあるの？」

「ヤマトやな。着くんは明日の夕方が夜くらいや」

「え？」

「まだもうひとつ、山を越えないといけないからね」

「でも、さっきの洞穴はヤマトじゃないの？」

「ああ。ヤマトの採掘場やな」

「……？でも、ヤクウルの方が近い……」

「せやな。それでもヤマトや」

「ふうん……」

なんでだろ。

ヤクウルの方が近いのに、ヤマトの採掘場……。

ヤクウルは石を掘らないのかな。

「しかし、腹減ったなあ」

「夕飯にはまだ早いんじゃないですか？」

「んー、せやけど、これのええ匂い嗅いでたら我慢出来んわ」

お兄ちゃんは、おじさんにもらった高山飯の包みを持ち上げる。

紐がしっかり結ばれていて中身は分からないけど、良い匂いが漂って
いて。

「じゃあ、今日はここで野宿します?」
「せやな。まあ、日暮れるまで時間もないし、進んでも進まんでも変わらんやろ」

そう言って、早速荷物を下ろすお兄ちゃん。
そして、包みを開き始める。

「せっかちですね…」

「ちよつとでも温かいうちに食わんと損やろ…って、火炎岩が添えたあるな…」

「ワウ」

「あ、うん。分かった」

「明日香も夕飯か」

「はい。ちよつと行ってくる、って」

「ほう」

「望は、なんで明日香の言葉が分かるの?」

「なんでかなあ」

お兄ちゃんの背負い袋からお皿を取り出しながら、望は考え込む。

「考えるまでもない。簡単なこつちや。お互いがお互いを信じてる。だから心が通じ合って、ゆづてることも分かる」

「お兄ちゃんは、明日香の言ってること、分かる?」

「んー、ちよいちよいかな」

「へえ」

自分はどうか…。

明日香は無口だけど、ときどき応えてくれる。

自分も、ちよつと分かるのかな。

「しかし、美味そうやなあ」
「食べることはっかりですね」

と、そのとき、望のお腹が鳴った。

「望もな」

「……………」

「つてえ！」

鈍い音が響いた。

望の顔は真っ赤になっていて。

「さ、ルウエ。食べよっか」

「う、うん……」

頭を押さえて転げ回るお兄ちゃんを横目に、箸を取る。
包みの中を見ると、お昼とはまた違って今度は魚の焼いたものだった。

「ツグだね。この辺で採れるのかな」

「近くの川で採れる」

「川があるんですか？」

「ああ。道からはちょっと離れるけどな」

「へえ〜」

「身体、洗いたいんやったら案内するけど」

「そうですね。でも、まずは夕飯です」

「せやな」

お兄ちゃんも完全復活。

ちょうど取り分けも終わって

「じゃあ、いただきます」

「いただきます」 「いただきます」

火炎岩で熱々のツグに箸を伸ばす。

固く絞った手拭いで身体を拭く。

ちよつと冷たくて寒いけど、我慢する。

「背中、拭いたるか？」

「いいです」

「オレの背中、拭いてくれんか？」

「嫌です」

「望、背中拭いて〜」

「うん。手拭い貸して」

「なんでオレのは拭いてくれんのや〜」

「……………」

望は無視して、ゴシゴシと背中を拭いてくれる。

力加減がちょうどよくて、とても気持ち良かった。

「はい、綺麗になったよ」

「うん。ありがと、なんだぞ」

「どういたしまして」

「じゃあ、お兄ちゃんの背中、拭いてあげるね」

「お、ルウエは優しいなあ」

「えへへ」

お兄ちゃんから手拭いを受け取って、一所懸命に背中を拭いてあげる。

お兄ちゃんの背中はとても広くて大変だけど、隅々まで綺麗に。

「あー、良かったわあ。絶妙やな」

「ルウエ、私のもやってくれる？」

「うん！」

望の背中はお兄ちゃんより狭いけど、とても柔らかくて。

「それにしても、ホンマに胸ないなあ。サラシでも巻いてるんかと思たけど」

「ひゃあ！ど、どこ見てるんですか！っていうか、前に出ないでって言いましたよね！？」

「ええやないか。恥ずかしいんか？」

「……………」

「まあ、気にする年頃やろな。オレの配慮が足らんかったわ。すまん」

そう言っつて、お兄ちゃんは川で手拭いを洗って服を着込み、向こうの方へ行ってしまった。

望はそれをジッと見送って。

「もう…ホント、信じらんない…」

「なんで、胸を見られるのがイヤなの？」

「ルウエも大きくなったら分かるよ…」

「……………」

なんでなのかな？

自分の胸をしてみるけど、別に何もなかった。

「望。自分も先に戻ってる」

「あ、うん。ちゃんと服、着なさいよ」

「うん」

服を着て、来た道を戻っていく。

道じゃないけど道があるから迷わなかった。

途中で、お兄ちゃんの背中が見えて。

「お兄ちゃん」

「ん？ルウエか」

「うん。…お兄ちゃんは、望のこと、どう思ってるの？」

「…望なあ。オレは、望のことは妹やと思ってる。手間は掛かるけど、可愛い妹…」

「ふうん」

「もちろん、ルウエもやで」

「えへへ」

「でも、望自身、どう思ってるのかは分からん。だから、どう接したらええんか検討も付かん。妹として接してええんか、それとも、あくまで他人として接さなあかんのか…」

「……………」

望もお兄ちゃんも、たぶん、お互いの気持ちがあんなに分かってないんだぞ。望もお兄ちゃんも、たぶん、お互いにもっと近づきたいと思ってる。あと一歩のところまで来てる。

なのに、何かの壁が邪魔してる。

なんとかかして、壁を取り払えないかな…。

「きゃあー！」

「望！？」

望の悲鳴が聞こえたのと同時に、お兄ちゃんは走り出す。

望…望…。

何があったの…？

草むらを抜けて川原に出ると、望とお兄ちゃん、それと、誰か知らない人が二人いた。

一人は明日香に噛みつかれて、もう一人はお兄ちゃんが馬乗りになつて殴っている。

…明日香、今までどこにいたのかな。

「生きて帰れる思うなよ、お前らあ!」「グルル…」

「うぐっ…」「痛っ!痛え!」

「……………」

「望、大丈夫なのか?」

「うん…」

何があつたのかな…。

望は少し震えてるようだった。

「ちっ。まだ殴り足らん」「ウウ…」

「あ、あのっ…」

「はよ、上、着いな。さっさと離れるぞ」

「…うん」

震える手で上着を掴むけど、上手くいかない。それを見て、お兄ちゃんは手伝ってあげて服を着ても、まだ望は震えている。

「こいつら、蹴り飛ばしてもええんやぞ」

「……………」

「ほうか」

そう言つて、お兄ちゃんは二人を睨む。
明日香も、今にもまた飛び掛かりそんな雰囲気です。

「行くぞ」

「……………」

「立てんか？」

「うん……………」

「……………」

お兄ちゃんは望を抱え上げて。

そして、二人を放つて足早にその場を立ち去る。

「……………」

「……………」

「護衛がこんなことでは……………」

「お兄ちゃん……………」

「怖い思いさせて……………すまんかった……………」

「ううん。すぐに来てくれて、私を守ってくれた……………。たしかに怖かったけど……………それでも嬉しかった。お兄ちゃんが、私を守ってくれたから……………」

「……………」

望の肩が震えていた。

でも、さっきのとは違うもののように見えた。

ううん、きつと違うものなんだ。

もう日は暮れていたけど、とにかく進んだ。

でも、登り坂がまた下り坂に変わる頃、目の前に誰かが現れた。

「はあい、こんばんは。こんな遅くに、どこに行くのかしらあ？」

「お前らがおらんところや」

「初対面なのに酷いわあ」

そんなことを言っても、顔は笑っていて。

…なんだか、よく分からない人なんだぞ。

「お嬢さん、さっきはごめんねえ。驚かせちゃって」

「驚かせちゃって…やあるか、アホ！望がどんだけ怖い目したか分かっとるんか！？」

「もつ…あんまり怒鳴らないで」

お兄ちゃんをチラリと見ると、望にゆっくりと近付いていく。

「何する気や」

「ちょっとお話するだけよあ？」

「そこで話せ。望に近付くな」

「いけずなのね」

そう言っつて、指をパチンと鳴らす。

お兄ちゃんと明日香は身構えたけど、暗がりから誰かが出てきただけで。

出てきたのはさっきの二人で、後ろ手に縛られていた。

「派手にやってくれたわねえ。一瞬、誰だか分からなかったわよ」

「当然の報復やろ」

「そうねえ。女の子を襲うなんて、最低ねえ」

「……………」

「女将……………」

「なんで、望ちゃんを襲ったのかしらあ？」

「……………」
「……………」
「黙ってちゃ分からないわよお？」

お姉ちゃんは顔で笑いながら、内では相当怒ってるみたいだった。本当に怒ってるときの姉さまの目にそっくり…。

「うふふ。言えないのかしらあ？」

「……………」

「そう。良いわあ。山賊になりたかったのね。それならそうと、早く言えば良いのに」

「お、女将！」「違います！」

「じゃあ、なんだって言うんだい」

手に持っていた扇子をパチンと閉じると、ギロリと二人を睨み付ける。

「あう……………」

「あ、あの……………」

「ん？どうしたの？」

「私…大丈夫でしたから…。その……………」

「良いのよ、望ちゃん。掟を破ったこいつらに、同情の余地はないわあ」

「でも……………」

言いかけた望の口に指を当てる。

突然のことで、お兄ちゃんも反応出来なかったみたい。固まったまま呆然として、それを見てるだけだった。

「ありがとねえ。でも、うちではそういう決まりなの。掟を破った者は、追放する。どうあっても曲げられない」

「……………」
「ふふ、優しい子なのね」

望は、なぜだか少し赤くなってるみたい。
…なんでだろ。

「あらあ、可愛い子がもう一人」

「あ…うう…」

「ふふ、怖がらなくて良いのよあ」

そう言つて、頬に触れてくる。

…お姉ちゃんの手はすごく柔らかくて、気持ち良かった。

「そうだ。二人分空いたことだし、今日はうちで泊まっていくといいわあ」

「でも…」

「言ったでしょう？掟は絶対なの。それを守れない者は、うちにはいない」

「……………」

「さあ、行きましょう。すぐ近くだから」

「はい…」

お姉ちゃんは、ずんずんと望と自分の背中を押していく。

お兄ちゃんと明日香も、それに付いていって。

一瞬、後ろを見ると、暗闇の中でさっきの二人とはまた別の誰かがいて、小さな刀と銅貨五枚を置いていた。

…誰？

ラズイン旅団。

お姉ちゃんの旅団。

「ごめんねえ。狭い場所で」

「いえ…。ありがとうございます…」

「良いのよお、お礼なんて」

「では、タルニアさま。お休みなさいませ」

「はあい。お休み」

「望…ルウエ…お休み…」

「お休み」「おやすみ、お兄ちゃん」

そして、堅苦しい人とお兄ちゃんは帷から出ていった。
帷の中は狭かったけど、温かくて。

「あの…」

「なあに？」

「ここはタルニアさん専用の帷なんじゃ…」

「タルニアで良いわよ。ターニヤでも良いけど。それに、私と寝る

のは嫌かしらあ？」

「いえ…そういうわけじゃ…」

「じゃあ、良いじゃない。…今日はもう休みなさいな。私も眠たい

し」

「はい…」

「ルウエちゃんも、お休みなさい」

「うん…おやすみ…」

お姉ちゃんがゆっくりと頭を撫でてくれた。
それがとても気持ち良くて、だんだん眠たく…。

「ルウエさま、起きてください」

「んう」

「気持ち良さそうに眠ってるのに、起こしたら可哀想でしょ？」

「はっ、いえ、しかし……」

「起きてるんだぞ……」

「あーあ。起こしちゃった。ホント、気遣いが出来ないのねえ」

「タ、タルニアさま……」

大きな欠伸をして、伸びをする。

うん、目が覚めた。

「ルウエさま……。寝ていて良いのですよ……」

「ううん。ばつちりだから大丈夫なんだぞ」

「は、はあ……」

「ターニヤ。こっちの準備は出来たぞ」

「き、貴様！タルニアさまに対して、なんて言葉遣いだ！それに、タ、ターニヤなどと！」

「ええやないか。どうせヤマトまでや。我慢せえ」

「なっ！」

「はいはあい。喧嘩しないの。置いていくわよあ？」

「……………」 「喧嘩にもなつとらんわ」

「望ちゃんはあ？」

「さあな。その辺で用でも足しとるんと……あがつー！？」

後ろからやってきた望に脇腹を殴られて、お兄ちゃんはその場でうずくまる。

…痛そうなんだぞ。

「最低です」

「そうねえ。乙女は繊細なのよお」

「乙女ってガラかいな…あだっ！」

「ふん」

お兄ちゃんの足を踏みつける。

あーあ、大変なんだぞ。

「それに、荷物の整理をしてただけですから」

「じゃあ、もう発てるのかしら？」

「あ、はい。大丈夫です」

「自分は…」

「ルウエのも、ちゃんと整理しておいたから大丈夫だよ」

「優しいお姉ちゃんなのねえ」

「うん！望は優しいんだぞ！」

「……………」

「あらあ？何か言いたいことがあるなら、言っても良いのよお？」

「遠慮しときます」

「ふふ、残念ねえ」

お兄ちゃんはヨロヨロと立ち上がる。

望はそれを見て、少し不機嫌そうに尻尾を振って。

「さあ、行きましようか。みんなに伝えてきてくれる？」

「はっ！」

短い返事をして、堅苦しいお兄ちゃんは走っていく。

そして、まだ真っ暗な森の中、ヤマトに向けて出発した。

カタカタと車輪が回る音がする。

「あの二人もねえ、望ちゃんに何かしようと思って襲ったわけじゃないと思うのよお」

「はい」

「あらあ？分かったの？」

「私じゃなくて、荷物を狙ってましたから。あのときは動揺してて分からなかったけど…。あとでよく考えたら、そうだったなって。それに、この紋章も見えましたし」

望は、お姉ちゃんの首輪に掛かっている紋章を指す。
なんだか鳥のような、でも、ヤクウルのとは違う紋章。

「ラズイン旅団。」裏”専門の盗賊。頭領はもちろん、構成員の顔すら分かっていない。分かっているのは、ラズイン旅団という名前と不死鳥を象った紋章だけ」

「なあんだ。知ってたの？」

「知ってますよ！いろんなところで噂を聞きますから！」

「有名なのね。嬉しいわあ」

「嬉しいって…」

お姉ちゃんは、本当に嬉しそうにニコニコしている。

有名…有名なのなあ。

と、前の小さな窓が開く。

「タルニアさま。もうすぐ夜が明けます」

「分かったわ」

「何かあるんですか？」

「何も無いけどねえ。ただ、ラズイン旅団は夜の顔なのよ」

そう言つて、お姉ちゃんは首輪を外して別のものに付け替える。それには、さっきのとは違う龍のような紋章が付いていた。

「あぁっ！」

「ようこそ、クーア旅団へ。歓迎するわぁ」

「ホ、ホントなんですか？」

「ふふ、嘘をついてどうするのよぉ」

「ラズイン旅団がクーア旅団だったなんて…」

「クーア旅団つて何なんだ？」

「全ての国から”治安維持認定”を受けてる旅団のひとつだよ」

「……？」

「どの国にも信頼されているってこと。ものすごくすごいことなんだよ」

「そうなの？」

「普通は、それぞれの国が持つてる警察組織とか軍隊が治安維持をするんだけど、”治安維持認定”を受けた旅団は、この警察とか軍隊と同じ権限が認められているの。認定旅団は、クーア旅団とユニテナ旅団、あとは、旅団天照の三つだけ」

「ふうん…？」

「ルウエちゃんには、まだちょっと早いお話かもねえ」

「むう…」

「それに、認定を受けたからといって、何か良いことがあるわけじゃないのよねえ」

「そうなんですか？」

「認定はあくまで認定だから、仕事が貰えるのはごくごく稀よぉ。ほとんどタダ働きだし。だから、行商をしたり、盗賊をしたり」

「タルニアさま」

「ふふ、ちよつと喋りすぎたかしらぁ？」

お姉ちゃんがヒラヒラと扇子を振ると、堅苦しいお兄ちゃんは窓を閉めた。

チアインジニンテイ…。

そんなにすごいことなのかな。

「ところで、あのムカラウ弁のボウヤ。護衛かしらあ？」

「はい。ヤマトまでの契約で…」

「そう。じゃあ、悪いことしちゃったわねえ」

「えっ？」

「本当の兄妹より仲が良いように見えたけど？」

「あ…」

「馬車じゃあ、昼までに着いちゃうわねえ」

「…良いんです。どうせ、私も早く離れたかったし」

「望…」

そんなことを思っていないのは、自分にも分かった。

望は哀しそうな目をして、宙を見つめている。

お姉ちゃんは、そんな望の肩にそっと手を乗せて。

「一緒にいられるのは今しかないのよ。その幸せを自分から手放しちゃダメ。分かるわね？」

「はい…」

「だから、素直になって。自分に嘘をつかないで」

「はい…」

お姉ちゃんは望を抱き締め、優しく頭を撫でて。

そして、こつちを見て手招きをする。

お姉ちゃんの横に行くと、自分も抱き締めてくれた。

望の温かさとお姉ちゃんの温かさ。

あと、ここにはいないけど、お兄ちゃんの温かさも感じて。

29 (後書き)

同じときは二度と訪れない。

だから、出来るだけ後悔しないようにするんですね。

森の切れ目から一瞬だけ下に見えた街は、考えられないくらい大きくて。

「あれ、全部街なのか!？」

「そうよお」

「あそこも？」

「あそこは職人通りねえ」

「あつちも？」

「あつちは住宅地ねえ」

「すごいんだぞ！」

「すごいわねえ」

「ルクレイで一番大きな街だからね。ユールオの五倍はあるって言われてるよ」

「五倍……」

ヤウトは何個入るのかな…。

ユールオもすごく大きかったけど、ヤマトはもっと大きいんだな。

そして、世界はもっともっと大きい…。

「タルニアさま……」

「はあい。分かったわあ」

「どうしたんですか？」

「望ちゃん、ルウエちゃん。いちおう、これ、付けてもらえるかしらあ？」

「……?」

渡されたのは、お姉ちゃんと同じ紋章が付いてる腕輪。

言われた通り、それを腕に付けて。

「何かあるんですか？」

「検問が敷かれてるみたいです。ヤマトで何かあったんでしょうか」

「さあねえ」

「そのの旅団！止まれ、止まれ！」

外から怒鳴り声が聞こえたかと思うと、馬車はゆっくり止まった。望はソワソワしてるけど、お姉ちゃんはそんな望のを見て楽しそうにしている。

「旅団名は」

「クーア旅団です。これが証明書。人員、積み荷の検査もしますか？」

「えっ、あっ、ク、クーア旅団さまでしたか！し、失礼しました！」

「何かあったんですか？」

「はっ。実を言いますと、街の宝石商たちがラズイン旅団を名乗る者に立て続けに強盗、盗難に遭いました」

「ほう…。それで、街から出ていく者を監視していると」

「はっ！」

「入る者も監視してるのは？」

「共犯があとから来るとも限りませんから、ヤマトにいる間は追跡調査をさせてもらっているのです」

「なるほど。だから、この術式なんですか」

気になって窓から覗くと、地面に不思議な模様が浮かんでいて。でも、堅苦しいお兄ちゃんが窓を塞ぐように手を出したから、仕方なく座席に戻った。

「あっ！すみません！すぐに解除します！」

「いや、いいです。私たちが共犯じゃないと決まったわけではないですから」

「は、はあ…。そうですか…」

「じゃあ、行っても良いですか？」

「はっ！非常時とはいえ、無礼を働いたこと、ご容赦願います！」

「はい。犯人が捕まることを祈っています。私たちもなるべく協力しますので」

「はっ！ありがとうございます！」

そして、馬車はまた動き始めた。

しばらくすると、お姉ちゃんも真剣な顔をして前の窓を開けた。

「二人ほど、調査に回して」

「手配済みです」

「ふふ、さすがね。…それにしても、ラズイン旅団を名乗るとは良い度胸ねえ」

「はい…」

「追放された人とかじゃないんですか…？」

「それはないわあ。…今でも、私はみんなを信頼してるから」

「…すみません」

「ふふふ。謝ることはないわ。普通なら、当然そう考えるからねえ」

「じゃあ、偽物なのか？」

「ええ。そうね」

偽物…。

なんでそんなことするのか…。

嘘について、悪いことをする…。

なんで…？

車輪の音がだんだんゆっくりになって、そして止まった。前の窓が開いて、堅苦しいお兄ちゃんが顔を覗かせる。

「着きましたよ」

「はあい。ご苦労さま」

「いえ。では、私は調査結果を待つことといたします」

「よろしくねえ」

お姉ちゃんがニコリと笑うと、堅苦しいお兄ちゃんは少し赤くなつて目を逸らした。

…どうしたのかな。

「さあて、あなたたちはどこかに行く予定はあるのかしらあ？」

「えっと…採掘場のおじさんの家と鍛冶屋に」

「鍛冶屋？刀でも作ってもらうのかしらあ？」

「うん。これをセイレンしてもらうんだぞ！」

「ル、ルウエ！」

背負い袋の中から昨日のヨロズカネを取り出して、お姉ちゃんに見せる。

望はなぜか慌てた様子で。

「んー、万金かしら？良いものを持つてるのねえ」

「うん！」

「でもねえ、これはあんまり見せびらかしちゃダメよあ。鍛冶屋に行くまで、誰にも見られないように大切にしまっておきなさい」

「うん、分かった」

「ふふ、良い子ね」

お姉ちゃんが言ったように、大切にしまっておく。

でも、なんで誰にも見せちゃいけないのかな？

「望、ルウエ。行くで」「ワウ」

「あ、はい」「うん」

出入口の布が開かれ、お兄ちゃんと明日香が声を掛ける。

明日香は元気いっぱいだけど、お兄ちゃんはちよつと疲れてるみたい。

「はあ…。しかし、御者つて案外疲れるなあ」

「そうなのかしらあ？」

「ちゃんとした椅子なだけマシンなんやろうけど…。まあ、ターニヤもやってみたらええやん。しんどさが分かるわ」

「ふふ、また今度ねえ」

そう言いながら、お姉ちゃんは楽しそうに扇子をパタパタさせて。

後ろで堅苦しいお兄ちゃんが怖い顔してるけど…。

「そうそう、望ちゃん。ヤマトはいつ発つのかしらあ？」

「えっと…。ルウエのが出来次第…でしょうか」

「そう。宿は決まってるのかしら？」

「組合の宿にしようかと思ってます」

「じゃあ、私たちのところに来なさい。面倒を見てあげるわあ」

「えっ、でも…」

「ええやん。他人の厚意は素直に受け取っとくもんや」

「そうよお。あと、お昼ごはんはこれで食べると良いわ。それじゃあ、待ってるわねえ」

「えっ、あつ、タルニアさん!？」

お姉ちゃんに何かを渡されて、望と一緒にすぐに馬車を追い出され

てしまった。

…渡されたのは小さな袋。

振ったりすると、チャリチャリと音がして。

「あつ！これ、やっぱりお金！ちよつと、タルニアさん！」

「それはボウヤの御者代理賃よお。それと、買い物をするときはその腕輪を見せて、クーア旅団のツケにしないで！」

「ええっ！？腕輪、返します！返しますっ！」

「クーア旅団は一流品しか扱わない代わりに、返品はお断りしております。望さまも、どうかご了承願います」

「そういうこと。ふふ、じゃあ、ゆっくりしてきなさいな」

「うう…」

望はガツクリとして、何か呻いていた。

葛葉が言ってた、クチガウマイってこのことなのかな。

自分も、お姉ちゃんみたいになりたいんだぞ。

「望の手、離すなよ」

「うん」

「迷子になつたら大変だからね」

ホントに大変そう。

人も多いし、道もたくさんあつて…。

美味しそうなお菓子もいっぱい売ってるんだぞ。

「ヤクウルの飴がまだ残ってるでしょ。そっちが先」

「むう…」

「まあ、ケチケチすんなや。またあとでこつたるからな」

「うん！」

「はあ…」

「それより、ほれ、着いたで」

「ここなんですか？」

「ああ」

「…駄菓子屋ですよ」

「駄菓子屋やな」

着いたところはお菓子屋さん。

美味しそうなお菓子がいっぱい並んでいて。

「間違ってるんじゃないですか？」

「まあまあ。とりあえず、入ってみよ」

「えっ、あっ！待ってくださいよ！ルウエ、明日香、行くよ」

「うん」

お兄ちゃんは迷わずお菓子屋さんに入っていく。
自分も望に手を引かれ、お店に入って。
お店の中は、ちょっとムツとして暑かった。

「お菓子やったら、勝手に持ってって大丈夫やでえ。どうせウチの
やし」

「ほな、いくらかもろていきます…って、ちやうわ！」

「ハッ…。このノリツツコミはまさか…！」

「ふふふ。久しぶりやな…」

「ま、まさか、師匠！？あるとき、ウチを庇って死んだんとちやう
かつたん！？」

「ふっ…。オレを勝手に殺すなっちゅーねん」

「知り合いなんですか？」

「まあな」

「師匠うんぬんは嘘やけど」

「……………」

「なんや、その目はっ！そんな目でウチらを見やんといてっ！」

「ねえ、お菓子食べていい？」

「お昼ごはんが先でしょ」

「むう」

「じゃあ、食べに行こっか」

「うん！」

「そして、ウチらを見やんといてっ！」

「構うだけ時間の無駄ですから」

望は冷たく言い放って、お兄ちゃんと明るなお姉ちゃんを睨む。

「はあ…。ノリの悪いやつちゃ。そんなんやとムカラウでは生きて
いけない」

「ムカラウに住む予定はないですから」

「明るいお姉ちゃん、これ」
「んー？万金かぁ。てか、明るいお姉ちゃんてウチのことかいな」
「セイレンしてくれるのか？」
「精錬つてか、ここまで綺麗かつたらもう加工やね。ほんで、どこで手に入れたん？」
「採掘場なんだぞ」
「ふうん…。非雇用者採掘証明…。そんなとこに万金がねえ…」
「ホンマ偶然な」
「偶然でも…。ま、ええわ。紹介状とかある？」
「ほれ、紹介状」

お兄ちゃんは懐から小さく丸めた紙を取り出して、明るいお姉ちゃんに渡す。

明るいお姉ちゃんはそれを開けてチラリと見ると、また閉じてニッコリ笑う。

「クーア旅団やね。紹介状もあるし、安くしとくよ」

「あつ、これは借り物で…」

「でも、その腕輪はタルニアさまが最高に信頼を寄せてる人しか付けられへんねんで」

「……？」

「お姉ちゃんのこと、知ってるのか？」

「…ん？ああ、お姉ちゃんてタルニアさまのことか。ほんで、明るいお姉ちゃんがウチ」

「うん」

「ウチは、元クーア旅団員やからな」

「ほう。初耳やな」

「初めてゆうからな」

「なんでやめたんですか？」

「んー、旅より鍛冶の方が面白くなったからかなあ」

「追放されたわけじゃないんですね」
「まあね」

明るいお姉ちゃんは何か考えるように少し宙を見て、またニッコリと笑う。

「その話は置いて。万金やけど、何にする？腕輪？」

「これがいい」

「探掘証明？ああ、名札か。たしかに、この量やとそれくらいがピッタリやな」

「名札だと何日くらい掛かりますか？」

「んー、二日やね」

「案外短いな」

「暇やからね」

「よろしくお願いします、なんだぞ！」

「よっしゃ、任せとき」

明るいお姉ちゃんに頭を撫でてもらった。

それがなんだか嬉しかったから、抱き付いた。

明るいお姉ちゃんはススと鉄の匂いがして。

また大きな通りを歩いていく。

でも、明るいお姉ちゃんのところよりは人は少なくなくて。

それと、周りからすごく良い匂いもしてて…

「お腹空いたんだぞ」

「こっちって商店街ですよね？」

「ああ。まあ、付いてこいって」

明日香に乗せてもらってるけど、もう限界…。
お昼ごはん…いつなのかな…。

「あ、ルウエがダレた」

「すぐやから我慢せえ」

「うん…」

お腹と背中がくっつくんだぞ…。

と、お兄ちゃんが急に止まって明日香も止まったから、背中から落ちそうになった。

止まったところは誰かの家みたい。

「ここや」

「え？」

「入るで〜」

「あっ、ちよっと!」

ここでお昼ごはん、食べられるのかな…。

お兄ちゃんは戸を開けて、家の中へズカズカと入っていく。

「もしかして、ここ、採掘場のおじさんの家なんですか？」

「ああ。ちよっと昼ごはん作るから、二階に行って柚香の相手でもしといたって」

「二階にいるんですか？」

「だいたいはな。その階段上がって一番突き当たりの部屋やから」

「分かりました。ルウエ、行こ」

「うん」

望のあとに付いて、明日香も階段を上がっていく。

上がった先、二階の廊下は静かな雰囲気、ふたつの小さな窓から

光が射し込んでいて。

お兄ちゃんが言ってた一番奥の部屋は、少しだけ戸が開いていた。

「お邪魔します…」

「……………」

そして、部屋の一番窓際には布団が敷いてあって、誰かが座っていた。

「柚香ちゃん…?」

「あなたは…?」

「私は望。この子はルウエ。あと、こっちの狼は明日香だよ」

すると柚香は、ゆっくりと、確かめるように、手を伸ばす。望はハツとしてその手を掴むと、そっと柚香を抱き締める。

「柚香ちゃん…」

「どうしたの?泣いてるの?」

「月光病…なんだね…」

「えへへ。大したことないよ」

「柚香ちゃん…」

ゲッコウビヨウ…?

それが何かはよく分からないけど、ふと狼の姉さまを思い出した。

あの日…村を出たあの日の夜。

抱き締めてくれた狼の姉さまの温かさを。

「お腹いっぱいなんだぞ」

「せやな」

「柚香ちゃん、美味しかった？」

「うん。美味しかったよ」

「そりゃ良かった。ほなら、オレは片付けしてくるわ」

「あ、私も手伝います」

「おっ。おおきにな」

そして、お兄ちゃんと望は部屋から出ていった。

明日香は隅の方で丸まって眠っていて。

「ルウエ」

「ん？どうしたの？」

「ルウエは不思議な色なんだね」

「……？色？」

「光なのに…光だから、いろんな色が混じってる。お兄ちゃんに似てるかな」

（だよね〜）

「あ…。久しぶりだね」

（うん。久しぶり）

「ルウエのこと、知ってるのか？」

「うん。お兄ちゃんが連れてきてくれたの」

「へえ」

（また…見えなくなっちゃったんだね…）

「うん。でも、大したことないよ」

（光なのに…。ボクは何も出来ない…）

「ううん。今日、ここに来てくれただけで嬉しいから。何も出来な

いなんて言わないで」

(うん…。ごめんね…)

「ふふ、良い子良い子」

柚香がそつと手を伸ばすとルウエは近付いて行って、頭を撫でてもらう。

でも、哀しそうな表情で。

今にも泣き出しそうな、そんな哀しみ。

「あなたは何色？ 私に見せて

私は何色？ あなたに見せるよ

月の光 日の闇 純粋なあなたへ

樹の緑 水の黒 優しいあなたへ

炎の赤 獣の白 勇ましいあなたへ

大地の黄 空の蒼 おおらかなあなたへ

いろんな色を 彩って

良い夢見ようね また明日」

ルウエは柚香に撫でられながら、静かな寝息を立てて眠っていた。柚香はそつと目を開けて、ルウエを見る。

「柚香、辛い？」

「辛くないよ」

「どうして？目が…見えないんだよね…？」

そう聞くと、柚香は手招きをして。

近付いて柚香の横に座ると、優しく抱き締めてくれた。

「辛いのは一人でいるとき。そう思ってるとき。私も昔はそうだった。少しずつ見えなくなっていく世界で、心を閉ざして独りぼっち。

だから、辛かった」

「……………」

「でも今はね、気付いたんだ。私の周りには、たくさんの人がいるんだって。お父さん、お母さん、お姉ちゃん、向かいのおじいちゃん、隣のおばさん…。お兄ちゃんも望お姉ちゃんも。もちろん、ルウエも」

「うん」

「辛さ」は一人ではどうにも出来ないけど、誰かに支えてもらえば「幸せ」になるんだ。たくさん辛さは、たくさん幸せに。だから、辛くない。だから、幸せだよ」

「うん」

「ルウエは幸せ？」

「うん！」

村を出るのも祐輔と離れるのも辛かった。

でも、今は辛くない。

お兄ちゃんがいる、望がいる、明日香がいる、ルウエがいる。

葛葉、姉さま、セト、祐輔、夏月…旅をしていて出会ったみんなみんな。

支えてくれた、支えてくれる。

だから、ね。

ポカポカと、暖かい日射しが窓から射し込んでくる。

日向ぼっこをしながら袖香とお喋り。

「でね、祐輔が助けてくれたんだ。すごく怖かったけど、すごく嬉しかった」

「へえ〜。良かったね」

「うん！」

「ルウエ、あんまり危ない遊びはしないですよ？」

「枝跳びでは、転落したときのために”疾風”の術式を刻み込んだ石を持つとくんや。ルウエはどっかに落としてみたいやけどな」

「うう……」

「まあ、聞くに祐輔が氣い払っててくれたみたいやけどな。祐輔のことやから、近くで見とつたんとちゃうかな」

「優しいんですね、祐輔は」

「あいつらの中では一番上やからな。ちょっと抜けてるかんじはするかもしれんけど、オレよりもしっかりしてるわ」

「んー。比較対象が悪くて、イマイチすごさが伝わってきませんね」

「……どういう意味や」

「そのままの意味です」

「お兄ちゃんは、ちよつと頼りないかんじがするよね」

「ちよつとどころじじゃないよ」

「はあ……。オレをいつたいたいなんやと思ってるんねん……」

「頼りないお兄ちゃん」

「そうなのか？」

「おお……ルウエはちゃんと分かってくれとるなあ……」

「えへへ」

お兄ちゃんは、ギュツと抱き締めてガシガシと頭を撫でてくれた。自分も嬉しかったから、お兄ちゃんを抱き締めて。

「ただいまあ」

「あつ」

「ん？」「おつ」

「あれ？靴いっぱい。袖香、誰か来てんのか？」

ガタガタと何かを置くような音がして、しばらく音がしなくなった。そして、階段を上る音がして、部屋の戸が開いた。

「あ、なんや。来とつたんかいな」

「おう」

「明るいお姉ちゃん！」

「ルウエ。ウチはな、真つてゆうねん。明るいお姉ちゃんでもええけどな」

「真お姉ちゃん？」

「せやせや。真お姉さまでもええで」

「真お姉さま？」

「あー、やつぱりお姉ちゃんであえわ」

「真お姉ちゃんは、ここに住んでるのか？」

「住んでるつてか居候やね〜。部屋は隣やで」

「お姉ちゃん、お仕事終わったの？」

「あー、まだや。またすぐに出る」

「うん…」

「寂しい顔しな。兄ちゃんらもおるやろ？しかもな、今、ルウエの名札作ってんねんで」

「えっ？ルウエの？」

「うん！ヨロズカネの名札なんだぞ！」

「へえ〜、万金かぁ。出来たら見せてね」

「うん！」

「へへっ。最高の名札、作つたるからな」

「えへへ」

真お姉ちゃんはポンポンと頭を撫でてくれて。

またギョツと抱き付くと、今度は焼魚とみたらし団子の匂いがした。お昼ごはんを食べたのかな。

32 (後書き)

団子は昼ごはんになりませんよ。
ちゃんと食べてください。

柚香は少し疲れたのか、ごめんねって言って横になると、ルウエと一緒に眠ってしまった。

明日香も日向に移動して、ぬくぬくとしている。

「真さんって、世界一の鍛冶屋なんですか？」

「ん？誰がそんなことゆうてた？」

「採掘場のおじいさんが言ってたじゃないですか」

「ああ…あのじいさん…。あのじいさんにとって、真は孫みたいなものやからな。ジジイの欲目や。腕がええのは確かかもしれんけど、世界一ではないやろな」

「孫？」

「あのじいさんは、この向かいに住んどんねん。ばあさんと一人娘はルイカミナの方に引越したんやけど、じいさんは頑固やからヤマトに残って。まあ、休みには遊びに行ってるし、手紙のやり取りとかもしとるみたいやけど、やっぱり寂しいんやろな。柚香も真も孫みたいになんて可愛がつとる」

「ふうん…」

望はゆっくりと柚香の頭を撫でながら、どこか遠くを見ていた。どこか、遠くの誰かを思い出すように。

「あ、そうだ。タルニアさんに貰ったお金、どうしよう…」

「んなもん、貰っとけて。ターニヤも返してほしいなんて思ったらんやろ」

「でも、お昼ごはんもここで済ませちゃったし…」

「ルウエにお菓子でもこつたれ」

「お菓子！」

「でも、ヤクウルの飴が…」

「ああ、真にやりやええ。ここではヤクウルの飴なんて滅多に手に入らんし」

「お隣同士なのに、手に入らないのか？」

「わざわざ山越えやなあかんからな。それに、ヤマトに向かう行商人がヤクウルで飴を買うときは、道中の栄養補給のためが主や」

「ヤマトの周りの山は険しいからね」

「ふうん」

「だから、クーア旅団みたいなデカイ行商旅団が大量に持ってくるか、ルウエみたいに個人で持ってくるときくらいしか手に入らんねん」

「ふうん。じゃあ、真お姉ちゃんに喜んでもらえるんだな！」

「せやな。ギューツて抱き締めてもらえるで」

「えへへ」

楽しみなんだぞ！

次は、どんな匂いがするのかな。

「そういえば、真さんのお店、鍛冶屋とは思えないくらいお菓子だらけでしたね」

「ああ。その商店街の駄菓子屋でこうて置いたあんねん。半分くらいはあの辺のガキどもが持っていつとるけどな。…まあ、駄菓子も買えん子供らのためにこうてるってのもあるんやろ」

「へえ、優しいんですね」

「昔の自分と同じ思いをさせたくないやろ。孤児やった頃の自分と「ふうん」。真さんのこと、よく知ってるんですね」

「まあな。付き合いも結構長いし」

「でも、クーア旅団にいたことは知らなかった」

「真がちっちゃい頃の話しか聞いたことないからな」

「へえ」

「おんなじムカラウ弁やし、話しやすかつたんかな」

「…それだけじゃないのかもしれないよ」

「ん？」

「なんでもないです」

うん、お兄ちゃんは頼れるお兄ちゃんだから。

真お姉ちゃんも、そう思ったんじゃないかな。

と、そのとき

「こんにちは。誰かいます？」

「ん？」

「こんにちは」

下から誰かの声が聞こえた。

お兄ちゃんは立ち上がった、様子を見に行く。
自分も付いて行って。

階段の上からこっそり覗くと、入り口のところに誰かが立っていた。

「はいはい。誰ですか」

「あ、こんにちは。オイラ…じゃなくて、私、クア旅団の者で…」

「なんや、長之助かいな」

「ん？あ、あ…誰？」

「お前と一緒に喋ってた御者代理やるがい。つい朝のこと覚えてらんのか」

「ああ、御者の代理ね。思い出した。で、なんで御者の代理がこんなところにいるわけ？」

「いたらあかんのか」

「そこまでは言っていないけどね」

「妹がここに住んどんねん。会いにきたんや」

「へえ」。あ、話してた妹さん？柚香ちゃんに似てるなあとは思っ

てたけど」

「せや。って、袖香のこと知っとるんかい」

「じゃ、あがるね〜」

「待て。用件を言え」

「大したことじゃないよ」

「用件、を、言え」

「もう…。これだよ、これ」

そう言って、適当なお兄ちゃんは持ってた箱を見せる。

「薬か？」

「薬だけじゃないけどね〜。往診だよ」

「はあ？お前、薬師か」

「クーア旅団ルクレイ分隊医務班班長、長之助です。以後お見知りおきを」

「へえ〜」

「っはあ、初めて噛まずに言えた」

「どこに噛む要素あんねん！って、そんなことどうでもええから。診んねやったら、はよ診たって。今寝てるけど」

「おう」

長之助お兄ちゃんは、靴を脱いで階段を上がってくる。

「お、タルニアさまの腕輪。オイラも持ってるんだ〜」

「うん」

「じゃあ、ちよっとごめんな〜」

そう言って、長之助お兄ちゃんは抱き上げて部屋まで運んでくれた。手首には銀色の腕輪が光っていて。

「あ、誰だったんですか？ていうか、誰ですか？」

「クーア旅団の薬師や」

「え？なんで？クーア旅団？」

「クーア旅団はねえ、いろんなところに分隊があるんだ。で、オ
イラはルクレイだけを回る分隊に所属してる」

「へえ」

「いつも、みんな不思議がるよ。クーア旅団って名前は知ってるけ
ど、分隊があることは知らないからねえ。まあ、あくまで旅団だし、
一定の場所にいないのも原因かな」

説明をしながら、箱から出した何かの一方を耳に付け、もう一方を
袖香の胸に当てていた。

「何か聞こえるのか？」

「んー？聞いてみなよ」

それを付けてもらって、長之助お兄ちゃんがまた袖香の胸に端っこ
を当てると、トクン、トクンと、不思議だけど懐かしい音が聞こえ
た。

「心臓の音だね。心拍数も心音も正常。肺からも変な音はしない。
いたって良好だよ」

「これ、生きてる音なのか？」

「そうだね。頑張って生きてるよって証だね」

「へえ」

「んー、他にも悪いところはないみたいだね。うん、良いかんじ
…外に出したって大丈夫なんかな？」

「そうだね。人の多いところはダメだけど、まあ大丈夫だよ」

「よっしゃ。またおばさんと真にも伝えとくわな」

「ん。薬も減らして大丈夫かな」

「あの…月光病は…」

「うん。月光病の薬は出してないんだ。後天性だから、症状は抑えられるんだけど」

「え…。なんで…?」

「柚香ちゃんの願いでね。理由は分からないんだけど」

「そう…ですか…」

望は哀しそうな顔をしたけど、柚香が薬を飲まない理由はなんとなく分かった気がした。

柚香はきつと…

33 (後書き)

きつと…何なんでしょうかね。

「ただいまあ」

「あ、真お姉ちゃん！」

部屋を出て階段を下りて見てみると、確かに真お姉ちゃんで、大きな荷物をたくさん背負っていた。

「おっ、ルウエ〜。いてくれたんか〜」

「うん！」

「ちよつと待つてな。先に戻つといて」

「うん」

真お姉ちゃんはガタガタと荷物を下ろすと、靴を脱いで奥の方へ歩いていった。

：言われた通り、先に戻っておくんだぞ。
階段をまた上がって、柚香の部屋に入る。

「真さんだったの？」

「うん」

「真さん、何してるの？」

「うがいでもしとるんとちやうかな」

「そうなんですか？」

「風邪の予防やろ、たぶん」

「ふうん」

と、階段を上がってくる音がした。
廊下を歩いてきて、戸が開く。

「ただいま」

「おかえりなさい。お姉ちゃん」

「どう？調子は」

「長之助が、人がおらんとこやったら連れ出してもええってさ」

「へえ〜。良かったな、柚香」

「うん。お薬も減ったんだよ」

「ほう。良かったな、柚香」

「ふふふ。言ってること、さっきと同じだよ」

「ありゃ？」

「真お姉ちゃん！これ！」

「ん？なんや、これは」

「ヤクウルの飴なんだぞ！」

「すみません…。結構余っちゃって…」

「おお、ほうか。いくらでももろたる。おおきにな、ルウエ」

「えへへ」

お兄ちゃんが言った通り、真お姉ちゃんはまた抱き締めてくれた。大きく息を吸い込むと、今度は何かが燃えたような匂いとススの匂いが。

真お姉ちゃん、いつもススの匂いがするんだぞ。

「ウチ、なんかええ匂いするか？」

「ススの匂いがするんだぞ」

「ええ〜。ススかあ」

「お姉ちゃんが、お仕事を頑張ってる証拠だよ」

「へへっ。そう言われると照れるなあ」

「ほんで、ルウエのはどんくらい出来たん？」

「予定通りに出来てるよ。あ、せや。ルウエは、名札にどんな紋章入れてほしい？」

「ヤウトの紋章！」

「白き獣か。よっしや、分かった。それにしても、ヤウトなんて、またえらい渋いところに行くなあ。山越えて森抜けて」
「ルウエは、ヤウト出身なんです。ついこの前に発つてきたばっかりで」

「へえ〜。ヤウト出身かあ。じゃあ、将来は旅団天照に入んのか？」
「旅団アマテラス？」

「ありや？知らんか？ヤウト発祥の”治安維持認定”旅団や」

「えっ、そうなんですか？」

「ヤウトの自警団は有名やろ？あれが元祖」

「へえ〜。初めて聞きました」

「ウチも旅団員から聞いた話やからな。でも、よう考えたら旅団天照の紋章も白き獣やろ？」

「あ、そういえば」

「まあ、そういうことらしいで」

旅団アマテラス…。

どんな旅団なのかな。

クーア旅団みたいな、楽しい旅団なのかな。

「よっしや。真も帰ってきたし、オレらも帰るか」

「え…。帰るの…？」

「ルウエ、哀しい顔しちゃダメ。お別れは、次また会つたためにするんだから。お別れしないと、次また会えないでしょ？」

「うん…」

「だから、哀しい顔しちゃダメだよ？」

「うん。ごめんね、柚香」

「ルウエは良い子だね」

「えへへ」

(ボクも〜)

「ルウエは良い子。二人ともね」

(ん〜)

柚香に撫でてもらった。

：お別れは、次また会うためにする。

じゃあ、

「また来るからね、柚香！」

「うん。またね」

柚香をギュツと抱き締めた。

柚香の温かさど、あの生きてる音が伝わってきた。

お別れしたから、また会う。

柚香との約束、なんだぞ。

あちこちから良い匂いが漂ってくる。

夕飯が食べたいと、お腹の虫が鳴き始めた。

「腹減ったなあ」

「そうですね」

「なんや、怒つとるんか？」

「いいえ」

「腹減って機嫌悪いだけか」

「……………」

望はそっぽを向いて、不機嫌そうにバタバタと尻尾を振る。それを見て、明日香は退屈そうに欠伸をして。

「はあ……………」

「イライラしたら、余計に腹減るだけやで」

「ふん」

「ふふ、困った娘やのう」

「……………」

「ほんなら……………」

お兄ちゃんは懐から何かの袋を取り出して、それを望に渡した。

「干飯や。食いすぎんなよ」

「……………」

「ホシイってなんだ？」

「乾かしたご飯やな。まあ、オレのは特製の干飯やけどな。ちよつと食つてみ」

「望、望。ちよつとちようだい？」

「干飯はお腹が膨れるから……………これだけ」

袋からカラカラになったご飯粒を取り出して、手の平の上に置いてくれた。

置いてくれたけど……………」

「……………三粒？」

「美味しい夕飯が食べられなくてもいいなら、もっとあげるけど」

「うう……………」

「諦める、ルウエ。それが妥当な線や。それと望は、機嫌悪いからゆうつルウエに当たるな」

「当たってません」

「自覚ないんが一番あかんぞ」

「……………」

お兄ちゃんに怒られて、望の尻尾はシュンと垂れてしまった。

ちよつと落ち込んでるみたいだけど…まずはホシイイ、なんだぞ。

「ん！なんか美味しい！」

「なんかつてなんやねんっ！」

「あ、ホントだ。美味しい。味ご飯ですか？」

「せや。普通のご飯だけやと、ちよつと味気ないからな。おかつもいらんようにしたある」

「確かに、これだとおかつはいりませんね」

「まあ、それだけで生活出来るんは三日が限度やけどな。さすがに飽きるし。要するに、食料が尽きたときの繋ぎや」

「へえ〜。私も作っておこうかな…」

「割と簡単やしな。備えあれば憂いなしや。…まあ、望はその辺の野草でも味付けなしで食べるみたいやけどな」

「そんなこと…あつ！」

「なんや」

「塩、買っの忘れてた…」

「また明日買やええやろ。大声上げるほどのもんでもない」

「あ、すみません…」

「…機嫌は直ったか？」

「え？あ…はい」

「よっしゃ。ほなら、また機嫌悪くならんうちに、宿に戻るか」

「はい！」「うん！」

一粒残った干飯を明日香にあげると、一瞬で食べてしまった。

…ちゃんと味わったのかなあ。

ともかく、早く帰って夕飯、なんだぞ！

「他のみんなはどこに行つたの？」

「明日の朝市に備えて、もう寝てるわあ」

「ルウエさま。喋りながら食べるのは行儀が悪いですよ」

「お姉ちゃんも堅苦しいお兄ちゃんも、食べながら喋ってるよ？」

「むっ…」

「あらあ、一本取られたわねえ」

「夕、タルニアさま…」

「楽しく食べるのが一番よお。ねえ、堅苦しいお兄ちゃん？」

「夕、タルニアさま!？」

「堅苦しいお兄ちゃん」

「ルウエ。堅苦しいお兄ちゃんじゃなくて、クノさんでしょ？」

「クノお兄ちゃん？」

「そうそう」

「”遥かな大地”クノ。みんなを支えてくれる、頼もしくて優しい

お兄ちゃんよお」

「クノお兄ちゃんはすごいんだな！」

「あ、いえ…ありがとうございます」

クノお兄ちゃんはキョロキョロといろんなところを見たり、耳をパタパタさせたり。

お姉ちゃんは、それを見てニコニコしていて。

「おおい、酒が足りんぞ」

「呑みすぎです」

「んなことお、あらへえん。酒。長之助え、酒持ってこおい」

「望ちゃんの言う通り、呑みすぎだよ。明日どうなっても、オイラは知らないからね」

「酒持ってこんかあい。全然足りんぞお」

「ちよつと五月蠅いわねえ」

「放り出してきましようか」

「そうねえ。頼めるかしら？」

「お安い御用です」

そう言つて、クノお兄ちゃんは席を立つて。

「んあ？なんやなんや〜。やるんかあ？」

「お静かに願います」

「あぐっ…」

…何か殴つたようにも見えたけど。

グツタリとしたお兄ちゃんを、そのまま部屋の外へ連れ出していった。

「クノは容赦ないね〜。オイラも気を付けないと」

「あなたはお酒を呑まないでしょう？」

「まあ、そうだけどね」

「あ、そういえば、長之助さんつて分隊なんですよね？」

「そうだよ〜」

「なんで分隊を作るんですか？一纏めにした方が、一度に運べる荷物も増えるんじゃない？」

「そうねえ。馬車の数も増えるし。でも、人数が多くなると動きにくくなるのよ。宿も大きく取らないといけないし、道中の食料もたくさんいる。そうすると、扱える正味の商品総数なんて、さして変わらないのよお」

「へえ〜」

「それなら、分隊を作つて各地方で細々した商売や医療をする方が効率的でしょ？一度に扱う量が減つても、全体をみれば増えてる。」

それに、せつかくの”治安維持認定”なのに、いざというときにい
なかつたら意味ないから。だから、いろんなところに分隊を作っ
ておくのよお」

「なるほど」

「まあ、この仕組みはユニディナ旅団が作り出したものなんだけど
ねえ」

「ユニディナ旅団ですか」

「ええ。あの子たちはなかなか頭脳派だわねえ」

クーア旅団、ユニディナ旅団、旅団アマテラス。

全部の国でチアインジニンテイを受けた、三つの旅団。
よく分からないけど何かすごい旅団、なんだぞ。

「ただいま戻りました。よく眠っていたようなので、部屋に運んで
おきました」

「そう。お疲れさま」

「クノお兄ちゃんは、いつもそんなに堅苦しいの？」

「ル、ルウエ……」

「そうよお。いつもこんな調子」

「タルニアさまの側近として当然です」

「疲れないの？」

「いえ。タルニアさまのためです」

「もつと楽にしても良いのにね」

「長之助は楽にしすぎだと思えますが」

「あれえ？」

「ふふふ。クノは緊張しすぎよお」

「……！」

お姉ちゃんが頬っぺたに触ると、クノお兄ちゃんは真っ赤になって
大きく後ろに下がった。

…どうしたの？

「タ、タルニアさま！」

「ふふふ。さあ、ルウエちゃん、望ちゃん。たくさん食べられたかしら？」

「うん！」「はい。ありがとうございます」

「ふふ、お礼なんて良いのよ」

お姉ちゃんは頭を撫でてくれた。

望はなんだか恥ずかしそうにしてたけど、自分は嬉しくて。

だから、お姉ちゃんを抱き締めた。

クノお兄ちゃんは机に向かって、カリカリと何かを書いていた。

「それ、何？」

「これは本日の収支報告です。こっちは例の偽旅団の調査報告です

ね

「ふうん。見せて〜」

「はい。では、ここに座ってもらえますか？私も書き物をしないと
いけないので」

そう言って、膝を叩く。

正座してたのを崩して、胡座をかいてくれた上に座ると、優しく頭
を撫でてくれて。

「ふふ、懐かしいですね」

「何が？」

「私には妹がいます、昔はこうやってよく膝に乗せていたんです

「お

「今は？」

「今は妹も大きくなりましたね。それに、もうクーア旅団にはいませんから」

「え？なんで？」

「この街で鍛冶屋をしてるんですよ」

「真お姉ちゃん？」

「あれ？知ってたんですか？」

「うん。名札を作ってもらってるんだぞ」

「朝の万金ですか？」

「うん」

「そうですか。真の腕は確かです。クーア旅団として、それは保証しますよ。期待してあげてくださいね」

「うん！」

真お姉ちゃんなら大丈夫。

きっと、良い名札を作ってくれるんだぞ。

「それにしても、ルウエさまは温かいですね」

「そうなの？」

「ええ。月の光のように温かいです。きっと、心も温かいのでしょうね」

「えへへ。クノお兄ちゃんも、温かいんだぞ」

「ふふふ。ありがとうございます」

クノお兄ちゃんのほっこりとした温かさを感じながら、カリカリと何かの文字が書かれていく音を静かに聞く。

「お姉ちゃんのこと、好きなの？」

「はい。好きですよ」

「結婚、しないのか？」

「タルニアさまは、私には勿体無さすぎるお方です」

「このままで良いの？」

「ええ。一緒にいさせてもらえるだけで幸せですから」

「苦しくないの？」

「苦しいです。胸の奥が熱くなります。でも、私にとっては高嶺の花。憧れを持ったとしても、決して手は届かないんです」

「それで諦めるんかい」

「あ、起きてらしたんですか」

「アホゆづな。お前がガツーン殴るさかい、気絶しとったんやろ」

「それはそれは」

クノお兄ちゃんは、机から目を逸らさずに書き物を続けていて。

…喋りながら書くなんて、すごいんだぞ。

「…高嶺の花でもな、泥だらけ傷だらけになって取りに行くんがムカラウ魂や」

「私はムカラウ出身ではないので」

「それにな、ターニヤは高嶺の花なんかやない。手を伸ばせばすぐ届くところにおるんや。勝手に花の周りに壁作って、手が届かんフリをしとるんはお前や」

「……………」

「…タルニアも待つとるんとちゃうかな。クノが自分からゆづてくるときを」

「…そんなこと…ありえないです」

「……………」。ほうか。ほなら好きにしたらええ。ただし、あとになつて後悔するんはクノだけやないかもしれん、てことだけは覚えとけよ」

「……………」

クノお兄ちゃんは何も言わず、ただ紙の上に鉛筆を走らせているだ

けだった。

もうそれ以上は誰も喋らず、本当にその音だけになって。
…そして、その音も止まる。

「さあ、ルウエさま。寝ましようか。もう夜も遅いですから」
「うん」

立ち上がろうとすると、もう一度、頭を撫でてくれる。
そしてそのまま抱き上げて、布団まで運んでくれた。
お兄ちゃんは壁に向かってもう眠っていて。

「お休みなさいませ、ルウエさま」
「クノお兄ちゃんはどこで寝るの？」
「その布団です」
「自分も、そっちで寝ていい？」
「ええ。では、一緒に寝ましようか」
「えへへ」

また運んでもらって。

クノお兄ちゃんと一緒に布団に潜り込む。

「…お休み、ルウエ」
「うん。お休み、クノお兄ちゃん」

ゆっくり肩を叩いてくれた。
クノお兄ちゃんはとても温かくて、とても甘い匂いがして。
なんだか…とっても安心出来るんだぞ…。

何か音が聞こえた。

目を開けてみると、クノお兄ちゃんがいなくて。

「クノお兄ちゃん…?」

呼んでみても返事はなかった。

まだ周りは真っ暗で何も見えなかったけど、廊下の光が戸の隙間から洩れてきていて。

「おはようございます」

「おはよう。で、どうだったの?」

「はい。今夜、夜盗にあったのは二件のようです」

「そう。それで?」

「警察や私たちの目を全く掻い潜っての犯行でした。しかし、偵察の一人が真の鍛冶屋から出てきた犯人を目撃しています」

「お手柄ね。それで?」

「すぐさま、この子を逮捕したのですが…」

「どうしたの?」

「はい。犯行のことを全く覚えてないと言っんです。盗品もどこにも見当たりません」

「ふうん…。なるほどね…」

「タルニアさま、何か思い当たる節があるのですか?」

「まあねえ」

真お姉ちゃんのところ泥棒が入ったの?

大丈夫だったのかな…。

「さて、今日は忙しくなりそうねえ」

「はい」

「じゃあ、ご苦労さま。あと少ししかないけど、朝までゆっくり休みなさい」

「はい。では」

クノお兄ちゃんはそっと戸を開けて入ってきて、音も無く閉める。そして、静かに歩いてきて。

「あ、ルウエさま。起こしてしまいましたか」

「うん」

「それは申し訳なかったです。やはり、場所を変えるべきでしたね

…」

「ううん。いいの」

「そう言っていただけとありがたいですが、配慮に欠けていたのは事実ですから」

「うん。それで、犯人の子は？」

「ああ、話も聞いていたのですか。…この子ですよ」

ゆっくりと、抱いていた子を下ろす。

暗くてよく見えないけど、その子は静かに息を吐き出している。

「疲れと心労でしょうか、取り調べ中に眠ってしまった。一緒に寝てあげてください」

「うん」

誰かは分からないけど、この手はとても温かい。

それに、望やクノお兄ちゃんと同じような、ホッとする匂い…。

さつきより、もっと大きな音がする。

薄く目を開けてみると、部屋の中は日の光で明るくなっていて。

(ウウ…。ルウエから離れる！)

「起こしちゃ可哀想」

(うつ…)

「ふぁ…。なんでお前はそんな威嚇しとるんや」

(だ、だって、闇だよ？危ないよ！)

「なんでや」

(危ないから！)

「理由になつとらんわ。しかも、お前が騒ぐからルウエも起きとるし」

(えっ)

ルウエはこつちを向くと、大きく目を見開いて。

(ル、ルウエ…。ごめん…。起こしちゃったね…)

「うつん。ちよつど起きる時間だったんだぞ」

(うつ…。それもこれも、全部お前のせいなんだからな！)

「…ふうん」

(見てよ！この態度！ねえ！)

「お前のアホみたいにギャンギャン吠える態度も考えものやけどな」

(兄ちゃんは、こいつの味方なの！？)

「お前みたいな喧しいやつより、この子みたいな静かな子の方がええわ」

そう言つて、お兄ちゃんはルウエの頭をはたく。

そして、ルウエは不満そうな呻き声を洩らしながら消えてしまった。

「はぁ…。ホンマ、うるさいやつちゃ」

「ルウエ、起きられる?」
「うん」

身体を起こすと、窓からの光がちょうど顔に当たって。
朝か…。

「おはよう」

「おはよう、ヤーリエ」

「なんや、知り合いか」

「うん。前に一回だけ会ったんだぞ」

「そうか」

ヤーリエはそつと頭を撫でてくれた。

それが気持ち良くてヤーリエをギュッと抱き締めると、優しく背中を叩いてくれて。

「仲良しやなあ。ホンマに一回しかおうてへんのか? 幼馴染みかなんかとちやうん?」

「違つよ」

「ふうん…」

「それより、朝ごはん、食べるにいかない?」

「ああ、せやな。食べるにいこか」

さあ立ち上がろうと思ったとき戸が開いて。
そこにはクノお兄ちゃんがいた。

「みなさん、朝ごはんですよ」

「今、行こうとしてたところや」

「そうですか。では、冷めないうちに」

「ちよつ、どけ! あんた邪魔!」

と、廊下の向こうの方から怒鳴り声が聞こえてきて、
急ぐ足音は部屋のすぐそこで止まる。

「クノお兄ちゃん！た、大変や！ルウエは？ルウエはどこ！？」

「とりあえず落ち着け。それと、ルウエさまは…」

「あつ！ルウエ！ホンマごめん！」

クノお兄ちゃんを押し退けると部屋に雪崩れ込んできて、いきなり
謝る。

…セトが姉さまによくやる、ドゲザってやつなんだぞ。

ごめんなさいの一番すごいのって葛葉は言ってたけど…。

「どうしたの…？」

「もう、ホンマ、ウチ、どうしたら…」

「クノの言う通り、まずは落ち着け。話はそれからや」

「これが落ち着いてられるか！ルウエの大切な万金が盗まれたのに
！」

「だからこそ落ち着け。慌ててもしゃーないやる。ほなら、朝ごはん
食べにいこか」

「はあ！？」

「真。この件についてはタルニアさまからお話がある。だから、な
？」

「くう…」

真お姉ちゃんは床をバンバンと叩くと、手をグツと握る。

真お姉ちゃん…。

「美味しいわねえ。さすがクノだわあ」

「ありがとうございます」

「クノさんが作ったんですか？」

「ええ。お口に合いましたでしょうか」

「はい！とっても美味しいですよ」

「ま、オレの方が百倍上手いけどな」

「そうかな…」

「なんやなんや。美味しい美味いゆうて涙ポロポロ流して食うてたくせに」

「それはない」

…大袈裟に言い過ぎなんだぞ。

お兄ちゃんのお料理も美味しいのは確かだけど。

「ちょっと！なんでそんなあんなららのんびりしてるん！？ルウエの大切な万金が盗まれたんやで！」

「盗まれたもんはしゃーないやろ。慌てて盗品が戻るんやったら、いくらでも慌てるけど」

「ぐずぐずしてる間に、裏にでも売り飛ばされたらどないすんの！？」

「それはないわあ」

「はあ！？」

「今のところ、これまで盗まれたものが裏に流れているという報告はない。それに、たとえそうなっても私たちが必ず取り戻す。ラズイン旅団の名にかけて。そうだろ？」

「うう…」

真お姉ちゃんは机を一度叩くと、席に戻る。
そして、そのまま突っ伏して。
泣いてるみたいだった。

「さあ、それじゃあ、犯人のことだけど」

「現場ではヤーリエが目撃されてるのに、捕まえてみたら何も覚えてなかったんですね？」

「うん…。何も覚えてない…」

「…嘘ついてるんとちゃうか」

「ヤーリエは嘘なんかつかないもん！」

「そんなん分からんやろ。狼の皮被った狸かもしれん」

「真」

「…ふん」

クノお兄ちゃんが睨むと、真お姉ちゃんは一瞬睨み返してそっぽを向く。

でも、ヤーリエはジッと明日香を見ていて。

なんだか、モヤモヤなんだぞ…。

「犯人の目星は付いてるわあ。捕まえ方も」

「えっ、本当ですか？」

「犯人はたぶん聖獣。しかも、若い聖獣や。光りもんが好きとか、そんなことで集め回つとるんやろ。手近における自分の属性に合ったやつに取り憑いて、盗みを繰り返してるとるんやと思うで」

「ふふ、さすが幹旋者ねえ」

「まあな」

「聖獣？犯人が？」

「たぶんねえ。今回、捕まったのはヤーリエちゃんだけだから、どの属性かは分からないけど…。でも、だいたいの犯人像が分かれば、それなりの計画も立てられるわあ」

「どんな計画なんですか？」

「それは、警察と一緒に相談しましょうか」

そして、お姉ちゃんはこっちを見てニッコリ笑った。

…何かあるのかな？

馬車の車輪がゆっくりと止まる。

前の窓から外を見てみると、何か石で出来た建物がそこにあつて。

「クア旅団です」

「はっ！どうぞ、中へ！」

「はい」

そして、また馬車が動き出す。

さっき見えていた建物も、どんどん近くなってくる。

「ああ…警察なんて緊張しますね…」

「望はなんか悪いことしたんか？」

「あなたはしてますけどね」

「ワウ」

「なんのことかなあ」

「ふふ、そんなに緊張することもないと思うけど。楽しいところよ
お」

「ホントですか？」

「楽しいところではないですね」

「そうかしらあ？」

「ええ」

クノお兄ちゃんがそう返事をしたところで馬車はゆっくりと左に曲

がり、また止まった。

「さあ、着きましたよ」

「はあく。ここまで乗り心地のええ馬車なんか初めてやわ」

「連絡輸送はご利用になられたことはないですか？客員輸送用車輛は、全てこれと同程度の仕様になっておりますが」

「連絡輸送なんか金掛かるやん。使おうと思ったこともないわ」

「そうですか」

「早く降りましょ？話はまたあとですればいいわ」

「おお、すまんの」

お兄ちゃんは少し残念そうに立ち上がると、馬車を降りた。それに続いて、みんな降りていく。

「ルウエ」

「うん」

よく狙いを付けて。

望に向かって飛び降り、ギュッと抱きつく。

「ル、ルウエ…。重い…」

「えへへ」

もう一度ギュッと抱き締めて、少し後ろへ飛び降りる。

望はちょっと困ったように笑い、頭を撫でてくれた。

「じゃあ、行きましよう」

「うん！」

「ケ、ケイサツ…。ぼくも、なんだかドキドキしてきた…」

「なんや。ヤーリエも緊張しとるんかい。大丈夫やって」

「う、うん…」

「逆に堂々としてるあなたが不思議でなりません」

「オレはなんも悪いことしてへんし」

「ふうん…」

「ヤーリエ」

「あ…うん…」

ヤーリエの手を握ってあげると、ちょっとぎこちないけど笑ってく
れて。

(むう…)

どうしたの？

(…なんでもない)
ふうん。

「い、行こっか…」

「うん」

ルウエはなんだか機嫌が悪いみたい。

なんで、ヤーリエのことが嫌いなのかな。

闇だから？

…聞いてみても返事はなかった。

ソウサホンブって、なんだか楽しいところ。

「おう、ボウズ！ちょっとこっち来い〜！」

「何〜？」

「おめえさん、可愛いなあ。俺の孫にならんかい」

「じゃあ、シヨチヨウは自分のおじいちゃん？」

「おう、そうだな。おっ、そっちのちっこいのもどつた〜」

「ぼく？」

「そうそう。ほれ、こっち来な」

「うん」

「署長！遊んでる場合じゃないでしょ！」

「遊んでないよ。な、ボウズども」

「うん！」「えええ、どうかなあ」

「はあい、静かに。会議、始めるわよ」

「ういっす」

お姉ちゃんが手を叩くと、みんな黙って。

そしてシンと静まりかえった中、作戦会議は始まった。

「さあて。じゃあ、行きましょうか」

「はい」

「ほなな。またあとで」

「ええ」

「行ってきます」

「行ってきます」

明日香とクノお兄ちゃんと一緒に街へ出る。
通りは人でいっぱい、いろんな声や音が聞こえた。

「いるのかな」

「いるでしょうね」

「大丈夫かな」

「大丈夫ですよ」

「あっ」

「どうしました?」

「美味しそうなお菓子……」

「ふふ、買ってあげましょうか?」

「いいの?」

「ええ」

クノお兄ちゃんは通りを横切って、お菓子屋さんに近付いていく。
明日香も一緒に付いて行って。

「すみません。誰かいますか?」

「はあい。いらっしやうい。ゆっくり見て行ってください」

「ルウエさま、どれがいいですか?」

「うーん…」

「あれえ？クーア旅団の方ですかあ？」

「はい」

「いつもお世話になってます。クーア旅団で買わせてもらってるいろんなところのお菓子、とっても人気なんですよお」

「ご購入にしていただし、ありがとうございます」

「クノお兄ちゃん、これがいい」

「はい。では、これを貰えますか？」

「はいはい。二百円になります」

「二百円ですね」

お財布からお金を取り出すと、お菓子屋さんのお姉ちゃんに渡す。

「はあい、確かに。オマケ、入れておきますね」

「えへへ。ありがと、なんだぞ」

飴を二個、オマケで貰っちゃった。

お菓子屋さんのお姉ちゃんは、ニッコリ笑って頭を撫でてくれた。

「またね」

「はあい。またね」

そして、お菓子屋さんを出る。

「ねえ、食べて良い？」

「良いですよ。でも、お昼ごはんを食べられるように…これだけですな」

「ええ…」

「ふふ、美味しいごはんを食べに行きましょう。美味しいごはんを美味しく食べるために、今は我慢してください」

「…うん」

「ルウエさまは良い子ですね」

クノお兄ちゃんは頭をポンポンと叩いてくれて。
美味しいごはんのために、今は我慢するんだぞ…。
クノお兄ちゃんとの約束…。

「はい、どうぞ」

「うん」

渡されたヨウカンは、ホントに少しだけだったけど。
思い切って口の中に入れてみる。

「ん！」

「どうですか？」

「あんまり甘くないけど、美味しい！」

「ふふふ。良かったですね」

「うん！」

でも、なんだか残念だったから少し指を舐めて。
お昼ごはんのあとが楽しみなんだぞ！

「あの…ルウエさま」

「ん？」

「少し寄りたい場所があるのですが…」

「どこ？」

「はい。妹の家です…」

「真お姉ちゃんのこと？」

「そうですね。真も住んでいます」

「自分は、別に良いんだぞ。明日香は？」

「ワウ」

「良いって」

「ありがとうございます」

そう言つて、クノお兄ちゃんは通りから細い道に入つて、どんどん進んでいく。

細い道には誰もいなかったけど、少しでもはぐれたら二度と元に戻つてこれないような気がするくらい、あちこちに曲がついていて。

…もう何回曲がつたかも分からないくらい曲がつたとき、急に広い道に出た。

「着きましたよ」

「うん。柚香の家」

「柚香にも会つていたのですか」

「昨日、お兄ちゃんと一緒に来たんだ」

「へえ〜。あの人は意外と顔が広いんですね」

「うん」

クノお兄ちゃんは戸の前に立つと、二回叩いて。

「柚香、いるか？」

「お兄ちゃん？」

「ああ。入るよ」

「はいは〜い、どうぞ！クノ、お帰り〜！」

「おわっ!?!」

戸が突然開いたかと思うと中から誰かが出てきて、あっという間にクノお兄ちゃんを押し込んでいつてしまった。

…誰？

「ん？おおっ！？キミがルウエちゃん！？噂以上に可愛いね！」

「え、ええ？」

「さあさあ、上がりなよ！お腹空いてる？なんでも作ってあげるよ！」

「か、母さん…。ちよつとは落ち着きなよ…」

「落ち着いてるさあ。で、クノは何食べる？いやあ、それにしても久しぶりだねえ！」

な、なんだかすごくすごいお母さんなんだぞ…。

よく分からないうちに、柚香の部屋まで来ていた。

「あ、久しぶりだね」

「そうそう、久しぶり久しぶり。全然帰ってこないもんね。あまり心配しなかったよ」

「ルウエと明日香も来てくれたんだ」

「うん」「ワウ」

「それじゃあさ。お母さんは昼ごはん、作ってくるよ。ゆっくりしてな」

「えっ、いや、昼は外で食べようかと…」

「ダメダメ。お金掛かるでしょ」

お母さんはクノお兄ちゃんを無理矢理座らせると、部屋から出ていってしまった。

クノお兄ちゃんはため息をついて、柚香はクスクス笑っている。

「母さんが休みだとは思わなかった…」

「ふふふ。でも、お母さん、すごく嬉しそうだったじゃない」

「…そうだな。それより、柚香。長之助から聞いてたけど…」

「うん。目、見えなくなっちゃった」

「柚香…」

「えへへ。でも、昨日、ルウエにも話したんだけど、私、辛くないよ。みんなの光が見えるようになったんだ」
「…そっか」

クノお兄ちゃんは袖香をギュッと抱き締める。
袖香は、その赤い目をそっと閉じて。

情けなくお腹が鳴った。

ジツとしていてもどうにもならないし、動こうにも動けない。

「はあ……」

（「う、ごめんね……」）

「……………」

（「うう……」）

（「うう、どこのなさ。」「はんはないの？」）

（「な、ないよ……」）

（「キミ、ここに住んでるの？」）

（「うん……」）

（「ルウエの万金はどこ？返してよ」）

（「うう……。綺麗な見つけたのに……」）

（「他人のもの盗っという何言ってるのさ！」）

「ルウエ、うるさい」

（「う、ごめん……」）

（「クー、何か探してくるよ」）

（「逃げる気？」）

（「じゃ、じゃあね！」）

（「あ！待て！」）

そして、クーアはまたどこかに消えてしまった。
テンイとかいう術式ってルウエが言ってたけど……。
自分にも使えるのかな……。

（「もう……。あいつ、どこに行ったのかな……」）

「……………」

(わざわざお昼ごはんの直前で飛ばさなくてもいいのにね)
「……………」

(……………)

「へえ。こんなところにねえ」

「お姉ちゃん！」

「はあい。ちよつと待たせたかしらあ？」

「転移を使つてたんですね」

「望！どこ？」

「上だよ。うーん…掘っちゃっていいのかな」

「掘らなくても、そこに入口があるわよ」

「あ、ホントだ。でも、小さいですね…。ルウェなら通れるかな？」

「どこ〜？」

「ちよつと待って」

ガサガサと何かを掻き分けるような音がしたかと思うと、急に天井が明るくなった。
そこから望が見えて。

「望！」

「あつ。なんか、いっぱい散らばってますよ」

「クーアが集めたんだって」

「クーア？クーアって？」

(クーアはクーアだよ)

「 ” 白銀の獣” カウユの使徒、 ” 黄金の魂” クーア。 商売繁盛の神様としても知られてるわあ」

「クーア旅団って、クーアから取ってるんですか？」

「そうね。まあ、商売繁盛の神様だからってだけじゃないんだけどねえ」

「そうなんですか？」

「ええ」

そして、お姉ちゃんは天井の穴から覗いて。

「クーアはどこに行つたの？」

「お昼ごはんを探しに行つたよ」

「そう。それにしても、溜め込んだわねえ。ルウエちゃん、こつちまで来れる？」

（ルウエ、ここに飛んできたときに足を挫いちゃったみたいなんだ。ボクが明日香くらい大きかったら良かったんだけど…）

「じゃあ、クーアが戻るのを待ちましようか」

「ルウエ、あんまり動いちゃダメだよ」

「動けないよ」

ズキズキして、動くとすごく痛い。

少し明るくなったけど、まだ暗くて自分ではよく見えない。

さっき足を見てくれたルウエは、どうなってるのか教えてくれないし。

「そういえば、お昼ごはんを探しに行つたつて、ルウエの？」

「うん…」

「大丈夫よお。クノから報告は受けてるから」

「えっ、いつの間に？」

「ふふふ。いろんな秘密の方法があるのよお」

「へえ〜」

「さあ、これを食べなさい」

（ボクが取ってくるよ）

「うん」

ルウエは何かの包みを受け取って、運んできてくれた。

その包みからは、すごく美味しそうな匂いがして。

開けてみると、さらに匂いは広がる。

「わぁ〜。何、これ？」

「豚の角煮とおにぎりらしいわぁ。柚香ちゃんのお母さんの手料理よぉ」

「いただきます！」

豚のカクニもおにぎりも、とても美味しくて。涙が出そうなくらいだった。

「これ、すごく柔らかい！」

「ずっと煮込んであったのねえ。手が込んでいるでしょう」

「うん！ルウエも食べてみてよ！」

（ボクは大丈夫だから、ルウエが全部食べて）

「でも、美味しいよ？」

（うん。だから、ルウエに食べてほしいの）

「…分かった。ありがとう」

（えへへ）

ルウエの頭を撫でてあげると、鼻を胸に押し付けてきて。

（あつ！何か食べてる！）

「お帰り、クーア」

（ただいま。はい、美味しい木の实だよ）

「うん。ありがとう」

（ねえ、何食べてるの？）

「クーア。帰ってきたの？」

（あ、え…誰？）

「ちよつとそこで待ってなさいよぉ」

（え…？）

お姉ちゃんが何か呟くと、天井の穴から黒い影が下りてきて、それが光の下に出ると、金色に輝いた。

(あう…)

「名を持たぬ子よ。この宝石鉱石の数々。まさか我々の掟を破り、他の者へ迷惑を掛けているのではなからうな？」

(うう…)

「唸っているのは分からぬ。カウユさまに、たつぷりお灸を据えてもらわねばならぬのか？」

(うう…うう…。ごめんなさい…ごめんなさい…)

「……………」

「その辺にしておいてあげなさい」

「しかし、タルニアさま……」

「クアア。盗んだものは全て返すこと。今まで取り憑いて迷惑を掛けた人に謝ること。早く契約者を見つけろ。これを守れるなら、この子を止めてあげるわあ」

(ホント…?)

「ええ」

(じゃあ、約束する…)

「そういうことよ。許してあげてくれない？」

「ふむ。しかたあるまい」

そう言うと、金色の狐はこっちに近寄ってきて。そして、足を舐めてくれた。

「酷い怪我だ。すぐにちゃんとした治療を受けねばなるまい。」手
当”で誤魔化している間に、早く医者へ行きなさい」
「う、うん……」

痛みが嘘のように引いて、自由に動かせるようになった。
手当…。

これも術式なのかな…。

「おぬしは私と共に来てもらうぞ。やることがたくさんあるのでな
(は、はい…)

「タルニアさま。では、私は…」

「はあい。またあとでねえ」

「はっ」

短く返事をする、金色の狐とクーアは消えてしまった。
地面に散らばっていた、たくさん石と一緒に。

「さあ、ルウエちゃん。術式の効果が消えないうちに帰りましょう」
「うん」

ルウエに手伝ってもらって、天井の穴から出る。

クーア、すごく怒られてた…。

それに、あの金色の狐、葛葉と一緒に尻尾が九本あった。
なんだか懐かしいかんじがしたんだぞ。

「何したの？酷いねえ」

「痛い…んだぞ」

「ほいほい。しっかり消毒して」

「うう…染みる…」

「我慢我慢」

「血がいつぱい出てるんだぞ…」

「大丈夫大丈夫」

最後に、長之助お兄ちゃんは包帯をグルグルに巻くとニッコリ笑って。

「はい、完成」

「痛いよ…」

「また夜に包帯を交換しような」

「うん…」

（ルウエ、ルウエ）

「あ、クアア」

「クアア？」

「狐のクアア！」

「へえ〜。狐の。って、狐は喋らないよね」

（ルウエ）

「クアア、どうだったの？」

「ああ、聖獣ね」

（ちょっと怒られちゃったけど、大丈夫だった！）

「ルウエさま。この者のせいで怪我をされて、申し訳ないです」

「あ、金色の狐」

「わ、私は金色の狐などという名前ではありませぬ。如月という、

タルニアさまから賜った名がありますので」

「キサラギ？キサラギって如月？」

「はい。どういう如月を想像しているのかは分かりませぬが。ふふ、誠に良き名だとは思いませぬか？」

「うん。格好良いね」

「え？あ、はあ……。格好良い……ですか……」

「ルウエ。如月は女の子だから、可愛いの方が良かったかもね」

「でも、如月って格好良いんだぞ」

「ははは。確かに」

「ねえ、そんなことより！」

「そ、そんなこと……」

「……………」

「あーあ。如月、もうダメだね」

「なんで？」

「まあいいじゃん。何の話？」

「あっ！そうだ！」

そう言っつてクーアは足下まで走ってきて、キラキラした目で見上げてくる。

「どうしたの？」

「クーと契約して！」

「えーっ！ダメーッ！ボクのルウエなのに！」

「キミは独占欲が強いんだね」

「ど、独占欲……」

「この者と契約したのなら分かっているとは思いますが、契約というのはルウエさま自身に相当な負荷を掛けることになります。また、この者たちがルウエさまに迷惑を掛けないとも……」

「でも、クーアは契約者がいなくて困ってるんでしょ？」

「それはそうですが……」

「じゃあ、契約する」

(やった！)(ええ〜…)

「…ありがとうございます。では、この者はまだまだ未熟なようなので、微力ながら私が助太刀いたします」

「じゃあ、大切なものがあるよね…」

「はい。我々は魂と呼んでおりますが」

ルウエはセトの銀貨。

クーアは何が良いかな…。

「うん。やっぱりあれかな」

「オイラが取ってきてあげよ。足、痛いでしょ。で、何？」

「うん、えっとね…」

長之助お兄ちゃんに伝えると、すぐに部屋を出て取りにいらしてくれた。

足音がしなくなった頃、如月がこっちに向き直ってジッと見つめてくる。

「ルウエさま。ひとつだけ聞いてもよいですか？」

「何？」

「ルウエさまは、我々との契約をどう思っているのか。それを聞きたいのです」

「どういふこと？」

「……………」

如月はグルリと考えて、そっと目を瞑る。

そしてゆっくりと目を開けると、さっきまでの優しい目ではなくなっていた。

「契約をすると契約者に負荷が掛かるのは事実です。しかし、契約者に力を与えるのも事実。今、人間たちの聖獣に対する干渉力が衰え、契約出来る者も少なくなってきたいますが、力を求めて契約しようとする者も未だに跡を絶ちませぬ」

「力……。自分は、力なんていらんのだぞ……。ルウエとかクーアとか……みんなと仲良くなりたいたいから……！」

「では、契約を破棄してください。ルウエともクーアとも、契約がなくとも会えます」

（き、如月……！）

「……それで如月が満足するなら、それでルウエやクーアとずっと一緒にいられるなら、自分は契約を破棄する。葛葉が言った。そこにいるっていう幸せ。一緒にいたっていう幸せ。契約なんてなくても、自分は信じてるもん。二人との繋がり」

（ルウエ……）（えへへ）

「……………」

「あ。如月との繋がりも、だよ」

「……タルニアさまのときも、同じ質問をしました」

「え？」

「タルニアさまは、私の質問に対して笑って答えました。力は自分の努力次第でいくらでも手に入れられるけど、家族は自分だけではどうにもならないって……。初めてでした。私を家族として迎え入れてくれた人は。嬉しかった……。だからそのとき、全身全霊タルニアさまに尽くそうと誓いました」

「うん」

「ルウエさま。試すような真似をして申し訳ありません。いかなる罰をも受ける覚悟です」

「じゃあ、受けてもらおうかしらあ」

「えっ」

そしてお姉ちゃんは如月を後ろから抱き締めて、鼻を軽く弾く。

何が起きたか分からない如月は、キョトンとして固まっていた。

「ルウエ、これだよね」

「あ、うん。ありがと、長之助お兄ちゃん」

「どういたしまして」

「さあ、如月。手伝ってあげなさい」

「え、あ…。はい」

急に我に返った如月は頭を何回か振ると、しっかりと立ち上がった。なんだか少し焦っているようにも見えたけど。

「さあ、ルウエさま。魂は…」

「お兄ちゃんに貰ったベッコウの櫛なんだぞ」

「はい、確かに。では、始めます」

ベッコウの櫛を握って、ゆっくりと目を瞑る。
クーアとの契約…なんだぞ。

40 (後書き)

クーアとも契約するんですか。

龍甲の櫛はお兄ちゃんに貰ったんですけどっけ。

「盗品は全部戻ったし、犯人も捕まったし。一件落着やな」

「そうですね。まさか聖獣が犯人だとは思いませんでしたけど」

「まあ、そんなこともあるわさ」

「クーア、大丈夫？」

（うん…）

「ルウエは、今回は回復が早いね」

（ボクがいるから）

「へえ〜。…なんかよく分からないけど」

「聖獣と契約することで、身体が丈夫になつとるんやな。特に、この体力バカのせいで疲れにくくなつとるんやろ」

（体力バカって何さ）

「そのまんまや」

（うう〜！）

「ところで、私に斡旋してくれる約束はどうなつたんですか？」

「ああ、忘れとつた」

「ええーっ！酷いです！」

「まあええやん。今思い出したんやし」

「望お姉ちゃんも契約するの？」

「出来たらね」

「召喚師が夢なんやし。聖獣の一匹二匹使役出来んな」

「じゃあ、ルウエの方が召喚師さんに近いんだね」

「召喚師は憧れであつて、夢ではないです」

「ん？そうなん？」

「はい。いつも聖獣と一緒にいられるのって良いじゃないですか」

望はそう言うと、ルウエの背中を撫で始める。

ルウエは気持ち良さそうに耳を寝かせて。

「望お姉ちゃんは、誰と契約するの？」

「望は火の属性が強いから、まあその辺やな」

「へえ」

「よっしゃ。いっぺん喚んでみるか」

「え？ここで？」

「いや。近くの公園に行こか。柚香も一緒に」

「えっ、私も？」

「長之助から許可出たやろ。な、クノもええと思っやろ」

「……………」

「おい、クノ」

「あつ、はい、何でしょうか？」

「はあ…。もうええわ。こんなやつほっといて行くぞ」

（公園）

「クーア、帰って休む？」

（うん…。ごめんね…）

「じゃあ、またあとでね」

クーアの頭を撫でてあげると、弱々しく尻尾をパサリと振ってそのまま消えてしまった。

対してルウエは、部屋の中を飛び回ってお兄ちゃんに殴られていた。

「よし、出発進行！」

「おおーっ！」

柚香を連れて公園へ。

望は誰と契約するのかな。

家を出てほんの少し歩いたところ。

大きな公園があった。

「わあ〜。ねえ、ヤウトくらいあるかな」

「ヤウトより、まだ一回りは大きいやろな」

「へえ〜」

どっちを見てもずっと建物はなくて、木や草がたくさん生えている。人もたくさんいたけど、広いから気にならなかった。

「よっしゃ。この辺でええやろ」

（誰を喚ぶの？）

「んー。まあタルニアやな、まずは」

（やった！）

「なんでお前が喜ぶねん」

（えへへ）

「ほなら、いくで…」

お兄ちゃんは大きく深呼吸をして、何か変な構えをする。

（…何それ）

「変な格好ですな」

「召致というのは、そんな構えをしないと出来ないのですか？」

「やかましいわ！オレの勝手やろ！」

望や如月に言われ、顔を真っ赤にさせて変な構えをやめた。そして、手を前に出して

「熱くたぎる炎よ。我らにその真価を示せ！」

（…何言ってるの？毎度のことだけど）

「格好付けたい年頃なんですよ」

「そのような面妖な詠唱がいるとは聞いたことがないです」
「ああもつ！お前ら、タルニアに焼き払わせるぞ！」
「私には公園を焼き払うという趣味はない」

一瞬、空気が燃えるように熱くなったかと思うと、大きくて綺麗な鳥がそこにいた。

「おう。久しぶりやな」

「お前と会うのは二ヶ月と十日ぶりだ」

「細かいなあ…」

（タルニア！）

「む？ルウエか。相変わらず、やんちゃそうだな」

（タルニアも全然変わってないね）

「私が変わろうと思えば多くの労力と時間がある」

（ねえ、この子、ボクの新しい契約者なんだ！ルウエって言うの）

「ほう。ルウエか」

「うん。こつちが望、あの二人がクノお兄ちゃんと柚香なんだぞ！」

「クノか。懐かしい名だ」

「よろしく願います、タルニアさま」

「クノもええけど、今日はこいつと契約してもらおう思て喚んだんや」

「ふむ。望か」

「こ、こんにちは…」

タルニアは、望をジッと見つめてしばらく動かなかった。

そして、一度大きく羽ばたいて火の粉を散らす。

…周りの草が焼けて、少し焦げ臭かった。

「望。お前はなぜ、私の力を必要とする？」

「ち、力なんていりません…」

「では、なぜ私と契約したいと思うのだ」

「わ、私…聖獣たちとずっと一緒にいたいだけです…」

「ふむ？一緒にいたい？」

「はい…」

「そうか」

タルニアはまた羽ばたくと、望の目の前まで歩いていく。そして望の前でうずくまると、ゆっくりと目を閉じた。

「私に名前を付けてくれ」

「え、ええ？」

「私は貴女を主と認め、生涯遣えることを約束しよう」

「え…？なんで…？」

「私では不服か」

「いや…そういうわけじゃ…」

「私に名前を賜りください。さすれば、この身全てを貴女に捧げます」

「え…じゃあ…カイト…」

「カイト」

「う、うん…」

「ありがとうございます」

そしてまたカイトがバサバサと羽ばたくと、その紅い翼に黄色とか青とか綺麗な色が付いて。

散る火の粉は、なんだか雪みたいだった。

「ふぁ…あふう…」

「どうしたの？」

「うん…。ちょっと眠い…」

「……………」

「お前は闇が強いな」

「うん」

「契約はしてないのか」

「契約？」

「ヤーリエは、狼さん？」

「うん」

「尻尾がフワフワだね」

「えへへ、ありがと」

柚香はヤーリエをあちこち触って確認をしている。その横で、望は明日香を枕にしてもう眠っていて。

「柚香は、目が見えないの？」

「うん。……………」

「……………」

「月が昇ってきたようですね」

「月が何か関係あるの？」

「月光病だね」

（月光病…）

「月の使徒さんには辛い名前かもしれないね」

（ルイムナさまは関係ない…。関係ないのに…）

「そうだね。でも、月の光が私たちを照らす間、患者に症状が出るのも事実」

(うう…)

「柚香ちゃんは、元々は声が出なかったんだよね」

柚香はコクリと頷く。

いつの間にか、柚香の目の色は昼に見た赤色から透き通った黒色になっていて。

目が合うと、ニツコリ笑ってくれた。

「柚香、目が見えるの？」

「昼の症状は昼だけみたいだね」

「みなさま、夕飯が出来ましたよ」

「ほれ、どけどけ。邪魔や」

「夕飯！」

「では、私は退散するのでしょうか」

「あらあ？久しぶりねえ」

「む？…ああ、いつぞやの泣き虫令嬢か」

「泣き虫？」

「ふふふ。名残は尽きないけど、帰るなら仕方ないわねえ。また会える日を楽しみにしてるわあ。そのときにまたゆつくり話をしましょう」

「え？タルニアさん？」

「はは、あのお姫さまがずいぶんと偉くなったみたいだな。部下の前で昔の話をされるのは恥ずかしいかな？」

「クノ、水の準備を」

「は、はあ…」

「おっと、怖い怖い。早々に去るとしよう」

また空気が一瞬熱くなって、そのままカイトは消えてしまった。

…お姉ちゃんはニコニコしてたけど、何か別のものも見えた気がした。

「さあ、夕飯にしましょうか」

「望お姉ちゃん、起きて。夕飯だよ」

「うーん…明日食べる…」

「アホか。起きろ」

「望は契約で疲れているのだ。もう少し労ってやれないのか」

「お前もいきなり出てくんない。熱いし。火事になる」

「私は火の使徒。ルウエのように、光だけ発せよというのは無理な相談だ。それに、私もさすがになんでも焼き払うというようなことはもうない」

「帰るんやったら、きっちり帰ってゆってんねん」

「主に無理をしてほしくないと願うのは当然のことではないだろうか」

「あーもう！ルウエとちごて、お前はややこしいな！」

「私は思っていることを言っているだけだ」

「それがややこしいねん！」

「ふむ」

さっぱり分からないという風に首を傾げる。

そして、望を見ると少し目を瞑った。

「んう…ん？あれ？」

「あ、起きた」

「どうしたの？夕飯？」

「せや」

「じゃあ、早く食べましょうよ。お腹が空いてたまらないんです」

「……………」

「どうしたんですか？」

「ふふ、早く食べましょうか」

「ええ。冷めては勿体無いです」

「オイラもお腹ペコペコ」

「…もうええわ。どうにでもなれ」

カイト、何したのかな。

望はすっかり元気になっていて。

…お兄ちゃんはずか怒ってるみたいだったけど、柚香はそれを見て笑っていた。

お兄ちゃんの作ったお料理も、クノお兄ちゃんの作ったお料理も、すごく美味しかった。

望なんて、十五杯もご飯をお代わりして。

(望、すごかったね)

(クーも見たかった！)

「クーアは、さっきまで寝てたじゃない」

(む…)

「望さま、大丈夫だったのでしょか…。夕飯が終わった途端、糸が切れたように眠ってしまわれて…」

「ああ、あんな心配いらん。カイトが夕飯の間だけ無理矢理に覚醒させてただけやから」

「そんなこと、出来るの？」

(ボクは出来ないけどね。カイトくらいの聖獣になると、自分の力を契約者に分け与えることが出来るんだって。大和が言った)

「へえ)。ヤマトって誰？」

(大好きなお兄ちゃん！)

「こいつの先輩になるのかな。世話好きの物好きや。クーアでゆうたら如月やな」

「へえ)」

「あなたは大和という聖獣を知っているのですか？」

「まあな。昔はオレも世話になった」

「ほう」

「良き友であつた。昔も今も」

「いきなり出てくんないか」

「懐かしい名が聞こえたのでな」

（カイト、大和と友達だったの？）

「ああ。今でもときどき顔を合わせる」

（へえ）

「それより、望はええんかい」

「我が主はよく眠っている。お姫さまは、今は私と話したくないと言っているしな」

「なんでお姉ちゃんがお姫さまなの？」

「うむ。まあ、複雑な事情があるのだよ」

「ふうん」

「む？そこにいるのはクーアか？」

（あう…）

「私が火だからといって、恐れることはない」

（で、でも…）

「どういうこと？」

「その話は長くなる。また今度話したるわ」

「むう…」

「さて、クーアの娘にも嫌われてしまったようだし、私はこれで去るとしよう」

「結局、何しに来たんや…」

「ふふ、まあよいではないか」

「お休みなさいませ、カイトさま」

「お休み」（お休み）

「ああ、お休み」

「もう来んなよ」

「善処しよう」

そう言っつて、熱気と一緒にカイトは消えた。

「では、私たちも寝ましようか」

「うん」

「ふぁ……。ほなら、お休み……」

「お休み〜」

ルウエとクーアはお兄ちゃんの布団に乗り、自分はまたクノお兄ちゃんの布団に潜り込む。

「お休み、ルウエ」

「お休み……クノお兄ちゃん……」

優しく頭を撫でてくれた。

とても気持ち良くて……。

「犯人がクーアで良かったわあ」

「ええ。人間が犯人なら相当ややこしくなっていました」

また扉の向こうからお姉ちゃんとクノお兄ちゃんの話し声が聞こえる。

ルウエのうつすらとした光だけで、あとはまだ真っ暗で。

「それにしても、属性の違う聖獣と契約出来るなんて、びっくりしたわねえ」

「あの子の力は計り知れませんが」

「ふふふ。普通の可愛い女の子なんだけどねえ」

「ええ」

「…さあ、寝ましようか。夜明けまでまだ一刻ほどあるわ」

「はい。お休みなさいませ、タルニアさま」

「お休み、クノ」

扉が開いてクノお兄ちゃんが入ってくる。

そしてそのまま、自分の隣に寝転んで。

「ルウエ。ム、エク、ルウエ。僕の可愛い妹でいてくれるか?」

「クノお兄ちゃんは、ずっと、自分のお兄ちゃんなんだぞ…」

「わっ、びっくりした。起きてたのですか」

「うん…」

「朝までまだ時間があります。ゆっくりお休みなさい」

「うん…」

クノお兄ちゃんの服をギュッと握って、大きく息を吸う。

クノお兄ちゃんは甘い匂いがして、なんだかとても安心出来た。

目を開けると、クノお兄ちゃんが布団の横に座ってこっちを見ていた。

「おはようございます、ルウエさま」

「おはよ」

「早速ですが、朝ごはんを食べに行きましようか」

「うん」

そしてクノお兄ちゃんは、そっと抱き上げて立たせてくれて、部屋を見回してみると、クノお兄ちゃんと自分以外は誰もいなかった。

ルウエとクーアも。

「みんなは？」

「先に行かれましたよ」

「…ごめんね」

「え？何がです？」

「自分が起きるのが遅くて、クノお兄ちゃんが朝ごはんを食べられなかったから…」

「じゃあ、早く行きましよう。遅れた分を取り戻さない」と

「うん…」

クノお兄ちゃんに手を引かれて部屋を出る。

…やっぱり、早く食べたかったんだ。

自分が起きるのが遅かったから…。

「クノお兄ちゃん…」

「どうしました?」

「ごめんね…」

「……………」

ピタリと立ち止まる。

そして、こつちをジッと見て。

「怒ってなんかないよ。そう見えたならごめん」

「えっ、でも、早く行こうって…」

「遅れた分は、あとからでも充分取り戻せるんだ。それを分かってほしかったんだけど…そうだな。そうとも取れるよな」

目線の高さを合わせると、優しく頭を撫でてくれて

「ごめんな、ルウエ」

「えへへ。いいんだぞ」

「うん。ありがとう」

ニッコリ笑うと、ギュッと抱き締めてくれた。
とても温かくて、とても嬉しかった。

「さあ、行きましょう」

「うん!」

今度はクノお兄ちゃんの手を引っ張って。

「速く速く!」

「ふふ、あまり慌てると転びますよ」

「わわっ!」

「ほら、危ない」

クノお兄ちゃんに抱えてもらって、なんとか転ばずに済んだ。ゆっくり、慌てずに。でも、出来るだけ速く、なんだぞ！

望がくれたお魚の切り身を食べているとき

「じゃじゃーん！真お姉ちゃんの登場！」

「騒がしいぞ、真」

「なんやなんや。いつも通り、胡散臭い顔してるなあ」

「う、胡散臭い…？」

「ル〜ウエ〜。ほれ、見て見て〜」

「なんや。もう出来たんか」

「当ったり前やん！」

「これが名札？」

「せや。ヤウトの紋章とルウエの名前入りや！」

「でも、これ、どうするんですか？どこかに付けるようにはなっていないみたいですけど…」

「それは問題ないわあ。これを使いなさい」

「わあ〜、綺麗な組紐ですね」

「これをこの穴に通して…出来上がりや！」

「あ、そっちですか」

「最初から採掘証明型の名札、注文してたやろ…」

「せやせや。ちょっと余ったから、望のも作っといいたけど…ええよな？」

「うん！望のはどんなの？」

「これや」

真お姉ちゃんが出したのは、自分のと同じ形で小さな名札。

こつちにも紐を通す穴が空いていて。

「あらあ、望ちゃんの分は用意してなかったわあ」

「大丈夫大丈夫」

「夜中に連絡が入りまして、急遽準備したものでお気に召すかどうか…」

クノお兄ちゃんが懐から取り出したのは、自分のよりたくさん色が使われていて、自分のより細い紐だった。

「おおきに。急やったのに」

「たまたま持ってたから良かったけど、出来るだけ早めに連絡しろよ」

「はあい。まあ、とにかく。これで完成や！」

そう言つて、真お姉ちゃんは名札を首に掛けてくれた。

表にはヤウトの紋章が、裏には自分の名前が。

「わあ〜。これ、すごく細かいですね！」

「真は昔から細かい作業が得意でしたからね」

「そうそう。細工にはめっちゃこだわってるで〜」

「これ…ラズイン旅団と同じ紋章ですね。ほら、腕輪と同じ」
「ホントねえ」

「不死鳥と契約したって聞いたからな。それがええやる思て」

「へえ〜。ありがとうございます！」

「ありがと！真お姉ちゃん！」

「ええねんええねん。ほなな。ウチはもうちょっと仕事あるから」

手をヒラヒラと振ると、そのまま部屋を出て…いこうとした。

でも、お兄ちゃんに止められて。

「お前。クノに夜中に連絡したり、朝一番で来たり。昨日寝てへんねやろ」

「それがどないしたん。一日遅れたんやから、それくらいせなあかんやろ」

「アホか。それで身体壊したりしたら、ルウエと望はどうなんねん。自分の身体が自分だけのもんやと思うなよ」

「…分かってる。でも、はよルウエに届けたりたいって気持ちもほんもんや」

「真お姉ちゃん…」

「へへっ。だからウチは、自分の身体よりルウエを取ったんや」

「…ありがと、なんだぞ！」

「はあ…。さっさと帰ってさっさと寝ろよ」

「分かってる分かってる」

そして、真お姉ちゃんはニッコリ笑って手を振ると今度こそ帰っていった。

…自分のことを一番に考えてくれて、とても嬉しい。

でもやっぱり、真お姉ちゃん自身の身体にも気を付けてほしいんだぞ。

43 (後書き)

無理は禁物。

自分の身体を大事にしてあげてください。

「ヤーリエはどこに行ったんや？」

「あ、そういえば、朝も見なかったですね」

「どこに行ったんやろな」

「うーん…。クノさんなら知ってるかも」

「なんでやねん…」

「ねえ、この石、すごく綺麗なんだぞ！」

「ホントだね。えっと…紫水晶ですか？」

「せやな。それにするか？」

「んー…」

「あの、失礼ですが、そちらの子はどここの旅団の方なんですか？」

「どこにも所属してへんけど。なんで？」

「それって、クーア旅団の腕輪と旅団天照の名札ですよ。だから、どっちに所属してるのかわかって思っ…」

「こっちの腕輪は本物やけど、名札は旅団天照のうてヤウトの紋章や。まあ、腕輪が本物ゆつてもクーア旅団におけるわけやないんやけど」

「でも、腕輪だけでも本物だしたら、あの三旅団のひとつに認められてるってことですよ。それってすごくないですか？」

「さあ、どうかな。あいつ、すごい気まぐれやしな。もしかしたら、深い意味なんか全くないんかもしれんし」

「あいつって？あ、まさか、幻の旅団長ですか？」

「なんやそれ…」

「ごく一部のしか知らない、クーア旅団の旅団長のことですよ！」

「そんな大層なもんか？」「副旅団長が乗ってる馬車に誰かが乗ってるらしいってことだけは分かってるんですが、それ以上のことは全くの謎なんです。普通に通りを歩いてるとの噂もあります、旅団長が誰か分からないから真相は不明なんです…」

「そういえば、タルニアさんが旅団長として人前に出たのって、警察でだけですよね」

「あれ？せやったか？」

「たぶん」

「たぶんで…」

「タ、タルニアさんですか…。女性のような名前ですね…」

「女性のようになって、実際女やし」

「ええっ！？貫禄たつぷりの厳格なおじいさんが取り仕切ってると思つてました！」

「ええ…。オレと同じくらいの若い姉ちゃんやぞ…。背はこいつくらいやけど」

「タルニアさんの方が、ちよつとだけ高いですよ」

「せやったかな…。まあ、胸は断然あいつの方がでか…つてえ！」

「何か言いました？」

「痛たたつ！痛いって！」

望はお兄ちゃんの足をグリグリと踏んでいた。

…どうしたのかな？

明日香は大きな欠伸をしていて。

「ねえ、これにするんだぞ！」

「ほら、望、ルウエ、ゆうとるやん！足、どけるって！」

「ふん。私が払いますから、その必要はないですね」

「石屋さんのお兄ちゃん、これ」

「はい。瑠璃の小、上ですね。七百円です」

「な、なんや、ちよつと高くないか？」

「最近、瑠璃に限らず、なぜか石の採掘量が減ってるんですよ。脈の力が弱つてるとか、いろいろ言われていますけどね。万石の採掘量も、これからどんどん落ちるって言われています」

「ふうん…」

なんだか考え込みながら、お兄ちゃんはお財布からお金を取り出して。足を踏まれてるのはもういいのかな…。

「あつ！私が払いますつて！」

「オレがルウエにこうたるって約束したんや。オレが払わなかったらどないすんねん」

「でも…」

「それに、ルウエは望だけの妹ちゃんぞ」

「……………。分かりましたよ…」

「じゃあ、お釣りの三百円。毎度ありがとうございます」

「ああ。また来るわ」

「はい」

お兄ちゃんは軽く手を振ってお店を出る。

自分も石屋さんのお兄ちゃんに一度お辞儀をして、お店を出た。

「あ、望はいらんかったんか？」

「何がです？」

「石や石。金属でもええけど」

「べ、別にいいですよ。欲しかったら自分で買いますし…」

「ほづか。ほなら、これやるわ」

「えっ…」

お兄ちゃんが懐から出して望に渡したのは、緑色の綺麗な石。何なのかな？

「電気石や。昨日、偶然見つけたんやけど」

「……………」

「この緑色のやつは特に珍しいやつやねん」

「あのっ」

「ん？どうした？」

「……………。…いくらしたんですか？」

「そんなん聞いてどないすんねん」

「お金、払わないと…」

「もう払てるから大丈夫や」

「ち、違います！」

「…望は、ルウエに何かやるときに代償を求めるか？」

「……………」

「それとおんなじや。怒らせたんは悪いと思っけど…素直に受け取
つてくれんか？」

「……………。…うん」

望はお兄ちゃんに貰った電気石をギュッと握り締める。
そして、顔を上げて

「ありがとう、お兄ちゃん！」

「…へへっ。やっぱり、笑顔が一番可愛いな」

「うん…！」

お兄ちゃんに頭を撫でてもらって、とっても嬉しそうに尻尾をパタ
パタと振る。

うっ…

「自分も！自分も撫でて！」

「ほいほい。分かってる分かってる」

「えへへ」

なんだか嬉しくて、お兄ちゃんをギュッと抱き締めた。

お兄ちゃんは、石の匂い、金属の匂い。

「自分の大好きな匂いなんだぞ！」

「え？何が？」

「なんでもない〜」

「なんや、変なルウエ」

「ん〜」

「わわっ。どうしたの、ルウエ？」

「望も大好き！」

望にもギュッと抱きついて。

なんだか分からないけど、今日はとっても嬉しい日なんだぞ！

44 (後書き)

これを書いたのが大晦日でした。
もう二月も終わりですね…。

「いつ出るんや?」

「え?」

「ずっとヤマトにおるわけやないんやろ?」

「ああ…。はい」

「それで?」

「えっ、何がですか?」

「いつヤマト出るんか聞いとるんや。しっかり話聞けよ」

「分かってますよ…」

「それで、いつ出るんや?」

「……………」

望はそっぽを向いて、聞こえないふりをして答えなかった。
お兄ちゃんもそれ以上は何も聞かない。

「ルウエ、お腹空かない?」

「まだ大丈夫なんだぞ」

「そう…。あ、お菓子、買ってあげよつか」

「さっき買ってもらったばかりなんだぞ」

「あ…そうだよね…」

「望、どうしたの?」

「え?な、何が?」

「お兄ちゃんが聞いてることにも答えなかったし、それに、なんだか元気ないんだぞ」

「そ、そんなことないよ…」

「ホントに?」

「うん…」

でも、ホントとは思えないんだぞ。
お兄ちゃんと目を合わせようとしないうし、尻尾の毛もいつもみたい
なツヤがないし。

(ルウエ、ルウエ)

「どうしたの？」

(ちよつとこつち…)

「う、うん」

「ルウエ、どこに行くの？」

「ん、ちよつと」

「え？あ、ルウエ、待ちなさい！」

ルウエに誘われて、細い道のひとつに。

少し暗がりになってるところで止まると、こつちを向いて。

(ルウエ。望はね、兄ちゃんと離ればなれになるのが嫌なんだよ)

「えっ、なんで離ればなれになるの？」

(そういう契約なんでしょ？ヤマトまでの護衛って)

「そうなの？」

(もっ…。しつかりしてよ…)

「でも、じゃあ、ヤマトを出たらお兄ちゃんとお別れなの？」

(…うん)

「ええっ！そんなのイヤなんだぞ！」

(うん。だから、望も元気ないんだよ)

「そうなんだ…」

ヤマトまでなんて約束、イヤだもん…。

ずっとお兄ちゃんと一緒がいいんだもん…。

(でも、約束だから…)

「約束…なんて…」

(……………)

約束…約束…。

こんなに哀しい約束なんて…。

でも、約束って…何…？

「ルウエ〜、どこ〜？」

「あ、望」

「ルウエ。こんなところにいたんだ」

「うん…」

「どうしたの？」

「お兄ちゃんは…？」

「路地の外で待ってるよ」

「……………」

「ねえ、どうしたの？」

「自分、お兄ちゃんとお別れするなんてイヤなんだぞ…！」

「…仕方ないじゃない。ヤマトまでって決めてたんだから…」

「望もそう思ってるの？約束だから…？」

「……………」

望は何も言わず、ギョツと手を握って。

「うう…ヤだもん…イヤ…」

「私だって嫌だよ。でも…」

「なんの話をしとるんや」

「わっ！いい、いたんですか！？」

「道に迷ってるんかと思て。ほんで、なんの話やったん？」

「お兄ちゃん、ヤマトでもうお別れなの…？」

「んー、せやな」

「もう会えないの?」

「どうやるな。オレはひとところに留まることはないから、もう会えんかもしれん」

「そんなの…イヤなんだぞ…」

葛葉も祐輔も…また会えるからお別れ出来た…。

でも、お兄ちゃんはもう会えないかもしれない…。
旅の生活だから…。

「オレかてイヤや。せつかく、こんな可愛い妹二人と出会えたんやからな。でも、しゃーない。契約の期間はヤマト到着までや。それ以上は仕事外やし、よう付いていかん。また護衛の仕事が入るかもしれんしな」

「でも…」

「分かりました。では、もう契約切れですね」

「えっ…望…?」

「せやな」

「お兄ちゃん…!」

「お疲れさまでした。約束の護衛料です」

そう言つて望は財布を取り出すと、お金をお兄ちゃんに渡す。

「ダメ!渡したら…もう終わっちゃうんだぞ…!」

「ルウエ、わがまま言っちゃダメでしょ」

「望、なんで…?なんでなの?」

「ん。確かに。ほなな。また縁があつたら」

「はい。また。ルウエ、行くよ」

「イヤ…。望、なんで…?なんで…?」

「ウウ…」

「明日香…!離して…!ヤだよ…!」

明日香にグイグイと引つ張られ、お兄ちゃんからどんどん遠ざかっていく。

お兄ちゃんも、何も言わずにそのまま向こうへ歩いていった。それきり、もう会えない気がしたから。もう会えない気がして。

大好きな飴も、今日は味がしなかった。

お姉ちゃんは心配して頭を撫でてくれるけど、振り向く気力も無かった。

「ルウエちゃん、元気ないわねえ」

「……………」

「どうしたの？」

「お兄ちゃんが……………」

「お兄ちゃん？ああ、そういえばいないわねえ。どうしたの？」

「うう……。お兄ちゃん……………」

「ど、どうしたの？」

「護衛の契約が切れちゃって、さっき別れてきたところなんです」

「そう…なるほどね……………」

お姉ちゃんは、そつと肩を抱いてくれたけど……………。
うう……………。

「あ、そうだ。ここの組合ってどこにあるんですか？一回も使ったことがなくて……………」

「お金に困ってるのかしらあ？もしそうなら私が都合するけど……………」

「いえ、そうじゃないんです」

「……………。ああ、なるほどねえ。じゃあ、一緒に行きましょうか……………」

「よろしくお願いします」

「クノ」

「はい。ただいま」

「ルウエ、行くよ」

「行きたくない…」

「ダメ。来なさい。明日香、お願い」

「ワウ」

「ヤア…。ヤだもん…」

「ウウ…」

でも、明日香の力には勝てなくて。
そのままズルズルと引きずられて。

45 (後書き)

お兄ちゃんとお別れです。
寂しいですね。

馬車は広場の端っこに停まって。
その広場にはたくさんの人が集まっていた。
なんだか銀色の服を着た人が多いけど…。

「わあ、広いですね」

「ええ。ルクレイ最大なのよ」

「そうなんですか？」

「建物はルイカミナの方が大きいけど、敷地はヤマトの方が断然広いわあ」

「へえ。知りませんでした」

「着きましたよ」

「じゃあ、降りましょうか」

「ルウエ、降りるよ」

「イヤ…」

「まだそんなこと言ってるの？」

「だって…」

「ダメ。行くよ」

「ヤア…」

「また明日香に頼まないといけないの？」

「うう…」

明日香は退屈そうに端っこで丸まっているけど。
…仕方がないから、もう諦めて降りる。

「依頼所はあの建物よあ」

「イライシヨ？」

「ええ。いろんな人がいろんな頼み事をする場所。そして、それを

いろんな人が解決してくれる場所なの」

「いろんな人？」

「そうよあ。困ったときはお互い様って言うからねえ」

「……？」

「まあ、行ってみるといいわあ」

「うん」

「じゃあ、行こっか」

「うん！」

望と手を繋いで。

イライシヨに行くんだぞ。

「あ、そうだ。タルニアさんたちはどうするんですか？」

「私は別に行くところがあるから。二人で行ってらっしゃい。帰りはまたクノにね」

「え？クノさんはどうするんですか？」

「みなさんが帰ってくるまで、ここで待ってますよ。明日香と一緒に」

「ワウ」

「えっ、でも、それじゃあ……」

「いいんですよ。ふふ、なんなら付いていきましようか？」

「あ、よければ」

「…クノ」

「ああ…あはは。私はいいので……」

「そうそう。クノはいいから、二人で行ってらっしゃい」

「そ、そうですか？」

「はい。行ってらっしゃいませ」

「望、行こっか？」

「あ…うん……」

「お姉ちゃん、クノお兄ちゃん、行ってきます」

「ふふ、行ってらっしゃい。それにしても、すっかり機嫌が治ったのねえ」

「え？」

「ふふふ。なんでもないわあ。じゃあ、行ってらっしゃい」
「うん！」

なんだったのかな。

まあいいや。

イライシヨ、どんなどころか楽しみなんだぞ！

「それにしても、人がいつぱいいるんだぞ！」

「そうだね」

「あ！こんにちは！」

「ん？ああ、こんにちは。依頼所かな？」

「うん。イライシヨ」

「へえ〜。頑張ってるね」

「うん！それで、お兄ちゃんは何でそんなガチャガチャな服を着てるの？」

「はは、これは鎧だよ。ほら、あそこ。見てごらん」

ヨロイのお兄ちゃんが指さした方には、ヨロイのお兄ちゃんよりもつとガチャガチャなヨロイを着た人がたくさんいた。

「旅団天照の方…ですよね？」

「そうだよ。分隊だけど。キミたちはクーア旅団かな？」

「いえ…。旅団には属してません」

「そうか。じゃあ、旅団天照に入らない？」

「ちよつと、カルア。勝手に勧誘しないの」

「でも、この子たち、術式の素質がありそうですよ」

「もう…そればかり…。ごめんなさいね」

「いえ」

「ヨロイのお姉ちゃん」

「…え？私かしら？」

「うん」

「どうしたの？」

「ヨロイのお姉ちゃんは、カルアお兄ちゃんのこと好き？」

「ル、ルウエ！？」

「そうね…」

「……………」

ニコニコしてるヨロイのお姉ちゃんと、なんだか落ち着かないカルアお兄ちゃん。

そして、ヨロイのお姉ちゃんはハッと何かを思い付いたように

「あ、そうだ。班長がカルアのこと呼んでたんだった」

「ええっ！早く言ってくださいよ！」

「行ってらっしゃい」

ガチャガチャと走っていくカルアお兄ちゃんを見送るヨロイのお姉ちゃん。

ヨロイの人たちにカルアお兄ちゃんが紛れて見えなくなると、こっちに向き直って。

「さっきの質問だけだね。カルアにもう一度会うことがあったら伝えてくれる？」

「うん。でも、なんでヨロイのお姉ちゃんが直接伝えないの？」

「ふふ、大人の事情があるのよ」

「……………」

「じゃあ、伝えてね」

「うん」

そして、ヨロイのお姉ちゃんはそっと囁いて。

「ふふふ。よろしくね」

「うん」

「じゃあね。その名札、格好いいよ」

「うん、ありがとー!」

「あつ。あなたの名前は……」

「私は遙だよ」

「遙さん……ですね」

「うん。じゃあ、今度こそ」

「はい。ありがとうございます」

「タルニアとクノにもよろしく伝えといてね」

「えつ、あつ、え?」

「あそこでこつちを見るのってクノでしょ? 挨拶にも行かなくて

ごめんなさいって言うておいてね、ルウエ」

「うん、分かった」

「じゃあね」

「またね〜」

「あつ、遙さん!」

遙お姉ちゃんは、そのままヨロイの人たちの方へ行って。

望はまだ何か言いたそうだったけど。

「遙さんか……。誰なんだろ……」

「遙お姉ちゃんは遙お姉ちゃんでしょ?」

「……うん、そうだね。遙さんは遙さん」

「うん」

と、ちよつどそのとき、お腹の虫が鳴いた。

「ふふふ。依頼所の前にお昼ごはんにしよっか」
「うん！」

馬車まで引き返していった。

クノお兄ちゃんとお昼ごはんなんだぞ！

「依頼所と食堂が一緒になっってるなんて、便利ですね」

「情報収集といえば酒場、と相場が決まっていますからね」

「あ、聞いたことあります。酒場は行ったことないですけど…」

「ふふふ。望さまが行ったことあるなら、そっちの方がびっくりです」

「なんで？」

「お酒は成人してからですよ」

「セイジン？」

「大人になるってことかな」

「望は大人じゃないの？」

「私なんてまだまだだよ。大人って言ったら、クノさんとかタルニアさんみたいな人かな」

「ふうん。大人になったら結婚出来る？」

「出来るよ。ルウエは誰か結婚したい人、いるの？」

「うん！祐輔！」

「ああ、あの子。ふふ、良いんじゃない？」

「あつ、望、本気にしてないんだぞ！」

「え、ええ？そんなことないよ…」

「結婚するなら、契りの証人が必要ですね」

「あ！それ、持ってる！」

「え？」

背負い袋を開けて、ルウエに貰ったチギリノシヨウニンを取り出す。それをクノお兄ちゃんに渡して。

「チギリノシヨウニン！」

「ああ…聖獣との契りの証人ですか…。びっくりしてしまいました」

…

「なんで？」

「いえ…。でも、ひとつだけなのですか？」

「うん」

「…ルウエがクーア、どちらかに貰ってないということはないですか？」

「あ、そういえば、クーアには貰ってない」

「やはり…。あとでちゃんと受け取ってくださいね」

「うん」

「あつ、そういえば、私もカイトから貰ってない」

「…物忘れが流行ってるんでしょうか」

「でも、それにしても、クノさん、詳しいですね」

「タルニアさまが契約する際、私もきつちり話を聞かされましたから」

「へえ。タルニアさんは、いつ契約したんですか？」

「ずっと昔ですよ。幹旋者のおじいさんに、偶然出会いました。そのとき、カイトと如月とも出会ったんです」

「お待たせしました。鮭おにぎりです。あと、これが依頼書です」

「あ。ありがとうございます」

「美味しそうなんだぞ！」

「では、いただきますしようか」

「いただきます！」

「いただきます」 「いただきます」

鮭おにぎりは両手で持たないといけなくらい大きくて、でも、とっても美味しそうで。

「ルウエ、お箸もあるんだよ」

「うん」

「ワウ」

「明日香のも頼んであるから、もうちょっと待って」
「……………」

「どんな依頼が来てますか？」

「護衛希望とか納品希望とかが多いですね」

「お待たせしました。鶏の笹身です。ご注文は以上で揃いましたでしようか？」

「はい」

「では、じゅるりと」

「明日香のごはんなんだぞ」

「ワウ」

「はい、どうぞ」

早速、ササミにがつつく明日香。

もつと味わって食べればいいのに…。

「この依頼は…」

「どうしました？」

「遙さん、こんな依頼出してる…」

「もしかして、旅団天照の遙ですか？」

「あ、やっぱり知ってたんですね」

「ええ」

「どんなの？」

「美味しい料理の作り方を教えてください、だって」

「美味しい料理？」

「日持ちして、携行に便利で、すぐに食べられる美味しい料理だつて」

「はあ…。またそんな依頼をしてるんですか…」

「旅人料理とかならいいけそうですね」

「あの子、だいたい知ってますからね…。タチの悪いことに」

「へえ」

「遙お姉ちゃん、お料理上手なの？」

「そうですね…。十人並みといったところでしょうか」

「ジユウニンナミ？」

「普通つてことだね。上手でも下手でもない」

「ふうん。じゃあ、上手な人はなんて言うの？」

「えっ。えーつと…ク、クノさぁん…」

「上手なら、遠回しな言い方なんかしないで、素直に上手いと言ってあげた方がいいと思いますよ。その方が嬉しいでしょう？」

「うん！」

「はぁ、やっぱり大人ですね」

「そ、それは関係ないかと思いますが…」

「ワウ」

「え？あ、うん」

「どうしました？」

「明日香が先に帰るって言って」

「送りましたよか？」

「いいですよ。匂いを追って帰られますから」

「そうですね…。では、お気を付けて」

「……………」

クノお兄ちゃんをジツと見つめると、明日香は開いていた窓から跳んで出ていった。

…外から悲鳴が聞こえた気がするけど、たぶん気のせいなんだぞ。

「うーん…」

「何をお探しなんですか？」

「えつとですね…」

「クノさま。クーア旅団のクノさまはいらっしやいますでしょうか」

「え？はい、私です」

「依頼書が届いております」

「あ。どうも、ありがとうございます」
「すごいじゃないですか！指名依頼なんて！」
「そうですね？でも、おかしいですね…。旅団、または、旅団員宛の依頼は、全て旅団に届けられます。ここなら、あの宿屋ですね」
「そうですね？」
「はい。その方が効率が良いですし」
「へえ〜。まあ、とにかく見てみましょうよ」
「そうですね」

クノお兄ちゃんは、イライシヨを開いて中を見る。
望も横から覗いて。

「ねえ、なんて書いてあるの？」

「護衛が必要そうな人物を斡旋してください」

「護衛？」

「なお、昼を過ぎたあたりに、改めてクーア旅団の宿屋へ伺います」

…

「……………」

「ねえ、どういうことなの？」

「はは…。行き違いになったみたいですね」

「帰りましょう！」

「そうですね」

「え？え？なんで？」

なんだかよく分からないうちに引っ張られてイライシヨの外へ。
すぐに馬車に乗って、来た道を引き返していった。

望は馬車が止まり切らないうちに飛び降りて、中に入っていった。

「……………。私たちもいきましようか」

「ねえ、誰が来てるの？」

「見てからのお楽しみですよ」

そう言つて、クノお兄ちゃんは頭をそつと撫でてくれた。

…誰なのかな？

「さあ、行きましよう」

「うん」

「ワウ」

「あ。明日香。お帰りなさい」

「あれ？追いつきましたか」

「……………」

「途中のお肉屋さんで、ちょっとだけお肉を貰つてたんだって」

「へえ〜。…ルウエさまも、明日香の言葉が分かるのですね」

「うん！最初は分からなかったんだけど、ずつと一緒にいたら分かってきたんだぞ。クノお兄ちゃんも、きっと分かるようになるよ」

「ふふ、そうですね」

「明日香も一緒に来る？」

「ワウ」

「では、行きましようか」

「うん！」

クノお兄ちゃんと手を繋いで。

宿屋の中に入ると、お盆を持ったお姉ちゃんがちょうど目の前にい

た。

「あ、クノさん。お客さまです」

「はい」

「食堂におられますよ」

「はい。ありがとうございます」

「いえ。では」

お盆を持ったお姉ちゃんは、ニッコリ笑いかけてくれて。そして、廊下の奥へ歩いていった。

「お客さまだつて」

「はい。誰でしょうね」

「食堂つて言つてた」

「そうですね。食堂に行つてみましょうか」

「うん」

食堂の方へ歩いていくと、望が途中で立ち止まっています。

「望」

「え？ああ、ルウエか…」

「どつしたの？」

「…うん。なんでもない。じゃあ、行こつか」

「……？うん」

「食堂ですよ」

「はい。分かつてます」

明日香はそのまま歩いて行って、突き当たりの角を曲がっていった。自分たちも、あとを付いていくように。

「……………」

「望、どうしたの？」

「……………」

「ねえ、望」

「えっ？ああ、何？」

「望、なんか変なんだぞ」

「そうかな……………」

「うん。すごく変。どうしたの？」

「なんでもないよ」

そう言つて、先に歩いていく。

…クノお兄ちゃんのイライシヨを見てから、ホントおかしいんだぞ。どうしたのかな…。

明日香が曲がつた角を同じ方向に曲がつて。

すると、すぐに誰かの声が聞こえた。

「明日香。待て」

「……………」

「待てよ……………」

「……………」

「よっしゃ。食べてええで」

気が付けば、走り出して食堂に飛び込んでいた。そして、明日香のすぐ前にいた人に飛び付いて。

「お兄ちゃん！」

「なんやなんや。びっくりするなあ」

「お兄ちゃん！また会えたんだぞ……………」

「…せやな。また会えた」

「ほう。これがあの時の坊主か」

…誰かの声が聞こえた。
そつちを向くと、やっぱり誰かがいて。

「…おじさん、誰？」

「はっはっ、おじさんはないだろう。俺はまだ三十代だ」

「三十代ってなあ…。三十八にもなりや、充分おっさんやろ」

「……？」

なんだか見たことあるような、ないような。

…誰？

「あぁっ！あの時の！」

「おお、落とし穴に落ちた娘さんか！」

「なっ…！」

「よく見りゃベツピンさんじゃねえか。お前、こんな可愛い娘二人に何してたんだ」

「何て…。護衛に決まっとるやろ。金に目が眩むような誰かさんとちごてな」

「そうだそうだ、ユールオの医者って厳しいんだなあ。こつちは狼に噛まれて重傷だったのに、適当に包帯巻いてハイさよならだぜ？信じられるか？」

「望がほとんど治してくれたからやろ」

「あの」

「ん？」

「私宛に依頼を出したのはどちらですか？」

「あ、それはオレや。てか、こいつのこと知らんやろ」

「はい、知りません。それで、依頼の内容ですが」

「ああ、もうええわ。自分で見つけられたし」

「そうですね」

「え？誰なの？」
「決まってるやろ」

お兄ちゃんは、そつと頭に手を乗せて。
ニツコリ笑って。

「ルウエや。な、ええやろ、望」
「…仕方ないですね」
「へへっ。またよろしくな」
「うん！」

ギョツと抱き締めた。
だって、何も言えなかつたんだもん。

お兄ちゃんの膝の上に座っていると、おじさんはジッと見てきて。

「そんなやつに膝に座って嬉しいのか？」
「…どういう意味や」
「望ちゃん、俺の膝に…」
「座りません」
「なんだ、つまらん」
「加齢臭プンプンさせたおっさんの膝なんか座るか」
「望ちゃん、私、そんなに匂いますかねえ」
「それでもないですよ」
「どつだ」
「香油で消してるだけやろ」
「ルウエ、こつちに来ないか？」
「ルウエ、呼ばれてるよ」
（ええ〜…。あんなおじさん、イヤ）

「お前じゃねえよ。可愛い方のルウエ」

（ボクも可愛いもん！）

「自分でゆうたらあかんやろ……」

（むう……）

「それにしても、二人ともルウエか。ややこしいなあ」

（仕方ないじゃん。ややこしいなら、おっさんが勝手に名前でも付けたらいいじゃない）

「おい、動かざること山の如し」

「誰やねん……」

「そのチビ狼に決まってるじゃないか」

（そんな名前、イヤだからね！）

（じゃあ、クーア！）

（それじゃ、クーアと被るじゃない……）

（あ、そっか）

「じゃあ、侵略すること火の如し」

「なんで逆から戻っていつてんねん……」

「ルウエは悠奈、クーアは七宝！」

（……………）

「どうしたの？」

（いや、びっくりして……。今、考えたの？）

「んー？分かんない」

（クーは七宝って名前、好きだよ）

（うん。ボクも。ユウナかあ。どんな字？）

「えっと、悠に奈って書くの」

（……………）

「あは……。まずはそこからだね……」

「……………？」

どこから？

悠奈は悠奈なんだぞ。

「ヤーリエ、やめて！」

「……………」

黒い塊が腕を掠めて飛んでいく。

当たった部分はジンジンと熱くなって。

「な、何なんですか、あれは！？」

「闇だな…。あの子から溢れているのか…？」

「埒が明かな…」

「……………」

（ルウエ！）

ヤーリエはまた黒い塊を放つ。

間一髪、悠奈が引つ張ってくれたから当たらなかつたけど、それはまっすぐ自分に向かって飛んできていた。

（ルウエ！しっかりしてよ！）

「だって…ヤーリエが…」

（だから、あれは闇なの！ボク、言ったよね？闇には近付かないでっつて！）

「ヤーリエだもん…」

（……………！）

悠奈が強い光を放って、伸びてきた闇を打ち払う。

でも、ヤーリエの闇はますます濃くなって。

「光が強くなると、比例して闇も濃くなる。弱い闇なら掻き消すこ

とも出来るだろうが、強い闇を払うのに光を使うのは逆効果だ」

(じゃあ、どうすりゃいいのさ！)

「別の属性から叩くしかないか…」

「ダメ！」

「む？」

「ヤーリエをいじめちゃダメなんだぞ…」

(ルウエ！まだそんなこと言ってるの！？)

「だって、だって…」

ヤーリエだもん…！

大好きな…ヤーリエだもん…！

「ヤーリエ！お願いだから、もうやめて…！」

「……………」

「ヤーリエ！」

(……………！)

今度は避けきれず、直撃してしまった。

お腹のところで強い衝撃が弾けて、思わず咳き込んでしまっ
でも、痛くななんてないもん…。

「ヤーリエは、もっと痛いんだよね…」

「……………」

「ちっ！うちの姫さまに何しよんねん！」

「ルウエ！大丈夫！？」

「うう…。ゴホツ…。痛くない…」

「望！カイトや！カイトを呼べ！」

「え、え？カイト？」

「何か呼んだか」

「呼んだかやあらへんやろ！状況見る！」

「ふむ？あの脆弱な闇がどうしたというのだ」

「脆弱！？おっさんの転移で、やっとここここまで引っ張って来たんやぞ！？」

「それはお前たちの力不足なんじゃないのか」

「なんやと！？」

「闇の制御が出来ていないな。あの子は契約をしていないのか？」

「んなもん知るかい！」

「そうカリカリすることもあるまい」

「カイト、危ない！」

「む？」

ヤーリエが放った黒い塊は、カイトが一睨みすると一瞬で掻き消えて。

「それで、話の続きだが。闇には闇で対抗すればいいのではないか？」

「なんでカイトじゃダメなの…？」

「私では、ルウエの望む結末にはならんのでな」

「カイト…」

「私がやれることは、闇の娘とルウエがこれ以上傷付かないようにすることだけだ」

そう言つて、翼を広げて何回か羽ばたく。

散った火の粉は、足下の草を焦がして。

「さあ。しばらくの間だけ相手をしてやるっ」

「……………」

ヤーリエが放つ黒い塊は、カイトの手前で全て掻き消えて。軌道や大きさを変えても結果は同じだった。

「……………」

「どうした。それで終わりか？」

「……………」

「打ち止めらしいぞ。どうする、”日の御子”よ」

「そうだねえ……」

「……………」

ヤーリエは、後ろに現れた何かに黒い塊を放つ。

そしてそれは確かにその何かに直撃したけど。

「ふうむ。良きかな」

「……………」

「警戒することもなかるう。お前と同じ闇だ。仲良くしてやってくれ」

「なかなか良い闇を持ってるじゃないか」

（ウウ……）

「ん？おお、ルイムナのところの使徒か。大和だったら、上手い酒を持ってくるんだがな」

（こ、こっちに来るな！）

闇の中から現れたのは、鋭い目の蒼い龍だった。

悠奈は唸りながら後退り、お兄ちゃんの後ろに隠れる。

「なんだ、つまらんな。私がそんなに怖いかな？」

（ウウ……）

「おい、そつちじゃなくてこつちだろう」

「ああ、忘れてた」

「……………」

蒼い龍はヤーリエの方に向き直り、ゆっくりと近付いていく。

「ふうむ。今までよく抑えていたな。それとも、誰かに抑えてもらっていたのか…」

「…紅葉お姉ちゃん」

「む？話せたのか」

「論点はそこではないだろうに…」

「その紅葉という者が誰かは知らんが。とりあえず、しばらくは暴走しない程度に抑えておこうか。おい、その坊主」

「自分のこと…？」

「ああ。こっちに」

「うん…」

（あっ！ルウエ！）

蒼い龍のところに行くのと、ヤーリエの前へ押し出された。ヤーリエの瞳は真っ暗な闇に染まっていて、何も見ていないみたいで。

（ルウエ！危ないよ！）

「ほう。お前も良い光を持っているな。それに、闇との相性も良いみたいだ。もしかして、どこかで闇に触れたのか？」

「祐輔の闇に…うっ…」

「む。腹が痛むのか」

「痛くない…」

「いかな。…手短に済ませる」

蒼い龍がそう言うと、身体が軽くなったような気がして。そして、真っ暗になった。

「…ルウエ」

「ヤーリエ？」
「うん…」

真つ暗な中に現れたヤーリエ。
なんだか少し疲れてるみたいで。
慌てて手を取ってみると、とても冷たかった。

「えへへ…ルウエの手、温かいね…」
「うん」

「ありがと、ルウエ。ぼくのこと、信じていてくれて」
「だって、ヤーリエはヤーリエだもん…」

「うん。ありがと。それと、ごめんね。ぼく…ルウエに怪我させちゃった…」

「平気なんだぞ…。これくらい…。それより、ヤーリエは大丈夫なの…？」

「うん。大丈夫だよ」

そして、ヤーリエはそつと抱き締めてくれた。
ヤーリエの手は、もう冷たくなかった。

目が覚めると、すぐ前にクノお兄ちゃんの寝顔が見えた。
なんだか面白い顔だったから、少し頬つぺたを引っ張ってみる。

「腹の調子はどうだ？」

「あ。蒼い籠」

「私にはルトという名がある。それより、腹はどうなんだ」

「んー、大丈夫みたい」

「そうか。良かった」

ルトは、その大きな舌でそつと頬つぺたを舐めてくれて。
ザラザラしてて、ちよつと気持ちよかつた。

「ヤーリエと契約したの？」

「いや、まだだ。今は消耗してるからな。まあ、今すぐしなくても、ルウエのお陰でしばらくは大丈夫だからな。万全の状態になつてからだ」

「ふうん」

「じゃあな。ゆっくり寝ろよ。また会おう」

「うん。お休み」

「ああ。お休み」

そして、ルトは静かな闇へと帰っていった。
じゃあ、お休みなさい…。

「おい、起きろ」

「むう」

「むうじゃない。起きろ」

「何…?」

目を開けるとルトがいて。

よく見れば辺りはまだ真っ暗で、ルトだけが蒼く浮かび上がって見えた。

「ん…。もうちょっと寝かせてよ…」

「すぐに終わる」

「ん…」

「おい、寝るな」

「だって、眠いもん…」

「はあ…。仕方ないな…」

そう言うと、ルトは襟首を啜える。

そして、そのまま背中に乗せて。

「どこかに行くの…?」

「ああ」

「どこ…?」

「その辺だ」

「その辺…」

その辺ってどこだろ。

まあいいか…。

ゴツゴツした鱗がちのルトの背中は、セトや明日香の背中とはまた違って、独特の気持ち良さがあった。それに、とても温かい…。

また目が覚めた。

周りを見回してみると、もう明るくて。

「おはようございます、ルウエさま」

「うん。おはよ、クノお兄ちゃん」

「昨日は大変でしたね」

「何が？」

「ルウエさま、大変な怪我をなされて。長之助の本当に真剣な顔を見たのは久しぶりでした」

「ふうん」

身体を起こそうとすると、全身に激痛が走った。

「あうう…」

「ダメです。今日一日は安静ですよ」

「でも…」

「大丈夫ですよ。私はずっと看護してますから」

「望たちは？」

「みなさま、市場に行きましたよ。少し買うものがあると。ヤーリエさまも一緒に」

「朝から？」

「はい。朝も朝、朝市に行きましたから」

「お姉ちゃんは？」

「少し前に、テヌカイに向けて発たれました。ルウエさまに別れが言えなくて残念とのことで…お詫びにこれを」

クノお兄ちゃんに見せてもらったのは、不死鳥の紋章が彫られた銀色の腕輪だった。

お姉ちゃんに最初に貰ったクーア旅団の腕輪に似ている。

「ラズイン旅団の腕輪です」

「ラズイン旅団……」

「ええ。タルニアさまは、ルウエさまのことを本当に気にかけておられました」

「そうなの？」

「はい。今回も、ルウエさまの回復を待って出発すると言い張りまして。私が残って看病するという条件付きで、やっと納得させたんですよ」

「ふうん」

なんだか嬉しかった。

胸のところが温かくなるかんじ。

でも、お姉ちゃん、なんでそんなに気に掛けてくれるのかな。

「むかしむかし、あるところに。とても仲の良い姉妹がいました」

「クノお兄ちゃん？」

「姉妹は、どこへ行くにもいつも一緒でした」

「……………」

「しかし、妹は病気に掛かって、七歳にして旅立たれました」

「旅立ったって……死んじゃったってこと……？」

「……ええ。そして、姉は三日三晩泣き続けました」

「……………」

「それから、姉は故郷を出て旅に出ました。旅費稼ぎのためだった行商が上手くいき、今や治安維持認定を受ける旅団にまで成長して、でも、姉の旅は終わりません。いつまでも癒えない心の傷を抱えて、

どこまでも旅を続けるのです」

「…うん」

「ある日、部下の不祥事の際、偶然出会った人たちの中に、妹にとってもよく似た子がいるではありませんか。姉は目を疑いました。その子は確かに妹ではないのです。妹は何年も前に死んだのですから」

「……………」

「それでも、妹のようにお姉ちゃんと呼び慕い、妹のように笑って、妹のように温かいその子に、姉はかつて妹にしていたように、優しく接しました」

「…それで？」

「この物語はまだ完成していません。完成しないのでしょうか」

「…うん。そうかもしれない」

その妹に似た子も、きつと、お姉ちゃんのこと大好きだと思っただぞ。

なんでそう思うのかは分からないけど。

でも、きつとそう。

「さて、朝ごはんにしましょうか。すぐに持ってきますね」

「うん」

そして、クノお兄ちゃんは部屋を出ていった。

動けないから、天井を見るしかない。

ジッと眺めていると、さっきのお話の姉妹が一緒に遊んでる場面が見えた気がした。

(ふぁ…あふう…)

「あ、七宝。おはよ」

(おはよ…)

「眠そうだね」

(うん…。眠い…)

「どうしたの？」

(ん…。夜中、ルト兄ちゃんに手伝えって言われて起こされて…)

「ルト？ルトがどうしたの？」

(えっと、ルウエの光がなんとかかんとか…)

「え？何？」

(…忘れちゃった)

「ええ、何それ」

(なんで忘れるのさ！あいつ、ルウエの光に闇を混ぜたんだよ！)

(あ、悠奈、おはよ…)

(おはよ〜じゃないの！)

七宝に続いて、悠奈も出てきた。

なんだかすごく怒ってるみたいで。

「どうしたの？」

(あいつの闇が、ルウエの光に混じったの！)

「ふうん」

(ふうんって！なんでそんなに気楽なのさ！)

「だって、なんだか温かかったんだもん。それがルトの闇なんだって、今やっと分かった」

(もう！ルウエの光があいつの闇に蝕まれてるんだよ！)

(ゆ、悠奈…)

(今すぐに追い払わないと…！でも、ボクの方じゃ…)

「悠奈！」

(ひゃう！)

「悠奈が、闇が嫌いなのは知ってるよ。でも、自分は、ルトが理由もなく闇を混ぜるなんて思わないの」

(あいつの何を知ってるのさ…)

「じゃあ、悠奈は何を知ってるの？」

(うっ…)

「何も知らないのに、そんなことを言うなんて、おかしいと思わない？」

(……………)

「はい。喧嘩はそこまです。朝ごはんにしましょう」
「うん」

帰ってきたクノお兄ちゃんが止めてくれた。

身体が動かせないから、お粥は食べさせてくれて。

梅干しの酸っぱい、すごく美味しいお粥だった。

…悠奈には、ちょっときついこと言っちゃったかな。

あとで謝っとかないと。

「祐輔というのは、抑えないといけないほどの闇だったのか？」

「さあな。でも、一回も抑えたことなんかないで。抑えられるなんて知らんかったし」

「では、暴走したのには別の理由があるのだな」

（なんで、闇がこの部屋にいるの？）

「いてはいけないのか」

（ダメ）

「なぜだ」

（ルウエの身体に悪いから）

「悠奈がそうやって騒いでる方が、よっぽどルウエの身体に悪いやろ」

（…兄ちゃんは闇の味方なの？）

「まあ、ヤーリエくらいやったら召致したるけど」

（そんなのいららない！）

「なんや、つまらん」

「そういえば、悠奈は闇だ闇だって騒ぐけど、ルトは光がいても平気なんだね」

「む？まあ、光だの闇だの、そんな細かいことに拘るのは面倒になったのでな」

（細かくない！）

「ふう…。私はルウエと話をしたいだけなのだが…。少し黙っててくれないか」

（なんで！）

「なんでって、お前が騒げばルウエとの話の邪魔になるからだ」

（話なんてしなくていいもん！）

「ふうむ。では、少し乱暴になるが仕方ないな」

（えっ…）

「あまり手間を掛けさせるなよ」

そう言うと、ルトの目の前に暗い闇の塊が出てくる。悠奈は少しずつ後ろに下がっていった。壁に当たると、身を守るように身体を丸める。

「ルト。ダメだよ」

「なんだ、ヤーリエ。邪魔をするのか」

「うん」

(……………)

「はあ……。気が削げた。話はまた今度だ」

ルトの前の闇は消えてしまい、それと同時にルトも消えてしまった。そして、ヤーリエは力を抜いて。

(な、なんで……)

「ぼくは、光とか闇とかは分からない。でも、悠奈がルウエの大切な友達だったことは分かるから。ルトが何をしようとしたのかは知らないけど、悠奈が傷付くとルウエも傷付くことは分かるから」

(……………)

「ルトだって、それは分かっているはずだけどね」

(……………)

「悠奈。光がどうか闇がどうかじゃない。ヤーリエは、悠奈が傷付かないようにルトを止めてくれたんだよ？言うことがあるんじゃないの？」

(…ありがとう)

「えへへ。どういたしまして」

望に言われてだけど、悠奈はちゃんとヤーリエにお礼を言ってくれた。

撫でてあげたいけど、動けないから悠奈をジッと見つめる。
すると、それに気付いたからかどうかは分からないけど、お兄ちゃん
が悠奈を撫でてくれた。

「まあ、この調子で闇嫌いも無くなってくれたらええんやけどな」
(それはない)

「…やっぱ、お前ってアホやな」

(むう…)

「お待たせしました。生姜湯ですよ」

クノお兄ちゃんが戻ってきた。

お盆の上には、何かいい匂いのするものがあって。

「生姜湯？ルウエは別に風邪とちゃうぞ」

「分かってますよ」

「ほんなら、なんでやねん」

「暖まりますから。みなさんの分もありますので」

「あ。ありがとうございます」

「飲んでいいの？」

「はい。どうぞ」

「生姜湯か。久しぶりやな」

「ルウエさま。ゆっくり身体を起こしますからね。痛かったら言っ
てください」

「うっ…」

「い、痛いですか？」

「いきなりかい。下手くそやなあ」

「じゃあ、あなたは出来るんですか？」

「出来んけどな。それより、その呼び方はどうにかならんか。あな
たとかそなたとか」

「そなたなんて言ってますん」

「それや。その敬語も」

「痛い…」

「あっ、すみません…」

「ううん…。大丈夫だから…」

「そ、そうですか？」

「うん…」

ゆっくりゆっくりと身体を起こし、やっと座れた。

そして、クノお兄ちゃんは匙を使って少しずつ飲ませてくれる。

「ほんでや。どうにかならんのか？」

「どうにかしてほしいんですか？」

「一緒に旅するのに、いつまでもそんなんでは肩身狭いわ」

「一緒に旅するんですか？」

「おいおい、なんのための契約更新やつてん」

「はあ…。じゃあ、どうすればいいんですか」

「せやな。まずは敬語やめて、あなたとかもやめてほしいわ」

「善処します」

「ええ…。なんやそれは…」

「望も、お兄ちゃんって呼べばいいんだぞ」

「えっ？」

「せやせや。そう呼んでくれたら楽やわ」

「えっ…でも…」

「でや。お兄ちゃんでも兄ちゃんでも兄さまでもええで」

「……………」

「ん？」

「調子に乗らないの！」

「うおお…」

鈍い音がして、お兄ちゃんはお腹を押さえる。

望は怒ったようにそっぽを向いて、生姜湯を飲んでいた。

「さあ、ルウエさま。次ですよ」

「うん」

「おい……。重傷一人追加や……」

「それは重傷じゃなくて、自業自得と言っんです」

「ふん」

「うぐっ……」

「面白いね」

「うん」（いい気味だよ）

「あー……こんな凶暴やったら護衛なんぞいらんやろ……」

「じゃあ、付いてこなくて結構です。明日香もいますので」

「はあ……。ほんなら、またおっさんと二人旅かよ……」

「そういうば、おじさんはどこに行ったの？」

「市場をもう一回りしてくるゆうてたな」

「それが終わったら、すぐに発つとも言ってたけどね」

「えっ、嘘やん」

「嘘ついてどうするのよ。もうそろそろヤマトを出る頃だと思っよ」

「んー、まあ、そうか……」

「きつと、また会えるから大丈夫なんだぞ」

「そうですね。この広い世界にいれば、必ずまた会えます。旅とは

そういうものですから」

「うん」

次の生姜湯を口に含んで。

お兄ちゃんは、ジッと空を見ていた。

「痛みますか？」

「ううん」

「では、ここは？」

「うっ……。ちよつと痛いんだぞ……」

「ふうむ」

クノお兄ちゃんは、お腹を撫でながら考え込む。

クノお兄ちゃんの手は柔らかくて、気持ち良いんだぞ。

「私は医道の心得がないのでなんとも言いがたいですが……」

「あっ」

「どうしました？」

「クノお兄ちゃんの後ろに何かいた」

「ん？ああ、この子ですか」

クノお兄ちゃんの後ろにいたのは、真っ黒で小さな龍だった。

前へ押しやられると、慌てて陰へ戻ろうとするけど、クノお兄ちゃんには許さなくて。

「千早、ご挨拶は？」

「は、はじめまして！」

「僕に言っても仕方ないだろ」

「だ、だって……」

「すみません。この子、人見知りか激しくて、なかなか挨拶も出来ないんです……」

「千早は聖獣なの？」

「はい。クルクスだと聞いています」

「クルクス？」

「ええ。」 遥かな大地”クノの使徒です」

「クノ？」

「私と同じ名前ですね」

「うん」

「お兄ちゃん……。お腹空いた……」

「え。ああ、そういえば、千早のごはんを忘れてた。今作ってくるから、待ってなさい」

「ええっ！お兄ちゃんと行くの！」

「料理の邪魔になるから、ここにいてくれないか」

「やだもん！」

「じゃあ、もう作らない」

「やだもん！お腹空いたもん！」

「どっちかひとつだけだ」

「うう……。うええ……」

「泣いてもダメ」

「ねえ、千早。一緒に待とうよ」

「うう……。でも……」

「自分のこと、嫌い？」

「ううん……」

「じゃあ、一緒にお話して待ってようよ」

「……うん」

「ふふふ。では、私は千早のごはんを作ってきますので。よろしく
お願いしますね」

「うん」

そして、クノお兄ちゃんは千早の頭をそっと撫でて部屋を出ていった。

千早はちょっと寂しそうだったが、こっちに向き直って。

「は、はじめまして！」

「はじめまして」

「ご機嫌麗しゅう！」

「え？」

「い、良いお天気ですね！」

「今日はちよっと曇ってるよ」

「お友達になつてください！」

「うん。いいよ」

「お喋りしましょう！」

「もうしてるんだぞ」

「……………」

「どうしたの？」

「もうこれ以上教わってない……」

「クノお兄ちゃんに教わったの？」

「うん……」

「千早は教わったことしか喋られないの？」

「そんなことないけど……」

「じゃあ、思ったように話せばいいんだぞ」

「思ったように……」

「うん」

「えっと……えっとね……」

「どうしたの？」

「お名前は……？」

「ルウエなんだぞ」

「ルウエ……」

「うん」

「なんで寝てるの？」

「怪我しちゃって、動くと痛いからなんだぞ」

「なんで怪我したの？」

「こっ……闇がバァン！って弾けたの。それで、お腹がギシギシ痛く

なつて」

「……………」

「ここを触ると痛い」

「ふうん」

説明すると、千早はおそろおそろ触ってみて。

千早の手は、何かこそばかった。

「痛い？」

「ギョツと押さえたりしなかつたら、大丈夫なんだぞ」

「そうなの？」

「うん」

「じゃあ、これは？」

「それはちよつと痛い……」

「ふうん」

千早はまたお腹を撫で始める。

撫でながら、何か考えてるみたいで。

「一度、裂けた痕がある……。強い衝撃で内臓が破裂したのかな……」

「え？」

「でも、ちゃんと処置がしてある……。それに、傷口も塞がってるし

……」

「どうしたの？」

「ルウエは、誰かと契約してるの？」

「うん。悠奈と七宝なんだぞ。ルウエとクーアの」

「えっ。ふたつの属性？」

「……………」

「だって、ルウエは光でクーアは金でしょ？」

「ルウエはいろんな色が混じってるから」

「……………！」
「ん？なんや、そいつは」
「可愛いね」
「おかえり〜」
「ただいま」

お兄ちゃんと望が、柚香を連れて帰ってきた。
真お姉ちゃんはお仕事かな…。

「ありや？クノは？」
「千早のごはんを作りに行っただぞ」
「へえ〜。千早っていうんだ」
「……………！」
「なんや。ルウエの後ろに隠れて。人見知りか？」
「クノお兄ちゃんが、千早は人見知りが激しいって言ってた」
「ふうん」
「黄色…。クノお兄ちゃんみたいな、綺麗な黄色だね」
「まあ、クルクスやしな」
「ふうん」
「あつ……………」
「どうしたの？」
「昼の月光病…。夜の月光病も……………」
「ん？よう分かったな」
「見えるもん……………」
「見える？」
「身体の悪いところが見えるの……………」
「ほう。興味深いな」
「……………！」

空気が膨らんで、カイトが現れた。

千早はびっくりして縮こまってしまつて。

「驚くこともないだろう」

「いや、普通びっくりするから」

「昨日、ルトを呼んでやったではないか。あれで棒引きにしてくれ」

「あ、そういえば、ヤーリエはどこに行ったの？」

「厠に行つたんだぞ」

「ふうん」

お腹が痛いのかな。

ちよつと長い気もするんだぞ。

「お待ちせ、千早。つて、何かちよつと狭いですね…」

「お兄ちゃん！」

「明日香、ごはんだよ〜」

「あ、ヤーリエ。どこに行つてたの？」

「厠と台所だよ」

「台所？なんでなん？」

「良い匂いがしたから」

「さよか…」

「はい、明日香。どうぞ」

「ワウ」

「千早も」

「わあ〜。いただきますー！」

千早用の小さな皿に盛り付けられたごはんは、とても美味しそうで、
お腹の虫も鳴き出しそうだった。

千早のごはんが続いて、自分たちもお昼ごはんを食べる。
お昼ごはんは、お兄ちゃんが作ってくれた。

「なるほど。美味しいものだな」

「鳥にも味が分かるんやな」

「偏見だな」

「普通、鳥に味が分かるなんて思わんやろ」

「だから、それが偏見というのだ」

「あー、はいはい。すみませんでした」

「私は謝ってもらおうなどとは思っていない。ただ、修正するべき点を指摘したまでだ」

「ホンマめんどいな、お前は」

「私には、主から貰ったカイトという名がある。出来れば、お前などではなく名前で呼んでほしいものだ」

「誰に向かって話してるかってのが明らかなきは、わざわざ固有名詞を使って対象を指示する必要もないやろ」

「私はあくまで希望を言ったまでだ。希望を聞き入れたくないというなら、私も諦めるが」

「ああもう！誰や、こいつの契約主は！」

「我が主は望だが」

「そんなもん分かつとるわ！」

「お昼ごはんのときくらい静かにしてください」

「こいつが悪い」

「そんな子供みたいなことを言わないでください」

「いや、事実やし！」

「分かりましたから。静かにしてください」

「…なんかオレだけ悪いみたいやんけ」

「五月蠅いのはあなただけです」

「それは言えているな」

「お前がゆうな！」

（呼んだ？）

「悠奈やない。ゆうなゆうてんねん」

（……？）

「ホント、五月蠅いお兄ちゃんだね」

「でも、そこがいいところなの。私が落ち込んでても、ずっと一所懸命に喋りかけてくれて」

「やっぱり袖香はよう分かつとるなあ」

「ただ単に喋りたかっただけなんじゃないの？」

「ちやうな。袖香を元気付けたかったんや」

「ホントかなあ……」

「ふふふ」

ヤーリエは少し笑って。

うん。

お兄ちゃんだけじゃなくて、みんなお喋りなんだぞ。

みんな、お喋りが大好き。

「さて、話の続きなんだが」

「なんの話してたっけ？」

「千早の目についてだ」

「ああ、そっぴやそんな話もしてたな」

「聖獣の目とか言っつて前に見せてくれたけど、あれは何だったの？」

「あれは召致の一種やな。聖獣の、属性を見分ける力だけ呼び寄せたんや」

「そんなこと出来るの？」

「簡単ではないが、難しいことでもない。力を全て活用するには契約しないといけないが」

「ふうん」

「だから、今の望なら私の力を最大限活用出来るということだ」

「どうやって？」

「それは望自身が考えることだ」

「そっか…」

「まあ、オレよりかは楽に使える思うで」

「ああ。そうだな」

自分も、悠奈と七宝の力を使えるのかな。

使ってみたいな。

「聖獣の目とは言うが、目が直接関係してるのではない。柚香のよ
うに、感じるものなのだ」

「柚香のつて、聖獣の目なの？」

「要するに、その人が持つ属性を識別出来る力を聖獣の目って呼ん
でるだけや。聖獣がその能力をよう持つてるんやけど、人間が持つ
てることもある」

「私は、月光病が出てきてから見えるようになったんだ」

「へえ〜」

柚香は一度、周りを見渡す。

そして、確かめるように頷いて。

「本来は属性を見抜くだけのものなのだが、千早のように病を見抜
くなどの特殊な力を持つ者もいるな」

「珍しいの？」

「いや、それほど珍しくはないが、それがそれだと分かる者は少な
い。普段、何の意識もなく使っていたり、滅多に使わない力だっ
たりするからな」

「ふうん」

「私にはそんな力はないのでな。どういふ風だとかは説明出来ないのだが」

「千早を起こしましょうか」

「あ、いえ。いいですよ。可哀想ですし」

「クノ。お前、配慮に欠けるとか言われんか？」

「えっ…なんでそのことを…」

「はあ…」

お兄ちゃんは首を横に振って呆れ顔。

「寝てる子供は寝かしく。配慮ってか常識やぞ」

「べ、勉強になります…」

「勉強になりますやないやろ」

「は、はい…」

「あ、そうだ。ルトはカイトが呼んだの？」

「ああ。そうだが。それがどうかしたか？」

「いや、お兄ちゃんが呼んだのかと思ってたけど、さっきカイトが呼んだみたいなのを言ってたから」

「オレではルトは無理やな。向こうの力が強すぎるから、オレの方が耐えられん。関連付けがなかったら、オレの限界は如月くらいやな」

「そんなこと言われても分からないよ」

「聖獣の力は、だいたい年齢に比例する。悠奈や七宝、千早のような若者は、比較的力が弱く扱いやすい。如月などの中堅になると、力も強くなり、熟練の斡旋者でなければ制御は難しい。そして、私やルトなどの年寄りになると、いたずらに力が強いのでな。関連付けをした斡旋者や契約主でないとは制御出来ない」

「さっきから出てきてるけど、関連付けって何？」

「ゆうつら、友達になるってことやな。まあ、友情の力は偉大っちゃうーこっちゃん」

「ふうん……」

「なんや、その冷めた目は」

「友情ねえ……」

「友情を信じやんのか」

「そういうわけじゃないけど、男の人ってやっぱりそういうのが良いのかな？って」

「なんや。女は友情に疎いんか」

「女は愛情だよ」

「……ゆうてて恥ずかしくないか？」

「……」

「おぐっ!?!」

鈍い音がする。

お兄ちゃんは、またお腹を押さえていて。

……楽しいお昼ごはんの時間が、ゆっくりと過ぎていく。

「ねえ、望。遊んで」

「ちょっと待って」

「ねえ、ヤーリエ」

「んー…」

「ねえってばー！」

「千早、邪魔しちゃダメだろ」

「だってえ…」

「しゃーないな。オレが相手したるわ」

「イヤ」

「即答かよ！」

お兄ちゃんのツッコミを軽く流して、また望に構っていつて。千早は人見知りだけど、慣れたらすごく甘えん坊なんだぞ。

「はあ…。しかし、二人が将棋にこんなハマるとは思わなかったな」

「望さまもヤーリエさまも筋が良いですし」

「私は前にやったことがあるんです」

「ぼくは初めてだよ」

「へえ。じゃあ、ヤーリエは将棋の才能があるのかもね」

「えへへ。そうかな」

「うん」

将棋…。

難しそうだけど、面白そう…。

自分もやってみたい…。

「ルウエもやってみる？」

「え？でも、まだ途中だよ？」

「大丈夫だよ。王手」

「あ、あれ？難しいなあ……」

「ふん。終わったな」

「そ、そんなの、まだ分からないじゃない……」

「王さんが横に避けても、ここに飛車が入ってきて詰み。後ろやつたらここに金を打たれて詰み。何か当てても、ここに桂馬打って王手、逃げたらそれ取って角が成って詰みや」

「む……」

「唸ったって変わらん。人間、諦めも肝心やぞ」

「あー、ヤーリエは強いなあ」

「えへへ」

「じゃあ、次、自分の番！」

「どっちと指す？」

「ん……」

「クノとやったらどうや」

「え？私ですか？」

「お前も上手いんやろ。ちょっと指したれよ」

「私も、クノさんが指してるところ、見たいです！」

「あ、え、でも、私は……」

「まあまあ。オレがルウエの代わりに駒動かすわ」

「あの、えっと……」

「ほなら、はよ駒並べろよ」

「は、はあ……」

ひとつずつ並べられていく駒を見て。

不思議な形の駒が、綺麗にマスの中に収まっていく。

「振り駒はクノやな」

「はい。分かりました」

真ん中の歩を五枚取って、手の中で振る。
そして、バラバラと落とされた駒は三枚が裏だった。

「ルウエが先手やな」

「うん」

「では、よろしくお願いします」

「よろしく」

「よろしくお願いします」

「ほなら、まずはどこいく?」

「えっと、飛車の前の歩」

「ほいほい」

「居飛車ですね」

「イビシヤ?」

「飛車を元の位置から動かさん戦法やな。他にも振り飛車とかある
んやけど……まあ、居飛車が一番やりやすいっちゃやりやすいかな」

「ふうん」

「では、私は角道を開けることにします」

「……?」

「角の斜め前を開けたら、角が外に出てこれるやろ?」

「うん」

「そうゆうことや」

「どういうこと?」

「大駒は大きく動けるから、一気に攻められるの。だから、早めに
大駒が動けるようにしておく、有利になるでしょ?」

「ふうん。じゃあ、自分も角を動かせるようにするんだぞ」

「はいよ」

「では、私は飛車を振りましょう」

「あ、飛車が動いた」

「あれが振り飛車。まあ、ルウエは居飛車で進めてるし、ここから

動かす必要はないけど」

「ふうん。じゃあ、あの角を取るんだぞ」

「ほいほい…って、え？」

「速い展開だね…」

「ルウエは、速い勝負が好きなのかな？」

「うーん…。分かんない」

「まあ、進めましょうか」

「開いてるからゆつて、こんなすぐ取るやつなんか初めて見たわ…」

「そうなの？」

「たいがいは角を止めるか、飛車の道を開けるか…。気が速いやつでも、矢倉組み始めるくらいやし…」

「さて、私は銀で取ることにしましょうか」

クノお兄ちゃん、細かく説明してるのは柚香のためなのかな。

自分もやった方がいいのかな…。

「ルウエは将棋に集中すればいいよ。私は、音でもだいたい分かるから」

「へえ、すごいね」

「そんなことないよ。望お姉ちゃんも、きつと出来るよ」

「私はダメかなあ。やっぱり盤面を見ないと分からないね」

「次は、飛車の前の歩なんだぞ」

「ほい」

「では、私も飛車の前の歩を動かしましょう」

「さっきの歩の横に角」

「ん。王手やな」

「では、角を合わせましょうか」

「角を取って」

「また王手やな」

「では、金で取りましようか」

「飛車の前の歩」

「はいよ」

「では、それを取りましようか」

「飛車で取って」

「ん」

「歩を置きます」

「二個下がって」

「ほい」

「では、飛車の前の歩を進めます」

「飛車で取って」

「ほいほい」

「では、私から見て左の香車の列の真ん中に角をおきましよう」

「飛車を取って」

「ん」

「では、また金で取りましよう」

「ルウエは、すぐく攻めるね」

「そうなの？」

「うん。さつきから、飛車と角の交換ばかりだし」

「ふうん」

「私は、こういうのもなかなか面白いと思いますよ」

「じゃあ次は、右の銀を一個前に出して」

「分かった」

「なるほど。では、どうしましようか」

クノお兄ちゃんは、顎に手を当てて考える。

次はどう来るのかな。

銀の横に飛車？

それなら、その飛車の後ろに歩を置いて…。

それとも、角の斜め前に歩？

それなら、銀の横に歩を置くのかな。

…すっごく考えて、すっごく頭を使っけど、すっごく面白いんだぞ
!

「王手」

「ん？んー…」

「詰みだね」

「はあ…。強いな、お前ら。全然勝てんわ」

「二人とも、面白い指し方をするんだね」

「おもしろすぎて、オレには先が読めんわ」

「修行不足なんじゃないですか？」

「そうかもしれないな」

（クーも！クーもやりたい！）

「お前には無理とちゃうか？」

（むう…。そんなことないもん！）

「こんなプニプニの肉球では、指せるもんも指せんやろ」

「そつちですか…。それは代わりにやってあげればいいのではない
でしょうか」

「ワウ」

「え？」

「どないしたんや」

「明日香も指したいって」

「はあ？ホンマにゆうとるんかいな」

「うん」

「じゃあ、七宝と明日香の対局ですね」

「せやな。どつちが強いかな」

「……………」

「え？ホントに言ってるの？」

「なんやねん」

「七宝となら、六枚落ちでもいって」

（六枚落ち？）

「飛車角金銀落ちのことやな。攻めの駒も守りの駒もない状態やな」
（ふうん。じゃあ、やるうよー！）

「ナメられてるってことやぞ…。もっと悔しがったりしてみたらど
ないやねん…」

（なんで？）

「…もうええわ。ほなら、ホンマに六枚落ちでええんやな？」

「ワウ」

「んじゃ、始めよか」

七宝と明日香の戦い。

六枚落ちで、ホントに勝てるのかな？

望が駒を動かす。

七宝は、ますます頭を抱えて。

（ん…。えつと…）

「もうあかんな」

（うう…）

「ワウ」

（もう！強いよ、明日香は！）

「そこ、怒るところかいな…」

（だって、駒、全部取っていくんだもん！）

「それは七宝の守りが穴だらけやからやる」

（そんなの、分からないもん…）

「分からない、では逃げられんぞ。分からんなら分からなりに、
理解しようとするのが大事やねんから」

（むう…）

「ワウ」

「もっと手応えのある勝負をしたいんだって」

「それなら、ルウエさまかヤーリエさまでしょうね」

「私にも活躍の場を与えてほしいものだ」

「あ。カイトも将棋出来るの?」

「少なくとも、その若造よりはな」

「ワウ」

「ふふふ。威勢だけは良いようだな」

「……………」

「あ、うん。分かった」

「何?」

「カイトをコテンパンにするから、早く駒を並べてくれって」

「返り討ちにしてやろう」

「では、カイトの駒は私が動かすことにしましょう」

「む。すまないな」

「いえいえ」

そして、また準備が完了して。

先手は明日香だった。

「それにしても懐かしいな。昔は大和とよく将棋を打ったものだ」

「大和とねえ」

「大和は強かった。いや、今も強いんだが。とにかく、大和に勝ったことはなかった」

「ほう。狼と不死鳥が将棋やつてる絵って、なんやおもしろいな」

「今この状況にそっくりだ。まあ、大和は白ではなく銀だが」

「ワウ」

「む? ああ、すまない。角道を開けてくれ」

「はい」

「ああ、そつちではなくて左側だ」

「え? あ、はい」

「カイトも変わった打ち方をするんだね」

「常識に囚われないことも大切なことだ」

「まあ、そうだけどね」

「どうだ、柚香。面白いか？」

「うん」

「それは良かった」

「ワウ」

「ここ？」

「……………」

「うん。じゃあ、カイトの番だよ」

「ああ。ふむ、そうだな……………」

駒をジッと見ながら考える。

二人とも、すごく真剣なんだぞ。

明日香の番になって、もう十分くらい経つのかな。

明日香は、石みたいにピクリとも動かない。

「どうした。指さないのか」

「……………」

「ふむ」

「……………」

（ふぁ…………あふう）

「なんや、眠いんか？」

（だって、全然進まないもん…………）

「明日香もたいがい負けず嫌いみたいやからな」

「諦めなよ。もう無理だって」

「……………」

「はぁ……………」

「気の済むまで考えればいい。時間制限を付けなかったからな」

「……………」
「お兄ちゃん……」
「ん？起きたのか、千早」
「ん……」
「どうしたんだ？」
「夕飯……まだ……？」
「まだだ」
「む……」
「ただだけど、昼寝もその辺にしておけ。夜に寝られなくなるぞ」
「でも眠い……」
「ダメだ。ほら、こっちに来いよ」
「うん……」

千早はクノお兄ちゃんの膝の上に座って。
クノお兄ちゃんが角を撫でると、気持ち良さそうに喉を鳴らしていた。

「……………」
「……ワウ」
「む。そうか」
「やっと認めたね」
「……………」
「……」
「もう、不貞腐れないの」
「……………」

そのまま、明日香は部屋の隅で丸まって眠ってしまった。
……相当悔しかったのかな。

「千早」
「……………」
「……！な、何……？」
「そんなに驚くこともなからう」

「だって…」
「少し聞きたいことがあるのだが。いいか？」
「う、うん…」
「その目はいつからなんだ」
「……？」
「いつから病が見えるようになったのだ？」
「いつからって…最初からだよ…」
「ふむ、なるほど。先天的なものなのか。親はどうだ。病が見える目を持っているのか？」
「うん…。お母さんがそうだって…」
「ほう。遺伝か」
「ねえ、何なの…？」
「む？いや、個人的な興味だ」
「……………」
「何か言いたげだな。遠慮せずに言うといい」
「…なんで、そんなに大きいのか？」
「不死鳥の中では、私は小さい方なのだがな。それに、なんでと聞かれても、そういうものだからとしか答えられない。まあ、千早もすぐに大きくなる」
「ホント？」
「ああ。クノを乗せて飛び回れるくらいにはなるだろう」
「えっ。こんなちっちゃいのに、そんなに大きくなるのか？」
「クルクスというのはそんなものだ。小さくても明日香くらいにはなる。しかも、その強靱な足は一日中走っても疲れないそうだ」
「へえ〜。千早が大人になったときが楽しみだなあ」
「そうだな」
「手間が掛かるのは変わらないでしょうけどな」
「満更でもないんやろ？」
「ふふ、そうですね」

千早は、クノお兄ちゃんに頭を撫でて貰って、嬉しそうに翼をパタパタさせている。

このちっちゃな千早が、クノお兄ちゃんを乗せて飛び回れるくらいに大きくなるのかぁ。

それは確かに楽しみなんだぞ。

「ごちそうさまでした」

「はい。お粗末さまでした」

クノお兄ちゃんが作ってくれた夕飯は、とても美味しかった。やっぱり、お料理が上手いんだぞ。

「ほんで、どうや。怪我の具合は」

「うん。もう大丈夫みたい」

「ほうか」

「また旅に出るの？」

「ん？ああ、そうやな。袖香も、もうちょっと元気になったら一緒に行けるかな」

「ホントに？」

「ああ」

「長之助の許可が出てからだけだな」

「早く許可が出ないかなあ」

袖香はウキウキとした様子で。

早く許可が出るといいな。

「ところでだ」

「わっ、びっくりした」

「聖獣つちゅーんは、なんでそんなにいきなり出てくんねん」

「良いじゃないか。朝の続きといきたいのだが」

「まだ何かあるの？」

「あのチビはいないか？」

「今は寝てるみたいだけど」

「そうか」

「悠奈となんか関係あるんか？」

「いや、ない。ただ単に五月蠅いのがいないか確認しただけだ」

「……………」

「そういえば、ルトって誰かと契約してるの？」

「今はしてないが。というより、契約してるとこれだけ自由に動き回れることは出来ない」

「ふうん」

「なぜそんなことが気になるのだ、望は」

「召致してるわけでもないし、どうやって来てるのかと思って」

「何も召致だけしかこちらにくる手段がないわけじゃない。それなりに自由に来れるのだが、まあ、向こうで不便をしてるというわけではないからな。好奇心旺盛な者が多いユヌトやクーアでもない限り、こちらに来ることは少ない」

「そうなの？」

「ああ」

「ふうん」

「さあ、質問はそれで終わりか？」

「今のところはね」

「ところで、そののクルクスの子ビはなんなのだ。それで隠れてい
るつもりか」

「あうう」

「千早です。私と契約している」

「ふむ、なるほどな。千早。良き名だ」

「……………」

「さて、本題に取りかかりたいのだが」

「どうぞ」

「ならば……………」

「あ、そうだ。なんで、闇を抑えるのに光が必要だったの？」

「あー、うむ。今からその話もするから」

「分かった」
「では…」

ルトは一度咳払いをして話し始める。

「朝話してたのは、祐輔の闇の話だったな」
「うん」

「今まで漏れ出ていなかったのに、急に出てくるということはない。ヤリエのように常に湧き出ているか、いつまでも出てこないかのどちらかだ。それがいきなり出てきたということは、何かしらの力が加わったと考えるしかない」

「……？」

「ヤリエ。ヤクウルには行ったのか？」

「うん」

「えっ、来てたの？」

「うん。街の宿屋さんに泊まってた」

「ほなら、なかなか会えんやろな。正反对やし」

「むう」

「その時、闇は出てたのか」

「ううん」

「では、原因は別にあるのか…」

「えっ、連鎖的に闇が出てくることなんてあるの？」

「質が同等なら、共鳴して一時的に出てくることもある。闇に限らずな。望も、共鳴すれば火を纏うことになる」

「ええ…」

「まあ、カイトがいるから大丈夫だろうが」

「良かった…」

「話を戻して。調べてみたら、ルウエに混ざっている闇はヤリエとほぼ同質だった。いや、ヤリエの多少し混ざっていたが」

「え、そんなの、いつ調べたの？」

「朝の暗いうちに一度起こしただろう。あのときだ」

「ふうん。そんなの分かるの？」

「まあな。あれが祐輔の闇だとすると、ヤーリエの闇と共鳴したと
考えられるのだが……」

「違うんだね」

「たぶんな」

じゃあ、なんで暴走したんだろ。
うーん……。

「あ、そうだ」

「なんだ」

「悠奈が、ルトが闇を混ぜたって言ってたけど、どういふことなの
？」

「そうだな……。太陽は眩しいだろう」

「うん」

「月は明るくとも、眩しくはないだろう」

「うん」

「そういうことだ」

「はあ！？それで終わりかいな！」

「全然分かんないんだぞ」

「そうか？」

「当たり前やる。ちゃんと説明せえな」

「ふむ。太陽の光と月の光は異質なものだ。そもそも、太陽の光は
闇だ」

「……？」

「太陽の光は闇を強調する。対して、月の光は光を強調する」

「そうなの？」

「遙か昔から言われていることだから、そこはどつとも言い様がな
い」

「ふうん」

「そして、ルウエの光は月の光だ。月の光は、闇の中でこそ真価を發揮する。それに、光が強すぎて太陽のようになってしまうと、要らぬものまで引き付けてしまうからな」

「要らぬもの？」

「ああ。…まあ、今のところ、その心配はない」

「ふうん」

「炎はそれを焼き払うことも出来るだろうが、光は対抗する手段を持たない。だから、強すぎるのは問題なのだ」

「……………」

「難しいか」

「うん」

「では、これで終わりとしよう。私も考え事が出来たのでな」

「うん。またね」

「お休みなさい」

「ああ。お休み」

「興味深い話をどうもありがとうございました」

「む？そんなに面白かったか？」

「ええ」

「そうか。それなら良かった」

「……………」

「柚香も感謝しております」

「ん？月光病か」

「はい。昼は目が見えなくなり、夜は声が出ません」

「ほう。昼と夜で症状が違うのか。これまた興味深い」

「……………」

「また今度、ゆっくりお話がしたいそうです」

「ああ。楽しみにしておくよ」

ルトは柚香の頬を舐めると、もう一度こっちを向いて。

そして、そのまま消えてしまった。

「ふぁ…あふう…」

「千早、もう寝るか？」

「うん…」

「自分も、もう寝るんだぞ」

「じゃあ、ぼくも」

「お前らはここで寝たらええわ。オレは毛布敷いて寝るし」

「あ、布団、出してくれます」

「ええて、そんな。毛布の方が落ち着くし」

「じゃあ、柚香ちゃん、一緒に寝よっか」

「……………」

柚香はコクリと頷いて、望が座っている寝台に向かう。

「それでは、私はルウエさまとヤーリエさまと一緒にですね」

「うん！」

「えへへ。ルウエと一緒にだね」

「ほんなら、お休み」

「お休みなさい」「お休み」

ヤーリエは左に、クノお兄ちゃんが右に寝る。

二人はとても温かった。

そして、その温もりは眠気を誘うのには充分で。

柚香と一緒に、ちょっと遅めの朝ごはん。
今日は望が作ったみたい。

「いただきます」

「はい、どうぞ」

「それ食ったら出発するからな」

「うん…」

「次はどこに行くの？」

「テヌカイかベラニクかな」

「国境越えるかルイカミナか、やな」

「ヤーリエは？」

「ぼく…？ぼくは…」

「あの、クノさま。お客さまです」

「ん？こんな朝からですか？」

「はい。どうぞ、こちらです」

「ああ。どうもご丁寧」

「あっ！」

そう言って入ってきたのは、知ってる人だった。

銀色の長い髪、気持ち良さそうな尻尾、真っ黒で鋭い目の…

「狼の姉さま！」

「知ってる人？」

「狼の姉さまなんだぞ！」

「オレの名前は紅葉だ。それにしても、また髪が伸びたな」

「紅葉お姉ちゃん、ルウエのこと、知ってるの？」

「まあな」

「ん？ヤーリエの同伴者か？」
「ああ」
「ふうん…」
「なんだ」
「銀狼なんか、初めて見たからな」
「白狼の方が良かったか？」
「あー、あんなのはあかん。オレには高嶺の花や」
「ということは、オレは美人でないということだな」
「そんなこと自分で言うやつが美人やとは思わんな」
「…お兄ちゃんは、眼鏡でも掛ければいいと思うよ」
「ん？なんで？」
「それより、すまないな。ヤーリエが迷惑を掛けた」
「え、あ、迷惑だなんて。ね？」
「うん。楽しかったんだぞ」
「ルウエがそうゆうんやつたらそうなんやろ」
「ヤーリエ、とっても良い子だったよ」
「ええ。そうですね」
「そうか。よかった」
「ほんで？どうするん？」
「ぼくは、また紅葉お姉ちゃんに行くよ」
「ほうか」
「じゃあ…お別れなのか…？」
「うん。でも、また会えるから」
「絶対、なんだぞ！」
「うん。約束」
「約束…」

絶対に、また会う。
ヤーリエとの約束…。

「来たすぐでなんだが、お先に失礼する」

「はい。お元気で」

「またな、ヤーリエ」

「うん」

「あ、そうだ。私の名前を知っていたのはなぜなんですか？初対面
…ですよね？」

「そうだな。まあ、それは秘密だ」

「えっ」

「ふふふ。じゃあ、またな」

「は、はい…」

軽く手を振って、狼の姉さまとヤーリエは部屋を出ていった。
クノお兄ちゃんは、しばらく悩んでいて。

(ふあ…)

「あ、悠奈。おはよ」

(おはよ…)

「相変わらず寝坊助やな、お前は」

(寝る子は育つの。ところで、今、光がいなかった？)

「うん。紅葉お姉ちゃん、すごく優しい光だった。本物の月の光み
たいな」

「ほう。あの銀狼が」

「紅葉さん、でしょ？」

「ん？まあ、そんなこともゆつてたかな」

「もう…」

(ふあ…あふう…。眠い…。じゃあ、寝てくるね…)

「まだ寝るんかい…」

「お休み、悠奈」

(うん…。お休み、ルウエ…)

そして、悠奈は消えてしまった。

「結局、何しに出てきたんや…」

「さあ？好きなものには敏感なんじゃないの？」

「好きなもん…？あの銀狼か？」

「だから、紅葉さん」

「ほいほい」

「まったく…」

やれやれといった風に首を振る望。

柚香は楽しそうに笑っていた。

…ただ、クノお兄ちゃんだけは何か深刻な顔をしていて。

「……………」

「クノお兄ちゃん？」

「えっ、ああ、そ、そうですね」

「はあ？何が？」

「…何を考えていたんですか？」

「あ、その、えっと…」

「なんや。あの紅葉ってやつが全国指名手配されてることか？」

「は、はい…」

「ええっ!？」

ゼンコクシメイテハイって？

望はすごく驚いてるみたいだけど…。

片付けも終わったけど、まだ出発はしないみたい。

七宝の背中を撫でながら、望たちの話を聞く。

「…警備兵二名を気絶させて王族宝物庫に押し入り、ナウカを盗難。捕らえに出た兵士の包囲網を突破し逃走した、とありますね」

「まあええんとちゃう？そんな悪いやつやないみたいやったし」

「でも、王族の宝物庫で盗みを働くなんて大罪じゃない」

「それにしても、なんでこんなもんを盗んだんやろな」

「薬を作るためだと思つよ。たしか、これは…」

「これは…？」

「えっと、忘れました」

「なんや、それは」

「仕方ないじゃない。普通、こんな薬は使わないもん」

「でも、薬つてことは分かるんやな」

「このナウカつてのは、薬鉦をすり潰して粉末にしたものなの」

「ほう。薬の石か」

「五月雨石つて知らない？それがナウカの素だよ」

「ああ、五月雨石やつたら知ってるわ。…ほんで、なんの話やったかな」

「紅葉さんの話でしょ」

「せやつたせやつた」

「はあ…」

「ナウカというのは万石並に高価なものですから、確かに、王族宝物庫かよほど裕福な者のところにしかないでしょうね。それが欲しいとなれば、大罪を犯す他ないということですか」

「そんなに高価やねんやつたら…」

「五月雨石を売つてもどうにもなりませんよ。両手で一抱えくらいある五月雨石から、多くても米粒三つほどしか取れないから高価なんです」

「ほう…」

「お兄ちゃんのコんな小さな石なら、粉一粒も取れないね」

「儲かる思たのになあ」

「そんなに甘くないよ。それに、たくさん取れるなら宝物庫になん

か入れないでしょ」

「まあ、そらそうか」

「それで、紅葉さんの話なんです…」

「ああ、そんなもうええやる。あいつは悪いやつやない。オレには分かる」

「そう…ですか」

「ヤーリエも信じきってましたし…。私たちも信じるしかないと思います」

「…そうですね。引き止めてすみませんでした」

「いや、オレらも話に乗ったんやから、そこはトントンやる」

「そう言っていただけとありがたいです」

「よっしゃ。ほなら行こか」

お兄ちゃんが立ち上がると、七宝はびっくりして飛び上がった。

狼の姉さま…。

なんで泥棒なんかしたのかな…。

「ほなな。行ってくるわ」

「うん。気を付けて」

「大丈夫大丈夫。殺したって死なんから。な？」

「いったいオレをなんやと思っとなるんや……」

「んー。生き霊」

「……………」

「はは、冗談冗談。…気い付けて」

「ああ」

「望とルウエと明日香もな。また珍しいもん見つけたら、ウチが鍛えたるから」

「うん。次は、万石を持ってくるんだぞ」

「万石かあ。そりゃ楽しみやな」

「柚香ちゃんも真さんもお元気で」

「うん」「ほいほい」

「じゃあね」

「ちよつ、ちよつと待った！」

「あ、お母さん」

「はあゝ。間に合ったあ」

「どないしたん？」

「はい、これ」

何かの包みを渡される。

紐でしっかり結ばれていて、中身は分からない。

「あ、お弁当ですか」

「え、あれ？開けてびっくり作戦が……」

「なんや、凶星かいな」

「そうだよ。お弁当だよ。それにしても、よく分かったね」
「匂いがしますから」

「あー、そうだね、うん。望ちゃんが狼だっけと忘れてた」

「お弁当か」

「お昼にね。ゆっくり食べてよ」

「うん！」

自分は全く匂わないけど。

でも、お弁当なら楽しみなんだぞ！

「またしばらく帰らんと思っわ」

「ん？そう？まあ、気を付けなよ。じゃあ、もう行った行った。時間を掛けると余計に名残惜しくなるからさ」

「ああ。ほなら、またな」

「それじゃあ、また」

「行ってきます！」

「うん。行ってらっしゃい」「またな」「行ってらっしゃい」

大きく手を振って。

三人は、ずっと見送ってくれて。

大きな通りはまだまだ続く。

通りの両脇も、普通の家から食べ物売ってるお店へ。

そして、今は石を売ってるお店。

「これからしばらくは石を見れんからな。しっかり見とけよ」

「うん」

「そういえば、どっちに行くの？テヌカイかベラニクか」

「知らんがな。望が決めるよ。オレは護衛やし」

「もう…。ルウエはどっちがいい？」

「ん…」

「そもそも、ルウエはテヌカイもベラニクも知らんやろ。どうやって決めるゆうねん」

「あ、そっか」

「クノお兄ちゃんは、テヌカイに行ったんだよね？」

「そうだね。テヌカイは国境を越えることになるけど…」

「ベラニクやったら、ほとんどルイカミナに行くようなもんやし」

「長之助さんはそっちかな」

「せやる。ルクレイ分隊ゆうてたし」

「ボクは、テヌカイに行きたい！」

「よっしゃ。ベラニクやな」

「ええーっ！」

「悠奈はなんでテヌカイがいいの？」

「だって、美味しいものがいっぱいあるんだもん」

「そう…」

「なんなのさ！いいじゃん。美味しいもの、食べたい！」

「そっぴや、望はどういう道やったん？」

「無視しないでよ！」

「お前はいちいち五月蠅いねん。ベラニクにも美味しいもんはいっぱいあるし」

「えっ、そうなの？」

「はあ…。なんも知らんやつちやな…」

「ベラニクかあ。ベラニクもいいなあ」

「結局、美味しいもんだけかい…」

「えっと…うん…」

「認めんなよ」

「あ、あはは…。じゃあねっ！」

「まったく…」

「ふふふ。でも、悠奈は美味しいものが食べたいってことが分かっ

ただけでもよかったじゃないですか」

「あいつの食い意地は今に始まったことやないからな」

「でも、それじゃあ、テヌカイとベラニク、どっちにするの?」

「うーん…。どっちかなあ…」

望は顎に手を当てて考え始める。

「うーん…」

「わたしは、ベラニクがいいな」

「じゃあ、ベラニクにしよっか…」

「ベラニクやな」

「うん」

「よっしゃ。分かった」

「今は、カツルとかソムナが旬なの」

「へえ〜。よく知ってるんだね」

「えへへ」

望は、赤い龍の女の子に良い子良い子して。

それに応えるように、大きな翼をパタパタさせる。

「それじゃあ、ベラニクに向けて出発進行!」

「おおーっ!」

「それで、ヤマトはどこまであるの?」

「この職人街抜けて露店通りを過ぎて、ほんで、ヤマト名物の大鳥居をくぐってやっと街を抜けるってかんじやな」

「街を抜けるだけで大変なんだぞ」

「せやな」

「じゃあ、路線馬車使う?」

「金かかるやろ。そんなん歩いても知れとるし」

「まあ、そうかもしれないけど…」

「あつ」
「ん？どうしたの？」
「わたし、あれが欲しいの…」
「あれって…黒曜石のこと？」
「うん…」
「んなもん、こつたるがな」
「ホント…？」
「ああ。ほれ、こつてこい」

お兄ちゃんは、女の子にお金を渡す。

それを受け取ると、女の子は嬉しそうに石屋さんまで走って行って

「…それで、あの子は誰なの？」
「さあな」「知らないんだぞ」
「そつか。…つて、ええっ!？」
「なんや、やかましいやつちゃん」
「だ、だって、お兄ちゃんの知り合いの子とか思うじゃない!」
「あんな紅龍の小娘なんか知らんで」
「じゃあ、なんで…」
「誰だつてええやん、別に。知らん子やからゆつて、はねのけるん
かい」
「そ、そういうわけじゃないけど…」
「何のお話？」

女の子が戻ってきた。

ピツタリ手に収まるくらいの黒い石を持って。

「ほう。なかなか綺麗なやつやな。結構おつきいし」
「うん!あ、これ、お釣りだよ」
「そんなんええて。お菓子でもこつとけ」

「えっ、でも…」

「子供が遠慮するな。素直に受け取っとけ」

「…うん」

「よしよし」

「えへへ」

女の子はニッコリと笑う。

すると、頬っぺたとかおでこの鱗がキラキラと光って綺麗だった。

もう一度、ヤマトの方に振り返る。
ずっと歩いてきたと思っただけど、まだすぐそこに見えた。

「大きいよね、ホント」

「うん」

「随分登ってきたと思たんやけどなあ」

「登ってきたのは登ってきたよね」

「疲れた〜」

「しんどくなったら、明日香に乗せてもらいなさいね」

「うん」

「ほんで、お前、名前は？」

「あ、そういえば聞いてなかった」

「リュウなの」

「リュウ…。紅龍とかの龍？」

「いや、”紅蓮の瞳”やろ？」

「うん」

「へえ、リュウかあ」

「ほんで、ここまで来ててなんやけど、どこまで付いてくるん？オシラはずっと旅してるんやけど。ヤマトには当分帰らんで。分かるとるんか？」

「うん」

「家の人は？心配するんじゃないの？」

「ベラニクで合流するの。だから、大丈夫なの」

「へ、へえ…。なんかよく分からないけど…」

「まあええやん」

「ベラニクまで一緒なの？」

「うん」

「じゃあ、いっぱいお話し出来るんだぞ」
「えへへ。そうだね」

頭を撫でてもらって。
嬉しかったから、ギュッと抱き締めた。

「家族で旅してるの？」

「うん。いろんなところに行ってるの」

「ほんで、次はベラニクってわけか」

「うん。たぶん」

「…え？」

「ベラニクのことを言ってたから、ベラニクに行くんだと思うの」

「じゃあ、ベラニクに行っても誰もいない可能性もあるの…？」

「うん」

「ええっ！は、早く探さないと！」

「いや、もう遅いんとちゃう？」

「なんで！」

「リュウの家族は、もうヤマトにはおらんねんやろ？」

「うん。朝起きたら、起きるのが遅いから放っていくって手紙が置いてあったの」

「な、何それ…。薄情だね…」

「いや、護衛やったら顧客に合わせやなあかんからな。それもありえるんとちゃう？」

「なんで護衛限定なの？それを言うなら、商人だって納期とかあるじゃない」

「これ、見てみいな…」

お兄ちゃんが指したのは、リュウが首から掛けていた名札。
そこには、自分の名札にもある紋章が彫ってあった。

「あつ。旅団天照…？」

「うん」

「じゃあ、家族っていつのも…」

「うん」

「しかし、旅団のことやったらクノに聞いたら一発やねんけどなあ…」

「もう先に馬車で行っちゃったからね…。しかも、テヌカイ…」

「まあええわ。それより、誰を護衛してたとか分かるか？」

「うん。ルイカミナのトリシマリヤツカイのカイチヨウさんだよ」

リュウがそう言うと、望とお兄ちゃんは顔を見合わせて。

「税務取締役会かな？」

「でも、ヤマトに来る理由が分からんやん」

「ユールオに行く途中とか？」

「じゃあ、真逆やぞ」

「あ、でも、国王がルイカミナに行ってるとか、おばさんが言ってたような…」

「すれ違いになって、慌てて戻ってるってことか？」

「さあ…？」

「いや、でも、なんでわざわざヤマトから遠回りしていくねん」

「知らないよ。ホントに何か用事があったのかもしれないし…」

「行けば分かるんじゃないのか？」

「……………」

「まあ…ルウエのゆう通りやな」

「そうだね」

「そうとなれば、考えてるだけ無駄や。行こか」

「うん」

「出発進行」

また山の上を目指して。
ゆっくりと登っていく。

不思議な模様が、胸のあたりで弾けた。

そして、ヨロイを着たお兄ちゃんはニッコリと笑って。

「ご協力、ありがとうございました」

「いえいえ」

「それにしても、狐が犯人だとは思いませんでした」

「そうですね」

何か、ギクリという音が聞こえた気がした。

「でも、盗品が戻ってきて良かったです」

「裏に流れてたら大変でしたよね」

「ええ。それに、ラズイン旅団も関係ないと分かって良かったです」

「ん？なんでや」

「いえ、実は私、昔にラズイン旅団に救われたんです」

「ほう」

「私、孤児でして、ある孤児院でお世話になってたんです。でも、その孤児院がまた貧乏で、その日その日の食事もままなりませんでした」

「えっ。国や街から援助があるんじゃないですか？」

「ルクレイではそうなんです、タルカルでは全くないんです」

「タルカル……」

「見えない線を一本越えるだけで、こんなにも違う世界があるなんて、その頃は全く知らなかったんです。タルカルは、とにかく軍備軍備ですからね……」

「ヤウトの自警団に叩かれてから、だいぶ大人になったけどな」

「ええ。それで話を戻すと、孤児院の経営がいよいよ倒壊しかけたとき、不死鳥の紋章が描かれた寄付と魅力的な隣国への”招待状”が、置いてあつたんです」

”招待状”ねえ」

「私にとつて、ラズイン旅団は神様のような存在です。今回の泥棒がラズイン旅団じゃなくて、本当に良かった」

「でも、盗賊であることには変わりないんや。その辺、ちゃんと肝に命じとけよ」

「お、お兄ちゃん…！そんなこと…」

「いえ、いいんです。分かっています。助けてもらったからこそ分かります」

「…ああ。そうかもな」

お兄ちゃんは、どこか寂しげだった。

…なんでだろう？

なんだか、お兄ちゃんとヨロイを着たお兄ちゃんは、全然違つのに似ている気がした。

「昔話に付き合わせてすみませんでした」

「いえ。興味深いお話でしたよ」

「そう言っていただけとありがたいです」

「ほなら、またな」

「ええ。またご縁があれば」

「ヨロイのお兄ちゃん、またね」

「はい。また今度」

手袋を外して頭を撫でてくれた。

ゴツゴツのゴワゴワだったけど、今はそれが気持ち良かった。

「む。美味しいな」

「うん」

「でも、三つしかないんだ。お前たち三人で食べるといい」

「せやせや。オレらはこっち食べるから」

「それにしても、紅葉さんとヤーリエもベラニクだったんですね」

「ああ。オレたちも弁当を持ってくれば追い付かれなかったんだがな」

「別に競争ちやうんやし、ええんとちやうか？」

「まあ、そうだな」

「それで、この赤いチビはどこで拾ってきたんだ。朝はいなかったよな」

「いつの間にか付いてきてた」

「…こいつはオナモミか」

「又スビトハギやろ」

「あんまり変わらないだろ」

「いや、オナモミはちよつとでかい。大きさを考えたら、こいつは又スビトハギやな」

狼の姉さまがリュウの頭に手を乗せる。

そのまま、ゆっくりと撫でて。

「んむ？」

「まあ、そうかもしれんな」

「でも、又スビトなんて可哀想だよ」

「盗人を仕事としてるやつらもおるけどな」

「ん？盗賊か？」

「盗賊なあ」

「ちょっと、お兄ちゃん！」

「ん？どないした」

「む…なんでもない…」

「ほうか」

「まあ、クーア旅団も盗賊だけをやっているわけではないだろ。あそこは巡回行商だけでも充分やっていける」

「え…？あれ？紅葉さん？」

「ん？」

「知ってたんですか？」

「何を」

「あ…いや…」

「ふふふ。でもまあ、ルウエを見れば分かることだ。クーア旅団の腕輪と同じ、銀で作られたラズイン旅団の腕輪。ヤウトの紋章は万金で作られているし、あとは採掘証明だ。ここから推測されるのは、クーア旅団とラズイン旅団が同一、あるいは、近しい関係であることだ」

「ほう。なるほどな」

「ルウエ…。あまりいっぱい装身具を付けないでよ…」

「……？」

なんでだろ。

どれも格好いいのに…。

「まあ、ラズイン旅団は人気だから、模造品や近似品が出回っている。クーア旅団も同様に。採掘証明は少し意外だけどな。旅団の紋章が入った、そういう名札や腕輪を集めて回ってる者もいるらしいから、ラズイン旅団とクーア旅団の腕輪を同時に身に付けていてもおかしくはない」

「じゃあ、なんで…」

「模造品の類は、たいがいは木製であったり安物の金属であったり

する。その中での銀の腕輪だからな。あと、クーア旅団とラズイン旅団が同一の旅団だということを知ってたというのが一番大きい」

「なあんだ。知ってたんですか」

「ああ。タルニアとはずいぶん長いからな」

「ん？でも、クノは知らなかったやん」

「クノはオレのことを直接は知らないからな」

「……………」

「タルニアとは昔から文通をしているんだ。それこそ、あいつがキラキラのお姫さまだった頃からな」

「えっ、お姫さま？」

「おっと、知らなかったか。じゃあ、この話はここまでだ」

「ええーっ！すごく気になります！」

「ふふふ。あいつから直接聞けばいい。聞けば話してくれるだろ」

「聞いとけばよかった……」

「まあつまり、クノは手紙を見こすれ、オレと直接会ったことはないんだ」

「なるほど」

「あ、そうそう。あいつには妹がいたな……」

「いた、ですか」

「ああ」

「……………」

「タルニアも驚いただろうな」

「え？なんでですか？」

「それも秘密だ」

「むう……。秘密が多すぎます……」

「タルニアは謎が多いやつだからな。…それにしても、お前ら、全く喋らないな」

「んむ」

「お弁当が美味しいから、お喋りしてる暇がないんだぞ」

「神道なの」

「リュウ…。どこでそんなん覚えてくんねん…」

「えつとね、桐華お姉ちゃんが教えてくれたの」

「桐華？旅団天照の？」

「うん」

「紅葉さん、桐華って人のこと、知ってるんですか？」

「まあな。いちおう、旅団天照の団長だ」

「…紅葉さんって何者なんですか？タルニアさんのことも知ってるし、旅団天照の団長さんのことも知ってるし」

「ただの旅人だよ。美希と同じ、な」

「え…？」

「黒い毛に先白、透き通った漆黒の目。すごくお喋りで可愛い子。

美希から聞いていた、望って女の子にピッタリ一致する」

「美希お姉ちゃんを知ってるんですか!？」

「ああ。ヤーリエの前は、美希と組んで旅をしていた」

「な、なんで教えてくれなかったんですか!」

「とりあえず落ち着け。教えるも何も、望とまともに話をしたのは今日が初めてだ」

「あ…そ、そうですよね…」

「美希ってやつが、なんかあるんか？」

「私の、旅の師匠なの。今の私があるのは、美希お姉ちゃんのお陰

…」

「ほう」

「あ、それで、美希お姉ちゃんは今どこにいるんですか？何日か前にユールオで聞いたら、ちよつと前に発ったって…」

「カタムからヤーリエと一緒に旅してるから、ユールオにいた時期も少しずれているんだ。だから、正確な位置は分からない」

「そうですか…」

「でも、基本的な道は変わらないはずだ。それに、あいつも新しい子連れて旅をしている。進む速度も今まで通りとはいかないはずだから、もしかしたら近くにいてもしれん」

「ホントですか!?!」

「あくまで可能性の話だ。手紙でも寄越してこない限りは分からない」

「でも、ヤマトからベラニクに向けて行ってたんですね!」

「ああ。そうだな」

「じゃあ、ベラニクで会えるかも!」

「ごちそうさまでした」

「おっ。リュウが一番だったな」

「えへへ」

「よし。みんなが食べ終わったらおやつにしような」

「……!」

「あっ!ヤーリエ、急がないの!」

「ん…むっ」

「ほら!言わんこっちゃない!」

望はヤーリエの背中を叩いて。

ヤーリエは、苦しそうに咳をしていた。

…慌てんぼつすぎるんだぞ。

「でもまあ、必然だったのかもしれない。美希もオレも似たような道を辿っているからな。その同行者だった望も無意識のうちと同じ道を通り、自然と道が重なったということだろう」

「でも、今回はリュウのお陰ですよ。リュウがベラニクに行きたいって言ったから」

「ほう」

「みんながね、たぶんベラニクにいるの。だから、ベラニクに行きたいの」

「みんなって、旅団天照か？」

「うん」

「そうか…」

少し考えるように、リュウを見る狼の姉さま。でも、すぐに元に戻って。

「狼の姉さま、どうかしたのか？」

「ん、いやな。行商を生業としてるクーア旅団とかコンディナ旅団ならともかく、危険な仕事もやってる旅団天照がこんな子供を連れ回しているのはなんでなのかと思ってるな」

「あ、そういえば」

「リュウ、何か知ってる…わけないか…」

「あのね、桐華お姉ちゃんが、ラズイン旅団に対抗するって言って、コジノホゴカツドウってのを始めるって言ってたって遙お姉ちゃんが言ってたの」

「…ん？結局、遙に聞いたのか」

「うん」

「ツッコむところはそこちやうやる…」

「ラズイン旅団に対抗して、というのが桐華らしいな。しかし、そうか。あいつがこの前に言った、すごい秘密っていうのが孤児の保護活動なのか」

「でも、そんなんしてどうするんやろ。孤児なんか、それこそ溢れるほどおるぞ」

「いくつかの信頼出来る孤児院や寺、神社なんかと提携したり、あるいは、新しく施設を設置して、保護してきた孤児の面倒を見てもらう代わりに経済的な援助を行う…といったところだろう」

「なるほどな…」

「戦の絶えない今の時代、平和なのはルクレイくらいだ。設立もヤウトだし、たぶんそのあたりを拠点としているんだろっ」

「ルウエ。ヤウトに旅団天照が来たりしなかった？子供たちを連れて」

たくさん人が来て、お祭りをするときにはあったけど…。
うーん…。

「…分かんない。でも、遠くから森とか原っぱを越えてきて、村に住み着いた子とかはたくさんいるって姉さまに聞いたことあるんだぞ」

「へえ…」

「桐華が言ってたのは、ついこの間だ。たぶん、最近始めたんだろっ」

「わたしがホゴカツドウの第一号だって、桐華お姉ちゃんが話してたの。それで、この名札を貰ったの」

「えっ、リュウって孤児だったの？」

「コジって何なの？」

「あっ…いや…」

「はあ…。アホやなあ、お前は」

「……？」

「まあ、それは置いておくとしてだ。なんでリュウは一人だけ取り残されてたんだ？」

「朝、寝坊して、起きたらもういなくなったらしいです」

「護衛の都合か…。しかし、一人くらい同行者を置いていってもいいようなものだが…」

「桐華お姉ちゃんが横で寝てたけど、起こしても起きないから置いてきたの」

「…なるほどな。同行者はリュウの方だったか」

「……？」

「だ、団長を放っていくんですか…？」

「実質、副団長の遙が団長のようなものだ。桐華がいなくてもやっていける」

「ええ…」

「まあ、あいつもあいつで頑張っているんだ。お茶を飲みながらいろいろ考えて」

「お、お茶？」

「桐華は大のお茶好きだ。旅団天照で、お茶農園をひとつ持っているらしいな」

「ええ…。それはまた本格的ですね…」

「ああ。あいつのお茶好きは筋金入りだからな」

「桐華お姉ちゃんと、いつも一緒にお茶を飲んでるの」

「ええ。お茶って苦いじゃない。ぼくはあんまり好きじゃないかな…」

「そんなこと言って、麦茶はよく飲むじゃないか」

「む、麦茶は緑色じゃないから美味しいの…」

「ふふ、色で分けるか」

「むう…」

自分は…どうなのかな。

風邪を引いたときに姉さまが作ってくれた薬草茶はもう飲みたくない

いけど…。

「あ、それより、桐華さんが心配するんじゃないですか？」

「たぶん、リュウと一緒にだったってことを知らないだろう。自分一人だけ置いていかれることはよくあることだし」

「ええ…」

「ふふ、そういうところなんだよ。でもまあ、いちおう報せておくか」

「え？どうやってですか？」

「まあ見てる。大和、頼めるか」

「ほいほい」

狼の姉さまが合図をすると、一瞬、何も無いところが強く光った。思わず閉じた目をもう一度開けると、そこには悠奈を大きくしたような銀色の狼がいて。

「しっかし、まあたあの嬢ちゃんかよ…」

「いいじゃないか。大和も好きだろ？桐華のこと」

「ぶっ！バ、バカ言ってるじゃねえよ！ありや茶菓子目当てだ！」

「ふうん」

「ホ、ホントだからな！」

「よう、大和。久しぶりやな」

「ん？おお、坊主か。おっさんはどうしたんだ」

「もう発った」

「そうか…。ついにあいつも逝っちゃったか…」

「いやいや、勝手に殺すなよ！オレとは別に発ったってゆうてんねん！」

「なんだ、つまらん」

「アホゆうなや…」

「お兄ちゃん、この聖獣と知り合いなの？」

「ん？前に話さんかったか？」

「聞いたような、聞かなかったような……」

「ふうむ？この嬢ちゃんは、お前の嫁か？」

「な、なんでそうなるの！」

「なんだ。違うのか」

「当たり前だよ！」

「あー、まあ、こいつとは雇用被雇用の関係やな。いちおう」

「まだ護衛なんてやってたんだな」

「ええやないか。何をやるうとも」

「まあそうだが」

「それより、早く行ってくれないか。桐華がヤマトを出てたら探すのが面倒だろ」

「仕方ねえな。んじゃ、話はあとだ。またな」

「おう」

大和は軽く助走をすると、そのままものすごい速さで走っていつてしまった。

…大和。

悠奈とカイトと、あと、ルトの話に出てきた。

言葉遣いは乱暴だったけど、なんだか面白そうなんだぞ。

大和が帰ってきた。

でも、リュウのお姉ちゃんは今もういなかったみたい。

リュウはあんまりガツカリすることもなく、むしろ少し嬉しそうだった。

…なんでだろ。

「しかし、世界は狭いなあ。まさか大和と契約してるやつが、こんな近くにおるとはな」

「たとえ旅をしていても、幹旋者が行動出来る範囲は限られてくる。それに、自身が知っている者でないと召致出来ないからな。俺は…なんだ、その…」

「友達少ない、やる」

「ぐっ…。言うんじゃねえよ…」

「大和、お友達少ないの？」

「この歳になると、減っていくばかりで増えねえんだよ」

「だんだん召致しにくくなるしな」

「なんで？」

「聖獣の力つてのは、歳を経るごとに強くなっていく。すると、召致するときにもバカでかい力を必要とするんだ。重いものを運ぶのに、軽いものを運ぶときより多くの力を使うみたいにな」

「ふうん」

「分かってるのか？リュウは特に分かってなさそうだが」

「うん」

「うんってなあ…」

大和は呆れ顔。

でも、なんだか楽しそう。

「それより、明日香。もう少し離れる。歩みにくい」
「……………」

「明日香、大和のことが好きなんじゃないの？」

「そ、そんなわけないだろ！」

「お前は何を動揺してるんだ」

「動揺なんかしてねえって！」

「じゃあ、大声を出すな」

「いいだろ！俺の勝手だろ……」

「ワウ」

「……………」

「明日香。あんまり大和を困らせちゃダメでしょ？」

「……………」

「し、しかしだな……。俺に白狼のお前は似合わねえよ……」

「ねえ、明日香、何言ってるの？」

「こ、子供には関係ねえって……！」

「……………」

「ふふふ」

何を慌ててるんだろ。

変な大和なんだぞ。

「むう……」

「ん？ヤーリエ、疲れてきたか？」

「うん……」

「坂道ばかりだからな。そら」

大和はヤーリエが乗りやすいように伏せて。

乗ったのを確認すると、ゆっくりと立ち上がる。

「ルウエとリュウも、疲れたら言えよ。俺は、二人くらいは乗せられるから。明日香も入れて三人ちようどだな」

「うん」

「どこも考えることは同じやな」

「ん？どういことだ」

「いや、疲れたら乗せてもらうって発想が同じやな」

「まあ、体力を考えると俺たちが補助をするのは当然ではあるが」

「んー、そんなもんか」

「ああ」

「それにしても、珍しくないか？」

「そうだな」

「何が珍しいの？」

「ヤーリエが疲れてへばることだ。…どうかしたのか？」

「うん」

「ん？」

「うっ」

「どうしたの？気分が悪いの？」

「うん」

「さっきまでは元気だったのに…。頭が痛いとかお腹が痛いとかある？」

「胸が苦しい」

「えっ。お昼ごはんからあと、何か食べた？」

「ぶっ…うっ」

「いや、食べてない。ずっと見てたけど…。オレのおやつが中つたのか…？」

「いえ。それならルウエやリュウも…って、今はそうじゃなくて」

望は、ギュッと目を瞑って苦しそうにするヤーリエの額に手を当てたりして。

そして、大和からヤーリエを降ろして、地面に敷いた布団に寝かせ

る。

「なんだろ……。熱もあるし、心拍数も上がってる……。呼吸も荒くて

……」

「目を開かせてみる」

「えっ、あ、カイト」

「ふうむ。お前、やっと名前を貰ったんだな」

「話はあとだ、大和。それより、望」

「うん……。ヤーリエ、目、開けられる？」

「いや、無理だろう」

「じゃあ、どうしたら……」

「考えるまでもないやろ。ほれ」

「あ、そんな乱暴に……」

開かれたヤーリエの目は、赤黒くなっていた。
なんだか、血が固まったような……。

「うう……あう……」

「なんやこれ……」

「暴走の反動が今になって出てきたのだな」

「暴走？暴走したのか……？」

「ああ。ルトが止めたんだが……少し甘く見すぎていたようだ」

「た、大変だ……。オレが……オレが目を離していたから……」

「おい、紅葉！しっかりしろ！今はそんなことはどうでもいいだろ
！」

「守る……守るって決めたのに……。また……守れないのか……？オレは……」

オレは……」

「ちいっ！」

大和は何かチカチカと光り始めた。

なんだろう…と考える間もなく、目の前が真っ暗になる。

「あれ？」

「見ない方がいい。あの種の光は精神に直接干渉する」

「……？」

「理解する必要はない」

次に明るくなったとき…つまりカイトが翼をどけたとき、狼の姉さまは静かに眠っていた。
何をしたのかな…。

「まったく…手間の掛かるやつだ」

「…何したんや？」

「自分の身に急激で大きな負担が掛かったとき、脳は最低限の生命活動を残して停止する」

「つまりは、気絶させたってことか？」

「そんなところだ」

「また回りくどい言い方して…」

「それより、ヤーリエだ」

「ヤーリエ…」

さっきより苦しそう…。

リュウも落ち着きなく翼をはためかせている。

「俺には闇のことは分からん。どうにも出来ないぞ」

「そんなことは言われなくても分かっている」

「や、薬草ならいくらがあるけど…」

「そうだな…」

「ルトは？ルトを呼び寄せたらええんとちゃうん？」

「それはそうだが」

「なんか問題でもあるんか？」

「さつきから応答がないのだ。もしかしたら、寝てるのかもしれん」「
「ったく、あいつはいつもそうだな！」

「怒ったところで、どう代わるものでもあるまい。今はとにかく、
やれるだけのことをやってやるしかないだろう」

「はあ…。分かってるよ…」

斜めに赤く照らす太陽は、これから夜が来るということを伝えてい
た。

ヤーリエ…。

大丈夫だよね…。

「ふむ。なるほどな」

「何か分かったの？」

「暴走の反動であるのは確かだが、どうも他にも要因があるようだ」

「他の要因？」

「ああ」

ルトは目を少し細めてヤーリエを見る。

何が見えるのかは分からないけど。

「ふうむ…」

「どうしたの？」

「いや、腹が減ったと思って」

「……………」

「なんだ。私も腹は減る。お前たちだってそうだろう」

「せやけどなあ…。ヤーリエが大変やゆうときに…」

「ヤーリエに構ってばかりで、私たち自身も体調を崩しては何も意味がないだろう」

「そりゃそうやけど…」

「では、夕飯にしようか」

「はあ…」

「なんだ、望。不満か？」

「私は食べられそうにもないよ…。ヤーリエのこと看てるから、食べるなら勝手に食べて…」

「望、お腹空いてないのか？」

「ううん。でも、何も喉を通らなそう…。ヤーリエが苦しんでるのに…」

「お腹が空いてたら、藺草は編めぬって言っの」

「ふふ、何それ。腹が減っては戦は出来ぬ、でしょ？」

「あ、笑った」

「え？」

「望お姉ちゃん、ヤーリエが倒れてからずっと怖い顔してたの」

「…そっか。ごめんね」

「うん。だから、一緒に夕飯、食べるんだぞ」

「そっだね。うん、ありがと」

「よっしゃ、夕飯やな。ほんで、何にするかやけど…」

「ワウ」

「ん？どうかしたんか？」

「……………」

「兎の肉ならあるって」

「ほう。ほなら、それ使おか」

「ワウ」

明日香はガサガサと草むらに入っていく、兎を啜えてすぐに戻ってきた。

「兎の肉なんか久しぶりやなあ。あいつらすばしっこいから、なかなか捕まえられんねん」

「お兄ちゃんが鈍臭いだけでしょ」

「そんなことない。望は明日香に捕ってきてもらったらええんやから楽やるうけどな」

「明日香なんて、ほとんど分けてくれないよ。ね、明日香」

「ワウ」

「認めるんかい…」

「とりあえず、早く夕飯にしましょう」

「せやな」

お兄ちゃんは、背負い袋から鍋や食器を取り出して準備を始めた。

ホント、お兄ちゃんの袋にはいろんなものが入ってるんだぞ。

最後の一滴も飲み終わって。
お腹いっぱい。

「ごちそうさま」

「はい。お粗末さまでした」

「ワウ」

「え？そんなの知らないよ……」

「……………」

「まだ紅葉さんの目も覚めてないし、ルトもどこかに行ったし……。それに、大和だって忙しいんですよ」

「いや、それでもねえよ」

強い光があたりを真っ白にする。

そして、次の瞬間には明日香の隣に大和がいて。

「あ、大和」

「いちいち眩しいから、もっと離れたところに出てこい」

「相変わらずだな、お前は。光の使徒が光を発さずに出てくるわけにもいかねえだろ」

「もうちよい抑えるよ。ルトなんか大人しいもんやぞ」

「あれは闇だからな。闇に眩しいも眩しくないもねえだろ」

「それで、大和は明日香に会いに来たの？」

「ち、違っつて！ヤーリエがどうなったか心配で……」

「ルトが来てなんかしたあとからは、ちよつと落ち着いてる。それだけや。ほれ、目的も達成したんやから帰れ」

「ちよつと、お兄ちゃん。そんなこと言ったら可哀想でしょ」

「ふん。こんなジジイが色気付いとるんが悪い」

「ジジイってなあ…。俺はまだ青年って呼ばれる年代だぞ。そりゃ、お前らよか長く生きてるかもしれねえが。ジジイってんなら、カイトだろ」

「ルトは？ルトは何なの？」

「あれはおっさん」

「おっさん…」

「ああ。おっさんだ」

「ワウ」

「えっ…お前か？お前は…」

「明日香は、じゃじゃ馬娘だよ。狼だけ」

「……………」

「あはは、怒った怒った」

「明日香はじゃじゃ馬なのか？」

「そうだね。相当のじゃじゃ馬だよ」

「ふうん…」

前に葛葉が、姉さまみたいな人をじゃじゃ馬って言うんだって教えてくれた。

じゃあ、明日香と姉さまは似てるのかな。

でも、大和とセトは似てないんだぞ。

「あう…うう…」

「ん？」

「ふう…」

「うなされてるだけか…。今日は、カイトもルトも戻ってこないと思う。俺は何も出来ないけど、夜番くらいは出来るから」

「おお、すまん」

「紅葉さんもヤーリエも動けないから、明日香だけじゃちょっと不安だったからね」

「ゆっくり眠ったらいい。光は抑えておくから」

「当たり前やる。そんなキラキラ光られたら寝られんつての」
「キラキラという表現は合わねえな。俺の光は月の光だから」
「月やったら、もつとやんわり光ってくれへんかな」
「ふうむ…。こんなかんじか？」

大和の光がフツと消えたかと思うと、次は柔らかく光りだした。
まるで、本物の月みたい…。。

「わあ…。綺麗なの！」

「ホント、綺麗なんだぞ」

「お褒めにあずかり光栄です」

「やれば出来るんだね」

「なんだ、その普段は出来ない子みたいな言い方は」

「事実やる」

「お前は光りすら出来ねえじゃねえか」

「その方が、大和みたいに周りに迷惑掛けて済むやる」

「素直に羨ましいと言えよ」

「アホか。一個も羨ましくないわ」

「これだから若造は…」

「お前も若造やる。自分で青年とかゆうてたし」

「歳の差という、越えられない壁があるだろ」

「ふん。未熟なんは何歳でも一緒や。百歳でも二百歳でも青臭いや
つは青臭いんや」

「言うようになったじゃねえか。ついこの間まで、寝小便をして泣
いてたチビが」

「いつまでも成長せんからって、オレのこと、妬まんでくれるか」

…まだ続きそう。

大和の光は、さっきより強くなってるし。

「ルウエ、リユウ。あつちで寝よっか」

「うん」「はあい」

「ワウ」

「明日香も一緒に寝るんだぞ」

「あんなに五月蠅いのは嫌だもんね」

明日香がいなくなったのにも気付かないで喧嘩を続ける二人。

…あんな二人は放っておいて。

寝る準備をして、明日に備える。

お休み…。

「ふぁ……」

「起きたか」

「うん……」

「ルウエが一番乗りだ」

「んー…大和は…?」

「俺はそもそも寝てないからな。それではズルいじゃねえか」

「ふうん……」

「…まだ朝靄も晴れてないんだ。寝直してもいいんだぞ」

「うん……」

毛布をもう一度ギュツと巻き直して、大和のお腹の上に頭を乗せる。明日香のとは違って、毛が少しゴワゴワしていた。でも、すごく気持ち良いのは一緒で。

「懐かしいな」

「ふぁ…何が…?」

「ああ。…少し昔話に付き合ってくれないか?子守唄だと思って聞いてくれればいい」

「うん……」

「俺がまだまだもつと若かった頃だ。俺は誰と契約するわけでもなく、あちこちをフラフラとしていた。ルイムナとか掟への反抗心もあつたんだろうな。とにかく、その日暮らしの流浪生活をしていた」

大和はそこで一度切り、ひとつ深呼吸をしたようだった。

「ある日、会つたんだ。焼け野原で。その子はピクリとも動かなかつた。魂の抜けた人形みたいだった。俺が吠えようと噛みつこうと、

全く動かなかった」

「…そんなことしてたの？」

「あ…まあ、今はそれは置いておこう」

そして、わざとらしく咳払いをして話を戻す。

「そのときは、今よりも酷い戦乱の世だった。行軍に邪魔だからとか、そんな理由で村が焼かれるなんてのは日常茶飯事だったんだ。その子の村もそんなかんじなんだろう。その子はもう涙も声も涸れ果て、あとはそのまま衰弱して死ぬか、他の動物に襲われて死ぬかのどちらかだった」

「……………」

「どうあっても何の反応も示さないからな。俺も諦めて立ち去ろうとした。最後、涙の跡だけ拭ってやって。あ、拭ったといっても、舐めただけだぞ。俺には手拭いを使える手がないからな」

「…そんなこと、どうでもいいんだぞ」

「そ、そうか…」

また咳払いをする。

変なことなんて言わないで、お話のところだけ言えばいいのに…。

「舐めてるとな、その子がそつと抱き締めてきたんだよ。いや、そつとというか、かなり衰弱してたんだ。何日飲み食いしてないんだろうつてくらい痩せ細った腕で、それでも懸命に抱き締めて。欲しかったんだろうな。すがり付く先を。バラバラになった心を繋ぎ止める何かを。俺は、そこに生きたいという望みを見た。だから、俺はその子を支えることを決めた。ずっと、な」

「……………」

「一週間ほどでその子は回復して、歩き回るくらいは出来るようになった。そして頃合いを見計らい、俺はその子を連れて忌まわしい

地を離れた。時間が解決してくれる、そのときまで。その子は何も言わず付いてきた。喉が潰れていたから声が出なかったというのもあるんだけど。それから、また流浪の生活だ。西へ東へのな。そうしてるうちにその子はだんだん元気になって行って、もうほとんど元通りになったんだ。でも、ひとつだけ出来ないことがあった」

「…泣くこと」

「ん？よく分かったな」

「うん…」

なんでだろ。

でも、なんとなく分かった。

「ルウエの言う通り、その子は全く泣かなかった。世話になった婆さんが死んだときも、可愛がっていた鷹がどこかのクズ野郎に射ち落とされたときも。哀しんでるのは確かなんだが、泣かなかった。泣くことだけ、どこかに忘れてきたみたいだった」

そこで一度、話を切って。

頬つぺたを舐めてくれた。

「なんでお前が泣いてるんだよ」

「え…？」

目を拭ってみると、確かに泣いていた。

なんで…？

涙が止まらない…。

「その子も、そんな風に泣いたときがあった。もう一度、村に戻ってきたときだ。もう何年も経っていたからな、焼け野原なんて残っていなかった。それが自然、なんだけどな。一面、花畑になってい

た。右を見ても左を見ても。でも、ひとつだけ不自然なことがあった」

「…咲いていたのは、ユヌトだけ」

「ん？」

「ユヌトの別名は落涙花。涙を通して全ての哀しみを受け止め、花を咲かせるときに幸せや喜びに還してくれるといわれている。琥珀はそこで初めて泣いた。哀しいからじゃなくて。ユヌトが咲いていたから。ユヌトが、みんなの哀しみを受け止めてくれたから。みんなの哀しみを還してくれたから」

「ん？え？ルウエ？」

「え？」

「なんで知ってるんだ？」

「何を？」

「いや、琥珀が泣いた理由とか。そもそも、琥珀って名前、出したか？」

「……？」

「…不思議なやつだな」

琥珀？

なんだろう…。

よく分かんない…。

なんで、昔の大和の話を知ってるの？

琥珀って誰なの…？

「…まあ、それはもういい。続きを話そうか」

「うん…」

「ユヌトだけの花畑、泣いた琥珀。それだけじゃない。まだ不思議なことがあった。その日の夜、琥珀が話しかけてきた。声の出なかった琥珀が、だ。びっくりしすぎて、俺の声が出なくなっただけだ。琥珀は今までのお礼を言ってきた。そして、自分の名前と。あ

と…俺にも大和という名前をくれた」

「…うん」

「ペラペラとよく喋るやつだった。次から次へと、立て板に水を流すように。喋って喋って、一晩中喋り続けた」

「きつと、嬉しかったんだぞ」

「そうかもな。それで、気付けば空が白み始めていた。それで、琥珀は慌てて謝ってきたんだ。もう会えないから、とか言っただけのことかは分からなかった」

「……………」

「最期、やってみたかったとか言っただけで、こっぴどくやっただけで俺を枕にしてきたんだ。それで、琥珀はゆっくりと目を閉じた。…次に気付いたときには昼になってた。琥珀の姿はどこにもなくて、俺は花畑の真ん中で寝てたんだ」

「…うん」

「でも、琥珀の匂いは確かにそこにあった。ユヌトの花の匂いが」

「…うん」

「”琥珀”が還った瞬間だったんだな。あのときは」

「うん」

琥珀が泣いたとき。

それが、きつと。

「ふぁ…おはよ…。何を話してるの…?」

「望!」

「わわっ!どうしたの?」

「えへへ」

「あつ。…大和。ルウエを泣かせたの?」

「え?あ、違うぞ!誤解だ!」

「ふうん…」

「ホントだって!」

「琥珀のお話をしてもらってたんだぞ！」

「え？琥珀？」

「うん！」

「琥珀って…琥珀？」

「えへへ」

また涙が溢れてきた。

それを隠すように、望のお腹に額を擦りつけて。

…琥珀はきつと、そのときに琥珀になったんだぞ。

「ヤマトに戻った方がええんとちゃうん？」

「そうだな……」

「いや、戻ったところで何が変わるわけでもない」

「何ゆうてんねん……。ヤーリエを寝かしく環境が激変するやろ……」

「む？」

「オレが連れていくよ……。だから、みんなはベラニクに行ってくれ

……」

「連れていくゆうても、背負っていくんか？そんなんしてたら夜になるぞ」

「いいんだ……。オレに出来るのはこれくらいしかないから……」

「何言ってるんですか。紅葉さんだけが、ヤーリエの心配をしてるんじゃないんですよ」

「……」

「だから、一人で行くなんて言わないでください」

「……ありがとう」

「明日香、いける？」

「ワウ！」

「いや、それなら私が行こう。陸路に行くより空路の方が速いからな」

「でも、全員は無理でしょ？」

「そうだな。ヤーリエと紅葉の二人で限界だ」

「ほなら、しゃーないな。オレらは先に進むしかない」

「……」

「納得いかんか？」

「いくよ！いくけど……」

「ヤーリエが心配なのは、みんな同じなの」

「せやけどな……」

まだ目を覚まさないヤーリエのことが心配。
ルトは、もうだいたいぶ落ち着いたみたいだと言ってたけど…。

「紅葉」

「ああ。頼めるか」

「当たり前だろ」

「え？どうしたんですか？」

「聖獣と契約者ってのは一心同体だからな。例えば、紅葉が見たもの聞いたもの、あるいは、記憶なんか俺が望めば手に入れることが出来るんだ。逆もまた然り」

「へえ。じゃあ、私とカイトもお互いに見聞きしたものを共有出来るってこと？」

「そういうことになるな。まあ、あまり使える能力ではないが、こういうときには役立つ」

「伝達係か。…ってことは、お前、オレらに付いてくるんかい」

「そうだ。不満か？」

「いや…」

「ワウ！」

「明日香がすごく嬉しそうなんだぞ」

「えっ、あ、うん…」

「良かったな。美人の白狼に気に入ってもらえて。いや、美狼か」

「う、五月蠅い！お、俺は別に嬉しくなんか…」

「誰も嬉しいかどうかなんて聞いていないだろうに」

「なっ…！」

「やはりまだまだ青いな、お前は」

「若さに対する僻みか」

「いや。羨ましい。その若さが。まあ、上手くやるんだぞ」

「ワウ！」

「なんで明日香が返事するのよ…」

「ふふ、お前たちといると、本当に退屈しないな」

「あ、笑ったんだぞ」

「え？」

「いろはお姉ちゃん、ヤーリエが倒れてから笑ってなかったの。でも、今、笑ったの」

「そうか…。笑ってなかったか…」

「笑ってなかったのはみんなだけど、でも、狼の姉さまに一番笑ってほしかったんだぞ」

「そう…だな。一番近くにいる私が笑ってないと、ヤーリエも笑ってくれない。私は、ヤーリエのことを全く考えてなかったのかもしいれない」

「ううん。いろはお姉ちゃんは、一所懸命にヤーリエのことを考えてたの。だから、笑ってなかったの。でも、今からは笑顔で待ってあげてほしいの」

「分かった。約束するよ」

そして、狼の姉さまはギュッと抱き締めてくれた。

狼の姉さまは、とても柔らかくて、とても温かくて。

「じゃあな。また会おう。ヤーリエの目が覚めたら、すぐに報せるから」

「報せるといつても、俺が確認を怠ると分からないままだけだな」

「…怠ける気なのか？」

「あ、いや、例えだろ。そんなに睨むなって…」

「ふん」

大和つて強そうに見えるのに、明日香とか狼の姉さまには弱いんだぞ。

なんでだろ。

葛葉は、男の人は女の人に弱いものだって言ってたけど。

「話は済んだか？」

「ああ。大和とはな」

「……………」

「狼の姉さま、ヤーリエ、ルト。行ってらっしゃい、なんだぞ」

「行ってらっしゃい」

「行ってきます」「ああ。また会おう」

「なんや一瞬やったけど、世話になったな」

「いや。こつちこそ世話になった」

「困ったときはお互いさま、ですよ」

「ふふ、そうだな。あと、次会うときには敬語が取れてると良いんだがな」

「うん。努力するよ」

「あ、せや。これ、返しといてくれんか？」

「ん？昨日の弁当箱か」

「ちよつと！お兄ちゃん！」

「いや、いいんだ。これくらいやらせてくれ」

「袖香つて子の家やねんけど……。まあ、ヤマトの自警団で一番賑やかな”お姉さん”つて聞いて、出てきた人に返してくれたらええわ。その人が袖香の母親やから」

「ふむ。”お姉さん”が重要なのか？」

「まあ…せやな。そう紹介しとかなオレの命が危ない」

「なるほど。そう言っていたということも伝えておこつ」

「え？あ、おい！それはやめてくれよ！」

「じゃあな」

ヤーリエをルトの背中に乗せて、続いて狼の姉さまもすっかりとヤーリエを抱きかかえるようにして乗る。

ルトは何回な羽ばたいて地面を蹴り宙に浮かぶと、一瞬だけこつちを見て、そのままヤマトの方へ飛んでいった。

…なんだか、ニヤリと笑ってるようにも見えたんだけど。

「おい！絶対に言うなよ！」

「もう聞こえてないって」

「いや、もうホンマに母さんが怒ったとき知らんやる！」

「知らないけど、五月蠅いよ」

「ああもう！余計なこと言わんかったらよかった！」

「いつもそっじゃねえか、お前は。一言どころか二言三言余計に言うって」

「はあ…。もう十年くらいは逃亡生活を送りたい…」

「何をバカなこと、言ってるのよ！ほら、行くよ！」

望はお兄ちゃんの頭を叩いて引つ張る。

お兄ちゃんはというと、望に引つ張られるまま、ズルズルと引きずられていって。

「ベラニクってどんなところかな？」

「きつと、お茶が美味しい街なの」

「お茶は特産品じゃないけどな。お茶に合うお菓子はたくさんあるはずだ」

「ホント！？」

「ああ」

「じゃあ、早く行くの！」

「あ、おい。転ぶぞ」

「あうっ！」

「はあ…。言わんこっちゃない…」

「大丈夫？」

「いてて…」

リュウの手を引いて起こしてあげる。

うん、怪我はしてないんだぞ。

「えへへ。じゃあ、行こ！」

「うん！」「ワウ！」「ああ」

望とお兄ちゃんのを追って。

ベラニク…。

楽しみなんだぞ！

山のてっぺんから、ヤマトが全部見えた。
周りがグルツと山で、その一番下にヤマトがある。

「盆地やな」

「ルクレイ三平野のひとつだね」

「平野？平野ゆうたら海に面してやなあかんやろ。ルクレイは内陸国やから、平野は一個もないぞ。ルクレイ三盆地やな」

「そんな細かい分類なんて知らないですよ……」

「海に面してるか面してないか、だけやろ。細かくないし」

「もう……。いいじゃない、そんなこと」

「そうだ。平野が盆地かなんて、些細な問題じゃねえか」

「あ、誰か飛んでる」

「飛脚だな」

「あれは、鷹印の飛脚便なの」

「えっ、あんな遠くのものが見えるの？」

「うん。荷物に鷹の印が付いてる」

「へえ〜。よく見えるね」

「空を飛ぶ種族はだいたい目が良いからな。飛ぶ速度が速くなればなるほど、目も良くなると言われている」

「ふうん。じゃあ、白龍が一番目がいいのかな」

「さあな。俺は、白龍は見たことない」

「えっ、そうなの？」

「オレはあるで。まだ子供やったけどな。リュウのなんかよりよっぽど小さい翼で、ピューツて飛んでいきよる」

「小さいってどれくらい？」

「せやな……。背格好はリュウに近いかんじやったけど……こんくらいかな」

お兄ちゃんは、リュウの翼を広げて、手で示す。それはホントに小さくて、リュウの翼の半分もなかった。

「ん？傷だらけやな、お前の翼は」

「龍の翼は飛ぶためのものではないと聞いたことがある」

「うん。飛ぶときは疾風の術式を使ってるの。翼は、方向転換とかにしか使わないの」

「で？なんでこんな傷だらけなん？木に擦るんか」

「ううん。戦いで使うことがあるの」

「はあ？戦闘訓練でも受けてるんか？」

「うん。大きくなったら旅団天照でお仕事して、桐華お姉ちゃんとか逢お姉ちゃんを助けてあげるの。だから、カルアお兄ちゃんにゴシンジユツを教えてもらってるの」

「護身術……」

「うん」

「まあ、頑張れよ……」

「えへへ。ありがと」

お兄ちゃんに撫でてもらって、リュウは嬉しそうに翼をパタパタさせる。

でも、お兄ちゃんは何か複雑な顔をしていて。

なんでだろ？

「まあ、気性の荒い龍ほど翼が大きくなるって言われてるからな。戦いで使うこともあるかもしれない。鱗があると大人しいとも聞か……」

「えっと、ごう……ね、相手の顎を狙って、下から打ち上げるといいつて。あと、少し加速をつけて、首に当てるの。その訓練のとき、打ち込んでいた丸太が折れて、それで怪我しちゃったの」

「…そういえば、龍の翼に付く筋肉の量は、足に付く筋肉と同等以上だと聞いたことがある」

「ええ…。怖いこと言うなよ…」

「え？何が怖いのか？」

「足つてのは、毎日重たい身体を上に乗せて移動しやなあかん。だから、筋肉も付きやすいし、強くなりやすいらしい。腕の筋肉をいくら鍛えても、足の筋肉には追い付けんつても聞いたことあるな…」

「それ、ホントなの…？」

「さあな。聞いた話やし」

「ええ…。でも、すごいよね。翼つて、そんなに強いんだ」

「えへへ。くすぐりたいよ、望お姉ちゃん」

望は、リュウの翼を撫でたり広げたりしている。

…自分もちよつと触ってみたい。

翼に手を触れると、リュウはゆっくり広げてくれた。

骨がある上の太い部分は鱗で覆われていて、すごく硬かった。

その下の布みたいところは、ところどころに傘の骨みたいのがあったけど、他は柔らかくて細かい毛が生えてて、触ると気持ち良かった。

「あ、ここ、鱗が割れてる」

「ここは剥がれてるな。どんな訓練しとるんや…」

「カルアお兄ちゃんも、遙お姉ちゃんに怒られてたの。でも、わたしがやりたいって言ったことなのに…」

「まあ、カルアってやつは監督責任の問題になってくるやろな。子供に厳しい訓練を受けさせて、しかも怪我までさせたら」

「うん…。遙お姉ちゃんも、そんなこと、言ってたの…」

リュウはなんだかしょんぼりして、翼にも元気がなくなつて。

「ちょっと、お兄ちゃん…」

「んー…」

「えっと…あ、そうだ。ル、ルウエ。この前、組合に行ったとき、広場で遙さんとカルアさんに会ったよね」

「うん。会ったんだぞ」

「二人ともすごく仲が良さそうだったけど、もしかして結婚とかしてるのかな？」

「ううん…。遙お姉ちゃんとカルアお兄ちゃんはケツコンしてないよ…。でも、五年くらいツキアッテルって桐華お姉ちゃんが言った」

「へえ…。五年…」

「うん。それでね、この前カルアお兄ちゃん荷物を見たらね、二人の名前が彫つてある小さな刀があったの。桐華お姉ちゃんに見せたら、チギリノシヨウニンなんだって教えてくれたの」

「ほう。契りの証人か。そういえば、紅葉に渡すのを忘れていたな」

「おい…」

「まあ、聖獣の契りの証人なんか、荷物になるだけだからな」

「いや、ちゃんと効果あるやる！」

「ん？んー、あったような、なかったような…」

「はあ…。こいつは…」

「ははは。でもまあ、忘れるくらいなんだ。大したことでもないんだろうよ」

「充分、大したことやと思うけどな」

大和が大笑いしてるのを見て、お兄ちゃんは呆れ顔。

…そういえば、チギリノシヨウニンって、何の役に立つんだっけ？

下り坂。

ヤマトはもう見えない。

寂しい気もしたけど、もうひとつ向こうの山を越えたらベラニクが見えるって、お兄ちゃんが教えてくれたから。

「お前は相変わらずチビだな」

（大和が大きすぎるの！）

「いや、俺くらいで普通だと思っけど…」

（明日香より大きいじゃない）

「明日香は女だからな」

（明日香は男だもん！）

「お前なあ、もうちょいマシな嘘をつけんのか」

（うう…）

うん。

今の嘘はちよつと出来が悪いんだぞ。

「でも、ホント、悠奈って小さいよね。子狼みたい」

「みたい、じゃなくて、まだまだ子供だよ、こいつは」

（ボク、もう大人だもん！）

「そういうことは、匂いだけで男を仕留めるくらいになってから言うんだな」

「えっ、悠奈って女の子なの？」

（むう…。どつちか意味なの？）

「あ、いや…。どつちか分からなかったから…」

「オレは分かってたけどな」

「お兄ちゃんのことなんて、誰も聞いてないから」

「さりげなく酷いことゆうなよ」

望の肩に手を置いてガツクリとする。
でも、すぐに払われてしまった。

「お兄ちゃんがルウエに斡旋したのに、知らないはずないでしょ」

「でも、最初、分からないって言ってたんだぞ」

「あ、そういえば」

「ああ。あれは面倒くさかっただけや」

「ホントかなあ……」

「まあ、信じるんも信じんのも望次第や。オレは別にどっちでもええで」

「どうしよっかな……」

望は顎に手を当てて考え始める。
リュウも真似して同じ格好をして。

「あ、そつだ。お昼ごはんの用意をしなくちゃ」

「お昼ごはん！」

「ああ、もうそんな時間か。せやな……どうする？」

「干し肉ならいくらあるよ」

「干し肉う？」

「何よ、大和。文句があるの？」

「干し肉なんて、死んだ肉じゃねえか。肉は新鮮なのに限る」

「じゃあ、自分で捕って食べてきなよ」

「そつだな。明日香、一緒に行かないか？」

「ワウ」

「……え？」

（あはは、嫌われてる〜）

「い、いや、明日香は干し肉が食べたいって言ったただけだからな！」

(ふふん)

「なんだよ、その得意げな顔は」

(好き嫌いはダメなんだよ)

「好き嫌いじゃねえって!」

(じゃあ、何なの?)

「肉の好みだ!」

「…結局、好き嫌いやけどな」

「う、五月蠅い!」

そう怒鳴ると、大和は明日香の隣に座り込む。

明日香はそれを見て、ゆっくりと尻尾を振っていて。

「狩りに行くんじゃないの?」

「き、気が変わった」

「干し肉しかないよ。あとは、その辺の野草くらいだけど」

「…それでもいい」

「春やの」

「う、五月蠅い!」

「……?」

「なんで春なの?」

そう聞くと、お兄ちゃんは大和に背を向けるようにして、ヒソヒソ声で話す。

「ああやってな、盛りがついてることを春が来てるってゆうねん」

「サカリ?」

「ちよつと、お兄ちゃん。変なこと吹き込まないでよ」

「変なことやない。ちゃんとした教育や」

「もう…。バカなこと言ってるないで、お昼の準備、手伝ってよ」

「ほいほい」

「ねえ、サカリって何なの？」

「大和に聞いてみるよ。すまんけど、オレは昼ごはんの準備しやなあかんみたいやし」

「うん、分かった」

お兄ちゃんは、自分とリュウの頭をワシワシと撫でると、お昼ごはんの準備を始める。

望は野草を摘んでるし…。

悠奈は望のあとに付いていつてるし。

うん、やっぱり大和に聞くしかないんだぞ。

リュウに目で合図をして。

「大和、サカリガツクってどういう意味？」

「…どこで聞いたんだ」

「お兄ちゃんに、大和みたいなのをサカリガツイテルって言うって聞いたの」

「あの小僧…」

「ねえ、どついう意味なの？」

「盛りがつくというのは、分かりやすく言えば、大和のように女に夢中になつてるようなことを言うのだ」

「あ、カイト」

「望に、変なことを吹き込まれないように見張っておいてくれと言われたのでな」

「…何も言つてねえだろうが」

「いきなり出てくるなとか、なんで出てきたんだとか言おうとしてたのではないか？」

「……………」

「ルウエ、リュウ。それに明日香。もうひとつ教えておいてやろう。美人だからといって近付いてくる輩にろくなやつはいない」

「お、俺は違うからな！」

「誰もお前のこととは言っていないだろう」
「うぐっ…」

「そういう風に反応するということは、少なからず自分でも認める部分があるということだ。明日香の美しさに惹かれたのだろうか？」
「……………」

「まあいい。ルウエ、リュウ。向こうに行こうか。恋愛失敗談だけ豊富な大和に、ようやく訪れた春だ。若い芽を摘むような真似は控えよう」

「もう摘み始めてるだろ！」
「はて、なんのことやら」

そしてカイトに背中を押されて、大和と明日香から離れる。
リュウは、それでも二人の方を見たがってたけど。

「覗いてやるな。覗きなんてのは、あまり趣味のいいものでもないしな」

「うん…」

「リュウにも、そのうち良い人が出来る。焦る必要はない」
「…分かった」

「ねえ、カイトは好きな人はいるのか？」

「そうだな…。我が主である望だろうか」

「望お姉ちゃんとケツコンするの？」

「はは、それは叶わぬ願いというものだ。それに、私には妻がいる」
「ふうん。どんな人？」

「そうだな…。一言で言うと、優しいけど怖い…だろうな」
「……………」

「妻というのはそういうものだ」
「ふうん…」

なんだかよく分からない。

優しいのに、怖いのか？

うーん…。

カイトは、身体を震わせて火の粉を散らす。
それが草に落ちて、小さく燃えた。

「叶わぬ願いはそのまま花のように散り、風に乗って遠くへ飛んでいった。野を越え、山を越え。海でさえ越えたかもしれない。いつか叶うその日まで。願いはいつまでも旅を続けた。…おしまい」

一度、カイトは目を瞑ると、またゆっくりと開ける。そして大きく深呼吸をして、歩き始めた。

「しっかし、なんや後味悪い話やな」

「む？そうか？私はそうは思わないが」

「でも、女の子の願いは結局叶わなかったんでしょ…？」

「さあな。私はここまでしか知らないから、どうなったのかは分からない」

「終わり方からして叶わなかったかんじやけどな。まあ、結末を敢えて言わんことで、想像力を養わせようとすんのは昔話の常套手段や」

「きつと女の子は人間になれたんだぞ。自分は、そう思うな」

「わたしも、そう思うの。人間ガンジーサイトウが馬なの」

「ガンジーサイトウ…？」

なんか強そうな名前なんだぞ…。

でも、馬って言ってたから…。

「人間万事塞翁が馬、だろ。しかも、今は意味も合っていないと思うぞ」

「そうなの？」

「人間万事塞翁が馬ってのは、何が禍となったり福となったりするかわからないという意味だったはずだ。この場合はなんて言うんだ

ろくな…」

「ふむ。石の上にも三年…でもないしな」

「栄枯盛衰…」

「それはちやうやろ」

「赤い月」

「え？」

「赤い月、なんだぞ」

「赤い月といえば、転生や浄化の象徴だな。赤い月が昇るときは月光病も発症しないとも聞いたことがあるな」

「へえ」

「ん？空気中の塵に光が反射して赤く見える…とかとちやうん？」

「それは一般論だ。赤い月は、限られた者しか見えないとも聞く。

隣同士で座っていた者の一方は普通の月を、もう一方は赤い月を見たという噂もあるくらいだからな」

「ふうん…」

赤い月。

姉さまと葛葉が教えてくれた。

赤い月は、身体から心まで全部を綺麗にしてくれるって。

「きつと赤い月なら、女の子を人間にしてあげられるんだぞ」

「そうかもね。それにしても、赤い月かあ。最近はある見なくなつたなあ」

「はあ？お前、見たことあるんか？」

「うん。私は”見える人”みたいだね」

「ほう…」

「一番最近に見たのはルウエと会ったときかな。あのときはすごく綺麗な赤色をした」

「えっ、そうなの？」

「ふむ…。記憶を見る限り、確かなようだ」

「ちょっと、カイト！勝手に見ないでよ！」

「見たのは赤い月の部分だけだ。望の不利になるような記憶は見
ていないし、見ていたとしても口外することはない」

「それでもダメ！」

「ふむ。では、以後気を付けるとしようか」

「もう……」

「へへ、オレは契約してへんからな。赤っ恥の記憶は封印しとける
で。羨ましいか？」

「ふん。お前自身の記憶は封印出来るだろうが、俺の記憶は封印出
来ねえぞ。お前が寝小便太郎だったときの話を言いふらしてやろう
か」

「はっ。やれるもんならやってみろよ。オレかて、お前の”武勇伝
”を振り撒く準備は出来てるで。来るんやったら、はよ来んかい」

「はあ……」

「また始まったんだぞ……」

「と、カイトが二人の横に立って睨みつける。」

「お前たち、五月蠅いぞ。喧嘩をするなら特別な場所を用意してや
る。雲の上か海の底か。どっちがいいか選べ」

「ふん。不死鳥のジジイが、どうやって海の底に行くんだよ」

「私が行く必要はない。海にも私の友人はいるし、わざわざ頼まな
くても、重りを付けて放り込めばいい話だ。海の底は静かだぞ。行
ってみるか」

「……ちっ」

「だいたいなんだ。お前たちは身体だけ大きくなって、中身は成長
していないのか。特にお前だ」

「はあ？オレかよ」

「望が好きなのは分かるがな、ちょっかいを出しすぎると嫌われる
ぞ」

「は、はあ！？なんでオレが！」
「なんだ。望のことが嫌いなのか」
「え…いや、そりゃ…」

お兄ちゃんは望をチラリと一瞬だけ見て、すぐに目を逸らした。
リュウは、なんだか興味津々ってかんじで。

「そりゃ、好きやけど…。妹としてな」
「なあんだ」

「…リュウ？」

「あ、あはは。なんでもないの！」

「……？」

「リュウ。こいつに色恋沙汰を求めても無駄だぞ。浮いた話なんてひとつもねえからな」

「それは、お前が知らんだけや」

「ああ、そっぴや、女だと思って告白したやつが男だったってことはあつたな」

「ふん。お前かて、告白して振り向いたら、目当ての女の子の代わりにルイムナがいたってことあつたやろ」

「どこでそんな情報を仕入れてくるんだ」

「さあなあ」

「またか、お前たちは。全く学習も成長もしないんだな」

「…ふふふ。告白したら男の子だって。聞いた？」

「ワウ」

「そつだね。大和のも可笑しいよね」

「うん。面白いんだぞ」

「ねえ、もつとないの？」

「あるぞ。たくさん」

「おい、カイト」

「話したら、お前から海に沈むことになるぞ」

「おお、怖いことだ。しかし、お互いの赤っ恥を晒し合うのがいいか
に滑稽でバカげたことか、これで分かったただろう」

「あはは、告白したのが神様だったって…！」

「望。笑いすぎだ」

「でも…！あはは、お兄ちゃんのも面白いし…！ねえ、もっと聞か
せてよ…！」

「ああ。また今度な」

「「カイト！」」

お兄ちゃんと大和の声がピツタリ重なった。
望もリュウも、お腹を抱えて笑って。

「くっ…ふふふ」

「ルウエ！耐えてたんやつたら最後まで耐えるよ！」

「あはは、無理なんだぞ…！」

こんなに可笑しいのに笑わないなんて無理…！

「右だ」

「分かつとる」

「何が？」

「ルウエ、リュウ。そこから動かないでね」

「うん……」

「……？」

「また誰かいるの……？」

「怖いのはイヤなんだぞ……。」

「大丈夫だよ、ルウエ。わたしが守ってあげるからね」

「リュウ……」

「旅団天照の護衛付きか。ほなら、安心出来るな」

「……お兄ちゃん」

「ああ。大和」

「分かつてる」

「お兄ちゃんが手で合図をすると、大和が左側の草むらに入る。明日香は、ピツタリと自分とリュウの横について。」

「何が目的か知らんけどな、あんまり付け回すようじゃったら、こっちにも考えがあるぞ！」

「そして、お兄ちゃんは立ち止まるように指示してくる。風が、森の道を吹き抜けていくのが分かった。」

「狼が一匹……」

「はぁ？」

「ここに居るのだが…お前たちの狼か…？」

「誰やねん。まず姿を見せんかい！」

「いや…それはまだ出来ない…」

「……？」

「いずれまた会おう…」

「待てや！誰やねん、お前は！」

「もういねえよ」

「はあ？今さっきまで声しとったやん」

ガサガサと草むらから大和が出てくる。

…左の草むらに入ったはずなのに、右から出てきた。
なんで…？

「匂いは追えないぞ。ホントに、霧みたいなやつだな…」

「ちっ…。誰やねん…」

「まあいいじゃない。盗賊とかじゃなかったんだから」

「ん？お前、なんや嬉しそうやな」

「えっ、そ、そんなことないよ！」

「ふうん…？」

「は、早く行こうよ。ベラニクに着くのが遅くなるよ」

「…まあ、せやな」

「おい、納得するのかよ」

「ええんちゃう？今んとこ不利益は被ってへんし」

「そう言ってしまうえばそうだがなあ…」

「まあまあ」

「むう…」

「ねえ、望がもうずっと先に行っちゃったんだぞ」

「ワウ」

「え？」

「おい、望！戻ってこい！」

大和が呼びかけても、望は戻ってこない。
そのまま、木の向こう側に行つて見えなくなった。

「ああもう！あのアホは何しとるんや！」

「先に行つて止めてくる」

「ワウ」

「ああ。頼むわ」

大和と明日香は走り出して。

あつと言つ間に見えなくなった。

「：オレらも行こか」

「うん」

「望お姉ちゃん、何があんなに嬉しかったのかな？」

「さあ。さっきの声と関係あるんやろうけど……」

「知り合いなのかな」

「さあ。オレにはさっぱり分からん」

「でも、あの声つてどこから聞こえてたの？いろんな方向から聞こえたんだぞ……」

「ああ、あれは簡単な仕掛けや。今探しても、もうないやろうけど」
「どんな仕掛けなの？」

「薄い紙かなんかを両側にピンと張つた筒みたいなんを用意して、一方に糸を取り付ける。ほんで、その糸の端をまた別の筒に付ける。ふたつ目の筒は紙を一方だけに張つといて、開けといた方から喋るんや。ほしたら、声が糸を伝つてひとつ目の筒に行く。それが糸を付けんかった方の紙を震わせて、そこから声が出るように聞こえるつて寸法や。まあ、この方法では声が籠つて、なかなか上手くいかんねんけど……。分かるか？」

「全然分かんないんだぞ」

「うん。分かんない」
「せやな…。ほんなら…」

お兄ちゃんは、その辺にあつた棒切れで地面に絵を描き始めた。

「これがひとつ目の筒。両側に薄い紙や。ほんで、こつから糸を伸ばして二個目の筒。これは一方が開いてる。こつから喋るんやな。ほんで、それが糸を伝わって紙を震わせる。ほしたら、その震動が筒の中を通って向かい側の紙を震わせる。ほんだら、これが声になつて聞こえる」

「へえ」

「分かつたか？」

「うん。だいたい」

「だいたいか…」

「音つて震動なの？」

「せやな。空気が震えるのが音…」

「きやあ！」

「望！？おい、ルウエ、リュウ！急ぐぞ！」

「うん…！」 「分かつた！」

お兄ちゃんは棒切れを捨てると、すぐに走り始めた。
自分も…

「ルウエ、行くよ！」

「え、え？」

リュウに胸のあたりをガツチリ掴まれて。
そして、空中に浮いたのが分かつた。

「わわっ！？」

「あまり動かないで。まだ上手く風を操れないから…」
「風？」
「うん」

そういえば、疾風の術式がどうとかって言ってた気がする…。
じゃあ、こうすれば…

「うわぁ！な、何！？」

「風、なんだぞ」

「えっ、これ、ルウエが…？」

「うん」

「速い、速いよ！こんな速いの、初めてなの！」

「リュウ！あ、危ないから真っ直ぐ飛んで！」

「あはは、ごめん」

「ふう…」

姉さまと葛葉の力。

上手く使えて良かったんだぞ。

「お兄ちゃん、お先に〜」

「ん？おお、速いな」

「じゃあね〜」

お兄ちゃんも追い越して。

…それにしても、望たちはどこまで行ったのかな。
まだ見えない…。

「あっ、いた！」

「どこ？」

「そこ！」

リュウは翼を広げて急停止する。
その流れで、そっと地面に下ろしてくれて
ちよつと躓いたけど、ちゃんと着地出来た。

「望!」

「あ、ルウエが一番だね」

「……?」

「うわつとと」

「リュウが二番だね」

「うべつ……」

「だ、大丈夫?」

「うう……」

リュウは着地に失敗して転んでいた。
服の前は土だらけになって。

「怪我はしてないね。良かった」

「ねえ、望。どうしたの?」

「まったく……。下らねえことを考えるもんだ……」

「……?」

「それにしても、お兄ちゃん、遅いね」

「だから言っただろ。飛ぶ方が速いんだよ」

「あ、見えた」

「ねえ、望。大丈夫なの?」

「え?あ、うん。大丈夫だよ」

「でも、さつき……」

「ああ、あれはね……」

「いや待て。あいつが来てからの方が手間も省けるだろ」

「そっだね」

「……………」

なんだか変なんだぞ。

望、どうしたのかな…。

…しばらく待っていると、お兄ちゃんが走って来て。

「おい、望。さっきのはなんやねん」

「えっとね、実は…私が悲鳴を上げたら誰が一番先に来るかって賭けをしてたんだ」

「……………」

「あたっ！な、何するのよ…」

「お前アホか！果てしなくアホやる！どんだけ心配した思とんねん！前のこともあるし…。何を浮かれてるんか知らんけどな、やってええことと悪いことがあるぞ！」

「……………。ごめんなさい…」

「…はあ」

お兄ちゃんはため息をつくと、もう一回、望の頭を殴る。

「いたた…」

「…これでええわ。な、ルウエ、リュウ」

「うん」「何もなかったなら良かったの」

「ワウ」

「そうだな。こうなることは簡単に予想出来た」

「予想しといて止めんかったんか？」

「いや。止めたけど、俺らには望の口を塞ぐことは出来ねえしな」

「はあ…」

お兄ちゃんは、またため息をついて。

…何もなかったんなら良かったんだぞ。

怖い目に遭うのはイヤだし、みんなにも怖い目に遭ってほしくない。
でも、望がどう予想したのかは、ちょっとだけ気になるかな。

「ベラニク、ベラニク。山の村。ルイカミナまではまだ遠い」

望が変な歌を歌い出した。

…望、あの変な声を聞いてから、ちょっとおかしいんだぞ。

「何を歌ってるの？」

「ベラニクの歌だよ。まあ、今作ったんだけどね」

「ふうん…」

「アホ丸出しやな」

「むう。何よ、いいじゃない」

「誰も悪いとはゆうてない」

「そうじゃないでしょ！」

頬を膨らませて、野草汁を混ぜていた匙で鍋の縁を叩く。

…やっぱり、なんだか変。

(ねえねえ。クーのごはんは?)

「ちゃんと用意してあるよ」

(やった!)

「悠奈は? 食べないの?」

(うん。今日は向こうで食べるって)

「ふうん。向こうって神様と聖獣が住んでるところだよ。私もカイトと契約したときに見たけど、あんなところに住んでるの?」

「いや、それは違うな。あれは、こっち側と向こう側の境目だ」

「そうなの?」

「ああ。向こうにも、こっちと似たような世界があるんだ。似たようなくていうか、もうほとんど一緒だけだな」

「ふうん…」

悠奈や七宝が住んでる世界。

どんなところなのかな。

こつちに似てるって言ってたけど。

行ってみたい気もするんだぞ。

(それより夕飯！クー、お腹空いた！)

「はいはい」

「そういやお前、せつかくルウエから名前貰ったのに、自分のことまだクーって呼んでんのかよ。なんか変えたら？」

(そんなこと言われても…)

「いいじゃねえか。自分のことくらい、好きに呼ばせてやれよ」

「わたしは、クーって可愛くて良いと思うの」

「まあ、可愛いのは今のうちだけかもな。そのうち憎たらしくなるぞ、クーアってのは」

「えっ、そうなの？」

(クーは憎たらしくないもん！)

「さあ、どうかな」

「なんや、嫉妬かいな」

「はあ！？なんで俺がクーアに嫉妬するんだよ！」

「クーアゆうたら聖獣屈指の頭脳派やろ？それに対して、ルウエは頭脳派とも肉体派とも言えん中途半端な位置や。嫉妬するには充分とちやうか？」

「お前な。俺の悪口は良いが、俺の家族の悪口は許さねえぞ」

「悪口やないやろ。事実や」

「てめえ！」

「なんや、やるんかいな。上等や、かかってこんかい！」

「二人とも、やめるの！喧嘩しちやダメ！」

「喧嘩じゃねえよ。決闘だ」

「ふん。死合おうやないか」

(わっ、わっ。ど、どうしよう…)

「明日香、どうにかならないのか…?」

「ウウ…」

「はあ…。また喧嘩してるの?」

「望お姉ちゃん! ねえ、止めてよ!」

「そうねえ…。カイトは…ダメか。寝てるみたい」

「ええっ!」

そうこうしてるうちに、お兄ちゃんと大和はジリジリと間合いを詰めていった。

(ああもう! 誰でもいいから来て!)

「タルニアさま。それで、今回の標的についてですが、どうやらナツカ商会が裏で怪しい動きをしているとのこと…」

「ク、クノさん?」

「え? あれ? 望さま、どうしてここに?」

「クノお兄ちゃんが、こっちに来たんだぞ」

「あ、あれ? どうやらそうみたいですね…」

「クノお兄ちゃん! あの二人が喧嘩してるの! 止めて!」

「ん? あなたは?... いや、それはあとですね」

クノお兄ちゃんはキツと二人の方を睨むと、ズンズンと近付いていく。

そして、もう取っ組み合いを始めていた二人の首を腕で挟んで力を入れる。

「うげっ…く、苦しい…」 「お、おい、洒落になんねえぞ…!」

「喧嘩両成敗。クーア旅団の掟です」

「ク、クノか…! なんでここに…!」

「望さまやルウエさまが困っているとのことと、飛んで参りました」
「ねえ、大和が泡を噴いてるんだぞ」
「じゃあ、あとはあなただけですな」

大和を離して、お兄ちゃんの首を絞める力を強める。

…お兄ちゃんの顔は、もうだいぶ色が変わってきてるけど。

「うぐっ…」

「…まあ、こんなものでしょうか」

「わあ、さすがですね！」

(すげーい！)

「団員の喧嘩も抑えないといけないので。慣れたものですよ」

「…それで、これはどうするんだ？」

「放つとけば、朝には目が覚めるでしょう」

「お兄ちゃんは誰なの？」

「ああ、自己紹介がまだでしたね。私はクノと申します。クエア旅団の副団長兼団長補佐をしております」

「クノお兄ちゃん？」

「はい、そうですね」

「わたしは、リュウっていうの」

「ヤエ、フウムル、リュウですか。良い名ですね」

「うん！」

家族想い。

リュウにピッタリなんだぞ。

「さて、ここに来た原因なんですけど…」

(「じめんなさい…」)

「やはりそうでしたか」

(「じめんなさい…」)

「良いんですよ。困ったときはお互いさまですし」

「私たちが助けられてばかりですけどね…」

「情けは人のためならず、ですから。どうか、望さま方はお気になさらず。あの…ところで、元の場所に帰してもらえると嬉しいのですが…」

「あ、うん。そうだよね。七宝」

(え…あ、うん…)

七宝はモジモジとして、なかなかクノお兄ちゃんを送り帰さない。あーとかうーとか言って。

(あ、あのね…)

「……？」

(クーは、自分のところに引き寄せることしか出来ないの…。それに、一日一回が限界で…。転移はまだ練習中なの…)

「ええっ！じゃあ、クノさんはどうやって帰ればいいのよ！」

(うう…)

「まあまあ、望さま。落ち着いてください」

「だって、クノさんが…」

「タルニアさまと如月は私が急に消えたことを知っているので、たぶんそのうちに何らかの連絡等があると思います。それまで待ちましょう」

「クノさんがそう言うなら…」

「それより、あの鍋は？火も消えてるみたいですが」

「ああっ！忘れてた！」

(え…夕飯…)

「早速、私の出番みたいですね」

そう言って、クノお兄ちゃんは腕捲りをする。

クノお兄ちゃんの料理、すっごく楽しみなんだぞ！

野草だけで出来てるとは思えないご馳走をお腹いっぱい食べて、なんだか眠い…。

リュウは…もう寝てるんだぞ…。

「もう寝られますか？」

「うん…」

「結局、なんの連絡もなかったですね」

「まあ、明日には来ると思いますよ」

「そうだと良いんですが…。でも、ここに来てるって分かってるんでしょうか…」

「それは分かりませんが、見当は付いてると思います」

「へえ…。さすがクーア旅団ですね」

「ありがとうございます」

「クノお兄ちゃん…」

「はい。どうしましたか？」

「一緒に寝てほしいんだぞ」

「はい。もちろんです」

「すみません。ありがとうございます」

「いえ。可愛い妹のためですから」

「えっ？」

「ふふ、もちろん望も」

「……………！」

目を閉じる一瞬前、クノお兄ちゃんが望の頭を撫でているのが見えた気がした。

お休みなさい…。

「おはようございます、ルウエさま」

「うん…。おはよ…」

「今日は早起きなんですね」

「うん…」

「まだ眠たそうですね」

「うん…」

「もう一眠りしますか？」

「うん…」

「さつきから頷いてばかりですね」

「うん…」

「ふふふ。では、お休みなさい」

「お休み…」

深い霧が、あたりを覆っていた。

クノお兄ちゃんに頭を撫でられて、ゆっくりと意識が遠のいて…。

目を開けると、あたりはまだ霧で真っ白だった。

さつきから、まだちょっとしか寝てないのかな…。

でも、毛布の中でしばらくモゾモゾしていると、何かおかしいことに気が付いた。

望…？

望もお兄ちゃんも明日香も。

悠奈も七宝もカイトもリュウも大和もクノお兄ちゃんも…いない。

望…お兄ちゃん…。

名前を呼んでも誰も答えてくれない。

毛布から出て周りを見回してみても、誰もいない。

何も無い。

木も草も、空も地面もなかった。

自分一人が、白い世界の真ん中に浮いていた。

……？

いつの間にか、毛布も消えていた。

これでついに、自分一人だけの世界になってしまった。

望…望…。

今どこを見ているのか、どっちを向いているのか。

真っ白な世界では何も分からなかった。

望…。

と、そのとき。

真っ白の世界の中にひとつ、黒い炎が燃えているのが見えた。

手を伸ばせば届く距離にあるようにも見え、遙か遠くにあるようにも思える。

明日香…。

なぜだか、そんな気がした。

明日香がこっちに尻尾を振って合図しているような、そんな気がした。

知らない間に、黒い炎を追いかけていた。

前に進んでいるのか、後ろに退がっているのか。

それは分からないけど、とにかく黒い炎の方へ走った。

黒い炎はどんどん大きくなっていく。

近付いている証拠なのか、本当に黒い炎が大きくなっているのかは分からない。

この真つ白な世界は分からないことばかり。

でも、答えてくれる人がいないってことだけは分かる。

……。

目の前に黒い炎があった。

今度こそ、手を伸ばせば届くところに。

……。

怖くはなかった。

ゆっくりと、その炎の中へと入っていく。

黒……。

炎の中は真つ黒な世界だった。

でも、真つ黒じゃなくて、たくさん色が見えた。

黒は全部の色を混ぜた色。

葛葉が教えてくれた。

「赤……黄色……白……銀色……蒼……」

あれは何色かな。

何色でもない色。

…みんな、ここにいた。
帰ってきたんだ。
ただいま…。

何か生ぬるいものに頬つぺたを撫でられて目が覚めた。
眩しいのを我慢して目を開けると、赤色のものが目の横を通っていった。

「わっ、明日香！」

「ワウ」

「えへへ。くすぐったいんだぞ」

「あ、ルウエ。起きた？朝ごはん、出来てるよ」

「望…」

「ん？どうしたの？」

「ううん。なんでもないんだぞ」

「そう？」

「えへへ」

「ふふ、どうしたのよ。笑って。変なルウエ」

「うん！」

望だ。

望。

毛布から抜け出して、望に抱きついてみる。

「今日は甘えん坊だね。ホントにどうしたの？」

「ん〜」

おでこを望のお腹に擦り付ける。

望はクスクス笑いながら、そっと頭を撫でてくれた。

「朝から仲良しですね」
「クノお兄ちゃん!」
「はい。どうしました?」
「んー、なんでもないよ」
「ふふふ。そうですか。それよりルウエさま、龍紋が出ていますよ」
「えへへ。綺麗?」
「はい、とっても」

クノお兄ちゃんは、龍紋に沿って顔をなぞってくれた。
くすぐったくて嬉しくて。
指の先をちよつと噛むと、クノお兄ちゃんはニッコリ笑ってくれる。

「ふあ…。お前ら、朝から元気やのう…。」
「おはよ、お兄ちゃん!」
「ほいほい、おはよ。いつになく元気やな」
「うん!」
「それより、望。朝ごはん頼むわ」
「もう…。ちよつとはルウエの相手もしてあげたら?」
「ん?んー…ほれ」
「あたっ」

お兄ちゃんにおでこを弾かれた。
おでこをさすっていると

「もう!なんでそうなのよ!」
「ええやないか、別に」
「朝ごはん抜きにするからね!」
「ほなら、自分で作るからええわ」
「お鍋も食器も、全部こつちで使ってるからね」

「煮たり焼いたりするだけが料理やないんや」
「みんなで一緒のものを食べましょう。その方が精神的にも良いです」

「ん？クノ？なんでこんなところにおるん？」

「え？覚えてないの？」

「はあ？」

「大丈夫ですよ。前後の記憶は飛ぶものなんです」

「へえ〜。そうなんですか」

「何を二人で納得しとるんや」

「なんでもないよ」

「……？」

お兄ちゃん、昨日の夜のことは覚えてないみたい。
じゃあ、大和も覚えてないのかな。

「それより、ほら。ルウエに朝の挨拶」

「さっきしたがな……」

「デコピンが挨拶だなんて認めないからね」

「お前が認めんでも、ルウエが認めたらええねん。な、ルウエ」

「んー」

「な、ルウエ」

「諦めが悪いよ」

「ふふふ」

「おい、クノ。何がおもろいねん」

「いえ。いつもこうなんですか？」

「さあな。知りたいんやったら、一緒に旅したらええ」

「ふむ。それも良いかもしれませんね」

「そうですね。お兄ちゃんと大和の喧嘩もすぐに止めてもらえるし」

「どういうことや」

「さあね〜」

望はクノお兄ちゃんと目を合わせると、ニヤリと笑った。

…それにしても、あの世界は何だったのかな。

何もない、真っ白な世界。

リュウは明日香に顔を舐められて、モニユモニユと寝言を言っていた。

「ふむ。白い世界」

「うん。真っ白な世界」

「白というのは全ての光を混ぜた色だが…」

「黒じゃないの？」

「黒は、全ての色を混ぜた色だ」

「……？」

(クーの色も白だよ)

「金だからな。でも、それは白という色であって、全ての光を混ぜた色ではない」

「回りくどいな」

「いつつもそうだ。このジジイは」

「少しは頭を使わないと、せっかく若いのに錆び付いてしまうぞ」

「答えが分からんなぞなぞなんか、やるだけ無駄だと言ってらんだよ」

「答えが分からないのなら考えればよい。考えるというのが若さだ」

「考えるのは年寄りの役目だろ」

「年寄りの役目は、それまでの経験から導き出されることを伝えるだけだ」

「そうかあ？」

「口では勝てんで。諦めろよ」

「そんなことないぞ！」

大和は諦めが悪いんだぞ。

カイトは落ち着いた様子で、口から細く炎を噴いていた。

「あ、そうだ。真っ白な世界で、黒い炎が出てきたんだ」

「黒い炎か」

「うん」

「黒い炎といえば明日香だろうな」

「明日香？」

「ワウ」

（明日香ってなんでも出来そうだよな！）

「ルウエの夢にも出ていったの？」

「ワウ」

「ええ、ホントかなあ」

「本当に夢だったのか？」

「うーん…。分かんない」

「ワウ！」

明日香は飛び上がり、宙返りをした。

うん。

明日香がそう言うなら、たぶん夢じゃなかったんだぞ。

「えっとね、わたしも真つ赤な世界にいる夢を見たことあるの」

「ほう」

「でもね、燃えてる火の中にいるみたいに、赤色がユラユラ揺れていたの」

「ふむ。それは自分の本質を見ていたのかもしれない」

「本質？」

「自分の内側のことだ。赤だったのなら、リュウの本質は火なのだろう」

「火？」

「望と同じ色だ」

「あ、そうだ。それならさ、リュウにも聖獣を紹介してあげてよ」

（ええ…）

「何よ、七宝。イヤなの？」

（だって、また火が増えちゃうもん…）

「どついつこと?」

「七宝が属する金は、火に弱いのだ。土を挟めば別だろうが、基本的には金は火に近寄らない。若い者は特にな」

「俺から言わせてみれば、弱い属性だとか強い属性だとか、そんなのは誰かが勝手に決めた法則でしかない。属性で相性が良くても、気に入らないやつなんて数えきれないくらいいるからな」

「お前は好き嫌いがはっきりとしているからな。誰に対しても、もう少しやんわりと接することは出来ないのか」

「無理だな。気に入らないやつは気に入らない。なんでそんなやつらにもニコニコしないといけねえんだ」

「世を渡るためには、その方が便利だからな。まあ、お前もそのうち分かるだろう」

カイトはまた身震いをして、火の粉を散らした。

キラキラと落ちていく火の粉は、なんだか雪のようにも見えた。

「しかし、だ。全く変化のない真っ白な世界なんていうのは、ルウエの本質ではないだろう。もっと別の何かだ」

「別の何かって?」

「それは、私にも分からない。単調な世界というのは…む?」

「なんや。ド忘れか?」

「いや。真っ直ぐ飛んでくるぞ」

「え?何が?」

「もうすぐ来る」

その真っ直ぐ飛んできた何かは、空中で急停止を掛けると、望の肩に泊まった。

「うわっ!えっ、何!?!」

「大丈夫です。クーア旅団で育てている、速達用の鷹です」

「えっ、鷹？」

「よくここが分かったな。そら、こつちにおいで」

「……………」

クノお兄ちゃんに呼ばれるまま、望の肩から飛び移る。

周りを注意深く見て、少し警戒してるみたいだったけど。

「よし、良い子だ。伝書は…これか」

「なんて書いてあるんですか？」

「お前なあ…。いきなり手紙の内容聞か、普通？」「あ…」

「別にいいですよ。これからの振舞いについての内容ですし」

「どんな内容だったんだ」

「しばらくしたら如月を送る、とのことでした。だから、この鷹丸

に今の位置を覚えさせて帰してくれ、と」

「そうだ。お前はよくここが分かったな」

「……………」

「なんだ。無口なんだな」

「……………」

「喋らねえって。言葉が分かってないんだろ？」

「いや。位置を伝えることが出来るのだから、話せるということだ

らう」

「でも実際、全く喋らないじゃねえか」

「だから、無口なのだろう」

「えっと、もう帰しても良いですかね」

「こいつらの言い争いなんか聞いてたら、いつまでも帰されへんで」

「どつという意味だ」

「どつという意味も何も、そのままの意味だろう。他意があるとも思

えない」

「ほら、はよ帰せよ」

「あ、はい」

クノお兄ちゃんは鷹丸に何か言っていると、空に向かって飛ばした。しばらく近くでクルクル回っていたけど、そのままどこかに飛んでいった。

「ちつ。結局、喋るのか喋らねえのか分からなかった」

「鷹丸は、速達用の鷹の中でも一番よく喋ると如月が言っておりましたが」

「じゃあ、喋るんじゃないか…。黙り決め込んでよ…」

「緊張していたのではないか？あるいは、お前に睨まれて畏縮していたか」

「お前だろ。同じ鳥同士、仲良くやれよ」

「大和にそんなことを言われるとは思わなかったな」

「減らず口ばかり叩いてるんじゃないよ」

「減らないから減らず口なのだろう。それに、それはこちらの台詞というもの」

…まだまだ続きそう。

でも、カイトが落ち着いているお陰で、昨日のお兄ちゃんと大和みtainな大喧嘩にはならないみたいで良かったんだぞ。

「ベラニクって、まだ遠いのか？」
「せやな…。あの山越えて、もうちょい行ったところやな」
「俺なら半刻もあれば着くけどな」
「誰もお前の話などしてないだろう」
「せや。どうせみんなで行くんやしな」
「分かってるよ…」

大和はそつばを向いて、不機嫌そうに尻尾を振った。
でも、半刻で行けるなんて、どんな速さなんだろ。
気になるんだぞ。

「お腹空いたの」
「なんや、唐突に。しかも、昼にはまだ早いぞ」
「む…」
「干し肉ならあるよ。食べる？」
「うん」
「俺にも」
「大和の分はないよ」
「なんだよ、ケチだな」
「干し肉というのは非常食の役割が強い。ついでに自分も、という
ようなおやつ感覚の者には渡せないのだろう」
「そうだね」
「なんだよ…。もういい。気が削げた」
「それより、はい。あんまり食べ過ぎないでよ。お昼もすぐなんだ
から」
「うん」

リュウは干し肉を受け取ると、すぐに食べ始めた。
それを見てると、それに気付いたリュウがニッコリと笑って、半分
千切って渡してくれた。

「はい。ルウエにもあげる」

「ありがとう」

「優しいお姉ちゃんだね」

「えへへ」

「…望は優しくねえけどな」

「何か言った？」

「いや。気のせいじゃねえのか？」

「しかし、望は相手を指定しなかったにも関わらずお前が即答する
ということは、少なからずお前には思い当たる節があるのだな」

「ねえよ！」

「ふむ。そうか」

カイトはわざとらしく首を傾げる。

あんなこと言ってたけど、絶対に大和が望の悪口を言ったこと、知
ってるんだぞ。

「そついや、昨日の声は誰やってん」

「え？」

「昨日の声や」

「あ、ああ、あれ。な、なんでもないよ」

「どんだけ動揺してんねん」

「知り合いなのだろう」

「違うよ！師匠だよ！」

「ほう。師匠なのか」

「え？」

「今、自分でゆうたぞ」

「えっ、嘘」

「嘘ゆうてどないすんねん……」

「望の師匠というのは、美希という者が」

「知ってるの？」

「いや、前に話してたし……」

「あれ？そうだったけ？」

「紅葉が美希と組んで旅してたってこと聞いて、そんなときに喋ってたぞ」

「ああ……喋った気もする……。でも、そのときカイトっていなかったよね」

「契約者の五感と私たち聖獣の五感は、任意に共有することが出来る」

「紅葉と別れるときにも説明しなかったか？」

「あー、したかも」

「お前なあ……。物忘れも大概にしとけよ……」

「何よ、ちよつと忘れてただけじゃない」

「ホンマかなあ……」

「もう……」

「ま、ええか。そんなこと」

「そうだよ。変なところで細かいんだから」

そして、望はため息をつく。

でも、なんだか安心したようなため息だった。

何に安心したのかな。

「そうだ、大和。紅葉さんからは連絡ないの？」

「ん？んー、あるみたいだ」

「ええっ!？」

「はは、忘れてた」

「お前はいつもそうだな。肝心なところが抜けている」

「い、いいじゃねえか。気付いたんだし」
「今回はな」
「今回はってことは、気付かなかったこともあるの？」
「大和は、すっぱかしの達人だからな」
「な、なんだそれは！」
「そのままの意味だが」
「ふうん…」
「ち、違うからな！俺は、約束を守る狼だ！」
「ほう。約束の時間、家で寝ていた回数を言っただけでやるのか」
「ちよつ！待ってっ！」
「何回なの？」
「百や二百では足りない数字だ」
「ええ」
「おい！」
「なるほどなあ。こりゃ、女との約束を忘れてフラれたことある夕
子やな」
「いや、それはない。別れる以前の問題で、今まで片想いしか経験
していないからな」
「おまつ！余計なことばっかり言うんじゃねえよ！」
「しかし、相思相愛となったのは明日香とだけではないのか？」
「そうだけどさ…って、そういう問題じゃねえんだよ！」
「ふむ？」
「まあまあ。ええやないか。そんな話のひとつやふたつ、誰でも持
ってるもんやっつて」
「ひとつやふたつで済めば良いんだがな」
「もう余計なことばっかり言うなよ！」
「ふむ。それは残念だ」
「余計なことばっかりで自覚あるんかい…」

大和は、明日香まで誰とも付き合っただけでいいの？

自分は…祐輔。

祐輔、他の子のことが好きになつたりしてないかな…。
なんだか、ちよつと心配なんだぞ…。

「それで、何の話だったっけ？」

「ふむ？」

「俺の話じゃないからな！」

「いや…お前の話やし…。紅葉からの報告はどうなつとんねん」

「あ、そうだよ。紅葉さんの報告！」

「待てつて。すぐには出てこない」

「ヤーリエは大丈夫なのか？」

「いろはお姉ちゃんも、干し肉が好きなの？」

「いや、それは分かんやろ…」

「よし。どうやら、ユンディナ旅団の分隊に会えたらしい。そこでヤーリエを診てもらつと、同じような症状を何回か見たことがある、というようなことを言つてたらしい。でも、今は有効な治療法はないらしい」

「えっ、じゃあ、ヤーリエは…」

「いや、放つておいても三日から一週間ほどで治るらしい。それで、その言葉通り、今はヤーリエもだいぶ良くなつたみたいだな」

「でも、結局、何の病気かは分からなかつたね」

「それは、ユンディナ旅団があらゆる地域に調査員を派遣して調べている最中だそう。最近、急激に増えた病気みたいだから、もしかしたら何かの伝染病の可能性もあるとのことだ」

「えっ、伝染病…？」

「まだ仮説の段階で、同じ場所で多くの人に症状が出たというような報告はないから、ひとまずは安心していいらしい」

「そう…。でも、すごく詳しいね」

「紅葉だからな」

「どつという意味？」

「あいつは、大雑把なくせに細かいんだ」

「……？」

「力抜くところでは力抜いて、きっちりするところではきっちりするってことやる」

「ああ、なるほど。なんか、そんなかんじもするよね」

狼の姉さまは、とても優しい。

たぶん、オオザツパとか細かいとかとは違うと思うんだぞ。

「えっ、まだ嚙んでたの？」

「んむ」

「よく嚙んで食べる。良いことだ」

「いや、もうお昼だし……」

「んー」

「リュウ、飲み込むか出すかしなさい」

「うん」

リュウは懐から紙を出すと、そこに吐き出した。そして丁寧に畳んで、また懐に仕舞った。

「つて、ええっ！？リュウ、まだ食べる気なの！？」

「……？うん。どうして？もつたいないよ」

「もつたいないとかじゃなくてね……。あー、なんて言えばいいのかな……」

「遙お姉ちゃんがね、食べ物粗末にしちゃいけないって言ったの。だから、この干し肉も大切に食べるの」

「良い心構えじゃねえか」

「ワウ」

「ああ。しかし、衛生面での心配や行儀の問題もある。食べていたものを吐き出して、それをまた食べるというのは控えた方がいい」

「私としては、今すぐやめてほしいけど……」

「まあええやないか。食いもんを大事にするってのは、生きてる中で一番重要なことや。旅の身やつたら尚更な。それが分かっているなら、ごちゃごちゃゆつこともないやろ？」

「むう……」

「さあ、メシやメシ。はよせな冷めてまうぞ」

「そうだな。俺はもう腹ペコだぞ」

「なんや、狩りに行くんとちゃうんかい」

「いいじゃねえか、たまには」

「たまには、ねえ。オレの記憶が正しかったら、オレらと一緒に食べてる回数の方が多いんやけどなあ。どうなつとるんやろ」

「記憶違いなんだろ」

「まったたく。大和には困ったものだな」

「ジジイだって、狩り、しねえじゃねえか」

「もう歳だからな。それに、私のような年寄りが若い芽を摘むわけにもいくまい。若い芽を食べて生きるのは若い者だけ。年寄りは死を待つのみだ」

「…よく言うぜ」

「はいはい、喧嘩はおしまいおしまい」

「こんな若造とは喧嘩にもならんよ」

「ふん。吠えてろ」

大和はカイトに少し唸ると、ファイとそっぽを向いた。

カイトは、そんな大和なんて相手にしてないみたいで。

望が投げる肉の欠片を上手に食べていた。

「上手いね」

「何、これくらい朝飯前だ」

「大道芸じゃねえんだから。爺さんが無理すんじゃねえよ」

「む？心配してくれているのか？」

「んなわけねえだろ」

「そうか。それは残念だ」

「素直やないな」

「ふん…」

「大和は優しいのか？」

「そうだな…。口は悪いし態度も悪い。向こう見ずで思慮が浅い」

「おい、ジジイ。お前……」

「このように、他人の話も最後まで聞かない。しかし、だ。私は、大和は優しき青年だと思っぞ。そうでないと、明日香が好きになる道理がないしな」

「ワウ」

「大和、意外に評価が高いんだね」

「な、何言ってるんだ！どうせ、口先だけだろ！」

「では、明日香の言うことも口先だけのことだと言うのだな？」

「……………」

「なんでそうなるんだよ！あ、明日香の言ったことは、今は話題になっでないだろ！」

「明日香は私の言ったことに賛同した。つまり、私を否定するということとは、明日香を否定するということだ。どこか間違っているところはるか？」

「……………」

「あ！明日香！待ってって！」

明日香は急にどこかへ走り去ってしまった。

大和はそれを追い掛けて。

……なんだか、姉さまとセトを見てるみたいなんだぞ。

「あーあ。カイト、やりすぎじゃない？明日香、泣いてたよ」

「青春というのは、あれくらいしないと充分に満喫出来ないものなのだよ」

「青春ねえ。オレには言葉遊びを楽しんでるようにしか見えんかったけど」

「年寄りの数少ない娯楽なのだ。それくらい許してくれないか」

「ええ……。結局そこなの……？」

呆れ顔の望。

お兄ちゃんもお手上げみたい。
…カイトって、だいぶお茶目なおじいちゃんなんだぞ。

「ごちそうさまなの」

「あ、美味しかった？」

「うん。美味しかったよ」

「そう。よかった」

「んー、おやつ」

「あ…」

リュウは懐からさっきの紙を出すと、中身を取り出して口に入れる。
そして、また噛み始めた。

「あー…遅かった…」

「はは、やっぱり気に入らんか」

「当たり前だよ…。私、ずっと前にそれをやってお腹壊したから…」

「ほう。中つたのか」

「たぶんね」

「リュウ、大丈夫なのか？」

「んー。今はなんともないよ」

「口にもものを入れたまま喋らないの」

「ふあゝい」

リュウがお腹痛くなったらどうしよう…。
ホントに大丈夫なのかな…。

「ルウエ。そんなに心配しなくていいよ。私も、腹痛に効く薬から
いは持つてるからね」

「食中毒にも効くんか？」

「効くよ。私特製だからね」

「ホンマかな…。まあ、効かんかってオレが持つてる薬やったら
確実やけどな」

「私の薬、信頼してないの？」

「出来るかいな。薬師が調合したわけでもないのに」

「む。私だって、いちおう薬師の勉強はしてたんだからね」

「ほう。どれくらいや」

「二年くらい」

「ほなら、まだまだやな」

「仕方ないじゃない。先生が急に北へ行かなきゃいけない用事が出
来て…」

「逃げられたんか」

「違うよ！…北で大変な伝染病が出たからって、居ても立ってもい
られなくなつて」

「四日風邪か」

「うん…」

「なるほどな」

「四日風邪？」

「だいたい四日間、風邪みみたいな症状が出て、それが終わると何事
もなかったように治る病気だな。それだけなら良いのだが、三人に
一人くらいは重症化して目が見えなくなったりするようだ」

「うん…。普通の風邪との見分け方が難しく、しかも尋常じゃな
い速さで感染が広がって薬師が足りなくなつたから、先生も行つち
やつたんだ…」

「そうか。困っている人を放つてはおけないのだな」

「うん。自分もいろんな人に助けられたから、今度は自分が助ける
番なんだって。先生の口癖だったんだよ」

「その先生も、大変な人生を歩んできたのだな」

「そうだね。私とそんなに変わらない歳だったんだけど…」

「…絶対、鯖読んどるやろ」

「そんなことないよ。ホントに二、三歳しか変わらないの」

「それは嘘やろ、さすがに…」

「嘘じゃないって!」

「何か偉大なことを成し遂げるのに年齢制限はないのだ。望と変わ
らない歳でも良いではないか。不満があるのか?」

「不満はないけど、信じがたいやろ。普通に考えて」

「まあ、そうかもしれないな」

「ホントだって!」

望と変わらないのに、すごいことをした人。

…自分にも、何か出来るかな。

「明日香と大和はいいの?」

「ええんとちゃうか。あいつらも狼なんやし。匂いで追い掛けてくれるやろ」

「そうそう。大和はともかく、明日香は大丈夫だよ」

「ふうん」

(今日のお昼ごはんね、カウユさまのところに遊びにきたクノさまが作ってくれたんだよ)

「クノさまって…ああ、そっちのクノかいな。そういや、あいつはどこ行つた?」

「えっ、何も聞いてないの?」

「はあ?オレは知らんぞ」

「カイトは?」

「私も聞いていないな」

「ええっ!じゃあ、どこに行つたのよ!」

「いや、知らんし」

昼ごはんの間、そういえばクノお兄ちゃんを見なかったんだぞ。どこに行つたのかな…。

と、急に目の前で強い光が破裂した。

「閃光弾!?!」

「いえ、転移です」

(んー…)

「お前は…七宝、といつたか」

(え?あ、如月…?)

「如月?」

「ええ。クノさまを連れ戻しに参りました」

「はあ…。やつと戻ってきた…。お前な、連れ戻しに来るんはええけど、転移先の迷惑も考えんかい。眩しいやろが」

「私は鷹丸の報告を聞き、あなた方の少し先を予想して転移してきたのです。しかし、予想をだいぶ上回るくらいに進んでおられた、ということですよ」

「なんやねん、それは…」

「いいじゃない、そんなこと。それより如月、クノさんがいなくなつたの！」

「そうですか」

「…え？そんな反応？」

「ふむ。どういう反応をしろと仰られるのですか？」

「えっと…」

「慌てて見つかるなら、私も慌てます。しかし、慌てたところで見つからない。今すべきは、原因を調査し解決策を早急に練り上げることですよ」

「はあ…。年寄り連中は、こんな面倒くさいやつらばっかりなんか？」

「ふむ？私とはもかく、如月は年寄りの部類には入らないぞ」

「尻尾が九本つてことは、八百歳越えてるってことやろ？十で割つたら八十やし、充分年寄りやん」

「十で割って人間の年齢に換算するというのが通じるのは、せいぜい五十から百までだ。それを過ぎると正確な計算は難しくなる。そんな実年齢をあてにするよりも、精神年齢をその者の人間としての年齢とする方が間違いがない」

「じゃあ、如月は何歳くらいになるの？」

「そうだな…。十五から二十といったところか」

「ええっ！私と同じくらい！？」

「望なんかよりよっぽど大人びとるな」

「ホントだよ！」

「…望は、自分が子供っぽいと認めるのだな」

「え？何が？」

「いや、なんでもない」

「……？」

「それより、クノお兄ちゃんはどうするんだ？」

「あ。忘れてた」

「はあ……。お前なあ……」

「何よ。お兄ちゃんも忘れてたくせに」

「私はクノさまの行方よりも、この子の方が気になります」

「わたし？」

「はい」

如月はリュウの方に向けて座ると、首を少し傾げる。

九本の尻尾は、ユラユラとゆっくり動いていて。

すつごく興味があるってかんじなんだぞ。

「わたしはね、リュウって名前なの」

「リュウさま、ですか。それで、その紋章は……」

「うん。旅団天照だよ」

「ふむ。ということは、桐華さまが孤児の保護を始めたというのは本当だったんですね」

「そうみたいやな」

「知っていたのですか？」

「まあな。ちよつと小耳に挟んだんや」

「小耳に挟んだって……。直接リュウに聞いたんじゃない……」

「たまにはええカッコさせてくれよ……」

「全然格好良くないし……」

「リュウさまのことは、だいたい分かりました。次は七宝に聞きたいことがあります」

「えっ……」

「クノさんのことじゃないんだ……」

「いいではないか。もしかしたら、聞いているうちに帰ってくるかもしれないだろ？」

「そうかもしれないけどさあ……」

ため息をつく望。

如月は、今度は七宝の方に向いて。

キツとした厳しい目で七宝を見つめていた。

七宝はすっかり怯えて、カイトの後ろに隠れている。

「その後、どうなのだ。ルウエさまに迷惑など掛けたりしているのではないだろうな？」

(あ…えっと…)

「七宝は、とっても良い子にしてるんだぞ」

「すみませぬ、ルウエさま。私は七宝に聞いているのです。七宝に報告させてください」

(……………)

「ダメだよ、如月」

「む？どういうことでしょうか」

「七宝、怖がってる。そんなんじゃ、本当の答えなんて聞き出せないよ」

「これは、この者に対する躰でもありません。毅然とした態度で臨むのは当然のことでしょう」

「葛葉が言ってた。他人を威圧して得たり与えたり出来ることは何もない。本当にその人のことを想うなら、厳しさの中に優しさを入れて。…今の如月、ただ七宝を怖がらせてるだけなんだぞ」

「……………」

「歳下の者に諭されるとはな、如月。今回は身を引くべきではないか？ルウエが言っていることは、的を射ている。それに、七宝についてルウエの言う通りだ。クーアの先輩として気負うところもあるのかもしれないが、少し肩の力を抜いたらどうなんだ」

「…すみませぬ」

「私に謝るのではないだろうか？」

「……………」

如月はもう一度七宝を見ると、頭と尻尾を下げる。

「すまぬ、七宝。私の高圧的な態度で不快な思いをしただろう」

(…怖かった。でもね、クーも悪いから…。クーも、悪い子だったから…)

「しかし、今は違うのだろうか？」

(うん)

「…それなら良い。すまなかったな」

(うん)

七宝は如月の足下まで歩いていって、甘えるようにお腹の下に潜り込む。

そして如月は、優しく七宝の顔を舐めて。

「それで、クノさんはどうするの?」

「もうええんとちゃう?」

「そんなの、絶対にダメだよ!」

「でも、如月がああではなあ…」

「す、すみませぬ…」

「如月が悪いわけじゃないんだから」

如月に寄り掛かって眠る七宝。

すっかり如月と仲良しになっただんぞ。

「起こす?」

「いや、それは可哀想やろ…」

「じゃあ、作戦を立てるだけ立てて、あとは私たちが探すしかない
ね」

「作戦で、そんな大袈裟なもんかいな…」

「大袈裟じゃないよ! 一人行方不明になってるんだから!」

「はあ…。明日香が大和がおったら、まだ楽なんやけど…」

「そういえば、まだ帰ってきてないの」

「あの子たちは大丈夫だよ」

「なんで?」

「狼だからだよ」

「……?」

リュウは首を傾げる。

…自分もよく分からないんだぞ。

「それより作戦だよ、作戦!」

「…なんか楽しんでへんか？」

「き、気のせいだよ…」

「ほうか」

「作戦と言っても、手分けをして探すくらいしかないとはいませんが」

「まあ、そらそうやけど。ほなら、班分けやな」

「じゃあ、お兄ちゃんとリュウ、私はカイトと、ルウエは如月とだね」

「ええ…。即決かいな…」

「いいじゃない。それに、一番良い分け方だと思うよ。お兄ちゃんは召致が使えるし、リュウは飛ぶのが速かったから報告するにも速いだろうし。私はカイトと一緒に行けばいい。ルウエは、もしここにクノさんが帰ってきたときに悠奈を走らせられるでしょ？」

「悠奈に探してもらったらいんじゃないのか？」

「あ…それもそうだね…」

「あかんあかん。あいつの鼻はアテにならない」

（む。どういう意味なのさ）

目の前が真っ白になって、次の瞬間には悠奈が足下にいた。なんだか、ちよつと怒ってるみたいだけど。

「どういう意味も何も、そのまんまやけど」

（なんでボクの鼻がアテにならないのさ！）

「お前に任せて、探しもんが見つかった例がない。すぐに美味そうな匂いにつられて、それを食い終わったらその場で寝るからな」

（そ、そんなことないもん！）

「あー、じゃあ、さっきの班で行くよ。あと、見つからなくても日が沈むまでに戻ること」

「分かつとる分かつとる」

（ねえ！ボクは無視なの！？）

「じゃあ、ルウエ。頼んだよ」

「うん」

(ねえってば！)

そして、みんなはそれぞれの方向に歩いていった。

悠奈はもう見えなくなったお兄ちゃんや望に、まだ文句を言っていた。

七宝がモゾモゾと寝相を変える。

「誰も帰ってこないね」

「そうですね」

「悠奈が帰っちゃったし…」

「まあ、よいのではないですか？いざ入り用のときとなれば、動いてくれるでしょう」

「うん。それはそうだけど…」

「私と話をするのは退屈ですか？」

「ううん、楽しいよ。如月は、葛葉みたいにいるんなこと知ってる」「葛葉さま…ですか」

「うん。葛葉ね、いろんなことを教えてくれるの。何かのお話とか、シククジヨとしてのタチイフルマイとか」

「お姉さまなのですか？」

「ううん。自分と同じ歳なんだぞ」

「ほう」

「でもね、姉さまとセトもいろんなことを教えてくれるよ」

「お姉さまもいらっしやっただですか」

「うん。姉さまは、術式を使うのがすごく上手いんだぞ」

「術式使いですか。最近は減っていると聞きますが…」

「そうなの？」

「はい。なぜか、術式適性のある者が減っているらしいのです。聖

獣との契約適性も、日に日に悪くなっていってますし…。これは、何かの前触れなのでしょうが…」

深刻な顔をする如月。

…術式、か。

手の平に小さな旋風を作ってみる。

「ルウエさまは適性があるんですね」

「うん。姉さまと葛葉に貰ったの」

「貰った…というと、力の授受をしたということですか？」

「ジュジュ？」

「あげたり貰ったり、ということですよ」

「あ、うん。そうだよ」

「ふむ…。しかし、そういった力は完全に先天的なものはずですが…。あ、そうか」

「……………」

「本来、術式を扱う力というのは訓練によって引き出すものなので。私たち聖獣も、何年か修行を積んで使えるようになります。ごくごく稀に訓練なしでも術式を使える、いわゆる”天才”もいるのですが。それに関連して、術式の適性や潜在能力が非常に高い者は、何かふとした切っ掛けで術式を使えるようになると思います。天才までとはいかなくとも、たとえば近くで発動した術式に共鳴して術式が使えるようになった等、半天才的能力の持ち主の話もあります」

「ふうん」

「そして、ルウエさまはその半天才的能力の持ち主だったのでしょ
うね」

「へえ」

「…えらく他人事ですね」

「ハンテンサイテキノウリヨクの持ち主とか言われても、自分は姉さまと葛葉に力を貰って使えるようになったってことは変わらない

んだぞ。姉さまと葛葉の温かさは変わらないの…」

「ふふ、そうでしたね。私としたことが迂闊でした」

「えへへ」

ごめんなさいの代わりに、頬つぺたを舐めてくれた。

でも、如月が謝ることはないんだぞ。

如月にも、自分が姉さまと葛葉を大好きなこと、伝えられたし。

「それで、いつまでそこに隠れているつもりなのですか、みなさん？」

「さすが如月だね。気付いていたのか」

「当たり前です」

「クノお兄ちゃん！明日香と大和も！どこに行ってたの？」

「それは他のみなさまが集まっから改めて話させていただきますので、少し待っていてもらえますか？」

「そっちの方が効率良いしな」

「うん、分かったんだぞ。じゃあ、悠奈」

（やっとお出番だ〜）

「悠奈は明日香と共に望さまとカイトの方へ行きなさい。そちらの銀狼は、お兄さまとリュウさまの方へ」

（分かった）「ワウ」「ほいほい」

そして三人はすぐに、それぞれの方向へ走っていった。

キツと睨む如月の視線を、なんとなく困ったような笑顔で受け止めるクノお兄ちゃん。

…どこに行ってたのかな。

早く聞きたいんだぞ。

(うええ…)

「もう…。ちよつとはぐれたくらいで泣かないの」

(だって、怖かったもん…)

「ねえ、クノお兄ちゃんたちはどこにいたの？」

「ちよつと待つてくださいね…。今、出来ますから…」

クノお兄ちゃんは手元にあつた食器を引き寄せると、そこに鍋の中身を注ぐ。

美味しそうな匂いが広がる。

「はい、出来ました。特製の南瓜の煮付けですよ」

「美味しそうねえ」

「タルニアさん、ありがとうございます。こんな、いろいろご馳走になってしまつて…」

「いいのよお。それより、クノだけじゃなくて如月の帰りも遅いから心配したのよお」

「す、すみませぬ…。動くに動けぬ状態だったので…」

「分かつてるわ。まあ、仕方ないわねえ」

(ごめんなさい…)

「あら、七宝ちゃんが謝ることはないわあ」

「そうそう。七宝は寝てただけだもんね」

(でも…)

「そんなことより、早く夕飯にしましょう。クノの話も聞かないといけないしねえ」

「せやな。オレも腹減ったわ」

「夕飯！」

クノお兄ちゃんに差し出された器を取って、早速食べ始める。
南瓜の煮付けは、セトが作ってくれたのは何回も食べたけど、クノ
お兄ちゃんのは初めて。
どうか。。。

「……………！」

「どうですか、ルウエさま？」

「すごく美味しいんだぞ！セトのより、ずっと！」

（ルイムナさまと同じくらい美味しい！）

（カウユさまは、あんまりごはんを作ってくれないの…）

「ふふ、高評価ねえ」

「ありがとうございます」

「わっ、ホントだ。すごく美味しい」

「ふうん…。まあ、オレでもこれくらいやったら作れるかな」

「負け惜しみ言っちゃって」

「負け惜しみなんかやないて！」

「ふふふ。リユウちゃんはどうかしらあ？」

「遙お姉ちゃんの方が美味しいかな」

「旅団天照、影の団長ねえ。たしかに、あの子の料理は逸品だわね
え」

「ふむ。今度、修行に出てみましょうか…」

「そうねえ。料理が美味しくなるなら嬉しいわあ」

「なるほど、頑張らなあかなあ。な、クノ」

「…はっ。あ、そ、そうですね」

「…なんや、タルニアに見とれてたんかいな」

「は、はあ！？な、なんでそんなこと…！」

「動揺しすぎや。敬語が取れとる」

「ふふふ」

顔を真っ赤にさせてそっぽを向くクノお兄ちゃんを、イタズラっぽ

く見つめるお姉ちゃん。

えっと、クノお兄ちゃんはお姉ちゃんのが好きで、お姉ちゃんもクノお兄ちゃんのが好きで、でも二人はそのことを表に出さなくて…。

うーん…。

なんだかややこしいんだぞ…。

「ほんでや。クノはどこに行つとつたんや？」

「もうちよつと間を考えようよ…。」

「マモミもあるかい。今、その話を聞きにタルニアも来とるんやろ」

「そうだけどさ…。」

「いえ、望さま。いいです。話します」

「そ、そうですか…。すみません…。」

「ふふふ。望ちゃんが謝ることはないでしょう?。」

「いえ。兄の不徳は妹の責任でもあるので」

「しつかりしてるのねえ。お兄ちゃんも、これくらいしつかりしてほしいわあ」

「ふん、誰のことやろな」

「誰でしょうねえ」

「…ねえ、話さないの?待ちくたびれちゃうの」

「ふふ、ごめんなさいねえ。クノ、小さなお客さまがお待ちよお」

「はい。では…」

クノお兄ちゃんは一度咳払いをすると、きちんと座り直して話し始める。

「結論から申しますと、千早のわがままに付き合っておりまして」

「千早ちゃんのがまま?。」

「はい」

「俺からも説明するよ。俺と明日香は途中から合流したんだけど、

千早のわがままというのは、千早の故郷を探してほしいうつてものだったんだ」

「千早の故郷？千早って聖獣やる？なんで故郷がこっちにあんねん」
「面倒だし長くなるから、その辺はカイトに聞いてくれ。話を戻して、千早はこの辺で故郷の気配を感じ取ったらしい。それで、もしかしたらってことだな」

「それはいいけど、なんで誰にも何も言わずに探し回ってたのかしら？」

「はい。千早が、少し用があると行って森の中へ飛び去っていったのです。何の用か言わなかったので、いちおう聞いておこうと思って追い掛けました。少しということ、すぐに合流出来るかと思い、また、私用でみなさまの足を止めてしまうのは申し訳ないので、そつと離れたのです」

「それで？なんで一旦戻ろうとは思わなかったの？望ちゃんたちが心配してるってことは分かっていたのでしょうか？」

「はい…。それが、お恥ずかしながら帰る道が分からなくなりました…。」

「はあ！？迷子かいな！」

「はい…」

「森の中は、慣れたやつでも簡単に迷うからな。ここから半里ほど先の川のほとりで、二人して途方に暮れていた」

「半里！よくそんなに歩きましたね！」

「はい…。道に迷っても無闇に歩いてはいけないことを学びました…。」

「ふふ、良い経験をしたじゃない」

「まあ…そうですね」

「明日香がクノの匂いに気付かなかったら、一生助けが来なかったかもな」

「それはないと思うよ」

「む？なぜだ」

「遅かれ早かれ、明日香はクノさんの匂いに気付いてた。それに、あるとき走っていったのもクノさんを探すためなんでしょ？」

「ワウ」

「ホンマかなあ……」

「ホントなんだぞ」

「うん。だって、明日香だからなの！」

「ワウ！」

明日香は、その場で飛び上がって宙返りをしてみせてくれた。そして誇らしく胸を張る姿は、とても立派で勇ましかった。

遠くの方でフクロウが鳴いてる。

揺れる焚火の炎は、静かに如月と七宝の寝顔を照らしていた。

「今日は本当にすみませんでした」

「あはは。いいんですよ。それに、クノさんたちには本当にお世話になってますから」

「いえ。この埋め合わせは、いつか必ず……」

「そんなんええて。またどうせ世話になるやるしな」

「しかし……」

「クノ。二人がこう言ってくれてるんだから」

「……………」

「ふふ、ごめんなさいねえ。クノはホントに頭が固いから」

「はい、知ってます」

「あ……はあ……」

「ふふふ。やっぱり、望ちちゃんって面白いわあ」

「そ、そうですか？」

「ええ」

「ふあ……」

「ルウエさま、お休みですか？」

「うん…」

「では、風邪など引かれないように…」

クノお兄ちゃんは、そつと毛布を掛けてくれた。

そして、ゆつくりと背中を叩いてくれて。

「あ、すみません。私が…」

「いえ、これくらいさせてください。せめてもの償いです」

「ふふふ。償いになるのかしらあ？」

「え？どういうことですか？」

「クノは、誰かのお世話をするのが大好きだから。特に、小さい子供のお世話はね」

「タ、タルニアさま！」

「シート。起きちゃうでしょ？」

そんな会話を聞きながら。

ゆつくりと、意識が遠のいていった。

朝、目が覚めたときにはもうお姉ちゃんもクノお兄ちゃんも如月もいなかった。

でも、また会えるから。

そう約束したから、寂しくない。

それより…

「おい、はよ起きんかい。置いてくぞ」

「うーん…」

「はあ…。なんか調子でも悪いんか？」

「うーん…」

「唸ってるだけでは分からんぞ」

「うーん…」

「ええ加減にせんか！」

「あたっ」

お兄ちゃんは、唸り続ける望の頭を殴る。
でも、余計に唸るだけだった。

「もう知らんぞ。なんも言わんかったら置いてくしかないし」

「……………。お腹痛い…」

「はあ…。なんでさっさと言わんねん」

「大丈夫？」

「うん…大丈夫…。ごめんね、リュウ…」

「大丈夫やねんやつたら行くぞ。予定より大幅に遅れてるし」

「あつ、いや…大丈夫じゃない…」

「大丈夫じゃないのか？」

「ああ、えつと…」

「ホンマなんやねん…。原因は？毒草でも食ったんか。腹出して寝てたんか。月のものか」

「月のものって？」

「ん？ルウエはまだなんか？結構遅いな…。まあ、そのうち分かる」「ふうん…？」

何なんだろ…。

自分にもそのうち分かるって…。

「ほんで？どねや」

「えっと…二番目…」

「はあ…。ただの腹下しでいちいち大袈裟やねん！これでも飲んどけ、このアホ！」

「いてっ」

背負い袋から黒くて丸い葉が入った瓶を取り出して、望に投げつける。

それがちょうど望の額に当たって。

「心配して損したわ！あー、アホらし！」

「何よ…。そんなに言わなくてもいいじゃない…。お腹が痛いのは本当なんだし…」

「大袈裟やゆうてんねん！腹出して寝てたんやったら自業自得やろ

！」

「むう…」

望、お腹を出して寝てたのか？

それは確かにお腹が痛くなるんだぞ。

「はあ…。収まった…」

「ほうか。即効性はないけどな」

「あ…。またお腹が…」

「アホか。はよ準備せえ」

「…そういえば、大和は？」

「ワウ」

「ふうん。それで、私の荷物は？」

「自分の荷物くらい自分で管理せえよ。…ほれ」

「ありがと」

望は荷物を受け取ると、中から櫛を取り出して。

尻尾のお手入れを始める。

「はあ…。あんな、手入れすんねやったら、はよ起きろ。ゆっくり起きんねやったら、手入れはするな。分かるか？」

「良いじゃない。身嗜みはきちんとしとかないとね」

「安心しろ。誰も小汚ない小娘のことなんか見やんから」

「何よ。自分は手入れなんてしなくてもいいだろうけどさ、私だっ

て女の子なんだよ」

「女の子ってガラかよ」

「ねえ。それって失礼じゃない？」

「失礼も何もあるか。…手入れすんねやったら、さっさとしろ。みんな待ってるんや」

「はあい」

散々言われてたのに、なんだか嬉しそうだった。
なんでだろ。

…望が竹で出来た櫛を慎重に尻尾に通すと、綺麗な黒い毛が整えられていく。

「あ、そうだ。櫛、ルウエも持ってたよね。わたしが鋤いてあげる

よ

「うん。ありがと、なんだぞ」

「良かったな、ルウエ」

「うん！」

荷物から七宝の櫛を取り出して、リュウに渡す。

それを受け取ると、後ろに座って、まず手櫛で整え始めた。

「ルウエの髪、綺麗だね」

「そ、そうかな…」

「あ。蒼い髪が混じってるの。わたしと似てるね」

「え？」

「わたしは短いから分かりにくいけど、紅い髪が混じってるの」

「ほう。どれどれ」

お兄ちゃんがリュウの髪に触って確かめてみる。

すると、本当に紅い髪が混じっていて。

「ホンマや。短いのもあるし、色も黒に近いから見にくいな。…しつかし、リュウは剛毛やなあ。見てみ、この太さ。散髪とか大変やろ」

「お兄ちゃん。そういうことは思っても口に出さないの」

「なんでや。それくらいゆうてもええやん。な、リュウ」

「えっとね、散髪は遙お姉ちゃんがしてくれるの」

「うん。まあ、そんなことは聞いてへんけどな」

「でも、他の人なら十回くらいで研ぎなおすんだけど、わたしは毎回研ぎなおさないといけないって言ったの」

「ハサミの話な。てことは、リュウの髪は他のんより十倍硬いってことか」

「へえ〜。すごいね」

「ほんで、ルウエの髪は…だいぶ細いな。まあ、髪は切ったことないみたいやけど」

「うん。姉さまが、伸ばした方が可愛いって」

「ほう。姉さまがねえ」

「うん」

「まあ、姉さまが誰かは知らんねんけど。よし、望はどつや」

「ひゃっ!?!」

望は櫛を放り出して、お兄ちゃんと距離を取った。

おかしな方向に飛んでいった櫛を、お兄ちゃんは上手く掴んで。

「なんや。流れからして望の番やろ」

「許可を取ってからにしてよ!」

「リュウモルウエも許可なんかいらんかったし。なあ?」

「うん」

「二人はいらなくても、私はいるの!」

「なんでや。ケチやな。なあ?」

「うん」

「いちいち二人に意見を求めないの!」

「まあ、あれや。望は太くも細くもない、ちょうど中間くらいやな」

「ええ…」

「いらんのか?」

「ルウエくらい細かったら良かったなって思っつて」

「ほうか。でもまあ、みんな個性があっつてええと思っつけどな」

「そ、そうかな…」

「ああ」

お兄ちゃんは櫛を望に返して、ついでに頭を撫でて。

なんとなく、望の顔が赤くなってるようなかんじがしたけど。

「さあ。望もルウエも、早めに済ませてくれよ」
「あ、うん」「はい」

望は尻尾の手入れを再開して。
リュウも髪鋤きを始める。

お兄ちゃんは、荷物の再点検。
明日香は大欠伸をしていた。

「あー、お腹痛い……」

「出すもん出して、スッキリしたらどうや。五月蠅くてかなわん」

「もう……。ホントに下品だよね……」

「下品で結構。ほれ、はよ行ってこい」

「い、いいよ、別に……」

「何を今更恥ずかしがってんねん。行かんねやったら、腹痛いゆうなよ」

「うう……。分かったよ……」

望はこつちをチラチラ見ながら、お腹を押さえて草むらの中に入っ
ていった。

大丈夫かな……。

「はあ……。ホンマ、手間の掛かるやつちゃ」

「望、大丈夫なのか？」

「んなもん心配せんでええ。それより大和。ヤーリエはどうなんや
？」

「ん？良好みたいだぞ。もう明日か明後日くらいには全快してるだ
ろう」

「良かったの」

「せやな」

「追いつけるかな？」

「さあな。でも、明日や明後日には俺たちもベラニクに着いてるだ
ろ。それまでのところで追いつくのは難しいと思うぞ」

「じゃあ、ベラニクで待つてあげるの」

「ん……。リュウは旅団天照に帰らなあかんしなあ」

「じゃあ、逢お姉ちゃんに言って待つてもらおうの」

「仕事があるからな。難しいんとちゃうか？」

「うう……。でも……」

「まあ、ベラニクで追いつけるとも限らんしな。もしかしたら、その先まで行かんとあかんかもしれんし」

「じゃあ、そのときは……」

「ヤーリエを待ってもええかもな」

「やった！逢お姉ちゃん、お願いだからベラニクから早く出発してね……」

「おいおい……」

リュウは両手を擦り合わせて、ベラニクの方に向かって拝んでいる。……ヤーリエに会いたいのは分かるけど、そんなことをお願いするのもどうかと思うんだぞ。

でも、自分もリュウともっと旅がしたい。だから、少しだけ。

「ま、なんでもいいけど。あいつ、遅くねえか？」

「そうか？腹下したんやったら、それなりに掛かるやろ」

「んー、そんなものか？」

「心配やったら見に行ったらええやん」

「な、なんで俺が……」

「ワウ」

「あ、ああ。そうしてくれ……」

明日香は少し頷くと、望と同じところをたどっていった。望：ホントに大丈夫なのかな……。

「ところで、悠奈と七宝はどうしてるん？」

「なんで？」

「いや、暇やし聞いただけなんやけど」

「二人とも、まだ寝てるよ」

「なんや、寝坊助やなあ…」

「寝坊助ってわけじゃない。人間みたいに眠りが深くないから、それだけたくさんの睡眠時間が必要なんだ。その代わり、緊急時とかにはすぐ目を覚ますことが出来る」

「ほう。それは初めて聞いたな」

「睡眠のことなんて、誰も聞かねえからな。昼間に何をしてるのは聞いても。あと、あいつらはまだ子供だから。寝る子は育つを實踐してるんだろ」

「じゃあ、悠奈も七宝も、これからもつと大きくなるのか？」

「そうだな。もつともつと大きくなるぞ」

「へえ」

大きくなった悠奈と七宝…。

どんなのかな。

すごく楽しみなんだぞ。

「せや。リュウって契約してるんか？適性は高いみたいやけど」

「ケイヤク…？あ、遙お姉ちゃんがお客さまとやってたの」

「いや、まあ、それも契約やけど…」

「……？」

「こいつが言ってるのは、俺みたいな聖獣との契約についてだ」

「うーん…。分かんないの」

「ほんだら、やってへんのかな」

「たぶんな。リュウからは聖獣の気配も感じられないし」

「ヤタムタとかクルクスやったら分からんけどな」

「あいつらは、リュウの属性とは合わない…こともないのか。ルウエと同じ複属性持ちなんだな。それにしても、火と水とはまた変わった組み合わせだな…」

「フクゾクセイ…？」

「ふたつ以上の属性を持つてるやつのことなんだが…細かいところの説明は面倒くさい。カイトにでも聞いてくれ」

「別に、ふたつ以上の属性を持つてるってだけでええんとちゃうんか？」

「あ…。まあ、そうだが…」

「ん…」

「難しいか？」

「うん…」

「まあ、それやったら考える必要はない。論理を理解したところでどうなるわけでもないし」

「……………」

「それでだ、リュウ。銀色の龍を見たことはないか？翼が四枚あるんだが」

「ん…」

「自分はあるんだぞ」

「ほう。どこで？」

「一緒に住んでた」

「ふうん…って、はあ！？聖獣と一緒に暮らしてたんか！？」

「聖獣かどうかは知らないけど、セトは銀色で翼が四枚ある龍なんだぞ」

「セト？セト…」

「大和、知ってるの？」

「いや、思い出せないな。もしかしたら、聖獣じゃなくて普通の龍なのかもしれないな…」

「ふうん」

「いや、でも、ただ単に俺が知らないだけかもしれない」

「あ」

「なんだ？」

「わたし、龍に会ったことがあるの」

「銀色の、か？」

「うっん。赤色」

「赤色の龍…ってことは、リュウだな…」

「…リュウとかリュウとか龍とかややこしいな」

「ん？今のはどっちだ」

「一番最初が”紅蓮の瞳”で…って、こんなんゆつても不毛すぎるやろ」

「それはそうだが。しかし、仮にそのとき契約してたとして、火の属性に気が付かないわけがねえし…。それに、カイトは絶対に気付いてるはずだから…」

「そういえば、望お姉ちゃんはどうなったの？」

「ああ、せやな。どないしたんやろ」

「見にいってこいよ」

「せやな」

と、草むらに入っただけのこととするお兄ちゃんを大和が止める。

「なんやねん」

「お前なあ…。ちったあ配慮してやれよ。望だつて、いちおう女なんだぞ？」

「それが？」

「はあ…。ルウエ、リュウ。俺はこいつにみっちりといういろいろ教えねえといけないみたいだから、望と明日香の様子を見に行ってくれねえか？その草むらから入って、草が倒れてるところを通ればいいから」

「分かった」「はあい」

なんでお兄ちゃんじゃダメなのかは分からないけど。

望の荷物の傍に自分たちの荷物も置いて。

草むらの中に入っていく。

79 (後書き)

本当にお腹を下したただけなんでしょうが。
心配です。

「望、大丈夫？」

「うん。大丈夫だよ」

「それで、何してるの？早く戻ろうよ」

「あ…いやあ…。あはは…」

草むらの向こうで気まずそうに笑う望。

何なのかな…。

「…あのね、お兄ちゃんを呼んできてくれない？」

「なんで？」

「手を洗いたいんだけど、川の手場所が分からないんだ…」

「うん。分かった」

「でも、なんで明日香に言わなかったの？」

「えっ、明日香、いたの？」

「ワウ」

「なんだ…。いるなら早く言ってよ…」

「ワウ」

「今言っても仕方ないでしょ…」

「じゃあ、わたし、行ってくるの」

「あ、うん。お願いね」

リュウは翼を広げると少し助走をつけて、木々の隙間を上手く抜けて飛んでいった。

自分は…どうしようかな…。

「はう…。いたた…」

「望、大丈夫なのか？」

「えっ、あ、ルウエ？ま、まだいたの？」

「うん。リュウが飛んでいっちゃったから」

「そ、そう……」

「ねえ、望。ホントに大丈夫なの？」

「大丈夫大丈夫……」

「ホントにホント？」

「うん……。ごめんね」

「大丈夫ならいいけど……。無理しちゃダメなんだぞ」

「うん。ありがとね」

でも、痛さを我慢してるような声だった。

聞こえてくる息遣いも荒くて。

「ねえ、望……」

明日香は目を閉じてジッと伏せていた。

その明日香の前を通って、望がいる草むらに入ってみる。

「ル、ルウエ……」

そこには、真っ青な顔をしてお腹を押さえている望がいた。

「望！」

「大丈夫だから……。心配しないで……」

「そんなの、無理なんだぞ！全然大丈夫じゃない！」

「ごめんね……」

ヤーリエを思い出した。

ヤーリエも、こんなかんじだった……。

望……ヤーリエ……。

木の隙間からカイトの姿が見えた。
自分たちよりずっと先を飛んでいて、火の粉がキラキラと落ちていくのが見えた。

「上ばかり見てると落ちるぞ」

「うん」

「ちっ…。やっぱり空路の方が速いか…」

「競争じゃないから、別にいいと思うの」

「ワウ」

「そうだけだよ…」

明日香にリュウ、大和に自分が乗って、ベラニクへ向けて森の中を駆け抜けていく。
望とお兄ちゃんはカイトに乗って。

「そら、あのてっぺんからベラニクが見えるぞ」

「うん」

返事をしている間に山のとっぺんは越えてしまい、もう下り坂になっていた。

「むう…。見えなかった…」

「今もまだ前に見えてるだろ…」

「あ。家があるの」

「ホントだ」

「あつちはまだそろそろだな。俺たちも飛ばしていくぞ」

「わわっ!?!」

急に大和が速度を上げたから、転げ落ちてしまいそうになった。ちゃんとしつかり足で挟んでてよかったんだぞ…。

「ウウ…」

「ご、ごめんって…」

「ワウ！」

「そ、そうだな…。大丈夫か、ルウエ？」

「うん。なんとか」

「ふう…」

追いついてきた明日香に怒られて、大和はシユンとしている。…ホントに危なかったんだから、自業自得なんだぞ。

「はあ…」

「大和、速度が落ちてるんだぞ」

「気分が落ち込んでるんだ…。速度も上げられねえよ…」

「カイトに追いつけないよ？」

「どうせベラニクで会うんだ。急ぐ必要もない…」

「明日香にも置いてかれてるよ？」

「気持ちの整理が必要だ…。しばらく一人にしてくれ…」

一人につて…。

大和に乗ってる限り、それは無理だと思っただぞ…。

「明日香に怒られた…。また女の子に嫌われた…。はあ…」

でも、今、大和に話しかけても気付かないんだろうな…。ベラニクで追いつくから…仕方ないのかな…。

大和はついに立ち止まって、木の根元に座り込んでいじけている。

「大和。もうみんな着いたんじゃないのか？」

「そうだな……」

「ねえ、行かないの？」

「はあ……」

「ため息をつきたいのはこっちなんだぞ……」

大和がいなかったら、あれだけの道を歩くのにどれだけ掛かるのかな……。な……。

望、心配なのに……。

と、そのとき、影が大和の上に降り立った

「大和。まだこんなところにいたのか。他の全員、ベラニクに着いてるぞ」

「く、苦しい……」

「ふん。今のお前にはびつたりだ」

カイトの大きな足で踏みつけられる大和。
バタバタと足を動かしているけど、効果はないみたいだった。

「ルウエ。私の背中に乗るんだ。一気に行くぞ」

「うん」

言われた通り背中に乗る。

カイトの背中は、触ると火の粉が散るのに熱くなかった。
フカフカの羽毛が温かくて気持ちよくて。

「よし。しっかり掴まっているのだぞ」

「うん」

カイトが一度大きく羽ばたいたと思ったら、もう空高く舞い上がっていた。

「気持ちいいね」

「ああ」

大和が立ち止まってくれて、もしかしたらよかったのかもしれない。こうやって、空を飛んでいる。

後ろを振り返ると、ヤマトが見えた。

ヤリエと狼の姉さまがあそこにいるんだな。

袖香も真お姉ちゃんも。

空から見たら、こんなに近いんだ。

でも、不思議な気分。

何なのかな。

不思議な気持ち…。

お粥には梅干しがいくつも入っていて、梅干しの色が移っていた。

「酸っぱそうなの……」

「酸っぱいの、嫌い？」

「そうじゃないけど……」

「じゃあ、食べよ？」

「うん……」

リュウは眉の間に皺を寄せて一口食べる。

やっぱり酸っぱかったみたいで、ギョツと目を瞑って。

「そんなに、酸っぱい？」

「うん……」

「じゃあ、こつやって、小さく千切って、お粥と一緒に、食べるといいよ」

「早く言っただけよかったの……」

「光は、いつでも一歩遅れるからね」

「そんなこと、ないもん」

「それよりさ、お粥以外に何かないの？これじゃ、夕飯まで間に合わないよ」

「望が病気なんだ。贅沢言っつんじゃねえよ」

「でも、足りないよね」

「言うから余計に足りないように感じるんだ」

「ええ……」

響は器を置いて鍋の中を見にいったけど、すぐに戻ってきた。何も入ってなかったみたい。

ため息をついている。

「その辺の、野草を摘んで、食べればいいと思うよ」

「草はお腹に溜まらないでしょ。もっと、お腹が膨れるものが欲しいの」

「この前の、飴が、まだ残ってたじゃない。それを、食べたらず？」

「んー…」

「あ、そうだ。望お姉ちゃんにも、持って行ってあげようよ」

「やめとけやめとけ。お粥を食べるのもままならなくらいだったからな。それに、部屋へも入るなって言われてるじゃねえか」

「でも…」

と、そのとき、廊下の方でバタバタと足音がして、扉が勢いよく開いた。

「望！医者連れてきたぞ！」

「望は母屋の方だ」

「じゃあ、ここはどこだ！」

「お前は一旦落ち着け」

「落ち着いてられるか！」

「美希お姉ちゃん、急いては事をし損じるんだよ？」

「急いては事をし損じる…。で、でも…！」

「美希お姉ちゃんらしくないよ。一度落ち着いて。お医者さんもついてきてないよ」

「え…？」

後ろを振り返る美希お姉ちゃん。

…うん。

連れてきたって言ったのに、最初からずっといなかったから、不思議に思ってたんだぞ。

「急いで事をし損じたな」

「ああ…」

「振り出しに戻る、だ。一旦、望の部屋に行つてこい」

「そうだな…」

そして、美希お姉ちゃんは肩を落として厨房を出ていった。

…望が心配なのは分かるけど、失敗しちゃ意味がないんだぞ。

「でも、なんで望の部屋からなの？お医者さんを探さなくていいのか？」

「医者も目的地は聞かされているはずだ。迷走する美希のあとについていくのは得策ではないと判断して、真つ直ぐ望の部屋へ行つて可能性の方が高いだろ」

「ふうん」

「まあ、そんなことはどうでもいい。それより、今日は他に客がないから、好きに部屋を使つてもいいつて、宿の人から言われてるんだ。それを食べたなら、部屋を選びに行こう」

「望の部屋は…」

「ダメだ。あと、隣も美希たちが使つから無理だぞ」

「むう…」

「美希お姉ちゃんと一緒にダメなの？」

「それもダメだ。伝染病だった場合、看病をしているあいつらも病気を持つてるかもしれない。あいつらは大人だから、もしかしたら免疫を持つてて発病しないつてこともあるだろうが、お前らはまだ子供だ。同一の病気だったとして、望とヤーリエが発症してるんだから、お前らが発症する可能性はかなり高い」

「じゃあ、離れてた方がいいの？」

「そうだな。出来るだけ階層を変えた方がいい。そのときでも真上は避ける。それが無理で同じ階層になる場合は、少なくとも二部屋

は開けた方がいいだろうな。まあ、自由に部屋を選べるんだ。そんな心配はいらないだろうが……」

「わたし、一番てっぺんの部屋がいいの！」

「わたしは、畳のお部屋が、いいな」

「ん」。じゃあ、東向きのお部屋がいい」

「自分は、窓がおつきな部屋がいいんだぞ！」

「……もう好きにしる」

「広い部屋がいいよね」

「響にリュウ、ルウエ、わたしだから、四人部屋以上だね」

「お布団はどんなのかな。フカフカかな」

「あ。今日は毛布じゃないの。お布団で寝られるの！」

「久しぶりだなあ。美希お姉ちゃん、全然宿を取ってくんないもんね」

「お金がないんだから、仕方ないよ。食料で、ほとんど、なくなっちゃうから……」

「そうだけとさあ。薬草の行商とかやればいいのに」

「じゃあ、響が、やればいいじゃない」

「わたしは薬草とか分かんないもん。光が一番知ってるでしょ？」

「そうだけと……」

薬草……。

そういえば、望も薬草を売ってるって言ってた。

薬草を売ったら、銀貨も貰えるかな。

「それより、部屋なの」

「あ、そうだね」

「そういえば、ここの温泉は結構有名らしいよ」

「温泉があるのか？」

「うん。美人の湯なんだって。お肌ツルツルだよ」

「ふうん」

「あれは、皮膚の表面が、溶けてるんだよ」

「えっ、溶けてるの？」

「もう…光。不安にさせるようなことを言わないの」

「ご、ごめんなさい…」

「溶けるって言っても、本当に表面の表面にある古くなった皮膚が溶けて、下の新しい皮膚が出てきてるだけだから大丈夫だよ」

「よかったの…」

「うん…」

「あはは。温泉は身体に良いものばかりだから、心配しなくても大丈夫だよ」

「うん」「分かった」

前にも入った温泉。

すぐく気持ち良かった。

だから、ここの温泉も楽しみなんでぞ。

溶けるのは怖いけど…。

東向きで宿屋さんの一番上の階の広い畳の部屋。
大きな窓からは下を流れる川や村の様子が見えて。

「こんなにピッタリの部屋があるなんて思わなかったなあ」

「ねえ。このお菓子、食べていい？」

「はい、どうぞ。わたしの分も、食べればいいよ」

「いらないのか？」

「うん。お腹、いっぱいだから」

「じゃあ、いただきます」

置いてあったのは餡子を焼いたお菓子。

甘いんだけど、焦げてるところがちょっと苦くて。

「美味しいんだぞ。光も食べなよ」

「うん、ありがと。でも、いいよ」

「光…具合が悪いのか…？」

「あ、ううん。ホントに、お腹が、いっぱいなだけだから。大丈夫だよ」

「ホントに…？」

「うん。だから、ね？ルウエが、食べて」

「うん…」

望も大丈夫だって言って、大丈夫じゃなかったから…。
でも、光はニツコリと笑って頭を撫でてくれた。

「あ、そういえば、この前の声って響お姉ちゃんたちだったの？」
「声？」

「あー、美希お姉ちゃんが後ろの様子を見に行ったときじゃない？」
「あのとき？でも、美希お姉ちゃんは、妹に会ってくるって……」
「様子見だったんでしょ。同じ方向に向かってるってのが分かって、そのまま帰ってきた」
「そうなのかな……」
「そうだよ。美希お姉ちゃん、照れ屋さんだし」
「うん。それは、そうだね」

じゃあ、望が嬉しそうにしてたのは、美希お姉ちゃんと会えるから？
そうだとしたら……。

「あっ！そうだ！温泉に行こうよ！」
「そうだね。それなら、準備しないと。ルウエ、リュウ。下着の替えはある？」
「わたしはあるの」
「自分の……あ……もうないんだぞ」
「んー……困ったな……。響、持ってないの？」
「自分の分はあるけど。ルウエに合うかどうかは分からないよ」
「ルウエ、華奢だからね……」
「宿に置いてるんじゃない？聞いてくるよ」
「うん。お願い」

そして、響は部屋を出ていった。

光はそれを見送ると、次はこつちを向いて。

「じゃあ、ルウエ。下着を、出して。洗濯しないと、いけないから」
「う、うん……」
「リュウもね。あ、汚れた服とかも、あったら、出してね。一緒に、洗うから」
「はあい」

袋をひっくり返して、中身を出してみる。
服や下着と一緒に、額当てとかお金も出てきた。

「わあ〜。いろいろ、入ってるね」

「うん。これはヤウトの自警団の装備、これはセトに買った銀貨、これはユールオの隊長さんから買ったお金。これは望に買ってもらった鏡、これがお兄ちゃんに買った櫛。これは悠奈から買ったチギリノシヨウニン、こっちは祐輔に買った”風”。もう袋がいっぱいいっぱいなんだぞ」

「あはは、そうだね。でも、それだけ、たくさん、思い出が、あるってことだよ。ううん。どんな袋にも、入り切らない、たくさんの、思い出が」

「…うん」

「わたしはね、逢お姉ちゃんに預かってもらってるの。だから、ここにはないけど、わたしもいっぱい思い出があるの」

「ふふ、そうだね。わたしも、あるよ。みんなみんな、たくさん、思い出を、持つてる。全部、大切な、思い出だよ」

「ルウエ〜。あつたよ〜。でも、真っ赤な禪しなくて」

「ふふふ」

「ん？どうしたの、光？」

「響も、わたしの、大切な、思い出だよ」

「そう…?」

光はギョツと響を抱き締める。

何がなんだか分からない響は、フンドシを持ったまま頭の後ろを掻いていた。

温泉には誰もいなくて、自分たちだけの貸し切りだった。

「響。泳がないの」

「いいじゃない。誰もいないんだし」

「誰もいなくてもダメ」

「ちえ」

「あ、ルウエ。髪の毛が、温泉に、浸かってるよ。ほら。傷むと、いけないから」

「うん。ありがとう」

「光お姉ちゃん、みんなのお姉ちゃんみたいなの」

「そりゃね。光が一番面倒見がいいから」

「そ、そんなこと、ないよ」

「ん」。それより、ルウエが女の子だったのはびっくりしたかな。ずっと、髪の毛を伸ばしてる可愛い男の子だと思ってたから」

「よく言われるんだぞ」

「ごめんね、ルウエ」

「光が謝ることないでしょ。光は見破ってたんだからさあ」

「裸になるまで、分からなかった、響がおかしいんだよ」

「あつ、酷いなあ」

「だって、どこからどう見たって、女の子でしょ？」

「そうかな？」

「もう！響！」

「あはは。冗談だよ」

響は翼をバタバタさせて、光に水を飛ばす。

水を掛けられた光はムツとした顔をして、手で水鉄砲を作って響に仕返し。

「うわっ！コホッ、飲んじゃった！」

「ふん」

「もう…。そんなに怒らなくてもいいじゃない…」

「響は、いつもそう。冗談冗談って言って。その冗談で、傷付いてる人も、いるんだよ！」

「えっ、誰が？」

「具体的に、言わないと、分からないの!？」

「あっ、いや…ごめんなさい…」

「わたしに言っても、仕方ないでしょ！」

「うう…。ごめんね、ルウエ…」

「ううん。気にしてないんだぞ」

「そ、そう…？」

「うん。だから、光も落ち着いて」

「光お姉ちゃん、すごく怖い顔してるの…」

「あっ…。ごめんなさい…」

「うん。もう怒らないで」

「そう…だね。うん。ごめんね」

光は自分とリュウの頭を撫でてくれて。

手拭い越しだけど、柔らかい光の手の温かさが伝わってきた。

「なんもない村でねえ。ごめんよ」

「いえいえ」

「あの宿のお客さん？」

「はい」

「大変ねえ。お姉ちゃん、病気なんだって？」

「え？なんで知ってるんだ？」

「村の情報網をナメちゃいけないよ。噂なんてあつという間に広がるんだから」

「ふうん」

村の情報網…。

自分がおねしょしたとき、みんなが知ってたのもそうなのかな…。あときは、すっごく恥ずかしかったんだぞ…。

「あの。夕飯は、こちらでって、聞いたんですが…」

「そうだよ。うちはねえ、村全体でお客さんを受け入れるってのが信念なのさ。その割には何も無いけどね」

「いえ。わたしの、故郷も、こういう山村だったので、すっごく落ち着きます」

「へえ。そうなのかい。それじゃあ、ここを第二の故郷だと思って、ゆっくり羽根を伸ばせばいいさ。まあ、あんたたちは翼だけどね」

「はい」

「そういえば、みんな龍だね。こんなに龍が集合するのも珍しいねえ」

「そうなの？」

「ああ。それに、みんな違う色ってのはさらに珍しいね」

「白、黒、赤、蒼なんだぞ」

「ふふ、そつだね」

おばちゃんは頭を優しく撫でてくれた。
囲炉裏の火が、チロチロと揺れていて。

「そつだ。あんたたち、だんと太鼓は食べた？」

「だんと太鼓つて？」

「部屋に置いてあったお菓子でしょ。包装紙に書いてあったよ」

「そつそつ。餡子を焼いたお菓子。いちおう、この村の名物なんだよ」

「へえ〜。美味しかったんだぞ」

「うん。お茶が美味しく飲めたの」

「お茶！ 渋い趣味だねえ」

「桐華お姉ちゃんがね、よく淹れてくれるの」

「桐華お姉ちゃん？ 桐華つていうと、旅団天照の？」

「うん」

「あら大変。今日の朝方に発っちゃったわ。ルイカミナに向かってるみたいだったけど…」

「うん。いいの。今はルウエたちと旅をしてるし、それに、ヤーリエというはお姉ちゃんも待たないといけないの」

「そつ。ならいいの。早馬を出さないといけないかと思ったわ」

「ハヤウマ？」

「普通は緊急伝令用の馬を指すんだけど、急ぎの用がある人のために走らせる馬のこととも言っわねえ。うちの村には自慢の駿馬がいるのよ。間に合わない用事はないわ」

「へえ〜。すごいですね」

「今は、どこに、いるんですか？」

「今は川の方に下りてると思っよ。でも、地元民でないと下りるのはきついかね。谷風も結構強いしねえ」

「じゃあ、戻ってくるのを待って会った方がいいですね」

「そうだね。まあ、夕飯までには帰ってくるよ」

シユンメって、どんな馬なのかな。

ヤウトには馬はいなかったから楽しみなんだぞ。

「そうそう。部屋はどうだった？良かったでしょ？」

「はい。畳も、綺麗だし、きつちり、掃除もしてあって」

「旅の宿って汚いところが多いもんね」

「えっ、そうなの？」

「はい。宿賃が安い代わりに、雇ってる人も少ないんです。だから、掃除も行き届かないってところも多いんですよ」

「へえ」。知らなかったねえ」

「木賃宿にもなると、ほとんどボロ屋ですね。ホントに寝る場所の提供ってくらいで」

「山ん中では分からないことばかりだねえ。木賃宿？初めて聞いたよ」

「旅人さんとはお話しないの？」

「するよ。するけど、ここに泊まってくるのは旅団が多いからね。あんたたちみたいなの、少数で泊まりにくる人は少ないんだよ。温泉はタダだから、通りがけに入っていくってくらいかねえ」

「ふうん」

「旅団は各地に自分の宿を持つてるからね。特に三大旅団ともなると、かなり大きい宿を持つてるって聞くわね」

「うん。すつごく大きいの」

「旅団天照の宿ねえ。一度でいいから見てみたいよ」

「クーア旅団の宿もおつきいんだぞ」

「クーア旅団？ああ、そういえばルウエはクーア旅団の腕輪をしてるわねえ」

「うん。お姉ちゃんに貰ったんだ」

「へえ、お姉ちゃん。誰かしらねえ」

「タルニアお姉ちゃん！」
「タルニア？んー、そんな子いたかしら…？」
「クーア旅団の団長なんだぞ！」
「ああ、謎の団長さん。ルウエは団長さんに会ったことがあるの？」
「うん。優しいお姉ちゃんなんだぞ」
「そう。クーア旅団の団長さんも女の子だったのね。意外だわ」
「そうなんですか？」
「ガツチリしたかんじのおじさまが仕切ってるって噂が有力だったからね」
「わたしは、すごく格好いい、お兄さまだって、聞いてました」
「それは、クノお兄ちゃんなんだぞ」
「クノお兄ちゃん？」
「ああ、クノさんね。あれは格好いいわね。おばさんも、あと十歳若かつたら求婚するんだけどねえ。ホントに惜しいことしたわあ」
「そ、そんなに、格好いいんですか？」
「あ、光。何か期待しちゃってるの？」
「そんなことない！けど…」
「ふふふ。格好いいけどね、あの子はダメよ」
「な、なんで、ですか？」
「あの子には好きな人がいるのよ」
「えっ、誰ですか？」
「さあね。それは分からないよ。でも、あれは確実にいるわ」
「うん。クノお兄ちゃんは、お姉ちゃんのことを好きなんだぞ」
「へえ〜。団長さんが」
「あちゃあ。残念だったね、光。勝ち目はないよ」
「だから、そんなんじゃないって！」

光は顔を真っ赤にさせて、響を睨んでいた。
…でも、クノお兄ちゃんはお姉ちゃんじゃないとダメなんだぞ。きつと。

「響。あんまり急ぐと、喉に、詰めるよ」

「ん」

「よく食べるねえ。たくさん作っておいてよかったよ」

「成長期ですから」

「はは、そうだね」

響はご飯をお味噌汁で流し込むと、箸をクルリと回してお椀を光に渡す。

すると、光はムツとした顔をして響の頭をはたいた。

「いったあゝ…」

「もう！目の前に、あるんだから、自分で、入れなさいよ！」

「むう…。光のケチ」

「ケチで、結構。わたしは、響のお母さんじゃ、ないんだよ」

「じゃあ、なんなの？」

「えっ…それは…」

「響のお姉ちゃんなんだぞ」

「あー、そうだね。お姉ちゃん。ねえ、お姉ちゃん。お代わり」

「自分で、入れなさい」

「妹が可愛くないの？」

「こんな妹なら、いらない」

「ええ…。お姉ちゃんに見捨てられた…」

「ははは。じゃあ、お母さんが入れてあげようかね」

「ありがとうございまゝす」

「もう…。すみません」

「いいのいいの。久しぶりに娘とごはんを食べてるみたいで嬉しい」

「お」

「娘さんが、いるんですか？」

「ああ。今はルイカミナにいますけどね。ほら、ご飯だよ」

「ありがとうございます。で、どんな人なんですか？」

「私に似て美人だねえ」

「へえ。あんまり期待出来ませんね」

「ひ、響！」

「はは、そりゃそうだね。私に似てたらダメだ。でも、美人なのは本当だよ。親の欲目を差し引いてもね」

「名前はなんていうんだ？」

「茜。ルイカミナ自警団の第一部隊隊長なんだよ」

「第一部隊ですか。すごいですね。精鋭中の精鋭しか入れないって聞きますけど」

「そうらしいね。昔から、腕っぷしだけは強かったから」

「いや、腕っぷしだけでは入られないと思いますよ」

「そうかねえ。まあ、あんまり危険な仕事はしてほしくないってのが実際のところだね。結婚もまだなのに…」

「今、何歳なんですか？」

「私は四十二だよ」

「いや、そうじゃなくて…」

「ははは。茜は今年で二十歳。二十にしちゃ、ポワポワしてるけどね」

「ポワポワ…」

「そうね。リユウみたいなかんじね」

「わたしは、ポワポワなんてしてないの」

「おっと、これは失礼したわね」

「むう…」

「ははは」

おばちゃんは、リユウの頭を撫でながら大笑いする。
楽しそうに、寂しそうに。

真っ暗な夜道。

星がキラキラ輝いてて、とても綺麗。

「はあく、お腹いっぱい」

「響は、食べ過ぎ」

「光お姉ちゃんも、いっぱい食べてたの」

「そうそう。他人のこと、言えないよ？」

「そ、そんなこと、ないもん……」

「ふあ……。眠たいんだぞ……」

「そうだね。早く宿に戻るっか」

「うん……」

お腹いっぱいになったら眠たくなってきた……。欠伸が止まらないんだぞ……。

「それにしても、望お姉ちゃんはどうなったのかな。誰も何も報告してくれないし」

「そうだね……。心配だね……」

「こっそりさ、様子を見に行ってみる？」

「ダメだよ！それで、響も、倒れちゃったら、どうするのよ！」

「ぐ、ごめん……」

「大丈夫になったら、また、連絡があると思う。そのときまで、我慢しよう？」

「うん……」

「でも、やっぱり心配なの……」

「それは…そうだけど……」

望……。

早く元気になってほしいんだぞ…。
また、望と一緒に旅をしたい…。
だから…。

フカフカの布団は羽根みたいに軽くて、身体に巻きつけなくても暖かかった。

「でも、毛布もあんまりきっちり巻きつけない方がいいよ。毛布と身体の間にある空気が温度を保ってくれるから。その前に、苦しね」

「ふうん」

「まあ、硬い毛布では、羽毛布団には勝てないけどね」

「そうなの？」

「うん。ていうか、この布団は羽毛だよ」

「羽根が入ってるのか？」

「そうそう。フワフワでしょ？」

「うん」

「ねえ、光。何の羽根を入れるんだっけ？」

「……………」

「光？」

「……………」

「ありやりや。寝ちゃってるね。疲れたのかな。やけに張り切ってたし」

「リュウも寝てるんだぞ」

「なんだ。じゃあ、わたしたちしか起きてないんだね」

「うん」

「そういや、ルウエも眠いって言ってたよね。目、冴えちゃった？」

「うん」

「あるよね。猛烈に眠たかったのに、布団に入ったら目が冴えるん

だよね〜」

「響も眠られないのか？」

「そうね…。ルウエが眠たくなるまで起きててあげるよ」

「じゃあ、早く寝ないと…」

「いいよいいよ。無理に寝ようとしたら、余計に目が覚めるでしょ？」

「うん…。でも…」

「大丈夫だよ。わたしはルウエのお姉ちゃんだからね」

「…うん」

そつと頭を撫でてくれた。

嬉しくて手を伸ばすと、しっかり握ってくれて。

「…ねえ」

「ん？」

「一緒に寝ていい？」

「ふふふ。甘えん坊さんだね。いいよ。こっちに来なよ」

「うん」

布団の中に入ると、響は少し後ろに退がって場所を空けてくれた。

「あつたかい…」

「そうだね」

「響」

「ん？」

「えへへ。なんでもないんだぞ」

「そっか」

「ん〜」

良い匂い…。

姉さまや葛葉と同じ匂いがする…。
お姉ちゃんの匂い…。

「眠れ我が子よ 今日をいだいて
眠れ我が子よ 明日を夢見て
今日が昨日より良い日なら 明日はもっと良い日になる
今日が昨日より悪い日なら 明日はきっと良い日だから
眠れ我が子よ 翼を広げ
光り輝く 明日へ羽ばたこう」

澄んだ歌声は、闇の中でいつまでも響き渡っていた。

「ふぁ…あふう…。眠い…」

「響が、東向きの部屋がいつて、言ったんじゃない」

「そうだけどさぁ…。朝日が見ついいえ…」

「当たり前でしょ」

「はぁ…。北向きにするんだった…」

「ねえ。朝ごはん、食べにいくの」

「そうだね。厨房は、開いてるのかな」

「さぁ…。行ってみたら…ふぁ…分かるんじゃない？」

「うん。まあ、そうだけどね…」

リュウはもう行っちゃったけど…。

自分も行こうかな…。

「あ、ルウエ。先に、行ってて。遅くなりそうだから」

「うん。分かった」

「ごめんね。ほら、響！早く、起きなさい！」

「ん…。あと五時間…」

「何言ってるの！」

響、すつごく寝坊助さんなんだぞ。

なんとか起こそうとしてる光を置いて、自分も厨房に向かう。

部屋から出て廊下を歩いていくと、途中でリュウの背中が見えた。

「あれ？えつと…」

「どうしたの？」

「あ、ルウエ。えつと…迷っちゃったみたいなの…」

「自分は分かるんだぞ。一緒に行こ？」

「うん、ありがとう」

部屋から十尺も離れてないところで迷うリュウと一緒に厨房へ。
それにしても…

「リュウは、道を覚えるのが苦手なのか？」

「んー。こういう、なんか同じような景色のところは覚えにくいかな。右も左も壁じゃない。目印がないと、すぐに迷うの」

「ふうん。自分は、だいたいの時間で覚えてるんだぞ。こっちにこれくらいの時間歩くと、右側に階段があるとか」

言ってる間に、右側に階段が見えたので、そこで曲がって階段を下りる。

「一番下まで下りて、左側にだいたいこれくらいの時間歩いたところの曲がり角で曲がるとか。急いで走ったときは、半分くらいの時間で曲がったりするんだぞ」

「へえ〜。時間かぁ。わたしにも出来るかなあ」

「簡単なんだぞ。一回やってみたらいいよ」

「うん。頑張ってみる」

二階。

次が一階。

「ふう。それにしても、四階はやっぱり登り降りが辛いね」

「うん。でも、リュウは飛べば速いんじゃないの？」

「そんなズルしはやらないの。ルウエと一緒に行く方が楽しいから」

「…ありがとう」

「うん」

二階。
次が一階。

「望お姉ちゃん、大丈夫かな…」

「きつと大丈夫なんだぞ。ヤーリエもすぐに良くなったんだから」

「うん…。そうだよね…」

「うん、そうだよ」

「…あれ？階段つて、こんなに長かったっけ？」

「ん？」

二階…。

そういえば、さっきもその前も二階だった気がする。

「ルウエ、ちょっとここで待ってて」

「うん」

リュウは翼を広げて下へと飛んでいく。

そして、すぐに上から下りてきた。

「……………」

「回廊の術式…。なんでこんなところに…」

「カイロウの術式？」

「うん…。でも、わたしには突破出来る力はないの…」

「どういうこと？」

「回廊の術式は、いくつか集まってひとつの術式なの。突破するには、ひとつふたつの式を無効化して穴を開けるか、回廊の壁を無理矢理壊すくらいしかないんだけど、わたしには式の場所を把握する力も壁を破壊する力もないの…」

「ふうん」

「外から誰かが助けてくれるのを待つしか…」

(どうしたの?)

「あ、悠奈。おはよ」

(おはよ)

「なんかね、カイロウの術式に閉じ込められたんだって」

(ふうん…。回廊の術式ねえ…)

目を細めて周りを見回す悠奈。

何か見えるのかな…。

(へえ)。こんな造りになってるんだ。初めて見たよ)

「術式の位置が分かるの? ねえ、教えて!」

(んー、その手すりにひとつ、四段下りたところにもうひとつ。

あと、ちょうど六段上がった右の壁のところのひとつ。最後に、この真上にひとつ)

「じゃあ、どれかを破れば…」

(うん。でも、何層も重ねてあるみたいだよ。ひとつ破っただけでは脱出出来ないかも)

「え…。そんな…」

(気長に助けを待った方が賢いかもしれないね)

「でも、誰も気付かなかつたら…」

「悪い方に考えちゃダメなんだぞ。きつと、誰かが助けにきてくれる」

「そ、そうだね…」

リュウは青褪めた顔で、ぎこちなく笑っていた。

…カイロウの術式。

なんでこんなところに…。

十個目の術式が破れた。

でも、悠奈は首を横に振る。

「はあ…はあ…。も、もうちょっと待っててね、ルウエ…」

「もういいんだぞ…。リュウが倒れちゃったら、そっちの方が大変だから…」

（そうだよ…。いくら龍でも、全部破るのは大変だよ…）

「朝ごはん…早く食べたいよね…。ごめんね…」

「リュウ…」

フラフラのリュウを抱き止める。

もう立つ気力も残っていないみたいで、一気に崩れ落ちてしまった。

「リュウ…」

「ごめんね…」

リュウはそっと目を瞑ると、そのまま眠りに落ちてしまった。

…ありがとう、なんだぞ。

（さて、どうしようかな…。ボクにはリュウほどの力はないし、七宝も…）

「助けを待つしかないんだぞ」

（うん…。まあ、そうだけど…）

「大丈夫だよ。すぐに誰かが助けにきてくれる…」

「そうそう。信じる者は報われるってね」

声が聞こえた。

次の瞬間、空間が歪んで弾けた。

「英雄は遅れてやってくる、ってね…」

「何、言ってるのよ。響が、いつまでもグズってるから、遅れたん

「じゃない」

「春眠曉を覚えず、だよ」

「曉なんて、とっくに過ぎてるよ。ほら。リュウが、無理しちゃったみたいだよ」

「ありやりや。一步遅かったか」

「だから、そう言ってるじゃない!」

「まあ、わたしが部屋まで運んでおくよ。光は朝ごはんを作ってきて」

「分かってる。ルウエ、一緒に、行こっか」

「うん…」

「大丈夫。お姉さんが責任持って運び込んであげるから」

「うん…」

響はリュウを抱えると、上へと飛んでいった。

それを見送って、光も下へ行く。

そのついでというように、いとも簡単に術式を取り払っていく。

「光」

「ん?」

「…なんでもない」

「そう?」

「……………」

「さて。朝ごはんを作ったら、犯人を、捕まえないとね」

「え? 犯人がいるの?」

「そりゃ、ね。術式なんて、自然に出てくるものでもないし」

「犯人…」

誰なのかな…。

リュウを大変な目に遭わせた…犯人。

「ごめんなさい…」

「リュウが謝ることはないじゃない。回廊の術式から脱出しようと思っただって、早くルウエに朝ごはんを食べさせてあげたいからでしょ？」

「うん…」

「そのこと自体は、間違っただけで、無茶をしたのは、間違ってるね」

「ごめんなさい…」

「まあまあ。終わったことは終わったこと。無事に朝ごはんも食べられたし、リュウも回復したんだからいいじゃない」

「そうだけど…。それでも、今日一日は、絶対安静だよ」

「はい…」

リュウは寂しそうに布団を頭から被った。

それを見て、響が横から潜り込む。

「そんな顔しないの！ほら、笑って！」

「く、くすぐりたい…！あはは、ひ、響お姉ちゃん…！」

「こちよこちよ」

「何、やってるの！」

「あたっ！」

光が布団の上から響の頭を殴る。

そのまま、響は頭から布団に突っ込んだ状態ですばらく動かなくなつて。

「もう…。絶対安静って、言ってる傍から、そんなこと、するでし

「よ」

「いいじゃん。リュウが寂しそうにするからさあ」

「はあ…」

「あはは」

ノソノソと這い出てくる響。

リュウも、布団から顔だけを出して笑っている。

うん。

響の言う通り、笑ってる方が良いんだぞ。

「はあく、光に殴られたらお腹空いちやった。何か食べるものない？」

「さつき、食べたばかりでしょ。ダメだよ」

「むう」。ケチ

「ケチで、結構。もう、響の昼ごはんも、作ってあげない」

「えっ！そんなのダメだよ！美希お姉ちゃんもいないのに、餓死しちゃおうよ！」

「はあ…。少しは、料理も、覚えたらどうなの？」

「あー、ダメダメ。わたしは、食べる方の仕事があるから」

「それで、わたしも、美希お姉ちゃんも、いなくなったら、どうするのよ」

「大丈夫。絶対に光とは離れないから」

「もう…。ちよつとは、自立しなさい」

「ちよつとだけしてるよ。ていうか、稼ぎはわたしの方が多いんだし、持ちつ持たれつだよ」

「わたしは、いざとなったら、お金がなくても、生活出来るから」

「ええ…。そんなこと言わないでよ…」

響は光がいないとダメだけど、光は響がいなくても大丈夫ってことかな。

でも、そんなかんじはしない。
両方とも、相手がいなくちゃダメだって。
そんなかんじがするんだぞ。

「とにかく、今度、美希お姉ちゃんと話して、響にも、多少は自立してもらえるように、いろいろと、教えてもらうから」

「ええ……」

「イヤなら、いいよ。その代わりに、わたしがいなくなっても、知らないから」

「ええ……」

「ふふふ。面白いの」

「うん。確かに」

「わたしは面白くないよ……」

「自分の、ことだからね」

リュウに代わって暗い顔になった響は、本当に面白かった。

…リュウは、すっかりいつもの笑顔に戻っていて。

さすが、響なんだぞ。

「さて。暗い顔もここまで。回廊の術式を仕掛けた犯人を捜しにいかっか」

「そうだね」

「すっかり忘れてたんだぞ」

「うん」

「思い出せてよかったじゃない。じゃあ、作戦会議にしようか」

響はきちんと座り直すと、真剣な顔をして。

光も少し目が鋭くなったような。

…作戦会議といえば、前にもあったんだぞ。

七宝のとき。

「まず、犯人像について。術式を使うことを考えると、犯人は聖獣である可能性が高い。悠奈みたいな、ね」

「七宝もいるんだぞ」

「七宝？んー、またあとで会わせてもらわないとね」

「うん。今は七宝も寝てるんだぞ」

「へえ〜」

「話を戻すよ。回廊の術式は、術式の中でも特殊な部類に入る。設置罠型で、対象が範囲内に入ってくることで発動。術者の力の度合いで、イタズラや足止めくらいの効果から半永久的に対象を閉じ込める牢獄まで、様々に変化する」

「今回は、イタズラ程度だね。リュウは、破り方を知らなかったから、手こずっただけ。本当は、簡単に破れたんだよ」

「えっ、そうなの？」

「うん。また、あとで、教えてあげるね」

「うん！」

「とにかく、相手の力は大きくて強くはない。むしろ、わたしたちの方が強いと思う」

「うん。だから、懲らしめるって意味も込めて、逆に、罠を張ってみようと、思うんだ」

「罠？」

「そう、罠。自分が仕掛けてた回廊の術式に、自分自身が閉じ込められることで、犯人も更正するだろうって魂胆だね」

「でも、カイロウの術式は光が全部破っちゃったんだぞ」

「あー、大丈夫大丈夫。わたしが作れるから。どーんと複雑な回廊を作っただけだよ」

「無限階段くらいで、いいと思うんだけど…」

「光は甘ちゃんだねえ。四つの扉とか面白そうじゃない？」

「四つの扉？」

「四角い部屋のそれぞれの壁に、扉がひとつずつ付いてるんだ。そ

のどれかを開けて進むんだけど、進んだ先も似たような部屋ばかり。そのうち、扉を開ける気力もなくなつて…」

「要するに、趣味の悪い回廊だよ」

「もう…。そんなことを言つたらつまんないじゃない…。いちおう、組むのも解くのも最高難度の回廊なんだから…」

「今は、そんなの、いらないでしょ？簡単な、無限回廊と、破られないように、いくつか、術式を重ねておくだけでいいの」

「へーい。分かりましたよーだ。つまんない」

「つまんなくない！」

「はいはい…」

適当な返事をする、響は手近にあった紙に何かの模様を描き始めた。

なんなのかな…。

これが、回廊の術式なの…？

(うう…)

次は右へ。

(あ、あれ…?)

また戻ってきて左へ。

そして、右から戻ってきた。

(三階は…)

階段を上がっていき、下から戻ってくる。

響は結局、さつき掛かったものほとんど同じ術式を描いて仕掛け
たって言った。

ちよっと違うのは、並大抵では破れないようにボウヘキを付けてお
いたってところみたいだけど、どう違うのかは自分には分からない。

(えっと、えっと…)

キヨロキヨロと見回して、術式のある場所を探してるみたい。

(うーん…。見えない…)

また下へ行つて、上から帰ってくる。

右へ行つて、左から帰ってくる。

その間に必死に探してみたんだけど、見つからないまま。

そして、廊下の隅の方へたりこんで。

(うう……。怖いよ…お腹空いたよ…)

泣き出したところで、光が合図を出す。
それを受けて、響が術式を破った。

「ね。自分がやったことが、どんなことが、これで、分かったでしょ？」

(え…？あ…)

「他人にやつてる間は気付かなかったかもしれないけど、自分がやられてどうだった？イヤじゃなかった？」

(イヤ…)

「じゃあ、もうやらないって、約束してくれる？」

(うん…)

「よかった。じゃあ、この子に言うことがあるでしょ？」

響に押されて、黒い龍の前に立つ。

黒い龍は、おどおどした様子でこっちを見ていて。

「誰か、分かるよね？」

(さっき回廊に掛かった人…)

「そうだね。それで？」

(ごめんなさい…)

「だってさ、ルウエ。どうする？」

「もういいんだぞ。怒ってないよ」

(よかった…)

「よかった、じゃないでしょ。本当は、もっときつく、お仕置きしないよ、いけないんだからね。今日は、特別」

(はあい…)

光に叱られて、ガツクリとうなだれる。
…そういえば、千早も黒い籠だった。
この子の名前はなんて言うんだろ…。

「さあて、部屋に戻るつか。まだ謝る相手もいるしね」

（ええ…）

「文句、あるの？あなたが、蒔いた、種でしょ」

（うう…）

「リュウ、寂しがってないかな」

「大丈夫でしょ。絶対捕まえてくるって約束したし」

「それは、関係あるのかな…」

「たぶんね」

一人で寂しがってなければいいけど…。

歩き出した光についていって、部屋に戻る。

誰かが宿に来たみたい。

下が少し賑やかになった。

「ありゃ。喧嘩してるみたいだね」

「ホントだ」

「誰かな」

「分からないけど、たぶん知らない人だと思っの」

「そうだね」

（それより離して…！）

「ダメだよ。今日一日、わたしのおもちやになるって約束したじゃない」

（してない…！）

「あ、聞こえなくなった」

「宿に入つたみたい」

「喧嘩したまま来るのかなあ」

「さあ。でも、一緒に、ごはんを食べる人が増えて、良かったじゃない」

「喧嘩してなければ歓迎するけどね」

「大丈夫なの。たぶん」

（響のバカ！離して〜！）

「はあ…。誰なのかなあ…」

喧嘩は良くないけど、ごはんをたくさんの人と食べられるのは嬉しいんだぞ。

望もお兄ちゃんも、どうなってるか分からないし…。早く良くなつてほしいんだぞ…。

「ところでさあ、チビは契約はしてないんでしょ？」

（チビじゃないもん！）

「何言ってるのよ。クルクスはかなり大きくなるって聞いたことあるよ。それを考えれば、かなりチビだと思うよ」

（チビじゃないもん…）

「それで？契約はまだなんでしょ？早く良い人を見つけてなさいよね」

「響。その言い方は、少し、意味が違つてくると思うよ」

「そうかな」

「生涯の、伴侶を、求めるような、言い方じゃない」

「ああ、そつちか」

「シヨウガイノハンリヨつて何？」

「良い人だよ」

「響。それじゃあ、全く、意味が分からないよ」

「んー？」

「ルウエなら、大好きで大切な夫を見つけてることなの」

「祐輔？」

「えっと…それが誰かは分からないけど、たぶんそうなの。ルウエがそう思うなら」

「ふうん…」

シヨウガイノハンリヨ…。

大好きで、大切な夫…。

姉さまならセトなのかな。

「だから、そんなのを買う余裕なんてないって言ってるでしょ！」

「俺が稼いだ金なのに、毎月五百円しか小遣いがねえってどういふことなんだよ！買いたいものも買えないから、買ってってくれって頼んでるんじゃないか！」

「新しい背負い袋なんていらさないじゃない！今ので充分でしょ！」

「今では小さいんだよ！このパンパン具合が見えねえのか！さらに言うと、少なくとも半分はお前の荷物だ！」

そして、扉が勢いよく開いた。

「あ、あれ？」

「間違えたか…」

「す、すみませんでした！」

喧嘩をしていた二人は慌てて戸を閉めようとしたけど、響が素早く止める。

二人は一瞬キョトンとして。

「まあまあ。これも何かの縁。お二方も、ここで雑魚寝しようよ」

「え、あ、でも…」

「ほら、上がって上がって」

「え、ええ…？」

響に無理矢理押し込められた二人は、もう何がなんだか分からないといった様子で。

光が出てきた座布団に、正座をしていた。

「あ、あの……」

「ちょっと待つてね。今、お茶を入れてるから」

「に、兄ちゃん……」

「……………」

カチコチに固まった二人。

どうしたのかな。

響の歓迎が強引だったのがダメだったのかな。

「お腹空かない？」

「あ、いえ……」

「いつまで固くなってるのよ。ほら、ゆったりして」

「響が、ゆったりしすぎなの。翔、弥生ちゃん、ごめんね」

「いや……俺は良いけど……」

「……………」

「弥生」

「あ、ああ……。えっと、そうですね……」

「弥生は緊張しすぎだね」

響は弥生の頬をつまんで、グニグニと動かしてみる。

でも、弥生は余計に固まるばかりで。

「響。そんなことしちゃ、可哀想でしょ」

「だって、全然笑ってくんないんだもん」

「響のことが、怖いんだよ」

「ええ……。そんなことないよね？」

「え、あ……。はい……」

「そんな質問をして、思ってることを、答えられるわけが、ないじゃない」

「そうなの？」

「……………」

「ありやりや」

「響……だっけ。部屋に戻ってもいいか？荷物も置きたいし」

「ん？ここで泊まるんじゃないの？」

「こんな、五月蠅い人がいたら、寝られないでしょ」

「だってさ、リュウ」

「わたしは一言も喋ってないの」

「そうだったけ？」

「喋ってるのは、響だけだよ」

「光だって喋ってるじゃない」

「わたしは、響が、バカなことばかり言うから、後処理をしてあげてるんですよ」

「喋ってるのには変わりないじゃない」

「減らず口ばかり、叩かないの！」

「ほいほい。分かりましたよ」

ヒラヒラと手を振ると、翔お兄ちゃんと弥生に背を向けるように、横向きに寝転がって。

そして、翼を少しパタパタさせる。

「じゃあ、翔、弥生ちゃん。部屋は、どこ？」

「四〇三だ」

「えっと、ここが、四〇五だから…隣だね」

「なんで隣なんだ？隣は四〇四じゃないのか？」

「そうだな。じゃあ、チビも一緒に来るか？」

「自分は、チビって名前じゃないんだぞ。ルウエって名前！」

「ああ、ごめんな。じゃあ、ルウエ、弥生。行こうか」

「行ってらっしゃい」

「すぐに、お昼ごはんだから、荷物を置いたら、すぐに、帰ってきてね」

「分かった」

翔お兄ちゃんは荷物を持つと、弥生の背中を叩く。

すると、かなりびっくりしたみたいで、尻尾をピンと立てていた。

弥生はあたふたと荷物を取ると、一度お辞儀をして一目散に部屋を出ていった。

「…ごめんな。いつもはもっと愛想良いんだけど。人見知りが激しくて」

「大丈夫大丈夫。気にしてないって」

「そっだね」

「ちょっとずつ、仲良くなっていけばいいの」

「ああ。よろしく頼むよ」

そして、翔お兄ちゃんも部屋を出る。

自分もついていって。

「よし。ほら、見てみる。ここが四〇五。で、隣が四〇三」

「ホントだ…」

「四つていうのは、不吉なものを連想させるから、こういう旅館とかでは避けられるんだ。まあ、階数を誤魔化すわけにはいかねえから、四階は四階だけだな」

「ふうん」

「よし。じゃあ、先に戻ってきてくれ。すぐに行くから」

「うん」

翔お兄ちゃんに言われたまま、部屋に戻る。

部屋では響と光が話している。

「翔つて、格好いいよね…」

「光は、ああいうのが好みなの？」

「えっ、あ、そういうんじゃないかって…」

「ああ、歳上が好きなの？」

「違うよ!」

「まあ、良いんじゃない? 犬は何に対しても誠実だって聞くしね」

「何の話なんだ?」

「光の恋の話。一目惚れササニシキなんて、翔もニクい男だねえ」
「だから、違うつて！」

光は顔を真っ赤にさせて。
それを見て、響はニヤニヤしている。

「わたしも、翔お兄ちゃんは格好いいと思うの」

「そ、そうだよね！」

「あちゃあ。恋敵が増えちゃったか」

「だから、違うつて！」

「そんなに顔を赤くさせながら言っても説得力がないよ」

「赤くない！」

必死に否定するけど、やっぱり赤いんだぞ。

翔お兄ちゃんのことを、ホントに好きなのかな。

「あ、そっぴやあの子がいないね。名前、なんて言っただけ」

「まだ聞いてなかったと思うの」

「あれ？そうだったけ」

「あの子ってのは、こいつのことか」

(うつ…。離せ〜！)

翔お兄ちゃんが、さっきの籠を連れて部屋に戻ってきた。
翼を握られてるから、その子も身動きが取れないみたい。

「弥生も早く入れよ」

「うん」

「そ、それじゃあ、わたし、お昼ごはんの用意を、してくるね」

「行ってらっしゃい」

「そうか。ここは自給形式なのか。厨房はどこなんだ？一緒に行く」

「よ」

「え、あ……」

「あそこのちっちゃい建物だよ。お二人でごゆっくり」

「どうせ、料理は、ここまで運べないんだから、みんなで一緒に行こうよ……」

「そうだな。その方が効率も良いし」

「でも、リュウは動けないんだぞ」

「なるほど……。そうか……」

「わたしは大丈夫なの。みんなで先に食べてきて」

「そうはいくかよ。ほら」

「わわっ!?!」

翔お兄ちゃんは掛け布団でリュウをくるむと、一気に担ぎ上げて。
……すごい力持ちなんだぞ。

「さあ、行こうか」

「か、翔お兄ちゃん……」

「よし、出発〜!」

「……………」

（わたしも〜）

「お昼ごはんなんだぞ!」

そして、みんなで部屋を出て厨房へ。

光は弥生と一緒に俯きながら一番最後について。

「ほら、二人とも。もっと前に来なよ!」

「……………」

「んー。ダメだなあ」

「光は、地があんなかんじなのか?」

「いや、さっきの明るいかんじが地だよ。でも、今は翔のことを意

識してるみたいだから」

「ふうん…って、俺？」

「そうそう」

「響お姉ちゃん…。そういう秘密はあまり喋らない方が良いと思うの…」

「ふうん」

「…光も大変なんだな、いろいろと」

「で、どうなのよ。翔は」

「んー。まだ分からないってのが一番合ってるかな。でも、響よりは良いってのは確かだ」

「そりゃねー…って、どういう意味よ！」

「はは、冗談だよ」

空いてる方の手で、響の頭を軽く叩く。

響も、わざとらしく頬を膨らませて。

…なんだか、光よりもずっと仲が良さそうなんだぞ。

リュウも、同じ意見みたい。

そして、光と弥生は相変わらず後ろの方を歩いていて。

「響は術式が使えるのか」

「まあ、龍だし。適性は高いと思うよ」

「そうか」

「本当は光の方が上手いんだけどね。でも、回廊の術式みたいな、ちまちましたのは苦手なんだよ。もっと、ガツーンと元素式をぶっ放すみたいなのが得意」

「何か、呼んだ？」

「いんや。皿洗い頑張ってる」

「もう…。響も、手伝ってくれたら、いいのに…」

「俺が手伝うよ」

「えっ、あ、ありがとう…」

翔お兄ちゃんは席を立て、流しのところまで歩いていく。光の隣に立つとニッコリと笑って。

「それじゃ、皿洗いはあの二人に任せますか」

「響お姉ちゃんが行かないの？」

「行かない」

「もう、響！」

「わたしはリュウの相手をしてるから、安心して皿洗いに専念しなよ」

「何、言ってるの!」

「まあまあ。抑えて抑えて」

「響！」

「ははは。大変だな、光は」

「ホント、そうだよ…」

「まあとにかく、早く終わらせよう。次の皿洗いは響に任せたらいいよ」

「いじゃないか」

「あー、ダメダメ。わたしが皿を洗ったら、汚いって怒られるし」

「ちゃんと、洗わないからでしょ」

「洗ってるよ。それなりに」

「ちゃんと、洗いなさい！」

「気が向いたらね」

「……………」

「あはは。怒んないの。そんな顔してたら、翔に嫌われるよ」

「ひ、響！」

光はまた赤い顔をして。

それを見て、翔お兄ちゃんはイタズラっぽく笑っていた。

「さて、早く済ませようか」

「う、うん……」

二人は、またお皿洗いに取り掛かる。

それを確認すると、響はこっちを向いて。

「弥生。翔ってさ、いつもあんなかんじ？」

「うん」

「ふうん」

「それがどうしたの？」

「どうもしないけどさ。光のお婿さんになるかもしれないんだから、変なのだと困るでしょ」

「兄ちゃんは、充分変だと思っよ」

「そうなの？」

「うん。暇があれば、一日中自動三輪を触ってるし、何かにつけて部品を欲しがるし……」

「あー、男の人ってそうだよね。でも、わたしは分からないでも

ないかな。自動三輪をいじってるっていうのは、要するに興味に没頭してるってことでしょ？一所懸命になれることがあるっていうのは、良いことだと思うよ」

「そうかな……」

「そうだよ」

弥生は、それでも納得出来ないというふうなかんじで。

一所懸命になれること……。

自分は…何だろう…。

「あ、そうだ」

「ん？」

「自動三輪って何なんだ？」

「そっか。ルウエは知らないんだ」

「わたしも知らないの」

「あれ？そんなに普及してないのかな……」

「兄ちゃんが、北では結構見られるけど、この辺はあんまりないんだって言ってたよ」

「ふうん。北だけかあ」

「響お姉ちゃんも、北から来たの？」

「うーん…。北からと言えば北からだし、違うと言えば違うんだよね」

「……？」

「北にいた記憶はあるんだ。でも、記憶だけ」

「そんなことってあるのか？」

「んー。どうかな。赤ちゃんのときにいたのかもね。わたし、生まれてすぐくらいに孤児になったみたいだから、どこで生まれたとか誰が親だとか、そういうことは分からないんだ」

「そっか」

自分も分らない。
響と同じなんだぞ。

「光も孤児なんだけどね。美希お姉ちゃんに会うまでは、一緒の孤児院にいたんだ」

「私と兄ちゃんも孤児だよ。古いお寺でお世話になってたんだけど、兄ちゃんがどこかで自動三輪を拾ってきてから、旅に出たんだ」

「へえ〜。もしかして、ルウエとリュウも孤児だったりするの？」

「うん」「そうだよ」

「なあんだ。それじゃ、ここにいるみんなが孤児なんだね」

「うん」

「なんか不思議だね。みんな同じ過去を持ってて、今はこうやって旅をしている。それで今日、ここに集まっている」

「不思議なのか？」

「ルウエは、不思議だと思わない？」

「…思うんだぞ」

「でしょ〜」

響は頭を撫でてくれて。

…不思議。

もしも望が体調を崩してなければ、もしもベラニクに来なければ、もしもヤマトでリュウに会わなければ…。

もしもあの日、ヤウトから旅立たなかったら。

今、こんな風に頭を撫でてもらってなかった。

みんなに会ってなかった。

不思議。

全部がこうなるように決まっていたみたいに。
約束してみたいに。

でも、決まっていはいない。

自分が決めた道。

歩いてきた道。

ううん。

道は自分が歩いたあとに出来るんだ。

「みんなが助けしてくれるもんね。前が見えなくても怖くない」

「うん」

「……………？何の話？」

「秘密。二人の内緒だもんね」

「うん」

「ええ…。気になるなあ…」

「皿洗い、終わったよ」

「うむ。ご苦労であった」

「もう…。なんで、響が、えらそうに、してるのよ…」

「まあまあ。ほら、お茶菓子でも食べてゆっくりしなよ。お茶はわたしが淹れるからさ」

「うん、ありがと。でも、皿洗いは、代わってあげないからね」

「ええ…。そんなのってないよ…」

「ほら。早く、お茶。喉、渴いちゃった」

「人使いがあらいなあ…」

「もともと、響が、言ったことですよ。責任持って、淹れてよね」

「はあい…」

響はガツクリとうなだれて、流しの方へ向かう。

…何かを言うときには、ちゃんといろいろ考えてから言わないといけないんだぞ。

自分も、注意しないと…。

「結局、こつちに来るんだね」

「悪いか？」

「悪くはないよ」

「四階はもともと大人数用の部屋が用意されてるみたいだから」

「そうなの？」

「ああ。隣の部屋もかなり広がったから。広い部屋に二人だけつても寂しいだろ」

「ふうん。そういうものかな」

「そういうものだ」

荷物を部屋の隅に置いて、翔お兄ちゃんは窓際に、弥生はリュウの布団の隣に座る。

みんなで一緒の部屋に泊まる方が良いつて、弥生が言い始めたからなんだけど。

「兄ちゃん、一番歳上だし、私たちをしっかりと守つてよね」

「こんな平和な村で、お前たちを守らないといけないような状況になるとも思えないけどな」

「そんなの分からないでしょ。巨人の兵隊が来たらどうするのよ」

「巨人の兵隊は、いくら兄ちゃんでも無理だなあ……」

「巨人の兵隊つて？」

「ああ。昔話だよ。見上げるほどの大きな人が攻めてくるって話なんだけど」

「ふうん」

巨人の兵隊……。

そんなのが攻めてきたらどうしよう……。……。

翔お兄ちゃんでも無理だつて言ってるし…。

「心配無用！わたしが術式で吹き飛ばしてあげるから！」

「え？ホント？」

「ホントホント。お姉さんたちに任せなさい」

「わ、わたしも、入ってるの？」

「当たり前じゃない。光の方が得意でしょ？大規模に吹き飛ばすのは」

「そ、そんなこと、ないよ…」

「またまた〜。謙遜しちゃって〜」

「ひ、響！」

「いったあ！」

光は響の肩を思いつきり張る。

でも、響が大袈裟に痛がるから、また頭を叩いて。

「なんで頭まで叩くのよ…」

「自分で、分かるでしょ」

「これで結婚出来なくなったら、光のせいだからね！」

「どうぞ、ご勝手に。でも、責任は、取らないからね」

「うう…。光のバカ…」

「ふん」

「あ、そつだ。お風呂に行こうよ」

「響の話は急過ぎるな…」

「そんなの、いつもだから、気にしちゃ、ダメだよ」

「そうか…」

「ほら、早く準備して。もう行くよ」

「え、あ、待ってよ！」

響は荷物に手をつ突っ込んで下着だけを取り出すと、出入口まで走っ

ていく。
そして、早く早くと急かして。

「みんな、洗濯物があるなら、出して。洗わないと、いけないから」
「うん」

「リュウ、大丈夫？ダルいところとか、ない？」

「大丈夫なの」

「じゃあ、もう動いていいかな。一緒に、お風呂、行く」

「うん！」

「弥生、翔。洗濯物は、ない？」

「あるよ」

「俺はいいかな…。自分で洗うし…」

「一緒に、洗った方が、効率がいいじゃない」

「いや…」

「積極的だねえ、光」

「え？何が？」

「気になる男の人の洗濯物を求めるなんて」

一瞬、何のことかと思った光だったが、だんだん顔が赤くなつて
いつて。

「えっ、あっ、か、翔っ。そ、そういうことじゃ、ないの！せ、洗
濯物が、洗濯しないと！」

「落ち着け、光。分かってるから」

「あっ、うん…」

「自分の洗濯物は自分で洗うから、弥生のを頼むよ」

「うん…」

すっかり落ち込んでしまった光。

大丈夫かな…。

響も出入口の方から戻ってきて、そつと光の肩に手を乗せていた。

やっぱりお風呂には誰もいなくて、貸し切り状態。

昨日も入ったけど、こんな広いお風呂だと…

「ルウエ、走っちゃ、ダメだよ！危ないから！」

「わあっ！」

「危ない！」

足が滑って、前へつんのめる。

でも、次の瞬間には光がしっかりと受け止めてくれていて。

「だから、言っただでしょ！」

「ごめんなさい…」

「もう…。怪我はない？」

「うん…」

「そう。良かった」

「さすがだねえ。あの距離を一瞬で、だもんね」

「光お姉ちゃん、すつごく速かったの！」

「うん、速かった！」

「そ、そんなことないよ…」

「名前負けはしてないよね。白龍つてのもあるかもしれないけどさ」

「名前負け…。響は、五月蠅いくらいに、よく響く声だよね」

「誉め言葉と受け取っておきましょうか」

「誉めて、ないよ」

「そついうことは、思っても言わないのが優しさってものでしょ」

「あんまり誉めると、響は付け上がるから」

「つくしー！」

「ああ、そうだね。早く入る」

「うん…」

「うう…寒い…」

早く温泉に浸かりたいんだぞ…。

今度は転ばないように。

岩で囲っただけの広い湯船まで、慎重に急いで歩いていく。

「一番」

「あちゃあ、負けたか」

「やあっ！」

「ルウエ！飛び込まない！」

「うわっ、なんだ!？」

飛び込んだ先、水しぶきが湯気の間ここの影に掛かる。

…誰？

「ん？ルウエか？」

「うん」

「つてことは…」

「あーっ！スケベの翔が女湯にいるよ！」

「翔お兄ちゃん」

「スケベ？」

「えっ…？」

「バカ言つてんじゃねえよ！混浴なんだろ！」

「あー、そんなことも書いてあった気がする」

「気がするじゃねえだろ…。ていうか、響。お前のその手拭いは何のためにあるんだ」

「ん？こつやつて頭に乗せるため」

「もつと使い道があるだろ！」

「どんな？」

「…お前には、もう少し恥じらいというものが必要だな」

「恥じらい？ああ、翔は女の子の裸は嫌い？」

「そうじゃねえよ。でも、お前も良い年してるんだから、もう少しお淑やかにだな」

「はいはい。そんなの気にするだけ無駄だから。ていうか、そういうのは光の役目だし」

「はあ…。まったく…」

「ほら、光も早く来なよ。そんなところにいたら風邪引くよ」

「う、うん…」

光は大きな岩の後ろに隠れて、なかなか出てこない。どうしたのかな…。

「もう！早く来なつて！」

「やあん…」

待ちきれずに響が引つ張ってくる。

光は必死に抵抗するけど、結局ズルズルと引き摺られて。

「恥ずかしかつても仕方ないでしょ。お風呂に入らない気なの？」

「入るけど…」

「言っとくけどね、そこに突っ立ってる方が余計に見られるよ」

「……！」

「いや、見てどうということもないけど…」

「ええ〜。ほら、見てよ。この肌。透き通るみたいに白いでしょ」

「やあ…。なんで、わたしのよ…」

「わたしを見せても仕方ないでしょ。好感度を上げる良い機会なんだから」

「俺の目の前で言ったら、全く無意味だけどな…」

「そんなことないって。光の肌を見たら、絶対に好きになるって」

「やめてえ…」
「おいおい…」

嫌がる光を翔お兄ちゃんの前まで無理矢理引っ張っていった。

光は顔を真っ赤にさせて泣いてるし、翔お兄ちゃんは慰めるように光の頭を撫でてるし。

そしてそれを、自分はリュウと弥生と一緒に少し離れたところで見
ていた。

…それにしても、響ってすごく強引なんだぞ。
なんだか満足そうに頷いてるけど…。

昨日と同じ家でごはんを食べる。
今日のおかずはカボチャの煮物。

「この南瓜はね、村で採れたんだよ。美味しいでしょ」
「うん！」

「まあ、野菜はいくらでもあるんだけどね。山村では肉はなかなか手に入らないから。翔にはちよつと物足りないかもしれないね」

「いえ。満足です。南瓜は好きですし」

「そう？それなら良かった。それより、あの子の具合はどうなの？源次さんも掛かりきりみたいだし…。ごはんも食べに来られないみたいだから、すごく心配…」

「まだ、何も、分からないんです。大和も、向こうに、行ったきりだし…」

「大和？あのお兄ちゃん？」

「ああ。えつと、銀狼です。聖獣だから、言葉も、通じるし…」

「へえ。それで、セイジユウって何？」

「言葉を話す獣ですよ」

（違つよ！）

「わっ、びっくりした。…このちっちゃいのが聖獣かい？」

（ちっちゃくない！）

「この子は、クルクスって聖獣で、土に、属してるんです」

「土？なんだか術式みたいだね」

「術式は、もともと、聖獣が使ってたのを、龍が模倣して、広まったって、言われてます」

「へえ」

「ところで、なんでお前がここにいるんだ？」

（良いじゃない。どこにいたって）

「そつだ。術式といえは、宿に泊まりに来たお客さんが回廊に迷い込む事件が何度かあったけど、あれ、あんたのせいなんだろ」

（え、ええ……。何のことかなあ……）

「まあ、幸い真彦^{まこと}が得意だからね。行方不明続出なんてことにはなつてないけど」

（真彦かあ……。せつかく作つたのに、次々に破つて回つて……）

「白状したね」

（え？あ……）

「まったく……。イタズラもたいがいにしておきなさいよ」

（ええ……。楽しいのに……）

「何か言つた？」

（……いえ）

「なら、よろしい」

（うう……）

黒い龍の子は、ため息をついて。

でも、やっぱりイタズラはダメなんだぞ。

自分も、姉さまによく叱られたし……。

「そついえば、あなたの名前、まだ聞いてなかったの」

（え？わたしの名前？）

「うん」

（んー。まだ契約してないし、名前は貰つてないよ）

「また知らない言葉が出てきたねえ。契約つて何なの？」

（聖獣と契約者が一緒になるってことだよ）

「んー、よく分からないねえ」

「聖獣が、契約者の身体に、住み着くんです。契約者は、住む場所を渡す代わりに、聖獣の力を、貸してもらえるんです」

「はあ……。賃貸みたいなかんじ？」

「そうですね。家賃が力なんです」

「ふうん…。で、この子は家を借りてないってことなんだね」

（契約しない方が、自由でいいんだもん）

「力は弱くなるけどね」

「力が弱くなるって？」

「聖獣は、契約することで、本来の力を発揮出来るようになるんです。聖獣と契約者の信頼関係が、聖獣の力に関わってきて…」

「なるほどねえ。よく知ってるんだね」

「光は、真正銘北の出身ですから」

「へえ、北の。こりやまたいろんなことを聞きたくなってきたねえ」

「あ、いえ…。こつちでの生活の方が長いので、ご期待に沿えるかどうか…」

「あはは、そんな心配しなくていいよ。私の知らない世界を、少しでも知られるだけで儲けものなんだから」

「前向きなんですね」

「後ろ向きに歩いてたら、いつか転んでしまっただろ？それなら、どんな結果になろうとも前向きで歩いていく方が良いと思わない？」

「なるほど…。亀の甲より年の功ってことですね」

「響。それ、誉めてるつもり？」

「いちおう」

「ははは。若いって良いねえ」

そう言いながら、響の背中をバシバシ叩く。

それが強すぎたのか、思いつきり咳き込んでいる。

「まだ当分ここに泊まってるんだろ？話、聞かせてね」

「はい。喜んで」

ごはんも残り少なくなってきた。

一番小さな力ボチャを取って、口の中に入れた。

外は真つ暗。

明かりをさつき消したから、部屋の中も真つ暗だった。黒い龍の子は翔お兄ちゃんの布団に潜り込んで、ぐっすりと眠っている。

「ふぁ…」

「早く寝なよ。明日、起きられなくなるよ」

「うん…」

「起きてるのは、またわたしたちだけかな」

「いや、俺も起きてる」

「翔かぁ。寝ずの番でもしてくれるの？」

「やらねえよ。何かあっても、すぐに起きるし」

「そつかぁ。そつちかぁ」

「そつちで悪かったな」

「まあいいけど。ところで、今日一日どうだった？」

「楽しかったよ。弥生も早くに打ち解けてくれたみたいだし」

「ごはんの力は偉大だよ。って、そういうことじゃなくて。光だよ、光」

「お前は本当に光のことが気になるんだな」

「そりゃそうだよ。生涯の相棒なんだから」

「相棒ねえ」

「うん。それで？ちよつとは好きになった？」

「そうだな…。良い子だと思ったよ」

「それだけ？」

「俺には勿体ないくらいだとも思った。もっと良いやつを見つけた方が、光にとっても幸せだと感じたな」

「それはどうかな。まあ確かに、初恋だし、いろいろ補正が掛かっているかもしれないけどさ。でも、この歳まで誰も本気で好きにならなかったんだから。それに、幸せかどうかは本人が決めることであ

って、翔もわたしも、その手助けしか出来ないんだよ」

「そりゃそうだろうけどさ。妹を引っ張り回して流浪の旅をしてる俺みたいな輩よりかは、どこかにしっかりと根を張ってるやつの方が、将来的にも安泰だろ」

「はつきりしなよ。光が嫌いならさ、わたしから言っておいてあげるから。好きなら好き、嫌いなら嫌いって。どちらにしろ、返事はしないといけないんだから」

「そうだな。でも、こういうことは直接言わないとダメだから。俺から光に言っよ」

「えっ、じゃあ…」

「好きだよ、俺は。光のこと。まだ一日だけの付き合いだけど、それでも好きになれる何かを光は持つてるみたいだ」

「なあんだ。びっくりするじゃない…」

「なあんだはないだろ？ちょっとびっくりさせようと思っただけだ」

「ホント、心臓に悪いよ…」

「まあ、たまにはいいじゃないか。びっくりするのめさ」

「はあ…。でもまあ、光は良い子だよ。わたしが言うんだから間違いない」

「そうか」

「それに、翔も良い人だと思うよ。光が好きになるくらいだから」

「ふふ、ありがとな」

「うん。だから、光を大切にしておいてね」

「なんだよ。そんな今生の別れみたいな言い方は」

「あれ？そう聞こえた？」

「聞こえた」

「そう。まあ、わたしは光から離れる気はないからね」

「…そうか」

「うん」

それきり、二人は何も言わなかった。

暗闇に慣れてきた目は、嬉しそうに笑っている響を見ていた。

「んー…」

「ルウエ、朝ごはんだよ」

「ん…」

「ダメだ。まだ寝てるよ」

「んー…。起きてるよ…」

「それは起きてるって言わないんだよ」

響にほつぺたを引っ張られる。

顔を振ってみるけど、全然離してくれなくて。
んー…。

「こら、響。嫌がつてるじゃない」

「起こしてあげてるんだよ」

「もう…。自分が、楽しんでるだけでしょ」

「そんなことないよね、ルウエ」

「んー…」

「ほら、早く起きないと、またいじめられるよ」

「いじめてないよ」

「いじめてるようにしか、見えない」

光は響の頭をはたいて。

うーん…。

まだ眠たいけど、起きなきゃ…。

「ふあ…」

「眠たい？」

「うん…」

「朝ごはんを、食べたなら、また寝たらいいよ」

「うん…」

「どうせやることもないしね」

「そんなこと、ないでしょ」

「じゃあ、何があるのよ」

「鳥の観察とか、昆虫採集とか」

「光じゃないんだから、そんなことしないよ」

「むう…。どういう、意味よ」

「そのままの意味だよ。とにかく、わたしは昆虫採集なんてやらないよ」

「ええ…」

「ほらほら、早く行こ。朝ごはんを食べないと、昆虫採集にも行けないよ」

「うう…。なんで、響が、それを言うのよ…」

「まあまあ。早く行こ」

そういえば、リュウたちはどこに行ったのかな…。

先に行ってるのかな…。

一階の長い廊下を歩いていたけど、眠気が抑えられなくて。

フラフラしていると、いつの間にか響と光はいなくなっていた。

「うーん…」

先に行っちゃったのかな…。

まあいいや…。

廊下の隅に座って、ウトウトしてしまふ。

「ん…」

「どうしたの？」

「眠たい……」

「ここで寝ちゃダメだよ。部屋に戻る？」

「でも、朝ごはん食べないと……」

「そっか。じゃあ、厨房に行こ？」

「うん……」

手を引かれて、厨房に向かう。

フラフラしていると、ちゃんと支えてくれて。

「昨日、遅かったの？」

「んー……。響と翔の話聞いてたら、眠れなくなっちゃって……」

「どんな話だったの？」

「えっと……。翔が光のことが好きかどうかとか……」

「へえ、恋愛の話かぁ」

「うん……」

「それで、どうだった？」

「んー……。忘れちゃった……。眠たかったから……」

「そっかぁ、残念だなぁ」

そう言って少し俯いて。

そして、顔を上げてニッコリ笑い、頭を撫でてくれた。

「あ、そうだ。ルウエは、こういう場所によく閉じ込められたりするの？」

「……？」

「ああ、そっか。分かってないんだね」

「何が……？」

「ううん。なんでもないよ。それより、お腹空いてる？」

「あんまり空いてないけど、なんで……？」

「朝ごはんの前に、ちょっと散歩してみない？」
「うん…」

そしてそのまま、玄関から横に逸れて外へ。
空は蒼くて、雲がいくつか浮かんでいた。
穏やかな村の様子は、これから先もずっと変わらないような、そんなかんじがする。

「今日は良い天気だね」

「うん」

「川の方に行ってみよう」

「うん」

宿の右手にある坂道を下ると、すぐに川へ出る。

水面に太陽の光が反射して、とても綺麗…。

「……………」

「気付いた？」

「水が…流れてないんだぞ…」

「うん。この世界には時間がないんだ。見えている世界を映しているだけだから」

「どういう意味…？」

「望に貰った鏡、持ってる？」

「うん…」

「じゃあ、出してみて」

言われた通りに懐から出して。

鏡の中を見ると、自分の顔が映っていた。

「何も変わらないんだぞ」

「川に向けてみて」
「こっ…?」

鏡を川の方に向けると、川が動き出した。
…一部分だけ。

「生きてる時間を与えられることで、この世界は動き出す。生きてる時間っていうのは、つまりは鏡の向こう側の時間のこと」
「じゃあ、こっ…って…鏡の中の世界なのか…?」
「そうだよ」

イタズラっぽく笑うと、時間のない川へ入っていく。
そして、手招きをして。

「こっち来なよ。気持ちいいよ」
「でも…」
「あ、そうだよね。遊んでる時間はないよね。じゃあ、帰る?」
「う、うん…。ごめんなさい…」
「あはは、謝ることなんてないよ。わたしだって、ルウエを助けるために来たんだから」

「……?」
「どういうことが気になる?」
「うん…」
「んー、じゃあ、また次に会ったときに教えてあげる」
「ええ…」
「大丈夫。ルウエは迷い込みやすい体質みたいだから。きっと、またすぐに会えるよ」
「え?どういうこと?」
「それも、また次のお楽しみだよ」

ニツコリと笑って、おでこをつつく。
おでこを押さえていると、頭を撫でてくれた。

「じゃあね」

「うん。またね」

流れない川は、変わらずキラキラと光っていて。
世界が揺らいで、そのまま消えてしまった。

目が覚めると、布団の中だった。
横で響が寝ていたけど。

「お帰りなさい」

「うん。ただいま」

「え？どうしたの？」

「あつ、ルウエが起きた」

「響は寝たままだけどな」

「響は、お腹いっぱいになったから、寝てるだけだよ」

「子供みたいだな」

「うん。それより、ルウエ。朝ごはん、持ってきてあるんだけど、
食べる？」

「うん！」

不思議な鏡の世界。

また会えるって言ってたけど、どういうことなのかな。
また、あんな風な世界に行くってことかな。

…でも、なんだか次が楽しみになってきたんだぞ。
次は、いろいろと教えてもらえるから！

「鏡の世界？にわかには信じがたいな」

「ホントなんだぞ！」

「ルウエが、そういうなら、そうなんだろうね」

「うん！」

（鏡の世界…。ボクは気付かなかったけど…）

「寝てたの？」

（起きてたよ…。ボクたちだって、四六時中寝てるわけじゃないし…）

「ふうん…。じゃあ、なんで気付かなかったの？」

（うーん…）

「注意力散漫なんだろ」

（あつ、酷いよ！）

「鏡の世界から、どうやって、出てきたの？」

「ていうか、どうやって入ったんだ」

「ん…。分かんないんだぞ…」

「分かったら苦労はしないよ」

「まあ、そうだけどな。弥生も行ってきたらどうだ」

「なんでそうなるのよ！」

「良い経験だろ」

「そんな経験なんてしたくない！だいたい、戻ってくる方法も分からないのに、帰ってこれなくなったらどうするのよ」

「大丈夫だって。ルウエだって帰ってきたんだし」

「あ」

「どうしたの？」

「鏡の世界で誰かに会ったんだぞ」

「え？誰に？」

「分かんない」

「ええ……」

「よく覚えてないんだぞ」

「なんで？」

「うーん……」

「分かつたら苦労しないんだろ？」

「むう……」

（なんだろ……。ルウエの記憶にも曖昧にしか……）

「ルウエの記憶に、残ってるの？」

（鏡の世界はね）

「ふうん」

うーん……。

あのときはちよつと寝ぼけてたからかな……。

あの人のことも……。

「はあ……。結局、鏡の世界って何なのかな……」

「さあな。そういう不思議な世界があるんだってくらいにしか分からないな」

「ええ……」

「別にそれでもいいと思うの。ルウエはちゃんと帰ってきたんだから」

「まあ、そうだな」

「……ありがと、なんだぞ」

うん。

ありがと。

響が起きたから、リュウと弥生は川へ下りていった。自分は、光と翔お兄ちゃんと一緒に部屋に残って。

窓から外を見てると、鳥がこっちに向かって飛んでくるのが見えた。最初は分からなかったけど、真っ直ぐこっちに向かってきてて。

「光」

「ん？」

「あれ」

「どれ？」

「こっちに来るんだぞ」

「えっ、何が？」

「鳥」

「鳥？」

光が外の方に振り返った瞬間、その鳥が光の肩に止まった。何が起こったのか分からず、光はすごく慌てて。

「わっ！ええっ！？」

「なんだ。どうした」

「鳥が飛んできたんだぞ」

「ふうん……」

「ふうんじゃ、ないでしょ！取って！取って！」

「虫じゃないんだから……。そら、こっちに来い」

翔お兄ちゃんが呼ぶと、鳥はそっちへ飛んでいって。

それでも、まだ光は動揺してるみたいだった。

「鷹だな。どこから来たんだ？」

「……？」

「足輪は付いてないな。どこかで飼ってるってわけでもないみたいだけど……」

「はぁ……はぁ……。もう、なんなのよ……」

「手紙を持つてるわけでもない。じゃあ、なんでこの部屋に突っ込んできたんだ？」

「うーん…」

「ふう…。もしかして、聖獣とか…」

（違うよ）

「あつ、ミコト。どこに行ってたんだ」

（散歩）

「ミコトって？」

（わたしの名前だって。兄ちゃんが付けてくれたの）

「ふうん。ミコト」

（うん）

良い名前だと思うんだぞ。

でも、翔お兄ちゃんはいつの間に考えてたのかな…。

鏡の世界より不思議なんだぞ。

「あつ、お前、こいつの言葉が分かるんじゃないのか？」

（どうかな…）

「なんだよ」

（無口なのかな…）

「喋ってないのか？」

（んー…）

「なんだ、はっきりしないな」

（うう…）

（今は何も喋ってないよ）

「悠奈は分かるの？」

（まあね。ミコトもそのうちはっきり分かるようになるよ）

（ホント？）

（うん）

（よかったあ）

ミコトは安心すると、クルリと一回宙返りをした。
それを見て、鷹は首を傾げる。

「それで？こいつは何なんだ」

（さあ？）

「さあつて……」

（だって、本当に何も喋らないんだもん）

「ふうん……」

「野生の、鷹なんじゃ、ないの？」

「野生の鷹が、こんなに人間に慣れてるか？」

「そんなの、知らないよ……」

「何なんだ？お前は。本当に」

「……」

鷹はキョロキョロと周りを見回して。

ミコトが目の前をフラフラと飛んでいても、全く動じない。

（んー）

「……」

（何も喋らないね）

「……」

「ミコトがそうやって威圧するからじゃないか？」

（ええ……。そんなこと、ないよね？）

「……」

「ほら。そうだって」

（うう……。威圧なんてしてないもん……）

「まあ、焦ることはないだろ。こいつの好きなようにさせてやれば
いいじゃないか」

（うう……）

「それにしても、響がいなくて、よかったね」

「ん？なんでだ」

「響、きつと、触りたくるもん」

「…それは大変そうだな」

「大変そう、じゃなくて、大変なの」

（わたしも、響にいじめられた！）

「それは、お前が悪さをしてたからじゃないのか？」

「あはは…。ミコトの場合、それも、あるかもしれないね…」

（違うもん！）

「まあ、何にせよ、お前のイタズラがいろんな人に迷惑を掛けたのは事実だ」

（うっ…）

「反省しろよ」

（はい…）

すっかりしょげてしまったミコト。

悠奈はもう丸くなって眠っていて。

「……………！」

「おわっ！？」

「あっ」

急に翼を大きく広げると、鷹はまた窓からどこかへ飛んでいった。まっただ。

何かを見つけたように。

…どうしたのかな。

「はあ、結局何も分からなかったな」

（うん…）

「また来るよ、きつと」

「うん。自分もそう思う」

もう森の中に入ってしまっただけで見えなくなったけど。
あの鷹は、きっとまた来るんだぞ。

「ふあ……。暇だなあ……」

「翔も、響たちと一緒に、川に行けばよかったのに」

「ん……。そうかもなあ……」

「望はどうなったのかな」

「さあ……。美希お姉ちゃんからも、何の連絡もないし……」

「便りがないのは良い便りとは言うけどな……」

「何なんだ、それ？」

「手紙が来ないのは、元気で忙しくしてて手紙を書く時間もないからってことで、何よりも良い手紙だって意味だな」

「怠けてるだけじゃないのか？」

「はは、そうかもしれないな」

「適当なこと、言わないの」

「んー、案外真実かもしれないぞ？」

「もう……」

「ふふふ。でもまあ、旅をしてると、なかなか返事も貰えないしな」

「誰に書くの？」

「ん？そうだな……。孤児院の院長とかにかな。俺は書かないけど、弥生が書いてるみたいだ」

「あ、翔も弥生も、孤児だったね」

「ああ。俺たちのところは、ある程度の年齢になったら、みんな旅に出るんだ。俺は、まだちっちゃかった弥生も引っ張ってきたんだけどな」

「ふうん」

「ずっと自動三輪で旅してきたんだ。いろんなところに行ったりして」

「そういえば、翔と弥生は、どの辺を、旅してるの？」

「北からずっと下ってきてるところだ。どの辺っていうのはまだな

い

「ふうん」

「光はどうなんだよ。どこを回ってるんだ？」

「わたしたちは、最近旅を始めたばかりだから、まだ決まってるみたいだから、わたしたちも、そうなるのかな」

「そっか。ルクレイか」

「うん。この辺だね」

「俺たちはどうしようかな…」

翔お兄ちゃんは仰向けに寝転んで。

天井を見つめて、何かを考えてるみたいだった。

「あの鷹、何だったのかな…」

「ええ…。道順を、考えてたんじゃ、なかったの…？」

「通れる場所ならどこにでも行くからな。考えたって無駄なんだよ、俺たちの場合は」

「そうかもしれないけど…」

「翔お兄ちゃんは、北にいた頃はどこを回ってたんだ？」

「ん？そうだな…。リュカナからユイナを経由して、シルアに抜けるかんじだったかな。まあ、ラナンとかキサウにも行ってたけど。

…って、こんなこと聞いて分かるのか？ルウエはヤウトから来たんだろ？」

「うん」

「じゃあ、分からないんじゃない？」

「うーん…」

「わたしは分かるけど…」

「そうなのか？」

「そういえば、光は北の出身だったな。どこなんだ？」

「ミルのあたりだよ」

「へえ、ミルか。リユカナの近くだな」
「うん」

「なんでこっちに来たんだ？戦か？」

「うん…。まあね…」

「そうか…。あの辺も一時期は大変だったからな…」

「うん…」

「ごめんな」

「ううん、大丈夫だよ」

「…そうか」

翔お兄ちゃんは光の頭を撫でて。

光もニッコリ笑ってみせたけど、少し哀しそうだった。

「あ」

「ん？」

「また来た」

「え？」

光が振り向いた瞬間、鷹が光の肩に止まる。

…よっほど光が好きなのかな。

「わっ！ええっ！？」

「さつきと同じ驚き方をするんだな」

「だ、だって…！」

「鳥が嫌いなのか？」

「そ、そういうわけじゃ、ないけど…！」

「まったく…。ほら、こっちに来いよ」

鷹は首を傾げると、翔お兄ちゃんのところへ飛んでいった。
うーん…。

翔お兄ちゃんの方が好きなのかな…。

「さあ、今度は何か喋ってくれるんだな？」

「……？」

「今、喋っても、何を言ってるか、分からないじゃない……」

「ああ、そうか。ルウエ。悠奈はどうしてる？」

「んー…。寝てるみたい……」

「そうか…。ミコトも寝てるしな……」

「起きるまで、待つしかないよ」

「…そうだな」

鷹は翼を広げて、毛繕いを始めた。

片方の翼だけで一尺半くらいあって、とても大きい。でも、優しい目をしていて、怖いとは思わなかった。

「綺麗な羽根だな。本当に野生なのか？」

「自然の方が、綺麗ってことも、あるでしょ？」

「まあ、そうなんだけど。…あと、光。お前は近すぎだぞ」

「鷹なんて、なかなか間近で、見られないもん。こつやっつて、大人しくしてる間に、しっかり見ておかないと」

「そうか…」

翔お兄ちゃんは、困ったように頬を掻く。

…光、確かに見すぎなんだぞ。

「ふあ…。ミコトを見てたら、俺も眠くなってきた…」

「寝ちゃダメ！」

「…そんなに気張って言うことでもないだろ」

「……！」

「ほら、鷹もびっくりしてる」

「翔お兄ちゃん、鷹の気持ちが分かるのか？」

「いや。ただ単に、そう思ってるだろうなってことを言ったただけだ」
「なあんだ」

「ははは。こいつの気持ちがあれば苦勞はしてないって」

「そうだけど…」

「残念だったか？」

「うん…。ちよっとだけ」

「ちよっとだけかあ…」

少し残念そうに。

でも、本当に分かってたら、本当にすごかったんだけどな…。

「やっぱり、誰かが飼ってるような気配はないな…。でも、野生に
しては人間に慣れすぎてるし…。考えれば考えるほど変な鷹だな、

お前は」

「……………」

また首を傾げる。

鷹は、もしかして、こっちの言葉は分かっているのかな。

うーん…。

早く起きないかな、悠奈。

「光はやっぱり料理が上手いなあ」

「そ、そんなこと、ないよ…」

「美希お姉ちゃんに習ってるもんね」

「響もそうなんじゃないのか？」

「わ、わたしは…いいのよ…」

「まったく…」

「響は、不器用なんだよ。塩ひとつまみって、言ってるのに、いつの間にか、全部、塩味になってるときも、あつたもん」

「だって、ひとつまみ入れても何も変わらないんだもん…。味が分かるまで入れたら、そんなことになっちゃっただけで…」

「塩の役割は塩味にするだけじゃないぞ…。あくまで調味料なんだし、塩味にするなら食べるときに振り掛けたらいいだろ」

「そんなの…」

「で、どうしたんだよ。その塩辛い料理は」

「あ、それは、美希お姉ちゃんが、早くに気付いたから、あんまりしょっぱくなかったんだ」

「そうか。それはよかったな」

「うん」

「それよりさ、兄ちゃん。あの鳥は何なの？」

「さあ？」

「さあって…」

「分かったら苦労してねえって。森の方から飛んできたんだけど、それ以上は分からない」

「ふうん…」

鷹は窓のところに止まって、外を眺めていた。でも、森に帰るわけでもなくて。

「変な鷹なの」

「そうだな。変な鷹だ」

「あれ、鷹なの？」

「そうだろ。たぶん」

「たぶん…」

「俺は鳥に詳しいわけじゃないからな。もしかしたら鷺かもしれな
いだろ？」

「鷺かあ…」

「鷺なのか？」

「いや、だから、分からないって…」

「鷹と鷺の明確な区別はない。小さめなのが鷹、大きめなのが鷺だ
とか言われてるが、鷺くらい大きい鷹もいるし、鷺ほどしかない鷺
もいるらしいぞ」

「あつ！狼の姉さま！」「いろはお姉ちゃん！」

「久しぶりだな、ルウエ、リュウ」

「うん！」

「ヤーリエは？」

「もうすぐ来る」

「お腹空いた〜」

「ヤーリエ！」

「わわっ、ル、ルウエ？」

「よかった…。治ったんだ…」

「うん。心配かけてごめんね」

ホントのホントにヤーリエだった。

この匂いも温かさも、みんなみんな…。

「さて、ルウエ。再会の喜びに浸るのもいいが、オレたちにも昼ご
はんを食べさせてくれないか？少し急いできたものだから、腹が減

「ってるんだ」

「あ…うん。ごめんなさい」

「それにしても、また旅の仲間が増えたみたいだな」

「わたしは響だよ」

「もう、響。そんな言葉遣いじゃ、失礼でしょ。えっと、わたしは、光です」

「俺は翔と言います。こっちは弥生」

「……………」

「おい、弥生」

「……………」

「す、すみません…」

「はは、いいんだよ。そのうち慣れてくれるだろうし。それより、同じ旅仲間なんだ。敬語なんてやめてくれよ」

「分かった」

「響は、元から、敬語なんて使っていないじゃない」

「あれ？」

「分かりまし…分かったよ。…なかなか難しいな」

「……………」

「ふふふ。それにしても、響と光からは美希の匂いがするな。美希が見つけたって言ってた道連れはお前たちか？」

「そうだよ。美希お姉ちゃんは、今いないけど…」

「そうだな。となると、表の自動三輪は翔たちのか？」

「ああ。北からずっと南下してきてるところなんだ」

「北か。またいつか行きたいな」

「行ったことないのか？」

「一回だけ行ったんだけどな」

「けど？」

「あまり、いろいろ見る余裕はなかった」

「ふうん…」

「まあ、オレの昔話より先に昼ごはん」

「あ、ごめんなさい。今すぐ、用意するね」
「ああ。よろしく頼む」

狼の姉さまは自分の横に座って。

こつちを見てニツコリ笑って、頭を撫でてくれた。

「望が大変らしいな」

「えっ、なんで知ってるんだ？」

「大和から聞いた」

「大和と会ったの？」

「いや、大和の記憶を辿らせてもらった。今も望の看病をしてるみたいだ」

「ねえ、望はどうなってるの？どうなるの…？」

「大丈夫だよ。すぐに良くなるから」

「でも、望、すごく苦しそうだっ…」

「大丈夫。大和からの報告を聞いて、ユンディナ旅団の医師を借りてきたから」

「えっ、ユンディナ旅団の？それってすごいじゃない！」

「ヤーリエを診てくれたやつでな。仲間が同じ病気で苦しんでるらしいってことを伝えたら、早馬を出してくれたんだ。これだけ早く来れたのも、それのお陰だな」

「早馬…。それ、知ってるんだぞ」

「ん？そうか。どんなのなんだ？」

「急いでる人がいたら、出してくれるんだぞ。それで、シユンメが速くて…えっと…」

「はは、無理をしなくてもいいぞ。それにしても、駿馬なんて難しい言葉を知ってるんだな。そっちの方がびっくりしたよ」

「えへへ。おばちゃんが教えてくれたんだぞ」

「おばちゃん？」

「あ、ここでは、夕飯だけ、民家で食べさせてもらうんだ」

「ほう。最近変わったのかな」
「えっ、前にも来たことがあるの?」
「まあな。一年くらい前までは、朝から夜までここで食事を摂ってたんだ」
「へえ」
「そうか…。良い仕様にしたな…」
「はい、出来たよ」
「ん、すまないな。いただきます」
「いただきます」
「光のごはんは美味しいよ」
「美希が仕込んだんだろ」
「そうだよ。美希お姉ちゃん仕込み」
「響は、からつきしけどね」
「もう…。さつきから、そればかりじゃない!」
「事実だもん、仕方ないじゃない」
「むう…」

響は唸りながら光の手を叩いて。

それを見て、狼の姉さまは楽しそうに笑っていた。

「そうだ。昼ごはんが終わったら、あいつの話も聞いてみよう」
「あいつ?」
「あの鷹から話を聞くんじゃないの?」
「ああ、そういえばそうだったね」
「…完全に忘れてた」
「あれ?」

…自分は忘れてたんだぞ。

あの鷹の話…。

狼の姉さま、大和以外にも契約してるのかな。

「簡単なことだ。こいつはオレたちと話したいと思ってるんだから。オレたちも、こいつと話したいと思えばいいだけだ」

「でも、鷹となんて話せるわけがないじゃないか」

「どうして」

「俺たちは鷹の言葉が分からないし、そもそも鷹がこっちの言葉を理解してるのかも疑問だ」

「鷹の言葉が分からないって、話そうとしたことはあるのか？」

「いや、さすがにそれはないけど…」

「七宝やミコトに分かって、オレたちに分からないなんてことはないだろ。最初から諦めていたら、出来ることも出来なくなるぞ」

「うーん…」

「翔でも、口では勝てないみたいだね」

「兄ちゃんは、もともと口が上手いってわけでもないからね」

「そんなことないだろ…」

「あるよ」

「あるね」

「あるかも」

「あるんだぞ」

「あるの？」

「あるって」

「あるな」

「お前らなあ…」

翔お兄ちゃんは机に突っ伏して、ため息をつく。でも、本当に、口は上手いとは思わないんだぞ。

「そっいえば、男の人って兄ちゃんだけだよ。女の人一人だけ

だったら紅一点だけど、男の人が一人だけだったら何なの？」

「んー…。黒一点？」

「響、適当なこと、言わないの」

「じゃあ、光は分かるの？」

「それは…」

「そんなことだろうと思ったよ」

「うう…」

「いろはお姉ちゃん、なんて言うの？」

「そうだな…。両手に花かな」

「こんな花ならいらぬ…。棘だらけじゃねえか…」

「ははは。一番棘があるのは翔かもしれないな」

狼の姉さまは、翔お兄ちゃんの頭をポンポンと叩く。

翔お兄ちゃんが少し恥ずかしそうにしているのを見て、光はなんだか怒ってるみたい…。

「これ以上はダメみたいだな」

「……………」

「さて、そろそろこいつの話も聞こうじゃないか」

「あ、そうだったね」

「でも、ホントに、分かるの？」

「やってみないと分からないだろ」

「そうだけど…」

「ほら。光からやってみるか？」

「え、ええ…」

鷹が光の方を見る。

でも、光はおどおどとして。

「怖がると、こいつにもその気持ちが伝わる。そしたら余計に心が

通じなくなるぞ」

「でも…」

「そうか。じゃあ、光は後回しだな」

「ごめんなさい…」

「謝ることはないよ。最後に出来ればいいんだから。な？」

「うん…」

「さあ、次の挑戦者は誰だ？」

「はい！はい！」

「よし、響だ」

「よし…」

響は正面から鷹を見据えて、何かすごく怖い顔をして、ホントに怖いんだぞ…。

「響。そんな鬼気迫るような顔で睨んでると、鷹が畏縮してしまうぞ」

「え？そんな顔してた？」

「ああ。力を入れすぎだ」

「んー…。そんなこと言われてもなあ…」

「普段、みんなと話してるように接してみる」

「んー…」

響は、またジッと鷹を見て。

さっきよりは、マシになった…のかな。

でも、集中力が切れたみたいで。

「はあ…。ダメだなあ…」

「ふむ…。やっぱり、最初が鷹だと難しいのか…」

「えっ、どういうこと？」

「オレは、最初は狼と話してて、それから他のやつらに広げていっ

た。もしかしたら、話しやすいのと話しにくいのがいるのかと思っ
てな」

「ええ…。そういうことは先に言ってよね」

「今気付いたんだ。でも、そうになると、今こつやって練習しても
効果は薄いつてことになってしまう…。どうしたものか…」

「狼なら、明日香がいるの」

「明日香？あぁ、あの白狼か。でも、今は望のところにいるんだろ
？」

「あ…。そうだったの…」

「まあ、良い練習相手がいるって分かっただけでも儲けものだよ。

ありがとう、リュウ」

「えへへ」

「さあて、そうとなれば、こいつをどうするかだけ…」

「いいんじゃない？話せるようになるまで保留ってことで」

「……………」

「怒ってるぞ」

「そんなこと言われても…」

「……………」

何も言わずに翼を広げると、鷹はそのまま外に飛んでいってしまっ
た。

ん…。

残念だけど、狼の姉さましか言葉が分からないんじゃない…。

「あーあ。まあ、行ってしまったのは仕方ないか…」

「じゃあ、どうする？練習相手もないし」

「もう…。響が、もうちょっと、頑張れば…」

「光なんて、話そうとすらしなかったじゃない」

「そ、それは…」

「こらこら、喧嘩をするんじゃない」

「喧嘩なんて、してないもん……」

「帰ってしまったのは仕方ないじゃないか。また来てくれることを祈ってだな……」

「だいたい、紅葉お姉ちゃんが通訳をしてくれたらよかったんじゃない」

「ひ、響……」

「そうだな。オレが通訳をすれば、よかったのかもしれない」

狼の姉さまは響の横に座って、真っ直ぐに見つめる。

それに少し戸惑ったのか、響はぎこちなく目を逸らして。

「でも、通訳を通すと話せる時間は半分以下になる。それに、話し手が思っていることと通訳が思っていることが違っているかもしれない。しかも、通訳と聞き手が思っていることも違っているかもしれない。ただでさえ間違うのに、間にひとつ通すだけで間違いは二倍にも三倍にもなるはずだ。そう思わないか？」

「……」
「楽な道を選んで一生間違えたまま過ごすくらいなら、苦労したとしても正しく理解する方が良いだろ。少なくともオレはそう思ったから、お前たちにあいつと話す術を教えた」

「……」
「紅葉の言う通りだな、響」

「あつ、響……」

響は席を立つと、厨房から出ていった。

光もそれを追いかけて。

「響お姉ちゃん、どうしちゃったの？」

「いろいろ考えることがあるんだろうよ。まあ、光もいるし、放っ

ておくのが一番だ」

「ははは…。オレの責任でもあるんだがな…」

「今、紅葉が行っても無駄だろ。光が上手くやってくれるよ」

「…そうだな」

不安そうに厨房の入り口から廊下の方を覗いてる弥生の頭を撫でて。
狼の姉さまは、何か複雑な顔をしていた。

部屋に戻ると、狼の姉さまとヤーリエの分の荷物が増えていた。そして、響が部屋の隅でいじけてて、光が何が言っている。

「紅葉お姉ちゃんが、正しいでしょ？響のは、ただの、八つ当たりだよ」

「分かってるよ……」

「じゃあ、紅葉お姉ちゃんに、謝らないと、いけないね」

「……………」

「謝ってくれるのか？」

「あ、紅葉お姉ちゃん」

「……………」

「響」

「……………」

「悪いと思っていないなら謝らなくてもいい。そんなの、バカらしいだろ？オレ自身、八つ当たりされたなんて思ってないからな」

「……………」

「それより、ヤーリエ。荷物の整理をしておこう」

「う、うん……」

狼の姉さまは荷物を取って畳に広げる。

ヤーリエも、おどおどしながら同じようにして。

「そういえば、よくこの部屋が分かったな」

「ん？」

「俺たちは厨房にいたのに。この部屋に寄ってから来たんだろ？」

「そうだな」

「誰かに聞いたのか？」

「ああ。宿の主人に、蒼いチビと赤い女の子がいる部屋と同じにしてくれと言ったら、ここの鍵をくれたんだ」

「色かよ……」

「自分は、チビじゃないんだぞ！」

「ああ、そうだったな。身体は小さくても、心は大きい」

「うん！」

「…結局、チビって言われてることに変わりはないけどな」

「シーツ、兄ちゃん！」

「……？」

え？

何か変なところがあったのかな…。

うーん…。

「ヤーリエ。通行証は？」

「えっと……」

「ツウコウシヨウ？」

「特別な場所に入るとき、必要になることがあるの。今はほとんど廃止されて、自由に行き来出来るようになったところが多いんだけど、禁地リユウクラスとかに出入りするときは、まだ必要なの」

「ほう、よく知ってるな」

「えへへ。遙お姉ちゃんに教えてもらったの」

「そうか。リユウは旅団天照の団員だったな」

「まだ正式な団員じゃないの。でも、いつかは絶対に入るの！」

「ははは。じゃあ、一所懸命頑張らないとな」

「うん！」

リユウは胸元に下げている旅団天照の紋章を握って。

…きつと、リユウなら団員になれるんだぞ。

そんな気がする。

「リュウの言った通り、これは禁地リュクラスへの通行証だ。リュクラスは、ルイカミナからさらに西に行つて、カシユラの街から南へ向かつた先にある。ヤーリエの良い経験になるだろうし、一度行つてみようと思つてたんだ」

「リュクラス…」

「リュクラスは良いところだぞ。ずっと昔から変わらない古代の森林だ。心が安らぐ」

「噂には聞くんだけど、俺たちはなかなか入られないんだ。自動三輪の乗り入れなんて御法度も御法度だからな」

「中を走り回らなければいいんじゃないのか？」

「え？ そうなのか？」

「少なくとも規約には書いてなかつたぞ。禁地を荒らすべからず、とはあるけど」

「そうなのか…。うーん…。取るだけでも取つておこつかな…」

「私はリュクラスに行つてみたい！」

「じゃあ、取つておいた方がいいだろうな。自動三輪が気になるなら、どこかに預けるのもいいだろうし。信用出来る倉庫を紹介しようか？」

「ホントか？」

「嘘をついてどうするんだ。カシユラでいくつか挙げておくよ。オレの名前と暗証番号を出せば、どこでも借りられるはずだ」

「助かるよ、ありがと」

「いや、いいんだ。リュクラスを好きになつてくれるやつが増えるなら本望だ」

「好きになるかどうかは、まだ分からないけどな」

「そうだな。でも、必ず好きになる。それは保証する」

「ん〜、楽しみだな〜」

「おいおい…。行かつて言つても、カシユラですらまだまだ先だぞ…」

「ええ…。そこは加速装置を使えばいいじゃない」
「何言ってるんだよ。うんともすんとも言わないじゃないか」
「じゃあ、何のための加速装置なのよ」
「聖獣がいないんだから仕方ないだろ」
「むう…。兄ちゃんが契約してたら…」
「あつ！それなら、うってつけのが、いるよ！」
「え？」

光が突然大きな声を出したから、響はびっくりして飛び上がった。
た。

でも、そんなことは全く気にしないで、光は部屋を飛び出していった。

「うってつけ…。聖獣の余りでもいるのか？」

「きつと、ミコトのことなの」

「ああ…。そういえば、まだ契約してないとか言ってたような…」

「よかったね。これで加速装置が使えるよ」

「そうだな…」

「どうしたの？嬉しくないの？」

「翔は加速装置で加速される速度を懸念してるんだろ」

「ああ。制御出来るのかどうか…」

「詳しくは知らないけど、聖獣の力の強さ次第ってのを聞いたことはあるな」

「それは俺も聞いたことがある。あと、体力が関係してるとも聞くな。クーアなんかだと、それなりに力を持っていても加速は緩やかだとか。タルニアになると、数十歳くらいでもクーアの何十倍もの出力があるとか…」

「うーん…。そっか…。じゃあ、クルクスならどうなのかな…」

「クルクスか。クルクスなら体力は中堅だけど、あくまで平均の話だからな。もしかすると、翔が心配するような体力バカかも知れな

いぞ」

「体力バカじゃありませんように…」

「祈っても結果は変わらないけどな」

「うう…」

ミコトはどうなんだろ。

体力バカなのかな。

…翔お兄ちゃんの心配する様子、半端じゃないみたいだけど。そんなに速いのが怖いのかな…。

「それにしても、毎日増えるねえ。ちょっとした旅団じゃない？」

「そうかもな」

「紅葉が一番のお姉さんね」

「そうだな」

「いくつ？」

「さあ」

「分からないの？」

「ああ」

「そっかあ。残念」

「何が」

「うちの茜と同じ年かなあ、なんて思ったんだけど」

「そう思うなら、そうなんだろ」

「…辛口だねえ、紅葉って」

「そうか？」

狼の姉さまは首を傾げて。

カラクチ？

カラクチって何なのかな…。

「しかし、やっぱりこの南瓜は美味しいな」

「あれ？ここに来たことがあるの？」

「ああ」

「へえ〜。そりゃ気付かなかったなあ」

「部屋からあまり出なかつたからな」

「えっ、どうして？具合が悪かつたの？」

「いや、景色を見てたんだ。ずっと。ここはリュクラスに似てるからな」

「禁地に？はは、いくら田舎って言っても、あの原生林には敵わないよ〜」

「いや、雰囲気かな。オレが育った森にそっくりなんだ…」

「え？育った森？」

「えっ、あ、いや。森に囲まれたところだったんだ…」

「そっかあ。紅葉も田舎出身なのね」

おばちゃんは納得したように頷いて。

でも、狼の姉さまは少し焦ってるみたいだったけど…。

「それより、翔。あんまり食べてないみたいだけど大丈夫なの？それとも、二日続けての南瓜は嫌だった？」

「…え？あ、ああ、大丈夫…です」

「兄ちゃんは、ミコトと契約して体力を使っちゃったから、元気がないんだ」

「ミコト？」

「昨日も来てた黒い龍の子なんだぞ」

「ああ、あの子。契約したってことは、翔とミコトがくっついたってこと？」

「そうなのかな」

「ふうん。じゃあ、あのイタズラ娘は翔と弥生と一緒に旅に出て、村からいなくなっちゃうってことかあ…」

「寂しい？」

「…まあね。また一人、村から離れちゃうんだなって思うと…ね。イタズラばかりする、困った子だったかもしれないけど、あの子が起こす事件で村が活気付いてたつてもあるんだ。まあ、犯人は答えを発表されるまで分からなかったんだけど。…あはは、しみみりするなんて、らしくないね。ごめんごめん」

おばちゃんは頑張って笑ってみせるけど、寂しさは隠しきれなくて。

…なんとか元気付けられないかな。

「あのっ！」

「ん？」

「えっと…。兄ちゃんも私も、こうやって故郷から出て旅をしてるけど、一回も故郷のことを忘れたことなんてないよ。だから、ミコトもきつと、いつまでも覚えてると思うの。心はいつも、ここにいる」

「…そうだね。ありがとね、弥生。それを聞いて元気になってきたよ」

「えへへ」

「心はいつも、ここにいる…か」

「え？」

「時経れども変わらぬ故き里、我が心に有り。幾千の明日を迎え、幾千の宵を過ぐれども。たとい、その姿を失えど。我が心に、故郷有り」

「難しいねえ…」

「時が過ぎたとしても変わらない故郷は、私の心にある。何千の朝を迎え、何千の夜を過ごしても。たとえ、その姿が失われても。私の心に、故郷はある。…とまあ、こんなかんじだな」

「へえ。古典風だよな」

「準古典といったところだろうな。本当の古典が書かれた時代から見れば、ごくごく最近に書かれた小説の一節だ」

「小説かあ」

「ああ」

「心に故郷…か。心の故郷じゃなくて」

おばちゃんは少し箸を置いて目を瞑る。

そして深呼吸をして、またゆっくりと目を開ける。

「心に故郷。みんな、そこにいる。だから、寂しくない」
「うん！」

「そっか。ありがと、弥生。本当に。大切なことに気付けたよ」
「えへへ」

もう、寂しい顔なんてしてなかった。

ミコトが、みんなが、心にある故郷にいたことが分かったから。
だから、もう大丈夫。

…でも、翔お兄ちゃんは大丈夫じゃなさそう。

光が必死になって支えてるけど、もうほとんど眠っていた。

目を開けると、月の光がそっと広がって。

また目を瞑ると、闇が温かく包み込んで。

ふたつの間でユラユラしていると、何回目かに目を開けたとき、狼の姉さまの顔が急に現れた。

「わっ！」

「シーツ。もうみんな寝てるからな」

「う、ごめんなさい…」

「眠れないか？」

「ううん。いつも、これくらいなんだぞ」

「そっか」

「狼の姉さま」

「ん？」

「響に謝ってもらったの？」

「まあな」

「いつ？」

「さっき」

「さっきって？」

「さつきはさつき」

「むう……」

「はは、そんなことは別にいいじゃないか」

少し乱暴に頭を撫でてくれたけど。

でも、気になるのは気になるんだぞ……。

「それより、ヤーリエはどうだった？おかしなところはなかったか？」

「えっ、どづいうこと？」

「いつも一緒にいると分かることも多いが、分からないことも多い。分からないことは他の人に聞くしかないんだ」

「自分だって、ヤーリエとずっと一緒にいたいもん……」

「そうだな。でも、ルウエまで一緒にいると、ヤーリエの微細な体調変化に気付けないかもしれないだろ？」

「うう……」

「そう唸るなよ」

狼の姉さまは、優しく頭を撫でてくれた。

ちよっと悔しかったけど、とても気持ちよくて。

「…前と変わらなかったんだぞ」

「そうか。ごめんな」

「…うん」

「お詫びと言ってはなんだけど」

ギュッと抱き締めてくれた。

狼の姉さまの温かさの良い匂いが広がって。

そっと目を瞑ると、嬉しい気持ちが溢れてきた。

「お休み、ルウエ」

「うん…」

狼の姉さまが優しく背中を叩くたびに、闇は深く深くなっていった…。

空はまだ縁の方が明るくなり始めたところだった。遠くの方で鳥が鳴いてるのが聞こえて。

「ふぁ……。雑魚寝は肩が凝るな……」

「翔お兄ちゃん。おはよ」

「おはよ、ルウエ。早いな」

「いつも言われるんだぞ」

「そうか。いつも早いな」

「えへへ」

頭を撫でてもらった。

朝から良いこと。

今日もきつと良い日なんだぞ。

608

「よし。朝ごはんにするか」

「でも、まだみんな起きてないよ?」

「いいじゃないか。紅葉姉さんも、もういないし。寝坊助は置いて、先に食べておこう」

「うん」

「さてと……」

翔お兄ちゃんは、みんなを跨いで出口まで行く。じゃあ、自分も……。

「わわっ!」

「うっ……。何……?」

「し、ごめんなさい……」

「なんだ、ルウエか…」

響はモゾモゾと動くと、また眠ってしまった。
次は踏まないようにしないと…。

「ほら、ルウエ」

「え？」

光を跨ぐうとすると、翔お兄ちゃんが戻ってきて。
そして、抱き上げて出口まで運んでくれた。

「跨げないときは、部屋の端とか、みんなの隙間を歩いていくんだ」
「でも、翔お兄ちゃんは…」

「俺はルウエより背が高いからな。当たらないくらいまで、足を上げられる」

「むう…」

「ははは。ちっちゃいなら、ちっちゃいなりの良いところはある。
こうやって、抱っこしてやれるだろ？ルウエが大きいと、こんなことは出来ない」

「うーん…」

翔お兄ちゃんはそのまま部屋を出て、そこで降りしてくれた。
ちっちゃくても良いこと…。
自分には分からないんだぞ…。

「ん？」

「どうしたの？」

「いや、何か変な感じがして…」

「変なかんじ？」

「気のせいか…？」

「……？」

「いや、気のせいじゃないな」

翔お兄ちゃんは、もう一度部屋の戸を開ける。
すると、部屋には誰もいなくて。

「んー、なるほど……。鏡の世界か……」

「えっ？」

「まあいい。ルウエ、朝ごはんにしよう」

「う、うん……」

また鏡の世界に入ったのか？
でも、なんで？

「あ、そうか。昨日とは逆に行かないとダメだな」

「翔お兄ちゃん……」

「ん？」

「翔お兄ちゃんは平気なの……？」

「鏡の世界に入ったことか？」

「うん……」

「平気だよ。ルウエが一緒だからな」

「自分と一緒になら平気なの？」

「ああ。ルウエは俺の妹だからな」

「……？」

「まあ、深く考えるな。大丈夫だよ。何があっても、兄ちゃんが一緒にいるからな」

「……うん」

翔お兄ちゃんは、しっかりと手を握ってくれた。
だから、大丈夫。

「それにしても、本当に鏡なんだな。全部逆だ」

「そうなの？」

「ああ。階段も右回りだったのに、左回りになってるし」

「んー…？」

「まあ、いつもここにいる…とかでない限り、しっかりと観察してないと分からないよな」

「むう…」

「はは、そんなに唸ることもないだろ。少し注意深くなれば、ルウエにも自然と分かるようになってくるから」

バフバフと軽く頭を叩いてくれるけど、あんまり嬉しくなかった。

なんだか悔しいから頭を振ると、翔お兄ちゃんはカラカラと笑ってむう…。

「ん…？」

「何？」

「あれは？」

「え？」

階段を降りきって廊下に出る。

すると、翔お兄ちゃんが見てる方のずっと奥に、黒いモヤモヤしたものが漂っていた。

「…………？」

「黒い霧か…。気をつけて行こう」

「うん…」

ゆっくりと、黒い霧の方に近付いていく。

モヤモヤと動いてる霧は、近付くにつれて何かの形になっていく。

「……………」
「人…？」
「ふう…。また来たんだね」
「うん」

黒い霧が一気に集まって弾けた。
そして、代わりに立っていたのは、この前の子。

「鏡の世界は、鏡の向こうに広がる世界だよ」
「……………」
「翔お兄ちゃん？」
「お前は誰だ。まずはそこからだ」
「むう…。誰と聞かれても…。今はルウエ、だよ」
「……………」
「でも、普段はルウエじゃない。わたしは琥珀。」落つる涙” ユヌト”
「ユヌト…。聖獣か？」

「うん。本来の聖獣からしたら、まだまだ半人前以下だけど」
「ユヌトというと、赤狐と聞くんが。まるつきり人間じゃないか」
「だから、今はルウエなの。あ…もしかして、あんまり似てない？」
「…どちらかと言うと、響なんだぞ」
「えっ、あ、本当だ…。失敗だね…」
「失敗？」
「うん…。でも、まあいいや。じゃあ、今日は響で」
「…適当なんだな」
「何事も適当にやっておくくらいがちょうどいいって教えてもらったんだ」
「誰だよ…。そんなことを教えるのは…」
「大和なんだぞ」

「そうそう、大和兄ちゃん」

「ルウエは、こいつと知り合いなのか？昨日会っただけなんじゃないか？」

「うん。でも、知ってる」

「そうだね」

「……？」

「わたしは、ルウエに身体を貸してもらってたの。ルウエは知らなかっただろうけど。契約じゃないから、わたしもあんまりルウエに干渉出来ないし。さっきも言ったけど、わたしはまだ半熟の聖獣だから、契約も出来ないし、いつ消えるかも分からない不安定な存在なんだ。だから、消えないように身体を間借りして、ひっそりと修行してたの」

「修行……？」

「そうだよ。この世界に存在を定着させる修行なんだけど。先天的な聖獣じゃなくて、わたしの場合、あとから聖獣になったから、それだけ道は険しいんだ。まあ、それが終われば晴れて本物の聖獣になれるんだけど」

「ふうん……。ところで、お前はよく喋るな」

「うん！だつて、お喋りつて楽しいじゃない！しかも、大和兄ちゃんと別れてから、クノさま以外とはほとんどまともに話したことがなかったからね。久しぶりにいっぱい話せて嬉しいんだ」

「はあ……。俺はなんか疲れたよ……」

「そう？まだまだ話したいこと、たくさんあるのに」

「向こうの世界で出られないのか？向こうなら、お喋り好きのやつらがたくさんいるぞ」

「うん、そうなんだけど。存在を繋ぎ止められるかどうか不安なんだ。もし失敗したら、もう二度と戻ってこれないかもしれないし……」

「あの無口な頃の琥珀は、もっと度胸があったはずだぞ。お喋りになつて、度胸も口から抜けていったのか？」

「えっ、あ……」

振り向くと、そこには大和がいた。
狼の姉さまも一緒に。

「紅葉姉さん！なんでここに？」

「いいじゃないか、細かいことは。こいつの散歩をしているとき、時空の歪みを感じて入ってきてみただけだ」

「紅葉の散歩の間違いだろ？それに、時空の歪みを見つけたのは俺だ」

「そんなことはどうでもいい」

「……………」

「まあ、とりあえずは外に出ようか」

狼の姉さまに背中を叩かれると、大和は渋々といった風に何かをやり始める。

そして、気付いたときには、目の前が真っ暗になっていた。

「まあ、上々と言ったところか」

「うう…。なんか落ち着かないよ…」

「最初はそんなものだ。いつまでもルウエの身体を間借りするわけにもいかねえだろ」

「そうだけど…」

琥珀は目を回したようにフラフラとしていて。

最後には、椅子に座り込んでしまった。

「うえ…。気持ち悪い…」

「おいおい…。こんなところで吐くなよ…」

「吐かないけど…」

「ねえ、大和」

「ん？」

「望はどうなったの？」

「ああ、ユンディナのやつが来てからは、少しずつ良くなってるみたいだ」

「よかった…」

「まあ、すぐにはいかないだろうが、治るのも時間の問題だろうな」

「うん」

よかった。

望、元気になってきてるんだ…。

「あ、でも、伝染するかもしれないから、望のところに行ったり近くにいた人の側にいちゃいけないって…」

「ユンディナのやつによれば、感染した例はまだ報告されていないらしい。だから、まあ直接発症したわけでもないし、望の側にいた時間も短かった俺が、連絡係として抜擢されたんだ」

「ふうん…。でも、望の部屋にいたんじゃないの?」「いや、ほとんど隣の部屋で待機していた。美希に、もしかしたら報告に走らなれないかもしれないからって言われてな。あいつには先見の明があるようだな。まあ、そういうわけで、たまに様子を見に行ったりもしたけど、だいたいは明日香からの報告だった」

「じゃあじゃあ、望に会いに行ってもいいの?」

「それはダメだ。報告されてないだけで、もしかしたら感染するかもしれないだろ。医者や美希なんかは大人だし、俺や明日香なんかはそもそも種類が違う。普通に考えてみれば、お前たち子供より感染する可能性は低いだろ?」

「でも…」

「でもも鴨もない。お前たちの誰かが病気になるれば、またみんなが哀しい思いをするんだ。だから、望が完治するまで待っていてくれないか?」

「うん…」

「よしよし、良い子だ」

そして、大和は頬を舐めてくれた。

くすぐったかったけど、なぜか笑う気にはなれなかった。

「報告会も終わったみたいだな」

「ルウエ、ちょっとそのぐうたらをよけてくれないか?」

「ぐうたらじゃないもん…。うう…」

「まったく…。翔、これ、持ってきてくれないか?」

「うん。どこでもいいから乗せて」

「ああ」

狼の姉さまは、翔お兄ちゃんの腕のところにお皿を乗せて。落ちそうなくらい不安定だけど、なぜか落ちなくて。

「器用なものだな」

「居酒屋でしばらく働けば、これくらい出来るようになる」

「…お前、未成年が居酒屋で働くのは禁じられてるんだぞ」

「えっ、あ…。そうだった…」

「まったく…。口が軽いようだな」

「うう…」

「それより、だ。琥珀。早くどける」

「無理…。気持ち悪い…」

「はあ…。そんなに気持ち悪いなら、医者に太い注射をしてもらわないとな」

「えっ…。そんなのイヤだよ…」

「じゃあ、そこをどけるんだな」

「うう…。意地悪…」

「意地悪で結構。早くしないと…揺するぞ」

「うえ…。考えただけでも気持ち悪いよ…」

渋々、琥珀は重たい身体を持ち上げて。

…ていうか、いつまで響の姿をしてるんだろ。

これが本当の姿…じゃないよね。

「世界に存在を繋ぎ止めるのが精一杯なら、まだまだ半人前だな」

「うう…」

「よし、朝ごはんにしよう。ちょうど、みんな来たみたいだしな」

「え？」

「んー、しかし、翔に持ってもらった意味がなかったな。オレは、揺すらないと動かないと思ってたんだけど」

「いいよ、そんなの。気にしなくて」

「まあ、そうだな。翔の口の軽さも分かったし」
「うっ…」

狼の姉さまは、笑いながら翔お兄ちゃんのお皿を取って並べ始める。
美味しそうなんだぞ。

「わあ、良い匂い」

「ホントだ〜」

「あっ、響、光」

「他の、みんなも、来てるよ」

「ああっ！わたしがいる！」

「え？」

「お腹空いたの〜」

「うん」

「弥生も速く〜」

「待ってよお…」

みんなが集まって、賑やかになってきた。
やっと、朝ごはなんだぞ！

リュウと弥生は、狼の姉さまと翔お兄ちゃんと一緒に村に出ていってしまった。

お菓子を探しに行くとか言ってたけど…。

…なんでお菓子？

そして、琥珀はまだ響の姿のまま、三つ並べられた椅子に寝転がって。

何かわけの分からないことを呻いている。

「うっ…。大和兄ちゃんが悪いんだ…」

「何言つてんだ。それより、いつまでその姿でいる気なんだ」

「戻るのも面倒くさいし…」

「はあ…。お前なあ…」

「よく出来てるよね。ホントにわたしそっくり」

「まあね…」

「ユヌトはもともと変化が得意だからな。こいつもご多分に漏れずつてことだろ」

「ふうん…」

「しかし、お前がルウエに取り憑いてたとはな。ルウエが俺と琥珀の話を知つてたのはそのせいなのか。まったく、びっくりしたよ…」

「ああ、あれ…。話したんだ…」

「どんな話？」

「まあ、お前らにはまた話してやるよ」

「え…」

「ルウエにいろいろな色が見えるのもお前のせいかな？」

「え…？わたしは土しか持つてないし、ルウエに土があったから、ちよつと間借りしようと思つただけ…。それに、そこまで干渉出来ないよ…」

「それもそうか…」

「ねえ、どういうこと？」

「ん？だから、ルウエにはたくさん色が見えるんだ。その色のひとつに土があつて、こいつが図々しく間借りをしてるつてこと」

「図々しくなんてないもん…」

「たくさん、色があるつてことは、いろんな属性に、適性があるつてことだよな？」

「そうだな。実際に確認出来るだけでも、光、金、土に適性があるみたいだし」

「なんで、そんなに適性があるのかな。普通、あつてもひとつでしょ？」

「ああ。最近は適性を持たないやつも多いからな。そこから考える

と、響は水、光は金、ヤーリエは闇と、これだけ適性のあるやつが集まる方が珍しいってことだ」

「えっ、わたしたちも適性があるの?」

「なんだ、気付いてなかったのか」

「気付かなかつたなあ」

「ふうん…。珍しいやつらだな」

「え?なんで?」

「俺たち聖獣は、意識的であろうと無意識的であろうと、自分と同じ属性に引き寄せられるんだ。それで、見極める。契約していいものかどうか。契約に足らないと思えば、そのまま次の目標に向かう。契約に足ると思えば、幹旋者を通じて契約を取り付けてもらう」

「でも、悠奈と契約するとき、自分はそのときに初めて悠奈に会ったんだぞ」

「幹旋者に身を寄せて、適性の診断から見極めまで、全部を一任することもある。経験の浅い若者は特にな。悠奈はそつちだったんだろ。それに、契約の要請を受けたあとも、幹旋者自身がもう一度見極めることもある。一見さんお断りと言われる所以はそれかもな」

「でも、お兄ちゃんはそんなこと言っただけだ」

「まあ、簡単に説明出来るほど幹旋者の仕事も楽ではないってことだな」

「ふうん…」

何か、よく分かんないんだぞ…。

聖獣が見極めた人を、また見極めて…。

でも、最初から任せっきりの聖獣もいて…。

うーん…。

考えれば考えるほど…。

(ふう……。なんだかマシになった気がする……)

「当たり前だろ。お前の場合、変化の維持だけじゃなくて、まだしばらくは存在の維持にも力を使わないといけないからな」

(そんなの知らないよ……)

「自分が使う術式の特性も知らないのかよ……」
(だって……)

「変化とかは持続力があるよね」。反転はいらないけど」

「反転は、維持する必要が、ないじゃない」

「そうだけどさ」

「どう違うんだ？」

「変化は、自分を任意のものに変えることが出来るんだ。琥珀がわたしになったり、光になったり。全く別の存在になるんだから、姿を維持するために力があるんだよ。でも、反転は、たとえばわたしなら黒龍になるんだけど、黒龍っていうのはわたし自身の裏側であつて、変化とは逆で全く同じ存在だから、維持に力は必要ないんだ」
「でも、琥珀は響になつても琥珀でしょ？」

「うーん……。そうだよね……」

「おいおい……。ルウエ、こいつが出てくる前に、何か霧か靄みたいなものは見えなかったか？モヤモヤしたものだ」

「うん。なんか、黒いのが見えた」

「それが、響の姿を決定する情報だ。その情報を身に纏うことで外見を変えている。まあ、服みたいなものだ。服を変えれば、外見は変わるけど中身は変わらないだろ？つまりはそういうことだ」

「でも、服を着るのに力はいらないよ？」

「あー、まあそうだな。しかし、ヤーリエは鋭い質問をするな」

「ごめんなさい……」

「謝ることはないだろ。何にでも疑問を持つのはいいことだ」

「…うん」

「話を戻して。服ではたとえば悪かったな。さっき、ルウエが霧が
霽みたいなのが見えたって言ってたよな？」

「うん」

「それを纏い続けるには力があるんだ。こっ…一枚の布を身体に
ピッタリくっつけておくには、手で持つておく必要があるだろ？」

「巻き付ければいいんじゃないの？」

「慣れれば、そういうことも出来るけどな。こいつはまだまだ発展
途上だ。存在の定着も、術式の扱いもな」

（はあ…）

琥珀はひときわ大きくため息をつくとき、モゾモゾと体勢を変える。
それをチラリと一瞬だけ見て、大和は鼻を鳴らす。

「さあ、なんか肩が凝ってきたな」

「そう？」

「ああ。難しい話は嫌いだ」

「難しいの？」

「俺にとつてはな」

「ふうん」

「光、何か面白い話はないのか？」

「えっ、わたし？」

「ああ」

「大和。そういうのを無茶振りって言うんだよ」

「そうか？」

「うん。それで、光。何かないの？」

「響まで…」

「いいじゃない。わたしが話すよりかは面白いでしょ」

「響にも何かあるのか？」

「そうだね…。光と翔の話とか」

「そ、そんな話はダメ!」

「なんだ?」

「ここはお風呂が混浴だからさあ……」

「響!」

鈍い音がした。

次の瞬間には、響は頭を押さえていて。

「いつつ……。だから、光がさっさと話せばよかったのに……。殴られ損だよ……」

「俺は、さっきの話の続きが気になるけどな」

「気にならない!」

「ふむ。残念だ」

「ねえ、光は何か面白いお話、あるの?」

「え? えつとね……」

光は腕を組んで考え始める。

… そんなに出てこないものなのかな。

「あ、そうだ。今日の夢」

「夢?」

「うん。今日、なんか、変な夢を、見たんだ」

「どんな?」

「真っ白な世界で、自分一人だけなんだ。どこまで行っても、真っ白な世界」

「自分も見たことあるんだぞ」

「えっ、そうなの?」

「わたしもあるよ」

「うん、ぼくも」

「なんだ、みんな、見たことあるんだ」

「…光は白い世界。ルウエは白だったな。響なら黒、ヤーリエは蒼い世界だろ」

「なんで分かるの？」

「ルウエは前にカイトから聞いてるだろ。その世界は、自分の本質だ。光は金、ルウエは光、響は水、ヤーリエは闇の世界を見てたんだ」

「本質…？じゃあ、途中で出てきた、黒い炎は…」

「えっ、わたしは白い炎だったよ」

「ぼくも白」

「ヤーリエの炎は紅葉のものだ。光と響のは、たぶんお互いのものだろうな」

「どういうこと？」

「詳しいことはカイトに聞かないと分からないけど…。自分に近い者で、その時点で助けられる力のある者が、その世界に干渉してくるんだ」

「助けられるって…。自分の本質って、そんなに危ないものなの？」

「どこまで行っても同じ世界が続いてる。つまり、出口がないということだ。自分の世界なのに、自力で脱け出せないなんて、どうかと思うけどな」

「それは別に…」

「そうか」

「それで？なんで光の夢に、わたしの炎が出てくるのよ」

「さっきも言った通り、響が一番光に近くて助けやすかったんだろ」

「それだけ？」

「本質の世界については、俺もよく知らないんだよ。聞くならカイトにでも聞いてくれ」

「だから、カイトってのが分からないのよ。誰なの？」

「俺たちがここに来たとき、見なかったか？不死鳥なんだが」

「ああ。あれが？」

「そっだ。あれだ」

「あのときは、いきなり、目の前に、降りてきたから、びっくりしちゃった。そっか…。あれが、カイト…」

「頭が固いし、遠回しな言い方が好きなやつだから、話しにくいとは思っけどな」

「でも、大和は嫌いじゃない」

「ん？まあ…そうかな。ずっと昔から世話になってたしな」

「ふうん。じゃあ、恩師だね」

「いや、恩師とは言い難い」

「ええ…」

昔からお世話になっていた…。

自分なら、姉さまや葛葉なのかな。

…大和はあんなこと言ってるけど、きっと、自分と同じことを思ってるんだぞ。

「何か食え。それか、一旦帰るんだ。いつまでもそこで寝転がって
いられるのも迷惑だ」

（帰るって、どこに…）

「ルウエの身体を借りてるんだろ？」

（もう帰らないよ…）

「駄々をこねるな」

（こねてないもん…。帰ったらルウエに迷惑が掛かるじゃない…）

「別に迷惑だなんて思ってないんだぞ」

（でも…）

「そんなに嫌なら、ルウエと契約をしてしまったらどうなんだ」

「えっ。でも、琥珀はまだ、存在が、安定してないんでしょ？」

「そうだけど…。しっかりとした存在を持つてる者と契約すること
で、ある程度は安定するだろうし…。それに、ただ借りるだけなの
が嫌なら、そうじゃなくしてしまえばいい」

「でも、霧を集めるようなものでしょ？下手すれば、それこそ霧散
しちゃうかもしれないじゃない。博打としては、いささか危険すぎ
じゃない？」

「…霧は日が昇ると消えてしまう。それと同じだ。いつまでも存在
の定着が出来ないと、霧のように消えてしまう。そういうやつもい
る」

「えっ…。じゃあ、琥珀もいつかは消えちゃうかもしれないってこ
と？」

「……………」

ヤリエの質問に、大和は黙るばかりで何も答えなかった。

琥珀も、聞いているのかいないのか、ただ唸るだけで。

「でも、定着出来るなら、急いで契約することもないんだよね？」
「出来るならな」

「……………」
「琥珀が素直にルウエの身体に戻れば、こういうことも考えなくて済む。依り代があるなら、存在の定着のことは一旦考えないで、力が付くのを待ってから改めて挑戦すればいいんだからな」

「でも、琥珀は嫌なんだよね……………」

「…俺は、ちゃんと戻ると思っていたから何も言わなかったけどな。初めてとはいえ、ここまで存在が不安定だと、定着出来るかどうかは五分五分だ。普通は、軽い頭痛とか目眩程度なんだが。…それだけ、危険な状況にあるということだ」

「えっ…………。そんな…………。こ、琥珀、早くルウエに……………」

「イヤ…………。こっやって存在出来てるのに…………。ルウエに…………。また迷惑を掛けるなんてイヤ…………)」

…………琥珀は勘違いをしてるんだぞ。
それで、それに気付いてない。

「琥珀。誰にも迷惑を掛けないで生きていくことなんて出来ないんだぞ」

「……………」
「生きている限り、誰かに迷惑を掛ける。それが当たり前。でも、その迷惑を、誰も迷惑だとは思わない。それは、生きていくのに必要なことだから。みんな、誰かに支えてもらいながら生きています。…………。自分は、琥珀と一緒に暮らすことはなんとも思わない。でも、琥珀がこのまま消えちゃうかもしれないっていうのは我慢出来ない。みんなそう思ってる。そうと分かってもイヤって言うなら…………無理矢理帰ってきてもらっただぞ」

「……………」
「琥珀！」

(…分かったよ)

琥珀は身体を起こすと、そっと目を閉じる。

そして、琥珀の姿が揺らいで、そのまま消えてしまった。

「えっ、あ、え？」

「琥珀…？」

「き、消えちゃったの？」

「慌てるな。移動に時間が掛かっているだけだ」

「移動？」

そんな声を聞きながら。

世界が真っ暗になっていく。

柔らかくて気持ちいい…。

毛をギュッと握ると、のそりとそれが動いた。

「起きたか」

「うん…」

「疲れただろ。そのままがいいから、話を聞いてくれるか？」

「うん…」

「よし」

ザラザラした大きな舌で顔を舐められた。

ちよっと痛かったけど、それがなんだか気持ちよくて。

「琥珀はまだ聖獣としては未熟だ。なんとかこつやっこまで来たがな」

「うん…」

「お前の悠奈や七宝より、さらに手間を掛けるだろう。お前に掛ける負担も、その二人を合わせてもまだ余りあるくらいだろうな。その割に、見返りは少ない。風邪を引きにくくなるとか、その程度だ」
「うん…。それでもいいんだぞ…。これからも、琥珀と一緒にいられるんだから…」

「…そうだな。さすが、ルイムナ嬢やカウユが認めるだけのことはある。すまないな、試すようなことをして」

「ううん…。クノお兄ちゃんに認めてもらって、嬉しいんだぞ…」

「お、お兄ちゃん？私が、か？」

「うん…。クノお兄ちゃん…」

温かい…。

フワフワの毛に顔を埋めると、野生の獣の良い匂いがする。

「…ゆっくり眠れ。手入れを欠かしたことの無い、自慢の毛皮だ。思う存分堪能するがいい」

「うん…」

「安心しろ。寝てる間に食べたりはしないから」

「うん…。分かってる…」

「そうか」

また顔を舐めてくれた。

今度はおでこ。

ちよつとくすぐったかった。

…そういえば、毛がフワフワなだけでなく、この地面もフカフカ。草がたくさん生えていて、それがずっと向こうの方で空と繋がっている。

上を見ると、夜空にはたくさんの流れ星が流れていた。

「獅子座流星群だ。綺麗なものだろう」

「うん…。たくさん願い事が叶っちゃうね…」

「願い事か。どんな願い事だ？」

「言っちゃダメなんだぞ…。流れ星に乗せた願い事は、誰にも話しちゃいけないって葛葉が言ってた…」

「葛葉。お前の姉か何かか？」

「うん…。同い年だけど、葛葉は自分のお姉ちゃん…」

「そうか。ルウエはどこかポアツとしてるからな」

「むう…」

「はは、そう唸るなよ」

そう言つて、鼻の先で胸を押す。

クノお兄ちゃんの黒い目は、真っ直ぐこっちを見ていて。

「さあ、好きなだけ願うといい。そして、今はゆっくりと休むんだ」

「うん…」

願い事は、今はひとつだけ。

それを済ませて目を閉じると、心地の良い闇の世界が優しく包み込んでくれる。

「ふぁ…」

「起きたか」

「うん」

「回復が速いんだな」

「悠奈と契約してるから」

「悠奈か。ルウエ…だったな。珍しいやつもいるものだ」

「なんで？」

「ルウエの力は、だいたいは平均的なものだ。体力にしても、術式を繰る能力にしても。それでも、他の者より疲れにくい…なんてのは割といるが、これだけの高負荷をこんなに短い時間で回復出来るだけの体力がある者は極稀だ」

「ふうん」

「あるいは、タルニアを超える力の持ち主なのかもな」

「タルニア…。不死鳥なんだぞ」

「ああ。よく知っているな」

「望が契約してるんだぞ」

「ふむ、望」

「うん。自分のお姉ちゃん…大好きなお姉ちゃんなんだぞ」

「そうか、大好きか」

「うん！」

たてがみを握ると、また舐めてくれる。

望…。

大丈夫なのかな…。

「心配か？」

「うん…」

「では、ひとつ、おまじないだ」

「おまじない…」

「ああ。望の病気が早く良くなるように。私からの取って置きのおまじないだ」

クノお兄ちゃんはそっと目を瞑る。

自分も一緒に目を瞑って。

不思議な感触が、顔を撫でていく。
ゆっくりと。

「…さあ、もうそろそろ帰るがいい。琥珀はしばらく戻れないだろうが」

「うん」

「私はいつでもここにいるからな。好きなときに来るといい。次は、一緒にこの草原の果てを見に行こう」

「果てがあるの？」

「それは次のお楽しみだ」

「…うん、分かった」

「じゃあ、またな。楽しみに待ってるよ」

「うん」

もう一度、クノお兄ちゃんの大きな身体を抱き締める。

やっぱり、フカフカしてて温かい。

…また布団の代わりになってもらおうかな。

目を開けると、流星群の代わりに天井が見えた。

大きく伸びをすると、いろんなところの関節が鳴って。

「おはよう。帰ってきたか」

「うん」

「昼ごはん、出来てるぞ。食べるか？」

「うん」

身体を起こそうとすると、押さえられて。

そして、狼の姉さまは横に置いてあったお盆に掛かっていた布を取る。

「無理をするな。身体は動いても、完全には回復していないこともある。それに、悠奈や七宝に聞けば、ごく短い間隔で契約を繰り返ししているそうじゃないか。そんなことをしていると、いつか大変なことになるぞ」

「むう……」

「とにかく、今日は安静にしておけ」

そっと身体を起こさせて、背中に枕を当ててくれる。そして、お粥をすくって口元まで持ってきてくれた。

「冷めてないか？さっき持ってきたんだけど」

「うん」

「そうか」

またもう一杯。

何が入ってるのか知らないけど、なんだか少し甘かった。

「翔の特製お粥だ。この甘いのは蜂蜜。村で貰ってきたらしい」

「帰ってきてたの？」

「ああ。昼ごはんを食べて、今度はヤーリエたちも引き連れて、また出ていったけどな。お菓子を作らせてもらっているようだ。ここは野菜くらいしかないように見えるけど、実は良質な蜂蜜が採れる

ってことで熱心な愛好家の仲間内では隠れた人気があるそうだ」

「ふうん」

「はは、興味ないか？」

「ううん。蜂蜜はとつても好きなんだぞ。でも、そんなに美味しい蜂蜜なら、みんなと一緒に食べたかった…。みんなと、美味しいねって言いたかったんだぞ…」

「…そうか。それは残念だったな」

「うん…。でも、過ぎたことは仕方ないんだぞ。姉さまも、よくそう言ってた」

「姉さま、か」

「うん」

「過ぎたことは仕方ない。でも、ちゃんと取り返せるものもあるんだ」

「え？」

狼の姉さまはお粥を一杯すくうと、自分で食べてしまった。

そして、それをゆっくり味わうと、静かに飲み込んで。

「口に広がる甘味と香り。それと、ほのかな酸味。全体的に控えめでありながら、はつきりとした主張を持っている。さすがに美味しいな」

「……！」

「ほら、ルウエももう一杯」

「うん！」

匙を口元まで持ってきてくれる。

それを口に含んで、さつき狼の姉さまが言ったことを、自分でも味わう。

…うーん。

あんまり分かんない…。

でも、さつきより、ずっとずっと美味しいのは分かるんだぞ！

狼の姉さまは横に寝転がって、そつと頭を撫でてくれる。

欠伸をしている間に口の中に指を入れてきたから、そのまま甘噛みをする、ニッコリと笑いかけてくれた。

「オレも、よくこうやって甘噛みをしたものだ。それが今となっては、される側だからな。なんだか不思議な気持ちだ」

「……？」

「はは、独り言だよ。それにしても、ルウエは立派な歯を持つてるんだな。龍なのに、狼のオレにも負けなくらいじゃないか？」

「んー。自分では分からないんだぞ」

「まあ、そうだろうな」

「うん」

「二牙症…ではないんだな。臼歯なのに、こんなに鋭いのか」

「二牙症？」

「ああ。牙、つまり、犬歯が二本生えてくる病気だな。オレもそうなんだけど…」

「狼の姉さま、病気なの…？」

「はは、心配しなくていいよ。二牙症が何か身体に変調をきたすことはない。ただ、歯並びが少し悪くなる可能性があるから、生え変わりの時期に気を付けておいた方がいい、ということだ。親知らずも生えきったオレにはもう関係ないよ」

「ヤーリエは？」

「ヤーリエ？あいつも大丈夫だよ。ちゃんと綺麗に生え揃ってる」

「よかった…」

「ていうか、ヤーリエが二牙症だなんて言ったか？」

「うーん…。分かんない」

「ふむ、そうか…」

狼の姉さまは、あれこれ考えているみたい。
でも、たぶん狼の姉さまは言っていないんだぞ。
じゃあ、なんで分かったのかは分からないけど…。

「まあいいか。ヤーリエが二牙症なのは事実だ。それはそれでいい」
「うん」

そして、頭を撫でてくれた。

眠たくなって欠伸をすると、今度は指を入れてこなくて。
代わりに、優しく背中を叩いてくれた。

「そうか。琥珀は大和と知り合いだったのか」

「そうだな。知り合いというか、大昔の旅の道連れだけだ」

「ふうん…。じゃあ、そうなると、琥珀はもともと人間だったのか？」

「ああ」

「人間が聖獣になることがあるのか」

「さあな。少なくとも、俺は琥珀しか知らない」

「ユヌトの花畑で消えた女の子が、またユヌトになって帰ってくる…か」

「俺も正直びっくりしたけどな。まあ、あのクノの長老さまなら、そういうことも出来るかもしれない」

「長の力、ということか？」

「いや、何年生きてるか分からない化け物だから」

「クノお兄ちゃんは化け物なんかじゃないんだぞ」

「ん？ああ…そうだな。化け物は言い過ぎかもしれないぞ…」

「言い過ぎなんだぞ！」

「はは、ルウエはクノのことがよっぱど気に入ったらしいな」

「まあ…それはあれだろ。クーア旅団の副団長と知り合いだから」

「ああ、そういえばそうだったな」

「どつちのクノお兄ちゃんも、優しくて格好よくて…」

「格好いいのか？オレはルイムナしか見たことないから分からないんだが…」

「ルイムナさまの姿は人間に近いけどな。クノの長老さまは獅子だ。紅葉の言う格好いいに当てはまるかどうかは知らないぞ」

「ふうん…。獅子か。見てみたい気もするな」

「まあ、出来ないこともないが、あの人は腰が重たいから。滅多に”星降る夜”から出ることはない」

「星降る夜？獅子座流星群か？」

「うん！願い事がいっぱい叶うんだぞ！」

「そうだな。あれだけ降っていけば、願い事を唱えるのも楽だろう。でも、星降る夜っていうのは地名だ。ベラニクやルイカミナといったものと同じ。あそこは、ここで言うリユクラス、つまり、禁地や聖地と呼ばれる場所だ」

「ふうん…」

「まあ、リユクラスと少し違うのは、あの場所が禁地なんじゃなくて、長老さまが居座ってるから禁地と呼ばれているんだけど…」

「禁地に神がいるんじゃない、神のいるところが禁地…ということか」

「ああ。まあ、神なんて大袈裟なものじゃないけどな。でも、普通は、契約のときに長老さまが出てくることはない。たいてい、クルクスの若大将が代行で出てくるんだが…。ルウエのことが、よっぽど気に入ったらしい」

「ホントに？」

「気まぐれとかじゃなくてか？」

「あの人は、気まぐれで物事を決めたりするような軽いやつじゃない。行動するには理由がある。そういう人だ」

「ふうん。…珍しいな。お前が誰かに一目置くなんて」

「一目じゃ足りねえよ。十目は置いている」

「どちらにしても珍しい。ルイムナ以来じゃないか？」

「以来って言い方はおかしいと思うけど…。しかし、俺が不遜みたいな言い様だな」

「実際そうだな」

「失礼なやつだ。俺だって尊敬出来る人は尊敬してるぞ」

「ルイムナとクノの二人だけなんだろう？」

「そんなことないって！」

「ムキになるところが怪しい」

「お、俺だって、ルイムナさまとか長老さまとか…尊敬してる人は

「たくさんいる！」

「さつき出てきたまんまじゃないか。その二人以外を挙げてみるよ」
「えっ、ああ…。ル、ル…ルウエ！ルウエだ！」

「え？自分？」

「なんで、ルから探そうとするんだよ…」

「い、いいじゃねえか。俺はルウエを尊敬してるぞ！」

「…仕方ないな。そういうことにしておいてやろう」

「ていうか、そういう紅葉こそ、全くもって不遜じゃねえか。お前は誰を尊敬してるんだよ」

「オレか？オレは、今まで会った人全てを尊敬している。みんな、尊敬に足る人物だよ」

「あっ！お前、それはずるいだろ！」

「普段から不遜な態度しか取らないお前には出来ない答え方だろうな」

「大和はフソンなんだぞ」

「お前：ちゃんと意味を分かって言ってるのか？」

「ううん」

「はあ…」

「不遜というのは、思い上がって全く他人を尊敬せず、見下している様子だ」

「うーん…。じゃあ、なんだか大和とは違うような気がするんだぞ」

「気がするんじゃないかって、実際そうなんだ」

「自分で言ったら世話ないな。不遜とか不遜でないとかっていうのは、他人から評価されて初めて意味を持つんじゃないのか？」

「ルウエに不遜じゃないって評価してもらったんだ。自分で言うてもいいだろ」

「ルウエは、不遜ではないかもしれないと言ったんだ。それを、お前が不遜ではないという断定に訂正させた。つまり、まだ本当の評価は受けてない。」自称”の域を出ない、ということだ」

「…理屈っぽいぞ、お前」

「今に始まったことじゃないだろ？」

「まったく…。そんなに論理で攻めたてると、友達なくすぞ」

「それでも、大和よりは多いと自負している」

「よく言うよ…」

「狼の姉さまは、友達というより家族なんだぞ。もちろん、大和もだけど」

「…そうだな。オレはルウエのお姉ちゃんだからな。友達じゃなくて、家族…か」

「そういう考え方もあるんだな。血が繋がっていなくても、種族種類が違っていても、家族か。少し羨ましいかな。そういう考え方が出来るっていうのは」

「じゃあ、大和も真似すればいいんだぞ」

「はは、そうだな。その発想はなかったよ。よし、じゃあ、真似してみようか」

「そうすれば、お前の不遜な態度も改善されるかもしれないしな」

「そういう点においては、紅葉も真似した方がいいんじゃないか？」

「オレは、その考え方をすでに導入している。だから、改めて真似する必要はない」

「導入しててそれが。そりゃ、改善のしようがないな」

「改善する必要もないしな」

「……………」

「狼の姉さまも大和もフソンじゃないんだぞ。二人とも、みんなのことを想ってくれてるし…。だから、喧嘩しないで…」

「ん？ああ、ごめんな」

「喧嘩のつもりはなかったんだけどな…」

「そうなの…？」

「ああ。まあ、軽口だな。本気で言ってるわけじゃないよ」

「ルウエだって、ヤーリエやリュウと話すとき、冗談を言ったりするだろ？」

「うん…」

「それと同じだ。ちよつと分かりにくかったみたいだけどな」

「ホント…?」

「ああ。ありがとな、心配してくれて」

「それにしても、ヤーリエが来る前を思い出すな。軽口が、いつの間にか本当の喧嘩になつてたりして…」

「たいていは大和が悪かつたんだけどな」

「否定はしない」

「素直じゃないな」

「…この状況で使う言葉じゃねえだろ」

「そうかもしれない」

「ねえ、二人が今までやつた喧嘩で一番大変だったのって、どんなの?」

「ん? そうだな…。非常食消失事件か?」

「あれは、紅葉が一方的に怒つてただけだろ…」

「それはどんな事件だったの?」

「ヤーリエと会つた日から一ヶ月くらい前だ。非常食として干してた肉を、ちよつと目を離れた際に大和が全部食べてしまつて…」

104 (後書き)

なぜか会話オンリーです。

まあ、そんなときがあってもいいですよね。

「明日になったら、好きなものを食べればいい。今日は我慢しろ」

「うう…」

「ごめんね、ルウエ」

「なんか見せびらかしてるみたいだな…」

「いいんじゃない？早く治れってことで」

「響なら、絶対に、文句言うよね」

「い、言わないよ…」

「ホントかなあ」

光は響のお腹を突ついて。

ムツとした顔をして、響はそれを払いのける。

「弥生、溢さないようにしろよ。畳なんだから」

「溢さないよ…。子供じゃないんだから…」

「そう言っつて、いつでも何かしら溢してるじゃないか」

「溢してない！」

そう叫んだ瞬間に力が入って、箸で掴んでた豆が飛んでいった。それがちょうど大和のところに行っつて。

「よつと」

「わあ、上手いね！」

「まあな。光もやるか？」

「え…。それは、遠慮しとく…」

「なんだ、つまらん」

「そらみる。溢したじゃないか」

「兄ちゃんがおかしなことを言うからでしょ！」

「ほらほら、喧嘩しているとまた溢すぞ。静かに食べる」

「はあい……」「分かってるよ……」

「そういえば、初めて会ったときも喧嘩してたよね」

「そうなのか？」

「紅葉お姉ちゃんと、ヤーリエは、後から、来たもんね」

「最初は何だったっけ。鞆がどうか言ってた？」

「ああ。荷物は増えていく一方なのに鞆は小さいままだから、一回りくらい大きな鞆を買おうって言ったんだ。そしたら、今ので充分だとか言うから」

「だって、事実じゃない」

「お前のは充分だろうけど、俺はお前の荷物も入れてるから足りないんだよ。お前の荷物をお前自身が持つなら要らないけどな」

「兄ちゃんなんて、汚くても平気じゃない。でも、私は不潔だと死んじゃうの」

「なんだ、その理屈は。服とか下着なんて、川で洗って干しておけば充分だろ。なんでわざわざ街に着いてから洗うんだよ。汚いものを汚いまま置いておく方が不潔だろ」

「そうやって、また喧嘩するだろ、お前たちは。どっちが不潔かなんて、今はどうでもいい話だろ。問題は鞆なんだから」

「……………」

「鞆の話に戻して。ものが入らなくなってきたとしても、鞆を買う必要はない」

「ほら」

「話はまだ途中だぞ、弥生」

「うう……」

狼の姉さまは、弥生を睨んで途中で割り込んできたことを叱って。そして、静かになったところで、また話し始める。

「買う必要はない。自分で作ればいいんだ。その方が安いし、好き

な鞆を作れる」

「作るつて、どうやってだよ。材料なんてないぞ」

「道中に食べた動物の皮、古くなった服、なんだつてあるじゃないか。旅の基本。ものを無駄にするべからず、だ」

「あ、わたしたちも、美希お姉ちゃんから、聞いたよ」

「え？そうだつて？」

「はあ…。あれだけ、言われてることなのに…」

「んー。そういえば、言われてたような気もする」

「気もする、じゃないでしょ…。あんまり、そんなこと言っているとね、美希お姉ちゃんに、言いつけるよ」

「えっ、それは困るなあ…」

「困るじゃダメだろ。美希に言われないうちに、普段からそういう風に振る舞うんだ」

「はあい…」

「さあ、また話が逸れたな。鞆作りについてだが、オレのあの背負い袋も旅の途中で作ったものだ。ヤリーエのものもな」

「そういえば、よく見たら、動物の皮とか、ボロみたいなのが、混じってるよね」

「へえ〜。ずっと市販のやつだと思ってたよ」

「まあ、前に熊を仕留めたときに、一気に作ったんだけど…」

「…え？熊？」

「熊を仕留めたつて…どうやって？」

「ん？まあ…ちょっとな。美希に教えてもらえ」

「ええっ！すつごく気になる！術式？術式だよね？」

「自慢ではないけど、オレの術式適性は全くない」

「えっ、じゃあ…素手？」

「さあな」

「ええーっ！気になるー！」

「まあ、そんな話より、だ。材料なんて、その気にならなくても自然に集まる。要は、作る気があるかないかということになる。翔が

本当に新しい鞆が欲しいなら、作り方くらい、いくらでも教えてやる」

「…欲しい。だから、教えてくれ。…いや、教えてください!」

「分かった。敬語はいらないけどな。まあ、明日だ。山に出るから、早起きしろよ」

「ああ、分かった」

翔お兄ちゃんは、力強く頷く。

そして、楽しそうに尻尾を振って。

「なんだか、教えてもらえるから嬉しい…ってだけじゃないような気もするけど、なんでだろ。」

今日だけは特別。

大和が枕になつてくれてるから。

「長老さまのことを考えてるだろ」

「うん。クノお兄ちゃんの方がフカフカなんだぞ」

「そりゃ、な。長老さまには敵わないよ」

「でも、大和も温かくて気持ちいい…」

「そうか?ありがとな」

優しく顔を舐めてくれる。

クノお兄ちゃんと違って、大和の舌はツルツルしてるんだぞ。

「ん?」

「どうしたの?」

「お前、長老さまに何かしてもらったのか?」

「んー…おまじない」

「おまじない?」

「うん。おまじない」

「どんな」

「望の病気が早く治るおまじない」

「…なんで、そのおまじないをルウエにしたんだろ」

「え？」

「いや、なんでもない」

「……？」

何なのかな。

おまじない…。

そういえば、大和はなんで気付いたんだろ。

「さあ、長老さまが護ってくださっているから。もうそろそろ寝ろ」

「うん」

「お休み、ルウエ」

「お休み…」

欠伸をすると、一気に眠たくなった。

大和のお腹に顔を埋めて。

獣の匂いと一緒に、大和の心臓の音が感じられた。

クノお兄ちゃんるときも聞こえた、温かい音…。

「また来たのか？」

「んー…？」

「まあいい。夜明けまで、もうしばらく眠るといい」
「うん…」

クノお兄ちゃんのたてがみに顔を埋めて。

もう一度、目を瞑る。

心地良い風が吹き抜けていく。

優しい、風が…。

「それですが、クノさま」

「静かにしないか。ルウエが眠るまで待てないのか？」

「あ…。はっ…失礼いたしました…」

「…すまないが、少し席を外してくれ。お前は、どうも仕事の話をしたいらしいのでな」

「はっ…では…」

薄く目を開けると、すぐ前でユラユラと揺れるものがあった。
なんとなく、手を伸ばして掴んでみる。

「ひゃっ!?!」

「んー…」

「そら。お前が騒ぎたてるから」

「な、なんでもいいですから、離してください!」

「昔からお前は尻尾が弱点だな」

「ク、クノさま!」

「ははは。ルウエ、離してあげなさい」

「うん…」

手を離すと、大きく飛びのいて、しきりに尻尾を気にしている。

…誰？

「こいつはクルクス。私の補佐をしてくれている。まあ、若大将と
いったところだ」

「若…」

「そうだな、若だ」

「ル、ルウエさま…。いきなり尻尾を掴まないでいただきたいです
…」

「ん…。ミコトに似てる気がする…」

「ミ、ミコト…？」

「似てるも何も、実の兄妹だからな」

「ああ、ミコトですか。そういうえば、最近名前を貰ったとはしゃぎ
回ってましたね…。契約もいつの間にか取り付けてきたみたいで…」

「お前が見届けたのではなかったのか？」

「ええ。どうやらツクシだったようです」

「ふむ。それは残念だったな。まあ、今度契約者に会ってくるとい
い。挨拶も兼ねてな」

「はい。ありがとうございます」

「若の名前はなんていうの？」

「私…ですか？私は契約を結ぶことなく、ずっとクノさまの補佐と
して仕えておりましたので、名前を戴く機会に恵まれることはありません
ませんでした」

「ふうん…。じゃあ、若はなんて呼べばいいんだ？」

「若で結構ですよ」

「そうだ、若。ルウエに名前を付けてもらってはどうか」

「えっ、しかし…。ルウエさまは私の契約者ではありませんし…」

「では、ルウエと契約するか？」

「ダ、ダメです！昨日も琥珀と契約してるんです！これ以上負担を掛けるわけにはいきません！それに、クノさまの補佐が疎かになっ
てしまっは…。」

「ツクシも、契約を結びながら上手くやってくれているじゃないか。
お前に出来ないわけではないだろ？それに、この子は…。」

「…………？」

クノお兄ちゃんはこっちを見ると、ザラザラした大きな舌で舐める。
…どうしたのかな？

「こいつは見た通り、頑固者だ。手間は掛かるだろうが、よろしく
頼んだぞ」

「えっ、クノさま！？私の話、聞いてました!？」

「案ずるな。私が手伝おう」

「そういう問題じゃないです!」

「ルウエ。今、何か持っているか？」

「ん…。」

「クノさま!」

懐の中を探ると、名札が出てきた。

真お姉ちゃんに作ってもらった、大切な名札。

「ほう、万金か。純度も高いようだな。さすがに良いものを持って
いる」

「どういうこと？」

「いや、今は知る必要はない。必要となれば、そのうちに分かって
くるから」

「…………？」

「クノさま…。もしかして…。」

「そういつことだ。…さあ、ルウエ。目を瞑りなさい」
「うん…」

名札を強く握って、目を閉じる。

…クノお兄ちゃんのだてがみは、やっぱり気持ち良いな。
ゆっくりと、その温かさの中に落ちていった。

眩しい…。

朝…なのかな。

目を開けると、もう見慣れた天井がそこにあった。

「おはよ、ルウエ」

「おはよ…」

「朝ごはん、持ってきてあるよ」

「ありがとう、なんだぞ…」

「みんな、紅葉お姉ちゃんについて行っちゃった。まあ、私がルウエを看てるからって言ったんだけどね。鞆を作るんだって」

「うん…。昨日、翔お兄ちゃんと弥生が話してた…」

「そう。お昼には戻ってくるって。朝は材料集めなのかな」

「ふぁ…」

「あ、まだ眠い？」

「ん…」

「寝てる？」

「ううん…。もう起きる…」

「じゃあ、朝ごはんにしようか。昨日と同じで申し訳ないけど…って、紅葉お姉ちゃんが言ってたけど。お粥だよ」

「うん…」

「自分で起き上がる？」

「ん…」

力が…入らない。
なんでかな…。

そつえば、若との契約はどうなったのかな…。

「ダメ？」

「うん…」

「仕方ないね。よいしょっと…」

起こしてもらって、やっと座ることが出来た。

でも、相変わらず力は入らない。

喋るので精一杯だった。

なんとか、首だけを動かして。

「今日は梅干し入りだよ。大和が、今日は相当消耗してるだろうか
らって。なんで分かったのかな。ルウエは分かる？」

「……………」

「どうしたの？あ、早く食べたいよね。ごめんごめん」

「望…」

「ん？どうしたの？」

「望…望…」

「もつ、どうしたのよ」

「うええ…望い…」

ただ泣くことしか出来なかった。

今すぐ望に抱きつきたいのに、身体が動かなかった。

今すぐ望の匂いを確かめたいのに、身体が動かない…。

だから、泣くしかなかった。

嬉しくて、でも、哀しくて。

「…ごめんね、心配かけて」

「望…うええ…」

「もう大丈夫だから。お医者さんが治してくれたから」

「うん…うん…」

「また、一緒に旅が出来るよ」

「うう…うええ…」

望は、そっと抱き締めて、頭を優しく撫でてくれた。

望だ…。

この匂いも感触も、全部間違いないんだぞ…。

望…。

本当によかった…。

本当に…。

「なんや久しいかんじがするなあ。こつやって三人で話すのも」

「えへへ」

「気持ち悪いやつぢやな。顔がニヤけてるぞ」

「うん。だって、嬉しいんだもん」

「…まあ、せやろな」

「そついや、ルウエ。また契約したって聞いたけど」

「うん」

「えつ。なんやオレ、幹旋者として形無しやな…」

「カイトと悠奈だけだもんね」

「五月蠅いわ。ほんで？何と契約したん？」

「ん…。ユヌトとクルクス」

「はあ？ふたつも取り付けてきたんか？しかも、両方土…」

「うん」

「なんでそんな無理さすかな…」

「でも、若の契約はクノお兄ちゃんが取り付けてくれたんだぞ」

「若？」「クノお兄ちゃん？」

「あ…。若の名前、考えないと…」

「クノお兄ちゃんってどういうこと？」

「望。お前が期待してるクノお兄ちゃんとは違つと思つぞ。」遙かな大地”クノや」

「土を司る神様が…」

「まあ、肩書きではそうやろつけどな。実質、聖獣の総大将やつて聞いたことある」

「つまり…一番偉い人？」

「そんなところやな」

「えつ。じゃあ、ルウエはすごい人と会つたってこと？」

「せやな…。オレもおつたことないわ」

「へえ……」
「クノお兄ちゃんは、すつごくフワフワしてて、温かいんだぞ！」
「え？フワフワ？羊？」
「ちやうちやう。何ゆつてんねん。獅子や獅子。百獣の王！」
「ヒヤクジユウノウ……？」
「あらゆる獣の中で一番強いってことだよ。で、それが獅子」
「ふうん……」
「でも、獅子ってフワフワな印象はないけどなあ……」
「たてがみちやう？」
「ああ、なるほど」
「しかし、聖獣の長クノが取り付けた契約となると……相当な力の持ち主とちやうんか……？」
「何か問題でもあるの？」
「力が強くなればなるほど、契約のときに使う力も多くなる。そうになると、ルウエは相当消耗してるはずや。現に、こつやつて身動きひとつ出来んようになってるけど……。でも、この程度やったら、そんなに力は強くない……」
「え？」
「オレの経験からの話になるけど、たとえばルウエくらいの歳の子やったら、カイトくらいのやつと契約するだけで三日は目覚めへん。望はその分ちよつと歳上やし、カイトが上手くやったから、それほど大事にはならんかったけど。身動きが取れん程度やったら、いくら悠奈と七宝の補助があつたとしても、大和くらいのやつ……」
「ふうん……。よく分からないけど」
「別に理解せんでもええ。とにかく、聖獣の長が斡旋したにしては、力の弱いやつやと思ただけ。まあ、実際に会ったこともないし、その辺は分からんけどな……」
「いや、相当な力の持ち主だ」

急に空気が熱くなって、目の前でちよつとした爆発が起きた。

そして、いつの間にかカイトがそこにいて。

「お前なあ。望が倒れてるときは静かに出てこれたのに、なんで治った途端これやねん」

「ん？ちよつとした祝砲のつもりだったんだが」

「外でやれ、外で！」

「そうか。それは配慮が足りなかったな」

「ホンマに……」

「それで、なんで力を持つてるかどうかなんて分かるの？」

「クノに聞いてきた」

「直接か？」

「ああ」

「ふうん……」

「なんだ。私にも友人の一人や二人はいる」

「友人？総大将と、か？」

「おかしいか？総大将と言っても、聖獣であることに変わりはない。

肩書きこそ長老や神であるかもしれないが、孤独では生きていけないのだよ、結局は」

「へえ……。神様も聖獣だったんだ……」

「突っ込むとこ、そこかい！」

「神も聖獣……という言い方は少し語弊があるな。聖獣は聖獣だ。神

というのは、言うなれば称号であり、その本質を表すものではない」

「ふうん……」

「話を戻すぞ。ルウエが契約したのはユヌトとクルクス。ユヌトは

琥珀という名前で、存在が安定するまでしばらく静養しているとい

うことだ」

「存在が安定するって？」

「琥珀は少し特殊な成り立ちがあつてな。今ある存在が、この場所

に定着していない。吹けば消える霧のようなものだ」

「ええ……。どういふこと……？」

「ええ……。どういふこと……？」

「ちょっと刺激を加えたら消えてまう…ってことかな。風前の灯火
つちゆうこつちやな」

「そうだな。だが、今は比較的安定しているらしい。クノによれば、
存在の定着も時間の問題だろう、ということだ」

「よかった…」

「望が安心してどないすんねん」

「誰が安心したっていいでしょ」

「まあ、そうかもしれんけど…」

「それで？クルクスの方は？」

「ふむ。ルウエのことなのに、私から聞いてばかりではつまらない
だろう。ルウエのことはルウエに聞いてみてはどうだ」

「えっ、自分はカイトに話してもらってもいいんだけど…」

「いいじゃないか。若の話はお前から聞かせてやれ」

「うーん…。若は、クノお兄ちゃんのホサをしてるんだぞ」

「総大将の補佐？すごいじゃない！」

「でも、頑固者だって」

「そうだな。あいつは仕事に関してはなかなか頑固者だが、普段
は融通の効く良いやつだ」

「そうなの？」

「ああ。またあとで話してみるといい」

「うん」

「それで、若に名前を付けてやるのではなかったのか？」

「あ、そうだ」

「名前？」

「若には名前がないんだって。契約をしたことがないから」

「なんで契約したことないんだろ…」

「年齢で言つと、大和より少し上といったところだ。それくらいで
あれば、契約をしたことがないという者も多い。さすがに、ルトほ
どになると滅多に見なくなるがな」

「ふうん…。じゃあ、クノお兄ちゃんは？」

「あいつはかつて、捲土迅雷の獅子と呼ばれていた。地を駆ければ砂埃を巻き上げるほどで、しかし、誰もその姿を捉えることが出来なかったそうだ。そして、生涯でただ一人、その身を委ねた者がいる」

「相模の獅子、北条氏康か？」

「いや。…まあ、他人の過去にあまり踏み入るものではない」

「ええ〜…。しようもな」

「あ、薫」

「カオル？」

「うん」

「何が？」

「若の名前！」

「ああ…。しかし、また唐突やな…」

「薫…。若は薫！」

「若は若やねんな…」

気に入ってくれるかな？

早くこっちに来ないかな。

楽しみなんだぞ！

翔お兄ちゃんが帰ってきた。

何かいろいろなものを負って。

それを下ろすと、周りの布団を片付け始める。

「それで？その大きいのは何なんだ？」

（お兄ちゃん！）

「お兄ちゃん？」

「ミコトと薫は、実の兄妹だって、クノお兄ちゃんが言ってたんだぞ」

「ふうん…。クノ…」

「薫というのは、私の名前でしょうか」

「うん」

「名前、まだ貰ってなかったのか？」

「はい。今回が初めての契約で…」

「兄妹揃って名無しの権兵衛だったのか」

「お恥ずかしながら…」

（恥ずかしいの？）

「あ、いや…」

「そういえば、望は？治ったんだろ？」

「うん。今、お兄ちゃんと厨房に行ってるんだぞ」

「厨房か…。紅葉姉さんたちと鉢合わせしてるだろうな」

「狼の姉さまも厨房に行ってるの？」

「ああ。紅葉姉さんと、あとは弥生とリュウだな。他の三人は村に行ってる」

「なんで？」

「昨日のお菓子を取りにいってるんだ。少し時間の掛かるやつもあったからな」

「ふうん」

「まあ、またあとで一緒に食べよう」

「うん」

「あの…」

「ん？」

「ミコトの契約者はあなたでしょうか」

「そうだけど。あ、ミコトの兄貴だったな。よろしく」

「は、はい…」

「固くなるなよ。それより、布団を片付けるの、手伝ってくれないか？」

「あ、はい。ただいま」

そして、薫と翔お兄ちゃんは一緒に布団を片付け始める。

薫が立ち上がると、床から背中までで翔お兄ちゃんと同じくらいの高さがあった。

「立つと余計に大きいなあ。ミコトもこれくらいになるのか？」

「いえ。もう二回りほど小さいです」

「ふうん。よかった」

「え？」

「いや。大きいとき、かさばるな…とか思って。自動三輪だし、宿もあんまり大きな部屋は取れないから。小さい方が便利だし」

「かさばりますか…」

「あ、いや…。そういう意味じゃなくてさ…」

（お兄ちゃん、おつきいもんね〜）

「はあ…」

ミコトに言われて余計に落ち込む。

…なんか、ちょっと面白いかも。

「あー、うう……。と、とにかく、「ごめん……」

「もう大丈夫ですから……」

（あはは、なんか面白い〜）

「ミ、ミコト……」

「はあ……」

薫はもつと落ち込んで。

うーん……。

翔お兄ちゃんが大変そうなんだぞ。

大きな袋からは、本当にいろんなものが出てきた。

何かの木の实とか、何かの毛皮とか、何かのツルとか……。

これで靴を作るのかな。

「薫。そっちは何個ある？」

「カシユの実は三十七個、ナルの实が八十四個です」

「うん。ちよつど百個ずつあるな」

（食べてもいい？）

「ダメだ。これは大切な材料なんだから。それに、さっきしこたま食ってたじゃないか」

（うう……）

「すみません。迷惑を掛けます」

「いいよ。すでに、うちにも似たのがいるし」

「はあ、誰でしょうか」

「弥生だよ。そのうち帰ってくると思うけど」

「弥生さまですか。ご兄妹なんですか？」

「ああ。まあ、血は繋がってないけどな」

「へえ……」

「それより、クノってどんなやつなんだ？」

「え？クノさまですか？」

「うん。気になってるんだ。俺のときはツクシってやつだったけど…」

「クノさまは、私とツクシが仕えさせていただいてる方です。今は少し休養なさっていますが、昔は捲土迅雷の獅子と称えられていたそうです」

「捲土迅雷の獅子…。聞いたことがあるな…。どこで聞いたかな…」
「生涯にただ一人だけ、クノさまが契約を交わした者がいると聞きます。その誰かの逸話の中で…ということではないでしょうか」
「ん…。そうなのかな…」

翔お兄ちゃんは首を傾げながら、次の材料の数を確認し始める。
カイトも言っただけど、クノお兄ちゃんが契約してた人って誰なのかな…。

自分も気になるんだぞ…。

「ただいま…って、なんだこれは…」

「あ、えつと…誰だっけ？」

「私は美希だ。ちゃんと覚えておけよ」

「あー、そうだった」

美希お姉ちゃんは部屋に入ると、適当に場所を作って座り込む。
すると、すぐにミコトが近付いていつて。

（んー？）

「なんだ。私の顔に何か付いてるか？」

（ううん）

「そういえば、お前と会うのは初めてだな。そっちの大きいのも」
「私は薫と言います。現在はルウエさまと契約をしていて、クノさまの補佐もさせていただいております」

(美希お姉ちゃんは、赤狼なの?)

「ああ」

「ミコト！自己紹介が先だろ！」

(うん…)

「すみません…」

「頭ごなしに叱ることもないだろ。それで、お前の名前は？」

(ミコト…)

「ミコトか。良い名だな。翔と契約してるのか？」

(うん。ツクシがね、フラフラしてるより良いだろうって言って)

「薫に、じゃなくてか？」

(うん。なんで?)

「薫とは兄妹なんだろ？」

(うん)

「よく分かりましたね。さっき叱ったからですか？」

「まあ、それもあるな」

「えっ、他にもあるんですか？」

「さあな。秘密だ」

「…気になります」

「ははは。まあ、企業秘密だ」

「ええ…」

何だろうと首を傾げる薫。

でも、美希お姉ちゃんはニッコリと笑うばかりで。

…なんで分かったのかな。

不思議なんだぞ。

あ…カイトに聞いてたとか？

うーん…。

「狭いな…。さすがに」

「人数多いからね」

「二班に分かれようか。オレの班と美希の班で」

「わたしたちは、美希お姉ちゃんだね」

「ん」

「じゃあ、ぼくは紅葉お姉ちゃんの方」

「俺はどうするかな」

「翔は、こっちだよ」

「珍しいな、光が積極的になるなんて。翔のことが好きなのか？」

「えっ、あ、いや…。えっと…」

「ははは。まあいい。じゃあ、翔はこっちだな。弥生はどうする？」

「兄ちゃんと一緒に行く」

「そうか。ルウエはここから動けないとして…あとはリュウと望だな」

「私はルウエと一緒にいるよ」

「わたしも」

「二人とも紅葉の方だな。よし、決まりだ。じゃあ、移動しようか」

「隣の部屋がいいだろ。俺たちがもともと取ってあった部屋だ」

「そうか。隣なら便利もいいいな」

「昼ごはん、そっちにも運ぶように言っておくから」

「ああ。頼んだぞ」

そして、美希お姉ちゃんの班は材料を持って隣の部屋に。少しだけ広くなった気がしたけど、ちよつと寂しいかも。

「八人でも手狭だったけど、さすがに十人は無理だったな」

「うん。ちよつと狭かったの」

「今晚の部屋割も考えないとな。聖獣たちは、悪いけど向こうに帰つてもらうとして…」

「ねえ、早く鞆の作り方、教えて！」

「ああ、そうだな。今はそれが最重要事項だ」

「ルウエの分は、私が作ってあげるね」

「うん」

「さて、まずは何を作るかだけど…」

「えっ、鞆じゃないの？」

「望やリュウはともかく、ヤーリエとルウエはまだ鞆に余裕があるだろ。無駄に大きい鞆は、逆に荷物になるだけだ。ピッタリの大きさでも困るから、少しだけ余裕があるくらいがいい」

「へえ」

「だから、望とリュウは今の鞆の拡張を、ヤーリエとルウエは小さな携行鞆を作ろう」

「はあい」「分かった」

「よし。じゃあ始めようか」

「はい、ちよつと待った」

部屋の戸が開いて、お兄ちゃんが入ってくる。

あとに続いて明日香、大和、薫も。

「ん？残りは？隣か？」

「ご名答。行つてらっしゃい」

「薫」

「はい」

薫は隣の部屋に回って。

お兄ちゃんに手に持ってた皿を下ろして、明日香と大和が背中から吊り下げてた袋を取る。

「薰って、身体が大きい分、力も強いな。オレら三人掛かりで半分やのに、あいつ一人でもう半分持っていきよるからな。びっくりするわ」

「びっくりしたのか？」

「んー。まあ、予想通りやな」

「それより、お昼ごはんは何なの？」

「なんや、望。治ってすぐそれか」

「ち、違うって！しかも、治る前だってそんなのじゃないし！」

「あー、はいはい」

「何よ、それ！私が食いしん坊みたいじゃない！」

「事実やし」

「食いしん坊じゃないもん！」

「ルウエ、リュウ。いつもこうなのか？こいつらは」

「うん」「そうだね」

「ええっ、即答！？しかも、二人とも！」

「まあ、どうでもいいから早く準備をしよう」

「どうでもよくないよ！ねえ、紅葉お姉ちゃん！」

狼の姉さまは、騒いでる望は無視して。

テキパキとお昼ごはんの準備を進める。

「それで、この料理は何なんだ？」

「それはご飯をパラパラに炒めたやつやな。なんや名前は忘れたけど」

「ふうん…。オレは初めてだな」

「そうなん？まあ、大衆食堂で短期やったときに覚えたやつやしな。もしかしたら、そこでしかやってへんのかもしれん」

「ほう…」

そのご飯を取り分けながら、材料とかを調べてるみたい。

ジツと見つめたり、匂いを嗅いだりしてる。

「そんな真剣にならんでも、作りたかったら教えるし」

「ん？そうか？こういう技術や味は盗めって言っけどな」

「ここは料亭でもなんでもないからな。いくらでも教えたるし」

「そうか。すまないな。それで、これはご飯と卵と…あとはほうれん草と胡椒だけで作ってるのか？まあ、ほうれん草と胡椒は仕上げとして…実質ご飯と卵だけか」

「なんや、そこまで分かっるとるんかい」

「いや、それしか入ってないし、簡単に想像がつくだろ…」

「ホンマやったら肉とか海老とかも入れるんやけどな。まあ、しゃーない」

「ふうん…」

「ねえ、早く！お腹空いたの！」

「あ、ああ、すまない。ほら、まずはこれだ」

「食べていいの？」

「ん…まあ、全部揃ってからの方がいいかもな」

「じゃあ、もうちょっと待つの」

「ああ。もうちょっとだけ待ってくれ」

そう言っつて、またテキパキと取り分けていく。

…どれも美味しそうなんだぞ。

早く食べたいな。

「おかずに肉を回したから、こっちのご飯に肉が入らなかったのか」

「せやな。まあ、こっちのをちょっと減らして、そっちに回してもよかったかな」

「いや、これでちょうどよかったかもしれない」

「それやったらええけど」

「これって何の肉なの？」

「鹿肉や。朝から捕ってきたんやろ？」

「まあ、鹿が目的だったわけじゃないけどな。昼ごはんに出来ればいいと思って」

「紅葉お姉ちゃんが捕まえたの？」

「オレと大和だ。二人でやった方が楽だしな」

「へえ。大和もこういうこと出来るんだ」

「…どういうことだよ」

「だって、大和ってなんか鈍臭そうだもん」

「はあ…。全然分かってねえな、望は。俺の狩猟能力をそんじよそこの狼と一緒にしてもらっちゃ困る」

「ふうん…」

「あつ、信用してねえな！」

「だって、実際には見てないし」

「おう。じゃあ、また今度見せてやるよ」

「やめておけ。恥をかくだけだぞ」

「なっ！紅葉！」

「ワウ」

「あ、明日香…」

「あはは。確かに、そんじよそこの狼と一緒にしちゃいけないみたいだね」

「ち、違うぞ！本当に上手いんだからな！」

「うーん…」

大和の腕なんてどうでもいいから、早くごはんが食べたいんだぞ…。

ヤーリエとリュウも、もう待ちきれないみたい。

はあ…。

お腹空いたな…。

「あー、ちょっとずれてるな。もう少し全体を見ながら縫うんだ」
「えっ、あ、ホントだ…」

「望は目を近付けすぎだ。あと、こっちの縫い代の端と平行になるように縫えば、真っ直ぐになる。力を抜いて、ゆっくり縫えばいいから」

「はあい…」

「思ったより不器用だな、お前」

「そ、そんなことないもん…」

「誰だつて最初は下手だ。何回も失敗して、それから上手くなつていくんだろ」

「まあ、せやけど。それより、ほれ。出来たで」

「わあ、すごく綺麗なんだぞ！」

「どれどれ…。ふむ。縫い目も整っているし、角もちゃんと出てるな。合格だ」

「当たり前や。刺繍でもなんでも完璧にこなしたる」

「まあ、それはどうでもいいけど」

「ええんかい！」

「リュウ。お前はえらく豪快だな。もう少し縫い目を細かく出来な
いか？」

「……？」

「今の半分の幅で縫ってみる。その方が丈夫になるし」

「うん」

「ヤーリエはその調子だな。ただ、もう少し縫い目の幅を整えてみてくれ」

「分かった」

「望。また目が近いぞ」

「え？あつ、うーん…」

「大変ですね」
「まあな」

薫はリュウの鞆作りをジッと観察していて。

ときどき、縫い目の幅が大きいとか少しずれてるとか、そんなことを言っている。

「はあ…。しかし、面倒くさいものだな、裁縫ってのは。俺は出来なくて良かったよ」

「大和は裁縫をする必要もないしな」

「まあ、出来たとしても、なんやわけの分からんもん作り始めるやろし」

「何言ってるんだ。芸術的な完成度を誇るに決まってる」

「鞆に芸術も忍術もあるかい。便利なんが一番や」

「いや、芸術ではないが、流行りの模様や形というのがあるらしい。便利かどうかはさておき、持つだけで格好がつく…という鞆がな」

「あつ、知ってる。亀山鞆店とかのでしょ？人気の型紙師とかがいって、出せば流行るなんて言われてるんだ。偽物が出回るくらい、人気なんだって」

「流行ねえ。それでオレらが飯食えるんやったら、いくらでも乗ったるけどな」

「逆だね。ひとつ五万円とかするんだって」

「はあ！？五万！？アホちゃうか！」

「うん。でも、借金までして買う人もいるみたいだよ」

「狂ってるな…。五万ありゃ、五年は暮らせるぞ…」

「んー、私なら三年かなあ」

「はは、お前は結構な儉約家だな。普通なら半年といったところだけだ」

「はあ…。それでも信じられんわ…」

「まあ、何が価値のあるものなのかは人によって違う。借金をして

まで流行りに乗りたい、それに価値があると思う人もいる一方で、流行りなんて下らないと思う人もいる。十人十色、価値観もいろいろだ」

「せやけども、や。やっぱり納得いかんなあ……」

「はは、逆もまた然りだよ」

「うーん……」

五万円……。

想像がつかないけど、どれくらいなのかな。

そういえば、悠奈のあの銀貨はいくらくらいなんだろ。

望が前に何か言ってたんだけど……。

ヤーリエの鞆も完成して、リュウと望の鞆もあと少しといつと……。

薫は相変わらずリュウの鞆を見ているけど。

「リュウさま。少しずれてるよつに思います」

「ん？」

「もう少し右かと」

「んー？」

「薰って、結構きつちりしてるんだね」

「そうでしょうか」

「うん。私はどこがずれてるのか分からないし」

「お前は雑すぎるんやな」

「そ、そんなことないって……」

「まあ、しっかり集中するんやな。またずれてるぞ」

「えっ、嘘っ」

「ほれ、……」

「ホントだ……。またやり直しか……」

「……もう作業中に喋んな、お前は」

「うん」

また糸を抜いて縫い直す。

何回目だろ。

縫うのは望の方が速いのに、何回もやり直すから、結局リュウと変わらない。

…うん。

やっぱり、喋らない方がいいんだぞ。

「ふあ…。それにしても、予想外にヤーリエが上手かったな」

「ああ。オレもびっくりしたよ。ちょっと教えただけで、これだけ細かく真っ直ぐに縫えるとは思ってなかったな」

「どっかでやってたんとちゃう？」

「そうかもな」

狼の姉さまは、眠ってしまったヤーリエの頭を撫でて。

針仕事は疲れるって葛葉が言ってたし、ヤーリエも疲れたのかな。

「あ、せや、ルウエ。おやつ食べるか？」

「うん」

「おやつ！」

「リュウも食べるか？」

「うん！」

「望は？」

「私は、これが終わってからにする」

「ん。紅葉は？」

「そうだな。貰おうか」

「隣はどうかな…」

「まあ、いいんじゃないのか？向こうにも半分渡してあるんだろ？」

「せやったせやった。ほなら、心置きなく食べよか」

お兄ちゃんは横に置いてあつた袋を開けて。すると、すぐに良い匂いが広がる。

「蜂蜜飴と寒天、あとはどら焼き。どら焼きは村のおばちゃんからの差し入れや。ルウエはどれにする？」

「んー。じゃあ、寒天がいい」

「ほいほい。あとは好きに取れよ。いちおう一人ひとつずつはあるけど」

「じゃあ、わたしは蜂蜜飴にするの！」

「いや、飴は最後にしとけ。舐めるのに時間掛かるし」

「…うん。分かった」

「ヤーリエ。おやつだぞ。食べないか？」

「んー…」

「まあええやん。あとで望と一緒に食べさせたら？」

「…そうだな。じゃあ、先に食べようか」

「リュウはもう食ってるけどな…」

「んう？」

どら焼きにかじりつきながら、首を傾げるリュウ。モグモグとしながら、お兄ちゃんの方を見る。

「あー、ええつて。食べるとき」

「うん」

「…それにしても、二班に分かれてるなんて、よう分かったなあ。私ですか？」

「ああ。普通、半分に分けよなんて思わんやん。ひとつの料理はひとまとめにして運ぶやろ」

「人数と部屋の大きさを比べてみて、指揮官の方々がどうするかを考えただけです」

「指揮官て…。ちょっと大袈裟やな」

「なかなか細かいところまで気が回るんだな。大和にも見習ってほしいものだ」

「大和、寝てるんだぞ」

「ああ。だから言ってるんだ。起きてたら五月蠅いだろ？」

「うん。それはそうだけど」

「こいつは図体と態度ばかり大きくなって、全く何の役に立たないしな」

そう言いながら、ピンと大和の鼻を弾いて。

大和は顔の向きを変えて、また眠る。

…こんな調子では、ホントに狼の姉さまが言ってる通りになっちゃうんだぞ。

「リュウさま、溢してますよ」

「うん」

「そういえば、お前はリュウと契約してるみたいに見えるな」

「えっ、あ、いや…。そういうわけでは…」

「気を遣っているんだろ。お前や望の邪魔をしてはいけないと」

「す、すみません…。出過ぎた真似をしまして…」

「いや、遠慮してくれるんはええけどな。そんなんでは、この先やっついていけんで」

「しかし…」

「しかしやない。今日これっきりや。これからはオレらに遠慮はするな。分かったな？」

「は、はい…」

ちよつと変なかんじ。

薫の方が大きいのに、お兄ちゃんに怒られて。

でも、遠慮してほしくないのは、そうなんだぞ。

これから、ずっと一緒にいるんだから。

「出来た！」
「おっ。見せてみる」
「うん」
「んー…。よし、なかなか上手く出来てるな」
「えへへ」
「一所懸命作ったんだ。大切に使えよ」
「うん！」

狼の姉さまから鞆を返してもらうと、リュウはそれをギュッと抱き締める。

うん。

可愛くて良い鞆だと思うんだぞ。

「はあ。さて、私もおやつにするかな」
「早く食べないと、夕飯が食べられなくなるからな」
「もう…。子供じゃないんだから…」
「ヤーリエは子供だ」
「あ、そうだった。ヤーリエがまだだったよね」
「ああ」
「ヤーリエ、起きなよ。おやつにしよ」
「んー…」
「ヤーリエ」
「んう…」
「ほら、起きて」
「ふあ」
「おやつにしよ」
「うん」

ヤーリエは目を擦りながら大欠伸をする。
次に伸びをすると、頭をフルフルと振って。

「おやつ」

「うん。はい、これ」

「あっ」

「え？どうしたの、リュウ？」

「お茶飲むの忘れてた」

「お茶…」

「お茶か…。よし。じゃあ、淹れにいこう」

「うん」

「オレは番茶がええな」

「一人一人の希望を聞く余裕はない」

「ほいほい…」

「わたしは玉露入りがいいな」

「玉露か。あればいいけどな」

「うん」

「なんや、リュウの希望は聞くんかい」

「今から淹れに行くのはリュウだ。ここでジッと待ってるだけのお前とは違うんだよ」

「よっしゃ。そこまでゆうんやったら、オレも行く」

「好きにすればいい」

そして、三人は部屋を出ていった。

お兄ちゃん…。

なんか、大人げなかったんだぞ…。

「ホント、子供だよな。すぐにムキになっちゃって」

「うん」

「紅葉さまの挑発が、よほど頭にきたんでしょうね」

「うん。短気だよ〜」

「はい」

望はどら焼きを取って薫にもたれかかる。

そして、寝心地を確認してから、どら焼きを食べ始める。

「望さま。行儀が悪いですよ」

「んー。それより、薫ってフサフサだよ。私、龍って鱗ばかりだと思ってたんだ」

「割合としては二八といったところです。鱗の龍の方が多いですね」

「へえ、そうなんだ」

「龍は、私のような聖獣を含めても、なかなか見掛けないですけどね」

「前に、緑龍を見たんだぞ」

「あ、そうだったよね」

「緑龍ですか。あれは鱗ですね」

「うん」

「そうだ。龍と言えば、クノさんの聖獣も黒龍だったよね」

「うん。千早」

「ミコトも薫も黒龍だけど、黒龍ってそんなに多いの？」

「龍の中では一般的ですが、だからといって数が多いわけでもないです。一番数が多いとされてるのは、さっき言ってた緑龍ですね」

「へえ〜。そうなんだ」

「ええ。あと、千早はうちの末っ子です」

「えっ、兄妹なの？」

「はい。まあ、クノさまにベッタリのようなので、最近はなかなか会えないんですが…」

「会いたい？」

「そう…ですね。クノさまに迷惑を掛けていないか心配ですし…」。

でも、千早がクノさまのことを大好きでくつついているのなら、それはそれでいいです。私が口出しすることでもありませんし」

「そっかあ。複雑だね」

「千早のしたいようにすればいいと思うんです。まだまだ子供ですが、クノさまなら安心して預けられます。他力本願と思われるかもしれませんが、クノさまにいろいろと教えてもらえばいいと考えているんですよ。一度しか会ってないですが、クノさまなら信じられる。そう確信してます」

「へえ〜。やっぱりすごいな、クノさんは。でも、の通りだと思うよ。クノさんは誠実だし、しっかりしてるし、一途だし」

「一途…ですか」

「あ、いや、なんでもないよ。それは忘れて」

「は、はあ」

「うーん…。私も、クノさんみたいなお兄ちゃんが欲しかったなあ」
「望さまは、一人っ子さんですか？」

「ううん。兄弟はいっぱいいるよ。ルウエモリユウも、みんなみんな」

「血の繋がった兄弟は…」

「それは分かんない。でも、血の繋がりなんて関係ないと思う。私は実の兄弟以上に、みんなのことを兄弟だと思ってるつもり。いるかどうかも分からない血の繋がった兄弟のことを考えるより、ここにいる兄弟を想いたいから。想ってるから」

「…すみません。変なことを聞きました。どうか、ご容赦のほどを」

「別にいいよ。薫は、私のお兄ちゃんでしょ？」

「わ、私ですか？」

「うん」

「私は…」

モゴモゴと何かを言おうとする薫に、もう一度もたれかかって。

食べさしのどら焼きを薫の口に突っ込んで、何も言わなくていいこ

とを示す。

「はあく。良い寝心地」

「んぐ……」

「ものを口に入れたまま喋らない」

「……………」

「そうそう。それでいい」

「望お姉ちゃん、寒天食べていい？」

「いいよ。私のも食べなよ。私はもういいから」

「分かった。ルウエも欲しい？」

「うん。ちよつとだけ」

「じゃあ、半分こにしよっか」

「うん」

ヤーリエは匙で寒天を上手く半分_に切つて、さらに小さく切った切れ端を口のところまで持ってきてくれる。

さっきも食べたけど、やっぱり掛けてある蜂蜜は絶品で。

「美味しい？」

「うん！」

「えへへ。よかった」

「ほら、ね？」

「…はい。そうですね」

「え？何か言った？」

「ううん、なんでも」

「ええ。何もありません。どうぞ、おやつ_の続きを」

「うん」

望と薫は、顔を見合わせて笑っていた。

どうしたのかな。

何か良いことがあったみたいに。

…まあいいか。

それより、リュウたち、早く帰ってこないかな。

お茶が欲しくなってきたんだぞ。

今日の夕飯は、ご飯に焼き魚、南瓜の煮付けだった。

「ごめんね。南瓜の煮付けばかりで」

「いえ。みんな大好きだもんね」

「うん」「好き」

「そう？でも、ごめんね」

「うん」

「それで、話は変わるけど、そっちの大きいのは何？」

「あ、お構いなく。私はもう食べてきたので」

「お構いなくって…構いたくなくても構っちゃうよ」

「す、すみません…」

「ていうか、そうじゃなくて。あなたは誰かって聞いているの」

「あ…失礼しました。私は、薫と言います。今はルウエさまと契約しており、あとは…」

（わたしのお兄ちゃん！）

「ミ、ミコト…。あとは、クノさまにもお伝えさせていただいております」

「ふうん…。少し間が抜けていて気が弱いけど、真面目でしっかり者…ってところなのかな」

「たぶんそうです…」

「なんで分かったの？」

「最初、大きいのは何かって聞いたとき、普通は自己紹介でしょ？初対面なんだし。それが間が抜けてると思ったところ。あと、自己紹介中もミコトに割って入られるところで、気が弱いと見た。でも、さつきからの態度とか言動を見ると、真面目でしっかり者ってことが分かる」

「へえ…。すごい」

「でしょ？もつと褒めてもいいのよ」

「分かった。お姉さんは、すぐに調子に乗る性格やな」

「もう、お姉さんだなんて…。もつと言つて〜」

「ほれ、また調子乗る」

「ははは。まあ、そうだね。調子乗りかもしれないね」

「かもしれないやのうて、調子乗りやろ」

「んー、どうかな」

「はあ…」

「ため息つかないの。いつか良いことあるぞ」

「お姉さん、おかわり」

「はいは〜い。偉い望ちゃんには山盛り入れてあげよう」

望の茶碗を受け取ると、これでもかというくらい山盛りにして。

…なんだか、ご飯の塔みたい。

「はい、どうぞ」

「あ、ありがとうございます…。重…」

「リュウはいる？」

「んー。まだ大丈夫なの」

「そう？欲しくなったら、遠慮なく言いなさいよ」

「うん」

「さてさて。それで、話を戻すけど、ルウエに布団がついてきているのはなんで？」

「今まで一回もそんな話はしてへんかったけどな…」

「私との契約の際に相当消耗してしまい、体力が回復しきってないんです。それで、朝は全く動けなくて…。今はある程度動けるとはいえ、私が布団ごと運ばせてもらいました」

「そう。大きいのも意外と便利ね」

「はい。ルウエさまのためです」

「ルウエのために大きくなつたんとちゃっやろ…」

「え？」

「はは、いいじゃない。細かいことは」

「ホント、細かいよね」

「望が大雑把すぎるんやろ」

「私限定!？」

「ああ」

「お前ら、五月蠅いぞ。ごはんくらい静かに食べ」

「いや、これから五月蠅くなるところや」

「どうでもいいから、黙って食べ」

「はあ…。しゃーないな…」「はあい…」

「紅葉は統率者だね」

「そんな大したものじゃない」

「謙遜しちゃって」

そう言いながら、狼の姉さまの頬を突つく。

狼の姉さまは面倒くさそうに払いのけるけど、嫌ではないみたいだった。

「お姉さん、おかわり」

「はいはい。山盛りね」

「うん」

響の茶碗に、また山盛りのご飯を入れて。

…どうやったら、あんなに高く出来るんだろ。

不思議なんだぞ。

ユラユラと揺れる。

目の前には川が流れていて。

暑いから、布団は狼の姉さまに持って帰ってもらった。

「こつちに何かあるんですか？」
「なんで？」
「急に、川に行きたいって言ったから…」
「来ちゃダメなの？」
「いえ、そういうわけでは…」
「じゃあ、別にいいじゃない」
「は、はあ…」

薫の背中を叩くと、渋々といったかんじで歩き始める。

川の音と薫が砂利を踏む音が重なって、なんだか不思議なかんじ。

「ルウエさま…。早く帰って休養なさった方が…」
「薫は、自分と一緒にいるのはヤ？」
「いえ、そういうわけでは…。私とこうして出掛けることにより、ルウエさまが身体の調子を崩されたりしたら、私はもうルウエさまに合わせる顔がありません。体力を消耗して、身体も弱っているんです。あまり無理をなさらないように…」
「それなら大丈夫なんだぞ。もう元気になったから」
「しかし…」
「あつ。あれ！」
「え？」

川の上流の方に、何か光るものが見えた。
蛍のようで、蛍じゃない。

「闇に生きる者…シウベですね」
「シウベ？」
「ええ。闇を色濃く受け継いでる者にしか、本当の姿は見えないと聞きます」

「ふうん」

「私は何度見ても淡い光の塊にしか見えないのですが、実際は美しい蝶らしいのです。ヤーリエの友人に聞いたのですが」

「蝶々…。見てみたいんだぞ」

「そうですね」

「…ねえ、向こうに行ってみてよ」

「はい。分かりました」

薫は、また静かに歩き始める。

さつきシウベが見えたところに近付くにつれ、その数も次第に増えてくる。

「いっぱいいるね」

「はい。シウベは基本的に群れで生息しているそうです。そして、闇に反応して光る…」

「どうしたの？」

「闇に反応して光るということは、闇がなければ光らないということですよ。つまり、このあたりに闇がいるということ…」

「……？」

「でも、気配がしない。どういふことなんだ…？」

「どういふことなの？」

「どういふことだろうな」

「……！」

薫は大きく翼を広げて、一瞬で空中に舞い上がる。

油断なく周りを見回して、相当警戒している。

と、川原のすぐ横の草むらが動いて、見たことのある蒼い龍が出てきた。

「降りてこいよ。取って食ったりしないから」

「あ、ルト」

「知り合いなんですか？」

「うん。ヤーリエの聖獣なんだぞ」

「ヤーリエさまの……」

少し怪しみながら、薫はゆっくりと降りていって、ルトから少し離れたところに着地する。

そして、まだ気を抜くことなくルトを睨んでいて。

「嫌われたものだな」

「あなたは、油断ならない方です」

「初対面で、そもはつきり言われたのは大和以来だ」

「こんなところで何をしてたんですか？」

「んー。ちよつと夜風に当たりにな」

「本当のことを言ってください」

「本当のことを言ったところで信用しないだろ。まあ、いちおう言っておくなら、調査だ。病気の原因を調べている」

「病気の原因？」

「お前は今朝ルウエと契約したばかりだから知らないかもしれないな。まあ、あとで悠奈か七宝あたりに聞くといい」

「……？」

「闇に生きる者。しかし、これは違うようだ。鱗粉にも、闇に生きる者自身にも、病気の原因となるようなものはない」

「じゃあ、何が……」

「さあな。まだ分からない。でも、すぐに見つけ出してみせる。ユウクも頑張ってるみたいだしな。負けてられない」

「ユウク？」

「そうか。ルウエは会ってないな。ユウクは、ヤーリエと望の病気を治してくれた医者だ」

「ユニディナ旅団の人？」

「そうだ。ユンディナ旅団の医者だ」
「ふうん……」

ユンディナ旅団のユウク……。
ヤーリエと望の病気を治した、すごい人……。

「まあ、闇に生きる者の調査も終わった。帰るとしようか。風邪でも引くといけないし」

「うん」

「薫。帰るぞ」

「……………」

「はあ……。まったく……。気を付けるよ、ルウエ。こつこつ頭の固いやつは、なかなか扱いにくいからな」

「なっ！」

「うん。分かった」

「ル、ルウエさま!？」

「ふふふ。薫、早く帰ろ？」

「は、はあ……。いえ、しかし……」

背中を叩いて催促すると、納得いかないというかんじでゆっくり歩き始める。

そのあとに、ルトもついてきて。

…薫が頑固者でもないってことは、たぶんルトも分かってる。

ちよつと冗談を言っただけ。

でも、薫だけが分かってなかったんだぞ。

なんだか、ちよつと面白い。

シウベが見守る中、ゆっくりと闇の中を帰っていった。

「ふあ…あふう…」

「今日は動けそうか？」

「起き抜けにそれはないでしょ…」

「ん？そうか？」

「ルウエ、おはよ」

「うん。おはよ、なんだぞ」

「朝ごはん食べる？」

「うん」

「お粥やのうてもええんとちゃうん？昨日の夕飯はちゃんと食ったし」

「大事を取らないといけないでしょ」

「んなこと言つてもなあ…」

「お粥でいいんだぞ」

「ほら」

「なんで得意顔やねん…」

「お兄ちゃんなんて放っておいて、朝ごはんにしよっか」

「うん」

「お前ら…」

器に被せてあった布を取って、匙でかき混ぜる。

それから、一杯すくって口のところにまで持ってきてくれて。

「あーんして」

「あーん…」

「はい、どござ」

「んう」

「…子供やな」

「子供じゃないもん！」

「望、次」

「あ、うん」

「はは、怒られとる」

「お兄ちゃんのせいだからね！」

「ほいほい」

「むう〜……」

なんか楽しそう。

でも、早くしてほしいんだぞ……。

望、さつきからかき混ぜてばかり……。

「望」

「あ、ああ。ごめん……」

「……もう自分で食べるんだぞ」

「えっ、あ、大丈夫。大丈夫だから」

「……………」

「あーあ、怒らせよった」

望はキツとお兄ちゃんを睨んで。

それで、またかき混ぜてばかり。

もう……。

いつになったら、次が食べられるのかな……。

狼の姉さまとヤーリエとリュウが、朝ごはんから戻ってきた。

今日のお粥も、狼の姉さまが作ってくれたみたい。

「どうなることかと思っただけど、二人とも良くなってよかったよ」

「せやな。まあ、ユウクとたまたま一緒になっただって運もあるやろ」

けど
「ああ」

頷いて、狼の姉さまは外を見る。
気持ち良い風が、ふわりと顔を撫でた。

「それにしても…この村はいいな。落ち着く」
「いろはお姉ちゃんは、いつも落ち着いてるの」
「ん？そうか？」

「まあ、オレらん中では一番落ち着いてるやるな」
「どうも」

「ほんで？なんで落ち着くん？」

「オレの故郷に似てるからな。ここは」

「ふうん。どこなの？」

「それは秘密だ」

「ええ…」

「知っても面白くないと思うぞ。ここと同じ、山と森に囲まれた場所だ」

「へえ…」

「山と森が好きなのか？」

「そうだな。でも、ここは特に似ている」

「どこに？」

「秘密だ。…なかなかにしつこいな、お前たちも」

「口を滑らせることもあるかなあとか思ったり」

「そうか。口を滑らせなくて残念だったな」

「まあ、一回滑らせとっただけだな」

「えっ、いつ？」

「内緒や。注意が散漫なお前が悪い」

「ええ…」

「お前も、あまり細かいことを覚えてると、嫌われるぞ」

「残念やったな。これ以上嫌われへんわ」
「ふふ、そうか」

狼の姉さまはゆっくりと笑って。
「楽しそうなんだぞ。」

「せや。お前らは、これからどこに行くつもりなん？」

「ルイカミナだろうな。順当に考えれば」

「まあ、せやるな」

「ああ」

「でも、シュリウも山を越えるだけじゃない。そっちには行かないの？」

「山越えるんと同時に国境も越えやなあかんやろ。越境証明はルイカミナしか発行してへんし、どのみちルイカミナに行かな」

「あ、そつか。ヤーリエも越境証明は持ってないのか」

「うん。でも、通行証はあるよ」

「んー…。でも、なんで証明書ってひとつにまとめたりしないのかな…。管理も面倒だし…」

「ひとつにまとめたら、別々にするより申請、認証に時間が掛かるし、その場合、たとえば通行証だけでいいという人はそれだけ余計に待たないといけないだろ」

「そういう人には、個別で発行すれば…」

「それなら、最初から別々の方が便利だろ？」

「う…」

「まあ、ひとつにまとめたら、一個なくしてもたらどうにも首が回らんようになるしな。特に、お前みたいなおつちよこちよいは」

「おつちよこちよいじゃない！」

「…おつちよこちよいかどうかは置いといて、管轄が違っつていうのも大きな理由だろうな。越境証明は組合の管轄だし、通行証は各街の管轄だ。分割しすぎるのも問題だが、管轄をひとつにまとめる

と規模が大きくなりすぎて、逆に管理が行き届かなくなる。何事もほどほどが一番ということだな

「へえ……」

「ちゃんと分かってんのか？」

「わ、分かっているよ……」

「それやったらええけど」

望は、少し不機嫌そうに尻尾を振る。

それを見て、狼の姉さまは面白そうに笑って。

「ふあ……」

「リュウには退屈な話だったか」

「うん……。分かんなかった……」

「今すぐ分かる必要はない。焦りは禁物。ゆっくり分かれればいいんだから」

「うん」

「まあ、望はゆっくりしすぎやけどな」

「だから、理解出来てるって！」

「ホンマかなあ……」

「もう！」

「まあいいじゃないか」

「せやせや。話進まんし」

「お兄ちゃんが悪いんでしょ！」

「ほいほい」

「……不毛だな」

「うん」

狼の姉さまとヤーリエは、もう呆れ顔で。

「……お兄ちゃんはいつでも喧嘩になるようなことばっかり言って、望はいつでもそれに乗っかるから喧嘩になるんだぞ。」

大和もそうだけど…。
どうにかならないのかな。

「まあ、あの二人は置いて、次の話にしようか」

「えっ、紅葉お姉ちゃん、酷い！」

「二人で楽しそうに喧嘩してるじゃないか。そのままやっておいでくれないぞ」

「楽しくないって！」

「望相手やと喧嘩にもならんわ」

「なっ！」

「そら。またお前はそうやって挑発するだろ。それがダメだってことが分かってないのか」

「うっ…」

「望も、いちいち分かりやすい挑発に乗って。冗談だと思って、軽く聞き流すくらいしてみたらどうなんだ」

「だって…」

「だっても待ってもない。今言われたたことが出来てない間は、お前たち二人とも身体の大きな子供だ。反論があるなら言ってみろ」

「……………」

「まったく…」

やっぱり、狼の姉さまが一番大人なんだぞ。

それは分かる。

…でも、二人が怒られてるの、ちょっと面白かったんだぞ。
リュウは、もう寝ちゃってるけど。

望はシュンとして、お兄ちゃんは外を眺めていた。

「薫、もっと速く!」

「はいはい…。分かりましたから、あまり叩かないでください…」

「しかし、でつかい乗りもん手に入れたなあ」

「薫は乗り物じゃないでしょ…」

「乗ってるやん、実際」

「そうだけど…」

「薫は乗り物としてここにいるわけではないと言いたいんだろ。私だつて、同じ意見だけど」

「うん」

「いえ、乗り物で結構ですよ。楽しいですし」

「ええんやて」

「うーん…」 「そうか…」

望と美希お姉ちゃんは、納得がいけないという風に首を傾げる。

乗り物…

何が納得いかないのかな。

「お兄ちゃんより高いんだぞ」

「せやな。見える世界もちやうやろ」

「うん!」

「まあ、わたしなら、もっと高くまで飛べるけどね」

「何を張りおうてんねん…。そんなんゆうたら、こいつだつて飛べるやろ…」

「あ、そつか。つまんないの」

「つまるつまらんの問題かいな…」

「響は、意地っ張りだもんね。負けず嫌いだし」

「光もわたしに負けず劣らずだと思つよ」

「そ、そんなこと、ないもん！」

「ほら、意地っ張りの負けず嫌い」

「…いや、今のは違うと思うけど」

「え？」

「今のはただの否定だろ？意地っ張りとかは関係ないじゃないか」

「ふう…。さすが翔だねえ。光の擁護をするなんて」

「別にそういうわけじゃ…」

「こいつら、好き合っとするんか？」

「うん」

「ひ、響…」

「いいじゃん。間違っではないんだし」

「ひゅ〜。熱いねえ。火傷するわ」

「あまり冷やかしてやるな。気の弱いやつらだから」

「ほいほい」

光は俯いて、翔お兄ちゃんはそっぽを向いてほっぺたを掻いている。

狼の姉さまが言う通り、気が弱いのかな。

普段はそうは思わないけど…。

「で、なんの話やったっけ」

「薫の話だろ」

「ああ、せやったせやった。薫、子供ら落としたらあかんで」

「そんなことになれば、自ら責任を取ります」

「もう…。薫は真面目なんだから、そういう話はダメだっけば」

「真面目？クソ真面目の間違いやろ」

「そうだけど…」

「の、望さま…」

「大丈夫大丈夫。落ちそうになっても、光が助けてくれるから」

「あ、うん。任せて」

「そうか。白龍か。なるほどな」

「えっ。紅葉お姉ちゃん、どういうこと？」

「白龍は、風の扱いが最も上手いとされている。風というのはつまり、飛ぶ能力だ。龍の場合、風の扱いが上手ければ上手いほど、空を飛ぶ能力も上がると言われている」

「へえ」

「龍自身、風の扱いが上手いのは確かだけど、白龍はさらに術式の適性が高くなりやすいみたいだから、制御も上手いんだよね。わたしなんか、ただ単にぶっ放して勢いをつけてるだけだから無駄が多くて。逆に、リュウならそのぶっ放しの力を最大限に活かせると思うよ」

「赤龍は、瞬発力だけなら他の追隨を許さないらしいな。言い方は悪いが」

「そうなの？」

「リュウが聞いてどうすんねん…」

「リュウはまた桐華や遙に術式の使い方教わるといい」

「うん。分かった」

「ふあ…。しかし、なんもないな…」

「木があるじゃないか。草も道もある」

「そういう意味ちゃうやろ…」

「何気ない風景にも、いろいろな発見がある。それを楽しめてないだけだ」

「そうは言うけども…」

「じゃあ、この花。お前はどう思う？」

「ユタナの花か？せやな…。どうしても腹減ったら、蜜舐めたりするかな…」

「まあ、そうだろうな」

「蜜があるのか？」

「ああ。そら、舐めてみる」

狼の姉さまが、いくつか摘んで渡してくれた。

リュウたちにも、ひとつずつ渡して。
花びらを取って、その根元を舐めてみる。

「あ、なんか甘い」

「うん。ちよっと甘い」

「え、全然甘くないよ」

「甘くない…」

「じゃあ、甘くなかった二人は、こっちを舐めてみる」

ヤーリエと弥生は、もうひとつずつ別の花を受け取って。
また同じように花びらを取って舐める。

「あ、甘い」

「ホントだ」

「じゃあ、ここで問題。甘い花と甘くない花の違いは？」

「えっ、えっと…」

「花の中身がちよっと違うの」

「あ、ホントだ」

「そうだな。ユタナの花には雄花と雌花があって、雄花に蜜があるんだ。そして、よく似た雌花にはない。なんで、こうなってるか分かるか？」

「うーん…」

オバナとメバナ…。

同じ花なのに、蜜があったりなかったり…。

なんでなんだろう…。

「分かるか？」

「分かんない…」

「そうか。じゃあ、答えだ。ほら、あそこをしてみる」

「どじっ?」

薫は、よく見えるようにとしゃがんでくれて。

狼の姉さまが指したところにはユタナの花があって、花のところには小さな蜂がいた。

「あ、蜜蜂」

「蜜蜂だな。蜜蜂は何を集める?」

「蜜じゃないの?」

「脚のところをよく見てみる」

「え?何?」

「あ、黄色いのが付いてる」

「そうだな。じゃあ、それは何だ」

「えっと…」

「お花の花粉なの」

「よく知ってたな」

「えへへ」

「リュウの言う通り、あれは花粉だ。花粉っていうのは…まあ、花の中にある粉だと思えば間違いはない」

「大雑把だな…」

「いいじゃないか。それで、蜜蜂は蜜と一緒に花粉も集めてる。花粉は雄花にあつて、雄花には蜜もある。つまり、雄花の上にいる時間が長いんだな。その間に雄花は花粉をたくさん蜜蜂に付けていく。そして、満足すれば蜜蜂は次の花に飛んでいくんだ」

狼の姉さまが切ったところで、ちょうど蜜蜂は飛び立った。

次の花に止まったところで、狼の姉さまはまた説明を始めて。

「雄花と全く見分けがつかない雌花には、蜜も花粉もない。でも、花が種を作るために必要な種があるんだ」

「種の種？」

「ああ。その種の種に雄花の花粉が付くと、種になって実を付ける」
「花粉と種の種が合わさって、実になるの？」

「そうだな。なかなか理解が速いじゃないか」

「えへへ」

「他の三人も大丈夫か？」

「うん」「大丈夫だよ」「はい」

「よしよし。それで、雌花では蜜蜂に付いた花粉が種の種に付くだけがいい。長く留まる必要はないんだ。だから、蜜がなくてもいい」
「でも、蜜があつた方が、花粉が付くかもしれない時間が長くなるんじゃないの？」

「そうだな。鋭い質問だ。雌花にも蜜があつた方が花粉が付く可能性も上がる。でも、雌花は種の種から実を作るための力が必要なんだ。花粉を作るための力と、種の種を作るための力が同じだとして、さらに蜜を作る力を加えると、雌花が実を作るための力がなくなってしまうんだ。それなら、蜜を作つて力を使い果たすより、あとのために取つておいた方がいいだろ？」

「そっか。雄花も雌花も、一番上手く力を活用出来るように工夫してるんだね」

「良いまとめ方だ、ヤーリエ。オレが長々と説明するより、ずっといいんじゃないか？」

「そ、そんなことないよ」

「はは、謙遜しなくてもいいよ」

「ヤーリエのまとめ方、すごく分かりやすかつたんだぞ！」

「うん」「分かりやすかつた」

「えへへ…。ありがと」

ヤーリエは照れくさそうに頭を搔いて。

狼の姉さまも嬉しそうに笑っている。

「よし。オレから言いたいことも次で最後だから、よく聞いておけよ」

「うん」「分かった」

「ユタナの花から学ぶべきことは、自分の持っている力を最大限に活用しろ、ということだ。そうすれば、たとえ代わり映えのしない日常の中にも、新しいことを見つけられる」

「…強引なまとめ方だな」

「そうだな」

それでも、お兄ちゃんはそれから黙ったきりで。

また狼の姉さまに怒られたってことなのかな。

でも、さっきみたいなかんじではなかった。

うーん…？

「丹精込めて作れよ。百万里歩けるようにな」

「百万里歩いたら、どこに行くの？」

「ん？どこにだって行けるさね。これ履いて、好きなところに行っ
てきな」

「うん」

タンセイコメテってどういう意味かは分からなかったけど。
でも、たぶん一所懸命作れってことだから。
しっかりと、ワラを編み込んでいく。

「はは、ボウズ。なかなか上手いじゃないか」

「うん。姉さまに教えてもらったんだぞ」

「ほう。お前も農村出身か。どこだ？」

「ヤウト！」

「ヤウトか。良いところだな、あそこは。ユールオにも近いし」
「でも、旅を始めるまでユールオに行ったことなかったんだぞ」
「そうか。まあ、のどかで良いところだな」

「うん！」

おじさん、ヤウトに来たことがあるのかな。

自分は見たことないけど…。

でも、良いところって言うってもらって嬉しいんだぞ。

「おう、お前。お前は編み目が粗いな。もう少し細かく出来ないか
？」

「んー？」

「しっかり編んでいくんだ。目が詰まるように、力を入れて」

「入ってるの」

「じゃあ、入れ方がまずいんだな。どれ、ちょっとやってみな」
「うん」

リュウはいくつか編んでいく。

それを見ながら、おじさんは頷いたり唸ったりして。

「よし。分かった。お前は、ここで力を入れてるんだな。でも、こじやなくて、もう少し前から力を入れて編むんだ」

「……？」

「じゃあ、一緒にやってみようか」

「うん」

「お前は、ここで力を入れてる。分かるか？」

「うん」

「でも、力を入れるのは…ここからだ。ここから、一気に編む。分かったか？」

「なんとなく」

「よし。じゃあ、ちょっとやってみろ」

「うん」

リュウは、さつきよりずっと良い手つきで編み上げていく。

今度はちゃんと目も詰まっついていて。

「おお。なかなか飲み込みが早いじゃねえか。でもまあ…最初からやり直しとくか」

「うん」

「よし。じゃあ、次こそ上手くやれるように頑張れよ」

「うん！」

「良い返事だ」

「えへへ」

褒めてもらって、リュウは嬉しそう。
翼をパタパタさせてる。

「そっぴや、姉ちゃんたちはどこに行つたんだ？チビたちに草鞋作
らせて」

「農作業のお手伝いと、川で魚を釣ってます」

「うおっ、この龍、喋るのか」

「はい」

「ボウズが飼い慣らしたにしては、でかい龍だとは思つたが…。最
近の龍は喋るんだな」

「いえ…。そういうわけでは…」

「ふうん…。まあ、なんでもいいさ。で、農作業に魚釣りだつて？」

「はい。食材の都合をもらつているので、少しでもお役に立て
れば…とのことです」

「はあん。しかし、お客さんなんだから、そんなに気を使わなくて
もいいだろうに」

「おっちゃん、見て〜」

「ん？ちっこいのか」

「ちっこいのじゃないもん！弥生だよ！」

「はは、分かつた分かつた。それで？見せてみる」

「うん」

「ほう。なかなか上手いな。でも、ちょっと弛いから、もう一足な。
今度はしつかり力を入れて編んでみな」

「うん。分かつた」

「よし。それで、ヤーリエはどうだ。出来てるか？」

「うーん…」

「どれどれ」

ヤーリエの草鞋をじっくり見てみる。

ときどき唸ったりして。

「上手いな。ルウエと同じくらい上手い。ヤーリエもどこかで教えてもらったのか？」

「んー。覚えてないけど、作ったことがある気がするの」

「へえ。小さい頃に教わったのかねえ」

「分かんない」

「そうか。まあ、上手に出来てるから、その調子で続ける」

「うん」

おじさんは、それからもう一周見て回る。

小さく頷くと、土間の隅で待ってる薫の背中を叩いて。

「俺は畑に行くから、お前、こいつらを見ててくれるか？ 昼くらいには帰ってくるから」

「はい。分かりました。行ってらっしゃいませ」

「おう、頼んだぞ。じゃあな。頑張つて良い草鞋を作ってくれよ。

俺も、美味しい野菜を作ってくるから。分からないことがあれば、また呼んでくれ。すぐに帰ってくるからよ」

「うん」「分かった」

「おう。じゃあ、行ってくる」

「行ってらっしゃい」

手を振って見送る。

おじさんも、手を振ってくれて。

「さあ、続きといきましょうか」

「うん」

草鞋の続きを編む。

みんな、集中して。
自分も一所懸命作るんだぞ。

いつの間にか、全員分の草鞋が出来ていて。
身体を捻ると、背中ところが鳴った。

「はあ、疲れた」

「うん」

「でも、みんなの分、出来たの」

「上手く出来たよね」

「うん。上手く出来た」

「ふあ……。ちよつと疲れたの……」

「薫も寝ちゃってるし」

「暇だったんでしょ」

「見てるだけだしね」

「どうする？やることないけど」

「畑に行ってみるの」

「でも、薫が起きたときに誰もいなかったら、びっくりすると思っ
よ」

「じゃあ、言ってから行くの」

「起こすのは可哀想だよ」

「じゃあ、置き手紙？」

「薫って、字が読めるの？」

「分からないんだぞ」

「うーん……。もし読めなかったら大変だよね……」

「ふあ……。眠たい……」

「弥生、大丈夫？」

「うん……」

「あ。お昼寝大会にするの」

「大会…？」

「でも、まだお昼ごはんを食べてないんだぞ」

「大丈夫大丈夫。誰かが起こしてくれるから」

「そっか。それなら安心なんだぞ」

「うん。弥生、もう寝てるし。みんなで、ちょっとお昼寝しようか」

「はあい」「ふあ…」

そんな話をしていると、だんだん眠気が抑えられなくなって。

囲炉裏からちよつと離れたところで横になって目を瞑る。

薫が寝言で何か言ってた気がしたけど、すぐにそれも消えて。

目が覚めた。

望に起こされたからでも、じはんの良い匂いがしたからでもなく。

「ん……」

「起きたか」

「あ……。クノお兄ちゃん……」

「お前はよくここに来るな。境界が緩んでいるのか？」

「境界……？」

「ルウエ自身の世界とは違う、別の世界に迷い込むことはないか？」

「ん……。鏡の世界……」

「鏡の世界か」

「うん……」

「やはり、境界が緩んでいるのだな」

「境界って何なの……？」

「世界と世界の境目だ。境界が緩むと、他の世界へ行きやすくなってしまう」

「ふうん……」

「原因は何だろうな……。ここへ来てるうちは良いが、どこかおかしな世界に迷い込んでからでは遅いのでな……」

「ん……」

「しかし、境界を縫い止めるにはそれ相応の時間が必要です」

「ああ」

「あ……。薫……」

（わたしもいるよ）

「ミコト……」

「すみません。千早も連れてこいとのことでしたが……」

「いや、大丈夫だ」

「何かあるの？」

「少し、話がしたくてな。呼んでいたんだ」

「ふうん…」

「それで、お話というのは？」

「ふむ、そうだな…。昨日一日、ルウエと一緒にいてどうだった」

「はい。今までとは違う、充実した一日でした」

「薫。これは仕事の報告じゃないんだ。もっと柔らかく言えないのか」

「そう言われなくても…」

「ミコト。もう悪さはしてないか？」

「うっ…。クノさま、知ってたの？」

「こら、ミコト。クノさまに対して、なんて言葉遣いをするんだ」

「……？」

「これくらいがちょうどいいよ。逆に、薫が固すぎるのだな」

「クノさま…」

「ねえねえ。あのね、弥生が櫛で綺麗に鋤いてくれたんだよ！」

「ほう。そうか。でも、毎日でもやってもらわないと、お前は元気がいいからな」

「(うん。弥生にも同じこと、言われたよ)」

「はは、そうか」

「あの…クノさま」

「ん？」

「私たちを呼んだ目的は…」

「そんなの、どうだっていいじゃない」

「ツクシ！」

フワリと風が吹いた。

そして次の瞬間、目の前に赤い狐が現れて。

「初めまして、ね。あの人と契約したのはあなた？」

「うん」

「そう。可愛いお嬢さんね。長老さまのたてがみがお気に入りなのかしら？」

「うん。大好き」

「それは良かった」

ペロリとほっぺたを舐めてくれて。

…似てる気がした。

全然違うけど、でも、似てる。

「ツクシお姉ちゃん」

「ん？どうしたの？」

「薫のこと、好き？」

「ルウエさま…！」

「ふふふ。そうねえ…。秘密、かしら」

「うん」

やっぱり似てる。

なんとなく似てる。

「よう、ツクシ。久しぶりじゃねえか」

「あ。大和」

「ん？ルウエ？ここにいたのかよ」

「うん」

「みんな、もう昼ごはん食べてるぞ。ルウエが起きないか待ってたけど」

「うん」

「大和が来たってことは、土以外のいろんなところにも声を掛けたってことね」

「今日は久しぶりに、ゆっくり話したいと思ってな。わざわざ来

「てくれてありがとう」

「まだまだ来るから、それはみんな集まってからにしてくれ」

「大和！なんて言葉遣いを！」

「あー、五月蠅いのがいるな…。ルウエ、連れて帰ってくれねえか？」

「んー…」

「お前が言葉遣いを改めればいい話なのではないか？」

「おお、タルニア。よく来てくれた」

「私はもう、我が主よりカイトという名を頂戴しているのだ。出来るなら、そっちで呼んでほしいものだが」

「そうか。しばらく見ないと思ったら、とうとうお前も契約を取り付けてきたか」

「すまないな、迅。あまり構ってやれなくて」

「ははは。やはり、お前は主に尽くすような性格だったな」

「私自身も驚いているよ。こうも、我が主のことを考えずにはいられなくなるのかと思っつてな。契約すると、見る世界が変わるといのは本当だったのだな」

「契約するまでは、にわかには信じがたい話であるのに、実際にしてみると本当だということが分かる…。だろっ？」

「ああ」

「カイトは望のことが好きなの？」

「ああ。ルウエが望を好きなのと同じくらいにな」

「うん」

「望というのか、主の名前は」

「そうだ。しっかりしてはいるが、ところどころ抜けていたりしてな」

「面倒見の良い子なんだな」

「ああ。本当に」

カイト、望の話になるとすごく楽しそう。

自慢の主ってことなのかな。
薫たちは…どうなんだろ。

「心配しなくても大丈夫よ。みんな、ルウエちゃんのことを好きだから」

「なんで、ツクシお姉ちゃんは分かるの？」

「私も契約してるからね。私は、今のご主人さまが大好き。だから薫も、ルウエちゃんのことを好きだと思うの」

「…うん」

「だから、大丈夫だよ」

「うん。ありがとう」

自分も、薫のことが好きだから。

そういえば、ツクシお姉ちゃんのご主人さまって誰なのかな。きっと、とっても優しい人なんだぞ。

「あ、そうそう。琥珀のことなんだけど」

「うん」

「あの子、ちゃんと世界に定着出来たよ。向こうの世界に行くのはまだ無理だけど…。でも、そのうちに行けるようになるから。ルウエちゃんのお陰だよ」

「琥珀が頑張ったからなんだぞ」

「まあ、それもあるかな。ずっと、ルウエちゃんとお話したいって言ってたし」

「ツクシお姉ちゃんが、一緒にいてくれたの？」

「うん。長老さまの代理って、結構暇だからね」

「本人を目の前にして、それはないだろう」

「あはは、失礼しました」

ツクシお姉ちゃんがそんな軽い感じで謝ると、ジンお兄ちゃんも

仕方ないなといった風にため息をついて。

…ジンお兄ちゃん。

カイトが、そう呼んでた。

誰に名前を貰ったんだろ。

また今度、聞いてみようかな。

目が覚めると、火の燃える匂いがした。
あたりを見回すと、周り一面、何もなかった。
ただ、焼け焦げた地面だけがあつて。

「……………」

どこなんだろ…。

どこの…世界…？

「ルウエさま」

「あ、薫」

「帰りましょう。ここはルウエさまの世界ではありません」

「じゃあ、誰の世界？」

「誰の世界でもない、終焉の地です」

「シユウエン…？」

「この世界には何もありません。見た通り、焼け焦げた地面と赤い空だけの世界です。…この世界は死んでるのです」

「なんで…？」

「理由は…分かりません。しかし、こうなる直前、何か大きな戦があつたと聞いています。クノさまが、まだ小さかつた頃の話だそうですが」

「ふうん…」

どれくらい前の話なのかな。

でも、何も無いなんて寂しいよ…。

何かないか、もう一度見回してみる。

すると、ずっと向こうに煙が見えた。

どれくらい向こうかは分からないけど…。

「…行ってみますか？」

「うん」

しゃがんでくれた薫の背中に乗って。

煙に向かって、走っていく。

「どれくらい向こう？」

「三里はありますね」

「三里…」

「すぐに着きますよ」

一里でも遠いの…。

でも、薫の言う通り、煙はどんどん近付いてきて。本当に、あっと言う間に着いてしまった。

「燃えてる」

「はい。燃えていますね」

そこにあっただのは、何かの木。

ほんの小さな木。

でも、燃えてる。

「なんで燃えてるの？」

「この世界の空気は、血が沸騰するくらい熱いんです。今は、私がこのあたりの空気を統制して、温度や成分を変えているのですが…。本来ならば、数秒ともちません」

「ふうん…」

「この木は、空気中に含まれるほんの僅かな水分を取り込んで、自

身が燃えないよう維持出来るように進化したのですが、風で水分が飛んでいたりして、一瞬でも取り込めない瞬間があると、こうやって干からびてしまい、すぐに燃えてしまふんです」

「……………」

「僅かな水分を使うという特性上、たくさんで集まって育つということが出来ません。だから、この木が育っても、もうこの世界は助からないのです」

「そんなの……………」

「しかし、これが、この世界の現実なのです……………」

そんなのって哀しいんだぞ……………。
なんで……………こんな……………。

「……………帰りましょう。この世界は、ルウエさまには毒です」

「……………」

「帰りましょう……………」

薫は大きく翼を広げて、空に舞い上がる。

赤い空は、ずっと赤かった。

何も無い世界は、どこまでも何もなかった。

ただ、木だけは燃えていて。

最後にもう一度羽ばたくと、薫は静かに地面に降りた。
今度は、自分の世界に。

「あ、ルウエ。起きた？」

「……………うん」

「目を覚まさないから、びっくりしちゃったよ。でも、薫が大丈夫だって言うから」

「……………」
「お腹空いてるでしょ？」
「はん、食べなさいよ」

「……………」
「どうしたの？」

「望……」

「ん？」

「望は、望……？」

「……………？どういう意味？」

「分かんない……。分かんないけど……」

なぜか、涙が溢れてきた。

いくら袖で拭いても、どんどん溢れてきて。

「ルウエ……」

「起きたらね、焼け焦げた世界にいたの……。どこを見ても何もなくて……。それでね、煙が見えたから行ってみたら、木が燃えてたの……。空気が熱くて、水がなくなったらすぐに燃えるって……。でもね、その世界ですつと昔に大きな戦があって、それでそんなになっちゃったって……」

「それで怖くなったの？この世界もそうなるんじゃないかって」

「うん……」

「そっか」

そう頷くと、望はギュツと抱き締めてくれた。

望の心臓の音が聞こえた。

ゆっくりりと、優しい音が。

「……………」

あの世界みたいになるのは怖い……。

戦で終わってしまった世界…。
でも、今、この世界はここにあるから…。
戦はあるけど…でも、まだここにあるから。

「落ち着いた？」

「…うん」

「よかった」

「……………」

「私もね、怖い夢を見て不安になったとき、美希お姉ちゃんにこうやって抱き締めてもらったんだ。そしたら、不思議と落ち着いて」

「うん…」

「だから、私もルウエを抱き締めてあげる」

「…うん」

美希お姉ちゃんから望へ、望から自分に来たんだ。

美希お姉ちゃんは、たぶんその前の人から。

その前的人是、もっと前の人から。

だから…こんなに温かい。

「…すみません、ルウエさま、望さま」

「なんで薫が謝るのよ」

「私が付いていながら、ルウエさまをあのような世界に迷い込ませてしまつて…。また、それにより、望さまのお手を煩わせることにもなつて…」

「私は、煩わしいとは思わないよ。だって、私の大切なルウエのとだもん」

「薫がいなかったら、自分、あの世界で死んでた…。それに、望に抱き締めてもらえた。自分も、薫が悪いなんて思つてないんだぞ」

「うん。薫は固すぎるんだよ。もうちょっと柔らかくならないの？」

「そう言われましても…。しかし、それは置いておくとしても、今

回の事態は予防出来たことです。私の不手際には間違いありません。なんなりと罰をお申し付けください」

「もっ…。ルウエ、どうする?」

「んー」

望から離れて。

静かに目を瞑っている薫に近付いて、首元に抱きつく。見上げてみると、びっくりしたような顔が見えた。望を見ると、笑っていて。

「これが、バツ、なんだぞ」

「えっ、いや、どういう…」

「ルウエを怖い目に遭わせたんだから、しっかりと慰めてあげないとね」

「うん!」

「はあ、いや、しかし…」

「薫、フワフワで気持ち良いんだぞ」

「えっ、ホント?じゃあ、私も慰めてもらおうかな」

「望さま!？」

望に、尻尾に抱きつかれて変な声を上げている。

やっぱり、薫は尻尾が弱いのかな。

じゃあ、今度のバツは尻尾抱きつきの刑なんだぞ!

「あー、疲れた疲れた」

「響は、ほとんど、座ってばっかりだったじゃない」

「だって、釣れないんだもん」

「お前はせっかちなんだ。当たりも来てないのに、入れてすぐ上げて。釣り堀じゃないんだから、入れ食いなんてそうそうあるものじゃない」

「美希お姉ちゃんは、すぐに釣れてたのに…」

「魚が集まる場所で待ってれば、遅かれ早かれ魚は掛かる。お前は辛抱が足りないんだよ。魚が、今入ってきたものが餌だと分かる前に上げてるんだ」

「でも、ゆつくりしすぎて餌だけ取られるなんて勿体ないし…」

「だから、餌を取られることを、怖がってちゃ、魚は釣れないって、美希お姉ちゃんに、何回も聞いたでしょ？」

「でも…」

「私が教えたことを踏まえれば、すぐに釣れるようになるから。またゆつくり練習しよう」

「はあ…」

響は大きなため息をついて。

釣りつて、そんなに難しいのかな。

やってみたかったんだぞ。

「でも、お魚はいっぱい釣れたの」

「リュウは、一回釣ってからは負けなしだったな。一本釣りでもしてるのかと思ったよ」

「一本釣り？」

「魚の群れに針を下ろして、それこそ入れ食い状態でどんどん釣り

上げる漁法だ。鯉の一本釣りが一番有名なのかな」

「ふうん」

「たくさんの人で、漁に出て、たくさん釣ってくるんだよ」

「たくさん？」

「うん」

「美味しそうなの！」

「…美味しいかどうかは、食べてみないと分からないけどな」

「ぼくは素寒貧だった」

「リュウのすぐ下流で釣ってたからな。魚が回ってこなかっただけだろっ」

「そうかな」

「ああ。今度また、紅葉と一緒に釣ってみるといい」

「うん」

「自分もやりたかったんだぞ」

「ああ、そうだな。ごめんな。でも、望が釣りの名手だから、教えてもらおうといい」

「そ、それほどでもないよ…」

「そんなに上手なの？」

「リュウよりもな」

「へえ〜」

「買い被りすぎだよ…」

「まあ、掴み取りはもつと上手いけど」

「み、美希お姉ちゃん！」

「掴み取り？」

「ああ。釣竿なんて使わずに、直接川に入って魚を捕まえるんだ。掴み取りなら、望は名手どころか達人級だな」

「もう！その話はダメ！」

「…なんで？」

「ははは。ダメと言われたら、話すことは出来ないな」

「ホントにもう…」

なんでダメなんだろ。

余計に気になるんだぞ。

望はバタバタと不機嫌そうに尻尾を振ってるし、美希お姉ちゃんはニコニコ笑ってるし。

なんだか、よく分かんない。

「さて、おかずはバッチリだな。あとは、ご飯と野菜だ」

「今日の夕飯、すっごく楽しみなの！」

「リュウは食いしん坊だしね」

「うん！」

食いしん坊じゃなくても楽しみなんだぞ。

今日の夕飯は、きつといつもの何倍も美味しいから！

畑仕事が終わって、みんな帰ってきた。

みんな、いろんなところに土を付けていて。

「あ……。明日は寝込むかもな……」

「兄ちゃん、だらしないよ」

「お前はずっと座ってるだけだったじゃないか……」

「そんなことないよ。兄ちゃんに、的確な指示を出してたでしょ？」

「何が確なんだよ……」

「とりあえず、翔が軟弱やってことは分かったわ」

「はあ……。軟弱で結構……」

「そういうお前も、ことあるごとに座り込んでたじゃないか。あれは軟弱とは言わないのか」

「紅葉が元気すぎんねやる。なんで、あんな休みなく働けんねん」

「契約してるせいだろうな」

「ああ…。でも、翔は全然やん」

「まだ力が馴染んでないんだろ」

「へえ。馴染むんに時間掛かるんか」

「…幹旋者なのに知らないこともあるんだな」

「自分自身は契約してへんからな。ある程度の聖獣の知識と幹旋者としての知識しか持ってへんから、契約したあとのことは全然知らん」

「そうなのか」

「ご期待に沿えんで悪かったな」

「いや、別に期待してない」

「…酷いな、お前」

「どうも」

狼の姉さまは適当に返事をする、肩に掛けてた手拭いで汗を拭いて。

でも、手拭いも泥だらけだから、余計に汚れてしまう。

「ふう…。先に風呂だな…」

「そうだな…」

翔お兄ちゃんは頷くと、何か呻きながら立ち上がって。他のみんなも、用意をし始める。

「じゃあ、一旦宿に帰るか」

「うん」

お風呂に入りに。

自分は何もしてないけど…。
宿に帰る。

光はまた、なかなか来なくて。
響が押してきて、やっと入ってきた。

「紅葉。相変わらず、全裸でも平気なんだな」

「平気も何も、風呂場はそういうところだ。恥ずかしがることもないだろ？」

「そうそう。光も、ちょっとは見習えばいいのに」

「響。私は、こういうところでは、少しは恥じらいをもつようと教えてきたつもりだが、どこで間違えたんだらうな？」

「さあ？」

「…とにかく。混浴なんだから、前を隠すくらいしろ。紅葉もな」

「善処する」

「同じく」

「ほんで、その会話も筒抜けやぞ。美希も、たいがいやと思うけどな」

「お前はこっちに来るな。子供たちに悪影響を与える」

「なんやそれは…」

「やらしいことばかり考えてるってことでしょ？」

「はっ。ちんちくりんの響なんか見ても、そんなん考えられんわ。

最低、紅葉か美希くらい大人っぽくないとあかん、やっぱり」

「何よ、それ！」

「ゆつた通りや」

「じゃあ、お前はオレたちを見てやらしいことを考えているのか？」

「あー、無理無理。本性知ってたら無理やわ」

「そうか。残念だ」

「じゃあ、リュウは？リュウはちんちくりんじゃないでしょ」

「……？」

「リュウは、ルウエとかと並べても遜色ないくらい子供っぽいやん、性格は。せやのに、身体つきはええから、危なっかしくて逆に気に

なるわ」

「やっぱり、やらしいこと考えてるんだ」

「せやなあ。男はやらしいことばかり考えてるからなあ。まあ、リユウに手え出すようなやつは、オレとか紅葉あたりが成敗するやろうけど」

「もちろんだ」

「そうでなくても、旅団天照に所属してるんやし」

「まあ、その手を出すやつの中からお兄ちゃんが入らないことを祈ってるよ」

「だから、入らんで…」

「それより、翔はどこに行ったんだ」

「向こうの方におるで」

「ふうん…」

「望と光も端っこにおるしな。勿体ない」

「何が？」

「みんなでワイワイ入った方が楽しいやろ？ていうか、翔が向こうにおったら、オレー人が男やから肩身狭いわ」

「はは、嘘つけ」

「あー、肩身狭いなあ」

「可愛い女の子に囲まれて幸せ、の間違いでしょ？」

「ホンマに可愛かったらな」

「…そこは、嘘でも可愛いって言っとくところですよ！」

「ん？ああ。可愛い可愛い。響はちんちくりんで可愛いな」

「もう！」

「痛っ！」

チンチクリンって何なんだろ。

響は怒ってるから、たぶん言っちゃダメなことなんだぞ。

…でも、望も光も翔お兄ちゃんも、ホントに勿体ないんだぞ。

みんなと一緒にいる方が楽しいのは、ホントなんだから。

「いやあ、今日は助かったよ。みんな、よく働いてくれたね」

「長い間世話になってるんだ。当然のことだと思っが」

「ははは。まあ、ありがとね」

「おじさんはどこに行ったの？」

「はは、おじさんはいいなあ。あの人は村長さんだよ。自分の家にいると思っ」

「へえ、村長さんだったんですか」

「うん。今日はちょっとみんな山に出てて、村長さんが野良仕事をやってくれるって言っってたんだけど、みんなが来てくれて大助かりだったっさ」

「まあ、美希が事前にその情報を手に入れてきてただけだな」

「えっ、そうなの？」

「村の人から聞いた」

「ふうん…」

「はは、情報を集めるのが得意みたいだね」

「上手く旅するのに必要な能力ですから」

「へえ〜。今度、私にも教えてよ」

「旅をなさるんですか？」

「あはは、この歳になっ旅もないでしょ」

「そんなことないですよ。八十を越えて、お遍路さんや伊勢参りに出る人もいますし」

「へえ、そりゃびっくりだねえ」

「旅へ思い立つのに年齢は関係ないということだ。出たいとき出ればいい。世界はいつでも待ってくれているからな」

「…紅葉って、クサイことでも平然と言ってのけるよね」

「クサイか…？」

「ん」。私も、もっと良いことを言えるように頑張らないと」

「…まあ、頑張ってくれ」

「おばちゃん、おかわり」

「はいはい」

「わたしも!」

「はあい。リュウは大盛りね」

「うん!」

「だいぶ把握してきましたね」

「そうねえ。こんな大人数で食べるのは久しぶりだし、嬉しくつてね」

「旅団の連中もよく来るんだろ?」

「うん。でも、団長さんと副団長さんだけとか、まあ来ても五人くらいなんだよね。それはそれで楽しいんだけど、下っ端の人は遠慮するみたい」

「そんなものなのか」

「そんなものよ」

「ふうん…」

なんで遠慮するのかな。

みんなで食べた方が楽しいのに。

焼き魚にかぶりついて。

うん。

みんなで食べることは、最高のチヨウミリョウだって姉さまも言っていた。

今も、こうやって実感してる。

「さあ、どんどん食べなよ。あと、ヤーリエは魚だけじゃなくて野菜も食べなさい」

「はあい…」

「紅葉も、南瓜ばかり食べてちゃダメよ」

「…見てたのか」

「当たり前よ。ほら、リヤムも食べなさい」
「分かったよ…。」

狼の姉さまが怒られてるところなんて、初めて見たんだぞ。
なんか新鮮。

リュウはまたおかわりしてるし。

自分も、もっといっぱい食べないと！

昨日の場所に行っても、シウベはいなかった。

どこに行ったのかな…。

「闇に生きる者はね、毎日少しずつ移動してるんだよ」

「そうなの？」

「うん。昨日いた場所に、今日もいるってことはないの」

「ふうん」

「でも、一週間くらいしたら、またここに戻ってくる。同じところをグルグル回ってる」

「なんで？」

「それは、闇に生きる者に聞かないと分からないけど」

そして不意に、ヤーリエは何か空中を掴むような仕草をして、手を広げて見せてくれた。

「何、これ？種？」

「うん。優月草の種だよ」

「ユウガツソウ？」

「うん。綺麗な花が咲くんだ」

「へえ〜」

「優月草の種は必ず双子で、仲の良い者がひとつずつ持つと、また

必ず再会出来ると言われていました。お二人で分けてみてはいかがですか？」

「むう…。ぼくが言おうと思ってたのに…」

「す、すみません…」

「いいよ、もう。じゃあ、薫の言う通り、ひとつずつ…ね」

「うん」

殻をふたつに割って中の種を取り出し、ひとつを渡してくれた。

手に乗せてみると、こんなに小さいのに結構重いなということが分かる。

これがたぶん、生命の重さ。

葛葉が言ってた。

「旅に出たら、別れ別れになるけど。これがあるから、また会える

よ」

「うん」

「ずっと一緒…」

「うん」

「…初めて会ったとき」

「え？」

「初めて会ったとき、聞いたよね。ぼくのこと、好き？って」

「うん」

「ぼくは、今もルウエのことが大好き。あのと看、ルウエは分からないって言ったけど…」

「今なら分かるんだぞ。自分も、ヤーリエのことが大好き」

「うん。ありがと。…でも、ごめんね」

「……？」

「ぼくがぼくでなくなったときは、好きにならないでほしいの」

「どういうこと…？」

「分かんない。分かんないけど…分かる。葛葉が傷付いたのも、ル

ウエが村を追い出されたのも、ぼくのせいだから…」

「えっ？」

「ホントはダメなのに…。でも、ぼくはルウエが好き…」

「ヤーリエ…？」

「どうすればいいの…？分かんないよ…」

なんでダメなのかは分からないけど。

でも、ヤーリエは泣いていた。

だから、ギユツと抱き締めてあげる。

望にやつてもらったように。

「ヤーリエはヤーリエだよ。どんなことがあっても。自分は、ヤーリエが何をしたとしても、ずっと好きだから。…だから、泣かないで」

「うん…うん…」

ヤーリエは頷くばかりで、ただひたすら泣いていた。

これは、哀しみの涙。

冷たい涙。

「ヤーリエ…」

自分には何も出来ない。

それが悔しくて。

…薫は、翼を広げて飛び立った。

今はもう、宿に帰ろうって…。

月の光が部屋を照らす。

暗い影が薄く伸びる。

闇は深く、静かに。

「……………」

ヤーリエは、宿に帰るまでに寝てしまった。
ユウガツソウの種は握ったままで。

「闇が深くなっている」

「え…？」

「ヤーリエの闇に共鳴して、お前の闇が深くなっている」

「……………」

「他の要素との均衡が崩れると、お前自身に悪影響を及ぼしかねない。お前は他の者と比べても、多種の要素を宿しなくても、安定しているが、このままではその安定も崩れさるやもしれん」

…カイトの言っていることは全く分からないけど。
でも、自分が危険な状態にあることは分かる。

「ヤーリエは大丈夫だ。ルトと紅葉がちゃんと調律した」

「……………」

「多くの要素を抱えているお前の調律はかなり難しい。だから、そういうことにならないように、お前の本来の要素である光を強く持て。闇に支配されるな」

「…分かんない」

「分からないはずはない。いつも通りのお前でいてくれさえすればいいのだから。乱暴な物言いであることは分かっている。だが、もう一度言っぞ。…光を強く持て。分かったな」

「……………」

いつもの自分…。

どんなのだったか思い出せない。
次第に、闇はどんどん深くなって行って。

明るい、世界は、濃い影を作つて。
何があるわけでもない。
ただ、太陽だけがある。

「光の従者が、如何にしてここにたどり着いた」
「……………」
「そうか」

その人は、ルイムナに似てると思った。
でも、ここは光の世界じゃない。

「ここは闇の世界だ。光とは対極を為す、闇の世界」
「闇……………」

カイトに注意されたのに。
光を忘れたから。

「少々、闇に染まりすぎたようだな」
「……………」

「私にはどうすることも出来ないが、このまま闇に身を委ねるのも
ひとつの手だ」

「……………」
「お前は仲間や家族のために涙を流せるらしい。…どちらにせよ、
悪い方には転ばないはずだ。その心を強く持てばな」
「……………」

「私に分かるのはここまでだ。じゃあ、またな。小さき大樹よ」

小さきタイジユ…。
そっと目を瞑ると、すぐに意識は遠のいて。

日射しが眩しくて、目が覚める。

また知らない世界。

ベラニクの宿の見慣れた天井じゃなくて、朝焼けの不思議な空が見えた。

「おはよ

「……………」

声のした方へ、横に顔を動かしていく。

「姉さま…?」

「そうだね。キミから見れば、お姉ちゃんだね」

「姉さま…!」

「…………?」

気がついたときには、姉さまに抱きついていた。

姉さま…!

会いたかった…!

「どうしたの?何か怖いことでもあった?」

「会いたかったんだぞ…!」

「んー?」

姉さまは、優しく頭を撫でてくれた。

それがとても懐かしい気がして、涙が溢れてきて。

「よしよし。良い子だったね」

「姉さま…!」

「よしよし」

もう、しばらく会えないから…。

そう覚悟して、ずっとベラニクまで旅をしてきたと思っていた。

でも、涙は止まらなかった。

いつまでも、いつまでも。

また眠っていたみたい。

今度は、姉さまの温かい膝の上で。

「起きた？」

「…うん」

「朝ごはんにする？」

「…うん」

身体を起こして周りを見てみると、ここがどこか高い場所だということが分かった。

下の方に街が見える。

前にユールオのお城から見た景色に似てる、と思った。

だから、今いるここも、たぶんお城。

「綺麗でしょ」

「うん」

「あそこはね、姉ちゃんが治めてる街。ここは、私の姉ちゃんのお城なんだ」

「ふうん」

この姉さまは、たぶん違う姉さまなんだ。
やっぱり、ここは自分の世界じゃない。
どこか、違う世界。

「あ、ごめんね。朝ごはんだったね」

「うん」

「じゃあ、行こっか」

「うん」

でも、姉さまは姉さまだった。
いつもの、優しい姉さま。

灯お姉ちゃんは、自分を見ながら楽しそうに尻尾を振っていて。
どの料理も美味しかったけど、それがすごく気になった。

「灯。ちょっと落ち着きなさいよ」

「可愛いなあ。それに、この髪もすごく綺麗だし。どこから来たの
？」

「えっと…」

「灯。ルウエがごはんを食べられないでしょ？」

「あはは、ごめんごめん。ゆっくり食べてね」

「うん…」

でも、すっごく見られてるのは相変わらずで。
気になる…。

と、誰かが厨房に入ってきた。

そして、いきなり灯の頭を殴って。

「灯？この子は、ジッと見られるのも気になってるって気付かない

の？」

「いたた…。だからって、いきなり殴る」ともないでしょ…」

「一葉さん、おはよ」

「うん、おはよ。そっちの子もおはよ」

「おはよ…なんだぞ…」

「あれ？警戒されてる？」

「いきなり私を殴るからでしょ…」

「そうなの？」

「……………」

「ははは。まあまあ、まずはゆっくり朝ごはんを食えなよ」

「…うん」

「灯。私にも」

「お母さんの方が、料理上手いじゃない…」

「どうでもいいから、早くして」

「はいはい…」

灯お姉ちゃんは、渋谷台所に向かう。

ため息なんかもついたりして。

「改めて、初めまして」

「初めまして…」

「私のこと、嫌い？」

「ううん…」

「そう。よかった」

「一葉さん…。聞く順番が違つてしょ…」

「あはは、そうだね。じゃあ、キミの名前は？」

「ルウエ、なんだぞ」

「ルウエくん？ルウエちゃん？」

「一葉さん…」

「冗談冗談。ルウエちゃんだよね」

「うん」

「私はね、一葉って言うんだ。あの子のお母さん」

「姉さまは？」

「姉さま？」

「ああ、なんか、私のことをそう呼んでくれてるんだ」

「へえ〜。でも、私は風華ちゃんのお母さんではないよ」

「でも、お母さんみたいなものじゃない」

「そう言ってもらえると嬉しいけどね」

「ここはユールオ？」

「うん…って、ルウエはどこから来たの？」

「こことは違う世界から」

「ふうん。彼岸の方かな」

「でも、一番近い境界でもヤウトの森じゃない。朝、姉ちゃんの部屋の屋根縁で寝てたんだよ？誰にも見つからないで、そこまで行ける？」

「まあ、無理だろうね。じゃあ、どこから来たのかな…」

「彼岸以外にも、違う世界があるってことなのかな」

「そう考えるのが妥当だろうね」

二人が何を話しているのかは分からないけど。

でも、この世界にはもうひとつ、ヒガンって世界がくっついていたりっていうのは分かった。

「はい、朝ごはん」

「どうも。じゃあ、いただきます」

「はいはい」

この世界は何なのかな。

薫も誰も来ないってことは、何かあるってことかな…。

とりあえず、朝ごはんの続きを食べることにする。

120 (後書き)

不思議な世界にきました。

この世界では何があるんでしょうか。

「彼岸ってどこなの？」

「んー、遠いところかな」

「ふうん……」

「気になる？」

「ちよつとだけ」

「そっか」

ユールオは、この前見たままだった。
同じところに同じお店があつて。

「あそこが哲也と陽葉の食堂」

「うん。陽葉はこの前生まれただけだけだね」

「そうなの？」

「うん」

「自分の世界では、陽葉はもうおつきかつたんだぞ」

「ふうん。どれくらい？」

「四歳か五歳くらい」

「へえ。見てみたいかも」

「姉さまも、こつちの世界に来てみればいいんだぞ」

「そうだね。でも、いいかな。私はこの世界が好きだし」

「自分も、自分の世界が好き」

「うん」

姉さまは路地に入って、そのまま出店の間を抜けていく。
左右のお店には、たくさんいろいろなもの売っていて。

「何か欲しいものある？」

「うっん」

「そう？遠慮しなくてもいいんだよ？」

「してないよ」

「そっか」

「でも、どこに行くの？」

「ちよっとね」

「……？」

出店の路地を抜けて、さつきとは別のところの通りに出た。
今度は、さつきより静かなところ。

「何が売ってるの？」

「いろいろだよ。日用雑貨とか」

「あれは？」

「あそこは精肉店だね。お肉が売ってるんだよ」

「どんな？」

「よう、嬢ちゃん。肉はいらんかね」

「いいません」

「おおっ、いきなりか」

「この子が興味あるみたいなんで見てただけです」

店に入っていくと、おじさんが近付いてきて。

「肉が面白いか？」

「うっん。でも、美味しそう」

「そうかそうか」

「うん。桜って何？」

「馬肉のことだよ。馬の肉」

「これはなんて読むの？」

「牡丹だな」

「何のお肉？」

「猪だ」

「ふうん…。美味しいの？」

「不味い肉は売ってねえよ。どれも美味しい。それは保証する」

「うん」

「で、何か買うか？」

「うーん…。今はいい」

「そうか。まあ、また買いにきてくれよ」

「うん」

おじさんに手を振って、お肉屋さんを出て。姉さまもお辞儀をして、通りを歩いていく。

「ねえ。どこにいくの？」

「もうちょっと」

「うん…」

どこに行くのかな…。

お店をどンドン過ぎていく。

そして、あるお店の前で止まる。

「ここだよ」

「ここ？」

「うん」

そこは、何かたくさん服が置いてあるお店。何のお店なんだろ…。

「ルウエの服、なんだか汚れてるから、新しいの買ってあげる」
「え？」

「好きな服を選んでいいよ」
「えっと…」

服って買うものなの？
ずっと、姉さまが作ってくれてたけど…。

「いらつしやいませ。何かご入り用ですか？」

「はい。この子に合う服を」

「ああ、旅装ですね」

「旅装？」

「旅装じゃないんですか？」

「ルウエ、旅をしてるの？」

「うん」

「へえ。一人で？」

「ううん。望とお兄ちゃんと明日香と、悠奈と七宝と薫とカイトと」

「へえ…。ちよっとした旅団だね…」

「そうなの？」

「まあ、そうかな」

「ふうん」

「それで、旅装でいいのですね」

「はい。よろしくお願ひします」

「はあい」

店の人は奥の方に入っていった。

姉さまも、お店の中を見回していて。

「こつこつのもいいよね」

「ふうん？」

「でも、ルウエにはちよっと早いかな」

「なんで？」

「うーん。黒は大人の色だよ」

「……………」

「まあ、うん。そういうこと」

なんかよく分かんない。

黒は大人の色なの？

なんで？

「こんなものでどうでしょうか」

「速いですね」

「まあ、自分の店のことくらい把握してないと」

「へえ、そんなものなんですか？」

「はい。それで、これですが」

店の人が見せてくれたのは、今の服とちよつと似てる服だった。
薄い青の羽織に焦茶の着物、紺色の袴。

「旅の着物なんで、汚れに強いものを選びました」

「強いですか？」

「まあ…汚れが落ちやすいと言った方がいいですかね」

「ふうん…。ルウエ、着てみたら？」

「うん」

「試着室はあちらですよ」

「シチャクシツ？」

「着替える場所ですよ」

「……………」

「まあ、向こうで着替えてきてねってことだよ」

「うん。分かった」

服を持って、シチャクシツに行く。

シチャクシツは狭くて、ちよつと着替えにくかった。

「ルウエ、着替えるときは前を閉めてね…」

「……？」

「まあいいや。ほら、鏡、見てごらん」

帯を締めて、後ろを見てみる。

そこには、いつもと違う自分がいて。

「気に入っていただけたでしょうか」

「…うん」

「じゃあ、これにする？」

「うん」

「ありがとうございます」

店の人と姉さまは、奥に行つて。

これが、自分の服なの？

いつもとはまた違う、綺麗な服。

目を上げると、顔のところをリュウモンが浮かんでいた。

何をするわけでもなく、姉さまと通りを歩く。いろいろなお店は、それでも飽きないくらい、たくさんものを買っていた。

「姉さま」

「ん？」

「葛葉は？」

「え？」

「葛葉はどこかにいるの？」

「葛葉？葛葉は、今はお城にいるよ」

「そうなの？」

「うん。…会いたい？」

「会いたい」

「じゃあ、帰ろっか」

「うん」

そして、そのまま後ろを返って戻っていく。この世界の葛葉は、どんな子なのかな。ちよっと楽しみ。

「あっ、風ちゃん」

「え？涼さん？」

「こっちこっち！」

「涼さん！何してるんですか！」

「何って、打ち水？」

「ダメですよ！まだ安静にしてないと！」

「平気平気。もうピンピンしてるよ」

「頭でそう思っても、身体はそうじゃないんです！家に帰って寝ててください！というか、陽葉ちゃんは？」

「旦那が中で見てくれてるけど」

「…まあ、それはいいとして。とにかく、あと一週間は働いちゃダメです！」

「ええ〜…」

「ええ〜じゃないです！オヤジさんにも言っておきますから！」

「ええ〜…」

「そんなこと言っていると、毎日でも見に来ますよ！」

「分かった分かった。大人しくしてますよ」

「絶対ですからね！」

「もう…。セトくんも大変だろうな…」

「どういう意味ですか！」

「そのままの…いや、なんでもないよ…」

「涼さん！」

「あはは、冗談冗談」

「…ルウエ、ごめん。私、涼さんを送ってくるから、一人で帰ってきてくれる？」

「うん」

「お城の人に聞いたら、葛葉のところ連れていってもらえるから分かった」

「そんな、気を遣わなくてもいいのに」

「遣いますよ！その身体は、涼さんだけの身体じゃないですよ？」

「ああ…うん、ごめんね」

「もう…。じゃあ、ルウエ…」

「うん」

「ごめん」

そう謝ると、姉さまは涼お姉ちゃんを連れて、どこかへ歩いていった。

…涼お姉ちゃんだけの身体じゃないって、どっいっことなのかな。
この身体は自分の身体。
でも、みんなのもの。
姉さまが言ったことは、そういうこと？

お城の門のところには、セトが龍の姿で立っていた。
何をしているのかは分からないけど、ずっと遠くを見ていた。

「セト」

(ん？誰だ？)

「ルウエ、なんだぞ」

(ルウエ？前に会ったか？)

「この世界では会ってないんだぞ」

(……？)

「葛葉はどこ？」

(葛葉か？葛葉は医療室だ)

「医療室ってどこ？」

(…ちよっと待ってる)

「うん」

セトは目を瞑ると、反転の術式を使って。
あっという間に人間の姿になった。

「こっちだ」

「うん」

セトと手を繋ぐと、ニッコリ笑いかけてくれた。
やっぱり、セトも同じ。

「なんで僕の名前を知っていたんだ？」

「自分の世界のセトは知ってるから」

「どういう意味だ？」

「自分は、この世界と違う世界から来たの」

「彼岸…じゃないか。彼岸の匂いはしない」

「うん」

「不思議だな。ルウエは、こっちの世界の匂いがする。でも、この世界の住人じゃない」

「うん」

「にわかには信じがたいな…。こことは別の世界にも、僕とは違う僕がいる。その僕はルウエのことを知っていて、僕はルウエのことを知らない。…実は、風華か紅葉姉さまあたりから僕のことを聞いていたとかじゃないのか？」

「違うよ。自分は別の世界から来たんだぞ」

「…そうか。ルウエがそう言うなら、そうなんだろうな」

セトは、四枚のうち下の翼二枚をゆっくりとはためかせる。こつするのは、何かを考えてるとき。

「何を考えてるの？」

「ん？ルウエのこと、かな。でも、よく分かったな」

「うん。癖があるから」

「癖？そついえば、風華にもすぐに感じ取られるな…」

「セトって分かりやすいもん」

「ん？そうか？」

「うん」

「そうか…。でも、癖も知っていると、いよいよ信じないわけにはいかないな」

「信じてなかったの？」

「あ…。いや…そついうわけじゃないんだけど…」

「ふうん？」

「ははは…。困ったなあ…」

何に困ったのかはよく分からないけど。

でも、本当に困ったようにほっぺたを搔いて。

「まあ、うん。ルウエの言うこと、信じてるよ」

「うん」

「うん」

「うん」

何が何かは分からなかったけど。
とにかく、医療室に向かう。

医療室に入ると、薬の匂いがした。

…あんまり好きな匂いじゃないけど。

そして、部屋の端っこの方に布団が敷いてあって。

「葛葉。友達が来たぞ」

「ともだち…？」

「ああ。ルウエだ」

「ルウエ…」

そこで寝ていたのは、確かに葛葉だった。

自分の世界の葛葉とは全く違って、肌も白くて弱々しい。

それに…ちよっと小さい。

昔の葛葉を見てるみたいだった。

「ルウエ…。どこにいるの…？」

「葛葉」

「ルウエ…」

伸ばした手を掴むと、安心したようにため息をついた。

…一瞬、旅に出たあの日の葛葉を思い出した。

血だらけでぐったりしていた葛葉を。

この世界の葛葉は、あときの葛葉に似ていた。

「葛葉、どこか病気なの？」

「うん…」

「肺が悪いんだ。少し動くだけでも息が上がって、そうでなくとも発作が起きたら…」

「肺…」

前に姉さまが言った。

肺は息をするところで、ここが病気になったら大変だって…。

「ルウエは、おそとに出たことあるの…？」

「うん。あるよ」

「おそとって、どんなところ…？」

「すっごく広いところなんだぞ。一日中歩いても、次の街に着けないくらい」

「ユールオのおそとには、どんなまちがあるの…？」

「いろんな街があるんだぞ。ヤウトとか、ベラニクとか」

「ルウエは、ぜんぶのまちに行ったの？」

「うん。まだまだなんだぞ。世界は広いんだ。全然知らない街も、きつとたくさんたくさんあるんだぞ」

「葛葉も、行けるかな…？」

「うん。行けるよ」

「えへへ…」

葛葉がいつもしてくれてるみたいに、今度は自分が葛葉の頭を撫でてあげる。

すると、葛葉は笑ってくれて。

セトはなぜか、何も言わないで医療室を出ていった。

「どうしたのかな」

「セトは、やさしいから」

「うん。優しいんだぞ」

「うん」

葛葉は頷くと、ゆっくりと目を瞑った。

息もだんだんとゆっくりになってきたから、たぶん眠ったんだと思う。

疲れたのかな。

……。

こんな葛葉はイヤなんだぞ……。

葛葉は、元気で、活発で……。

この葛葉にも、そうなってほしい。

でも、自分に出来ることって……何？

この葛葉のために……。

葛葉……。

厨房に行つて、お昼ごはんを食べる。

灯お姉ちゃんは、自分のお昼ごはんを用意するところかに行つてしまつて。

「ただいま」

「あ、姉さま」

「灯は…いないか。葛葉には会えた？」

「うん」

「良かった」

「姉さま」

「ん？」

「葛葉は病気なの？」

「…うん。肺のね。セトに聞いたの？」

「うん…」

「そつか。…葛葉は昔から身体が弱くて、病気に掛かりやすかつたんだ。今まで、なんとか耐えてくれたんだけど…」

「…どうしたの？」

「葛葉の肺の病気はね、治らないんだ。薬で進行を遅らせることは出来るけど、完全に治すことは出来ない。それに、病気に抵抗する力も弱くなつてるから、ちょっとした風邪でも致命傷になりかねない…」

「……………」

「もう、死と隣り合わせなんだ…。私は…何もしてあげられない…。ただ、これ以上、病気に掛からないようにしてあげるだけしか…」

「諦めたの？」

「諦めてないけど…」

「姉さまらしくないんだぞ。諦めるなんて…」

「ルウエに、私の何が分かるのよ！」

姉さまは、机を叩いて立ち上がる。

一瞬、目はとても怒っていたけど、すぐにハツとしたような顔をして、また椅子に座った。

「ごめん…」

「…姉さまのこと、よく分かるんだぞ。姉さまは、そんな弱音を吐くような姉さまじゃないって。姉さまは、絶対に諦めないって」

「ルウエの世界の私と、私は違うよ…」

「ううん。姉さまは姉さまなんだぞ。優しく、強くて、格好良くて…」

「そうだな。風華は風華だ」

「あっ」

ポン、と頭に手を置かれる。

後ろを振り返ってみると、やっぱり。

「狼の姉さま！」「姉ちゃん…」

「ルウエ、だな。衛士たちから聞いたよ。どこかの可愛いチビっ子が、朝に私の部屋に潜り込んでいたってな」

「チビっこじゃないんだぞ…」

「はは、そうか。それは失礼したな」

「むう…」

狼の姉さまは、自分の横に座って。

灯お姉ちゃんみたいに、こっちをジッと見つめて、ゆっくりと尻尾を振る。

そして、ニッコリと笑うと、姉さまの方を見る。

「私の知っている風華は、どんな不可能が立ちはだかつて諦めず、それでいて、全ての不可能を可能にしてきた。不治と言われた月光病の特効薬を見つけ、私の月光病を治してくれたのは誰だったかな」
「……………」

「ここにいる風華とは別人だったか。私の知ってる風華は、こんなに簡単に諦めるようなやつじゃなかったしな」

「…でも、私の知ってるどんな薬も、葛葉の病気には効かなかった。それに、薬のせいで、葛葉の身体はもうボロボロなんだよ？姉ちゃんもルウエも、何も知らないからそんなことが言えるんだよ！」

姉さまの声は震えていた。

…諦めたくないけど、諦めるしかない。
そう、言っているようだった。

「何も知らないからこそ、私たちは風華に期待する。期待出来る。必ず、葛葉の病気も治してくれるって」

「じゃあ、その期待は捨て去るべきだよ。私には、もう打つ手はない」
「い」

「…そうか。それなら、私はお前に期待しない。もう信じない」

「ああ、それが良いね」

「……………」

狼の姉さまは凍りつくような視線を向け、何も言わずに厨房を出て行ってしまった。

どうしよう…。

姉さまも、いきなり席を立つと、どこかへ走って行ってしまって。

「……………」

「ただいま〜」

「……………」

「あれ？どうしたの、ルウエ？」

「狼の姉さまと、姉さまが喧嘩して…」

「狼の姉さま？」

「紅葉姉さま…」

「ああ、姉ちゃんか。あの二人は特に仲がいいからね。よく喧嘩をするんだよ」

「…………？」

「仲が悪い人同士の喧嘩なら、相手への反発とか対抗心が働いて、それが意見の対立…つまり、喧嘩になるんだ。でも、仲の良い人同士の喧嘩は、相手への理想とか想いとか…とにかく自分たちが本当に思っていることがぶつかって、喧嘩になる。相手を想うからこそ対立なんだよ」

「ふうん…？」

「姉ちゃんも風華も、お互いのことをよく知り合っているから。たとえば姉ちゃんの掲げる、不可能を可能にする風華…っていう像を、風華自身が意地を張ったり諦めたりして否定して壊すと、姉ちゃんは怒る。それは、姉ちゃんは風華に、そういう風に無理だと決めつけて諦めてほしくないから。風華も分かっているんだけど、今ある現状と姉ちゃんの期待に応えられないってイラ立ちとの間に挟まれて、心にもないことを言ってしまうんだ」

「うん」

「だから…風華が頑固者だとか、姉ちゃんが冷たい人だなんて思わないでね」

「そんなこと、思っていないんだぞ」

「そ。よかった」

灯お姉ちゃんはニッコリと笑って、隣に座る。

…でも、ちよつと気になる。

「ねえ」

「ん？」

「灯お姉ちゃんは、さっきの喧嘩、聞いてたの？」

「…まあね」

「むう…。じゃあ、助けてほしかったんだぞ…」

「えっ？」

「二人が喧嘩してて、怖かった…」

「あ、ああ…。ごめんね…。私も怖かったから、入られなかったんだけど…」

「むう…」

「あはは…。ごめん…。ほら、油揚げ、もう一枚オマケしてあげるから…」

「油揚げ…」

「そうそう。よく味がしゅんでるよ」

「油揚げ、葛葉」

「え？」

「葛葉が、油揚げが好きなんだぞ」

「ああ、そうだね。大好きだね」

「葛葉にはあげないの？」

「葛葉は…最近、あまり油っこいものを食べたら、吐いちゃうんだよ…」

「えっ…」

「私もね、葛葉に油揚げをいっぱい、いっぱい食べさせてあげたいよ。でも、ダメなんだ…」

「そんなの…」

「好きなものが食べられないなんて、本当に可哀想で…」

灯お姉ちゃんは泣いていた。

葛葉に油揚げを食べさせてあげられないから。

好きなものを食べられないから。

そして、自分の料理を食べてもらえないから。

自分の料理が葛葉の毒になっているから。
灯お姉ちゃんは泣いていた。
自分には何も出来ない、と。
狼の姉さまやセトと同じ涙を流していた。
姉さまと、同じ涙を。

葛葉はずっと眠っている。

ときどき寝返りを打ったりもするけど。

…医療室には誰もいなかった。

ただ、薬の匂いだけが部屋を満たしていて。

「葛葉…」

葛葉はいつも、たくさんのことを教えてくれた。

この葛葉は、どんなことを教えてもらってるのかな。

…教えてもらってるのかな。

「……………」

みんな哀しい顔をするだけで、葛葉のことを見てない気がした。

誰も、見てなかった。

可哀想だから？

哀しくなるから？

なんでなんだろう。

「気になるか？」

「うん」

「辛いこと、哀しいことに面と向かうことは難しい。お前は、ある意味で無知だから、真っ直ぐ見つめることが出来る。それは、普通には出来ないことだし、やろうと思って出来ることではない」

「狼の姉さまは？」

「どうだろうな。私は真っ直ぐ見ているつもりだが、もしかしたら、葛葉を通り越してずっと遠くを見ているのかもしれない」

「ふうん…」

狼の姉さまは隣に座ると、葛葉の頭をそっと撫でる。
すると、葛葉はゆっくりと目を開けて。

「お母さん…」

「どうだ、調子は」

「うん…。いつもより、良いよ…」

「そうか」

「今日は、ルウエが来てくれてるから…」

「ルウエなら、ここにいろぞ」

「葛葉…」

「ルウエ…。ごめんね…。いつしよにあそぶなくて…」

「そんなの、いいんだぞ…。葛葉は、ちゃんと病気を治さないと…」

「そうだね…。なおったら、いつしよにあそぼつね…」

「うん。約束、なんだぞ」

「やくそく…」

葛葉はニツコリと笑う。

そして、狼の姉さまの方を見て。

「お母さん…。いつものお話、して…?」

「千夜物語か?まだ夜じゃないけど…」

「ルウエにも、聞かせてあげたいの…」

「…そうか。じゃあ、少し早いけど」

「うん…」

「ルウエ。千夜物語っていうのは、空にある星たちに千の物語を届けたら願いが叶うっていうおまじないのようなものなんだ。それで、今日で六百三十七回目」

「じゃあ、あと三百六十三回?」

「ほう。引き算が出来るんだな」

「うん。葛葉…自分の世界の葛葉に教えてもらっただぞ」
「そうか」

「葛葉…？葛葉じゃない、葛葉…？」

「うん。こことは違う世界があつて、そこに葛葉もいるんだぞ」

「ルウエの世界の葛葉は、どんな子なの…？」

「元気で、優しく、格好良いんだぞ」

「葛葉と、まったく逆だね…」

「うん。そんなことないよ。葛葉は病気に掛かってるだけで、そうじゃなかったら、きっと自分の世界の葛葉と同じなんだぞ」

「うん…。ありがと…」

また葛葉は笑った。

…なんだろう。

誰の笑ってる顔を見ても嬉しい気持ちになつたのに。
でも、葛葉の笑顔を見ても、嬉しくならなかった。

葛葉の笑顔は、哀しい笑顔だった。

「…さあ、今日の話をしようか」

「うん…」

「今日は、どんな話がいいかな。ヤウトの白き獣の話にしようか？」

「それは、聞いたことない…」

「そうか。それならよかった」

「自分、その話、知ってるんだぞ」

「そうか。じゃあ…」

「だから、自分に話させて」

「ん？ああ、分かった。じゃあ、葛葉。今日はルウエからお話を聞かせてもらおうな」

「うん…！」

…今度こそ、本当に笑ってくれた。
さつきとは違う、心の底からの笑顔。

白き獣の話。

少し忘れてて、勝手に作ったところもあったけど。

「だから、ヤウトは紋章に白き獣を刻み、ずっとずっと伝えていくという誓いを立てたのでした。そして、それは今も守られ、これからも守られることでしょう。…おしまい」

「……………」

「どうだった？」

「うん、面白かったよ…」

「そう。よかった」

「うん…」

「よかったな、葛葉。ルウエお姉ちゃんにお話を聞かせてもらって」

「うん…！」

「お姉ちゃん…」

「どうした？」

「自分の世界の葛葉は、自分のお姉ちゃんみたいなかんじだったから、自分が葛葉のお姉ちゃんってなんだか変なかんじがして…」

「はは、そうか。でも、この世界では確かに葛葉のお姉ちゃんだな？」

「うん…。ルウエは、葛葉のお姉ちゃん…」

「えへへ…。そう言われると、なんか照れくさいんだぞ…」

「ふふ、そうか。まあ、そのうち慣れるさ」

お姉ちゃん…。

自分が、葛葉の。

うーん…。

やっぱり、照れくさい…。

「ふぁ…」

「寝るか？」

「うん…」

「お休み」

「おやすみ…」

話を聞いて疲れたのかな。

葛葉は、またゆつくりと目を瞑った。

そしてすぐに静かな寝息を立てて。

狼の姉さまは、そっと葛葉の頭を撫でている。

「…狼の姉さま」

「ん？」

「葛葉は、狼の姉さまのことをお母さんって言ってた」

「…ルウエの世界では違うのか？」

「うん。あ、でも、葛葉は狼の姉さまに会ったことがないから分からないけど…」

「誰をお母さんって呼んでるんだ？」

「姉さまなんだぞ」

「風華か」

そう呟いて、少し遠くを見る。

そして、葛葉を見て、こっちを見る。

「昔はな、風華をお母さんって呼んでた。ルウエの世界と同じようにな」

「えっ…？」

「…いつの頃からかは分からないけど、風華は葛葉と距離を置くよ

うになつてしまつたんだ。それからしばらくして、葛葉も風華のことをお母さんと呼ばなくなつた。…どうだ、そつちの風華と比べて」「うん…。姉さまは、葛葉が病氣になつたら、何日でも治るまで傍にいた…」

「こつちの風華もそうだったよ。毎日休む間もなく、葛葉のことを考えてた。…でも、今は違う。葛葉を避けてしまつている」

「理想と違うから？」

「ん？」

「灯お姉ちゃんが言つてたんだぞ。理想と現実の間に挟まれて、イライラしてゐるって」

「ふうん…。灯が…。まあ、そうなのかもしれないな。理想と現実…か」

「葛葉、もう姉さまのことはお母さんって呼ばないのかな…」

「さあな…。私には分からない。でも、昔に戻るには、少し溝が深すぎるかもな…」

「……………」

狼の姉さまが言っていることは分からなかつた。

なんで、戻られないかもしれないの？

なんで、こんなことになつたの？

この世界は…なんで、こんなに冷たいの…？

「夕飯は？」

「…いない」

「そう…。無理しちゃダメだよ？」

「……………」

「じゃあ…」

「灯お姉ちゃん」

「ん？」

「なんで、みんな葛葉を見ようとしなの？」

「……………」

「……………」

「…ごめん。私には分からない。でも、あまり可哀想に思ってしまったと、それが逆に可哀想な気がするの。だから、葛葉を避けちゃったのかな。どうしても、可哀想だと思っちゃったから」

「……………」

「ごめんね…」

そう言うと、灯お姉ちゃんは医療室を出ていった。

もう日も沈んで灯りもない医療室は真っ暗で。

葛葉は毎日、この暗い部屋で寝てるのかな。

闇…。

今の自分の心と同じ…。

「ルウエらしくないよ」

「自分らしいって…何？」

「それは自分で考えないと」

「分かってる…。でも、分からない…」

「簡単なことだよ。ほら、外を見てくらん」

窓のところから、ちょうど綺麗な月が昇っていた。
赤い、綺麗な月。

「赤い月は浄化の光。この夜だけは、全てが清められる」

「……………」

「葛葉を助けてあげたい？」

「…うん」

「じゃあ、まずルウエからだよ。自分を思い出して。光は月。全てを照らす、優しき妹」

「……………」

「闇は太陽。安息の影を作る、強き兄」

「光と闇は、表と裏の関係。対立するものではなく、支え合うもの」

「思い出してみて。本当のルウエを」

本当の、自分。

自分は…どんなだったっけ。

前に行った死んだ世界。

そこで見たもの。

朝にいた闇の世界。

そこで聞いたこと。

今日のこの世界。

ここで感じたこと。

あと…自分の世界。

見たもの聞いたこと感じたこと、全てを思い返してみる。

自分って何だったんだろ。

自分は…。

「思い出せた？」

「……………」

思い出せたかどうかは分からない。

でも、涙が止まらなかった。

思い出した。

あの日から今日まで。

旅の道のりを。

あの日より前のこと。

村での生活を。

自分は、一人じゃなかったってことを。

自分は…。

「他の人のために涙を流せる。それが、ルウエ」

「……………」

「言ってたでしょ？ヤンリオも」

「…うん」

「ヤーリエに疑いを持ってしまったのが、ルウエがルウエでなくなつた大きな要因。その前に、死んだ世界を見てしまったのが起爆剤」

「……………」

「でも、もう大丈夫だよ。ルウエは、ルウエを思い出した。もう、忘れない」

「…うん」

葛葉はそつと抱き締めてくれた。

すると、涙はいよいよ止まらなくなつて。

赤い月の光の下。

でも、誰のためなのかは分からなかった。

葛葉が二人いるなんて、変な光景だったけど。

葛葉は、葛葉の頭をそつと撫でている。

「自分で言うのもなんだけど、可愛いね」
「うん」

「ルウエは、びっくりしなかった？」
「何に？」

「私がいることに」

「んー。あんまり」

「ふふふ。やっぱりルウエって面白いね」

「むう…。どういうこと？」

「そのままの意味だよ」

膨らませたほっぺたを、葛葉が指で突ついてしばませる。
でも、それが楽しくて。

「あ、そうだ」

「え？」

「ルウエに言うておかないといけないことがあるんだった」

「何？」

「今ここにいる私は、ルウエの中にあつた私の力が、赤い月によつて出てきたものなの」

「……？」

「だから、私であつて私じゃない。まあ、私自身、ちゃんと認識してるんだけど…」

「何言ってるのか、全く分からないんだぞ」

「…まあ、そっか。ごめん。気にしないで」

「うん」

「はは、良い返事だね」

「あ、姉さまは？姉さまにも力を貰ったんだぞ」

「お母さんのは、もうほとんど残ってないみたい。役目が終わったんだね」

「そう…」

「ガツカリしないの。お母さんは、いつでもルウエのことを考えてくれているから」

「うん…」

葛葉は優しく頭を撫でてくれる。

姉さまの力はもう残ってないみたいだけど、姉さまはいつも自分のことを考えてくれる。

そう思ったら、寂しい気持ちも飛んでいった。

「もう大丈夫？」

「うん」

「そっか。じゃあ、こっちの葛葉だね」

と、そのとき、医療室の戸が開いた。

入ってきたのは狼の姉さま。

びっくりしたような顔をして立ち尽くしていた。

「葛葉…か？」

「そっだよ。ただし、ルウエと同じ世界のね」

「驚いたな…。瓜二つだ…」

「当たり前じゃない。同一人物なんだから」

「それもそっか…」

「今から葛葉の病気を治すんだぞ！姉さまも手伝って！」

「あ、ああ…。何をすればいい？」

「んー。とりあえず、ちょっとだけ力を貸して」

「力？何かを用意する…って意味じゃなくて？」

「そ。ほら、こっちに来て」

「ああ…」

狼の姉さまは、まだ信じられないという風に。
自分が手を引いて、葛葉の横に座らせる。

「驚いたな…」

「さつきから、そればかり」

「本物か…?」

「厳密に言えば違うけど、ほとんど本物だよ」

「へえ…」

「ふふふ。触ってみる?」

「ああ…」

と、狼の姉さまはいきなり真剣な表情になって、葛葉のほっぺたを引っ張った。

今度は、葛葉の方が驚いたみたいで。

「ふむ。この柔らかい頬っぺたは確かに本物だ」

「むにゅ…。な、なんで…」

「葛葉と同じ気配がもうひとつしてたことくらい気付いてたさ。それに、ルウエからお前の話は聞いていたしな。本当にいたのを見たときは一瞬驚いたが」

「じゃあ、なんでびっくりした演技なんて…」

「こっやって、お前がびっくりするのを見たかったからだ」

「…趣味悪い」

「褒め言葉をどうも。それより、葛葉だ。完治するのか?」

「それはなんとも言えないけど、この子次第だね」

「そうか。それなら大丈夫だな」

「うん。…ルウエ」

「何?」

「治癒の術式。今から教えるから、やってみて」

「え?自分が?」

「うん。力である私が力を使うことは出来ないから」

「…分かった。やってみる」

「よし。じゃあ、葛葉に手をかざして。ねーねーは、ルウエに力を貸してあげて」

「…ねーねーというのは私のことか？」

「うん。ダメ？」

「いや、好きに呼べばいい」

「ありがとう。それじゃ、ねーねーはルウエに手を重ねて」

「これでいいのか？」

「うん。それから、手を通して力をルウエに送り込むことを意識して」

「……………」

「うん。じゃあ、ルウエ。葛葉が治りますようにって、力を送り込んであげて」

「分かった」

葛葉が治りますように。

この葛葉も、葛葉と同じように元気で活発になりますように。

…あれ？

葛葉ばかりになっちゃった…。

まあいいや。

葛葉が元気になりますように…。

「へえ。ルウエも赤い月が見えたんだ」

「うん」

「ん」。でも、なんか嬉しいような、残念なような」

「なんで？」

「私だけが見えてるんじゃないってのは嬉しいけど、私だけじゃないってのが残念かな」

「……？」

「望さまは、自分だけ特別なんじゃないってというのが残念なんですよ」

「…なんで？」

「自分だけしか出来ないって、なんか楽しいと思わない？」

「…別に？」

「あれ…。私に変なのかな…」

「いえ。誰しも、自分は特別でありたいと思うのは当然です。しかし、ルウエさまはその意識が少し弱いみたいですね」

「そっか」

「自分に変なの？」

「そういうわけではないですよ。それはある意味では特別なものですので、無意識的に特別を求めているのかもしれない」

「ふうん…」

薫の言ってることは、難しすぎるんだぞ…。

よく分かんない…。

「でも、朝起きたとき、ルウエがいなかったのにはびっくりしたな

あ

「あの世界は精神世界じゃないですからね」

「……………」

「たとえば、私たちのいる聖獣の世界は精神的な世界です。精神だけがこちらに来て、身体は眠ったまま。そして今回、ルウエさまが行った世界は、このこと同じ種類の世界なんです。境界がいよいよ危ないということですが、どうやら属性の乱れによる一時的なものだったようです。乱れが収まって、あの世界とは波長が合わなくなり、こっちに引き寄せられたんですね」

「じゃあ、あの世界にはもう行けないの？」

「そういうわけではないですが、相当難しいと思います」

「そんな…」

「どうしたの？新しい友達でも出来た？」

「うん。葛葉」

「葛葉？どういうこと？」

「向こうにも葛葉がいたんだぞ」

「え？へ？」

「干渉…しあつてるんでしょう。詳しくは分かりませんが。しかし、結構近くにある世界なのかもしれないですね…」

「世界にも、距離的な近さがあるの？」

「いえ、距離ではないです。さつき出した波長が一番近いですが、それでも説明しきれません。世界は複雑で不思議なものなんです」

「ふうん…。波長か…。それで、向こうの葛葉はどうだったの？」

「うん。身体が弱くて、肺の病気なんだって」

「肺…？大丈夫なの？」

「葛葉が治してくれたから、大丈夫なんだぞ。狼の姉さまも手伝ってくれて」

「葛葉？紅葉お姉ちゃん？」

「葛葉は、自分の中にあつた葛葉の力が、赤い月のお陰で出てきたもので、狼の姉さまは、向こうの世界の狼の姉さまなんだぞ」

「うん…。まあ、紅葉お姉ちゃんのこととは分かったけど…葛葉がよく分からない。肺の病気の葛葉とは別人？」

「同じだけど違う葛葉」

「…………？」

「おそらく、こちらの世界の葛葉さまが、なんらかの方法でルウエさまに力を送り込み、それが赤い月の影響で具現化した…ということだと思います」

「ん」。まあ、分かんない」

「…とにかく、こちらの世界の葛葉さまでしょう。形はどうであれ」

「ああ、そうなんだ」

「うん」

「でも、赤い月にそんな力があるなんて、聞いたことないよ？」

「赤い月は真実を映し出します。だから、ルウエさまの真実が映し出されたのでしょう」

「ああ、もういいや。私には分かんない」

「そう…ですか…。すみません…」

「いや…別に謝らなくても…」

薫はガツカリしてしまつて。

…でも、赤い月は真実を映し出す。

葛葉が、いつも傍にいてくれてるってこと。

そうだよね、葛葉。

夕飯も済み、二回目の日没も見て、お風呂も入って、今はもう布団の中。

向こうの方が、少し時間が早かったみたい。

「ルウエ」

「え？」

「明日には、もうお別れだね」

「もう出発するの？」

「うん。たぶん、ルウエたちもそうだと思うよ」

「ふうん…」

「寂しいね」

「そう?」

「寂しくない?」

「うん」

「そっか。ルウエは強いね」

「そうじゃないんだぞ」

「ん?」

「出発したらみんな離ればなれになるけど、でも、みんなこの世界にいるから。旅をしてれば、必ずまた会えるんだぞ」

「…そっか。そうだよ。ここにいるから、また会える」

「うん」

「あはは。なんだか、一日悩んでたのがバカみたい。こんな一瞬で解決してくれるなんて」

「うん…」

「どうしたの?」

「自分は、もう会えないから…」

「今日行ってたってという世界の子?」

「うん…」

「もう行けないの?」

「薫が、かなり難しいって言ってた…」

「そっか。でも、今回は行けたんだから、また行けるって」

「ホントに?」

「うん。だって、ルウエはその子に会いたいんでしょ?」

「うん」

「じゃあ、会えるよ。会いたって思えば、わたしたちでも会えるんだから。他の世界の子に会えないわけじゃないじゃない」

「うん」

「…元気出た?」

「出た」

「よかった。それじゃ、さっきのとでおあいこね」

「……?うん」

「借りを作ったままじゃ、すっきりしないしね」

「そんな、借りなんていいのに」

「ダメダメ。…親しい身内だからこそ、こういうのはキツチリしておくの。まあ、わたしの考えだから、ルウエは真似しなくていいけど」

「…うん」

「さあ。明日はたぶん早いから、もう寝よ?」

「うん」

月明かりに照らされた響の顔は、なぜか赤くなってるようにも見えた。

なんでだろ。

目を瞑ると、心地良い闇が包み込んでくれた。

今日一日のことをもう一度思い返してみたら、一番最後に葛葉の顔が思い浮かんだ。

最後に見せてくれた、あの笑顔を。

「ルウエさま、起きてください」

「んー…」

「起きてください」

「何…?」

「みなさん、発たれますよ」

「んー…」

「ルウエ。じゃあ、わたしたち、行ってくるね」

「うん…。行つてらっしゃい」

「オレたちも行こうか、ヤーリエ」

「うん」

「ヤーリエ…」

「またね、ルウエ」

「うん…。またね…」

「弥生、ミコト。ちゃんとお別れを言っておけ」

「うん。じゃあね、ルウエ」（またね）

「行つてらっしゃい…」

「ほなら、オレらも行こか」

「そうだね。じゃあ、ルウエ。ちょっと寂しいけど、きつと、また会えるから」

「えっ、望!？」

「行つてきます」

「望!待って!なんで置いてくの!」

「またね、ルウエ」

「待って、待って!」

でも、望は手を振るばかりで。
なんで?

待ってよ、望！

目が覚めた。

心臓はドキドキして、息も荒かった。

望…。

望は、隣で寝ていた。

つまり、今のは夢。

よかった…。

「ルウエさま…？」

「薫…」

「どうしたのですか？怖い夢でも見ましたか？」

「うん…」

「どんな夢ですか？悪夢は誰かに話せば怖くなくなると言います。もしよければ、話してくれませんか？」

「うん…。あのね、みんなが旅に出る夢を見たの…。みんな旅に出て、最後に望とお兄ちゃんも出ていくの…。自分を置いて…。待ってって言っても待ってくれなくて…」

「なるほど。”喪失”の夢ですね」

「ソウシツ…？」

「喪失とは、失うという意味です。喪失の夢に出てくるのは、自分が一番失いたくないものです。ルウエさまにとっては、旅の仲間であつたり、望さま、お兄さまであつたりするんでしょう。この夢によつて、自分が大切にしないといけないものを見つけられる人もいます。お金であつたり、身近な人であつたり。失って哀しい気持ちになれば、自ずと守るべきものも分かる、ということなんです」

「……………」

「喪失の夢は、ただ単なる怖い夢ではなく、再確認の夢でもあるんです」

「…うん」

「気持ちには楽になりましたか？」

「うん。ありがとう」

「いえいえ。…さあ、まだ寅の刻です。もう一眠りしましょう」
「うん」

薫のフカフカのお腹を抱き締めて。

失いたくないもの。

大切にしているもの。

目を瞑ると、薫はそつと顔を舐めてくれた。

眩しくて目が覚めた。

窓から、太陽の光が射し込んでいて。

横を見ると、明日香はまだ眠っていた。

「薫」

「はい、なんでしょう」

「おはよ」

「おはようございます」

「ずつと起きてたの？」

「いえ。私たちは、ルウエさまたちと比べると眠りが浅いので、目が覚めやすいんです。さつき、望さまたちが起きた際に、私も目が覚めました」

「ふうん。望はどこに行ったの？」

「洗面所かお風呂じゃないでしょうか」

「お風呂？」

「ええ。この先、ルイカミナまではお風呂に入られませんから」

「そつなの？」

「はい。そんなに遠くはないですが。ルウエさまも入っておきます」

か？
「うん」

ルイカミナまでお風呂がないなら、入っておいてもいいかな。それに、ベラニクにもしばらくは来ないだろうし。起き上がって手拭いを取り、部屋の入り口に向かう。

お風呂には望はいなくて、代わりに狼の姉さまと翔お兄ちゃんがいた。

「よう、ルウエ。お前も朝風呂か？」

「うん」

「そら、こっちに来て」

呼ばれるままに、狼の姉さまのところに行く。でも、翔お兄ちゃんは少し離れたところにいる。

「翔。そこじゃ少し熱いだろ。お前もこっちに来てよ」

「い、いいって……」

「なんだ。オレの身体が気になるのか？」

「……………」

「ははは。顔が真っ赤になってるぞ」

「紅葉姉さん！」

「まあいいじゃないか。こっちに来て」

狼の姉さまはジャバジャバと翔お兄ちゃんのところまで歩いていて。

逃げようとする翔お兄ちゃんの尻尾を掴むと、そのまま引きずってきた。

「痛いって!」

「お前が素直に来ないからだ」

「だ、だって…」

「ルウエや響の裸は平気なのにな? ああ、光はダメだったか」

「……………」

「まあ、気になるのは仕方ない。そういう年頃だし」

「……………」

「ふあ…。しかし、今日は良い天気だな。絶好の旅立ち日和だ」

「そうなの?」

「ああ。いろんなことが、ちょうど一段落した。それに、この晴れだ。オレたちは歓迎されてるのかもしれないな」

「誰に?」

「さあな」

「むう…」

「オレにも分からないよ。でもまあ、敢えて言うなら、この世界に、
だろうな」

「この世界…」

「そういえば、ルウエはいろんな世界を体験してきたんだっただな。

この短い間に」

「うん」

「どうだった?」

「…最初は怖かった。でも、今いるこの世界がとつても大事なもの
なんだって気付けたから。だから、今は怖くないよ」

「そうか。じゃあ、せっかく手に入れた心だ。その心を忘れないで
くれよ」

「うん。忘れない」

忘れない。

絶対に。

「ところで、翔。さっきから黙ってばかりだけど、どうした」
「……………」
「まだ照れてるのか？」
「まだって、そんな…」
「まあ、そのうち慣れるさ」
「もう、姉さんと一緒に風呂に入ることなんてないよ…」
「さあ、それはどうかな？」
「あまりいじめないでくれよ…」
「ははは。いじめるとは酷いな」
「実際にそうじゃないか…」

狼の姉さまは、笑いながら翔お兄ちゃんの背中を叩いていじめられてるようには見えないけど…。
でも、翔お兄ちゃんは本当に困ったような顔をしていた。

「お世話になりました」

「いえいえ。また来てね。楽しみにしてるから」

「はい。ありがとうございます」

「そら。これ、持ってけ」

「ありがとうございます。でも……」

「村長さん。旅団じゃないんだから、そんなに持てないよ。野菜も蜂蜜も重いし」

「そ、そうか……」

「すみません……」

「いや、俺の配慮が足りなかったただけだ。すまん、気を遣わせて
「いえ」

「ほんなら、もうそろそろ行こか」

「あんたは最後まであっさりしてたね」

「旅に別れは付き物。いちいち感慨に浸ってたら身が持たんわ」

「はは、そうかもしれないね」

「そういや、お前たちはこれからどこに向かうんだ？」

「ルイカミナです」

「あ、じゃあ、ちょうどいいね。茜に手紙を届けてくれない？」

「娘さんですか？」

「そうそう。最近、茜の伝書鷹が来なくてね。どこかで迷ってるのか、逃げ出したのか」

「分かりました。どんな人なんですか？」

「そうさねえ。ルイカミナで一番明るい子を探せばいいと思う」

「……えらい分かりやすい目印やな」

「あと、私に似て美人」

「あー、そら難しいな。美人やない美人を探すのが一番難しい」

「なんか、前にも似たようなことを言ってたね」

「まあ、茜ちゃんの美人っぷりは俺が保証する。太鼓判を押して、折紙を付けてもいい」

「あー、それは楽しみやなー」

「なんで棒読みなんだよ」

「まあ、だいたいは分かりました。任せてください」

「うん。ありがとね」

それから一瞬、誰も喋らなくて。

寂しいけど、でも、なんだか嬉しい。

そんな空気。

「じゃあ、また」

「うん。元気だね」

「氣い向いたら来るわ。∴そんなときは、またよろしく」

「おう。楽しみにしてる」

「またね」

「うん。またね」

別れるのは寂しい。

でも、また会うことが出来るから嬉しい。

旅立ちはいつも、そんな不思議な空気に包まれている。

ベラニクから少し離れたところに、先に出たはずの翔お兄ちゃんたちが出た。

何をしてるのは分からないけど、また喧嘩してるみたいで。

「まだ実験段階だし、山道だからやめろって言ってるだろ！」

「じゃあ、どこで使うのよ！そんなんじゃ、いつまで経っても使えないじゃない！」

「速度が出れば制御が利かないことくらい、簡単に想像がつくだろう！何も無い平地で、いろんなことを試してから使うのが普通だ！」

(ねえ…。喧嘩はダメだよ…)

「せやせや。お前らはこんなとこで何しとんねん」

「…お前らか。こつちの話だ。口出ししないでくれ」

「えらいもんやの、お前も」

「何だと？」

「ベラニクにいたときは、なんやかんやで仲良くやってたのに、バラバラになったら即刻切り捨てかい。そんな薄情者やってんな」

「ああ、そうだ。そんな薄情者は放っておいて、さっさと先に行け」

「八つ当たり？」

「せやな。ええ言葉知つとるやん、ルウエ」

「うん」

「八つ当たりじゃない！」

「じゃあ、なんやねん。ゆうてみ？」

「うっ…」

「ふん。まあ、五月蠅い言わんだだけマシやな」

翔お兄ちゃんは俯いてしまつて。

弥生も、どこか違うところを向いている。

「で？なんや。何で喧嘩しとんねん」

「…加速装置」

「なんやねん、それは」

「…自動三輪の装置のひとつ。聖獣の力を借りて、急激に速度を上げる装置」

「それで？」

「俺は、まだ加速装置のことも理解しきれてないし、ミコトに掛かる負担とか制御の仕方とかが分かってないから、理解出来るまで使うのは控えた方がいいって言ってるんだ。でも、弥生は使えって言

って」

「だって、平地なんてこの先いつあるか分からないじゃない。ずっと山だし。そんなこと言ってたら、一生使えないよ」

「わけも分からないうちに使って、ミコトの体調が崩れたりしたらどうするんだ。普通の動力とは違うんだぞ」

「そりゃそうだけどさ……。でも、使ってみないと、いつまでも分からないままじゃない」

「はい、ここで一旦切るで。二人とも、二回、言いたいこと言ったな。で、まずは整理からや。翔は加速装置を使うのは反対。理由は、速度が上昇して制御が利かんようになるんと、ミコトへの負担がまだまだ未知数やから。逆に、弥生は推進派。理由は、先延ばしにしてたら、永遠に使う機会を失うから」

「そうだ」「うん」

「まあ、使うかわらんか、零か一かの問題やから、折衷案は無理。お互いに折れんみたいやし、妥協案を考えるしかないわな。両方が納得の出来る」

「あと、二人とも、当のミコトを全く無視して話してるよね」

「……………」

「……………」

「えっと……。わたしは、別にいいと思う。疲れたら、休めばいいし……」

「でも、力を急激に使うものなら……」

「翔お兄ちゃんは黙ってて。私は、ミコトに話を聞いているの」

「……………」

「……………」

「うん……。とにかく、わたしはお兄ちゃんたちの役に立ちたいのからしいよ。どうするの?」

「じゃあ、早速……」

「いや、待て」

「何よ。ミコトがいつって言うてるのに」

「まだ制御の問題が残ってる。加速装置を使ったとして、予想以上の急加速に対応しきれないということもある。やっぱり、見通しの利かない山道は避けるべきだ」

「そんなこと…」

「まあ、一理あるわな」

「えっ？」

「山道は起伏が多いし、蛇行してる。そこで速度出したら事故起すんは目に見えてる」

「でも、ミコトは…」

「ミコトが、自分が加速装置を使わせたばかりに…と、自分を生賣め続けることになる可能性もある。お前らが大怪我したりしたらな。そうなったときに、弥生は同じことが言えるかどうかや。翔の言うことを聞いとけばよかったなんて考えたりせんか？それやったら、ミコトもこんな風に考えたりせんかったのに…とか」

「……………」

（わたし…そんなこと、薦めてたの…？）

「たとえば、の話や。まだ実際に事故は起きてへんし、今からどうこう考えることでもない。ただ、そういうことも考えられるってこと。分かったか？」

（うん…）

「ほんで、や。このままでは埒が明かんから、ひとつ情報。ルイカミナは、広い草原…正確にゆつたら盆地やねんけど、その真ん中にある。つまり、山を越えさえすれば、あとは平地や。いくらでも試せるってことやな」

「…それを、なんでもっと早く話さなかったんだ」

「自分ら自身で妥協出来る案を考えることも必要やと思わんか？特に、お前らは喧嘩も多いみたいやし。いつでも今回みたいに仲裁が入るわけやないんやし」

「……………」

「まあ、そういうことや。はよ行って試してこい」

「…ありがとう」

「礼を言われるようなことはしてへん」

お兄ちゃんは、翔お兄ちゃんを叩いて。

翔お兄ちゃんは小さく頷くと、自動三輪に乗る。

「じゃあな。またルイカミナで会うかもしれないけど」

「もう喧嘩すんなよ」

「保証は出来ない」

イタズラっぽく笑うと、弥生の頭を軽く撫でてから手を振る。

ミコトは、翔お兄ちゃんの肩に止まって。

そして、前を向いて、坂道を駆け上がった。いった。

ずっと坂道が続いていた。

翔お兄ちゃんたちは、今はどこにいるんだろ。

もう山を越えたのかな。

「あー、やれやれ。しんどいなあ……」

「ルウエとリュウは大丈夫？」

「うん」「大丈夫なの」

「ルウエは、なんやいろいろ契約してるしな。リュウは知らんけど」

「そうだね。特に、薫なんかはすごそうだよな」

「いえ……。それほどは……」

「まあ、他はチビばかりやしな。お前の貢献度が一番高いのは事実やろ」

「あ、そういえば、最近、悠奈とか七宝とか見ないよね。ずっと寝てるの？」

「うん。眠たいんだって」

「聖獣の子供はよく寝ますね。ミコトは比較的元気でしたが。そして、起きているときはその余りある力を最大限使って、こつちの世界に来てイタズラをしたりする困ったのもいます。まあ、契約をしさえすれば、そんなことはしなくなるんですが」

「なんで？」

「契約してしまうと、他のものに憑依出来なくなるということもあります。やはり契約者のお陰であるところが大きいようですね」

「ふうん？」

「契約するときほだいたい、お互いがお互いを気に入れて……という場合が多いです。だから、イタズラしてるくらいなら、その力を契約者のために使いたいと考えるんでしょうね」

「ちよっと待って。お互いがお互いを気に入ってたって場合が多いっ

てどういうことなの？そうじゃない場合もあるってこと？」

「今はそんなことはないんやけど、昔は無理矢理契約させられてたこともあったらしい。戦乱が続いたときなんかは特にな。カイトもゆうてたやる？力を求めてんのかって」

「ああ、そのことを言ってたの？」

「せやな。あいつ自身は契約したことなかったみたいやけど、仲間がだいぶ酷い目に遭わされたらしい。だから、あんな質問したんちやうかな」

「ふうん…」

望は何かを考えるように、一瞬、宙を見つめる。

何を考えてるのは分からないけど。

「まあ、今はもう聖獣の存在を知ってるんは、斡旋者と契約者、オマケ程度に周りのやつらくらいやから、そんな不屈きな輩もおらんけどな」

「でも、なんで広がっていかないんだろ」

「ん？いるって噂が、か？」

「うん」

「なんでもそうや。人間は、実際に目にしてみやな信じられんもんやろ？幽霊があるって触れ回ったところで、相手にしてもらえんやん。それと一緒にやる。聖獣は、その辺にある犬猫とかと見分けつかんしな。九尾の狐とかはあれやけど、でも、ジツと黙ってたら分からんやん」

「んー…。そんなものなのかな…」

「そんなもんやて。…望は、聖獣のことを広く知らせたいんか？」

「んー、どうなんだろ。そんな気もする。でも、さっきの話を聞いたら、やつぱりダメなのかなって思うんだ。戦は嫌だもん」

「まあ、せやな」

戦は喧嘩だつて葛葉が言つてた。
でも、哀しみしか生まない喧嘩だつて。
たくさんの人が巻き込まれて、それでいて、失うばかりで得られるものはない。
それなのに、戦をするのはなんでなんだろう。
葛葉はそれ以上は何も言わなかったけど。
…カイトの仲間が酷い目に遭つたつて聞いて、今まで遠くにあった戦が、少し近くに來たような気がした。
本物の戦は知らないけど、でも、そんな気がした。

薫に乗つてると、見える世界が全く違う。
地面より木の枝の方が近い。

リュウは、寝転がつて木の隙間から見える空を見ていた。

「ルウエさま。あまり木の枝を揺ると、毛虫が落ちてきますよ」

「えっ」

「せやな。刺されてもあかんし」

「毛虫…」

「あ、そういえばさ、ルウエ。その服はどうしたの？」

「なんや、今気付いたんか？」

「そういうわけじゃないけど…」

「向こうの世界の姉さまに買ってもらつたんだぞ」

「へえ。それで、前の服は？」

「ん…。置いてきたかも…」

「そっかあ。また取りに行かないといけないね」

「うん」

また取りに行かないと。

葛葉にも会いたいし。

きつと、また行けるから。

「でも、こっちでもよく見るようなかんじだよね。向こうもあんまり変わらないのかな」

「そうちゃう？まあ、似たような世界なんやる」

「ふうん…」

「どちらにしろ、オレらでは知り得んことや。…いや、望は聖獣の世界は知ってるか」

「そういえば、あの世界も別の世界だったよね」

「なんや、その今気付いた感は…」

「だって、あのときは何も分からないうちに帰ってきたし、あれ以降一回も行ってないし」

「行こうと思てないだけちゃうんか」

「まあ…それもあるかな」

「なんや、それは…」

「聖獣の世界は、ほとんどの世界と密接に繋がっていますので、他の世界と比べても敷居は低いと思います。望さまは契約もしています、行こうと思えばすぐに行けるはずですよ」

「んー。まあ、そうかもね」

「はい」

「それにしても、タルクメス…だっけ。なんか良いかんじだったなあ」

「なんや。格好良かったんか？」

「んー、どうだろ」

「タルクメスさまは虎ですので、あまりそういった基準では計りにくいかと」

「まあ、それもそうなんだけど、なんというか、優しいというか」

「火の神やのに？」

「タルニアやクイルは燃え盛る炎そのものですが、タルクメスさま自身やリユウは周りを優しく照らす…言うなれば、行灯の火ですね。」

火と言つても、いろいろあるんですよ」

「ふうん…。火の聖獣はカイトしか知らなかったからな。似たようなもんかと思てたわ」

「火は水に並び、最も幅の広い属性だと言われていきますので」

「そうか」

お兄ちゃんは納得したように頷いて。

何なんだろ。

何か分かったのかな。

「ふあ…」

名前を呼ばれたときに、少し反応してたりユウだけど。

大きな欠伸をして、寝る体勢になっていた。

「ほら。後ろ見てみ」

「あ、煙」

「煙やのうて湯気やな、あれは。温泉の湯気や」

ベラニクが小さく見える。

山と山の間挟まれて。

「ベラニクの温泉って、源泉は高温なの？」

「そうなんちゃう？裏の川の水引いて薄めてたみたいやで」

「へえ、気付かなかった」

「宿屋の裏でやってたからな。まあ、なかなか気付けんのとちゃうか」

「ふうん…」

「あ。あれ」

「どれ？」

「あそこなの」

「んー…？」

リュウが指す方向から、何かが飛んでくる。

だんだん近付くにつれ、姿がはっきりしてきて。

「鷹だ」

「…鷹やな」

「前に来た鷹なんだぞ」

「え？どこに？」

「宿屋のところに」

「へえ…って、うわっ！」

鷹は望を掠めて、リュウの鞆に止まった。
何かが見えるのか、ベラニクの方を見つめながら。

「久しぶりなの」

「……………」

「なんや、無口やな」

「鷹は普通、喋らないでしょ……………」

「まあ、せやけど」

「どうしたのかな」

「さあ？」

「きつと、一緒にルイカミナに行きたいって言うてるの」

「ええ……………そうかな……………」

「まあええやん。別に、邪魔になるもんやなし」

「そうだけど……………」

「なんや、怖いんか？」

「怖くないけど……………」

「ほなら、ええやん」

「ん……………。明日番はどう？」

「……………」

「こいつは、もとからなんも喋らんやん」

「……………」

「喋ってるじゃない、たまに」

「しかし、こいつとあんまり変わらんやん。足音もせんし」

「足音は何か関係あるの……………」

「ないかもな」

「ねえ、どうするの？」

「え？ああ……………まあ、いいんじゃない……………」

「……………」

「ひゃっ……………」

鷹が翼を広げて、ちょっとだけ羽ばたく。望はかなりびつくりしたみたいだけど。

「なんや、鷹は苦手か？」

「そうじゃないけど…。鷹って怖いじゃない…」

「そうか？」

「なんか、眼光が鋭いつていうか…」

「なんや、そんなんかいな」

「怖くない…？」

「どうやるな」

「可愛いよ。ほら」

「あー、リュウ。あんまり手え出すなよ。噛まれるぞ」

「噛むの？」

「いや、分からんけど、いちおう。噛まれてもあかんし」

「ふうん」

でも、鷹はジッとどこかを見ていた。どこを見てるのかな。

「まあ、まずは昼ごはんにしよか。ええ加減、この野菜も重たいし」

「あ、そうだね」

「…なんや急に元気になったな」

「そ、そんなことないよ…」

「まあええわ。準備しよか」

「うん」

荷物を下ろして、準備を始める。

リュウが鞆を下ろそうとすると、鷹は飛んでいってしまったけど。でも、すぐ上のところの空でクルクル回っていた。

南瓜を焼いたものは、南瓜の煮物とはまた違った味がした。なんだか、ちよつと甘くなくて、でも、焦げたところも美味しい。

「明日香も食べる？」

「……………」

南瓜の切れ端を目の前に持っていくと、ちよつと匂いを嗅いだあとに食べた。

どう思ってるのかは分からないけど、ジツとこつちを見ていた。美味しかったのかな。

「でも、一日分しか貰えなかったのは勿体なかったなあ。こんなに美味しいのに」

「これ以上持てんやん。薫に持たすんか？」

「あ、それはいいかも」

「おい…」

「みなさんのお役に立てるなら光栄ですが」

「自分らの力で旅しやなつまらんやろ？そら、薫とかカイトに頼んだら楽に旅出来るかもしれんけどさ。でも、それでは旅とも言えんやん」

「まあ、一理ありますね」

「翔お兄ちゃんたちは、自動三輪を使つてたじゃない」

「あれはあれで、旅のひとつの形態やろ。歩きで旅するのも、自動三輪で旅するのも、馬車で旅するのも。でも、今まで何も使わんと旅してたのに、急に便利な道具とか特殊な能力を持った仲間を手に入れて、都合のええときだけ力を借りる…なんてのは卑怯やと思つねんな。まあ、個人の意見でしかないんやけど」

「前に、カイトに乗ってベラニクまで飛んでいったのは？」

「あれは緊急事態やん。だいたい、背負って行ってたのでは間に合
わんかったやろ」

「んー、そうなのかな」

「お前、見た目より重たいし」

「何よ、それ」

「言つたまんまや」

「重くない!」

「喧嘩しないでください」

「お兄ちゃんが悪いんだよ!」

「事実をゆつたまでや」

「もう!」

「そこまです。二人とも、しばらく黙っててください」

「……………」「しゃーないな」

「軽口も、過ぎれば喧嘩の種です。分からないのですか?」

「前にも聞いた気がする」

「それなら、尚更なぜ今になっても軽口を叩くのですか」

「癖やな」

「では、直してください」

「そんな無茶な……」

「自分の発した言葉が、相手にどういう風に捉えられ、どうい
う結果になるか。それすらも考えられないのですか?」

「……………」

「出来ないのですか?」

「善処します」

「次は望さまです。軽口に対して感情的になるのはどうかと思
います。軽口だと分からないこともないでしょうし」

「そうだけど……」

「けど?」

「言われっ放しじゃ嫌じゃない……」

「軽口なんですから、軽く受け流しておけばいいのではないですか」

？ムキになればなるほど、相手もどんどん重ねてきます。それにさらに重ねる…としていくと、いつまでも止まらないでしょう」

「……………」

「分かりませんか？」

「…分かります」

「それならいいです。では、軽口を軽く受け流すようにしてください」

「…ハイ」

二人を叱って、薫はため息をついた。

…自分も、喧嘩はあんまりしてほしくないんだぞ。

これで喧嘩が減るならいいけど、でも、シユンとしてる二人を見るのもイヤ。

薫もそう考えているのか、静かに目を瞑っていた。

鷹は、またリユウの背負い袋に止まって、あたりを見回していた。何を見てるのかな。

「あー、しんど。やっと頂上やな」

「良い眺めだね。ずっと向こうまで見える」

「でっかい盆地やからな」

「ヤマトのところも盆地だったよな」

「まあ、せやな。ちよつとした盆地やな。でも、こっちは、山を迂回して大きく向こう側に回っていったら、ユール才まで続いている」

「へえ。向こうと繋がってるんだ」

「もしかしてお前、ヤマト経由でしか行ったことないんか？」

「うん」

「…まあ、平地は森に入ったりしたら賊も多いしな。ああいうやつらは、いくら捕まえても減らん。山道は、ちよつと大変な分、そういうやつらも少ないし」

「ふうん」

「まあ、護衛として雇われてる分くらいは守ったるけどな」

「それはもう、きつちり働いてくれないと」

「…賃金は貰ってへんけど」

「前に払ったじゃない」

「あれは、ヤマトまでの料金や」

「どうせ後払いでしょ。今、お金ないし」

「…踏み倒すなよ」

「踏み倒さないよ。たぶん」

「なんや、それは…」

そういえば、お兄ちゃんも護衛だったんだぞ。

護衛としては、あんまり働いてないけど…。

「…………！」

「わわっ！な、何？」

「あ、飛んでいった」

「ホントだね。何だったんだろ」

「さあ？」

急に飛んでいった鷹は、遠くに小さく見える街に向かっていったみたいだった。

あれが、ルイカミナなのかな。

「ねえ、あそこ」

「あれがルイカミナやな。翔らは着いた頃やるか」

「そうなの？」

「見た目ほど遠くも小さくもないよ。周りに何も無いから、そう見えるけど」

「ふうん」

「まあ、充分景色も堪能したし、そろそろ行こか。頑張ったら夜までには着くやろし」

「うん」

ルイカミナってどんなところなのかな。

あんなに小さく見えるのに、そんなに遠くないって…。

なんだか、ちょっと不思議なんだぞ。

坂道を下っていると、前に誰かが見えた。

何かを探してるみたいで、草むらに頭を突っ込んでいる。

「あの…何してるんですか？」

「わっ、びっくりした」

「何してるんですか？」

「探し物だよ。キミたちは？」

「私たちは旅の者です」

「ルイカミナに行くの？」

「はい」

「そう。ようこそ、ルイカミナへ！…って、これは違うなあ」

「何ゆうてんねん、お前は…」

「私はね、ルイカミナ自警団に所属してる茜っていうんだ。今は、ルイカミナに来た人を歓迎する言葉だよ」

「ふうん」

なんだか面白い。

…そういえば、茜ってどこかで聞いたような。

「茜さんって、もしかして、ベラニクにお母さんがいたりします？」

「うん。いるよ」

「あつ、じゃあ、ちようどよかった。手紙を預かってるんです」

「手紙！そうだよ手紙！私の鷹子がいなくなつて、探してたんだよ」
「！」

「鷹子…」

「鷹子って鷹やる？草むらん中探しても見つからんと思うけど。そんなどこ探すんやったら、空見てた方が早いんとちゃう？」

「あ、それもそうか。頭良いね」

「なんやねん、こいつは…」

「でも、心配で心配で。家出して一週間くらい帰ってこないから、ホントにもう…」

「はあ？家出？鷹が？」

「鷹子だよ」

「そんなんどうでもええわ」

「私が鷹子の餌をちよつと食べたから怒ってるんだ…。あ、でも、美味しかったよ」

「鷹の餌を食う機会には、一生恵まれんと思うわ」

「そう。残念」

「…えっと、手紙なんですけど」

「手紙？鷹子がいなくなってから書いてないけど」

「いや、そうじゃなくて、茜さんのお母さんから手紙を預かってるんです」

「えっ、ホント？」

「さっきゆうてたやろ…」

「はい、これです」

「ふむ」

茜お姉ちゃんはすぐに封を切って、手紙を読み始める。そして、すぐに目を上げて。

「大変だ」

「えっ？」

「団長に休暇届出すの忘れてた」

「支離滅裂やな、お前は…」

「いや、ここに書いてある」

「…よっぽどやねんな、お前のうっかりは」

「そうそう。この前も、うっかり鷹子の餌を食べちゃったんだよね」

「…うっかりで済む話やったらええけどな」

「まあいいや。私、一旦帰るね。街に来たら自警団の事務所に来て。たぶん、そこにいると思うし。いろいろ案内出来ると思うからさ」

「分かりました」

「じゃあね。またあとで」

そう言って手を振ると、小走りで山を降りていった。
…なんだか、すつごく元気な人だったんだぞ。
と、草むららがガサガサと動いて。
出てきたのは、見覚えのある赤狐。

「茜、ちよつと茜？」

「なんや、次から次へと…」

「ん？あれ？ルウエ、だっけ。なんでここにいるの？」
「旅してるから」

「あ、そつか。ベラニクにいたんだったよね」

「ルウエ、知り合い？」

「うん。ツクシお姉ちゃん」

「ツクシ…お姉ちゃん？」

「そっだよ。初めまして」

「…初めまして」

「薫は？帰ったの？」

「うん」

「そつか」

「ツクシは、何をしてるの？」

「ん？茜って子の鷹を探してるんだ。どっちか、見なかった？」

「茜さんは、ついさっき、街に帰っていったよ」

「あー、そつか。んー…もう見えないね…」

「茜の近くに転移でもしたら？術式は使えるんやろ？」

「んー。でも、私、転移は苦手だし。どちらかというと、変化ね」

そう言っつて、宙返りする。

地面に着地したときには、茜お姉ちゃんの姿になっていた。

「どっひっ？」

「どっつって言われてもなあ…」

「まあ、そんなものよね。だから、聖獣の存在を知ってる人は、化かし甲斐がないのよ」

ツクシお姉ちゃんはまた宙返りをして、もとの姿に戻る。でも、退屈そうに尻尾を振っていて。

「まあ、化かし甲斐とかそういうんは一旦置いて、追い掛けやんでええんか？」

「茜？ 追い掛けなくても、どうせルイカミナに帰るのは一緒だし」

「そういえば、ツクシって茜さんと契約してるの？」

「うん。茜がルイカミナに来てからね」

「へえ」

「なんや。それやったら、転移使わんでも茜んところに行けるやん」

「そうだけどね。ルウエたちと行こつかなって」

「ええ……」

「なんで不満そうなのよ」

「面倒くさいやつが、また増えた……」

「失敬な。これでも、薫と同じく、クノさまの右腕なんだから」

「余計面倒くさい」

「なんでよ……」

お兄ちゃんは、ツクシお姉ちゃんの鼻をピンと弾く。

すると、ツクシお姉ちゃんはお兄ちゃんのことをキッと睨んで。

また新しい旅の道連れなんだぞ。

ルイカミナまでだけど。

でも、なんだか嬉しい。

たくさん、みんなと旅が出来るのは。

坂道はまだまだ続く。

ずっと先まで続いている…ように見える。

望の言ってた、そんなに遠くないってのが気になるけど…。

「……………」

「何か喋りなよ、薫」

「ツクシと話すことはない」

「冷たいなあ」

「毎日のように話してるじゃないか」

「仕事の報告でしょ。あれは話してるなんて言わないの。前のおきだつて、せつかくみんな集まったのに何も喋らないでさ」

「おいそれと話ができるような人もいなかったじゃないか」

「そんなの無礼講だよ。年配の人の面白い話を聞く良い機会だったのに」

「聞くだけは聞いていた」

「あ、それもそうか」

「…ねえ、何の話なの？」

「うん。前にね、クノさまがみんなを呼び集めて、ワイワイと喋ったりしたんだ。そのとき、私はルウエと初めて会ったんだけどね」

「ふうん」

「それでさ。みんな楽しくお喋りしてるのに、薫はジーツとしてほとんど何も話さなかったんだ。はあとかふうとか、気の抜けた返事はしてたかもしれないけど」

「適当なことを言うな。返事をするときは、しっかりしてた」

「それにさ、歳上の方が怖いならさ、大和とかと喋ってればいいのに」

「怖くはない。俺みたいなのが話すには、畏れ多い方ばかりだった

んだ」

「あ」

「え？」

「薫が俺なんて言うの、初めて聞いたかも」

「普段は敬語だからね。堅物なんだよ、薫は」

「堅物……」

「まあ、それはそうだけど、なんか新鮮な感じがする」

「私は聞き慣れてるけどね」

「そういえば、薫とツクシはとっても仲良しなの」

「あ、そうだよ。すっごく仲良さそう」

「まあね。兄妹だし」

「え？兄妹？」

「血は繋がってないけど。育ての親が一緒なの。私には親がいな
いから」

「なんで？」

「先の戦で死んじゃったらしいのよ。無理矢理駆り出されてね」

「えっ……」

「先の戦ゆつても、何百年か前の話やと思うで。昼くらいに話した
やろ」

「うん。二百年くらい前なのかな。私自身もまだ生まれたばかりだ
ったから、何も覚えてないんだけどさ」

「私もツクシも、当時のことは知りません。ただ、戦を生き残った
者は口を閉ざし、そのあたりから、この世界の人間は聖獣の存在を
忘れてしまったのです」

「……………」

「何があったんやろな。まあ、オレらでは計り知れんことかもしれ
んけど」

「でも……。でも……私たち人間のせいで、ツクシの親……たくさんの聖
獣が死んだんでしょ……？なんでツクシは……。なんで、私たちと契約
出来るの……？」

「理由は簡単。私たちは、戦のことは知らない。でも、私たちでも知ってることがある」

ツクシは、望の頬を伝っていた涙を舐める。
そして、ずっと先、ルイカミナの方を見て。

…何を知ってるのかな。

結局、ツクシは何も言わなかったけど。

でも、大切なものなんだってことは分かった。
遠くを見つめるツクシは、どことなく優しい顔をしてたから。

木はまばらになってきて、見通しが少しずつよくなってくる。
長い長いと思っていた坂道はそろそろ終わり、目の前には草原が広がっていた。

「ん？」

「どうしたの？」

「いや…」

「……？」

「ウウ…」

「気のせいじゃないよ。様子見だろうね」

「ルイカミナは目と鼻の先やのに、賊が出るんか？」

「賊なんてどこにでもいるじゃない。弱小盗賊なんて、いくら退治しても湧いてくるし」

「まあ、せやけど」

「ルイカミナの自警団も怠けてるわけじゃないよ。いちおう、退治と発生が拮抗するくらいまでは頑張ってるんだからね」

「ふうん…」

お兄ちゃんは、油断なく周りを見て。

まだいるのかな。
分らないけど。
薫が帰っちゃったからかな…。

「それにしても…ん？」

「何？」

「ほれ、あそこ」

「え？」

お兄ちゃんが指したところ、背の高い草の間から、馬車が見えた。そして、ゆっくりと角を曲がるようにして、自分たちが進んでいる道に合流する。

「ちよつどええわ」

お兄ちゃんは指を咥えて、指笛を鳴らす。

何かを吹いてるみたいだけど、決まった調子があるみたい。

それを何回か繰り返す。

すると、それに気付いたのか、馬車が止まって誰かが降りてきた。

「よっしや。行こか」

「え？今、何したの？」

「あとやあとや。行くで」

「え？ちよつと、待ってよ！」

何か分からないうちに、お兄ちゃんに急かされて馬車に向かう。近付くにつれて、馬車の横に立つ人がはっきり見えてきて。

「あ！クノお兄ちゃん！」

「あ、ホントだ」

「お久しぶりです、みなさま」

嬉しくて、一番最初に走って行って、クノお兄ちゃんに飛び付いた。クノお兄ちゃんは、笑いながら優しく頭を撫でてくれて。

「いいわねえ、人気みたいで」

「あ、お姉ちゃん」

「お久しぶり〜。元気だったあ？」

「そんなに日は経ってへんけどな。あと、ルウエは速すぎ」

「仕方ないじゃない。クノが好きだもんねえ？」

「うん！」

「タルニアさん。お久しぶりです」

「はあい。望ちゃんも元気だった？」

「はい」

「そう。それは良かったわあ。病気をしたって噂を聞いたから」

「えっ、なんで知ってるんですか？」

「ふふふ。内緒よ〜」

「ええ…」

「それより、早く乗り込んでください。七人乗りの馬車ですので、全員乗る余裕はありません」

「おう、すまん。…しかし、七人乗りの馬車に一人で乗っとるんかい、お前は」

「いいじゃない。それに、こういうこともあるし」

馬車に乗り込みながら、そんなことを話していた。

そして、全員が乗り込んだのを確認すると、クノお兄ちゃんは馬車を走らせる。

…いろいろ気になることはあるけど、クノお兄ちゃんとお姉ちゃんにまた会えて嬉しいってというのが先に来て。いっぱい話したいこともあるし。

なんだか、ワクワクしてきたんだぞ！

「仕事よ、仕事。たまたま急用が入ったのよお」

「ホンマかいな…」

「ふふふ。信じるか信じないかは、あなたの自由よお」

「せやけども…」

「でも、助かりました。盗賊に付け狙われてたみたいで」

「そうみたいね。まあ、私たちに比べたら、そんなにでしょ？」

「え、あ、それは…」

「心配しなくて大丈夫よ。ルイカミナの自警団は、ラズイン旅団を取り締まらないから。ねえ、ツクシちゃん？」

「姉さまには敵いませんね…」

「え？知り合い？」

「そりゃ、もう」

「クーア旅団かてルイカミナに網張ってるんやから、ラズイン旅団も一緒やろ」

「それもそっか」

「クーア旅団、および、ラズイン旅団には、孤児院経営に関して多大な恩義があります。自警団も、孤児院出身の者が多いので、取り締まれないんです」

「…上手いこと、手え回したな」

「何のことかしらあ？私たちは別に、恩を売るために孤児院経営を助けているわけじゃない。私たちのやっていることが悪だと感じるなら、いくらでも取り締まってくれていいわ。そうでないと、示しが付かないもの。恩義があろうとなかろうと、私たちが盗賊であることに違いはないんだから」

「そうは言っけどな、取り締まることによって孤児院の経営が成り立たんようになったら困るし。だから、取り締まりなんて出来んやろ」

「さっきのツクシの話聞いてたのかしらあ？ラズイン旅団だけでなく、クーア旅団でも援助してるのよ。クーア旅団は全うな旅団なんだから、ラズイン旅団を取り締まったとしても、クーア旅団からの援助は残る。何のために名前を変えてると思ってるのかしらあ？それに、援助をしているのは私たちだけじゃないわ。旅団天照もユンディナ旅団もその他の旅団も、何かしらの形でさまざまな援助をしている。天照は情報屋なんかも兼業してるけど、ユンディナ旅団は完璧に全うな行商旅団よ。…ラズイン旅団や旅団月読が捕まったところで、経営は苦しくならない。それどころか、裏の汚いお金を使わなくて済むのよ？良いこと尽くしだと思わない？」

「…なかなか、そうもいかんて」
「ふふふ」

そして、それ以上、お兄ちゃんは何も喋らなかつた。

よく分からないけど、お姉ちゃんはお兄ちゃんを言い負かしたってことなのかな。

んー…。

馬車が止まった。

どうしたんだろ。

「あーっ！クノさん！お久しぶりです！タルニアさんもいるんですか？」

「いますので、早く通行証明をください」

「はいはい。で、何人ですか？二人？」

「八人だよ、茜」

「あれ、ツクシ？なんで？」

「茜が置いて帰るからだよ」

「あれ？そうだったけ？」

「こんばんは、茜さん」

「あつ、えつと……。ごめん、名前忘れちゃった……」

「私は望です。この子がルウエで、この子はリュウ。あと、この狼は明日香。それと……」

「まあ、オレはなんて呼んでくれても構わん」

「じゃあ、適当に書いとくね」

「ああ」

「お泊まりは？クノさんとタルニアさんは旅団の宿ですよね？」

「はい」

「オレらは……」

「全員、旅団の宿よお」

「はあい」

「えつ、でも……」

「たまにしか会えないんだから、それくらいはやらせて。望ちゃんもルウエちゃんも、クーア旅団の一員だもの」

付けていた銀の腕輪を指して、お姉ちゃんはニッコリと笑う。

クーア旅団とラズイン旅団の団員であるという証。

「……………」

「あ、そうね。リュウちゃんにもあげておこうかしら」

「やったー！」

「でも、リュウは天照の団員ですよ？」

「旅団を梯子してはいけないという規則もないわ。団員として認めれば、団員証を渡す。それだけが決まりよお」

「なるほど」

「ふふふ。ということで、あなたを団員として認めるわ。これからよろしくね」

「よろしくお願いします」

「礼儀正しいのねえ」

「遙お姉ちゃんに教えてもらったの」

「そう。遙に」

「うん！」

お姉ちゃんはまだ笑うと、リュウの頭を撫でる。

…これで、リュウもクーア旅団の仲間なんだぞ。

もともと旅の道連れ、家族の一人だったけど。

でも、もっと繋がりが強くなった気がして、嬉しかった。

旅団の宿はすぐくて。

馬車に乗っていったから、ルイカミナの街の中はよく見えなかったけど。

でも、端から端まで歩いて三十歩も掛かる部屋に泊まることになった。

「ここって、ものすごく高い部屋なんじゃ…」

「そうねえ。一人一泊三十万は掛かるかしら。三食と、その他いろいろ合わせてだけど」

「そ、そんなお金、持ってないです！」

「あら、お金なんて取る気はないわよ？それに、一泊一万そこいらの普通の部屋や、それより安い部屋は、お陰さまでいつも満杯。高い部屋しか空いてないのよお」

「で、でも…」

「ゆっくりしていきなさい。せっかく、良い縁を持つてるんだから。しっかり活用しないと」

「せや。人の好意は、いちおう受け取っとくのが吉や」

「ん…」

「ねえ、お菓子があるの！」

「また高級な菓子やのう」

「高い部屋には高いお菓子。当たり前でしょう？」

「せやけど」

「まあ、まずは夕飯からよお。お菓子はその後」

「はあい…」

美味しそうなお菓子。

でも、先に夕飯。

夕飯も美味しいんだろうな。

…望はまた頭を抱えているけど。

こんなに広い部屋に泊まれるのに、嬉しくないのかな。

気が付けば、あたりは真っ暗になっていた。

…どうしたんだっけ。

「あ、ルウエ」

「望…」

「ちよつと、はしやぎすぎたね」

「何があつたの？」

「階段で転んで、落ちたんだよ」

「ふうん…」

「覚えてない？」

「うん」

「そう。まあ、怪我とかもなかったんだけどね。痛いところとかない？」

「んー…ない、と思う」

「よかった。でも、明日からは、もうちょっと落ち着いて行動するんだよ」

「うん」

「ふふふ。じゃあ、もう夜も遅いから。早く寝なさい」

「分かった」

布団を被りなおして、目を瞑る。
と、気になることがあったから、もう一度開けて

「ねえ、望」

「……」

「望？」

「……」

横を見てみると、望はもう眠っていた。

…気になったのは、今、自分の目が覚めるまで、望はずっと起きて
てくれてたのだったこと。

でも、もう分かった。

ありがとう、望。

周りは薄明るくなっていた。

昨日は暗くて分からなかったけど、自分たちが泊まることになった
広い部屋じゃなくて、少し狭い部屋にいた。

望はいなくて、でも、ホッとする良い匂いがして。

「目が覚めましたか」

「うん…」

「でも、もう少し眠っていてください」

「…うん」

クノお兄ちゃんは、そつと頭を撫でてくれた。

目を瞑ると、空気が少し動いた気がした。

止まっていた時間が動き出したみたいに。

…なんで、クノお兄ちゃんは寂しい顔だったんだろ。

寂しい、笑顔。

眩しい光が、目に射し込んでくる。

朝…かな。

「おはようございます、ルウエさま」

「あ、おはよ、薫」

「昨日は大変だったみたいですね」

「うん…。全然覚えてないけど」

「そうですね。しかし、その方がいいこともあります」

「そうなの？」

「はい」

覚えてない方がいいこともある…。
なんでなんだろう。
そういうものなのかな。

「私…ルウエさまの緊急事態だというのに、傍にいられなくて…。
本当に、申し訳ありません…。この償いは必ず…」
「薫は、いつもそんなのばかりなんだぞ」
「いえ、しかし…」
「……………」
「すみません…」

もう…。

本当に、薫は謝ってばかりなんだぞ。
なんでなのかな…。

「あ、ルウエ。おはよ

「おはよ、望

「どう？調子は

「うん。良いと思う」

「そう。よかった。朝ごはん、食べに行く？」

「うん！」

「薫は？」

「はい。同伴させていただきます」

「うん。じゃあ、行こっか」

立ち上がって、望の手を取る。

そしたら、望はニッコリと笑ってくれて。

…じゃあ、朝ごはん、なんだぞ。

食堂にはたくさんの人がいて、朝ごはんを食べていた。卵焼きとか、焼き魚とか、美味しそうなんだぞ。

「望お姉ちゃん！ルウエ！薫！こつちなの！」

「リュウ。周りに人おるんやし、静かにな」

「あう……。ごめんなさい……」

「とりあえず、座れ」

「わあ……。おつきい犬」

「犬……？」

「龍だ！おつきい龍！」

「……私がついてきたのは失敗だったでしょうか」

「まあ……いいんじゃない？ちよっと目立つけど……」

「すみません……」

薫の周りには、たくさん子供が集まってきた。

離れて観察したり、ペタペタ触ったりしている。

「こらっ！先に朝ごはんを食べなさい！」

「はあい……」

「ごめんなさいね」

「いえいえ」

「お父さん！龍がいるよ！」

「そうだな。でも、ごはんが先だ」

「うん……」

「すみません」

「いえ。いいですよ」

でも、お父さんやお母さんに叱られて、すぐに戻っていった。こつちは見てるけど。

そして、誰もいなくなってから、お兄ちゃんとリュウと明日香がいる席まで行って、座る。

「なんで薫まで連れてくんねん」

「いいじゃない。人気者だよ？」

「そういう問題ちゃうわ」

「朝ごはんなの」

「ああ、せやな。持ってきてもらおか」

「えっ」

「え？」

「持ってきてくれるの？」

「お前、こついうところに泊まったことないんか？」

「うん…」

「まあ、話はあとや」

お兄ちゃんは手を挙げる。

すると、近くにいた人がすぐにやってきて。

「お持ちしましょうか」

「ああ。頼む」

「畏まりました」

短い会話が済んでお辞儀をすると、その人はどこかへ歩いていってしまった。

結局、途中で横の部屋に入って見えなくなったけど、厨房に行ったのかな。

「あー、なんか緊張する…」

「なんでやねん。ちよつと上流なだけやん」

「木賃宿とか、大きくてもベラニクの旅館みたいなところにしか泊

まったことないから、こういつところは苦手だなあ…」

「まあ、そのうち慣れるて」

「お兄ちゃんは、こういつところに泊まったことあるの？」

「何回か、な」

「ふうん…」

「あつ」

「どうしたの、リュウ？」

「翔お兄ちゃんなの」

「え？」

さっきの人が入っていったところに翔お兄ちゃんが立っていて、誰かとか話している。

遠くてちよつと聞こえないけど…。

「何やってるんだろ」

「短期の仕事やる。組合に斡旋してもらったんとちゃう？」

「それはそうだろうけど…」

「弥生もここで働いとるんかな」

「さあ…？」

翔お兄ちゃんは一旦部屋に入って、また出てくる。

それから、真つ直ぐこつちにやってきて。

「お待たせしました」

「お腹空いた〜」

「お待たせして申し訳ありません」

「ここで何してるの？」

「見ての通り、給仕です。では、じゅるじと」

ゆっくりとお辞儀をすると、またさっきの部屋のところに戻ってい

った。

…なんで、あんな話し方だったのかな。
ちよつと、変だったんだぞ。

「まあ、休憩時間にも聞きに行こか。真面目にやってるみたいやし」

「そうだね。それにしても、街に来て早速仕事ってことは、何日か停泊するのかな」

「さあな。でもまあ、越境証明受けるにも審査に時間掛かるからなある程度は停泊するんとちやうか？」

「そつか。…あれ？でも、越境証明を持ってなかったら、北から来れないんじゃないの？」

「越境証明の要らん国ばかり通ってたんちやうか？ルクレイも要らんしな」

「ふうん。そうなんだ」

「ルクレイから出たことないんか？」

「うん。ずっとルクレイ」

「まあ、それもひとつの旅の形やわな。でも、国外に出るのもええで。国が違えば、いろんなもんが違う。今まで見えなかったもんが見えてくるからな」

「へえ〜」

「まあ、いっぺん行ってみ。楽しいで」

「うん」

ヤウトから出るのも初めての自分は、ルクレイを旅するだけでも新しいことばかりなのに。

他の国はもつといるんなものがあるって聞いて、なんだかワクワクしてきた。

エッキョウシヨウメイ…。

自分も欲しいんだぞ！

街は、ヤマトと同じくらい人がたくさんいて。お店もいっぱい並んでいた。

「いろんなお店があるの」

「ルイカミナは商業の街やからな。そりゃ、店もぎよーさんあるわな」

「お菓子もいっぱいあるの」

「せやな。またあとでこうたるから、まずは役所に行こか」

「うん…」

リュウは、ちよつと哀しそうに頷く。

…本当に、いっぱいお店がある。

美味しそうな匂いもするし。

「あつ！望ちゃん！」

「あれ？茜さん！どうしたんですか？」

「仕事だよ、仕事。それよりさ、鷹子が見つかったんだよ！」

「へえ〜。よかったじゃないですか」

「うん！昨日、家に帰ったらね、いたんだよ！」

「ふうん。どこ行ってたんやろな」

「さあ。分からないけど、ちよつと隊長から勝手に休んだ罰を受けたところだったから」

「なんや、罰って」

「一週間休みなし！鷹子が見つかったからって条件だったけど、すぐに見つかってよかった」

「ほなら、街の案内は出来んな」

「あつ！そうだった！ごめん！」

「あはは、いいですよ。お仕事、頑張ってください」
「ごめんね！ホントにごめん！」

何度も謝る茜お姉ちゃん。

でも、なんだかちよつと面白いかも。

「あ、そうだ。ツクシに頼もつかない」

「案内ですか？」

「そうそう。ツクシ、ツクシ！」

「叫ばなくても近くにいろわよ……」

「ああ、うん」

「あ、ルウエ。もう大丈夫なの？」

「え？」

「うん。大丈夫」

「そう。よかった。薫がかなりオロオロしてたから、重症なのかと思っただ」

「え？何があつたの？」

「ルウエ、昨日の夜、宿で階段から落ちたんです。ルウエ自身、それは覚えてないみたいなんですけど……」

「えっ！大変！ユニディナの人に見て貰わないと！」

「ユニディナ？今おるんか？」

「昨日、クーアが来たから、三大旅団全部揃ってるよ」

「ほう……。しかし、またなんで……」

「私には分からない。でも、三つとも集まるなんてことは滅多にならね。何か退引きならないことが起こったのかもしれないよ」

「ふうん……」

「それより、早く！大丈夫でも、ちゃんと診てもらおう！」

茜お姉ちゃんに抱え上げられて。

わけも分からないうちに、連れていかれる。

「あっ、おい、待て！」

「待ってたら大変なことになる！」

「せめて、どこに行くかくらいゆうてけ！」

「大丈夫。私が案内出来るから」

「せやゆうたかて…」

それからも、お兄ちゃんは何か叫んでいたけど、でも、すぐに聞こえなくなった。

チヨウシンキをペタペタと胸に当てたり、おでこに手を当てたりして。

それから、紙に何かを書いて、こっちを向く。

「頭は痛い？」

「ううん」

「他の場所は？」

「痛くないんだぞ」

「気分が悪いとかは？」

「ないと思う」

「そっか」

それで、また紙に書いて。

何を書いているのかな…。

「骨に異常は見られないようですし、記憶が一部飛んでしまってる以外は、脳にも異常はないようです。まだ確実なことは言えません。今のところは大丈夫のようですね。経過観察、というところですよ」

「はあ、よかつたあ。ありがとございます！」

「いえ。それにしても、茜さんに妹さんがいるなんて初耳ですよ」

「昨日出来た妹だからね」

「へえ……」

「あつ。この子は望ちゃんたちと旅してる子で、孤児とか、そんなのじゃないよ！」

「いや、そんなことは聞いてないですが…望さんですか？…なるほど。しかし、その望さんはどこにいるんです？」

「え？えつと…」

「はあ…。また誘拐紛いのことをしてきたんですか？」

「だって…心配じゃない…」

「心配でもダメです。ツクシも置いてきたんですか？」

「え？あれ？ホントだ、いない」

「…茜さんはもう少し、考えてから行動するということ覚えて方がいいですね」

「はい…。すみません…」

茜お姉ちゃんは、ペコリと頭を下げて。

…怒られたつてことなのかな。

「あ」

「ん？」

「お兄ちゃんの名前は？」

「僕？僕はユウクだよ」

「ユウクお兄ちゃん…」

「聞いたことあるんじゃないかな」

「うん」

「え？ユウくんって、そんなに有名だったっけ？」

「ははは。酷いですねえ」

「お邪魔します…」

「あつ、望！」

「ああ、やつぱり」

「あ、ユウクさん。なんでここに？」

「ベラニクからルイカミナに来たからだよ。望さんもそうなんですよ？」

「はい。今はクーア旅団の宿でお世話になってます」

「クーア旅団所属なの？」

「いえ。どうしてですか？」

「ルウエがいろいろ着けてるからね。クーア旅団、ラズイン旅団、ヤマトの探掘証明にヤウトの紋章。装身具が好きなの？」

「ううん。でも、大切なものはいつも傍に置いておきなさいって、姉さまが言ってたから」

「なるほど。姉さま、か」

「うん」

ユウクお兄ちゃんはまた紙に何か書いて。

そして、横に置いてあった箱から、キラキラ光るものを取り出した。

「ユンディナ旅団団員証。これも、大切にしてくれる？」

「くれるの？」

「うん。どうぞ」

「ありがとう、なんだぞ」

金属で作られてて、何かの鳥みたいなのが彫られてる。

裏は…ユンディナ旅団団員認定証？

「ありがとう。大切にするんだぞ！」

「ふふ、ありがとう」

「えへへ。…あ、そうだ。リュウにもあげたいの」

「リュウ？」

「一緒に旅してるんです。今は、ちょっといないんですけど…」
「そっか。じゃあ、もうひとつ。リュウによるしくね」
「うん！」

また宝物が増えた。

旅に出て、宝物がたくさん出来て。

これからも増えていくのかな。

そうだったら嬉しいんだぞ。

診療所を出て、街へ。

茜お姉ちゃんは、もう仕事に行ってしまった。
やっぱり何回も謝っていた。

「リュウたちは？」

「買い物に行ってるよ。ツクシと一緒に」

「ふうん」

「私たちも合流しようか」

「うん…」

「どうしたの？」

「望と明日香と、三人になるのは久しぶりだと思って」

「ああ、そういうえばそうだね。すぐにお兄ちゃんが来たし」

「だから、ちょっとだけ、一緒にいて？」

「うん。分かった」

「うん」

「でも、なんだか邪魔者みたいで悪いね」

「えっ？あ、そういう意味じゃ、ないんだぞ…」

「あはは、分かってる分かっている。ごめんね」

望は頭を撫でてくれる。

お兄ちゃん、リュウ、ツクシ、ごめんなさい…。

そういう意味じゃないから…。

「どこに行く？」

「え？えっと…」

「あ、そうだね。ルウエは初めてだから分からないよね」

「うん…」

「明日香は、どこか行きたいところはある？」

「……………」

「まあ、ないよね。じゃあ、とりあえず、商店街に行こっか」

「うん」

はぐれないように、しっかりと手を握る。

望も、強く握り返してくれて。

「ルイカミナはね、商売がとっても盛んなんだ。だから、お店がたくさんあるんだよ」

「ふうん。ヤマトより？」

「ヤマトは、どちらかと言えば職人の街だからね。お店はお店だけ」

「もうちょっと静かだったんだぞ」

「あはは、そうだね。ルイカミナは、特に活気に溢れてるよね」

「うん」

進んでいくにつれて、お店が増えてくる。
それから、人も増えてきて。

「いらっしやいらっしやい！今日は安いよ！」

「今日の夕飯はこの鶏で決まりだ！いらっしやい！」

「さあ、寄ってらっしやい見てらっしやい！今日の御奉仕品は鮪だよ！」

右を見ても左を見ても、お店が立ち並んでいる。

それに、ユールオの市場もヤマトも、こんなにたくさん的人はいなかった。

なんだか、目が回ってきそつで。

「ルウエ、はぐれないようにね」

「うん……」

「明日香に乗せてもらおう？」

「うん……」

「じゃあ、明日香。お願い」

「ワウ」

明日香の背中に乗せてもらって、なんとか一息つく。

ふう……。

ちよっと歩いただけなのに、疲れたんだぞ……。

「慣れないとね。この人混みはきついかもしれないね」

「うん……」

「どうする？何か欲しいものとかある？」

「んー……」

周りを見回してみるけど、何があるのかよく分からない。

ただ、人がいっぱいいるってくらいしか……。

「……………」

「疲れちゃった？」

「うん……」

「そっか。じゃあ、商店街は諦めて、喫茶店に行こっか」

「……………」

「お茶を飲めるところだよ。すぐ近くに良いところがあるから、そこに行こ？」

「うん」

そして、望は人の間を縫って、前に進んでいく。

明日香も遅れないようについていって。

相変わらずの人だったけど、それからしばらく歩いたあと、ひとつ細い路地へ入っていくと、パツタリ人の声も何も消えてしまった。

「静か」

「うん。ここには、なかなか音は入ってこないね」

「すつごく静か」

「ルウエは、静かな方が好き？」

「うん」

「そっか。まあ、ヤウトも静かだし、賑やかしいところに免疫がないんだね」

「メンエキ？」

「んー、なんて説明すればいいんだろ。抵抗する力…かな」

「……？」

「そんなんやつたら説明になつたらんやろ」

「あつ、お兄ちゃん」

後ろからした声は、お兄ちゃんの声だった。

振り返ってみると、確かにお兄ちゃんとリュウとツクシで。

「ルウエ、大丈夫だったの？」

「え？何が？」

「薬師さまに診てもらってたんでしょ？」

「茜に連れ去られてね」

「あ、うん。大丈夫だって言ってたんだぞ」

「よかったあ」

「それより、なんでお兄ちゃんたちがここにいるの？買い物は？」

「リュウの髪紐くらい見たれよ…。新しくなってるやろ？」

「あ、ホントだ。綺麗だね」

「えへへ。ありがと、なの」

「まあ、私の取って置きのお店だったからね」

「うん、まあ、ほんでや。髪紐も買ったし、リュウも人混みで疲れ
たみたいやから、サテンでも行こかってことになってやな」

「…サテン？」

「喫茶店や。知らんか？」

「喫茶店は知ってるけど…」

「ムカラウの方ではサテンゆうねん」

「あんまり短くなってない…」

「細かいことは気にすんな。お前らも行くところやったんちゃうん
？」

「うん。お兄ちゃんと同じところかどうかは分からないけど」

「同じところやろ」

「こつちにある喫茶店は、ひとつだけだしね」

「まあ、そうかな。じゃあ、行こつか」

「ああ」

お兄ちゃんに続いて、狭い路地を進んでいく。

通りから離れるほど、静かになって。

どンドン静かになる中を歩いていき、どこかの家の戸の前で止まる。

「入るか」

「うん」

戸を開けて中に入ると、すぐに玄関で。

靴を脱いで上がって、奥に進んでいく。

一番奥にある戸を開けると、二人、座って休んでいた。

「いらっしやい。よく来たね」

「桐華。お帰りなさい、でしょ？ここでは」

「ああ、そうだったそうだった。ごめんね」

「桐華お姉ちゃん！逢お姉ちゃん！」

リュウはそう言うと、その二人のところまで走って行って、飛びついた。

キラキラとリュウモンも輝いていて。

「え？あ、リュウ？なんでここに？」

「リュウ！よかった。桐華に置いていかれたって聞いて、びっくりしたんだからね！」

「置いてかれたのは、ぼくだよ……」

「何言ってるのよ。あ、ごめんなさい。あなたたち、リュウを連れてきてくれたんだよね？」

「はい。ヤマトで拾ってきて」

「やっぱり、桐華が置いていったんじゃない！」

「ち、違うよ！みんなと一緒に行ったのかと思って……」

「あの……」

「あ、ごめんなさい。私は遙っていうんだ。こっちは桐華」

「もしかして、旅団天照の？」

「そうだよ。ぼくが団長なんだ」

「頼りないけど……。まあ、とりあえず座ってよ」

「ありがとうございます」

用意してもらった座布団に座る。

フワフワの座布団で、座り心地がよかった。

「女将さん！お客さんだよ！」

「はあい」

「何がいい？かき氷？」

「とりあえず、お品書きとかあるやろ」

「ああ、そうだね。はい、これ」

「どうも」

「ぼくのお薦めはね、宇治金時だよ」

「桐華は、お茶ならなんでもいいんですよ」

「そ、そんなことないよ……」

「はあい、お帰りなさい」

「あ、女将さん」

「みんな、お昼ごはん、まだでしょ？かき氷よりそっちにしましよ
うか」

「せやな。昼ごはんにしようか」

「うん」

「はあい。じゃあ、ちよつと待っててね」

オカミさんは、また奥に戻っていった。

お昼ごはん、楽しみなんだぞ。

…リュウは、なんだかソワソワしていた。
どうしたのかな。

桐華お姉ちゃんとか遙お姉ちゃんに会えて嬉しいのかな。

でも、嬉しいのもあるけど、ちよつと違うのも混じってるみたい。
何なのかな。

「そついえば、なんでこの街に集まってるん？」

「三大旅団？」

「ああ」

「んー、機密なんだけどね」

「勿体ぶんなよ」

「いや、お兄ちゃん…。機密って言うてるのに…」

「いいよ、そんなの。機密っていうほどのものでもないし」

「そうなんですか？」

「うん。三大旅団が集まるっただけで大袈裟になってるんだよ」

「ふうん…」

「ほんで、どついう理由なん？」

「まあ、お茶会みたいなものかな」

「え？お茶会、ですか？」

「うん。桐華がね、タルニアさんとユウくんとお茶を飲みたいとか

言うからさ」

「ええ…」

「いちおう旅団長だから、ちょっとした発言にも力があるってこと

を理解してほしいんだけどね。…いつの間にか手紙を出してたんだ

よ」

「ふうん…」

お兄ちゃんは気のない相槌を打ちながら、寝ている桐華お姉ちゃんの鼻を弾く。

…旅団長って、そんなに偉いのかな。

「リュウ、どうしたの？さっきからソワソワして。おしっこ？」

「違うの…」

「そう？あんまり我慢しちゃダメよ？」
「うん…」
「それでさ、ルウエはなんでそんなにいっぱい着けてるの？」
「これ？貰ったの」
「へえ〜。この万金のやつも？」
「それは、原石をルウエが採掘場で拾ったやつやな」
「採掘場？そんな深いところまで行ったの？」
「いや、普通の採掘場。なんや知らんけど、落ちてたみたいやな」
「ふうん…？なんでだろ」
「さあな」
「ん…」
「まあ、そうゆうこともあるかもしれんってことなんやろ」
「そうなのかな…」

遙お姉ちゃんは唸り始めて。
何か難しいことを考えてるみたいだけど…。

「それより、リュウ。ホントにどうしたの？大丈夫？」
「う、うん…」
「顔、赤いよ？熱があるの？」
「ち、違うの…」
「じゃあ、どうしたの？」
「えっとね…。えっと…」
「ん？」
「わ、わたし、ルウエたちと一緒に旅したいの…」
「そうなの？」
「ごめんなさい…」
「なんで謝るのよ。リュウの好きなようにすればいいと思っしょ。…
お願い出来るかな」
「はい。もちろんです」

「ごめんなさい…」

「だから、なんで謝るのよ」

「だって…わたし、天照の団員なのに…。遙お姉ちゃんにも、まだ何のお礼も出来てないし…。ごめんなさい…」

「そっか。そういふこと」

遙お姉ちゃんは、リュウを引き寄せる。

そして、ゆっくりと頭を撫でて。

「お礼なんていいよ。私たち、家族じゃない。それに、リュウの人生なんだから、リュウの好きなようにすればいいと思うの。私は、そうやってリュウに遠慮されるのが辛いし、そんな顔をされるのも嫌なの。だから、行ってらっしゃい。気の済むまで旅をして、それから、帰りたくなったら帰ってきなさい。望ちゃんたちと一緒に帰りたいなくなるかもしれないけど。でも、私たちはずっと待ってるからね。リュウの、もうひとつの家族として」

「うん…うん…」

リュウは、いつの間にか泣いていた。

哀しいんじゃないくて、嬉しいから。

遙お姉ちゃんは、そっとリュウの頭を撫でて。

優しく、優しく。

桐華お姉ちゃんは、起きるなりお茶を飲み始めて。

オカミさんも奥から出てきて、一緒にお茶を飲んでいた。

「いたた…」

「焦って食いすぎや、お前は」

「だって…」

「美味しいでしょ？材料は厳選したのを使ってるのよ」

「へえ。どんなん？」

「その宇治金時だと、氷は赤澤製氷店、抹茶は桐華ちゃん、白玉と餡子は宮崎和菓子から取り寄せてるわね」

「ん？なんか変なの混じってへんかったか？」

「宮崎和菓子は結構最近に出来たから、知らないかもしれないね」

「いや、抹茶や抹茶。桐華って、こいつか？」

「そうだよ。ぼくが最高のお抹茶を選つて、女将さんに紹介してるんだ」

「ただのお茶好きちゃうんかったんかい…」

「桐華の場合、好きこそもの上手なれ、だろうね。お茶ばかり飲んでるから、目利きまで出来るようになって。たまに、闘茶にも出てるんだよ」

「ほう。闘茶」

「トウチャって何？」

「いろんなお茶を飲んで、それぞれのお茶の銘柄を当てるんだよ。

まあ、昔はそんなんじゃないやなかったらしいけど。桐華、知ってる？」

「昔の闘茶はね、三種類のお茶をまず飲んで、その三種類のお茶を三袋ずつ、全部で九つ用意するんだ。そこに別のお茶を一袋用意して、十袋にする。それから、それぞれの袋を適当に選んで、お茶を点てて、飲むんだ。それで、そのお茶が三種類のうちのどのお茶か、もしくは、別に入れたお茶なのか、当てるんだよ。十袋ともやつて、一番多く当てられた人の勝ちってことだね」

「ふうん…？」

桐華お姉ちゃんの説明はよく分からなかったけど、難しそうだっていうのは分かった。

それでも、そんなことが出来る桐華お姉ちゃんはすごいんだぞ。

「そういうわけで、お抹茶は桐華ちゃんから。分かった？」

「まあ」

「でも、そんなにこだわってるなら、お値段も高いんじゃない…」

「お前、そればかりやな。食べてるときくらい、金のことは忘れるよ」

「だって…」

「お金は大切だもんね。でも、全部、間に誰も入ってないから、とっても安く仕入れられるのよ。もちろん、向こうは高く売れてるのよ?」

「えっ、そうなんですか?」

「間に入ってくるのは、ぎょーさん仕入れる代わりに単価はちょっと安い値段で交渉してくるからな。それに対して女将みたいな個人で買う人は、ちょっとずつしか仕入れん代わりに、業者より高くこつてくれる。まあ、両方ともどっこいどっこいかもしれないけど、それで経営が成り立つとるんやな」

「ふうん…」

望は納得したように頷いているけど、自分にはちょっと分からない。安くたくさん買う人と、高くちょっとだけ買う人がいるってことなのかな。

うん、たぶんそう。

…リュウと半分こするかき氷は、そうだった、よく分からないことは置いて、とっても美味しかった。

「ふぁ…」

「暇そうだね」

「うん…」

「じゃあ、私たちと街に出てみない？」

「ええ…」

「嫌？」

「ルウエもリユウも、人混みがいらんゆつてここに来てるからな。いらんやろ、そら」

「大丈夫大丈夫。ね、行こうよ」

「うーん…」

でも、リユウはなんだか行く気みたいだし…。
遙お姉ちゃんも大丈夫だって言ってるし…。

「じゃあ、行くんだぞ」

「うん。女将さん、お勘定」

「はい。お昼ごはんとかき氷で…六千円ね」

「はい」

「私たちの分は…」

「込み込みだよ、そんなの。私たちに払わせて」

「そんなっ！ダメです！」

「いいじゃない。私たちの方が、たくさんお金を持ってるんだし」

「そういう問題じゃないです！」

「まあまあ」

遙お姉ちゃんはオカミさんにお金を渡して、望と桐華お姉ちゃんを部屋の外に押し出す。

でも、望はずっと何かを言ってる。

「ほんなら、オレらも行くか」

「うん」

「明日香、ツクシ、起きろ。街に出るで」

「街…？」

「せや。はよし」

「ふあ…」

二人とも、大きく伸びをして。

明日香はバタバタと身体を震わせてから、玄関の方へ歩いていった。

「ごちそうさん。昼ごはんもかき氷も美味かったわ」

「そう。ありがと。また来てね」

「ああ」

「ごちそうさま」「ごちそうさまでした」

「はあい。またね」

オカミさんにしっかりと手を振って。

それから、自分たちも玄関に向かった。

横を歩いてたおばちゃんが、飴を渡してくれた。他にも、いろんな人からいろんなものを貰って。

「人混みでも、これなら大丈夫でしょ？」

「まあ、さすがに馬車くらいは持つてるよな」

「当たり前じゃない。そうでないと、商売にならないからね」

「え？そうなの？」

「…桐華。あなたは旅団天照の団長のはずだけど？」

「でも、私には何もさせてくれないじゃない」

「桐華に任せると、大変なことになるからね」

「ほらあ、やっぱり」

「やっぱり、じゃないでしょ？仕事はなくても、きちんと内容からは覚えておきなさい」

「んー…」

「旅団天照は、要するに護衛やな。要人警護から城の守衛まで、幅広く取り扱ってる。まあ、引越しとか、そういった小規模なものは他の旅団で引き受けとるから、天照は結構大規模な仕事が多いな」

「よく知ってるね」

「まあ、三大旅団の仕事内容くらいは常識やわな。裏の仕事もある程度」

「あはは、そこまで知られてると、ちょっと困るかな」

「そりやどうも」

「それで、桐華。ちゃんと聞いてたの？」

「え？何を？」

「もう…」

遙お姉ちゃんはため息をついて。

護衛って、お兄ちゃんと同じ仕事なんだぞ。

何か、関係あるのかな。

「あ、そうだ」

「ん？」

「リュウに、ユンディナ旅団の団員証を渡さない」と

「あ、そうだね」

「そういえば、ルウエっているんな旅団の団員証持ってるよね」

「うん。…はい、リュウ」

「貰ってきてくれたの？ありがと〜」

「えへへ。どういたしまして」

リュウの首に団員証を掛けてあげると、頭を撫でてくれた。
ニッコリ笑うと、リュウも笑って。

「そっだ、遙お姉ちゃん。ルウエにも、天照の団員証、あげようよ」

「そう言つと思つたよ。じゃあ、はい、ルウエ」

「わあ。ありがと、なんだぞ！」

「特別製だよ。リュウと同じ、ね」

「そんなの、貰っちゃっていいんですか？」

「いいのいいの」

リュウのと同じもので、遙お姉ちゃんや桐華お姉ちゃんとは少し違っていた。

裏返してみると、ヤウトの紋章に似たものと、何かの番号が彫つてある。

…式？

「その番号は、その団員証が何番目に発行されたのかが分かる番号だよ。ルウエのは式だから、二番目」

「ふうん…」

「わたしとお揃いだね」

「うん！」

リュウとお揃い。

なんだか嬉しい。

団員証を握ると、リュウと繋がっているみたいなかんじがした。

「ん？この首飾りは何？見たことないなあ」

「これは、風なんだぞ」

「風？」

「ヤクウルの子供やったら、みんな持つてるけどな。御守りみたいなもんや。疾風の術式が彫り込んでいる」

「へえ、疾風の術式」

「樹の上で遊びよるからな、あいつらは。それは必需品や」

「ヤクウルの旧村？」

「せやな。今も補修とかして、しっかり残ってるから」

「そうなんだ。知らなかったなあ」

「まあ、保持してるとはいえ、子供の遊び場っただけで、今は誰も住んでへんしな」

「そっか」

「しかし、そうはゆつても、割と有名な話やと思っけどな」

「そうなの？じゃあ、私の勉強不足かあ…」

そう言いながら、遙お姉ちゃんは懐から紙を取り出して何かを書いていた。

さっきのことかな。

それから、書いたのを何回か読み返したあとで、また懐に仕舞って。

「それにしても、この腕輪はクーア旅団。こっちの首飾りはウンデイナ旅団。ホントにいろいろ持つてるなあ。しかも、これ、ラズイン旅団のじゃない。じゃあ、私たちも月読のを渡しておこうかな」

「ツクヨミ？」

「そうだよ。リュウにも渡しておくね」

「うん…？」

渡してもらったのは、何かの動物の革で作られたもの。

腕輪…にしては大きいけど…。

「足輪だよ。足に着けるの」

「ふうん…」

「はい、望ちゃんも。似合うと思うよ」

「い、いえ…。私は…」

「遠慮しないの。はい、どうぞ」

「うう…」

望は、遙お姉ちゃんに無理矢理着けられて。

自分も着けてみる。

革には、何か細かい模様が彫ってあって、綺麗だった。

「なんで、旅団の人って、いろいろくれるのかなあ…」

「儲けてるから、金より大切なもんを見つけたがるんやろ」

「そうそう。そういうこと」

「うう…。すぐく気を遣う…」

「貰えるものは貰っておくの。あとで後悔しないようにね」

「しませんよ…」

「そう？」

「そうですよ…」

「あはは、横から見ると面白いね」

「ツクシ…」

ツクシはカラカラと笑って。

うん。

望はどうか分からないけど、見てるところは確かに面白いんだぞ。

…リュウが、足輪を着けるのに苦労してるのも面白いけどね。

「いっぱい貰ったんだぞ」

「ホントだ。よかったね」

「うん！」

「でも、なんで、こんなにいろいろくれたのかな」

「ルウエとリュウが可愛かったからじゃない？」

「そうなんですか？」

「どうなんだろうね」

「ええ……」

「ルイカミナでは、馬車に乗ってる人に何かをあげる風習があるんだよ。昔、馬車に乗ってたのは割と裕福な人だったから、自分の店に興味を持ってもらうために、そういう人たちにチラシを配ってたんだ。馬車はだいたい、邪魔にならないように道の真ん中を走ってたから、店を見ながら端を歩いてる歩行者よりも目が行きにくかったんだろうね。それから、一般の人も馬車に乗り始めて、チラシよりも効果的な宣伝方法が出てきてから、商業的なものは廃れていったんだけど、馬車に乗ってる人に何かをあげるってのは、今も残ってるんだ」

「へえ、さすがツクシだね。よく知ってる」

「まあね。自警団に所属してる人は観光案内も出来ないといけないから、ルイカミナについて網羅してる人も多いよ」

「茜さんも？」

「あはは。茜が覚えられないから、私が代わりに覚えてあげてるんだよ」

「…そうなんだ」

「あれ？ツクシって、望ちゃんあたりの聖獣だと思ったけど、違うの？」

「あ、はい。ルイカミナ自警団の茜さんって方と契約してるんです。

茜さんが街を案内出来ないから、ツクシと一緒に来てくれてるんですか」

「へえ〜。でも、聖獣のことを知ってるってことは、誰かが契約してるか、幹旋者がいるってことなんじゃないの？」

「オレが幹旋者。望とルウエが契約者や」

「えっ、二人とも？」

「はい」

「へえ〜…」

遙お姉ちゃんは、なんだか珍しそうに頷いたりして。

…何なんだろう。

「で、お前はなんで知つとるんや？」

「情報屋だからね」

「…月読か」

「そうそう」

「月読って、情報屋なんですか？」

「そうだよ。いろんな情報があるから、興味があつたらまた聞いてほしい答えられると思うよ。あ、でも、行方不明の人がどこにいるかとか、そういうった個人的なものは、時間を貰って、依頼を受けた時点から調査に入るから。すぐに渡せるのは、どこで戦をやってるかとか、次はどこに来そうとかだね」

「…そっちは、オレらには関係ない話かもな」

「あはは、そうだね。でも、旅をしてるなら、戦は避けて通りたいでしょ？そういうときに役立つかもしれないよ」

「まあ、そうかもしれないな」

「でしょ？」

ニッコリと笑う遙お姉ちゃん。

でも、どうやって、そんな情報を集めるのかな。

すごく気になるんだぞ。

「あ、そうそう。そうじゃなくてさ。二人はそれぞれ、誰と契約してるの？」

「私はカイト…えっと、タルニアです」

「へえ、タルニア」

「えっと、自分は、悠奈と七宝と琥珀と薫！」

「…え？」

「悠奈はルウエ、七宝はクーア、琥珀はユヌト、薫はクルクス。なんやいろいろおるけど、悠奈と七宝はまだちっちゃいから寝てる時間が多いし、琥珀はまだどうなってるか分からん。実質、薫だけが表に出てきてるな」

「え、いや、そうじゃなくて、なんでそんなにいっぱいいるの？一人二契約が限度って聞いたけど？それに、属性が入り乱れてるじゃない」

「分からん。オレにも。まあ、ルウエはなんや特別なんやろ」

「ええ…」

また懐から紙を出して、何かを書く。

情報屋さんだからなのかな。

書き終わると、また何回か読み返してから懐に仕舞う。

「ふうん…。みんなといると、勉強不足を実感するよ…」

「逢お姉ちゃんは、一所懸命お勉強してるの。だから、勉強不足なんて、そんなことないの」

「…ありがと、リュウ。そうだね。勉強が充分とは思えないけど、世の中には私たちが知らないことがたくさんあるってことだね。勉強不足じゃなくて、知らない世界に触れてるってことなのかな」

「うん」

自分の知らない世界。
まだまだ、いっぱい、いっぱいある。
全部見ることは出来ないかもしれないけど、全部見てみたい。
欲張り…なのかな。
でも、リュウの方を見ると、優しく笑ってくれた。
欲張りじゃないよって。
だから、安心出来た。

馬車はゆっくりと止まった。

それから、遙お姉ちゃんは飛び降りて。

「私はここで一旦別れるよ。用事があるから」

「あ、お疲れさまです」

「はい、どうも。ついでに、ルウェとリュウの越境証明も貰ってくるよ」

「えっ、そんなの…」

「大丈夫。二人とも天照の団員だから、審査も必要ないよ。夕飯には渡せると思うから」

「夕飯のときって…」

「じゃあね。タルニアさんやユウくんによろしくね」

「あっ、ちょっと！待ってくださいよ！」

そのまま、遙お姉ちゃんはどこかへ走っていった。

馬車もまた走り出したから、望もどうにも出来なくて。

「もう…。夕飯ってどういうことなのかな…」

「ん？分からなかったか？」

「え？」

「ぼくたちのお茶会に、みんなを招待するよ！ってことだよ」

「ええっ！？そんな、ダメです！」

「なんで？ぼくたちと夕飯を食べるのはイヤ？」

「そんな大事な会合に、私たちが参加することなんて出来ませんよ！」

「会合だなんて、大袈裟だよ。お茶会だよ、お茶会。夕飯も兼ねてるけど」

「無理です！」

「んー、でも、もうすぐ着くよ？」

「えっ！」

そういえば、遙お姉ちゃんが降りてから、人混みからは少し離れたいた。

カタカタと、車輪の音がはっきりと聞こえて。

「まあ、諦め。夕飯ご馳走してくれるゆうねんから、好意に甘えさせてもらおう」

「そんなあ……」

「ごめんね、望。そんなことを話したら、望なら絶対に断ると思うたからさ。遙とこっそり決めたんだ。まあ、大丈夫だよ。本当に、ただのお茶会だから」

「うう……。また借りが出来ちゃった……」

「何言ってるのよ。貸しとか借りとか、そんなのはなしだよ。遙がリュウにも言ってたけど、ぼくたちはみんなに天照の団員証を渡したときから、みんなのことを家族だと思ってる。夕飯を一緒に食べたら楽しいと思うから、みんなを招待するんだし、それを取り上げてどうこうしよう、してもらおうなんて思っていない。ただ、純粋に、そうしたいと思うから、やってるだけだよ。だから、ね？お願い」

「うう……。はい、分かりました……」

「えへへ。ありがとね」

桐華お姉ちゃんは、望をギュツと抱き締める。
望は、なんだか複雑な顔をしてるけど。

「しかし、お前もまともなことと言えるんやな」

「何よ、それ。それじゃ、ぼくがまともじゃないみたいじゃない」

「まともであるかどうかは判断しかねるけど、子供っぽいのは確かや。お前のその性格が、丸ままりユウに移ってるしな」

「あー、うん。ごめんね、リユウ」

「……？」

リユウは、少し首を傾げて。

桐華お姉ちゃん、子供っぽいってことは認めるのかな。

まあ、逢お姉ちゃんがしつかりしてるから、たぶん大丈夫なんだぞ。

…それから、馬車はどんどん進んでいって、見覚えのある場所
止まった。

望と翔お兄ちゃんはあるみ食べてないみたいだけど…。
どうしたのかな…。
お腹空いてないのかな…。
こんなに美味しいのに…。

「あらあ。お気に召さなかったかしらあ？」

「あ…タルニアさん…」

「遠慮しなくていいのよあ？たくさん食べてね」

「は、はい…」

「なんや、望。いらんのか？」

「……………」

「はあ…。もつと無遠慮に生きるよ。みんなも、氣い遣われるのは嫌なはずやで」

「そんなこと言っても…」

「気にしすぎや、お前は。桐華にも言われたやろ？遠慮なんかいらんねん」

「……………」

「ほら、翔もしっかり食べんかい。ターニヤに招待されたんやろ？」

「そうだけど…」

「お前！またタルニアさまのことを、そんな呼び方で！」

「クノ。みんなで楽しく夕飯を食べてるのよ？」

「あつ、す、すみません…」

「翔も望ちゃんも、遠慮したら嫌よ？せっかく招待したのに、楽しんでもらえなかったら寂しいもの。だから、ね？」

「はい…」

二人は頷くけど、やっぱりお箸は進んでないみたい。

んー、なんだか勿体ないんだぞ…。

「こらっ、桐華！今日はお酒はなしだよ！」

「やだ！こんなに楽しい宴会なのに、お酒呑みたい！」

「ダメったらダメだよ！全部没収！大人しくお茶でも飲んでなさい！」

「まあまあ、遙ちゃん。お酒くらい、いいじゃないの。呑ませてあげなさいな」

「ダメですよ。この前なんか、酔った勢いでリュウにまでお酒を呑ませようとしてたんです。だから、絶対にダメです」

「んー、それなら仕方ないわねえ…。じゃあ、今日はお酒はなしにしましょうか」

「ええ…」

「ええ～じゃないでしょ！」

「うう…」

お酒って、姉さまがよく呑んでたんだぞ。

そんなに美味しいのかな…。

姉さまは呑ませてくれなかったけど…。

「弥生はどこから来たの？」

「えっと、北の方から」

「北かあ。僕も北から来たんだけどね」

「そうなの？」

「うん。いいところだよね」

「うん！」

「僕は、こっちの暑さが苦手で、たまに帰らせてもらっただけで…」

「暑いよね、こっちは」

「暑いね～…」

「暑いのか？」

「リュウは、この辺？」

「んー、分かんない。でも、ずっとこの辺にいたの」

「そっか。じゃあ、一回北に行ってみなよ。あっちはかなり涼しいからね」

「ふうん…。ねえ、それなら、ユキは降るの？」

「降る降る。たくさん降るよ」

「へえ。わたしね、かき氷が大好きなの！」

「雪は、かき氷には向いてないかな…。かき氷は、氷から作るから美味しいんだよ」

「そうなの？」

「うん」

「でも、ユキは、お空から降ってくる氷でしょ？」

「そうだね。そうだけど、かき氷にしては、ちょっとフワフワすぎるかもしれないね」

「フワフワのかき氷…」

「リュウは、どんなかき氷が好き？」

「シャリシャリしてて、いっぱい蜜が掛かってるの！」

「シャリシャリかあ。じゃあ、やっぱり雪のかき氷はダメだね」

「うん…。フワフワはあんまり好きじゃないの…」

「そっか。残念だね」

「うん…」

リュウはガツカリしてたけど、ユウクお兄ちゃんに頭を撫でてもらって、嬉しかったみたい。

翼をパタパタさせていた。

「あ、そうだ。また今度、みんなにかき氷をご馳走してあげるよ。とびきり美味しいの」

「えっ、ホント？」

「うん。楽しみにしてて」

「うん！」

お昼に食べたかき氷も美味しかったけど、ユウクお兄ちゃんが食べさせてくれるかき氷も楽しみなんだぞ。
ウジキントキなのかな。

また別のかな。

早く食べたいな。

部屋に戻ると布団が綺麗に敷かれてあった。

それを見ると、すごく眠たくなってきて。

「ふぁ……」

「眠たいか？」

「うん……」

「じゃあ、もう寝ようか」

「翔お兄ちゃん……」

「ん？」

「一緒に寝てくれる……？」

「ああ」

翔お兄ちゃんは、一番近くの布団に弥生を降ろして、布団を掛ける。
リュウも、端っこの方の布団まで歩いて行って、パタリと倒れた。

「リュウも、かなり我慢してたんだな」

「うん……」

リュウの隣まで歩いて行って、自分も布団に潜る。

フカフカの布団で、心地良い……。

翔お兄ちゃんも、横の布団に寝転んで。

「…もうみんな寝たの？」

「いや、ルウエはまだ起きてると思う」

「そっか」

しばらくして、ツクシの声があった。

部屋に来たみたい。

「ツクシ…だっけ」

「うん」

「ツクシは、契約主のことをどう思ってる？」

「茜？茜は頼りないし、間が抜けてるし、とにかく手間が掛かるね。でも、そういうところが好き。どう思ってるかって聞かれたら、大好きだっけ答えるよ」

「そっか」

「うん」

「……………」

「ミコトも、翔のこと、大好きなはずだよ。だって、そうじゃなかったら、契約しないもん」

「…そっかな」

「うん。立ち会いのときもずっと見てたけど、本当にお似合いの二人だと思った。知り合ってすぐになってことだったけど、ミコトは翔の優しいところとか厳しいところとか、大雑把にだけど、全体が見えてたみたいだった。翔なら頼れる、翔の助けになりたいって。ちゃんと、感じ取ってたんじゃないかな」

「……………」

「自分にもっと自信を持ちなさい。翔は、翔自身が思ってるよりも、ずっと素敵な人だよ」

「…ありがと」

「ふふふ。もっと頑張りなさい。自分に、自信が持てるようにさ」

「…うん」

ツクシは、楽しそうに笑っていた。

翔お兄ちゃんが、自分に自信を持てる日を心待ちにしているように。だから、ちよつとだけ、自分も笑った。

それに気付いたツクシが頬を舐めてくれて、それがくすぐったくて、また笑った。

「ルウエさま」

「ん…？」

「起きてください」

「別にいいじゃない。起こさなくたって」

「そうはいかないだろ」

「はあ…。クノさま、なんとか言ってやってくださいよ」

「起きるときを待つか、今起こすかの違いだ。少し早い気もするが、ルウエが起きるといふなら、それでもいいだろう」

「もう…。クノさままで…」

「どうしたの…？」

「ほら。薫のせいで起きたでしょ」

「……………」

「眠たかったら、まだ寝てていいのよ？」

「うん…。でも、いい…」

「そう…」

「では、早速本題に入ろうか。薫」

「はい、クノさま。…ルウエさま。今から言っことをよく聞いてください」

「うん…」

薫はちょっと咳払いをして、クノお兄ちゃんとツクシを見る。

二人が頷いたのを確認すると、もう一度咳払いをして。

「ルウエさま」

「……………」

「琥珀を助けてください」

「…うん」

「ははは。話の早い子だ」

「クノさま……」

「ルウエさま。よく聞いてください。これは、大きな危険を伴います。最悪の場合……」

「……どうしたの？」

「あ、いえ……」

「はつきり言わないといけないでしょ？ルウエは、言霊に惑わされるような子じゃないよ」

「分かっているけど……」

「最悪の場合は、ルウエ自身が霧散してしまうだろう。しかし、放っておけば、琥珀がその道を辿ることになる。それを聞いても、ルウエの決意は変わらないのだろうか？」

「うん」

「まあ、そうだろうな。では、始めようか」

「ま、待ってください！」

「……」

「やはり、ルウエさまでないといけないのでしょうか。マ・ナクを形成してる者というなら、私でもいいんじゃないんですか？」

「それは無理だ。お前はルウエと契約を交わしているだけだ。琥珀とは交わしていないだろう？マ・ナクというのはそういうものだ。運命共同体とは言っても、所詮は他人同士なのだよ」

「そんな……納得出来ません……！」

「納得出来なくとも、それが現実だ。そんなことが出来るのなら、無理矢理にでも私がルウエと契約し、琥珀の救助に向かうさ。この老いぼれが若い生命のために散れるのなら、それこそ本望だ。……薫お前なら分かるはずだ。ルウエをそれほどまでに想っているのなら、自分が、今、やるべきことが」

「……」

「クノさまだつて辛いんだよ。私でさえ辛いんだから……。でも、ルウエなら大丈夫。そうでしょ？あなたが選んだご主人さまなんだか

「ら

「……………」

薫は後ろを向くと、どこかへ走って行ってしまった。
辛い…のかな。

自分がいなくなってしまうのが。

「あっ

「え？」

「どうした」

「ううん。なんでもない」

「そう…？」

自分の生命は自分だけのものじゃないんだって、今更気付いた。
死ぬかもしれないことを簡単に引き受けて、でも、そのときのことを考えていなかった。

薫がどんなことを思っていてくれたのか、今頃、分かった。

「それでも、ルウエの答えは変わらないのだろう？」

「え？クノさま？」

「うん。琥珀を助けに行くんだぞ」

「うむ。良い答えだ」

「……………」

クノお兄ちゃんは、ザラザラの舌でほっぺたを舐めてくれた。
それが、なんだか嬉しくて。

「さあ。始めようか」

「うん」

「薫はいいんですか？」

「いいだろう。薫も、幼い駄々っ子ではないのだから」
「そう…ですか」
「…それに、一番よく分かっているのは薫だろう」
「そう…ですね」
「ということだ。準備はいいか？」
「うん」
「では、始めるとしよう」

クノお兄ちゃんの身体に、何かの様子が走り出す。
それから、急に来た眠気に任せてゆつくりと目を閉じる。
暗闇が広がっていき、そつと意識が途絶えるのが分かった。
意識はないけど、意識ははっきりしている。
そんな変なかんじ。
…そして、一番最後に薫が見えた気がして。

目が覚めた。
もう見慣れた天井がそこにはあった。
…ベラニクの宿。
初めて、琥珀と会った場所。

「……………」
「やっぱり、誰もいない。
外を見ても、何も動くものはない。
ここは、鏡の世界。」

(ルウエ)
「悠奈？」
(クーもいるよ)

「七宝？」

(まったく、手の掛かる新人だね)

(でも、クーは嬉しいかな。友達が増えて)

「二人とも、どうしてここにいるの？」

(ルウエのお手伝い。ボクたちが出来ることは少ないけど…。でも、
精一杯頑張るから)

「…うん。ありがと」

(うん。じゃあ、まずは、琥珀を見つけないと)

(クー、転移が使えるよ！)

(転移じゃ意味ないと思うな…)

(なんで？)

(じゃあ、七宝はどこに飛ぶ気なの？琥珀のいる場所が分からないから、これから探しにいくんでしょ？)

(あ、そっか…)

(んー、まあ、とりあえず探しにいこ？)

(うん)(ごめんなさい…)

七宝の頭を撫でてあげて、身体を起こす。
なんだか、ちょっとフラフラするけど…。

(大丈夫？)

「うん」

(ルウエが、この世界に馴染んでないってことなのかな…)

(長老さまも言ったでしょ？最悪の場合、ルウエが霧散してしま
うって。きつと、今の琥珀と同じ状態なんだよ)

(えっ！ど、どうしょ…！ルウエが…ルウエが…！)

(落ち着いて。何のためにボクたちがいるのよ。そうならないため
にでしょ？しっかり、ルウエを支えてあげないと)

(う、うん…ごめんなさい…)

(はあ…。それにしても、薫は何してるのかな。一番力を持ってる

クセに。逃げたのかな？)

「…悠奈」

(あ…。ごめん、ルウエ…)

「薫は、自分のこと、一所懸命考えてくれてるんだぞ。二人と同じ。ちよつと気持ちの整理がついてないだけ。絶対に、来てくれるから。それまで、三人で頑張ってみよ？」

(うん…)

もう目の前のフラフラは収まった。

薫は必ず来てくれる。

信じてるから。

だから、歩き始める。

ひとまずは、三人で。

琥珀はいた。

長い廊下の先に。

翔お兄ちゃんと一緒に来た、あの廊下。

前と同じ、黒い霧みたいになって。

(琥珀…？これが？)

「うん」

(霧じゃない)

「これは、情報だって言ってた。変化に必要な」

(ああ、変化…)

(でも、ちょっとバラバラすぎるような…)

(うん…)

七宝は真剣な顔になって。

…自分には、これがどういう状態なのかは分からない。

でも、七宝が言う通り、前に見たときよりも霧は薄い気がした。

「どうすればいいのかな」

(うーん…。世界に繋ぎ止めるんだから、糊でくっつけるとか？)

(…糊なんて、どこにあるのさ。とりあえず、琥珀から何らかの接触がない限り、ボクたちは何も出来ない…って、長老さまが言った)

「そうなの？」

(うん…)

(でも、何らかの接触なんて言っても、こんな状態じゃ接触も何も無いような…)

「琥珀が接触出来ないなら、自分たちから接触すればいいんだぞ」

(えっ?)

目の前の霧に触る。
霧だから、何の感触もないんだけど。
でも、変化はあった。

(ルウエ…?)

「うん」

(なんでここに…?)

「琥珀を助けにきたの」

(なんで…そんな…)

「琥珀は、大切な家族だから」

(でも、わたしは弱いし、ルウエにも迷惑を掛けてる…。そんなだつたら、このまま消えた方がいいよ…。わたしは足手まといだから…)

「足手まといなんかじゃないよ。それに、琥珀がいなくなったら哀しいんだぞ」

(哀しい…?なんで…?)

「家族だから。自分の、大切な」

(家族…)

「うん。だから、一緒に帰る?」

(…)

「琥珀?」

(無理だよ…)

「琥珀!」

そのまま、霧は消えてしまった。
同時に、強い目眩がして。

(ルウエ!)

(だ、大丈夫?)

「うん…」

(何があったの…?霧も消えちゃったけど…)

「琥珀とちよつと話してた…。それより…次…行こ…」

(次って…。ルウエが回復するまで待った方が…)

「自分以上に、琥珀は苦しんでる…。だから、こんなの…!」

なんとか立ち上がる。

世界はグルグル回っていたけど、それも次第にゆっくりになっていった。

「大丈夫…」

(ルウエ…)

「次は…厨房…」

急激に重くなった足は、全く言うことを聞いてくれなかったけど。

でも、なんとか前に進んでいく。

一番苦しいのは、琥珀だから…。

厨房には、響が寝ていた。

…響じゃなくて、変化した琥珀だけど。

「琥珀」

「……………」

「起きて、琥珀」

「…なんで、また来たの?」

「琥珀を助けたいからなんだぞ」

「なんで?」

「なんでって、大切な家族だからって…。さっきも言ったよね?」

「…覚えてない」

「琥珀…？」

「なんでわたしに構うの？そりゃ、いろいろと助けてもらったけど、でも、わたしは恩に報いることは出来ない。このまま消えてしまうのが、一番の恩返しなんだよ？」

「なんで、そんな哀しいこと、言うの…？」

「哀しい？なんで？重たくて、全く何の役にも立たない荷物が一個減るんだよ？良いことじゃない、とても」

「琥珀…」

「もう構わないで。わたしは、ルウエの言う大切な家族なんかじゃないから」

そして、琥珀は消えてしまった。

…なんで？

なんで、あんなに哀しい目をしてたの？

琥珀…。

（ルウエ…）

（大丈夫…？）

「うん…」

もう立っていられないくらい、グラグラと揺れている。

それは、目眩だけでなく。

この世界が崩れ始めているのが分かった。

（もういいじゃない…。あんなに冷たくされたのに、なんでそこまでする懸命になれるの？）

「……………」

（帰る？このままじゃ、ルウエが危ないよ…）

「あと一回だけ」

(え…?)

「あと一回。次が最後だから。だから、手伝ってくれろ?」

(うん…。ルウエがそう言うなら…)

「河原に行こ…」

(うん…)

あと、もう一回だけ。

たぶん、それ以上は無理だつてことは分かる。

だから、次で絶対に連れて帰る…!

河原には、自分が座り込んでいて、時の止まった水を眺めていた。どこか、寂しそうな影を背負つて。

「琥珀」

「……………」

「一緒に帰ろ?」

「…なんで」

「え?」

「なんで、ルウエはそんなに優しいの?さっき、酷いことを言われたばかりじゃない…」

「琥珀が、本当にそんなことを言っていないというのが分かったから」

「……………」

「ね?」

「…なんで分かつちゃったのかな」

「自分は、琥珀のこと、信じてるもん。琥珀は、そんなこと言わないって」

「…ルウエって、どうしてそんなに信じられるの?普通、あんなことを言われたら、もういいやってなるんじゃないの?」

「琥珀と契約したんだもん。自分を信じてくれる人を信じないで、誰を信じるの？」

「…すごいね、ルウエは。わたしには、そんなこと、出来ないよ」「そんなことない。琥珀にだって出来るよ」

琥珀の姿を指差すと、琥珀は少し笑った。

でも、また哀しそうな目で河原の方を見る。

「姿だけはね。一緒かもしれない。でも、わたしはルウエじゃないから」

「琥珀は琥珀だよ。自分じゃない。だから、琥珀が思うように生きればいい。でも、琥珀は出来るから。自分を信じて。自分は、琥珀を信じているから」

「…うん」

「じゃあ…」

「だから、さよなら」

「えっ…？」

（ルウエ！）

琥珀に突き飛ばされて、川に落ちる。

追い掛けるように、悠奈と七宝も飛び込んでくる。

川はずっとずっと深く、ずっとずっと沈んでいく。

光が届かなくなってきた、どんどん暗くなっていく。

琥珀の姿も、もう見えない。

そして、何も見えなくなった。

目を開けると、空には星が流れていた。

…戻ってきたんだってことが分かった。

「ルウエ」

「……………」

「よく聞きなさい」

「琥珀は大丈夫なんだぞ」

「…ん？」

「絶対に、大丈夫だから」

「しかし、琥珀は……………」

「自分は信じてるから。みんなのこと。だって、大切な家族なんだもん」

「家族、か……………」

「うん」

琥珀はいなくなっただけなんかない。

だって、琥珀は今もここにいるんだから。

「あつ！」

「ん？」

「薫！」

「……………」

薫は何も言わずに、口に啜っていたものを地面に下ろす。

それは…琥珀だった。

「どうして……………」

「私にも分かりません。しかし、私はいつの間にか、崩壊する琥珀の世界にいました。無我夢中で目の前に倒れていたこの子を啜え、境界から脱出してきたのです」

「なんと……………」

「琥珀の世界から琥珀自身を救い出すなど、こうやって帰ってきた今でも信じられません」

「あれは、琥珀の世界なんかじゃない」

「えっ…?」

「鏡の世界は時間が止まっていた。でも、琥珀の時間は動いている。あれは、琥珀が作り出した幻だったんだぞ。琥珀自身を閉じ込めるための…」

「……………」

「琥珀は、ずっと自分に迷惑を掛けてたって思ってた。そう思う琥珀自身を変えられなかった。だから、なかなか世界に定着出来なくて、時間が止まった幻に閉じこもっていた」

(ルウエ…?)

「おはよ、琥珀」

目を覚ました琥珀の頭を撫でてあげる。

琥珀は、半分寝ぼけて、半分びっくりしたような顔をして。

(なんで…ルウエが…)

「もう一回、やってみよ?今度は上手くいくから」

(ルウエ…。ごめんね…)

ニッコリ笑い掛けると、琥珀はゆっくりと目を瞑った。

これからのために。

これから、新しい世界に向かうために。

「不思議な話ねえ」

「そうですね」

「如月はどうなのかしらあ？」

「えっ。な、何がでしょうか…？」

「どうして慌ててるのよ」

「あつ、いえ…」

「ふふふ。あなたは、私のことを信じてくれているのかしらあ？」

「もちろんですよ」

「そう。よかった」

お姉ちゃんはニッコリと笑うと、如月の頭を撫でる。

如月は気持ち良さそうに目を細めて。

「それで、なんで慌ててたのかしらあ？」

「えっ、あの…その…」

「んー？」

「すみません…。前に、少し小腹が空いて、タルニアさまの葛切りを食べてしまいました…」

「そう。あなただったの」

「申し訳ありません！」

「もういいわよ。私も、横で見てたし」

「えっ？」

「如月、夢中になりすぎよお。真横とは言わないけど、近くにいたのに気付かないんだから」

「す、すみません…」

「それで、なんで如月さんはいきなり葛切りの話に飛んだんですか？」

「ッ、ツクシ…」

「この子はよく、話を聞きながら別のことを考えてるのよ」

「つまり、話を聞いてないってことじゃ…」

「話は聞いているのよ。集中してないだけ」

「タルニアさま…」

「気になることなんかがあると、よくそくなるわよねえ？」

「すみません…」

「へえ、如月さんってすごいんですね。私なんか、ひとつ気になることがあつたら、全然集中出来ませんし」

「あら。茜ちゃんのことには気にならないのかしらあ？」

「はは、なりませんよ。今日は望たちも一緒だし。それに、茜は強いからです」

「やっぱり、茜ちゃんのことを信じてるのねえ」

「そうなんですかね」

照れくさそうに尻尾を振るツクシ。

お姉ちゃんは、それを見て笑っていた。

「そういえば、如月さんは何かの役職を持っていたりするんですか？」

「役職…？」

「ほら。私なら、クノさまの補佐とか」

「ああ…。特には決まっていわね」

「へえ…」

「ただ、この子たちのような、小さき者たちの指導や世話をするよ
うに、カウユさまから仰せつかつてるわ」

「えっ、すごいじゃないですか！指導役なんて、なかなか任せられないですよ！」

「そうかしら…。私は、ツクシなら出来ると思っけど？」

「あはは。私はガサツですから無理ですよ」

「いいえ。一番大切なのは、子供が好きかどうかよ」

モゾモゾと動いてる悠奈のほっぺたを舐める。
すると、悠奈は安心したようにため息をついて。
…何だったのかな。

「ツクシは、子供は嫌い？」

「好きですけどね。でも、やっぱり私には無理ですよ」

「…そうね。自分で無理だと決めつけているようでは無理ね」
「え？」

「私は、あなたには指導役としての素質はあると思ってる。でも、あなたはそうは思っていない。自分で願わなければ、欲しいものは手に入らないわ。答えは、誰かが持ってきてくれるものじゃない。あなた自身が導き出すものよ」

「…そうかもしれないですね」

でも、ツクシは何か哀しい顔をしていた。
如月も、それには気付いてるはずだけど。

「さあて。私は、ちょっと仕事に行ってくるわあ」

「タルニアさま。お供いたします」

「その子たちを起こして、かしらあ？」

「あ…」

「ふふふ。今日は、あなたに休暇を与えます。短いけど、ゆっくりと満喫しなさい」

「し、しかし…」

「契約主の言うことが聞けないのかしらあ？」

「うう…」

「今日は大人しくしてなさい。その子たちとルウェと…あと、ツクシのために」

「はい…」

「良い返事よお。じゃあね、ルウエちゃん。また一緒に夕飯を食べましようね」

「うん。…お昼ごはんは？」

「ごめんなさい。お昼は無理そうね。また一緒にいたいんだけど」

「うん。分かった」

「ごめんなさいね」

「うん。行ってらっしゃい」

「はいはい」

お姉ちゃんは、頭を優しく撫でてくれた。

それから、部屋を出る前に手を振って。

…クノお兄ちゃんが部屋の外にいたのが少し見えたけど、何だったのかな。

「……………」

「ツクシ」

「ん？」

「どうしたの？」

「何が？」

「ちよつと、元気ないみたいなんだぞ」

「大丈夫だよ。ありがと」

「うん…」

ツクシは、如月のところで眠っている三人の方を見て、また窓の外を見る。

…やっぱり、元気ないんだぞ。

どうしたのかな…。

「如月」

「はい、何でしょうか」

「ツクシ、大丈夫なの？」

「…大丈夫ですよ」

「だって、元気ないし…」

「大丈夫ですよ」

「うん…」

何か分からないけど、何かモヤモヤする。

如月のフワフワの毛を抱き締めると、如月はそっと顔を舐めてくれた。

「ルウエさまは、望さまたちと一緒にいなくてよかったのですか？」

「…うん。今日は、なんだか外に出たくないから」

「そう…ですか」

「うん」

「しかし、あまり閉じ籠もっているのもお身体に障りますので、今日だけでもいいですよ？」

「うん。大丈夫なんだぞ。今日だけ」

「ふふ、それならよいです」

もう一度ツクシを見ると、目を瞑っていた。

寝てるようにも見えないし、何かを考えているようにも見えない。

…本当にどうしたのかな。

如月も、ツクシを見て何かを考えているみたい。

「……………」

「ルウエさま。良ければ、私を枕としてください。お疲れなのではないですか？」

「うん…」

如月の毛に顔をうずめて息を吸うと、獣の甘い匂いがした。
目を瞑ると、ツクシの顔が見えた。
哀しそうな目をした、ツクシの顔が。
朝に鏡の世界の河原で見た、琥珀と同じ目の。

「美味しいでしょ？」

「うん」

「ルイカミナで、とっても有名なお店なんだよ」

「ふうん」

「また買ってきてあげるね」

「うん！」

「…それで、ツクシはどうしたの？」

「茜お姉ちゃんも分からないの？」

「分からないよ…。何があったの？」

「えっと、如月が子供の指導役だったの」

「うん。それで？」

「それだけだよ」

「ふうん…。なるほど…」

「えっ。茜さん、今ので分かったんですか？」

「だいたいね。思い当たる節もあるし」

「そうなんですか？」

「うん。ツクシってね、子供が怖いんだよ」

「怖い？でも、七宝たちと仲良くしてるじゃないですか」

窓の外、ちよつとした庭でツクシは悠奈、七宝、琥珀と遊んでいた。元気がなくなる前のことを考えても、子供が怖いなんて全く思えない。

「だから、そういう怖さじゃないんだよね。なんていうか、割れ物を扱うみたいな怖さなんだよ。昔に何があったのかは知らないけどさ。とにかく、あの子は何かを怖がってる」

「ふうん…」

「ルウエのさ、薫なら知ってるんじゃない？ツクシと幼馴染みなんでしょ？」

「うん。知ってるかも」

薫を呼んでみる。

すると、すぐに返事があつて。

それから、目の前が歪んで薫が現れた。

「どうしました？」

「わつ、薫はすぐに来るんだ……」

「はい。来ますが……？」

「カイトって全然何も喋ってくれないしなあ……」

「そうなんですか？」

「うん。話は聞いてくれてるんだらうけど、全然返事もしてくれないんだ」

「そうなんですか……」

「うん」

「ところで、何か用があるんじゃないんですか？」

「あつ、そうだった。ツクシがね、子供が怖い理由を知りたいんだ」

「子供が怖い理由、ですか。ツクシがそう言っていたのですか？」

「茜さんが……」

「茜さまは、ツクシから聞いてないのですか？」

「残念ながらね」

「そうですか……」

薫は何かを考えるように目を瞑って。

それから、また口を開く。

「ツクシが話したくないことを、私が話すことは出来ません。ツクシのことは、ツクシ自身の心の整理が出来てから聞くべきではない

かと……」

「うん……。そうなんだけどね……」

「……申し訳ありません。ご希望に添えず」

「ううん。薫の言ってることの方が正しいからさ。今度、折を見てツクシに直接聞いてみるよ。ごめんね、ありがとう」

「いえ……申し訳ありません」

茜お姉ちゃんは、何度も謝る薫の頭を撫でて。でも、薫は複雑な顔をしていた。

何か、大変なことを知っているような。

そんなかんじ。

「さあ、冷めないうちに、早く食べちゃお」

「うん」

「そういえば、如月はどうしたの？出る前はいたよね？」

「茜さん……。庭にいるじゃないですか……」

「えっ、どこ？」

「ほら、あそこの端っこ」

「あ、ホントだ。気付かなかった」

「ていうか、さっき話してたじゃないですか」

「あー、あはは、そーいやそーうだった」

「もう……すっかりしてください」

「薫も外に行く？」

「いえ。ルウエさまのお傍に」

「うん。分かった」

「……いいよね、なんか、そういうの。主君に忠誠を誓った武士みたいでさ。カイトは全然で」

「そうでもないですよ。カイトさまは、いつも望さまのことを考えてらっしゃるようです。この前、クノさまのところへお見えになったときも、本当に望さまのことばかり話しておられて。変な喩えか

もしませんが、祖父母が孫に対するそれに似ていました」

「そっか…。でも、なんで私には素っ気ない態度ばかり取るのかな…」

「照れてらっしゃるのでは？クノさまも、最初で最後の契約者は親友であり、戦友であり、初恋の相手であったと仰ってました。つまりは、そういうことなのではないでしょうか」

「初恋の相手か…。クノの契約者は女の人だったの？」

「それは分かりません。カイトさまなら、もしかしたら知ってらっしゃるかもしれません」

「教えてくれるかなあ」

「どうぞでしょうね」

薫は、少しイタズラっぽく笑っていた。

女の人なのかな。

でも、クノお兄ちゃんは男の人だから…。

「望ちゃんはいるの？」

「何がですか？」

「やだなあ。初恋の人よ」

「は、初恋ですか…？」

「うん。興味あるなあ」

「わ、私はまだ…」

「そう？望ちゃん、可愛いから、よく告白されちゃったりするのかわかってたけど」

「そんなんっ！一回もないですよ！」

「へえ…。意外だなあ」

「そ、そういう茜さんはどうなんですか？」

「私？私は、もう結婚しちゃってるし」

「えっ！だ、誰とですか？」

「ほら、昨日の朝、会ったでしょ？ユウク。あれが、私の旦那」

「ええっ！ユウクさんと!？」

「うん」

「で、でも、敬語だったし…」

「仕事中はね。公私で分けてるんだよ。帰ってきたら、普通に話してるよ」

「へえ…」

「まあ、旅団長だし、なかなか帰ってこないけどね」

「そうですね…」

「うん。でも、それがいいのかな。あんまりくつつきすぎちゃうと、人間ってすぐに飽きちゃうからさ。もしかしたら、カイトもそれが分かってて、わざとかもしれないよ？」

「そうなのかな…」

「えへへ。それでもやっぱり、私はちよつとくらいユウクんに甘えたいかな。たまにしか会えないのは、やっぱり寂しいからね」

「…ユンディナ旅団で一緒に行こう、とか思ったりしないんですか？」

「あはは、それはないよ。私はこの街が大好きだし、自警団の仕事も大好き。もちろん、ユウくんも好きだけどさ。それに、旅に出ちゃったら、お母さんからの手紙も受け取れなくなるしね。ユウくんも、家族のことが大事だって。ユウくんも家族なのに、可哀しいよね」

「…茜さんって、やっぱり強いんですね」

「そんなことないよ。寂しい夜なんかはツクシに慰めてもらったりして、なんとか乗り切ってるだけだし。…全然、強くなかないよ」

「……………」

茜お姉ちゃんも望も、一瞬、真剣な顔をして。

でも、茜お姉ちゃんはまたすぐに笑顔に戻った。

「それでさ…」

「七宝！七宝！」

「えっ？」

「落ち着きなさい、ツクシ」

「ごめんなさい…！七宝…！」

「ツクシ、ゆっくり深呼吸をして。あなたが慌てても仕方ないわ」

「な、何？」

「ツクシ…？」

「……………」

外が騒がしくなった。

七宝がどうにかなって、ツクシが慌ててるみたいだけど…。
何があったのかな…。

「鎮静剤を飲ませたから、しばらくは大丈夫だよ」

「ありがとう、ユウくん」

「それにしても、聖獣にも人間の薬が効くんだね。新発見だよ」

「もう…そんな場合じゃないでしょ…」

「ごめんごめん」

ユウクお兄ちゃんは、頭の後ろを掻いたりして。

なんだか、昨日とは違うかんじなんだぞ。

茜お姉ちゃんと結婚してるって、ホントだったってことなのかな。

「それで、茜。何があっただ？」

「うん。如月の方がよく知ってると思うよ」

「…ツクシはどうしたんですか？」

「はい。この子…七宝が、庭の池に落ちてしまい、溺れかけたので。幸い、深い池ではなかったので、すぐに足が着いたのですが…」

「ふうん…」

「すみませぬ…。私の監督不行届がこのような結果を招いてしまっ
て…」

「如月が謝ることはないと思うよ。それより、薫。話してくれるよ
ね？」

「…致し方ありません」

薫は一度深呼吸をして。

何から話そうかと迷うように視線を動かす。

それから、口を開いた。

「ツクシは、私とは兄妹だという話は知っていますよね？」

「うん」

「ツクシとは、いわゆる義理の兄妹なのですが、私には他にミコトと千早の二人の妹がいます。二人とも、今では良き契約者の下に行けたようですが、それまでは向こうの世界で両親や如月のような指導役の庇護の下、のんびりと育っていました」

「ちよつとごめん。せつかちだとは思いますが、そのミコトと千早の話は、今回のツクシの話と関係あるんだよね？」

「茜。焦るのも分かるけど、薫だって無駄な話はしないって分かってるよね？」

「分かってるよ……。分かってるけど……」

「…関係があります。申し訳ありません。しかし、まずは土台から固めた方が良くと思います。…本題から入りましょうか？」

「ううん。…ごめん。話、続けて？」

「…はい」

また薫は何かを考えて。

たぶん、茜お姉ちゃんのことを考えて、話の道筋を整理してるんだろうな。

「ある日、両親も指導役も都合が合わなかったとき、私とツクシで二人の面倒を見たときがあっただんです。その頃には、私たちはクノさまの補佐として働いていたので、交代で面倒を見ることにしました。ミコトと千早が本当にやんちゃな頃で、ふと右を見て左を見れば、もうどこかに行っているという始末でして、とにかく一人では家から出させないので精一杯でした」

「……………」

「私の仕事が一段落つき、家に帰ったときでした。ツクシが血相を変えて飛び出してきたんです。何を言ってるのかは分かりませんが、とりあえず家に入りました。すると、ミコトが部屋の真ん中でグッタリとしていたんです。どうやら、飛ぶ練習をしてたみた

いで、高いところから落ちて気を失っているだけだったようですが、一瞬では何が起きたのか分からなかったらしくて。少し目を離れた間に、ミコトに何かがあったとしか分からなかったようです」

「……………」

「飛び始めの籠にはよくあることなので、普段のツクシならすぐに気付けたはずなんですが、身体的にも精神的にも疲れていたところに起こったことなので、いろいろと混乱してしまったのでしょうか。」

千早も何が何だか分からなくなって泣いていましたし…」

「それが精神の大きな負担になって、今もその傷が残っている、と

…」

「はい。おそらくは」

「なるほどね…」

ツクシは、自分のせいでミコトが大変なことになったと思ってるから怖いんだ。

今回の七宝のことも…。

「時間を掛けて…いや、それでは…。でも、それしか方法はないよなあ…」

「どうしたんですか、ユウクさん？」

「なんとか治療出来ないかなって。だって、ツクシ、子供が大好きなのに、子供が怖いなんて可哀想すぎるよ…」

「そうですね…」

「治せるの？」

「分からない。でも、傷はかなり深いみたいだから、すごく根気のいる治療になるかな…」

「私じゃダメかな」

「うん、いいと思うけど…」

「けど？」

「茜だけじゃ、根本的解決にはならないかもしれない。ツクシは、

子供が怖いんだから」

「あつ、そつか…」

「でも、精神の病つていうのは、信頼の出来る人の助けつていうのも大切だから、茜が手伝つてあげることにによる効果は大きいと思う」

「…うん」

「あのっ！」

「うん。出来れば、望さんたちにも何か手伝つてもらいたいね」

「でも、私たち、旅の生活だから…」

「そつだよね…。長い間の治療は難しい、か…」

「すみません…」

「謝るようなことじゃないよ。でも、なんとか上手くやる方法は…」

「私から、ひとつ提案があります」

「うん、如月」

「私と七宝は、クーアです。クーアは他と比べても術式適性が高く、この子でも転移が使えるほどです。そこで、この転移を使つてみてはいかがでしょうか」

「なるほど…。転移の術式か…。使えるかもしれないね…」

「でも、七宝はまだ未熟なんじゃ…」

「では私が、思い当たる者を連れていきます。それで、ルウエさま

…」

「うん、いいよ。悠奈も、七宝も、琥珀も、手伝つてくれるよね？」

(うん)

「悠奈以外、寝てるけど…」

「大丈夫なんだぞ。みんな、協力してくれる」

「うん」

だつて、みんなのお姉ちゃんだもん。

もちろん、自分にとつても。

…早く良くなつてほしいんだぞ。

「ただいま」

「あ、お帰りなさい。どうだった？」

「まあまあやな」

お兄ちゃんは、机の上に袋を置く。

チャリチャリと、金属が擦れあうような音がして。

望はそれを開けて、中を見る。

「わっ、こんなに？」

「俺の分は四千円や。ほとんどリュウが頑張ってくれた」

「そういえば、リュウは？」

「部屋ちゃう？ 疲れたゆうてたし」

「ねえ、どこに行ったの？」

「ああ、そうだったね。ルウエは分からないよね。今日はちょっと短期の仕事を探しに行ってたんだ。旅費を稼ぐために」

「お金、足りてないのか？」

「転ばぬ先の杖や。足りんようになってからでは遅いからな」

「あらあ、そんな心配しなくていいのに」

「タルニアさん！」

お姉ちゃんも帰ってきたみたい。

広間に入ってきて。

クノお兄ちゃんも一緒だった。

「あなたが街の喫茶店で働いてるのを見て驚いたわあ。でもよかった。お金は足りてるのね」

「さっきのは、どういう意味なん？ 心配しやんでええってのは」

「あなたたち、クーア旅団の一員よね？」

「まあ、いちおうな」

「そしたら、組合で何か旅団からの依頼を受けて、依頼書を貰いなさい。依頼書と団員証番号、あとは、あなたたちの名前があれば、旅団の宿はどこでも無料で泊まれるわあ。この仕組みは、他の旅団も同じね。でも、依頼を受けてなければ宿代は貰うわよ。まあ、旅団の宿は組合の宿でもあるから、安くなるのは安くなるけどねえ」

「ふうん。そうか」

「でも、そんな、悪いです…。すでに、いろいろお世話になってるのに…」

「賢く旅をすればいいのよ。望ちゃんはいつも遠慮しすぎ。使えるものは使わないと損よあ」

「でも…」

「私たちだって、タダで泊めてあげるなんて言っていない。ちゃんとお仕事はしてもらっわ。その何が不都合なのかしら？」

「…タルニアさま」

「いいえ。言わせてもらっわ」

「……………」

「望ちゃん。あなたは要らない遠慮ばかりしてる。何があなたをそうしてるのかは、私には分からないけど。私たちだって、好意を押し付けるようなことはしたくないわ。でも、あなたは押し付けても押し返してくる。それが、どれだけ寂しいことか分かる？分からないでしよう？今回、押し付けたわけでもない、旅団としての決まり事ですら跳ね返してくる始末。どうしてなの？私たちのことが嫌い？それならそうと、早く言ってほしいわ」

「すみません…」

「どっという意味なのかしら、それは？」

「タルニアさま…」

「クノ。退室しなさい。今すぐに。団長命令よ」

「…はい」

クノお兄ちゃんは一度頭を下げ、部屋を出て行ってしまった。でも、それを見もせず、お姉ちゃんはずっと望を見ている。

「もう一度聞くわ。さっきのすみませんはどっいう意味なのかしら？」

「……………」

「黙ってちゃ分からないわ。答えなさい」

「…すみません」

望は泣いていた。

お姉ちゃんに怒られて。

お兄ちゃんは、なぜか呆れたような顔をしていて。

…どっしよ。

「すみません…すみません…」

「……………」

「お、お姉ちゃん…」

「どっしたのかしら、ルウエちゃん？」

「望は…望は悪くないんだぞ…。だから…。だから…怒らないで…」

「…そうね。ルウエちゃんは優しいのね」

「怒らないで…」

お姉ちゃんは、そつと頭を撫でてくれて。

でも、涙は止まらなくて。

「ルウエ…ごめんなさい…」

「望…」

「…望ちゃん。きつい言い方になったけど、私の言いたいことは分かってくれた？」

「はい…。あの…私、相手のことなんて考えてなくて…。だから…」
「そう。分かってくれたのね。…ごめんなさいね」
「いえ…私が悪いんですから…」
「…そうね。ごめんなさいね、ルウエちゃん」
「もう…望を、怒らないで…」
「分かってるわ。もう怒らないから。安心して？」
「うん…」

お姉ちゃんはギュッと抱き締めてくれた。
温かくて、優しくくて、いつものお姉ちゃんだった。
そう分かれると、涙もなくなつて。

「落ち着いたかしらあ？」

「…うん」

「よかった。クノ、入ってきなさいな」

「はい」

「さあ、これで、辛気くさい話も終わりよ」

「うん」

「望ちゃん。今分かったこと、しっかりと心に留めておいてね」

「はい！」

この話は終わり。

お姉ちゃんは一度伸びをして、広間を見回す。

「如月たちは？」

「あつ、医療室です」

「医療室…？」

「はい…。実は、ツクシが大変なことになりました…」

「ツクシが…。そう…」

「タルニアさま」

「ええ。行きましょう。…行っても大丈夫なのよね？」

「はい。大丈夫です」

「ユウクも来てるのかしら？」

「はい。…どうして分かったんですか？」

「表にユウクの自動二輪が置いてあったから、何かあったんだろうかって心配してたのよお」

「あ、なるほど…」

「望ちゃんたちも来るのかしら？」

「はい。ルウエとお兄ちゃんはどうする？」

「自分も行くんだぞ」

「オレは部屋に戻っとくわ。リユウもおるはずやし」

「うん」

「じゃあ、行きましょうか」

お姉ちゃんと手を繋ぐ。

すると、ニツコリ笑ってくれて。

うん。

やっぱり、いつものお姉ちゃんなんだぞ。

さっきはちょっと怖かったけど、でも、望に分かってもらつたためだったから…。

だから、あのお姉ちゃんも、優しいお姉ちゃん。

食堂には何人か他の人がいて、夕飯を食べていた。
お兄ちゃんは入り口から離れた席に座っていて。

「こっちや、こっち」

「うん」

「ふぁ…」

「リュウ、大丈夫？」

「うん…。ちよつと疲れただけだから…」

「無理しちゃダメなんだぞ」

「えへへ…。ありがと…」

「看板娘として働かんかってお呼びが掛かったくらいやからな。集客率もかなり良かったみたいやったわ。だから、あんなようけ特別報酬が入ってな」

「へえ」

「お前も入ったらよかったのに」

「定員は男女一人ずつだったじゃない。リュウもやりたいつて言ってたし」

「まあ、せやな。でも、かなり忙しかったし、店長も二人しか入れんかったこと悔やんでたで。看板娘を一人逃してしまった」とかもゆうてたけど」

「逃したつて…」

「しかし、なんやな。下心モ口出しのおっさんとかおったけどな」

「下心？」

「サテンに来たんやのうて、リュウを見にきたような下衆いやつらや。お茶を一杯だけ頼んで、店に居座るような、な。まあ、店長とも相談した上で、早々にお引き取り願ったけどな」

「ふうん…」

「ちょびーつと脅しかけて、オレの女やゆつたら、尻尾巻いて逃げていきよったわ」

「オレの女って…」

「まあ、間違っではおらんやろ。オレの女兄弟や」

「そうかもしれないけど…」

「お待たせしました」

と、翔お兄ちゃんと弥生が料理をはこんできてくれて、とても美味しそうなんだぞ！

…リュウはもう寝てるけど。

「ねえねえ、何の話？」

「弥生。工作中だ」

「いいじゃん、ちょっとくらい」

「ダメだ。ほら、戻るぞ」

「ルウエ、望お姉ちゃん、またあとで聞かせてね！」

「分かってるよ」

「絶対だよ！」

「五月蠅い！」

「あたっ！」

翔お兄ちゃんに殴られてる。

…お仕事って、大変なんだな。

リュウも、その大変なことをやって疲れたんだろうな。

起こすのが可哀想だけど、お兄ちゃんはもう起こしてるし…。

「んう…」

「寝るんやったら、飯食うてからにしる。身体に悪いぞ」

「うん…」

「大丈夫？」

「うん…。大丈夫なの…」

ひとつ、大きな欠伸をする。

本当に眠そう…。

大丈夫かな…。

結局、リュウは夕飯の途中で完全に眠ってしまった。

翔お兄ちゃんがすぐにやってきて、部屋に運んでくれたけど。それから、素早く夕飯を済ませて、自分たちも部屋に戻った。

「あ、お帰り」

「ん？何しとるん？」

「リュウの歯磨き。放っておいて、そのまま寝かせたら虫歯になるだろ」

「なんや、そんなこともしてくれるんか？」

「今日、リュウだけ。特別だ」

「…まあ、そらそうやわな」

「私、変わるつか？」

「いや、もう終わりだから」

翔お兄ちゃんは、軽くリュウのほっぺたを叩く。

すると、リュウはびっくりしたように目を覚まして。

「ほら。口だけゆすいで」

「う、うん…」

「ん？どうしたんだ？」

「んー」

「…口の中の水を出してからな」

「うん…」

「で、どうしたって？」

「わたし、寝てた…？」

「寝てた」

「うう…」

「どうした？」

「寝顔を見られたのが恥ずかしいんだよ」

「ふうん。そうなのか？」

「……………」

リュウは少し顔を赤くして頷く。

すると、翔お兄ちゃんは笑って。

そしたら、リュウはさらに赤くなった。

…寝顔って、そんなに恥ずかしいのかな。

「まあ、いいじゃないか。可愛かったし」

「うう…」

「それ、光が聞いたら怒ると思うよ」

「そうかな？」

「たぶんね」

「そうか。…まあ、邪魔したな。ゆっくりお休みください」

「なんや、最後まで敬語つこて…。気持ち悪い…」

「ははは。いちおう、まだ仕事だからな。じゃあ、早く帰らないと弥生に怒られるから」

「まあ、頑張つてこいよ」

「お休みなさい」

軽く尻尾を振って、翔お兄ちゃんは部屋を出ていった。

お休みの合図だったのかな。

とりあえず、リュウはもう寝ていた。

「ふぁ……。ほんなら、オレらも寝るか……」

「その前に、歯磨きでしょ？」

「あー、面倒くさ……」

でも、やらないと虫歯になるから。

リュウに布団を掛けてあげて、洗面所に向かった。

お仕事が終わって部屋に来た弥生も、着くなりすぐに眠ってしまった。

あとから来た翔お兄ちゃんも、望に強引に誘われて一緒に寝ることになった。

「……………」

「呼びましたか、ルウエさま」

「ううん」

「そうですか」

「みんな、寝ちゃった？」

「はい。みなさま、よく眠っておられますよ」

「……うん」

「どうされました？」

「なんだか、自分だけが寝てないって分かったら、怖くなってきて

「……………」

「……………」

「最近、みんなより遅く起きてることが多くなった気がするんだぞ

……。今まで、一番早くに寝てたのに……。なんで……」

「……………」

「……今日は、いろいろあった。琥珀を助けて、ツクシが大変なことになって、お兄ちゃんとリュウがお仕事をしてきて……」

「ルウエさまは疲れてるんですよ。ゆっくりお休みください」

「疲れてるなら、なんでリュウみたいに眠くならないの？自分…なんだか、自分が怖くて…」

「……………」

「なんで…なんで寝られないの？昨日だって…その前だって…。気付いてなかっただけで…」

「ルウエさま」

「やだ…やだよ…。怖いよ…」

「ルウエさま…。すみません…」

薫が何かをしたのは分かった。

何かは分からないけど。

でも、ゆっくりと意識は遠のいていった。

温かい…。

それに、気持ち良い…。

「ルウエ」

「…クノお兄ちゃん？」

「ああ」

「どうしたの…？」

「不安か？」

「…うん」

「そうか」

「自分は、どうしたらいいの…？」

「…周りを見てみるんだ」

「周り…？」

「そうだ。そうすれば、見えてくる」

「何が…？」

「それは、お前自身が確かめることだ」

「…うん」

「さあ、今日は寝なさい。明日、考えるといい」
「うん…」

クノお兄ちゃんのだてがみに顔をうずめて、目を瞑る。

獣の、甘い匂いがして、とても落ち着いた。

…周りを見つめる。

明日に考えなくても、今日少し分かる。

たぶん、そういうこと。

「ふぁ……」

「眠たい？」

「うん……」

「まだ早いし、寝てていいんだよ？」

「んー……」

でも、せっかく望と一緒に起きたのに……。起きてたい……。

「ほら、こつちに来なよ」

「うん……」

言われるまま、望の膝の上に座る。

なんだか、姉さまのことを思い出すんだぞ。

姉さまと同じ、柔らかくて優しい……。

「昨日、どうしたの？」

「え？」

「夜、薫と話してたでしょ？」

「うん……」

「何を話してたの？」

「最近、自分、夜遅くにしか寝られなくなっちゃって……」

「そうなの？」

「うん……」

「それで、薫に相談してたんだ？」

「うーん……。ちょっと違うかな……」

「じゃあ、どうしたの？」

「分かんないけど…。薫は哀しい顔してた…」
「そっか」

望は優しく頭を撫でてくれた。

まだちよつと暗いから、自分の龍紋が光っているのが分かった。

「でも、朝は早いよね？」

「うん…」

「ちゃんと睡眠時間は取れてるのかな…」

「えっ？」

「じゃあ、ルウエ。今日はちよつと薬師さんのところに行こっか」

「薬師さん？」

「うん。ユウクさんは大丈夫なのかな…」

「ユウクお兄ちゃんのところに行くの？」

「そうだね。まあ、ユウクさんの都合次第だけど」

「自分、病気なのか…？」

「まだ分かんないけど、その可能性もあるってこと。大丈夫だって

心配しないの」

「うん…」

「大丈夫だから」

後ろからギュッと抱き締められて。

ちよつと心配だったけど、それで安心出来た。

大丈夫。

ユウクお兄ちゃんが治してくれるから…。

目が覚めた。

見覚えのない場所。

でも、見たことある気がする。

「あ、起きた？」

「え？」

「おはよ、ルウエ。じゃあ、早速問診に入るね」

「ユウくん。それは突飛すぎるんじゃない？」

「え、あつ、そっか…。お腹空いてるよね…」

「そうだよ。朝ごはんだよ」

「私は、そういうことでもないと思うけど…」

「あ、ツクシお姉ちゃん」

「やつほー。我が家にようこそ」

「ここは私の家。ツクシの家じゃないんだから」

「でも、私は茜自身でしょ？じゃあ、やっぱり我が家だよ」

「ん？あれ？そっか」

「……………」

「あはは、ごめんごめん。ルウエの診察してほしって、望が運んできたんだよ。狭い家だけど、ちよつとの間だから我慢してね」

「ちよつと、狭いはないでしょ。ユウくんだって頑張ってるんだか

ら

「あー、はいはい。茜はすっこんでなさい。ややこしいから」

「ちよつと！待って！私もルウエと話したい！」

「またあとでね」

ツクシに押されて、茜お姉ちゃんはどこかに行ってしまった。

自分とユウクお兄ちゃんだけが取り残されて。

…そういえば、ここは一昨日に来た診察室なんだぞ。

姉さまの部屋と同じ、薬の匂いがする。

「うん、まあ、朝ごはんにしよっか」

「うん」

「じゃあ、僕の行き付けのところがあるから、そこで食べよ」

「茜お姉ちゃんは？」

「まあ…ツクシが連れてっちゃったし」

「うん」

「行こっか」

「うん」

診察室から出て。

ユウクお兄ちゃんと手を繋ぐ。

ちよつと大きくて、分厚くて。

でも、温かいのはみんなと同じ。

「望ちゃんのこと、好き？」

「うん。大好き」

「そう。よかった」

「なんで、そんなこと聞くの？」

「僕はね、他の人が誰かのことを好きになるのが好きなんだ」

「……？」

「難しいかな」

「ちよつと」

「そっか。…茜のことを好きになったのも、茜は誰でも好きになるからなんだ。それで、いつも笑顔でいてくれる。ちよつと僕の理想を重ねてしまってるかもしれないけど、それでも、僕は茜のことが大好き。それと同じように、望ちゃんのことを好きなルウエも好きだよ」

「うん」

茜お姉ちゃんのことか本当に好きなんだってことは分かる。でも、なんでそんな話をするのかな？

「そつだ。薫は元気にしてる？」

「うん。今は寝てるけど」

「はは、寝てるのか」

「うん」

「ツクシが、毎日のように薫の話をするんだ。本人は愚痴ってるつもりなんだろうけど、すごく楽しそうだね。面白いよ、ツクシの薫についての話は」

「ふうん」

「あ、今のは、ツクシにも薫にも内緒だよ」

「うん…?」

なんでだろ。

でも、ツクシの話、聞いてみたいんだぞ。薫のこと、なんて言ってるのかな。

「さて、着いたよ」

「えっ、もう?」

「うん」

「だって、まだ…」

「そうだね。五軒隣のほんの近所だけど、ここだよ」

「うん…」

びっくりした。

もっと歩くかと思ってたんだけど…。

ユウクお兄ちゃんは、扉を開けて中に入っていく。

「おはようございます」

「おはよう。いつものか?」

「いつもの、二つで」

「二つ?」

向こうにいたおじさんは、ここで初めてこつちを見る。
それから、自分のことを不思議そうに見つめて。

「お前の子供か」

「違います。患者さんですよ」

「ふうん…。茜ちゃんが妊娠したなんて話は聞いてないが…。誰との子供だ？」

「だから、違いますって！早く頼みます！」

「はは、分かった分かった。朝定食だな。超特急だ」
「まったく…」

大笑いしながら、奥に入っていくおじさん。

ユウクお兄ちゃんは、ちよつと困った風にそれを見送る。

…なんか、ちよつと珍しい気がする。

ユウクお兄ちゃんが、そんな風になるのって。

ユウクお兄ちゃんは机の上の紙に何かを書いて、棚の方を見る。それから、何かを見つけると立ち上がって、それを取り出す。

「これこれ」

「何？」

「ルウエは、軽い睡眠障害になってるみたいだね。旅を始めてどれくらい？」

「え？えつと…」

何日経ったのかな…。

あんまり経ってないような、かなり経ったような…。
うーん…。

「そっか。まあ、楽しい旅だったことだね。でも、かなり環境が変わったせいで、精神にちょっと無理が掛かったみたい」

「ふうん…？」

「だから、この薬で精神の負担を取り除くんだよ」

「苦いの？」

「かなり苦いかな。一週間くらい、夕飯のあとに飲んでもらうことになるけど」

「うん…」

「苦いの、平気？」

「平気じゃない…けど、頑張るんだぞ」

「偉いね。じゃあ、苦くなくなるようにしてあげる」

「そんなこと、出来るの？」

「まあね。えつと…これに包んで飲めば苦くなくなるよ」

「……？」

何か薄い紙みたいなのを、薬の瓶と一緒に貰う。

…何これ？

「デンプンで作った紙だよ。一枚ずつ使ってね。はい、ここに入れて」

「うん」

「本当は、経過観察をしたいところなんだけどね。ルウエも僕も旅暮らしたから、なかなかそうも行かないのが…」

「こんにちは〜」

「あ、はあい。どうぞ」

「こんにちは」

入ってきたのはリュウだった。

自分を見つけると、ニツコリとして。

「あの、診察は…」

「今終わったよ。えっと、リュウ、だったよね」

「うん」

「それで、どうしたの？」

「あ、えっと、ルウエを迎えに来たの」

「そっか。ちょうどいいところだったね。じゃあ、リュウにも少し説明しておくけど。この薬は、ルウエの精神を安定させて、眠りを促す薬。これから一週間、毎日夕飯のあとにこれを服用させて。症状が改善しないようなら、組合を通してユンディナ旅団に報せて。僕じゃないかもしれないけど…でも、ユンディナで僕よりもずっと優秀な薬師さんを紹介してもらおうから」

「うん」

「あ、これは一回三錠だよ。少し多めに入ってるけど、四錠も五錠も飲んじゃダメだからね」

「あのっ!」

「ん?」

「これ…。お礼なの!」

リュウは、ずっと持っていた大きな包みを渡す。

ユウクお兄ちゃんはそれを受け取ると、そつと笑って。

「ありがとう。でも、気は遣ってくれなくていいよ。僕は、これが仕事なんだから」

「えっ…」

「でも、これは貰っておこうかな。あとで、みんなで食べようか」

「うん!」

「何が入ってるの?」

「おはぎ、だよな?」

「うん。わたしと、望お姉ちゃんで作ったの」

「リュウも作ってくれたんだ。ありがとうね」

「えへへ」

「おはぎも貰っちゃったし、お昼は僕にご馳走させてね。望ちゃんとおのお兄さんにも、そう伝えておいてくれる?」

「分かった」

「うん。じゃあ、今日はこれでいいよ。お疲れさま」

「あのっ、お金は…」

「いいよいいよ。ルウエはユニディナ旅団の団員だしね」

「えっ、でも、望お姉ちゃんが…」

「じゃあ、ユニディナ旅団のお仕事をよろしくお願いしますって言うておいて」

「うん…」

「うん。おはぎ、ありがとうね」

「失礼しました」

「はあい」

リュウは、一回お辞儀をして、診察室を出ていった。
自分も同じようにお辞儀をして、診察室を出る。
最後にちよつと振り返ってみると、ユウクお兄ちゃんはゆっくりと
手を振ってくれていた。
だから、自分も手を振って。
それから、表へ出た。

「どうだった？」

「え？何が？」

「診察。何かの病気だったの…？」

「えっと…軽いスイミンシヨーガイって」

「そっか。よかった、大変な病気じゃなくて」

「うん。ありがとう」

「わたしにお礼を言っても仕方ないと思うの」

「そうかな？」

「うん。たぶんね」

そうなのかな？

でも、ありがとうって言いたくなつたから言つたんだぞ。
だから…

「ありがとう」

「うん」

リュウは頭をそつと撫でてくれた。

…ありがとう。

なんでかは分からないけど。

「朝、起きたら、ルウエがいなくてびっくりしちゃった。望お姉ち

やんに聞いたたら、ユウクお兄ちゃんのところに行ってるって教えてくれたの。だから、お礼のおはぎを作ってるって」

「ふうん」

「それで、わたしもおはぎ作りたいうって言ったたら、いいよって」

「なんでおはぎだったのかな」

「分からないけど。でも、おはぎを作ってたの」

何個作ったのかな。

いっぱいあったみたいだけど。

「あ」

「え？」

「リュウ、身体は大丈夫？」

「何が？」

「昨日、たくさん働いたんでしょ？ちゃんと元気になった？」

「うん。大丈夫だよ。心配してくれて、ありがとね」

「えへへ」

また頭を撫でてくれた。

…でも、リュウの心配をするのは当たり前なんだぞ。だって、リュウは大切な家族なんだもん。

元気になったんだったら、よかった。

リュウと手を繋ぐと温かさが伝わってきて。

「昨日頑張ったからお小遣いいっぱい貰っちゃったし、ちょっと街に寄り道して行こっか」

「えっ、でも…」

「大丈夫だよ。明日香も一緒だし」

「ワウ」

「あれっ、いつの間？」

「ふふふ。じゃあ、行く？」
「うん！」

リュウと二人きりでどこかに行くのは初めてかな。

…明日香はいるけど。

なんだか、ちょっとドキドキするんだぞ。

「何か欲しいのがある？」

「んー…ないんだぞ」

「そう…」

リュウはちよつと残念そうに。
でも、欲しいものなんてないし…。

「あのね、リュウ…」

「ん？」

「お金は大事だから、大切にしたい方がいいと思うんだぞ…」
「…うん、そうだね。ありがと、なの」

「うん」

手をギュッと握ると、リュウも握り返してくれて。

それが、何か嬉しい。

「えへへ」

「どうしたの？」

「リュウと一緒に寄り道するのって初めてなんだぞ！」

「そうだった」

「うん！」

「わたしと一緒にいるの、楽しい？」

「うん。リュウは、自分のお姉ちゃんだもん。楽しいよ」

「そっか。じゃあ、同じだね」

「えっ？」

「わたしも楽しい。ルウエと一緒にいると」

「うん」

「ワウ」

「あはは、明日香と一緒にいるときも楽しいよ。望お姉ちゃんとか、お兄ちゃんと一緒にいるときも。だから、ずっと一緒に旅をしたいと思った。桐華お姉ちゃんとか、遙お姉ちゃんと一緒にいるときも、もちろん楽しかったけど……でも、ルウエたちといるときの方が楽しいって思うの。えへへ、桐華お姉ちゃんと遙お姉ちゃんには悪いんだけど」

リュウは照れくさそうに笑って。

ほっぺたのところの鱗がキラキラと光っていた。

「そういえば、リュウはなんで鱗があるの？」

「え？これ？」

「うん」

「どうなんだろうね。でも、赤龍とか緑龍とかの人は鱗があるって聞いたよ。響とか光にはなかったから、龍の中でも珍しいのかな」

「ふうん」

「ルウエにはないよね」

「うん……」

「あはは。残念そうにしないの。個性だよ、個性」

「コセイ？」

「うん。わたしにはわたしにしかないもの、ルウエにはルウエにしかないもの。それぞれ別のものがあるから、みんな違うんだよ」

「……うん」

リュウと違うからちょっと寂しかったけど、みんなと違うところはみんな持つてるから。

それがコセイ。

リュウにはリュウのコセイがあって、自分には自分のコセイがある。だから、自分はリュウを好きになれるのかな。

「あ、そうだ。ルウエって、何か装身具って付ける？」
「えっと……」

「あはは……。そうだったね、いっぱい付けてるよね……」
「うん」

「うーん……どうしようかな……」

「どうしたの？」

「お揃いのね、何かを買おうかと思ったんだけど……」
「何かって？」

「そういう首飾りとか」

「これ、リュウとお揃いなんだぞ」

「うん。でも、団員証だしね」

「……？」

「みんなが持つてるようなものじゃダメなの」

「でも、これ、まだ二人しか持ってないって……」

「うん。それって、これから増えるかもしれないってことでしょ？
それがちよつとね……」

「そうなの？」

「そうだよ」

「ふうん……」

「だからね、何か違う、世界にひとつしかないようなものが欲しい
の」

「コセイ？」

「そうだね。わたしとルウエだけの個性だね」

「コセイ……」。

「コセイなのかな。」

「うん。」

「リュウと同じコセイ。」

「何がいいかな」

「うーん…」

「んー」

いろんなお店を覗いてみるけど、いいのが見つからない。
リュウも悩んでるみたいで。

「あっ」

「え？」

「あっちに行ってみようよ」

と、リュウが指差したのは路地の方。

露店がたくさん並んでるみたい。

「ね？」

「うん…」

なんか、ちょっと不安だけど…。

明日香もいるし、大丈夫だよね…。

手を引かれて、路地に入っていく。

「わあ、いっぱいあるね」

「そうだね」

「お嬢ちゃん。何か買物かい？」

「うん。えっとね、わたしとこの子だけの、特別なものが欲しいの」

「へえ。その子、彼氏？髪、長いねえ」

「妹なの」

「えっ、女の子？」

「うん」

「そりゃ失礼したね。特別なものだったけ？じゃあ、この指輪なんか

はどつ？」

「わあ、綺麗だね」

「うん。綺麗なんだぞ」

「これはね、真ん中の黒いところが黒曜石で、端の金属は白金なんだよ」

「白金？」

「そうさ。万金とどっこいくらいに貴重な金属らしいよ」

「ふうん…」

「気に入った？」

「うん。ルウエはどう？」

「綺麗なんだぞ！」

「気に入ったみたいなの」

「そう。よかった。じゃあ、これ、言い値にしてあげる。間違った謝罪の気持ち」

「元はいくらなの？」

「二つで一万二千円だよ」

「じゃあ、六千円」

「半値？そんなのでいいの？」

「うん」

「そう。ごめんね、気を遣わせて」

「ううん」

「二人の名前は？」

「わたしはリュウで、この子はルウエ」

「リュウにルウエね。そこでちょっと待っていてくれる？」

「うん」

露店のお姉さんは、指輪を持って後ろの建物の中に入っていった。何なのかな。

とりあえず、待つ。

「……」
「おい、そのガキ」

「……」
「おい」
「……」

…怖い人が、リュウに近付いてきた。
何なのかな、この人…。
いろんなところが破れてる変な服を着てるけど…。

「お前だよ、お前！鱗人がよ！」

「…何ですか」

「六千円だっけ？えらく持つてるじゃねえかよ。犬コロまで従えてよ。番犬のつもりか？」

「ウウ…」

「とりあえず、持ち金全部寄越せや」

「……」

「おい、チンピラさんよ。この露店街でカツアゲはやめといた方がいいぜ」

「黙れ、おっさん！」

「…ふん。忠告はしたからな」

「何が忠告だ！」

「さあな」

「とにかく、さっさと寄越せ！」

「……」

リュウは、怖い人のことをギツと睨む。
すると、怖い人は何か怒ったみたいで。

「なんだ、その目は！ガキのくせにナメてんじゃねえよ！」

「…捕縛」

「な、なんだ？」

リユウを殴ろうとした腕を、誰かが掴む。

怖い人は振りほどこうとするけど、全然動かなくて。

「あらあら、どうしたのかしら。外が騒がしいようだったけど？」

「あ。姐さん」

「ほら、出来たよ。世界にひとつしかない、二人だけの指輪」

「なんか、模様が入ってる」

「二人の名前が彫ってあるんだよ。昔の文字でね」

「へえ〜」

「おい！お前らは何なんだよ！」

「五月蠅いねえ。今はあんたみたいなやつと話す気分じゃないんだ」

「なんだと!？」

「ちよつと悪いけど、どこかに連れてってくれる？」

「…御意に」

そして次の瞬間には、二人ともいなくなってた。

…転移を使ったのかな。

あの黒い人は誰だったんだろ。

「これ、お代」

「はい。確かに六千円。ありがとうね」

「うん。わたしたちも、ありがとう」

「ありがとう、鷹のお姉ちゃん」

「はは、鷹のお姉ちゃんはいいいね。今度から、みんなにそう呼ばせようか」

「姐さん…。それはちよつと…」

「ははは。まあ、また来てね。安くしとくからさ」

「うん。今度は、お兄ちゃんとお姉ちゃんと来るの」

「是非ともそうしてちょうだい」

「またね」

「ああ、またね」

不思議なお姉ちゃんに手を振って、路地を出た。

何だったのかな、あそこは。

なんか、他とは違う雰囲気だった。

「ルウエ」

「え？」

「これ」

「あ、うん」

「嵌めてみようよ」

「うん」

リュウが嵌めるのを見て、同じ左手の薬指につける。

すると、なぜかピッタリで。

リュウもピッタリだったみたい。

「これで一緒だね」

「えへへ」

「二人だけの指輪」

「うん！」

リュウと、二人だけの。

二人だけの、コセイなんだぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1966o/>

幻想希譚

2012年1月6日17時49分発行